

仗助と育朗の冒険 BackStreet (ジヨジヨXバオー)

ヨマザル

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

この作品は縦書き表示に対応できていません。横書き表示で開覧ください

ジョジョの奇妙な冒険（第四部）と バオー来訪者のクロスオーバーで、二部構成になっています。無謀にも、バオー来訪者の続編にあたる話をイメージしています。

第一部は、バオーこと橋沢育朗が復活し、東方仗助と戦います。

第二部は、空条承太郎の父、空条貞夫が主人公です。第一部の前日譚、後日譚となっています。

原作改変要素はないつもりですが、一部独自解釈が入ります。

『バオー来訪者』とは：

荒木飛呂彦先生が『ジョジョの奇妙な冒険』の前に、『週刊少年ジャンプ』に連載されていた作品です。

あらすじは、ある秘密組織によって驚異的な身体能力を与えられた主人公が、同じく特殊能力を持った少女と共に脱走し、組織の刺客達の追撃を逃れていく……と言うものです。

危機がせまると、主人公は人間の姿から、恐ろしい力を持つ『バオー』に『変身』して戦います。例えると、荒木先生版の『仮面ライダー』と言う感じでしょうか。

短いですが、とても面白い作品です。

尚、連載は1984年〜1985年の間でしたが、ジヨジヨ第四部と絡めるために、本作では『バオー来訪者』の話は1991年に起こった出来事としています。

（『バオー来訪者』作中では、『この話が何年に起こった出来事か』明示的には書かれていなかったハズ……です）

また、この話を作るに当たり、以下のSS・掲示板スレを勝手にリスペクトしています。

ゲーム・漫画

*バイオ・ハザード・アウトブレイク

*クロックタワー

*銀牙 ―流れ星 銀―

NET

*Log速：ジヨジヨ第三部のスタンドに洋楽の名前を

*双方向対戦小説ジヨジヨ魂

*SS：仗助「虹村億泰は料理する」

Arcadia様にも投稿しております

目次

Back Street — 東方仗助と橋沢育朗 —

プロローグ ————— 1

噴上裕也 その1 ————— 10

噴上裕也 その2 ————— 18

噴上裕也 その3 ————— 27

虹村億泰 その1 ————— 40

虹村億泰 その2 ————— 50

虹村億泰 その3 ————— 59

川尻早人 その1 ————— 68

川尻早人 その2 ————— 78

川尻早人 その3 ————— 89

ヌ・ミキタカゾ・ンシ (支倉未起隆) その1 ————— 103

ヌ・ミキタカゾ・ンシ (支倉未起隆) その2 ————— 112

ヌ・ミキタカゾ・ンシ (支倉未起隆) その3 ————— 124

ヌ・ミキタカゾ・ンシ (支倉未起隆) その4 ————— 137

東方仗助と橋沢育朗 その1 ————— 158

東方仗助と橋沢育朗 その2 ————— 167

東方仗助と橋沢育朗 その3 ————— 180

東方仗助と橋沢育朗 その4 ————— 192

ホル・ホース その1 ————— 207

ホル・ホース その2 ————— 216

ホル・ホース その3 ————— 223

ホル・ホース その4 ————— 235

栗沢スミレ その1 ————— 251

栗沢スマイレ	その2	260
栗沢スマイレ	その3	269
ジャン・ピエール・ポルナレフ	その1	278
ジャン・ピエール・ポルナレフ	その2	287
ジャン・ピエール・ポルナレフ	その3	301
ディオ・ブランドーとDIO	その1	315
ディオ・ブランドーとDIO	その2	324
ディオ・ブランドーとDIO	その3	337
山岸由花子	その1	347
山岸由花子	その2	363
山岸由花子	その3	381
山岸由花子	その4	389
寄生虫バオー	その1	406
寄生虫バオー	その2	420
寄生虫バオー	その3	437
栗沢六助とオケイ	その1	453
栗沢六助とオケイ	その2	466
東方朋子	その1	481
東方朋子	その2	495
東方朋子	その3	511
東方朋子	その4	524
エピローグ	育朗と仗助	537
エピローグ	その先へ	549
Lonesome Street	空条貞夫	560
空条貞夫の孤闘	1982	560
空条貞夫の孤闘	その1	560

空条貞夫の孤闘	—	1982	—	その2	—	578
空条貞夫の孤闘	—	1986	—	(NEW!)	—	599
空条貞夫の孤闘	—	1991	—	その1	—	635
空条貞夫の孤闘	—	1991	—	その2	—	658
空条貞夫の孤闘	—	2000	—	その1	—	683
空条貞夫の孤闘	—	2000	—	その2	—	702
空条貞夫の孤闘	—	2000	—	その3	—	721

プロローグ

1991年10月某日朝 「M県S市杜王町 住宅地」:

激しく暑かった杜王町の夏はようやく終わり、そろそろ肌寒くなってきた。あと3週間もすれば、紅葉も始まるだろう。すでに朝などは、凍えるほどに寒くなっていた。

『Mori Mori Mori Mori モリオウチョウRadio……お早うございます。あなただけのカイ・ハラダです。さて、朝のうちはすっかり寒くなって参りましたが……』

ラジオからは、いつもの人気DJの挨拶の言葉が流れ始めていた。その日の朝、東方朋子は、自宅のダイニングでコーヒー片手に、新聞を読みふけていた。

何時も早起きの父親は、少し前に出勤して行き、もういなかった。小学生の息子、ジョースケはまだ起きて来ない。

出勤の支度を整え、息子が起きるのを待つこのわずかな時間こそが、朋子に取ってのささやかな至福の時なのであった。

「あらっこの場所は」

朋子は、新聞の地方欄に小さく書かれた『ある記事』を見つけ、眉をひそめた。

その小さな記事は、ある先進医療研究所が、岩盤と共に崩落し、多大な死者を出したことを報じていた。記事曰く、その先進医療研究所は、杜王町から150キロほど北方に行った、ほとんど人がいない海岸沿いに建っているのだと言う。

記事は短く、事実だけが簡潔に書かれていた。その被害の大きさを割に、不自然な程簡素な記事だ。

だが、朋子が眉をひそめたのは、『記事の不自然さ』に対してではなく、『事故の起こった場所』についてであった。

そこは、朋子とゆかりのある場所だったのだ。かつて出会った、『忘

れがたい男との思い出の場所』に近かったのだ。

「ジョセフ……」

無意識に、朋子はその男の名前を口に出した。

ほぼ同時に、2階から騒々しい物音が聞こえ始めた。

ジョースケだ。

朋子は慌てて新聞をたたむと、朝食の準備を始めた。7歳の息子を
持つ親にとって、朝からじつくりと感傷にふけるなどと言うぜいたく
は、許されない。

ちょうど朋子が、目玉焼きに塩をふってひっくり返したところで、
階段を駆け下りてきたジョースケがひよっこりと顔を出した。

「カアア——チャア——ン！おはよお—— ツ!!」

「おはようツ！朝ごはんできてるよ、早く食べなアア」

朋子は、子犬のように飛びついてきたジョースケの頭をなでた。そ
して、朝から元気一杯のジョースケをなだめすかし、なんとか手を洗
わせる。

二人は、アレコレとたわいもないことを話しながら、仲よく一緒に
食事の準備をして、食卓についた。

口に食べ物を頬張ったまま、しきりに話しかけてくるジョースケの
相手をしている内に、朋子は新聞記事の事を忘れた。

そして、二度と思い出すことは無かった。

1999年2月某日 「M県 O海岸」:

杜王町からしばらく北へ車を走らせたところに、めったに人がこな
い風光明媚な海岸がある。

その海岸近くの海に、一本の矢が浮かんでいた。

その矢は、ひどく古ぼけていた。

だが、その鋭い穂先だけは、キラキラと光っていた。穂先の一部は
黒ずんでおり、それは、矢がつい最近、実際に使われ、何か生物を貫
いたことを暗示していた。

ザザザザザツ

不意にその矢が、海岸線めがけて海中を動き出した。

海岸線の上には、道路が走っていた。

道路は、別荘地帯を抜け風光明媚な海岸線をドライブできるよう、10年前に、観光用に作り始めたものだ。しかし実際は、その道路を走るものはほとんどいなかった。バブルが弾けたこともあり、計画はほどなく中断。道路は、ここから10数Mほど北に行ったところで、ぷつぷつりと途切れていた。

2週間も前にふった雪が、まったく道路から取り除かれていない。市も、その道路を整備をする気が、ほとんどないのであろう。

その道路の上に、一台の車が止まっていた。

矢は、その車が止まっている海岸線めがけて、独りでに海中を進んでいく。

……いや、そうではない。

車の運転手には、その矢が何かに運ばれているのがハッキリと『見えて』いた。それは、普通の人間には『見えない』。ある『特殊な才能』を持つものだけに、『見える』ものだ。

彼には、矢が、『ラジコン程の小さな葉巻型の潜水艦』によって引張っているのが、『見えて』いた。

その潜水艦を軍事マニアが見れば、『おやしお型潜水艦』と言う、当時最新鋭の潜水艦のミニチュアであることがわかるであろう。

だがそれはラジコンなどではない。その『普通の人間には見えない潜水艦』は、彼、虹村形兆の生命力・精神力が具現化した、『パワーを持ったビジョン』であった。

それは、

その能力を持つ者の傍らに寄り添い (Stand By) ……

その者に運命に立ち向かう力を与える (Stand Up To)

……

それは、スタンド (幽波紋) と呼ばれる、彼自身の能力が生み出したビジョンなのだ。

ブルブルブル……

その潜水艦の上に、同じく小さなヘリコプターが飛んでいた。AH

—64Dアパッチ・ロングボウだ。

シユルルルッ

ヘリコプターからロープが伸びた。そのロープを伝って、小さなオモチャの人形のような兵士達が、降りてきた。

兵士達は、使い手の几帳面な性格を反映してか、一糸乱れずキビキビと動いていた。そして、潜水艦が引っ張ってきた矢を受け取ると、それを手分けをして、手際よくロープで縛り上げていく。

スタンドの兵士たちが、作業を終えた。ヘリは矢を引き上げ、クルリと向きを変えて陸地へ向かった。

潜水艦も、ヘリコプターも、兵士たちも、ロープさえも、どれも虹村形兆の能力：スタンドが具現化されたビジョンだ。みな、虹村形兆の意思で、自由に動かすことが出来る。

彼は、自分の『スタンドの軍隊』に、バッド・カンパニーと言う名前を付けていた。

「やっとみつけたか……一つしかないから、ほっとしたぜ」

虹村形兆は、ヘリコプターが運んできた矢を受け取ると、車をウターンさせた。そして、彼が住む町、杜王町へと戻っていった。

1999年9月末日 「アメリカ SW財団オフィス」:

(やああ??れやれじゃの、コヤツラ、ちよつとは大人しくできんのかい)

SW財団特殊生物UNITのリーダー、ケイト教授はため息をついた。

教授の背後では、いい年をした壮年の男二人がワチャワチャと口論していた。

二人の口論は白熱し、今にも殴りあいの喧嘩に発展しそうなほどだ。だが、良く聞くとじつに下らない会話だ。さつき見た女の子のどっちが可愛かったとか、自分に気がある目つきだったとか、なかったとか、そんな話なのだ。

(コヤツラ、本当にバカなのかもしれん)

ケイト教授は、もう一度大きくため息をついた。

だが、そろそろ仕事の時間だ。

ケイトは気を入れ替え、手にした紙を丸めてパンパンと男達の頭をたたいた。

「お前たち、お黙り。とつとと今回の依頼を伝えるよ」

男たちが、ぶぜんとした表情で黙った。

ケイトは、腕を組んで男達の前を一、二往復し……口を開いた。

「今回の仕事は、ある人物を探し出して『保護』する事さ——簡単な仕事じゃあないよ。なにせ相手は、『現代の狼男』だからね」

男達が、目を丸くした。

「はっ?」

「おいおい婆さん、与太話は止してくれよ。送り狼なら、ワザワザ探さなくても、アンタの目の前にいるゼエ?」

「ヒヒヒッ」

「笑うんじゃないツツ！真面目な話、『狼男』に何の不思議があるってんだい?」

そもそもアンタ達は、吸血鬼と戦った男じゃあないか。

ケイトは二人をピシヤリとやり込めた。

二人は、『吸血鬼』と言う言葉に、目に見えて緊張していく。ヘラつとした締まりのない顔が、あつという間に真剣な顔つきに変わる。

ケイトはコホンと咳払いをして、説明を続けた。

「いいかい、『吸血鬼』と同じように、『狼男』も実在するのさ。実はね、

『狼男』ってのは、とつとつにその正体が分かっているのさ」

「ほんとかよ?」

「ほんとよ……、それは、プラーガって呼ばれる、太古の寄生動物のとき……コイツは宿主の体を作り変えて、宿主を狂暴な化け物に作り変えちまう……狼男とは、このプラーガに寄生された、哀れな犠牲者のことだったのさ」

その話を聞き、逆に二人は、リラックスし始めたようであった。

「なああんだ、じゃあ『吸血鬼』や『石仮面』には、かんけーねーんだな?」

「俺たちへの依頼は、そのプラーガだか、サナダムシだかの退治なのかよ」

「うへえ??、ゴメンこうむりたいぜ」

ブヒヤヒヤヤ

男たちは、バカっぽく大笑いした。

ケイトは、自分の手をピシヤリと打ち合わせ、笑い声を止めた。

「……『バオー』……ソイツが、アンタ達のターゲットの名前さ。『バオー』は、プラーガを人工的に進化させた生物兵器よ……」

ケイトは部屋を暗くし、用意したスライドを映し始めた。

「このスライドは、日本の諜報機関が入手したものよ……撮影者は不明。10年前、アンタ達が吸血鬼と関わっていた頃に、撮られたものらしいわ……これをみれば、アンタらにも、『バオー』の危険性が理解でしょう」

スライドには、この『バオー』に寄生された生物が姿を変えていく様子が、段階的に表示されていた。

被寄生者の体がその内側から膨れ上がり、肌が蠟人形の様に青白く光り初め、異形の怪物に代わっていく。

その様を、スライドは克明に映していく……

スライドは変わり、完全に変態した被寄生者が、素手で凄惨な破壊を行っていく様子が、次々に映されていった。

いつしか、二人の額から、冷や汗が流れ始めた。

スライドには、バオーに寄生された男が、砲弾を避け、戦車におそい掛かり、そして完璧なまでに戦車を破壊する様子がうつされていた。

しかも標的となった戦車は、西ドイツの名機、レオパルト2だ！世界有数の強力な戦車が、1人の生物によって溶かされ、千切られ、あっという間に鉄くずになっ行って行く……

「おいおい、こりゃあ、マジかよ」

「さすがの俺様も、こんな奴とまともにやったら、チョットだけ、ほんのチョットだけ手こずっちゃうぜ」

「……開発当時は、このバオーの力を制御出来れば、核兵器に匹敵する

戦力がえられると、騒がれたものよ。その戦闘力はご覧のとおり……と、言っても、このスライドは『プロトタイプのパオー』を撮影したもののらしいわ。その後研究をつづけ、完成された『パオー』が、どれほど恐ろしい能力を持っているのか、想像もつかないわ」

ケイトは説明を続けた。

「バオーが開発されたのは今から8年も前よ。開発は日本とアメリカの政府の息がかかった秘密組織が担当していたわ」

「していた？」

「そうよ……その組織、今はないの。このバオーに寄生された少年が、1人でその組織をつぶしたからね」

ケイトは、ため息をついた。気の進まない任務を伝えるときは、いつも心が、『ドライアイスに触れた』ように、冷たく、傷む。

「この少年は、その戦いの後で姿を消したわ。……でも実は、『彼は今も仮死状態で生存している』ようなの。それを、信じるべき証拠が、最近見つかったのよ」

「へえ……」

「……すでに何者かが、彼を蘇生させようと動き出しているわ。……ライバルを出し抜いて、『後90日以内に少年を確保、保護、回収する事』が、アンタたちのミッションよ」

「90日以内？」

「そうよ……」

ケイトは、ますますつらい気持ちで、次のスライドを見せた。

そこには、おびえる男が、1人で独房の隅に座つているところが移つていた。男は、プラカードを持たされていた。

『実験初日』と、そのプラカードには書かれていた。

「今から見せるスライドは、『バオーを移植した被験者』の経過を観察したものよ……SW財団の協力者が、とあるDREESの拠点を探索した時に、発見したものよ」

「人体実験？ 穏やかじゃなーな」

「そうね……この先のスライドを見れば、ますますそう思うはずよ」

カシヤ

次のスライドでは、男はまだまだ元気そうであった。彼は、『実験100日目』というカードを持っていた。

カシャ

その次のスライドでは、男は体中をかきむしり、苦しんでいるように見えた。その足元には、『実験120日目』と書かれているカードが転がっている……

カシャ

その次のスライドでは、男の体が風船のように膨れ上がっていた。カードはなく、スライド上に手書きで『実験150日目』とある。……顔中から脂汗を流し、ほとんど動けない男の目には恐怖と……あきらめ、そして狂気の色が浮かんでいるように思えた。

カシャ

そして、次のスライドは……男の体が、文字通り『爆発』していた。そして、男の体から、無数の、ヒルに似た動物が、四方八方に飛び散っている様子が映っていた。スライドには『実験終了、153日目』と書かれていた。

「うげっ……グロいぜ」

髪を逆立て、ピアスをした男が、心底からイヤそうに言った。

「そうね、そしてこれは、今回の保護対象の少年、橋沢育朗クンの運命でもあるわ……」

ケイトが、鎮痛な声で言った。

「彼の中にいるバオーはすでに成体よ。我々の試算によると、彼が目覚めた後、90日以内に『寄生虫バオー』は成虫になり、卵を産むようになるの。……その卵はすぐに孵化して、彼の体内から幼生体が爆発するように飛び出てくるわ……」

「なん？だつてエエ??？」

「そうなのよ、じきに『膨大な数の寄生虫バオーの幼生体』が、宿主を喰らいつくして、外に出てくるのよ。厄介なことに、幼生体は非常に感染力が強い。相手が鳥類や哺乳類のような恒温動物なら、どんな生き物にも取りつく事が出来るようよ」

ケイトはそこで言葉を止め、男たちの様子を確認した。

男たちは、啞然としてケイトを見詰め返している。

「幼生体は宿主に寄生すると、またすぐに成長して繁殖していく……すぐに寄生虫バオーは、その数を倍々ゲームのように増やしていくわ……もし、この子がそうと知らず、たとえば東京のど真ん中でバオーに喰われたら……」

ケイトは身震いした。

「そうなったら、最悪、この地球上のすべての生き物が、このバオーになっちまうって事かよ」

男は、目深にかぶったテンガロン・ハットの縁をくちやつといじりながら言った。

その声は、少し震えていた。

噴上裕也 その1

1999年10月某日 「杜王町から100Kmほど北の峠道」:

爆弾を使うスタンドを持った猟奇的な殺人鬼 —— 吉良吉影 ——
が杜王町からいなくなつてから、ハヤ三ヶ月がたった。

噴上裕也は、夜の山道を、1人バイクで走り回っていた。

噴上に乗っているのは、ヤマハのバイクXJR400Rだ。最近『直った』ばかりのXJR400Rは、とても調子がよく、小気味いいエンジン音をさせながら軽快に走っている。

1人で山道を走り回り始めて、もう3日目になる。いわゆる珍走団に所属している噴上が、仲間とつるまずに1人で走っているのには訳があつた。

噴上は幽霊を探していたのだ。

幽霊に、仕返しをするためであつた。

つい4ヶ月ほど前、バイクを運転していた噴上は、幽霊に出会つた。そして、道の真ん中に出現した幽霊に驚き、ハンドルを切り損ねて転倒し、瀕死の重傷を負つたのだ

後でガールフレンド(スケ)の1人、アケミが話してくれた。そのとき、噴上のけがは、医者が『回復の見込みがない』と匙を投げたほどの重傷であつたらしい。

幽霊には、そんな怪我をさせられた落とし前を、つけさせねばならない。

ギョルルルルツ

XJR400Rが、急カーブの連続する、見通しの悪い山道にさしかかつた。

噴上は先の様子を探るために、自らのスタンド:ハイウェイ・スターを出現させた。

そして、ハイウェイ・スターをバイクの前方を走らせる。もし、対向車や『幽霊』がいたら、ハイウェイ・スターがいち早く見つけ、噴上に警告を発する……という訳だ。

この噴上に与えられた『能力:スタンド』は、事故から回復した時

に手に入れたものだ。

あのとき……

事故に会い、意識不明なまま路上に倒れていた噴上は、杜王町の病院に緊急搬送された。

その病院で、噴上に奇跡が起こったのだ。

病室で、生死の境をさまよっていた噴上は、そこで不思議な矢に『選ばれ』た。

そして噴上は、矢から、ある『才能』を引き出されたのであった。

その矢が引き出した『才能』こそが、彼の精神の奥底に眠っていた、『スタンド』であった。

その、不可思議な能力、『スタンド』によって、噴上は、奇跡的に復活する事が出来たのだ。

正確には、噴上と、ぶっ壊れたXJR400Rが直ったのは、ハイウェイ・スターの能力によるものではない。それは、やはり噴上と同じスタンド使い、東方仗助と言う名の男の力によるものであった。

仗助のスタンドは、『拳で触れたものを直す』力を持っていた。その力で、治ったのだ。

(とは言え、噴上のセンスからいうと、ほぼドノーマルなダサい状態に『直され』たXJR400Rに関しては、言いたいこともあったのだが)

XJR400Rも噴上自身も、無事『直った』とは言え、噴上に新たな『能力』が手に入ったとはいえ、それは、幾重にも重なった幸運の上に成り立った結果に過ぎない。

もし矢に選ばれてスタンドが発現しなかったら、噴上は確実に死んでいたのだ。

だから噴上には、『幽霊』を許す気はなかった。

噴上はXJR400Rのスピードをさらに上げた。ヘッドライトに照らされ、道路脇の木々がまるで亡霊のようにぼうつと浮かび上がり、あつという間に後方へと流れ去っていく。

「……どこに居やがる」

今ならわかる。

あの『幽霊』は、噴上の妄想の産物でもなければ、杉本玲美のような、本物の幽霊でもないはずだ。

どちらかと言えば、例の殺人鬼の父親であった、『吉良吉廣』に近い存在だ。

吉良吉廣は、自身が死んだ後でその存在そのものをスタンドと化していた。

あれは、あの『幽霊』は、スタンドに違いなかった。
ならば、スタンドで見つけることもできるはずだ。



深夜の山道を走り回ること3時間、噴上はついに目指していた『幽霊』を見つけた。それは、噴上と同世代の若い男だった。

『幽霊』が、生きている人間では無い事は明白だった。

男は青白い光を幽かに発し、それにその体の背後の手すりが透けていた。透き通っているのだ。

その『幽霊』は、峠のカーブに設けられた、観光客が景色を楽しむための駐車場を、1人で彷徨っていた。

ジリリリリ……

駐車場の隅に立てられた外灯が、噴上とXJR400Rの影を長く引き伸ばし、地面に投影した。

やはり、『幽霊』には影はなかった。

「遂に見つけたぜ。お前……何者だ」

噴上はXJR400Rに乗ったまま、自分のスタンド、ハイウェイ・スターを再び出現させた。

もし噴上の考えがあっただら、あの『幽霊』がスタンドなのだしたら、スタンドにはスタンドでしか対抗できないからだ。

そしてバイクから降り、『幽霊』に向かってゆっくり近づいて行く。同時に、『幽霊』から見て自分がいる方向の反対側に、そっとハイ

ウェイ・スターを回り込ませた。

ハイウェイ・スターは、本体の動きと歩調を合わせて、『幽霊』に向

かって近づけていく。

挟み撃ちだ。

『……君……僕が見えるのかい?』

幽霊は、噴上のハイウェイ・スターを見て首をかしげた。

『君たちはいつたい誰だい?……ここにいる紺色の君と、バイクに乗っている君が、つながっているのが分かる……』

「……お前、何を言ってやがる。このハイウェイ・スターが見えてるんだろ?ならお前も、スタンド使いツツ——わけじゃねえか……話せ、ここで何を企んでいる!」

『僕は……君こそ、どうしてそんな力を——超能力——を持って
いるんだい?』

幽霊は、噴上とハイウェイ・スターとを指差した。

「超能力?なんだそりや……もしかして、スタンドの事を言っているのか?」

噴上は、両手をだらりと下げた。

「俺の名前は噴上裕也。お前よ?う、この名前と顔に聞き覚えはないか」

『……申し訳ないけど、君の事は知らない』

幽霊はそう答え、自分の名を名乗った。

『僕の名は《橋沢育朗》……噴上クン、落ち着いてくれ。君と僕とは、これまで縁もゆかりも無かったはず。きっと何か誤解してるんじゃないかな』

『縁もゆかりも無え』だつてえ?』

噴上は、幽霊を睨み付けた。

「橋沢さんよお?、お前が忘れていても、俺はお前をわすれねえぞ。4ヶ月前に、お前のせいで、俺は入院させられたんだからな」

『なんだつて』

幽霊が、驚いたように目を見開いた。

「おつとまで、別にお前に恨みを持つてるわけじゃねえよ。逆に感謝してるぜ。お前に入院させられたせいで、俺は、このハイウェイ・スターを手に入れた……つて訳だからなア?」

これは仕返ししじゃねー。お礼だよ。お礼はたっぷりとしないとなあ。噴上はにやりと笑った。

『ちよつと待つてくれ……噴上君、君は……』

「質問をしているのは俺だツ！答えろ、橋沢。お前は何者だ！返答次第じゃ、ただじゃおかねえぞ!!」

噴上は、凄んで見せた。同時に、こっそり幽霊の背後に回っていたハイウェイ・スターを、動かした。

ハイウェイ・スターの右腕が、無数の足跡型に分裂した。分裂した無数の足跡たちが、幽霊におそいかかった。

『……これは……足跡が僕に取りつくツ！まさか……墳上君、これは君の能力なのか』

幽霊は、ハイウェイ・スターに取りつかれ 動きを止めた。

「今、俺は健康だから、『養分』は取らないでおいてやるよ。しかもう、動けねーぜ」

『うううツ……体に足跡が食い込んで行く……』

「それが俺のスタンド『ハイウェイ・スター』の能力さ……あきらめなア?!ツ」

胸を張った噴上は、驚いてしゃべりかけていたセリフを飲みこんだ。

信じられないことに、幽霊がハイウェイ・スターを引きはがしているのだ！

噴上の驚きをよそに、幽霊の若者は一つ一つ、ハイウェイ・スターを引きはがしていき、ついには完全にはがしてしまった。

そして幽霊は、動揺している噴上に『浮かび』よると、その腕に手をやった。

「うううっ！」

悲鳴を上げたのは、噴上だ。幽霊の体が、噴上の腕をすり抜けているのだ。

『君……噴上君に頼みがある。君にこんな事を頼むのは筋違いなのはわかっているけど、僕は、僕は……この世に居てはいけない存在なんだ……君の能力で僕の事を殺してくれないか』

幽霊の若者は、真剣な口調で突飛もないことを噴上に訴えた。

「ハッ・ハ・ハッ……何を言つてやがる。だいたい幽霊がまた死ぬのかよ」

育朗の手を振り払い、噴上が一步後ずさりした。

だが噴上は、幽霊・育朗の目を見て、育朗が本気で言っているのを悟っていた。

『噴……ガミ君……頼む』

育朗が、両手を上げて噴上にゆっくり近づいて行く。再び、育朗が噴上を捕まえた。

コ” コ” コ” コ” コ” コ” コ” コ” コ” コ”

「おっ……おい、よさねーかッ！そんなトンデモネー事をオレに押し付けるんじゃね——ッ！」

ガヴオツ!!

突然、噴上の足もとの地面が爆ぜた。

「ウオツ!!」

「振り向くな！」

とつさに背後を振り向こうとした噴上は、警告を聞いて……動きを止めた。

「死にたくなきゃ、動くな。お前を拳銃が狙っているぜ……変な動きをしたら、あんさんの頭を吹っ飛ばす」

「死……なんだって……何もんだオメー」

噴上は、ようやく、背後に二名の人間がいることを匂いから知った。だが幽霊に気を取られていて、ここまで接近されるまで気が付かなかった。

うかつであった。噴上 はハイウェイ・スターを出現させ、自分の背後をこっそり確認しようとした。

ガツンツツ

次の瞬間、噴上は後頭部に激しい衝撃を受け……意識を失った。



「橋沢育朗君だな」

拳銃の柄をぶつけて噴上を昏倒させたその男は、気取った仕草でテ

ンガロン・ハットをかたむけ、育朗に挨拶した。

「俺の名はホル・ホース。俺達があんさんの依頼を受けてやるよ……その時が来たら、俺がお前を殺してやる。安心しな」

「おいおい、まだ子供相手に大人げないぜ、おめえー」

もう1人の男、ポルナレフは、昏倒した噴上を抱え上げた。挑発的な言動をしたホル・ホースを睨みつける。

「さんざん言ったよな。ガキどもを痛めつけるようなまねはするなと……ここで契約を解除して、お前をぶちのめしてやってもいいんだぜ」

「相棒、そいつは勘弁してくれや」

ホル・ホースはポルナレフによりかかり、肩に手を回した。

「雇い主の指示は守るさ。この世界では信用がなにより大事なんだぜ」

「調子いいこと、言ってるじゃねえぞオ」

お前は信用できないんだよ と、ポルナレフは、ホル・ホースの手を振りほどいた。

「落ち着けよ……大事な話の前に、ちよつとコイツに黙って欲しかっただけだ。大して手荒な事をしたわけじゃねえ」

だが、もうこんなことはしない……と、ホル・ホースは付け加えた。

ポルナレフは、いかにも胡散臭そうにホル・ホースの釈明を聞きながら、育朗に向き合った。

「それはそうと橋沢君、君には俺達に付き合ってもらおうぜ」

固い声であった。

「まず初めに確認させてもらおうぜ」

ポルナレフが言った。

「君の名は橋沢育朗君だね……今から8年と少し前、君は家族とドライブ中に交通事故にあった……君は、その事故でご家族を失った。そして君の身柄はある組織に引き渡され……生物兵器に改造された……それが君だ。間違いないかい？」

返事の代わりに、育朗は黙ってうなずいた。その脳裏に、8年前、眠りにつく前の過去の出来事が次々と去来していく。



家族でドライブしている時に、交通事故にあったことを

少女によつて目覚めさせられ、謎の組織の秘密車両から脱出 —

—記憶の無いままに、雨の中、少女を連れてバイクを走らせたことを自分に恐ろしい力が宿っていることを知った時の恐怖を

逃避行の末、少女を人質に取られ、独りで組織の基地に乗り込んだことを、そして強大な敵を

「ドレス！宣戦布告だ！行くぞ！お前たちのところにツ！ 僕はおまえらにとつて脅威の来訪者となるだろう！」

少女と再会し、基地の地下に広がる鍾乳洞で少女と……スミレと別れたことを

「育朗 —— あんたと離れるのはいや——っ！」

「バルバルバルバルバル！」

崩れていく洞窟の中を渦巻いておそい掛かる濁流を

そして、気が付いたら森の中で、幽霊になっていたことを……

『こ……これはなんだ!? ここは……森? 僕は、死んでしまったのか? スミレは、どこに?』

『バカな……もうあれから8年もたつてるなんて……』



「……おい、あんさん話を聞いているのか?」

育朗は、ホル・ホースの言葉にはっと我にかえり、追憶を断ち切った。

『その通りです……《生物兵器バオー》それが僕です』

噴上裕也 その2

噴上が目を覚ますと、二人の白人中年男性が顔を覗き込んでいた。

「おお、よかったぜ。中々目を覚まさないから少し心配したんだぜエ」
陽気に話しかけてきたホル・ホースと名乗る男を警戒しながら、噴上はそつと周囲の様子を観察した。

ここは、山中に打ち捨てられた別荘か何かのようであった。

広い部屋に、豪華な造りの家具たちが据え付けられていた。誰も使わなくなってから時間がたっているようで、部屋中が埃っぽく薄汚れている。

もともと噴上が探していた幽霊・育朗は、三人から少し離れた場所に漂っており、窓から外の様子を眺めていた。

「おい、どういう事だ。オツサンたち、何者だ？」

噴上が尋ねると、ホル・ホースが答えた。

「小僧、教えてやるよ。簡単に言うと、俺たちは日本政府とアメリカ政府から極秘の依頼を受けて仕事をしているのさ。凄腕のエンジニアトってわけだ。カッコいいだろオ？邪魔すんなよ」

ホル・ホースは、胸をはった。

「さつぱりわからねえ。オツサン達、何をしてるんだよ」

「しかたねーな。もう少し説明してやる——お前はスタンド使いらしいから、特別サービスだぜ。俺たちが日米の政府から受けた依頼を『ちよつとだけ』話してやろう」

ボツ

ホル・ホースが、煙草に火をつけた。

「いいか……8年前に壊滅したある闇の政府系組織の本拠地がこのあたりにあったのよ」

育朗が、ドレス とつぶやく。

ホル・ホースは我が意を得たり、と悦に入った様子でうなずいた。

「そうだ、その組織は、ドレスつてふざけた名前と呼ばれていたらしいな。俺たちの仕事は、その組織が過去に作った危険な生物兵器の回収

さ」

「なんだってエ?！」

噴上は疑わしげに言った。このホル・ホースと名乗る軽薄そうな男は、信用ならない。

「それ、ほんとの話かよ。なんかウソクセーぞ」

噴上が鼻で笑うと、ホル・ホースの顔が一瞬険しくなった。

「本当の話だ……俺たちは、たしかに日米両政府の情報を受けてこの辺りの地を搜索している者だ」

先ほどから不機嫌そうに黙り込んでいた男が、口をはさんだ。

髪を逆立てた、なかなか洒落つ気のある（俺には劣るがね）と噴上は思っている）男だ。年齢は、ホル・ホースと同じくらいか？

「挨拶が遅れて、失礼した……俺の名は、ジャン・ピエール・ポルナレフ。ジョセフ・ジョースターさんと空条承太郎の友人だ。君は噴上裕也くんだったな。さっきは失礼した、すまなかったな」

ポルナレフは、噴上に頭を下げた。

「君のバイクは近くに止めてある。もう少し頭がすつきりしたら、どこにでも行きたいところに行けばいい。そして、今日起こったことは忘れ、育朗クンのことは我々に任せてくれないか」

「オイオイ、何言ってるんだよッ」

噴上は、半笑いで首を振った。

「そりゃあ、ジョースターさんと承太郎さんの友達？　が言うことならよお……確かにアンタのいう事は、『本当』かもしれないなあ??。でもな、俺はまだ納得してないぜ。そうだろ?　だって証拠がないぜ。口で言われただけで、オツサン達があの人『ダチ』だって、どうすれば俺にわかる?　そもそも、危険な生物兵器の回収をやってるつーオツサンたちが、どうして俺と、この幽霊野郎とのいざこざに首を突っ込まなければならねえ?」

「……それはな……」

説明しかけたホル・ホースを制して、育朗が、ふわっと噴上の目の前に浮かび上がった。

『それはね……』

育朗が悲しげに言った。

『僕の肉体がその危険な生物兵器だからさ……僕はこの世にいちやいけない存在なんだ……』

「育朗クン、そんなこと言うなよ」

ポルナレフが、幽霊をたしなめた。

「きつと何か手があるはずさ。希望を捨てちやいかん」

『希望も何も、僕に残された時間はもうあまりないんです』 育朗が言った。

『僕は……消えるしかない。それは納得しています。でも、残されたわずかな時間で、やらなければならぬ事があるんです』

(どういうことだよ)

噴上は、今後どう動けばいいのか悩み、腕を組んだ。

胡散臭い2人組のオツサン達と、自分を殺してくれと頼む幽霊。普通に考えたら、そんな奇妙な奴らからとっとと逃げ出すべきだ。

だが心のどこかに、逃げ出すことを引き留める何かがあった。

(この育朗って幽霊とポルナレフと名乗る男は、どこかしか信用できるところがあるぜ。だがやっぱり俺とは『無関係』だぜ……自分と関係ねエ??ことなんだから、このまま黙って帰るべきか……)

だが、本当にそれで『納得』出来るのか？

考えがまとまらないまま、噴上は育朗に話しかけた。

「育朗よお??お前、ずいぶんな事情があるんだろうな。その、生物兵器って所はまるでピンとこないがよお、お前が……やらなきやいけない事ってなんだ?」

『僕には会わなくてはならない人がいるんだ。まだ僕に時間があるうちに、せめて一目、そのひとに会いたいんだ』

「……そいつは女か、それとも親か、親友か誰かか」

『親は死んだよ……昔の親友には、もう会えない。会わなきやいけないのは、僕と同じ組織に捕まっていた女の子だよ。彼女が今も無事である事を確認して、ひと言お礼を言いたいんだ……。彼女は、僕と別れた時にはまだ幼かった。今は君と同じくらいの年のはずさ……』

「ふうん」

噴上はうなずいた。理由はスケか、そういう事ならわかる。

「女（スケ）かよ……なら俺も力を貸してやるぜ。俺のスタンドは、遠距離型で追跡に向いてるからなあ」

育朗は、何かを口にしかけたが、すぐそれを飲み込んで、噴上の腕を取った。

『噴上クン……ありがとう。何といえればいいか』

「気にするな。自分の好きでやるんだからよお。だが育朗、あと一つだ、あとひとつ教えてくれ」

コ”コ”コ”コ”コ”コ”コ”コ”コ”コ”

「育朗よお?!。お前、なんでさっきから『死ななきやいけない』とか、『時間がない』とか、言っているんだ?」

『それは……』

育朗が、言いよどんだ。

「……代わりに答えよう。実は、育朗君の体は、危険な生物に寄生されている。その『生物』が、育朗を危険な生物兵器に作り替えた張本人ってわけだ」

ポルナレフが言った。

「?……へえ……それで、それがどう関係するって言うんだ?」

「そうだな。説明しよう。『寄生虫バオー』が危険なその理由を……」



「よせよ、そんな話を信じられるかよ」

噴上が、顎をいじった。

『本当の話だよ』 育朗が言った。

『だから僕は、『後90日以内に、死ななくちゃいけない』んだ。……僕の事はいいんだ。……ずっと前から覚悟はできている。でもその前に、せめて彼女に、スマイレ に一目会いたいんだ』

『育朗のスケを探すこと』には、協力する。しかし、女を搜索する前に、まずは育朗の本体を探さなければならなかった。

ポルナレフのつかんでいる情報によると、育朗の本体は、この地を

縦横無尽に走っている地下水脈のどこかに眠っていると言うことだった。

噴上は、ポルナレフの指示にしたがってハイウェイ・スターを鍾乳洞にもぐり込ませた。そして、育朗の本体を探し続けた。

探索を初めてから5日目、夕方になっていた。

「何か見つけたぜえ！」

噴上は喜び勇んで、自身のスタンドが、地下水脈に浮かぶ『何か』を感知した事を告げた。

「ハイウェイ・スターが、『地下水脈の中に漂っている弱い生命反応』を見つけたぜ。ちょうど、人と同じくらいの大きさがありそうだ。ありや、育朗の本体だ……と思う」

『本当ですか……噴上君、ありがとう』

育朗が噴上の手に、自分の手を重ねた。

『なんて礼を言っていないか、わからない』

「育朗、気にスナナ。俺がやりたくてやった事なんだからなあ?」

噴上は、精いっぱい格好をつけて肩を竦めた。

とは言え、安堵のあまり膝が落ちそうになっていた。それほどまでに『育朗』の捜索に入れ込んでいたのだ。

自分と、自分のスケ（彼女）達に置き換えて考えてみれば、『育朗』の願いがどれだけ真摯で、かつ深刻なものであるか、わかっているツモリであった。

「今、相棒のスタンドが報告してきた『育朗クンの体が眠っていると言う鍾乳洞』は、ここから10Kmほど離れた場所に入り口があるぜ」

ホル・ホースが、地図を見ながら言った。

「そうか、それなら人が入れるところまで、俺のスタンドが引っ張ってきてやるぜ」

「よし。では明日の朝、育朗クンの本体を回収に行こう。噴上クン、育朗クンの体は、水から出さないように気を付けてくれよ」

ポルナレフが顔をほころばせた。

「今日はお祝いだな。それから育朗クン」

『はい?』

「君に会えるのを楽しみにしているよ」



メギャン！

その晩、そろそろ寝ようかと言う頃。

窓際で見張りにたっていたホル・ホースが、急にスタンドを出した。

ホル・ホースのスタンドによって、ホル・ホース本体の両腕、胴体、顔に覆いかぶさるように、メカニカルなプロテクターのようなものが現れ、右腕には大型の拳銃が出現していた。

「何だ？ 俺のスタンドを見せたのは、初めてだったか？ 俺のスタンドはハジキだ。……エンペラーって呼んでくれや」

ホル・ホースは、自分のスタンドを見ている噴上と育朗にウイंकをした。そして、まるでおまけのように、この家を囲んでる奴らがいるぜ…… と付け加えた。

「!?なんだってエ——ッ！」

噴上は冷や汗をかきながらも、ハイウェイ・スターを建物の外、屋根の上に出現させた。

噴上の脳裏に、スタンドの見た景色が浮かんだ。精神を集中させ、ハイウェイ・スターに屋根の上から下をのぞかせる。すると、三人の男達が、廃屋の周りに立っているのが見えた。

噴上は、自分がスタンド越しに見たものを、ポルナレフに伝えた。ポルナレフはうなずき、噴上に 危険だからスタンドを引っ込めるように と言った。そして、育朗に向きなおった。

「育朗クン、君は隠れてろ。襲撃者が『どの組織のモノ』か予想はついてる。奴らに、君の姿を見せたくない」

『……わかりました』

育朗は、素直にうなずいた。

ズウウギャン!!ギヤルツ!ギヤルツ!

突然、銃声が響いた。

驚いて、噴上は銃声がした方向を振り返った。

そこにはホル・ホースがいた。無造作に窓を開けて、エンペラーの弾を発射している。

「チツ……視界が悪い。狙いがつけられねーぜ」

ホル・ホースは、銃を撃ち続けながら愚痴をこぼした。

噴上には、その様子が『冷静すぎる』ように思えた。

理解しがたいことだ。『拳銃の引き金を人間に向かって引いている』にもかかわらず、ホル・ホースからは銃を撃ち、人を殺す躊躇や、葛藤が、みじんも感じられないのだ。

(こいつ、やっぱりヤベー奴だぜ)

噴上は、無意識のうちに顎を触っていた。

(い……いきなり撃つか、普通よお??)

噴上は外の様子を偵察しようと、もう一度、ハイウェイ・スターを建物の外に出現させた。再び、スタンドが視ているビジョンが、噴上の脳裏に浮かぶ。

そのビジョンによると、外は暗く、陸と空の境目は黒い塊にしか見えなかった。星明りに照らされて、ぼんやりと人影が見える……三人だ。

(コロシなんてまっぴらだぜ。俺のハイウェイ・スターで無力化してやりやあ……)

すぐ横で銃声が鳴り響いているせいだろうか？

噴上は柄にもなく、目の前でコロシを行わせないために、自分が敵に襲い掛かることを決めた。だが、噴上がハイウェイ・スターを突っ込ませようとした、まさにその時だ。

バシユツン！

突然、襲撃してきた三人のうち、1人の体が『はじけ』た。

はじけた体は黄色のスライムに変化し、エンペラーの弾丸が着弾する前に弾を包み込む。

「おいおい、かんべんしてくれよ——」

ホル・ホースが、顔をゆがめた。

バシユツ、バシユツ

ホル・ホースは、何発も弾丸を男に打ち込む。だが、そのすべてが、『着弾するはるか前』に、黄色のスライムに飲み込まれていく……

はじけた男の体の奥からは、小柄な女性が姿を現した。

「これは、皇帝……キャハハハッ！素敵ね、ホル・ホースが、生きてたのね」

ハイウェイ・スターの耳に、女の笑い声が聞こえた。

「馬鹿な、ありやあ……イエロー・テンパランスじゃねえか」

ホル・ホースがさらに顔をしかめ、加えていた煙草をプツと吐き出した。

「お前、あの野郎を知ってるのか？」

噴上が尋ねると、ホル・ホースは首を振った。

「いいや、『あの女』はしらねえ。(ラバーソウルの野郎が性転換手術でもしていたのでもない限りな) だが、『あのスタンド』は知ってるぜ……ありやあ、イエロー・テンパランスって名前のスタンドだ。スライムでどんな衝撃も吸収してしまう厄介な奴だ……お前たち、あのスタンドに近づくなよ。スライムに食われちまうぜえ」

イエローテンパランスには、承太郎でさえ苦戦したんだ。ポルナレフがそう付け加えた。

噴上は、顔色を変えた。

「じよっ……承太郎さんを……とんでもねえ能力じゃねえか……じ、じゃあよオ??後の二人もどんなオツソロシ——能力を持ってるんだよ?」

「知るかッ！」

ホル・ホースは背中から、拳銃をつかんでいる『スタンドの腕』だけを伸ばした。背後に向かって、やみくもにエンペラーを撃ち続ける。

ズギャンッ！ギャンッ！ズギャンッ!!

と、後を追ってきた男のうち、『最も奇妙な格好をした長身男』が、何かを投げた。

キラリ と投げられたものが、光った。

「おい、何かやばい。撃ち落とせ！おっさん!!」

噴上がどなった。

「ガキめ、お前も少しは仕事しやがれッ！」

ホル・ホースが、『男が投げてきた何か』を撃ち落とす。

——すると、それは爆発した。
ドガアアアアアンツ！
爆風が吹き荒れる。

噴上裕也 その3

「馬鹿な……あれは爆弾のスタンドじゃねーか」

吉良以外にもいたのか、噴上に戦慄が走った。つい三か月前に見た吉良吉影のキラークイーン的能力を思い出すと、いまだに恐怖で足が震える。

だが、ここに『第二の爆弾のスタンド』が現れたという訳だ。

あの能力は絶対にヤバイ。

噴上は、身を震わせた。

ここは平和な日本なのだ。爆弾で全身をふつとばされて死ぬなんて、御免だ。

ガアン！

ドドガアアン！

噴上が震えている間も、ホル・ホースは、休むことなくエンペラーの弾丸を撃ち続けていた。

だが、そのすべての弾丸が、着弾する前にスライムにからみとられてしまう。……どんなにエンペラーの弾を撃ちかけても、三人の『敵』は無傷であった。

と、三人の追手の最後のひとり、初老のマツチヨな老人がスタンドを出した。

それは、『マッチョな人間から皮膚をはぎ取った』ような、不気味な外観のスタンドだ。

ボツゴオオオオン！

思わず、噴上が老人の出したスタンドに鼻白んでいると、不意に家の屋根に『丸く』穴が開いた。さらにもう一つ、二つと続けざまに屋根に穴が開いていく。

何だかわからないが、ヤバイ。

噴上は、ハイウェイ・スターを呼び戻した。そして小屋から出ようとドアノブを掴む。しかし、ドアノブはピクリとも動かなかった。

「はっ……は、は、反対側から固定されているのかッ……ドアがあかね

え！」

噴上は、悲鳴を上げた。

「チャリオッツ！」

噴上の悲鳴にいち早く反応したポルナレフは、銀色に輝くスタンドを出現させた。

チャリオッツは剣をふるい、ドアを丸く切り裂いた。

「小屋が崩れる前に脱出するぜ。ついて来い」

「甘いぜ」

ホル・ホースが、かぶりを振った。

「奴らが、逃げるチャンスを俺たちに与えてくれると思ってるのかヨ。追って来るにきまつてるぜえ——、チトきついだが、ここで奴らを倒すしかねえぞツ」

「うるせえぞ。そんな事は、そうしたほうが有利なのはわかってるぜ。

……そもそも、俺が行けば、あんな奴ら、敵じゃねエ」

ポルナレフはチャリと振り返った。そして、恐怖で『血がにじむほど』に、自分の顎に爪を立てている噴上を見て、付け足した。

「だが今は、奴らを倒す事よりも優先すべき事があるってえ訳だ」

ギヤーツ と、猿だか何かの鳴き声があった。鈴虫の鳴き声、足音、草をかき分ける音、皆が空気を求めて喘ぐ呼吸音などが、夜の森に響いていた。

ポルナレフは、皆を先導して森の中へと誘導していった。

ポルナレフのすぐ後ろを噴上、そして育朗、最後尾をホル・ホースが務めていた。

一行は、一列縦隊を取って三人のスタンド使いの追撃を避けながら、森の奥へと走っていく。

森は、ほとんど人の手が加わっていない原生林なのだろう。木々の間をツタが絡みあい、足元は落ち葉がぎっしりと積もっていた。

振り返り、落ち葉の上に残った自分たちの足跡を見て、チツとホル・ホースが舌打ちした。だがどうしようもない。一行は原生林を苦労

して進み続け、やがて、擦り鉢状の谷についた。

その谷底には、鍾乳洞があった。

「ここだよな、育朗くん。この奥に君の体が眠っているはずだ」

ポルナレフの言葉に、育朗は青ざめた顔で首をかしげた。

『わかりません……僕は、気が付いたら幽霊になって山中を漂っていました。だから、自分の体が何処にあるのか知らないんです……』

「じゃあ、ここじゃね??かもしれないのか」

噴上が、ガツカリした風に言った。

確かに、ハイウェイ・スターは育朗の二オイをこの洞窟で探知したのだが……

『でも、この奥には何か引き寄せられるものを感じるよ……それが、僕の体なのかも』

育朗が、首をかしげた。

「そのはずだ。あの三人のスタンド使いの目的も、君の本体だと思う。こっちは、奴らよりも先に君の本体を取り戻すってわけだ」

ポルナレフが言った。



洞窟の中は暗く、冷たく、『大人一人がかろうじてもぐり込める』ほどの幅しかなかった。

一行は、一列縦隊で洞窟の中を進んでいった。

……ピシヤツ

入り口は狭かった。だが、先を進むにつれ洞窟は少しずつ大きくなっていき、同時に洞窟の床から水が染み出てくるようになった。

その冷たい水を踏み越え、さらに進む。

一行が洞窟に入ってから、30分ほど経っただろうか。ゴン!と言う爆発音が頭上から聞こえた。

「おい、やばいぜ」

ホル・ホースが言った。

「いまの爆発音……ありやあ、さっきの爆弾テロリスト野郎の能力だろう。……おそらく、奴らは上の岩に発破をかけて、穴をあげようとしてやがるぜ……おい、ポルナレフ、とつと先を行けよ。ここ

にいたら生き埋めになっちゃうぜ」

「わかってるよ。お前こそ、背後をちゃんと気を付けてろよ」

ポルナレフが、ぶっきらぼうに答えた。

一行は、鍾乳洞の岩を乗り越え、すり抜けながら苦勞して先を進んでいった。

「ところでホル・ホースのオツサンよお……お前、さっきからまるで奴らの事を良く知っている様な口ぶりだな?」

少しだけ、心の余裕を取り戻した噴上が、ホル・ホースに詰め寄った。

「オツサン、まだ俺たちに隠していることがねえか」

「このガキ！年長者に対する口のきき方がなってねえぞ」

ホル・ホースが噴上の襟を引き上げかけ……ポルナレフの目つきに気づいた。ホル・ホースは、苦笑して噴上を掴んでいた手を放した。

「……わかってるよ、お前や承太郎の野郎ともめるのは、ごめんだからな」

「ホル・ホース、話してやれよ」

ポルナレフがうなずいた。

「……わかった。少しだけ知ってる事を話してやる。いいか……俺は確かにあの三人の事を知ってる。奴らは元々、D I O さ……D I O と言う男の私兵だった奴らだからだ。オイオイ、ありやあ、もう12年も前かよ……俺も年食ったわけだぜ」

ホル・ホースが言った。

「……D I O は、『善人』でなくとも天国に行ける方法』を研究しているとホザイテいたな……奴には、『悪』のカリスマがあった。かわった人間は、どんな奴でも奴に従っていれば救われると、奴が天国に連れてつてくれると、いつの間にか信じさせられていたな。……あの三人も……俺も、D I O の部下だったのさ。もつとも奴らは『狂信者』で、俺は、金をもらって仕事をする『雇われ人』だったがな」

「天国？なんだかヤバイ、カルト教団の話聞いてみたいだな」

「まさに、カルト集団だったぜ。しかも、D I O の奴はただの教祖って

わけじゃねえ。奴は、恐ろしいスタンド使いだった」

ホル・ホースは、身震いした。

「奴の率いた組織は……狂ってたぜ。俺は何人か、自ら望んでD I Oに血を吸われて、最後には悦びながら死んじまった女を何人か知ってるぜ。女だ、奴は女を殺す奴だ」

ホル・ホースは、『女を殺す』という言葉を心底イヤそうに言った。「それで、D I Oって奴は、今もその教団を率いて『天国に行く方法』を探してるってか。それが俺たちが襲われた事と、どう関係があるって言うんだ」

「D I Oは死んだ……これまでにさんざんやった『悪事』の落とし前をつけられたって事だ。やったのは6人のスタンド使いどもで、その中でまだ生きているが3人いるぜ。お前たちも知っている、空条承太郎と、ジョセフ・ジョースター……それから、そこにいるポルナレフだ」

ホル・ホースは、額の汗をぬぐった。

「D I Oの死後、奴が作った組織はいったん分裂し、今はまた再統合されたと聞いている。誰が組織をまとめているのかは知らねえ。それはやばすぎる情報だからな」

「承太郎さんが……」

噴上は、ポルナレフを振り返った。

ポルナレフは、黙ってうなずいた。

『彼らが、そのD I Oって男の狂信者達だって事はわかりました。でもそれが、どうして『彼らがおそってくる』ことに、つながるんですか』

育朗が尋ねた。

「おそらく……奴らが求めているのは、D I Oの体を再生させ、そこへ魂をもう一度呼び出すことだ」

ポルナレフが言った。

「おいおい、ますますオカルトっぽい話だな。嘘くさいぜ」

「噴上くんよお??馬鹿かお前は」

ホル・ホースが首を振った。

「嘘かどうかなんて関係ねーんだよ。肝心なのは奴らがどう考えるかって話だ……育朗くん、あんさんの体は、驚異的な力を持っていると聞いたぜ。噂だと切れた足をもう一度くつつけたり、怪我をあっという間に回復させたりできるようなじゃないか」

『ええ、出来ます』

育朗が答えた。

「さつきは言わなかったがよお——D I O って奴は特殊体質でな。……あんさんと同じように 切れた体をもう一度くつつけたり、怪我を回復させたり……不死身の体をもつてやがった。おおかた、奴らはおなじような力をもつ、アンサンの体を使えば、『D I O の肉体を再生できる』って信じてるんだろいうな」

「……ますますオカルトっぽいな」

噴上は眉をしかめた。

自分たちは、狂人みたいな奴らを相手にしてるってワケだ。

ドガアアアアンツ!!

もう一度、破壊音が鍾乳洞に鳴り響き、土砂が崩れる音がした。

「チツ！奴ら、追いついてきやがったぜ」

ホル・ホースは、スタンドのプロテクターを出現させた。

「噴上くん。キミは、橋沢くんと一緒に行ってくれ。ここは、俺とホル・ホースが食い止めるッ」

ポルナレフも、自分のスタンド —— 銀色に輝く騎士の様なスタンド、シルバー・チャリオッツ —— を出現させた。

「……いいの……か？」

噴上は躊躇した。正直、命がけの戦いに巻き込まれたくはない。

だが、ここで、『そんなこと』を言ってもいいのか。

噴上が躊躇している様子を見て、ポルナレフが優しく語りかけた。

「ここは俺達が食い止めるから、育朗と二人で先に行ってくれ

「だっ、だけだよお?」

躊躇する噴上の額に、ポルナレフがコツンと指を突き付けた。

「噴上くん、悪いが、君は命のやり取りをする覚悟ができていない。そんな状態で戦いに出てもやられるだけだ」

「……」

子ども扱いされ、噴上はぶぜんとした。だが正直、脚が震えている……

「相棒よお」

ホル・ホースはスタンドの拳銃を構え、後方へ向けた。

「あんさんのスタンドは探索用だ。育朗の体を探して、掘り出すのはお前の仕事だよ。サツサと掘り出して戻ってきてくれや。それまで俺たちが時間稼ぎをしてるからよう」

（いや、ダメだ。ここで怖くない方を選ぶ訳にはいかね——）

噴上は首を振った。俺だって、俺なりに『覚悟』は出来てるはずだ。

「いいや、ポルナレフさん……『覚悟』なんてとつくにできてるぜ」

噴上は、震えながらも首を振った。

「育朗の本体なら、既にハイウェイ・スターは探索を終えて、地下水脈のなかすぐ近くまで引っ張って来ている。後は最後の岩盤を取り除けば、育朗の本体はもどってくるはずだぜ……だ……だから……育朗と行くのは、おれじゃあねえ……ポルナレフさんだ。この先にやあ『岩盤を切り裂けるスタンド』が必要だぜ」

ポルナレフは、噴上を値踏みするような厳しい目で眺めた。

すぐにその肩をポンと叩き、にこつと笑った。

「……判った……噴上クン、君を信じる……それからホル・ホース、てめーはわかっているな？」

ポルナレフは、ホル・ホースを睨み付けた。

そして、育朗を連れて鍾乳洞の奥へ消えていった。



「さて相棒、俺達の無敵のコンビが活躍する時が来たなあ」

命を懸けた戦いの直前だというのに、ホル・ホースはヘラツと笑った。なれなれしく、噴上の背中を叩く。

「だが、わざわざ奴らが接近してくるのを、ただ待つ事はないわな」

ホル・ホースは、皇帝の弾丸を、つづげざまに発射した。

ズキュウンツ！ジユキュウンツ！

「おい、無駄にスタンドパワーをつかって、どうするつもりだよ」

「無駄だと……おいおい、相棒……素人っぽい事を言うなよ」

ホル・ホースの銃弾は、洞窟の岩壁に当たり、立て続けに閃光を上げた。

「跳弾が先を照らせば、奴らの居場所を見つけられるってわけだ」

ホル・ホースは、どんどん弾を打ち出した。

跳弾の発する光は、微かで、それぞれほんの一瞬の光ではあった。だが、多量の弾を打ち出すことで、じきに、ぼんやりと目指す敵の姿を浮かび上がらせることができた。

「よし」

ホル・ホースは、浮かび上がった敵目がけて皇帝の弾丸を打ち出した。だが、すぐに首を振ってエンペラーを収納した。

「駄目だな。奴ら、イエローテンバランスを、洞窟の前面に貼り付けて、完全に防御してやがる」

バシユ！バシユ！

すかさず敵から反撃され、二人は銃撃を避けて岩陰に隠れた。

「どうするんだ。勝ち目がねえじゃねえか！」

毒づく噴上をしり目に、ホル・ホースは悠々と煙草に火をつけた。

「いいや、まだ手はあるぜ」

「あーん？言ってみろオ!!」

「次の手はお前さ、相棒。お前が行くんだ」

ホル・ホースは噴上の肩を叩いた。



噴上はハイウエイ・スターを分裂させ、物音がした洞窟の奥へとスタンドを送り込んだ。

ハイウエイ・スターは、3人の敵目がけて走っていく。自動操縦モードとなったハイウエイ・スターの人型の体はばらけ、体を無数の足型はに分裂させて、『洞窟の岩棚や鍾乳洞の陰』などを、縫うようにして進んでいく。

「相棒のスタンドは、パワーがないが、代わりに遠くまで素早くいけるスゲースタンドだ」

ホル・ホースは、へらへらと言っていた。

「奴らは俺たちを追っている。待ち構えている俺たちの方が有利つてわけさ。不意打ちをしてやれよ」

やがて、ハイウェイ・スターは、洞窟の天井部分にある亀裂の一つに、その身を忍び込ませた。自動操縦モードを止め、無数の足型から、人型に戻る。

待つことしばらく、ようやく追手達が現れた。

匂いから判断すると追手は二人。一人は地上に残っているらしく、現れたのは奇妙な格好をした長身の男と、小柄な女性のようにであった。

二人は懐中電灯もつけずに、真つ暗闇の洞窟をずんずんと鍾乳洞の奥へと目指していた。

『喰らえッッ』

噴上は覚悟を決めた。

腹をくくって、長身の男を狙って、ハイウェイ・スターを突っ込ませる。

ハイウェイ・スターに一撃必殺の殺傷力はない。だが、うまく顎を狙えば、脳震盪を起こさせることができる可能性がある。一人倒せば、あとの二人の養分を一気に奪い取ってしまえるはずだ。

そうすれば、勝ちだ。

スパンツッ

ハイウェイ・スターの一撃は、狙い通りに長身の男の顎にヒットした。アゴを撃ち抜かれ、長身の男が崩れ落ちる。

「やつ……やつたぜ？」

噴上は歓声を上げかけ、だがすぐに恐怖で顔をこわばらせた。

長身の男は、崩れ落ちながらも、すばやく自分のスタンドを出していた。

鴉のような外観のスタンドがカアと鳴き、長身の男の手元にある石に触れた。その石を、ハイウェイ・スターに向かって、蹴り飛ばした。ッ！

バシユ

とつさにハイウェイ・スターは、その石を受け止めた。

コ” コ” コ” コ” コ” コ” コ” コ” コ” コ”

だが、まずいことに、石に『何らかのスタンド・パワーが込められている』ことが、ハイウエイ・スターの感覚で伝わってきた。

「なんだこれは？」

噴上は、ハイウエイ・スターの視覚を通して、その『石』を確認して、呻き声を上げた。

石には、何らかの『ピンのようなもの』が突き刺さっていた。もつとも近いイメージは、手りゆう弾だ。

↓ ↓ ↓ ↓ ↓ ↓ ↓ ↓ ↓ ↓ ↓ ↓

「このスタンドは、オエコモバ」

イエローテンパランスの女が、歌うように言った。

「エルネストのスタンドは爆弾よ。あんた、その手を離さない方がいいわよ」

「いや、マキシムの言ったことは忘れる。さつさと手を放して、くたばっちまいな」

エルネストがせせら笑うと、プツと唾を吐いた。

ハイウエイ・スターの視覚には、エルネストがまき散らした唾の粒にも、小さな手りゆう弾が付いているのが見えたッ！

『まずい！』

噴上は、手に持った手りゆう弾を投げつけると同時に、ハイウエイ・スターを解除した。

トゴオオオオ——ン！！

しかし、解除する直前に爆弾が爆発し、ハイウエイ・スターの右腕をズタボロに砕いた。

「痛ってえ!!」

噴上に、スタンドが破壊されたフィードバックがおそった。噴上の右半身の皮膚が爆ぜ、血が噴き出した。

一方、エルネストの引き起こした爆発は、イエロー・テンパランスの防御によって完璧に防がれていた。

「はははは。無意味な努力だったな」

エルネストが、そう笑った時だ。
バシユツ!

何かがいエローテンパランスの防御壁を貫いて、エルネストの右肩を砕いた。

どういう事だ。

エルネストが、吹き出ている自分の血を抑えていると、第二の弾丸が、マキシムの肩を貫いた。

「グツ……どうして……どうしてエンペラーの『弾丸』如きが我が、スタンド、イエロー・テンパランスの防御をやぶったの」

痛い……マキシムは肩を抑えて、膝を落とした。

コ” コ” コ” コ” コ” コ” コ” コ” コ”

「ヒヤツヒヤツヒヤツ……エンペラーAct2。……名付けてサタニツク・マジエステイーよ……。スタンドも成長するつてワケだ。爆弾の光で、お前たちの位置もよく解ったしよオ、お前の防御を破るなんて、『簡単』だったぜエー」

ホル・ホースは、にやりと笑った。

ホル・ホースの体の要所をおおっていたエンペラーの『防御パッド』は、今は、拳銃の上にかぶせられていた。そのため、ホル・ホースの手にある拳銃は、ホル・ホースの二の腕とほぼ同じくらいの大きさに膨れ上がっている。

「サタニツク・マジエステイーの力で、弾丸を限界まで回転させて撃つた。こいつの貫通力ならイエロー・テンパランスなぞ敵じゃねえんだよ!」

ホル・ホースが、巨大化したスタンドを一振りした。すると、スタンドの拳銃もバラけた。

スタンドの拳銃は、見る見る元の大きさに戻っていった。

外れた部品は、拳銃を掴んだ人型のスタンド——金属のパイプで出来た骨組みにプロテクターが付いている——に組み直される。プロテクターが外れると、人型の部分が一瞬だけ姿を現した。だが、すぐにプロテクターだけを残し、再びホル・ホースの体にもぐりこんだ。「チエツクメイトだ……お前たちは、俺と相棒の最強コンビには勝て

ねーよ」

「ははは。痛えよ。痛えよ！」

エルネストは、自分の傷を掻きむしる様にしながら、高笑いした。

「流石、歴戦のスタンド使いだな。お前達手ごわいなあ？ 面白いッ！！」

エルネストは、握りこぶし大の石をスタンドに拾わせた。

そして、それを爆弾に変えて、洞窟の天井に投げつけた。

それは、爆発した。

ドッガアン！

ガラガラガラ

爆弾によって砕かれた、岩盤が天井から落ちてくる。

「うおおおおッ」

噴上とホル・ホースは、とつさに洞窟の壁近くに体をピッチリと寄せた。

ガラガラガラガラ

こんなに重い岩盤が落ちてきては、非力なハイウェイ・スターがどうにかする事は、無理だ。

噴上はガタガタ震えながら、洞窟の壁に身を寄せた。

何もできない、ただこうやって身を縮め、崩落して落ちてくる岩に押しつぶされないことを祈るだけだ。

噴上は目を閉じ、耳をふさいでただ震えていた。

やがて、岩の崩れる音がしなくなった。

そして噴上は、自分が『崩落した岩盤と、洞窟の壁とのわずかな隙間』に閉じ込められている事を、知った。

「ナッ！」

そうと気が付いた瞬間、制御不能のパニックが噴上をおそった。噴上は絶叫を上げ、岩盤を叩き、この隙間から出れないか、必死に暴れ始めた。

スケたちにも知られぬまま、ここで孤独に死んでいくなんて、嫌だッ。

——だが、脱出の術は、まったく思いつかなかった。

やがて、疲れ切った噴上は、涙目になりながら岩盤の隙間で丸くなった。

その時だ。

「……………」

何か、声が聞こえた。耳をすませる。それは、ホル・ホースの声だ。不覚にも、噴上はその声をきいて涙が出るほどの安心感を感じた。これで、助かった。

「……………おい？相棒……………聞こえるか？」

「ああ、聞こえてるぜ。ホル・ホースのオッサンよオ」
だが動けねー。ここから出してくれないか。

噴上の希望は、だが簡単に打ち碎かれた。

「イヤ、アンサンには悪リイーが、そりや無理だぜ」

のほほんとしたホル・ホースの返答が、帰ってきた。

「オイッ！」

「しかたねーだろ。俺も『閉じ込められている』んだからよオ」

「!?何だつて！どーすんだよッ」

噴上はわめいた。

こんな所で、こんなしみつたれた地下で、人知れず死ぬなんてゴメンだ。

『アケミ』に、『ヨシエ』に、『レイコ』に会いたい……

気が遠くなる……………

目の前が暗くなる……………

ガラッ！

不意に目の前がまぶしくなり、噴上は目を開いた。

するとそこには、『まるでケーキのように複数に切り分けられた岩盤を、軽々と持ち上げている』橋沢育朗の、生身の姿が見えた。

「怪我はないようだね、よかった」

無事な噴上を見つけて、橋沢育朗がにっこりと笑った。

「噴上裕也クン、初めまして」

嫌になる程の、サワヤカな笑顔だ……

虹村億泰 その1

1999年11月3日 「杜王町、喫茶カフェ・ドウ・マゴ」:

噴上裕也が森の中で『橋沢育朗』の本体を捜索していたころ、虹村億泰は、カフェ・ドウ・マゴにいた。

億泰は、落ち着かない気分で、なんども気ぜわしく、目の前のコーヒーを口に運んでいた。

コーヒーはまだ熱く、あわてて飲んだ口の中が少し火傷してしまうほどだ。

信じられないことに、億泰の目の前には、栗沢スマレと名乗るとびきりの美人が座っていた。スマレは、億泰に熱心に語りかけてくれる。

しかも……なんとツ、スマレは、億泰の面白くもない（ハズの）話にウンウンとうなずき、時折笑ってさえくれるのだッ。

仗助曰く、スタンドも月までぶっ飛ぶこの衝撃。

仲間が聞いたなら、みんな驚くだろう。

ざまあミロツ！

もちろん、スマレは億泰の彼女ではない。

自慢ではないが、この虹村億泰、生まれてこの方、一度も女性にもてたことはないのだ。

彼女ができたらどんな気分なのか、いつも女性をとつかえひつかえ自分の隣にはべらせていた兄、形兆を横目で見ながら、億泰はよく妄想していたものだ。

だが、今や『それ（億泰に彼女ができる事）よりも、スゴイことが起こった』と言うわけだ。

なんとツツ！今朝、いつものように高校へ向かう途中で、この美人が突然声をかけてくれたのだッ！

いわゆる逆ナンと言う奴だッ！

やったぜツツ！

もちろん億泰が、美人の誘いを断るはずもない。だからこうして億泰は、まるで彫像のように、ギココチナイ動作で、美人と二人お茶を

飲んでいる という訳であった。

「億泰君」

スマレはまつげをぱちぱちさせて、億泰を上目づかいに見ていた。

「初めて会った億泰君に、こんなことを頼む事が変なのは、わかってる。でも私を助けて欲しいの。私が今から言うことに、協力してくれない？」

「イ——ダア」

身を乗り出したスマレの胸元から、ぴよこんとリスに似た動物が顔をだした。そのリスに似た生き物は、ぴよんとスマレの頭の上に乗っかり、スマレの髪の毛を引っ張った。

「ちよつと、インピン」

スマレがすこし頬を染めて、イタズラするインピンを捕まえようとした。

しかし、インピンは素早くスマレの手を逃れた。そしてぴよんとスマレの頭から飛び降り、さつと手の届かないテーブルの下に避難した。

その時に、テーブルの上にあったレモンスカッシュをひっくり返すというおまけつきだ。

「もう、お母さんのノツツオに怒ってもらうよッ」

スマレは、ほほを膨らませた。

——その様子もたまらなくカワイイ——

「あら、ごめんなさい……それで、いいかしら、私の頼みを聞いてくれないかな？」

スマレは億泰に向き直り、もう一度まつ毛をぱちぱちとさせた。

億泰には、何だかさっぱり事情が飲み込めていなかった。

だが、美人の頼みを断るわけがなかった。

もし兄貴だつて、こんな人に頼まれごとをされたら、二つ返事でOKするはずだ。

「もちろんですよ。スマレさん。何すんのか知らないけれど、なんでも任せてくださいよ〜」

「うれしい！ありがとう」

スミレがぱあつと笑った。

「それじゃあ、私たちは仲間ね。さっそく作戦会議をしないと……そうね、ここではチョット話しづらいから、ちよつと場所を変えましょう？」

「場所を変えるって、いったいどこに行くんですかあ」

億泰は、思いつきりデレた声で尋ねた。

「いい場所があるのよ……ああ、ミキタカゾ君も来た。丁度よかつたわ、これで三人がそろつた」

「……えっ……」

そこにやって来たのは、自称宇宙人の支倉未起隆だった。

「ああ、億泰サン」

未起隆は、いつものようにのほほんと挨拶をした。

「もう、スミレ先輩と会えたんですね。良かった」

「ナヌ……未起隆……オメくいったいどういう事だよ」

億泰は、嫌な予感を覚えつつ、尋ねた。

「スミレ先輩は、私のいた前の学校に通ってるんです」

なぜか未起隆が、ひそひそ声で答えた。

「先輩は『私が宇宙人だ』ってことを知っているので、今回の作戦を始めるにあたって、一番初めに私に声をかけてくれたってわけです」

「……そりゃ……どういふ事だ？大体、『作戦』って、なんだあそりゃ？」

億泰は、ゴクリと息をのみ 緊張して 未起隆の返答を待った。

！
！
！
！
！
！
！
！
！
！

未起隆は、説明を始めた。

「作戦とは、……スミレ先輩の『大事な何か』——すみません、僕からその、『大事な何か』を話すことはできません——を取り返すための、作戦です。けれど、その作戦を実施するのは、大変な危険が予想されています。だから、僕は『ボディガードが必要』だと、……億泰さんが必要だと、先輩に話しました」

「な……なっぬうっ！」

億泰は、ガツクリと頭をたれた。

つまり、自分はただの『ボディガード役』だった、という訳だ。逆ナンされたと思っていたのは まぼろし だったってワケだ……
「とても危険な、作戦です。たぶん僕とスマレ先輩の二人では、無理です。だから、凄腕のスタンド使いである億泰さんに、『ボディガード役』となって欲しいんです」

未起隆が、生真面目に言った。

「よろしくね。億泰君」

スマレは、につこりと笑った。

「ハハハ……よろしくたのんマス」

キヤア……ペットのリス ——スマレにインピンと呼ばれていた
—— が、まるで慰めるようにやさしく鳴き、億泰の頬をなめた。

1999年11月4日 「M県K市山中 T町付近」：

ピユイイイ——ッ

どこか見えないところで、これまで聞いたことがないような鳴き方で、鳥が鳴いていた。

億泰とスマレが出会った翌日、三人は、杜王町から遠く離れた山奥にきていた。

早朝に家を出たのだが、電車とバス、タクシーを延々と乗り継いで来たため、時刻はすでに1時を回っていた。

スマレの言う『作戦』を実行するために、三人は、『作戦』の舞台となるこの地に、のこのことやってきたのだ。

億泰と未起隆は、重い荷物を背負って、ヒーヒーと言いながら山道を進んでいた。

その隣で歩くスマレは、軽装であった。肩にかけた細長い渋茶の袋と、ちよつとした小物入れ以外は何も持っていない。

スマレが持ち込んだ荷物は、億泰と未起隆の優に二倍はあった。だが、それはすべてチャツカリと男たちに運ばせていたのだ。

山道を歩きながら、三人は、さわやかに初秋の山を楽しんでいた

……その馬鹿重い荷物を運ぶこと、その重さを無視することが出来れば、目にするものすべてが美しいものだったのだ。

「しかし、さすがに木が多いっすねー」

重い荷物を持ってはいても、まだ余裕が残っているのか、億泰は感心したように周囲を見ながら歩いている。

「どこを見ても木しか見えねえ」

「億泰さん……それ 当たり前すぎですよ」

「俺は都内で育ったからな。あまり、こういう山奥に来たことないんだよね」

「そうですね、（地球人の感覚では）これほど美しい景色を見ながら山をあるく事は、格別なんでしょうね」

二人の様子を見て「フフフ」とスマイレが笑った。

「この探索、楽しくなりそうね」

「そりゃ〜あ、スマイレ先輩は、身軽だから楽しいでしょうよ」

「何ッ?!何か言った?まさか、か弱い女の子に重い荷物を持たせて、男のアンタが楽しそうなんて思っていないわよね?」

スマイレは鼻を鳴らした。

「いやいや、何でもないっすよオ〜」

億泰は、胸をはった。

「こんな荷物ぐらいッ、この億泰にまつかせなさあ〜〜イ」

「イヤ……キツイです。僕は億泰さんほど力がないんですよ」

言葉通り、未起隆は疲れ切っているようだった。いつもはポーカーフェイスの 未起隆が、額の汗をぬぐって気持ち悪そうにしゃがみ込んでいる。

「いつも宇宙船に乗って行動しているからでしょうか。……僕はもつと鍛えなくてはだめですね」

「じゃあ、頑張つて荷物を運べば、ちよつとは筋トレになるかもね」

スマイレは笑った。

だがさすがにチョッピリ罪悪感を感じたのか、スマイレはそそくさと小さなナツプザックを未起隆の荷物から取り出し、自分で背負った。

しかし、ピクニツク気分も、何時間も森をさまよっていれば薄れる

というものだ。

三人とも半日以上も藪の中をさまよっているうちに、いつしかお互い疲れ切って、ほとんど口をきくこともなくなっていた。よく考えれば家を出たのが朝5時半、今は昼の1時、都合8時間以上も動きっぱなしなのだ。

疲れ切った一行は、森の中を流れる美しい溪流を見つけ、これ幸いと昼休みを取ることにした。溪流は、手のひら一つ分程度の幅しかなかった。

だが、川の流れはとても透き通っており、冷たく、水量豊かで、ザザザツ——と微かな音を立てて森の中を流れていた。

「イイーダーッ！」

インピンが、億泰のしよっているリュックから飛び出た。そして、木に登ったり、草葉の陰に隠れたり、元気に遊び始めた。

インピンはなぜか億泰が気に入ったらしい。道中たまにスマレの髪を引っ張ったりして悪戯をする以外は、ずっと億泰のリュックの上にチョココンと乗っていた。

未起隆のほうは、『あああ——重かった』と、背負っていた荷物を勢いよくどさっとおろし、『もっと丁寧に扱いなさい』とスマレに怒られていた。

「まあいいわ。ミキタカゾ、双眼鏡になってよ。この辺りの様子を調べたいのよ」

スマレが頼むと、人のいい未起隆は快くうなずき、双眼鏡に『変身』した。

『変身能力』……それが、彼の持つ不思議な異能——スタンドなのかも定かではない——アース・ウィンド・アンド・ファイヤと名づけられた、『能力』であった。

「なあ……スマレ先輩よお?! 一体ここになにがあるって言うんすか?」

億泰も、自分が運んできた大きなリュックを降ろし、尋ねた。朝からへとへとになるまで働かされ、ようやく、一体スマレの言う『作戦』とは何か、疑問がわいてきたのだ。

「…………探しているのは、洞窟よ」

比較的疲労の少ないスマレは、特に休むこともなく、その小さな溪流の傍の岩上に立っていた。

『未起隆が変身した双眼鏡』を熱心にのぞき、手にしたコンパスや地図と見比べて進路を確認している。

「地下水がたまっている鍾乳洞を探しているの」

「何すか、そこにお宝でも埋まってるんすか!？」

「……まあね。そんなとこよオ——」

「ナヌツ、すごい話じゃあないですか!どんな宝がそこにあるんすか?」

「地球人の宝、僕も興味があります」

双眼鏡から声が聞こえた。未起隆の声だ。未起隆はアース・ウインド・アンド・ファイヤを解除し、元?のイヤ、普段?の姿にもどった。

「でも……それは、前に聞いたアレの事ですよね?……先輩の『大切なモノ』」

「……そうよミキタカゾ……億泰くん、話せば長い話なのよ」

少し考えさせてほしい。スマレは億泰に頼んだ。

「そりゃ待ちますがよお……」

コイツは知ってるんだろ? 億泰は、少し納得いかない風で未起隆をチラツと見た。

「それより、ここはきれいなところですね……そろそろお昼にしませんか」

未起隆の提案に、二人も一も二もなく賛成した。

意外なほど手際よく、スマレがかまどを作り、木を集め、火をおこした。

そこに、さらに意外なことに億泰が湯を沸かしてコーヒーを作り、出来合いの弁当の中身をアルミホイルに包んで温めた。

言いだしつぺの未起隆は、何もできないので、水汲み係だ。

準備が終わると、三人はたき火の前に腰を下ろした。そして満足しながら温めた料理を食べ、アツアツのコーヒーを飲みはじめた。

「それにしても、億泰君は料理がうまいのね?」

スマイレが感心して、億泰の作ってきたローストビーフサンドイッチとタンドリーチキンをかじった。

「私なんて、じつは何にも作れないのよ」

「へへへえ、俺は自炊してるんで」

億泰は、自慢げに鼻をうごめかした。

「もともとは、アニキが料理好きだったんす。俺は、アニキから料理を教わったんすよおう」

「へえ、立派なお兄さんののね」

スマイレが無邪気に言うのと、億泰が少しさびしそうな顔になった。

事情を知っている未起隆は、ただ黙って億泰を見ていた。

億泰の兄、虹村形兆は鬮目目と言っても悪人であった。

虹村形兆は、『弓と矢』を持っていた。

その矢に射られた者は、才能があればスタンド使いとして生き延び、才能がなければかすり傷でも死に至ってしまう、恐ろしい『弓と矢』であった。

虹村形兆は、その『弓と矢』で無差別に人々をおそい、杜王町に大量のスタンド使いを生み出した男であった。

その所業は、不死身の怪物となってしまった自分の父を『殺す』能力を持つスタンド使いを『作り出す』ためであった。だが、その結果として、数十〜数百人もの『殺人』を犯したのだ。

スタンド能力の才能を持つ人間の数は、非常に限られている。ほとんどの人物は、矢が刺されてもスタンドを出現させることが出来ず、苦しみながら死んでいったはずだ。

だが彼は、ほとんどの人間が死ぬことを、理解したうえで犯行に及んでいた。彼は、役に立たないと判断したら、実の弟にさえ容赦なく攻撃が出来るような、冷酷な男だったのだ。

しかし、最後は自分を顧みずに弟ををかばい、弟を助け、弟の身代わりとなって死んだ。

虹村形兆とは、そんな男でもあった。

ふっ……と、億泰は紅葉に彩られた、遠くの山を眺めた。

「料理のとき、俺は、いつも感覚で作っちゃうんです。だけどアニキ

は、時間や分量を几帳面に図ってましたね。いつもアニキにやあ、俺は適当すぎるって怒られていましたよ……アニキは「料理というものは、芸術であり科学だツ！材料、時間、分量、盛りつけ、食べ方……すべてがそろって、最高の物が出来る」って口癖のように言っていました」

「仲のいいご兄弟『だった』のね……」

その口調から、『何か』に気が付いたスマレの口調が、優しくなった。「どうなんすかね、……いつも口うるさく怒ってた。……キレルとオツカナかった。でも、おれにとつちやあサイコーのアニキでしたよ……」

ヨシヨシ……スマレは、そつと手のひらを億泰の背中の上で往復させた。

「……私は孤児園で育つたの……だから血のつながった兄弟がいるって、どんなに素敵なお兄さんみたいな想っていた人と、ずっと離れ離れなのよ……だからあなたの気持ちがわかる……とまでは言えないけど、せめて……今は、隣にいてあげるわ」

スマレが優しく言った。

「それから……私も、まるでお兄さんみたいに想っていた人と、ずっと離れ離れなのよ……だからあなたの気持ちがわかる……とまでは言えないけど、せめて……今は、隣にいてあげるわ」

「!?なツ……ななツ……あつ、おお……こ、これ、食ってみてください……こ、こ、このタンドリーチキンは、ア……アニキの得意料理だったんすよ。試してみてください。う、う、うまいでしょ?」

コツはレモンを聞かせる事すよ、と 億泰が鼻をすすりながら、あわてた様に言った。

「うん、おいし」

スマレは、勧められた料理を口にし、それから、優しく億泰の肩を叩いた。

「そろそろ……行こうか」

「……そつすね」

億泰は、大きな音を立てて鼻をかみ、目をこすり、自分の顔を平手でひっぱたいて立ち上がった。

と……インピンが、溪流の反対側の茂みから顔をだした。

インピンは、ギャーつと叫び声をあげ、一番近くにいた億泰のところへ一目散に走ってきた。

そのまま億泰の肩まで、駆け上がってきた。その小さな体が、恐怖でフルフルと震えている。

「なんだあ〜どうしたあ?」

インピンをなだめようとした億泰は、『あるもの』に気が付き、突然真顔になった。

億泰は、自分のスタンド：ザ・ハンドを出現させ、インピンが出てきた茂みを睨みつけた。

コ” コ” コ” コ” コ” コ” コ” コ” コ” コ”

「インピン……億泰さん、どうしたんですか?」

未起隆が尋ねた。

「近くから俺たちを見ている奴がいる。その木の陰で、こそこそ隠れたのがチラツと見えたぜえ……スタンドもなあ〜」

億泰は一步前に出て、未起隆とスマイレを自分の背後にかばった。

虹村億泰 その2

「なんですって……こんな山奥に……」

スマレが、顔をこわばらせた。

「おお……、隠れてこそこそ覗き見るなんざ、ろくな奴じやあないに決まっているぜえ。だから、そいつの相手は俺がてえ？ねえ？にしてやらねーとなあ。未起隆、お前はスマレ先輩を守るんだぜ〜」

「わかりました」

未起隆はうなずき、再び彼の持つ能力、アース・ウインド・アンド・ファイヤーの力でロープに変身した。

未起隆の変身したロープは、暴れるスマレを捕まえ、木の上に引っ張りあげた。

インピンもちやつかり億泰の肩から飛び出して、スマレの肩に飛び移っていた。

「ちよつと、ミキタカゾツ、億泰君、突然どういう事よツ！」

スマレの抗議の声が頭上から響いた。

「未起隆、わかってんな？スマレ先輩をそつから出すんじやねえぞ」

億泰はそう言い捨てると、バシヤバシヤと溪流を踏み越えていった。

「おう……、出て来いよ。出てくる気が無いんなら、こつちから行くぜツ」

ザ・ハンドの右手で、何も無い空間をえぐるツ！

バシユツ！

次の瞬間ツ、億泰の目の前に、唸り声を上げている3匹の犬たちが『現れた』。

犬たちは、ザ・ハンドの『空間を削り取る』能力によって、潜んでいた草むらから引きりだされたのだ。

その犬 —— 二匹の黒犬と一匹の白犬 —— は、しばらくきよとんとしていたものの、すぐに我に返り、億泰めがけおそい掛かって来た。

「ガールルルルルツ」

「バウッ！」

だが、強力なスタンド使いの億泰に取って、犬など相手にならない。億泰は素早くザ・ハンドを操り、おそい掛かってきた犬たちを『少しだけ』手加減して、蹴り飛ばした。

スタンドによる目に見えない衝撃を受け、犬たちが弾き飛ばされる。

だが、犬達は怯む事もなく、すぐに立ち上がり、再びおそってきたツ！

「よせよ、オラあこう見えても犬好きなんだぜえ〜」

億泰は気の進まない様子で、犬たちを再び蹴散らしていく。

何度か効果のない襲撃を繰り返すと、犬達は攻撃しても無駄なことを悟った。

そして犬達は、攻撃する代わりに、億泰を遠巻きに囲んで、低く唸り始めた。

「オイ、もういいだろ。犬っころの陰に隠れてないで、出てこいよ、てめえ」

億泰は、犬達が隠れていた茂みに向かって、どなった。

「隠れんぼがしたいんなら、俺のザ・ハンドが引きずり出してやるぜえ」

「わかったわよ。待ちなさい、自分から出ていくわよ」

せっかちねエ と茂みから姿を現したのは、ヒスパニック系の中年の美女であった。

「君が虹村億泰君ね、レポート通り、中々強力なスタンドを持っているのね。……それに、けっこう鋭いじゃあない。私の存在に気が付くなんて」

女は、まっすぐ億泰に向かって歩いて来た。

「私の名前はネリビル。初めまして」

⚡ ⚡ ⚡ ⚡ ⚡ ⚡ ⚡ ⚡ ⚡ ⚡

「おう、こんな山奥で俺たちに何のようだ？」

「ごめんねえ、悪いけどアナタには用が無いの。……私の任務は、その女の子を連れて帰る事よ。邪魔しなければ、何もしないわ」

ネリビルは、スマレと未起隆が隠れている木を見上げた。

「そう、あなたのことよ。スマレちゃん」

「あなた…もしかして？」

木の上にいるスマレが、おびえた声で言った。

「そうよ、私はあの組織の人間よ」

ネリビルは、組織の名前は口にするな…とスマレに警告した。

「お友達を死なせたくは、ないでしょう？」

「おいおい、何言ってるんだよ」

億泰がザ・ハンドの右手を構えた。

「邪魔すると言われて、はいそうですかって、素直に言う事を聞くと
思ってるのかよ、このダボが」

「やっぱり…そうよね」

ネリビルもスタンドを出現させた。下半身が猫を思わせる四足の
獣に、ヒト型の上半身が乗った大型の犬程度の大きさのスタンド
だ。

「これが私のスタンド、カントリーグラマーよ。能力は動物の支配♡
……」

ウフツと、ネリビルが投げキッスをした。

「そりゃあ強そうな能力だなあ」

億泰はせせら笑った。

「おりゃあ、子どものころ、トムとジェリーって話が好きでよう。町を
歩いている猫やなんかと話が出来たらいいなあって、ずうつと思っ
てたぜえ。お前、うらやましいスタンドをもってるなあ〜」

「そおよねっ。やっぱリアタも、そう思うでしょう?」

キヤーっと、ネリビルが嬉しそうな叫び声をあげた。その直後に、
邪魔するなら許さないわよ と、冷酷さを剥き出しに、億泰を睨み
付けた。

ト ト ト ト ト ト ト ト ト ト

「それはこっちのセリフだぜえ」

億泰は、ザ・ハンドを再び出現させた。

「犬つこころを引つ込めろ。大人しく言う事を聞きゃあ、削らないでや

「Gryuuuuuuuuuu!」

まるで何かにかみつくように、犬が口を大きく開けた。口の中で牙が伸びていくのが、見えた。

「Barurururu!」

犬たちの額、首、四肢の毛皮がまるで風船のように膨れ、弾けた。その下から、硬質の甲羅のようなものが現れるッ!

「……嘘ッ、本当にこの子達は、『バオー』なの……」

目の前で起こっていることをようやく受け入れ、スマレが喘いだ。

「億泰君、逃げてッ!!」

「なんじゃあ、こいつら?……しかしやることにや変わりねーぜ」

ガオンッ

億泰はザ・ハンドで空間を削り、3匹の近くに瞬間移動した。

「かわいそうだが、今度はこつちから行くぜえ〜」

「ダメッ!」

スマレが叫んだ。

「億泰君、絶対にその犬達に触れてはだめよ!体が溶かされるわッ」

「喰らえ!」

しかし、スマレの警告は、億泰に届かない。

億泰のザ・ハンドが、犬達を削ろうと右手を振り上げるッ!

ビュウンッ!

「!?ウオッ!」

ザ・ハンドによる攻撃を繰り出そうという直前、その3匹が、同時におそってきた。

かろうじてザ・ハンドで身を守ったものの、億泰は先ほどとはまるで次元の違う、そのスピードに冷や汗をかいた。

手加減はできないッ!

ガオンッ!

再びおそってきた一頭——白犬だ——の腹を、ザ・ハンドの右腕が削り取った。

Gyan!!

白犬が悲鳴を上げた。

「くそ、やつちまったぜ……」

億泰が嘆いた。

ところが……

腹を削り取られた白犬が、平然と立ち上がった。

ブチユツ、ビユ、ビチチ……チ……イ

見ると、ザ・ハンドが『削った』白犬の腹から、大量のピンク色の触手が飛び出していた。

触手はうねり、のたうち、白犬の腹の傷をふさいでいく。

白犬の傷が、グングン再生していく……

「なんだあ？こりゃ〜」

この犬もスタンド使いかよ、と億泰は毒づいた。

「気を付けて……この犬はもう『バオー』っていう……恐ろしい生物兵器に改造されているの……また来るわよッ！」

木の上からスマレが叫んだ。

「ヴァルルル。ヴァルツ！」

億泰に向かって、バオー・ドッグが一齐に飛びかかってきた。

バシャンツ！

「うおっ！しまった……」

億泰は飛び掛かってくるバオー・ドッグ達を迎え撃とうとして、……足を滑らせ、溪流に尻もちをついたッ！

「うおおおおおお！」

動けない億泰をかばって、ザ・ハンドが三匹のバオーの前に立ちふさがるッ！

一匹目ツ！近づいてくる前に蹴り飛ばすッ

二匹目ツ！右手で削り取るッ

三匹目ツ！間に合わない！

「ぐおおおおおおおおおッ」

「ギヤアルルルッ」

「うおおおッ、あつぶねエエエ〜ッ」

ギリギリのところ、ザ・ハンドは、最後の黒犬の突進をまともに受け止めることに成功していた。

「ギャルルルルウウウウー！」

スプレーをまともに喰らったバオー達が、悲鳴を上げて跳ね回る。

「今のうちです」

未起隆は億泰を捕まえると、再びロープに変身して、グイツと木の上に引つ張り上げた。

「こらっ、落ち着きなさい」

ネリビルが、鞭を振り上げた。

「お前たちツー……カントリー・グラマーが優しく命令するだけじゃ、だめなの？ だったら、この鞭を食らわせてあげるわよ」

ところが、すっかり混乱した一匹が、ネリビルの腕に噛みつき、……手首を引きちぎった。

「◆\$#@!!! いあああああああッ!!!」

ネリビルが絶叫を上げて、倒れた。

すると、もう一匹もクルリと振り向き、ネリビルに唸り声を上げた。

「私を守りなさいッ！」

ネリビルの悲鳴に、残った一匹は反応した。

その一匹が、他の2匹におそい掛かった。

三頭のバオー・ドッグは、互いに戦い始めた。

「いってえ、どういう事だ」

億泰が、首をか上げた。

「同士討ちよ」

スミレが言った。

「ミキタカゾ……あれは……」

「そうです。スミレ先輩が持っていた熊除けのスプレーです。犬は感覚が鋭いから、きつと効果があると思っていましたよ」

「おおお……、未起隆、なんだかわからねえが、ありがとうよ。助かったぜエ」

億泰が礼を言った。

「イヤアアア!!」

と、背後から、ネリビルの悲鳴が再び響いた。

「おい、見ろよ……いや、スマレ先輩は目をつぶってくれ」

「うっわぁ……クソババアの腕が溶かされている………あれは……
あれは、バオーの能力の一つよ」

スマレは億泰の警告を無視し、ネリビルを見た。目にした凄惨な光景に吐き気を覚え、口を押えた。

虹村億泰 その3

「YIYAAAAAAXTU！」

ネリビルが言葉にならない絶叫を上げ、頭をふりまわし、身をねじった。

だが、まったく体を動かせていなかった。

バオー・ドッグは、後足代わりの触手をネリビルに巻き付け、動けないように押さえつけていた。

そのうえで、自分の前足で、ネリビルの残った左腕を押さえつけている。

そのネリビルの左腕が、無残にもグズグズに溶けかかっている。

しかも体の溶解は左腕から、徐々に胴体に向かって進捗していく

……

ジユワワワアアツ………

「いいッ、痛アアアイイイイツツ！ ワタシイのツ！」

ネリビルがすすり泣く。

そのとき、ネリビルを溶かそうとしているバオー・ドッグの上に、唯一五体満足な別のバオー・ドッグ——もう一匹の黒毛の大型犬だ——

——が伸し掛かり、その頭を齧りとってしまった。

頭を齧りとられたバオーは、ゴロリと倒れたが、それでもまだビクビクと体を痙攣させていた。

「ギギイイイイイ——ツ」

間一髪助かったネリビルは、判別不能な金切り声を上げて跳ね起きた。

そして、溪流の水をはね散らかして、川の上流へと走り去って行った。

そのあとを、傷ついたバオー・ドッグ達がゆっくり追いかけていく。

「うげえええええええ」

億泰がブルツと体を震わせた。

「敵とはいえ、嫌なものを見ちまったぜえ〜」

「バオー……まさか……」

スミレも、真つ青な顔で身を震わせた。

「とにかく、今のうちに逃げましょう」

未起隆は靴に変身して億泰とスミレの足をくるんだ。

すると、億泰とスミレの足は勝手に動きだした。

靴を通して未起隆の力が伝えられ、二人の脚力も大幅に向上している。

億泰とスミレは、木の上から大きくジャンプして、その場を逃げ出した。



一行は短い休憩を何度か入れながら、もう大丈夫と思えるまで、道なき山森の中を必死に進んだ。

ようやく人心地が付き、足を止めたのは、三人が戦った溪流から1峰は越えた、山の山頂近くだった。

崩落でもあったのか、この上は岩肌が垂直に切り立っている。未起隆の力を借りても、これ以上は登れそうもなかった。

「ミキタカゾ、ありがとう」

岩肌にもたれて息を整えながら、スミレが言った。

「億泰は怪我しなかった?」

「余裕つす!」

億泰は胸をはった。

「この億泰に任せなさい。あんな奴ら、粉々に削り取ってやりませぬ」

「削り取るって……ねえ、それがさつきあんたの隣で戦っていた怪人の能力なの?そもそもあの怪人は誰?」

スミレが興味深げに尋ねた。

「……億泰君とあの怪人はどんな関係な訳?」

「怪人?もしかして、このザ・ハンドのことかあ」

億泰が自分のスタンド:ザ・ハンドを出現させてみせると、スミレは そう、それよ と、うなずいた。

「んんん いざ説明しろって言われると、なかなか難しいなあ」
億泰が、首をひねった。

バフツ!

スマイレと億泰、二人の靴が膨らみ、はじけ、未起隆が姿を現した。「スマイレ先輩……その怪人は……怪人であって怪人ではありません。あれは億泰さんの持っている超能力です。……僕達は、それを『スタンド』って呼んでいます」

億泰にかわって、未起隆が説明をはじめた。

「スタンドは二つとして同じものではなくて、それぞれ異なる超能力と、違う名前が付いています。ザ・ハンド……それが、億泰さんのスタンドの名前です」

「……ミキタカゾ、あんたも億泰の……スタンド?が見えてるの?」

「ええ」

「あんたのその不思議な『能力』も、スタンドなの?」

「……どうでしょう、私の星では特に特別な『能力』じゃあないですからね」

「……イヤ、ところで、スマイレ先輩、あんたこそ、俺のスタンドが見えているのかよぉ〜」

「見えるわよ」

「じゃあ、あんたももってんだな、スタンドを」

「……そういう能力は私にはないと思うわ」

私は見るだけよ……とスマイレはつぶやいた。

「今まで……そんなスタンドっていうモノは見たことないわ。……私の力はスタンドじゃあない と思うわ」

「いやいや、『スタンドはスタンド使いじゃあないと見えない』んすよ。先輩も、やつぱりなんかの力を持つてるんすね!。俺たちと同じだ」億泰が喜んだ。

『同じじゃあないと思うわ』と、言うスマイレの声は、もちろん億泰の耳には届いていない。

「ところでスマイレ先輩」

未起隆が口を開いた。

「あのおばさんが話していた『組織』とは何ですか」

「おお、俺も興味あるぜえ〜あのおバサン、スマイレ先輩にいかにもワ

ケありつてかんじだったしよお。あの犬つころもおつかしくせ。普通、あんなに体を削られたら、もう死んじまうだろ」億泰も同調した。

組織ってなんだ？

バオーってなんだ？

億泰と未起隆は腕組みをして、スミレの様子をじっと見ている。

コ” コ” コ” コ” コ” コ” コ” コ” コ” コ”

「ゴメン……言えないわ」

スミレは顔をこわばらせ、首をふった。言えば、二人を完全に巻き込んでしまう。

確かに二人を荷物運びとして、育朗の探索に調子よく利用している自覚はある。だが、それとこれとは次元の違う話だ。二人を、これ以上巻き込むわけにはいかない。

「僕達があのおばさんに襲われたのは、その組織が関係してるんですよ。だから僕達も、敵の事を知った方が良いと思うんです」

「駄目よ。……私達のせいで、アナタ達をこれ以上危険な目に合わせわけには行かないわ……だから明日の朝になったら、アナタ達はもう帰って。……心配ないわ、私も、自分の身ぐらい守れるのよ」

スミレはそう言うと、背中に担いだ長い袋から、猟銃を取り出してみせた。

「私の父はマタギなの。私も銃の撃ち方は知ってるってわけ」

「そりゃあすげえな……でもよおくくツ、あのバオーって呼ばれてた犬つころ達にや、銃なんてきかなそうだったぜ。ありゃあ相当な強敵だよ」

「それに今更逃げ出したって、その……『組織』が僕達を放っておいてくれませんよ。まあ、僕はいざとなれば宇宙船に乗って帰れるからいいんです。……ですが、お二人はそうはいかないでしょう？。それに、スミレ先輩をほっとけません」

「億泰、ミキタカゾ……有難う」

スミレは目蓋を強く擦り、ニツコリと笑った。

「でも、もう少し待って……考えさせてよ」

億泰と未起隆は顔を見合わせ、仕方がない　と言う風にうなづいた。

「わかりました。話せない事情があるのでしたら、今は『組織』のことは言わなくてもいいです。でも、僕たちが、スマレ先輩を置いて先に帰ることもしません」

未起隆の言葉に、スマレはうなづき、ただ『ありがとう』と言って、微笑んだ。

「……おお、雨が降って来たみたいだな。よっ……よし、この俺がシエルターを作つてやろう」

スマレの笑顔を見て、なんだか落ち着かない気分になった億泰は、慌ててスマレから背を向けた。

ソクサとザ・ハンドを出現させる。そして億泰は、切り立った崖をスタンドで『削り』始めた。

「俺が、ここに寝床を削りだしてやるぜえ」

「……スゴイわね……あつという間にトンネルができていくわ」

スマレが目を丸くした。

「へっへええ……後30分もかからないうちに、彫り終わるぜえく俺のザ・ハンドは便利だろ？」

億泰は真面目に洞窟作りに取り組み、ザ・ハンドの空間をえぐり取る能力で、あつという間に三人が快適に一晚を過ごせそうな洞窟を作り上げた。よく見ると、それぞれの個室、空調用の窓までできている立派な洞窟だ。

スマレと未起隆はすっかり感心して、億泰の掘った洞窟を見て回った。

「億泰さんの能力、サバイバル向きでとても便利ですね」

未起隆が大真面目に言った。

「僕もお役にたたねば……そうだ、皆さんの毛布に変身しましょう。僕が皆さんを暖かく包みますよ」

「そうね、それは確かに暖かそうだけど……」

スマレが少し引きつった笑顔で言った。

「でも……私、寝袋を持ってきているから、遠慮しておくわ」

◆◆
その日の夜。

「へえええええ、きつれくな星だなあ」

億泰はすっかり感心して、空を見上げていた。

そこには、巨大な天の川が広がっていたのだ。

「杜王町では、こんなにきれいな星みられないからなく」

「私の子供の時に住んでいた所を思い出すわ」

スマレが言った。

「人氣がないから外から光が入らないし、星がよく見えるわね……
きれいなね」

「スマレ先輩はどこ出身なんですか」

「私は……すつごい田舎に住んでたわ。人なんて、私とおじいちゃん、おばあちゃん以外は全然いないのよ。人より、熊や狸の方が多いんじゃないかしら？でも、ここからそんなに遠くないわね。そう……ここから平泉の方角に20 Km位行った所よ……」

「それは……スゴイところですね」

「そうなのよ。フフフ……懐かしいなあ」

「おばあちゃんとおじいちゃんに、会いたいですか」

「あら……いやね、おじいちゃんとおばあちゃんの家には、毎月会いに帰ってるわよ。いい高校が近くになかったから、しかたなく都会に出てきただけだったしね」

「じゃあ、懐かしくないんすか？」

億泰には、話がよく理解できなかった。

「フフフ……小さいとき、彼とこうやって星を見たなあっておもったのよ」スマレが言った。

「ほんの短い、ほんとに少しの間だけだったけど、二人でいろんなところに行つて、星を見たなあ」

「……そうっすかあ……」

「いやーほんとにきれいですね」未起隆が言った。

「僕も、ちよつと宇宙船に帰りたくまりましたよ……知ってます？宇宙には空氣がないから、本当に星が近くに見えるんですよ」

翌朝、スミレはみんなより早起きして、コーヒーを入れていた。朝早起きしてコーヒーを飲むのは、スミレの習慣であった。

あたりを跳ね回るインピンをあやししながら、スミレはコーヒーを片手に外の景色を見ていた。

すると突然、ポン　とスミレの額から何か、チョウのようなものが飛び出した。

「これは……？」

スミレはびっくりして、コーヒーカップを取り落した。すぐに気を取り直すと、地面に落ちたカップには目もくれず、そのチョウを観察し始めた。

アゲハチョウ大のそのチョウは、黒のような、紫のような、そしてときに白い色に光りながらパタパタと飛んでいた。

不思議なことに、スミレには、次にこの蝶がどこに行くのか、なんとなくわかることに気が付いた。

しばらく蝶を観察し、ついにスミレは、これが自分の能力の形……つまりスタンドだという事がわかった。

チョウは、ひらひらつとスミレの周りを飛び、またスミレの額に止まった。

すると……蝶を伝わり、スミレはビジョン（幻視）を見た。

ビジョンは、スミレに、今自分たちがいる深い森を上空からの俯瞰で見せた。

まるで渡り鳥のように、ビジョンはその森を海岸に向って飛んでいく。

すり鉢状の谷の奥に、洞窟が見える。

その洞窟に入り、奥に突き進んでいくと……地下水脈があった。

その先に　懐かしい　『彼』が静かに眠っているのを、確かに『感じた』のだ。

……ビジョンが消え、視界が元に戻った。

スミレは割れたコーヒカップの上で、岩山の上、『昨晚億泰が削った

洞窟』の入り口に立っていた。

「見えたわ！東よッ！ここから東に行った所に、育朗がいるのが見えたわ」

スマレが、晴れやかな声で歓声を上げた。

「それは良かった。スマレ先輩、おめでとうございます」

未起隆の姿は見えない。だが、まるでスマレの声をじつと聴いていたかのように、すかさず未起隆の祝福の言葉が返ってきた。

ブルンと、億泰が削り出したシエルターを塞いでいたテント地の隔壁と、寝袋——中にはまだ億泰が眠っている——が、大きく揺れた。そして、その二つの形が崩れ、溶けあわさり、未起隆が姿を現した。

突然寝袋から放り出された億泰が、ぶつぶつと文句をこぼした。

「痛えし寒い……未起隆よオオッ。お前、変身を解く前に起こしてくれよおッ」

すみません。恐縮する未起隆に、億泰は、なおもブツブツと文句をこぼしつづけた。

そんな億泰を、スマレがたしなめた。

「億泰、男が細かい事をグズグズ気にしなさんな」

「いや、確かにそうなんだけだよおッ」

寒いんだよお、と億泰がこぼした。

「見えたのよ、目指す 人がッ！」

スマレが億泰の腰を叩いた。

「こうしてはいられないわよ、さっさと荷物をたたんで、出発しましょうッ」

「了解です」

未起隆が、てきぱきとあたりの荷物をまとめ始めた。

「さあ、億泰さん、さっさと行きましょう」

「ちよっ……ちよつと待てよ、俺にも準備してもんが少しはあるんだよ」

「ほらほら、男でしょ。てきぱき行動できないと女の子にもてないわよ」スマレがズケズケと言った。

「……余計なお世話つすよ……」

と、外にいるものに気が付いたスマレの顔色が、不意に嫌悪にゆがんだ。

「ちよつと、いやああああああ！あれを見てよ、気持ち悪い」

スマレが指さした先には、まるで、雲のような、真っ黒に蠢く塊が地面を覆い、あちこち動いていた。

よく見ると、それはネズミだ……ネズミの大群が、森の中を所狭しと走っていたのであった。

「気持ち悪うッ。なんなのよ、あんなにいっぱい」

「……あの、ネリビルってオバサンの能力……確か、『動物を操ること』でしたよね」

未起隆が言った。

「あの量のネズミから隠れて行動するのは、まず無理でしょうね……」

川尻早人 その1

1999年11月3日：「M県K市、K山（杜王町から150Kmほど北）」

ちょうど億泰がカフェ・ドウ・マゴでスマレと話をしていた頃、川尻早人は、とある森のキャンプ地の周りを探検していた。

杜王町に生えている木々は、まだ紅葉真っ盛りと言うわけではない。だが杜王町からだいたい北に上ったこの辺りでは、木々はすっかり秋深くなっていた。気温も下がってきており、少し肌寒いほどだ。

早人がいる森は、人里から遠い場所にあった。

この辺りにはめったに人も来ない。

だから森が荒らされていないのだろう。早人が周囲を少し探すと、食べられる木の実や果物がなっているのを、簡単に見つけることが出来た。

「私の育ったアメリカ南西部の森とは、違うわね……でも、とっても豊かで美しい森ね」

早人の後ろを歩いていた、SW財団職員のシンディ・レノックスが言った。シンディは美しい金髪をポニーテールにまとめた、容姿端麗の調査員だった。

シンディは、英語がわからず首をかしげる早人を見てにつこり笑った。そして、今度は日本語で「キレイナ モリ ネ」とゆっくり言い直した。

「この時期は、食べられる果物や木の実がたくさんあるんだよ」

早人は笑った。

「もう少し取ったら、仗助兄ちゃんのところに戻ろうよ」

早人は、東方仗助の誘いをうけて、杜王町から北側にある森の中でキャンプをしていた。

ひそかに懂れている東方仗助に声をかけられたとき、早人はとても嬉しかった。だが一方、母親を1人置いてキャンプに参加することにもどうしても気が乗らなかった。

その母親が、どうしてかキャンプの話聞きつけ、『必ず行くべき

だ』と早人の背中を押してくれたのだ。

「あつアケビだ」

早人は、木のツルにたくさんのアケビがなっているのを見つけ、顔をほころばせた。

しかしアケビの実は、早人の手が届かない高さになっていた。

早人が困っていると、シンデイがにこつと笑って木に登り、アケビを幾つか取ってくれた。

シンデイがとってくれたアケビを一つかじり、早人は、このアケビが大好物だった父親のことを思い出した。

(そういえば、三人で森にハイキングに行ったことがあったな。その時は、父さんがアケビを見つけて大喜びしたっけ)

早人はクスリと笑った。

(それで、危ないからやめなさいっ……とめる母さんを振り切つて、父さんは木に登ったんだっけ。結局、木から落つこちちゃつて……でもアケビのツルを掴んでたからお尻を打っただけですんだんだ)

——決して理想の家庭ではなかった。だがそれは、父と、母と笑い合った数少ない大事な思い出——

たまらなく、また父親に会いたい。

でも、もう会えない。

早人はそつと涙をぬぐい、先に行くシンデイを追いかけた。

チチチチ……

森深い山奥で鳥が鳴いていた。鳥は、めつたに人の来ないこの地に
いる人物を警戒して、鳴いているのだろう。

その森のただ中にある、溪谷に埋もれた大岩の上に、東方仗助は
たった1人、立っていた。

今年、杜王町から150 km程北に上った地に、隕石が落ちた。

幸い人家のない森の中であつたため、死傷者こそなかった。

だが、隕石が落ちて以来、人知れず、その地で色々と不思議な現象
が起こっていたのだ。

仗助は、その現象の調査を、《生物学上の》父親・シヨセフ・シヨスターから依頼されたのであった。

調査に加わってくれば、謝礼も出るという。

金欠でこまっていた仗助にとつては、謝礼の話は切実であった。渡りに船とばかりに、そしてちよつとした親孝行のつもりで、仗助は、SW財団主催の隕石調査に参加する事にしたのであった。

「こいつは、グレートだぜ」

仗助は、大岩の上にしゃがみ込んだ。そして、ナイフを取り出して、地面から掘り出した果物を輪切りにした。断面を確認して、ため息をつく。

果物の外観は確かにミカンであった。だが、輪切りにした『中身』は、ミカンとレモンが混ざり合っていたのだ。

ミカンもレモンも、昨晚地面に埋めたときは、至極普通の果物であった。それが、この地面に埋めて一昼夜も放っておくと、一つに融合してしまうのだ。

何度試しても同じことが起こる。しかも仗助のスタンド：クレイジー・ダイヤモンドの『直す』能力を使っても、一旦融合したモノを元々のモノに戻すことは出来なかった。

それは、まさに『奇妙な』現象であった。

「これ……本当に、不思議ね」

背後からピヨコンと現れたアンジェラ・チェンが、仗助の背中に飛びつきながら言った。

「ここにスケボーとサーフボードを埋めたら、スノーボードになったりするのかしら。三輪車とバイクを埋めたら、サンドバギーになったりしてえ」

「懐中電灯とピストルを混ぜたら、光線銃になったりしてなあ」

仗助はへらつと笑って、さりげなくアンジェラを背中から降ろした。

「ちよつとお、仗助え……冷たいじゃあない」

仗助の背中から降ろされたアンジェラは、ぷうつと頬を膨らませた。

「師匠に言いつけちゃうわよ。師匠の息子がどんだけ一番弟子に冷たく当たったか……ある事ないこと、こと交えて細かく説明しちゃうから」

アンジェラは、ジョセフ・ジョースターに言いつける予定の内容をまくし立てはじめた。

機関銃のような勢いだ。

その様子に、仗助はげっそりとした。

「……ジジイが師匠だなんて、お前が勝手に言っているだけだろうがよお?」

「ちよつとお……そんなことないわよーだ。——証拠を見せてあげる」

仗助の反論を聞き、アンジェラが奇妙なりズムで呼吸を始めた。

コオオオオオオオオオ

心なしかアンジェラの体が、ボウツと微かに光っているように見えた。

アンジェラは、仗助の手からミカンとレモンが融合した謎の果実をひったくった。それを大岩の下に、躊躇なくぽいっと放り投げこむ。

「おいっ!」

「大丈夫よ……見てて」

放り投げられた謎の果実は、大岩の下に生える茂みにあたると、なぜかバウンツと不自然に跳ね上がった。

そして果実は、またアンジェラの手に戻った。

アンジェラは、戻ってきた果実をピンと人差し指ではじく。すると、謎の果実はまたしてもスーパーボールのように跳ねた。

しかも、岩にぶつかったわけではない、今度は柔らかい雑草に触れ、またハジキ帰ってきたのだ。

再び跳ね返った謎の果物は、今度は 仗助の手にもどってきた。

不思議なことに、その果実を仗助が受け止めた瞬間ツ、ビリツと電気マッサージを受けたような衝撃が、両手に伝わってきた。

イテツ

驚いた仗助は、謎の果実を取り落とした。

バウンツ、バウン

果実は、不自然なバウンドをしながら大岩の下に落ち、そして地面を転がって川に落ちて、流れて行ってしまった。

「!?おいッ アンジエラ、おめーよおー」

邪魔すんなよ。貴重な試料を落としてしまった仗助が、軽く怒った。

アンジエラはペロツと舌を出した。

「ほーうら、見た?これが師匠譲りの技……仙道よ。仙道は、波紋のエネルギーを使う技術……太陽や生命のエネルギーと同じエネルギーを、体内で増幅させる技術よ。スゴイでしょー? これでわかった? 私は師匠の一番弟子だからねッ」

アンジエラはそう言つて胸をはった。

そして、自らのスタンド、——スケボーの様な外見をもつ——を、出現させた。

「ちよつとスケーター・ボーイで見回りをしてくるわッ。またね、仗助」

アンジエラはひらひらと手を振ると、スタンドのスケボーに乗った。そしてスタンドの力で木を垂直にかけあがり、梢の向こうへと消えて行った。

「ふう……。……相手すんのもメンドクサイ奴つすねえ……。承太郎さんじゃあないが、ヤレヤレっすよー」

仗助は、アンジエラが去っていくのを見て、ホツとため息をついた。

アンジエラ・チエンは、ホンの2週間前に、ぶどうヶ丘大学に台湾から留学生としてやって来た女性だった。

理由は分からない。だが、アンジエラは転入そうそう、仗助に過大な興味を示していた。そして、暇さえあれば高等部にもぐりこんで、仗助をおいまわしていたのだ。

それからというもの、いつも一緒にいる億泰の不機嫌そうな顔、同じクラスの女子の冷たい目にさらされ、仗助は居心地の悪い日々を過ごしていた。

可愛いと言えなくもない年上の女性に、追い回されれば、ちよつとはうれしい気持ちもある。だが、そのアンジェラは、カナリうざいおしゃべりであった。正直、『残念な女性』なのだ……。

仗助は、山岸由花子にストーキングされていた頃の広瀬康一の気持ちだが、少しだけわかったような気がしていた。

彼女が仗助の《生物学上の》父親、ジョセフ・ジョースターの知り合いである事を聞いたのも、うんざりした気分には拍車をかけていた。そんなアンジェラが、つてをたどつてこのSW財団の調査に同行する事を知った時は、啞然としたものだ。

まあいい、仕事に戻ろう。仗助は頭をかきながら、手にしたノートを開いた。

「オレンジとレモンの実験か……なになに、まず『埋める深さを変えてみる』と、それから『埋める場所を変える』、最後に『埋める時間を変える』……と、それから『深さ、場所、時間の違う、色々な組合せを試す』と。さらに、木と鉄を埋めてみる。百円玉と十円玉……そのほか『思いつく限りの色々なものを埋めてみる』……と……しかし参ったぜ、割のいいバイトだと思っただけだよお??」

メンドクセーな。仗助はブツブツ言いながらも、ノートの指示に従って真面目に試験を始めた。

オレンジとレモンを埋め、記録をとる。

掘り出したオレンジとレモンのアイノコを ビニール袋に入れ、ラベルを付けて分類していく。

埋めた時間を、ストップウォッチで計り、記入する。

面倒な作業だ、だが、面白かった。

仗助にも、『謎や冒険に首を突っ込む』性分が受け継がれているのだ。

「仗助さん、食べ物たくさん見つけたよ」

仗助が仕事を開始して、半時間経ったところ、早人が顔を出した。早人の後ろからは、シンデイも顔を出した。

「おおお早人オ——。お前、仕事が早いじゃねえか」

仗助は、早人が取ってきた森の食べ物を見て、顔をほころばせた。

「うまそうだなあ……お前、ただの都会っ子ってわけじゃなかったんだな」

「まあね、良く小さいころ父さんと森に来てたんだ」

早人が胸をはった。

「早人君のおかげで、おいしそうな果物がたくさん取れたの。助かったわ」

シンデイが早人の肩を叩いた。

「いやあー、シンデイさんもお疲れ様です」

仗助が拙い英語で礼を言うのと、シンデイは 気にしないで とひらひらと手を振った。

「美しい森ね、私も森の中を散歩できて、楽しかったわ」

「そうっすね、こんな森にこんな奇妙な土地があるなんて、思ってたなかったっす」

「あら、手をすりむいてるわよ」

シンデイは、仗助の人差し指に擦り傷があるのを見つけた。ポケットからカットバンを出して、クルリと傷口に貼り付けてくれた。

「気をつけなさい。ここは奇妙な土地なんだから、傷口から変な菌が入り込むかもしれないわよ」

仗助の指にカットバンを巻くシンデイからは、ふわっと、石鹸のにおいが香った。

「……ありがとうございます」

仗助は、真っ赤な顔で礼を言った。

（うわあーいい香りだ。……なんてキレイな人だ。しっかも、優しくて美人のおねー様かあ……）

「仗助兄ちゃん……そんなにデレデレしてたら、アンジェラが怒るよ」
「なっ……お前、ませてんなあー」

仗助は、早人を軽く小突いた。

「だが、俺がアンジェラに怒られる理由はねえぞ」

「……そりゃあ、仗助兄ちゃんには、そうなんだろうけどさ……」
そろそろ朝飯の準備をしなければならぬ。仗助は、早人を連れてキャンプ地に戻った。

早人は、はしやぎながら走っていく。

(どうやらキャンプに連れてきて正解だったみたいだな)

仗助は早人の様子を後ろから見て、ほっと胸をなでおろしていた。

なんといつても、早人はつい数か月前に父親を失ったばかりだ。口には出さないが、つらい思いを抱えているに違いなかった。

仗助には、早人の気持ちが痛いほど想像できている『ツモリ』であった。

なぜなら仗助も、父親代わりであった祖父、東方良平を失った記憶があつたからだ。東方良平は、『日本犯罪史上最低の殺人鬼・片桐安十郎』と、奴のスタンド：アクアネックスによって、つい最近、殺されていった。

仗助にとつては、彼を子供の頃から慈しみ、守り、教え育ててくれた東方良平こそが、『本当の父親』だったのだ。

その《本当の父親》を失った時の悲しみ、怒り、むなしさは、今でも仗助の胸の奥に燃えている。

このキャンプを通じて、早人の心も少しは軽くしてやりたい。

仗助は、心からそう思っていた。

キャンプ地は、K山の山中にわずかになだらかになった斜面を見つければ、作ったものであった。

周囲はうつそうと森が囲んでいるが、キャンプ地は比較的乾いており、清潔であった。近くの溪流から、川の水が流れる音が聞こえる。あわててしつらえたにしては、快適なキャンプ場であった。

早人と仗助は和やかに火を起こし、肩を並べて早人が採ってきた山の果物を洗った。そして、火の上にフライパンをかざして、朋子としのぶが用意してくれた食材を、暖めていった。

アンジェラが帰って来るのを待って、三人は、一緒にテーブルで、昼食をつつき始めた。

三人の隣では、S W財団からやってきた研究G r. が、同じように昼食を取っていた。

今回の調査はまだ予備的な調査と言う事であった。だが、アンジェラを含め、S W 財団からは5名の研究者が派遣されていた。

S W財団のリーダーはアリッサ・アツシクロフトと言う知的な感じのする美人だ。

だが実は彼女は、ちよつと仗助が苦手なタイプの女性であった。彼女は、仗助が苦手だった小学校の時の厳しい担任に、どこか雰囲気似ているのだ。

仗助の視線に気が付いたのか、シンデイが仗助にウインクを飛ばした。

それをみて、アンジェラがむつとした。アンジェラは、仗助の皿からハンバーグ（しのぶが作ったもの）をひったくり、大口でほおばった。

「おい、俺の皿からとるなよオ?！」

「あら、気が付いたの。シンデイさんに夢中で、気が付かないと思っただわ。それにしてもシンデイ姉さんって、ほんとに美人よね。うらやましいわ……」

アンジェラはいかにシンデイが美しいか、とうとうと語り始めた。正直、ウザイ態度だ。

「……なあ、かんべんしてくれよ」

「何をかんべんするっていうのよ」

アンジェラが、仗助を睨みつけた。

「……ねえアンジェラ、ご飯を盛り付けけるの手伝ってよ」

早人が文句を言うと、アンジェラは『台湾では朝ごはんは全部外食なんだ』と言い返した。

だから、ちゃんとした家では、朝ごはんの盛り付けなんてしないんです。

おしやべりなアンジェラは、聞かれてもいないのに、台湾のおいし

い朝食店のメニューを説明し始めた。豆乳スープと揚げパン、汁ソバの数々、握り飯、チャーハン。

いつの間にか、早人はごくりと生唾を飲み込んで、アンジェラの話に聞き入っていた。

川尻早人 その2

「アンジェラ、今お前が食べているのは、俺と早人の『お袋』が作ってくれた『昼飯』スよお——」

仗助が指摘すると、アンジェラは少し赤面した。

そして、今度は『いま食べているごはんが、どれだけおいしいか』力説し始めた。

仗助はげっそりとした顔になりつつ、アンジェラの長い話にウンウンと相槌を打った。

この昼飯は、本当に二人の母親、川尻しのぶと東方朋子が作ってくれたものだった。

色々あつて、今は仗助の家と早人の家は家族ぐるみの付き合いをしていたのだ。

母子家庭で、一緒にいない父親をまだ愛している。

境遇に少し似たところがある東方朋子と川尻しのぶが知り合い、仲良くなったのは、必然だったのかもしれない。

二人は、杜王町で開かれた母子家庭家族の自助会で知り合ったらしい。そして、知り合つてすぐに意気投合し、家族ぐるみの付き合いをしていた。

今回のキャンプの件も、母親同士のつながりがあつたからこそ、なのだ。

「仗助さん、杜王町で伝統の食事と言えば、芋煮会だよね？」

早人が強引に話題を変えた。仗助と同じように、アンジェラの長話に辟易としていたのだ。

「芋煮会は………僕も、母さんと………父さんと、それから学校の友達と一緒に、毎年やったよ。近くの河原で、楽しかったなあ」

「俺は今も毎年やっているぜえ?！」

仗助が、ポンと早人の肩をたたいた。

「早人よお、今年はひとつ一緒にやってみよお——ぜ。康一やユカコ、それから億泰の野郎も一緒にだ」

「アラ?おいしいそうなお話ね」

シンデイが仗助たちのテーブルにやってきて、話に割り込んだ。果物くれてありがとうね。おいしかったよ。シンデイは早人の頭を撫でてくれた。

「シンデイさん、この調査が終わったら、その……あのお…芋煮会をしませんか」

早人が、勇気を出して提案した。

「ふんっ」

アンジエラがわかりやすくそっぽを向いた。

ピューつと仗助が口笛を吹いた。

「芋煮会？」

シンデイが小首をかしげた。

「えつと……」

言葉に詰まった早人が、年上陣に助けを求めた。だが、アンジエラはそっぽを向いている。仕方がなく、仗助がコホンと咳払いして芋煮会とは何か、の説明を始めた。

「……なるほど、面白そうね」

仗助の説明を聞いて、シンデイがうなずいた。

「面白いですよ、それで……えーと……」

ちよつと慣れない英語を話し疲れた仗助は、助けを求め、隣に座っていた日系二世のヨーコと言うSW財団の女性に、日本語で話しかけた。

「いや、いいアイデアと思うんすよ。どうっすか、SW財団の皆さん、今度一緒に芋煮会やりませんか」

「??」

突然仗助に話しかけられたヨーコは、おどおどと『何を言っているのかわからない』というしぐさをした。

「彼女は、日本語がわからないんだ」

ヨーコの隣に座っていた、デビットと言うSW財団の戦闘員の男が言った。

「産まれも育ちもアメリカの、日系二世なんでね……日本のことはほとんど知らない」

「ああ……失礼しました」

頭を下げる仗助に、デビットは気にするなと手を振り、黙々と朝食を食べ続けた。

「私、両親が生まれ育った国に来て、うれしいです」

ヨーコが仗助に英語で話しかけた。仗助にもわかるように、ゆっくり、簡単な単語を選んで話してくれている。

「日本に来て、すぐここにきてしまったので、まだ日本の町を見たことはいませんが……でもここは緑が多くてきれいなところですね」

「……そうっすね。調査に一区切りついたら、杜王町を一巡り案内しますよ」

「素敵、ありがとうございます」

ヨーコは、仗助にピヨコンと頭を下げた。その背後で、アンジェラが鼻を鳴らしている。

「できれば日本料理も食べてみたいわ。私たちの研究所の近くにも、光溜って日本食屋があるんですが、そこはレパートリーが少ないの」

「そうね、この調査が終わったら『みんなで』食べに行きましょうね」
シンデイが言った。

その後、ピーターと名乗るSW財団の研究者も、会話に加わった。仗助たちは、それぞれの国の料理のこと、このあたりの見どころの話、研究者達それぞれの故郷についてなど、和やかに語り合った。



昼食後、仗助とアンジェラは、早人と一緒に溪流で釣りをしたり、不思議な地の調査をしたり、と再び忙しく動き始めた。

溪流のそばの、小さな山のようにそびえる大きな岩の上が、仗助が調査を担当している不思議な現象を示す土地であった。

「いやあー肩がこるぜー」

仗助はノートとスコップを放り投げると、調査の合間に一息をつこうと大きく伸びをした。岩の上から、溪流を見下ろす。

足元ではアンジェラと早人が、胴長（長靴とゴム製の長ズボンが

一体化したような防水具）をはいて、溪流の流れに立ち、竿を振っているのが見えた。

少し離れたところには、非番のデビットが竿を振っているのも見える。

デビットはすっかりリラックスした表情で、釣りを楽しんでいるように見えた。

よく見ると、時折デビットは、釣りに慣れていない早人とアンジェラに、竿の持ち方、えさのつけ方、魚がいそうなどころなどを教えてくれているようだ。けさ話した時はぶっきらぼうなタイプかと思っていたが、デビットは、思いのほか面倒見がよい人のようであった。

と、早人の竿がクイツと上がった。

魚がかかったらしい。だが、しばらく釣竿と格闘していた早人が、ふいに あーあ と天を仰いだ。ぼらしてしまったのだろう。

「仗助さんッ、見た？ 今の大きかったんだよ。惜しかったなあー」

早人は大きな声で笑った。その声は少しだけ、11歳の少年らしいイキイキさを取り戻つつあるように見えた。

アンジェラも、仗助の視線に気づき、手を振っている。

「アンジェラ、交代するぜー」

仗助は、崖にしばらくつけた縄梯子を降りた。

よろしく、とアンジェラが仗助の手をとって、縄梯子から降りるのを助けてくれた。

「釣れたか？」

「私は全然よ」アンジェラが言った。

「それはともかくこの溪流、とつても冷たいのね、でもきれいだわ……」

「仗助さん！早く来て、今、デビットに教わったとうりにやってみたら、一匹釣れたんだよッ」

早人が叫び、魚籠を持ち上げて見せた。

少し離れた上流にいたデビットも、早人の方を向いて親指を立てている。

「おおースゲーな 早人よお??俺が初めて釣りに行ったときは、何にも釣れなかったんだぜー」

ふと、仗助には、魚籠を持ち上げ大声を出す早人の姿に、子供の頃の自分がダブった。

初めて良平じいちゃん釣りに行ったのも、こんな溪流だったような気がする。そのときは、まったく釣れず、こつそり魚屋で魚を買って帰ったのだった。

もちろん、母親にはすぐばれて、それからしばらく 仗助と良平じいちゃんはずっと母親にからかわれっぱなしだったのだが。

(良平じいちゃんとも、こうやって釣りしたよなあ……魚を釣っては大騒ぎして、魚が逃げると文句言われたっけな)

「仗助さんッ!」

「おお??すぐ行くぜ、まっつてな——」

明日からは禁漁日である。この、ほとんど人も来ない、名も知れぬような小さな溪流ではあっても明日からは釣りができない。

(今度、康一や億泰と一緒に早人も連れて、海釣りにでも行くか)

仗助はそんなことを思いながら、胴長に足を通した。



そうして、キャンプを始めてから、二日目の夜になった。

その時、早人は食卓を囲むアンジェラの弾丸トークに、苦労して突っ込みを入れているところだった。

仗助は少し離れたところで肉を焼いていた。焼きすぎると肉は固くなる。仗助は、うまい肉が焦げ付かないように、一言も口を利かずに集中して、肉に火が入っていくのを見守っていた。

ふいに、リリリと鳴いていた鈴虫の声が、止んだ。

時を同じくして数人の人影が、現れた。人影は、キャンプ場を見下ろすことのできる小高い場所に、立っていた。

「……誰」

アンジェラとの話を途中で止め、早人は声を潜めた。

「わからないわ、たぶん、道に迷った登山客だと思うけど……念の為、早人君は私の後ろに……」

弾丸トークをやめ、アンジェラが油断なく身構えた。

早人は素直にアンジェラの背後にまわり、近づいてくる男達を観察した。

「こんな夜に、なんか用っスかあ」

俺が行きます。近づいてくる男達に対応しようとしていたデビツトを抑え、仗助が、懐中電灯を掲げながら慎重に人影に近づいて行った。

仗助は男たちと何やら話している。

男達は仗助を取り囲んでいる。

ゴウツ

と、風が男たちの背後から、キャンプ場に向かって吹いた。

何か腐ったようなにおいが、男たちから匂ってくる。

何？このニオイ……早人が顔をしかめた。

コ” コ” コ” コ” コ” コ” コ” コ” コ” コ”

「……お前、東方 仗助だな……死ね……」

男の1人が、もそつと言う声が、風に乗って早人の耳に入った。

今、死ねって言った？どういこと……早人は唾然とし、聞き間違いではないかと再び耳を凝らした。

コ” コ” コ” コ” コ” コ” コ” コ” コ” コ”

「……アイツら、何かヤバいワツ………仗助っ！」

アンジェラはテーブルにあつたリングを取り、仗助を囲んでいる男に向かって投げつけた。

そのとき、早人には、アンジェラの体がかすかに発光したように見えた。

バシユツツ

アンジェラが投げたリングは、仗助を取り囲む男の1人に命中した。

当つたリングは不自然にバウンドし、アンジェラの手元に戻ってくる。

人間にはあり得ない程の打撃に、防御したクレイジー・ダイヤモンドの右手が揺らぐ。

「!?グレートなパンチツスねえ」

と、仗助は男がパンチを放った左腕が不自然にねじれている事に気がつき、顔を歪めた。

「おい……大丈夫か、おめー……腕が千切れかかってるじゃねーか？」

男はクツクツと笑った。

「東方仗助、ただの血液袋の分際で、お優しい事だ」

「頭いかれてるのか、てめー」

もうやめだ、傷を直してやる。

仗助は、クレイジー・ダイヤモンドの腕を男に向かって伸ばした。

ターン!!!

突然デビットが、仗助を押しつけて拳銃を発射した。

男は頭部に数発の銃弾をくらって、後方に吹き飛んだ。

「仗助君、下がりましたえ」

デビットは拳銃を構え、群がる男たちにその銃口を向けた。

「おい！止めろッ！」

仗助はクレイジー・ダイヤモンドを使って、デビットから拳銃を取り上げた。

「ここは日本だぞ、いきなり銃を撃つんじゃないねー」

「馬鹿な、あの男は危険だ」

「うるせーぞ、この人殺し野郎ッ！」

仗助は、デビットの腹を殴った。

デビットはうめき声をあげ、腹をおさえて膝をついた。

「仗助君、危険だ。あの男に近づくなッ！」

「うるせえ——ツスよオオ」

仗助は、デビットの拳銃を壊した。

そして、デビットの警告を無視し、銃撃の傷を『直す』ために、『倒れている男』に近づいていく。

不気味なことに、仗助を取り囲んでいるほかの男たちは、仲間が撃たれたというのに何の反応も示していない。

男達はただ後ずさると、仗助から距離を置き、遠巻きに取り囲んでいた。

「おい、大丈夫だ……お前の手を『治して』やるよ」

だが、クレイジーダイヤモンドで男の手を治療する前に、銃撃を食らった男が飛び上がった。

「ひゃひゃひゃああああい！」

頭部から血を流しながら、男が叫んだ。

「血だあ。お前達の血を1人残らず吸ってやるううう！」

「うおおお！」

完全に不意を付かれ、仗助は男の一撃を喰らい、吹き飛ばされた。

男の叫びに反応して、男のそばでぼうっと突っ立っていた数体の者たちも、絶叫を上げながらおそってきた。

「なんだっ？ ドラララッ！」

わけもわからないまま、クレイジー・ダイヤモンドが、男たちを跳ね飛ばす。

「仗助君……早く逃げろ！」

後ろからデビットが叫んだ。

「オッサンこそ、大丈夫か」

仗助は、よろよろと立ちあがったデビットに、肩を貸して立ち上がらせた。

「ほら、拳銃を返すぜ……さつきはすまなかつたな」

「……なかなかいいパンチを持つてるな、君は」

デビットはにやりと笑って、軽く仗助の腹を殴る真似をして見せた。

「まだよ、まだあの男たちが立ち上がるわッ！」

アンジェラが、叫んだ。

「ギャアアアアア！」

クレイジー・ダイヤモンドの攻撃で吹き飛ばされた男たちが、ふた

たび立ち上がる。

そして、外の森からも新手の男たちが姿を見せた。

男たちは奇声を上げ、キャンプにおそいかかってくるツツ

「イヤアアアアアアアア!!!」

S W財団の1人が、捕まった。

ヨーコだ。

ズズズズ…ズウ——ツ

足首をつかまれたヨーコは、驚くほどの速さで、地面を引きずられた。

襲撃してきた男達のほうに、引き寄せられていく……。

「やめてっ。助けてー!」

ヨーコは恐怖に顔をひきつらせながら、仗助たちに助けを求めた。

「ウオオオオオツツ!ドケエ、このやろオツ」

「ヨツ、ヨーコオオオオツ!」

仗助とデビットは、襲つてくる男たちを蹴散らしつつ、ヨーコに向かって必死に走るツ!

だが……

「ぎいやあああああああつ」

ヨーコは男たちにつかまり、噛みつかれた。

腕を、肩を、顔を……生きながら、絶叫を上げながら、ヨーコが、男たちに噛み千切られていく……。

ギヤアアア!

皆が見ている前で、ヨーコは何度も噛みつかれ、絶叫を上げ、あつという間に血だるまになった。

「ああああ……ヨーコが、イヤあツ!」

シンデイが嘆いた。

『ドララララッ!』

「くそお。傷は直したが、遅かったか……」

群がる異常者共を跳ね飛ばして、なんとか仗助達がヨーコのもとにたどり着いたときには、ヨーコは、もうこと切れていた。

仗助は、そつとヨークの傷を直した。

デビットが沈痛な表情で、亡骸を肩に担いだ。

「何なんだ、こいつらよオ……異常だぜ。だがもう遠慮はいらねー……早人よオ、しっかり守ってやるから、目つぶってる！こんなスプラッタを見るんじゃないぞ。夜寝れなくなるぜー」

仗助がスタンドを出現させるッ

『ドララララララララララララララララア！』

仗助のクレイジー・ダイヤモンドが手加減なしの全力のラツシユを繰り返り出し、異常者どもを蹴散らすッ

「Guyiiiiiiiiii!」

クレイジー・ダイヤモンドのラツシユを受けた異常者共は、まるでビリヤードの玉を散らすかのように、吹き飛んでいくッ！

川尻早人 その3

ダンッ！ダンッ！

SW職員も、何もしていないわけではなかった。

ハンドガンを撃ちまくり、異常者達に銃弾の雨を降らせていた。

だが、異常者たちは、少々の弾丸やスタンド攻撃を食らったくらいでは意に介さず、再び立ち上がり、おそってきた。

「B u g y a a a a a a a a a a a !」

「波紋＋スケーター・ボーイ！」

一方、アンジエラはテントを引き倒し、柔らかい素材のテントを波紋で硬化させていた。

硬化したテントに、アンジエラのスタンド—小さなスケボーの上に 乗った猫人形—が触れる。

すると、テントに『四つの車輪』が出現した。

「皆ッ、このテントに避難して」

アンジエラは、早人をテントに避難させた。そして巧みにテントを操って、SW財団の人間をテントに収容し始めた。

「グレートオ やるじゃねーか、アンジエラよう。……とは言えグレートにヤバい状況だぜ??ッ。早人を、みんなを、守り切らなくちゃなんねー」

クレイジー・ダイヤモンドの攻撃 —— 注意深く手加減した —— で異常者達の突撃を抑えながら、仗助が言った。

ブシヤアアアア……！

そのとき、アンジエラのテントに触れた異常者の1人が、悲鳴を上げながら崩れ落ちた。

異常者がテントに触れた手から、波紋傷によると思われる煙が立ちのぼる。

その手が、どんどんと溶けていく。

「やっぱり波紋が利く……仗助、こいつらはジョセフ先生が言っていた屍生人（ゾンビ）どもに違いないわ」

アンジエラが叫んだ。

「どうして」

シンデイが、頭を振った。

「なぜ屍生人(ゾンビ)がいるの？石仮面はすべて破壊されたんじゃないの？それって、なんで私たちを……」

「シンデイさんツツ」

早人は、立ちすくむシンデイの手を引っ張って、テントの中にすばやく誘導した。

「しつかりして、今はそんな事言ってる場合じゃあないよ」

「ゾンビ？」

アリツサが。ぱあっと表情を明るくした。

「みんな、頭よ。頭部に攻撃を集中させてツ！ゾンビなら、頭を吹き飛ばせば、動きを止められるはずよツツ」

「了解だよ、アリツサ」

さっそく、ピーターが、近づいてきたゾンビの頭を、拳銃で吹っ飛ばした。

一方、仗助は、まだデビットと二人、テントから離れたところに行った。

デビットは、担いでいたヨーコの遺体を、丁寧に木の上に置いた。「すぐに迎えに来る、ここで少し我慢してくれ……」

デビットはヨーコの亡骸にそう言うと、怒りに目を血走らせ、拳銃を引き抜いた。

「貴様らああああー！」

ヨーコが殺された怒りからか、デビットは顔を真っ赤にさせて拳銃を撃ちまくり始めた。

頭を吹っ飛ばされない限りは、拳銃があたっても、ゾンビたちはのけぞるだけだ。

すぐにまた、何事もなかったかのように立ち上がり、再び二人に近づいてくる。

仗助は、デビットの隣で、遠慮なくクレイジー・ダイヤモンドを暴れさせていた。

近づくゾンビ達を、撃退しつつける。

幸い、ゾンビ達にはスタンドが見えないらしく、近づくゾンビを一方向的に攻撃することができる。

だが……

カチツ

ついに、デビットの拳銃の弾がなくなった。

「チツ」

デビットは舌打ちすると、ナイフを引き抜いた。

「デビットさんよおー。無茶だぜ。ナイフ一本でゾンビの相手をするのはよおー。ここは、俺がやるぜ」

下がってなよ。

仗助は、デビットを背中にかばった。

『ドラッツッ！ ドラララアッ!!』

クレイジー・ダイヤモンドが、両拳のラッシュをゾンビどもにぶちかまし続けるッ！

だが、ゾンビは次から次へと、まるで噴水から水が湧きだすように、湧いて出てくる。

徐々に、仗助も、押し寄せるゾンビたちに押され始めた。

「うおおおッ！」

そしてついに、『スタンドからの、ゾンビのパンチを受け止めたフィードバック』に耐え切れず、仗助が膝をつく。

「血イイイイイ！」

膝をついた仗助に、ゾンビが、文字通り飛びかかってくるッ！

ター ン!!!

そのとき、仗助におそい掛かろうとしたゾンビ達が、頭部に銃弾を受けて吹っ飛んだ。

ピーターとアリッサが、テントの中からゾンビを狙撃したのだ。

「仗助くん、デビットッ、早くテントの中に」

ピーターが二人を手招きした。

「ここなら安全だ！」

「行くわよ……スケーター・ボーイ！」

アンジェラは、最後の二人、仗助とデビットがテントに入ったのを

確認すると、スケーター・ボーイの能力を発動させた。

ギョルルルルツ

テントの下部に、スタンドでできた車輪が現れた。

『波紋』の力か、それとも『車輪のスタンド』の能力か、物理現象を無視して、テントはキャンプ地の横の崖を垂直に登って行くッ！



幸いなことに、スケーター・ボーイのスピードに、ゾンビはついてこれないようであった。しばらく走って、完全にゾンビたちをまいたと確信ができたところで、一行はテントを止めた。

テントを降りると、仗助はアリツサに詰め寄った。

「説明してくれ、あいつらは何もんで、どうして俺たちをおそってきたんだ。……ありやあ『ジジイ』が言っていたゾンビだろ？なんであんなものが、この辺りにいるんだ。あんたら、何か知ってるんだろ？」

「仗助君、信じて。あのゾンビがどうしてここにいるのか、私たちも皆目検討もつかないの」

アリツサは、両手を上げた。

「奴らは、俺たちが調べていた、あの不思議な『土地』と関連があるんだろ？あんたらが何も知らないなんて、思えねーなあああ?！」

仗助が怒鳴った。気の弱い人間ならば、その目で睨まれただけで腰が抜けそうなほど、恐ろしい表情をしている。

「仗助さん、でも、ヨーコさんが……彼らの仲間がやられてるんだよ。僕にはS W財団の人たちが、ゾンビのことを知ってたとは思えないよ」

早人は、仗助の見せる怒りを気にすることなく、冷静に指摘した。アリツサに詰め寄る仗助をなんとか引き離そうと、仗助の袖を引っ張る。

早人の方へ振り向いた仗助は、先ほどアリツサに向けた怒りの表情から一転した、穏やかで人のよさそうな表情を見せた。

「……言われてみればそうだけだよお——早人オ、お前はずいぶん落ち着いているな。安心したぜ」

「吉良を倒した仗助さんの能力を、信じてるだけだよ」

「ハハハ……ありがとよ」

仗助は『まかせとけ』と言わんばかりに早人とハイタッチすると、アリツサに詰め寄るのを止め、負傷者の手当てを始めた。

その間も、アンジェラはテントに波紋を流し続けていた。

一方、S Wの職員たちは皆うろたえていた。アリツサとピーターは唇を噛み、互いに顔を見合わせている。シンデイは、うつろな表情で『ヨーコ……』とつぶやきつつづけていた。

1人デビットは、備え付けの衛星電話に取り組み、なんとかS W財団の本部と交信を行おうと悪戦苦闘していた。接触の悪かった配線を締め直し、慎重に周波数を合わせ……

「よし、本部に連絡がとれたぞ」

「ホントツ」

アリツサがデビットから衛星電話をひったくった。アリツサは電話口に向かって、何やら早口でまくしたて……そして、回線が再び止まった。

「どうしたの？」

「……電池切れだ」デビットは渋い声で言った。

一行は顔を見合わせた。電池切れでは、たとえ『クレイジー・ダイヤモンド』の能力でも直せないからだ。

「まあいいわ、明日の朝には増援部隊が来るそうよ……武器の補給も、追加の戦闘部隊も来ると思うわ」アリツサが言った。

「ヨシ……そしたら反撃開始だ。ヨーコの仇を撃つてやる」

デビットは、怒りに満ちた口調で言った。

「ヤツラを許さねえ」

「じゃあ、それまで何とかして生き延びないとね。……仗助君、アンジェラさん、あなた達が私たちの切り札よ。あなた達には、元気でいてもらわないといけないわ。……少し休んでいて」

気を取り直し、アリツサがS W財団の職員たちに指示を出した。

「しばらくは我々の中から見張りを立てます。……デビット・キング、シンデイ・レノックス アナタたちが最初の見張りよ。そのあとは

私とピーター・ジェンキンズが、見張りに立つわ」

「まっつて、私も見張りに立つわよ。ゾンビどもに対抗するのなら、私の波紋が必要よ」

言い募るアンジェラを、アリッサが抑えた。

「安心して、ゾンビに対して、我々だけで対抗しようなんて思っただけ。いわ。ゾンビが来たらすぐにあなた達に頼る。約束するわ。……それに、このテントの周囲には、落とし穴やらトラップのたぐい、赤外線センサーと鳴子を何重にも仕掛ける。ゾンビどもがやってくれば、すぐわかるはず。私たちの見張りは、ただの保険よ」

「そういう事だ。今の俺たちの仕事は、いざと言う時に備えて、少しでも休んで置くことだぜ」

仗助はそう言うのと、目を閉じた。

「アリッサさん、僕にも何かできることはありませんか」

早人が尋ねた。

「早人くん、ありがとう。でも君はまだ小学生でしょ。ここは大人に任せて頂戴」

アリッサがクスツと笑って、早人の頭を撫でようとした。

早人はその手をはらい、こんな時に大人も子供もないでしょう、と言った。

「早人くん、わかって頂戴。子供には危険すぎるのよ」

「ええ、危険なのはわかってます。でも、それはあなたたちも一緒じゃあないですか。あんな馬鹿力のゾンビを相手にしたら、大人だろうが、子供だろうが 同じです。結局歯が立ちませんよ」

「早人くん……お願い、言う事を聞いて」

それでも私たちは大人なの、大人に子供を守らせて とアリッサが言った。

「でも……」

早人はうつむき、唇をかんだ。

「いや、早人にも何かやらせてやってくれよ。そいつに根性があったって、肝っ玉の据わった性格してんのは、俺が保証するぜえ??」

眠ろうとしていた仗助が、薄目を開けて言った。

「ナリこそちいせーがよお、早人は、役に立つ男だぜー」

「わかったわ、じゃあ……食料係に任命するわ。……さつそく、そのバックを開いて皆の簡単な食事の準備をして頂戴。量には限りがあるから、後のことを考えて配給の量は注意してね」

「わかりました」

早人は真剣に備品を開き、はりきって食事の支度を始めた。



翌日、まだ空が白み始める前に、仗助たちはまたゾンビの襲撃を受けていた。

「U g r y y y y y y y y !」

「血イイイイイイイッ！」

『ドララッ！』

仗助のクレイジー・ダイヤモンドが、ゾンビを吹っ飛ばす。

「G z y u a a a !」

最後のゾンビは、アンジエラに襲いかかった。

その攻撃を、アンジエラはとんぼ返りを切ってかわした。

そのとんぼ返りをきる動きのまま、跳ね上がった足に波紋を込め、ゾンビに蹴りを浴びせるッ。

「オーバードライブッ！（波紋疾走）」

バツシユウウウウウウ——ンッ

「ガガガガア……」

アンジエラの波紋を顎に受け、ゾンビは一瞬で頭部を吹っ飛ばされた。

波紋は体中を流れていく。ゾンビの体は、ビクビク残った両手と体を震わせながら白煙を上げて蒸発していった。

「これで終リッスか??? いや、今回は割とあっけないうすねー」

ゾンビの奴らも工夫がないっすね。仗助は、スタンドをひっこめながら言った。

「アリッサ隊長のえげつねー作戦と、アンジエラの波紋がゾンビにはまったのがおおきいっすけどね」

「仗助のスタンドのおかげよ」

アンジェラが言った。

「仗助が背後を守っていてくれたから、私が攻撃に専念できたんだもの」

「とにかく、誰にも被害が無くてよかったツス」

仗助が、ホツとため息をついた。

今回の襲撃は、アリツサを中心にして万全の態勢を敷いて迎撃した。

ゾンビたちは、仗助たちに近づく前に、地雷で足を吹っ飛ばされたり、落とし穴に落ちたり、ネットにからめ捕られり、テントの周りに張り巡らされていたトラップに、そのほとんどを引っかけさせることができた。

そこを、待ち構えていたデビットとピーター、アリツサが銃撃を食らわし、半数以上をいつきに殲滅させたのであった。

だから、今回は仗助も、アンジェラも、ごく数体の銃撃を生き残った少数のゾンビを相手にするだけで済み、余裕をもって戦うことが出来ていた。

だから、あっけなかった。

しかし、もし何の準備もしていなければ、昨夜同様大変な惨事となっていたに違いなかった。それほど、ゾンビたちのスピード、パワー、そして痛みを知ることなく向かって行く姿勢は、脅威であった。そして、ゾンビのほうは今日の失敗からまなび、次の襲撃では何か対抗策を練り出してくるに、違いなかった。

次の襲撃も、今回のように簡単にさばけるとは限らなかった。

「でも、本当に。なんでゾンビが現れたんだろうね……ゾンビは1938年にジョセフ師匠とシウトロハイム隊が最後の一体を倒して以来、出現してなかったはずよ……わからないわ……まさか石仮面が、杜王町で見つかったってわけじゃあないでしょうに……」

アンジェラが、首をひねった。

「ジジイがゾンビと戦った？」

何の話だ？そりゃあ

仗助が首をかしげると、知らないの？とアンジェラが呆れたように

言った。

「ああ、知らないんだ」

「知りたい？」

「……どうっすかね……ムシ口機会があれば、本人から聞きたいっすかねエ??」

仗助は、頭をかいた。

仗助とアンジエラが話を続けていると、アリツサとシンデイが現れた。二人は、何やら焦った様子で首を振りながら、仗助たちに向かって走ってくる。

「おお、えぐい作戦を立てた指揮官さまが、ご登場だぜ」

仗助はアンジエラとの話を止め、二人が来るのを待った。

正直言つてジョセフ・ジョースター……仗助の『生物学上の』父親の昔話は、聞きたくもあり、聞きたくはなかった。だから二人がやってくるのは、話を打ち切る良いきっかけであった。

「ねえ、様子が変じゃあない」

アンジエラが眉をひそめた。

アンジエラの言うとおり、アリツサとシンデイの二人は動揺し、すっかりあわてているようだ。二人は息を切らしながら、仗助とアンジエラの前まで駆けてきた。

「……まずいわ……」

アリツサが仗助の手をつかんだ。

「……お願い。デビットを探して……さつきから、デビットの姿が見あたらないの……ゾンビの襲撃の後で、彼を見た人がいないのよ」

「!?ちよつと待ってよ……」

アンジエラは、仗助の手をつかんでいるアリツサの手をさりげなくはずし、代わりに自分が仗助の二の腕を掴んだ。

「例のゾンビの襲撃のとき、デビットは私たちの後ろでズツとサポートにまわっていてくれたはずよ。危険なことなんて、無かったはず」

「……早人君が、デビットが森の奥に入っていくのを見たって」

シンデイが言った。

「!?何だって、それで早人は？　なんでデビットさんが、1人でそんなあぶねー事をしたんだ」

「仗助は、シンデイにつつかかった。」

「デビットがどうしてそんな事したのか、わからないわ。それから、早人クンは無事よ」

「あわてる仗助を落ち着かせるようと、シンデイは仗助の手を掴んだ。」

「……グレート、俺が探しに行くぜ」

「少し落ち着いた仗助が、答えた。」

「アンジェラ、お前は残って、このテントを守っておいてくれ」

「……仕方ないわね。でも、気を付けるのよ」

「アンジェラは、少し不満げにうなずいた。」

「私も行きます」

「シンデイが銃を取り出し、言った。」

「止めたって無駄ですよ」

その夜、ゾンビが襲撃してきた場で、デビットは5体のゾンビを倒していた。

「作戦通り、罠にはまったゾンビに銃撃を浴びせたのだ。」

「罠にはまらず、生き残ったゾンビは、仗助とアンジェラがあつと言う間に倒してくれた。アリッサの立てた作戦は見事にはまり、今回はあつけなすぎるほど簡単に、ゾンビの襲撃を撃退することができた。」

その時、仗助とアンジェラが生き残ったゾンビを倒すのを見守っていたとき、デビットはあるものを見つけた。それは、一体のゾンビが森の中に逃げていくの姿であった。

「!?まさか……」

「ちらりと見えたそのゾンビをほっておけなかった。デビットは、ゾンビが逃げるのを追って、森の中へと入って行った。」

「作戦では、S W財団はスタンド使いのアンジェラと仗助を支援する」

のが役割だった。単独行動は危険だ。

それは良く分かっていた。だが、デビットには、そのゾンビをどうしても無視できなかつたのだ。

森は暗く、裸眼ではほとんど何も見えなかった。

デビットは、ヘッドライトをつけた。ライトで森の中を照らしながら、探索をすすめていく。やがて、ライトが探していたものを照らした。

それが『何』か、目にしたものを理解したデビットは、思わず悪態を吐いた。嫌な予感が、当たってしまったのだ。

そこにいたのは、ヨーコだった。

正確には、『元』ヨーコの、ゾンビであった。

「あら……デビットさんッ」

『元』ヨーコであったゾンビは、体をもじもじと震わせた。その体は、血で真っ赤に染まっている。

「元氣そうね……良かったわ……正直、貴方が無事だったのか、心配していたのよ」

「ヨーコ……」

その話す言葉、口調は、ヨーコそのままだ。一瞬、デビットの心に希望がともる。

もしかしたら、ゾンビになり立てのときなら、まだ助けられるのかもしれない。

少なくとも、こうして会話ができるのであれば……

「みんなのところに戻ろう。大丈夫だ。みんな、キミを見たら喜ぶぞ」
「そうかしら……」

ヨーコは、恥ずかしそうにクスツと笑った。

その笑みだ。そのちよつとシャイな笑みに、デビットは惹かれていたのだ。

「そうね、デビットが助けてくれるのなら、みんなのところに戻れるかも……」

「ああ、助ける。助けるとも」

「そう、嬉しいわ。じゃあ……ねえ……ちよつと、その血を吸わせ

てええ♡」

そういつて、ヨーコはにやつと笑った。

地味でおとなしいヨーコが見せる表情とは信じられないほどに、挑発的な笑みであった。

ヨーコ……デビットにとつて、いつもおとなしく少し自信が無さげな、はかなげなヨーコは ほっておけない、保護欲をかきたてる存在だった。

それが今、妖艶な笑みを浮かべながら、デビットの血を吸おうとしている。

「馬鹿な」

デビットは、ヨーコに向かって小銃を向けた。

「ヨーコ頼むよ、落ち着いてくれ……大丈夫だ SW財団の技術があればちゃんともとに戻れるさ」

（そうだ、まだ希望はあるんだ。いつだって希望だけはある……）

「デビットさん……あなたは無口で怖そうに見えたけど、いつも私を気遣ってくれたわよね」

感謝していたわよ、ヨーコはペロリ……と自分の下で唇を舐めた。

その唇の下から、牙がのぞく……

「今もだ。いまもキミを大切に思っている。だから、落ち着いてくれ、俺たちと一緒にいこう……助けてやる……」

「デビット……誤解されやすいけど、あなたは本当に優しい人……だから……だから偉大なるDIO様の懐にいられる『絶対の安心感』を教えてあげえるううううわあああああ！」

ヨーコが、おそいかかってきた。

「……遅かったか」

仗助がシンデイを連れて、その場に到着した時には、既にデビットは打ち倒されていた。

そして、血を吸われてすっかり干からびていた。

デビットの血を夢中に吸っていたゾンビが、二人に向き直った……

それは、ヨーコだった。

「ははは……誰かと思えば、人気者のシンディちゃんじゃなあい」
ゾンビと化したヨーコが、口元の血をぬぐいながら言った。

その血は……デビットの血だ。

「ねえ……あたしの愛しのデビットがすっかりカラカラになっちゃったのお。でも、シンディちゃんが血をくれたら、元に戻るかもおお」

ヨーコは、クスクス笑いながら言った。

「……ヨーコ あんた……」

「グレートオ……」

「血イイイツツ！」

その時、カラカラのミイラとなったデビットが、叫び声を上げながら起き上った。

「喉が渴いて仕方ねえぜえ……。シンディイイイ、お前のあつたかい血を、おれにくうれええええ！」

寡黙だったデビットとは思えないほど、テンションの高い話し方だ……

「ヨーコ……デビット……なんてこと」

シンディが、顔を覆って泣き出した。

「ウワツハハハッ！そのやわらかくて甘そうな血をもらうぞツ！」

『ドラルアラアア！』

シンディにおそいかかろうとしたデビットを、仗助が吹き飛ばした。

吹き飛ばされたデビットに、仗助は歩み寄った。地に伏すデビットの背中に向けて、仗助は優しく話しかける。

「……デビットさんよお。目を覚ましてくれよ……あんた、早人に釣りを教えてくれただろ」

「ジョースケエエエエ……血だあああああ！血袋だあああああ！！」

立ち上がったデビットが、吠えた。その眼には知性のかけらもなかった。

「……だめか……やっぱり、もうこうなっちまったら『直せねえ』のかよ」

狂ったように叫ぶデビットの頭を、仗助は痛ましい顔で破壊した。

デビットが倒れ、残るゾンビはヨーコだけとなった。

「ヨーコさん、もう止めてくれ」

仗助が泣きそうな顔で言った。

「こんなことしちゃダメだ」

「仗助くん……わたしの体を直してくれて有難うね」

ヨーコが言った。

「私達ゾンビは、自分で傷を直せないから、食べられちゃった、わたしの足と手と内臓を直してくれて助かったの……嬉しかったわ……こ……れ……で、アンタの血をすすれるからなああああ！」

ヨーコ……だったものが絶叫した。

「ヨーコさん……あんたも、すっかり化け物に変わっちゃまったんだな。もう、俺に出来るのは、あんたの息の根を止める事だけっスか……」

仗助は顔をゆがめた。クレイジー・ダイヤモンドを出現させ、ユツクリとヨーコへ近づいて行く。

「……ヨーコさん……あんたに杜王町を案内するの、ほんとに楽しみにしてたんすよ……俺は……」

ヌ・ミキタカゾ・ンシ（支倉未起隆） その1

1999年11月4日 「M県K市、A山山麓」：

バシユツ！

ボワウンツ！

スマレと億泰は、枝から枝へ、まるで猿のように飛び跳ねながら、森の中を進んでいた。

その一步一步は、不自然なほどに大きい。その歩みは、まるで月面か、トランポリンの上を走っているかのようだ。

その動きは、未起隆のスタンド：アース・ウインド・アンド・ファイヤの力によるものであった。

アース・ウインド・アンド・ファイヤは、未起隆の体を任意の物体に変身させることが出来る。未起隆はその力を使い、4個の靴に変身・分裂して、スマレと億泰の足を覆っていたのだ。

スマレと億泰が足に力を入れるたびに、タイミングを合わせて未起隆が二人に力を貸す。すると、二人の脚力に未起隆の力が加わり、1.5人分の力で軽快に先を進むことができる……と言う訳だ。

三人は、ネリビルが操るネズミによる搜索を可能な限り避けるために、木の上を移動することにしたのであった。

半ば無意識に分裂と変身とを維持しながら、未起隆は、前の高校でスマレと初めて会った時のことを思い出していた。



それは今から3年前のこと、未起隆の転校前の出来事であった。

その日、未起隆は放課後の教室に1人残っていた。1人で、自分の所属するバンドの新譜を、読みこんでいるところだった。

明日はバンドのメンバー全員で集まって、この新譜の音合わせをすることにしている。未起隆はボーカルを務めており、長くて発音が難しい英語の歌詞を間違わずに歌い切るために、その日中に、歌詞を全部頭に入れておかなくてはならなかった。

『スパイダーズ・フロム・アストロイド』

それが、半年ほど前から未起隆が所属しているバンドの、名前で

あった。メンバーすべてが同じ高校のクラスメートからなる、Hip Hop, Hard Rock, Heavy Metal 洋楽全般なんでもござれ、と言う感じのコピーバンドだ。

バンド活動は、とても面白かった。胸を鳴らすドラムの音、頭の中ではじける、ギターの大音量……音楽をやっているときは、何もかも忘れられた。しばらく仲間の宇宙人に出会っていない孤独も、『本当に自分は宇宙人なのか?』と、時折心に湧く疑惑も……。

いつしか、未起隆はすっかりバンド活動にはまっていた。

はまっているからこそ、時がたつのも忘れて、夢中で新譜を読んでいく。気が付けば、いつの間にか外が薄暗くなっていた。

突然、未起隆が没頭して読み込んでいた新譜が、ヒョイと取り上げられた。

未起隆が驚いて顔を上げると、そこには、ニヤニヤと笑う美少女が立っていた。その美少女の顔は、知っていた。

「アナタは……栗沢 スミレさん?」

それまで、未起隆はスミレと一言も口を聞いたことはなかった。

しかしスミレの噂はよく耳にしていた。校内一の美女と名高い、しかし校内一の口の悪さを誇るスミレは、学校の有名人だったのだ。

「僕に何か用ですか?それから、その新譜は返してください、まだ発表前の物なので」

「ミキタカくん?」

スミレはニヤニヤしたまま、新譜を返してよこした。

その態度に、温厚な未起隆も少しだけ反感を覚えた。だが、続けて口にされたスミレの言葉に驚愕し、そのかすかに覚えた反感は、すぐにどこかに消えていった。

「支倉未起隆くんだっけ?……それとも、本名のヌ・ミキタカゾ・ヌシ君って呼んだ方が、いいかしら?」

「なっ……なんですって?……ボクはそんな名前じゃあないですよ、僕はモーリス・シャイニングスターです」

とつさにバンドのボーカルとしての名前を口にして、誤魔化そうとした未起隆の口を抑え、スミレは 未起隆の『本当の名前』をささや

いた。

「それは『設定』でしょ、ヌ・ミキタカゾ・ヌシ君」
「……」

凶星をつかれ、未起隆は口ごもった。

もともと、未起隆がバンドをはじめたのは、実は理由があった。

それは、自分が『宇宙人である事』をごまかすためであったのだ。

未起隆は、『宇宙人である事』をごまかすために、『バンドの《設定》としてあえて宇宙人を名乗っている』という事にしていったのだ。

学校では、未起隆は、宇宙から来た伝説のスター ジギー・スターダストの弟の友達の知り合い………のモーリス・シャイニングスター という設定であった。

だから、未起隆の本当の名前を知る人は、いないはずだったのに……

観念した未起隆は、スマレにその『秘密』を黙っていてくれるように頼んだ、
スマレは快諾した。

そして、そのときから、二人の『奇妙な』友人関係が始まった。

少々意外だったことに、スマレは未起隆を『普通の友人』として付き合ってくれた。未起隆が宇宙人だという事をまっすぐに受け止め、でもだからと言って地球人相手とかわらない態度で、接してくれたのだ。

二人は、いつしか親友といえるまでに仲良くなっていた。

何といっても、これまで自分の中だけに秘めていた、他の人とは共有するすべもない『秘密』を互いに共有したのだ。仲良くなるのも当たり前だった。

二人は、未起隆のバンド活動の合間をぬって互いの近況を交換したり、先日見た映画の事や、受験の事、気に入った音楽の話、時にはコクサイジョーサー等を語り合った。

スマレは未起隆に、彼女の驚くべき『秘密』を色々打ち明けてくれた。

今まで両親代わりのお爺さんとお婆さんにさえ話したことのない、

その孤独な過去を、未来が見えると言うその能力の事を。

未起隆も、彼女に色々な事を話した。

(最近よく怒られるが)地球人の仮の「父」と「母」の事をどれだけ大事に思っているのか

好きな音楽

空から見る星の美しさ

星を見たときに1人この星にいると感じる孤独

そして思ったものに変身できるスタンド能力：アース・ウインド・アンド・ファイヤの事を。

スマレは、彼女の最も大事な秘密『予言』の事さえも、未起隆に話してくれた。

17歳になったら「騎士」が迎えに来る……

その予言は一見、現実と想像の世界の区別もつけられなくなった、夢見がちな女の子の『痛い』妄想のようだ。

だが、未起隆はそのスマレの言葉を信じた。

それは、彼女の「能力」を知っていたからであり、そして、スマレが未起隆が宇宙人だという事を、信じてくれているからでもあった。

スマレ先輩が同じ高校にいてくれたおかげで、どれだけ楽しかったか。

だがそんな『楽しい』日々は、ある放課後、『サイレンの音に気持ちが悪くなって未起隆が変身した所』を、うっかりファンの子に見られてしまった事で、簡単に終わりを告げた。運の悪いことに、未起隆の『変身』を見た女の子が校内一のおしやべりで……



もう止そう。

未起隆は、不快な記憶を頭から追い払った。

あの時の事は思い出したくない。思い出しても仕方がない。

なんととっても、今の未起隆には信頼出来る仲間が大勢いるのだ。

今の未起隆の仲間には、東方仗助、虹村億泰、広瀬康一……その他、気のいい、そして頼りになるスタンド使いが大勢いた。彼らもまた、

スマイレと同様に安心して未起隆の秘密を明かすことができる、仲間たちだ。

ちなみに、前回の反省をこめ、今回の学校ではスタンド使い以外には軽い洗脳をかけている。それは未起隆が宇宙人だと言っても、変身するところを見られても、それはすべて見間違いか冗談だと感じさせるための洗脳であった。

と、上の方から億泰の声が聞こえた。気がつく二人の足も止まっているようだ。未起隆は物思いを中断させ、スマイレと億泰との会話に意識を戻した。



「なんだあ、この小屋は」

億泰は、眼下に見える無残に破壊された小屋を見て、首を傾げた。

「一体何が起こったんだろうな……俺にやあわからねえが」

億泰とスマイレは樹上から飛び降り、その小屋の近くに立った。

その小屋は、天井がぐしゃりつぶれ、ドアが細切れの木片にされて地面に散らばっていた。壁の所々に硬い物を突き刺したような穴が開いているのはなんでだろうか？ 所々焦げた所もある。

「私にもわかりません……何か、恐ろしい戦いが起こった後のようにも思えますね」

二人の靴からは、未起隆の声が出た。自分の足元から、人の声が聞こえるのは不思議な感覚であった。

「……別荘だったのでしょうか、家具とか、照明とか、色々豪華な物がありますね」

「なんであれ、あのおばさんの仕業ではないわ」

スマイレが言った。

「なら、ほっておいていいわよ。先を急ぎましょ」

「WitDが教えてくれたわ」

スマイレが言った。

「私たちが目指す場所は、あと半日もかからずに着くはずよ。きつと今夜中につけるわ！……こんなところでぐずぐずしないで、先を急ぎましょ」

ところが、スマイレの提案に反対するように、ブルンとスマイレと億泰のはいていたシューズが震え、未起隆は、本来の姿に戻った。

「僕は、これ以上進むのは反対です。……スマイレさん、今日はここで休みましょう」

未起隆が言った。

「ちよつとオ、そんなわけにはいかないわよオ」

せつかくここまで来たのよ、とスマイレが言った。

「もう少しだけ……もう少し、進もうよ」

「スマイレ先輩、あせる気持ちはわかります」

未起隆は諭すように言った。

「でも、考えてみてください。僕らには追っ手がいます。ここなら、少し補強すればいい守りができます。僕は、今日はここで休むのが、いい考えだと思います」

「でも、ネズミ対策はどうするのよ」

スマイレが食い下がった。

「こんなところに隠れたって、絶対ネズミに見つかるわよ。それより、先を急いで『彼』に会いたいわ」

「確かに、ネズミから何時までも隠れることは、できません」

未起隆が言った。

「もうすでに見つかってるかもしれません……でも、どうせ見つかってしまうなら、防御に適したところで、あのオバサンを待ち受けるのがいいと思うんです」

スマイレはお手上げ、と言うように頭を振ると、億泰の方を向いた。

「……億泰、ミキタカゾはああ言っているけど、億泰はどう思う？ やっぱり、先にどんどん行くのがいいわよねえ」

「スマイレ先輩……俺は頭悪いから、どっちがいいかわかんねえ」

億泰が言った。

「だがよオ、もうすぐ暗くなるぜ。この先ちよつと進んだくらいで、ここよりもっといい場所なんか見つからねえかも知らねーぜ」

「……………2対1ね。わかったわよッ！」

スマイレがぷんとむくれて言った。

「じゃあ、早速その補強って奴をやっちゃってしまいましょ……で、何すればいいの?」

「まずは壁と天井を直して……それから落とし穴が要りますね」

未起隆が考え、考え、言った。

「どうやって直すの?作るの?」

「そうですねえ……宇宙で待機している本部に相談してみましょうか。あー本船・本船・応答セヨ」

未起隆は、右手首についている時計に向かって話しかけ、しばらく時計に耳を寄せた後、真面目な顔で、しかし少し困ったように……
「宇宙船 本船からの支援は受けられません。自分たちで何とか考えられないようです……どうしましょうか?」

と、言った。

「ちよつとー!」

「ああ……壁はあの崩れているレンガを積みなおせば、いいですね」

未起隆は、のほほんと言うと、壁に煉瓦を積み始めた。

「億泰さんは……」

「わかってるぜえ。落とし穴を『削り取れば』いいんだろ」

そう言う仕事は、おれのスタンドに任せろ。億泰はそう言って、張り切って建物の周囲に深い落とし穴を作り始めた。

「もうっ」

スマレは腰に手をあてて、二人を睨みつけた。

「もともと、ノーアイデアだったんでしょ……まあいいわ……天井にレンガを貼り直すのは無理ね……私は天井を塞いでみるわ。折れた木か何かで」

「プーダー!」

インピンがスマレの懐から飛び出して、ふわりと床に着地した。



ゴスツ!

その夜。屋根の上で見張り役を務めていた未起隆の耳に、何かが落とし穴に落ちたような音が聞こえた。

未起隆は緊張し、身をこわばらせながらしばらく耳を澄ました。す

ると、かすかにののしり声が聞こえてきた。

やはり侵入者だ。未起隆は、屋根をふさいでいた木の枝を持ち上げた。開いた隙間から、するりと建物の中に入り込む。緊張のあまり、心臓がバクバクと悲鳴を上げていた。

スマレは未起隆が起こす前に目覚めていた。すでに月明かりの下で猟銃に弾を込めている。スマレもまた、緊張のあまり、すっかり青ざめた顔であった。

億泰も、未起隆がつつくとあつという間に目を覚ました。

事情を呑み込んだ億泰は、険しい顔で窓を睨みつけていた。

「危険が迫っているビジョンが観えたわ。敵は一昨日のおばさんだけじゃあない、もっと恐ろしい奴が一緒に来てるみたい……」

スマレの額には、三つ目のような、それとも蝶のようなスタンドビジョンが張り付いていた。それは、洋楽好きの未起隆がウィスパール・イン・ザ・ダーク (WitD) と命名した、スマレのスタンドだ。そのスタンドの能力は、予知だ。

WitDはパタパタと飛び、……地面の砂に何やら模様を描いた。WitDが描いた模様には三人の人間が、一匹の犬のような怪物を連れている様子が描かれていた。そのうち一人の人間は、他の二人の二倍は背が高かった。

「ほら、アナタたちにも見えるでしょ……これが敵よ」

「なるほどお、とにかくこいつらを倒せばいいんすね」

億泰は、バンバンと、派手に自分の顔を叩き、気合いを入れた。「俺はもう小屋の外に出るぜ、奴らを迎え撃つてやらあ」

やってやるぜ。億泰は至って真剣な表情で、小屋を出ていった。

「ミキタカゾ、私たちも手筈通りにやろう」

スマレは未起隆を連れ、億泰を追って小屋の外へ出た。

外は真っ暗で、だが雲の切れ間から月明かりがうつすらとさしていた。

ゴウゴウと、三人が寝ていた小屋を囲む木々が揺れている。

昼間は美しく思えた木々の梢が、今はどうしてこんなにも、恐ろしく見えるのだろうか？

◆◆
待機の時間は、さほど長くはなかった。

スマレ達が小屋の外に出てから約10分後、待ち構えていた億泰の前に、大きな影が姿を見せた。

ネリビルと、ネリビルが操るクリーチャーだ。

「今度はまた、ずいぶんでかいペットちゃんだなあ〜」

あの犬っころは連れてこなかったのかよ。 億泰は現れたネリビルに言った。

ネリビルは、巨大なマンドリルの頭の上に載っていた。

バオー・ドッグにやられて失った両腕には、銀色に輝く義手をつけていた。

ヌ・ミキタカゾ・ンシ（支倉未起隆） その2

「マーチン2世ちゃんよ。かわいいでしょ」

ネリビルは、うつとりと巨大なマンドリルの頭をなげた。

「ふふふ、ようやく見つけたわ。あんたたちもう逃がさないからね……スミレちゃんも、そんなに怖がって顔を覆ってたって、仕方ないわよお」

隣にいた“スミレ”……が顔を覆ったまま、たじたじと後ろに下が
り、億泰の背中に隠れた。

「あらら、ずいぶん内気なのね……あなた、そんな子だったかしら？」

まあいいわ、ネリビルが首をかしげた。

「ところで、もう1人スタンド使いの男の子がいたわよね……ほら、あのロープと一体化出来る能力の彼よ。彼はどこ？あのハンサムボーイ……あの子にも、この両手のお礼をしないとねええッ!!」

ネリビルが喚いた。

「おいでッ。モーリンッ！このガキの相手をお願いっ」

ネリビルの呼び出しに答え、年老いたマッチョ男が、マンドリルの陰から現れた。

「出番か……しかし、ずいぶんとまあ、頭の悪そうなガキの相手だな」
年老いたマッチョ男：モーリンが、しわがれ声で言った。ネリビルと同じように、日本語だ。

「今回は二対一だ、勝ち目は無い……警告する、死ぬか、五体満足でスミレを手渡すか、どっちを選ぶ？」

モーリンは、億泰に向きなおった。

「へっ……お前こそ。俺のスタンドはつえええぞ。ジジイだからって容赦しねえ〜」

億泰は、スタンド：ザ・ハンドを出現させた。

「……お前たちをぶったおしてやるぜえ〜。二対一だあ？そんなの関係えねえッ」

「そうか……では、死ねいッッ！」

モーリンは、不意を衝いて億泰に蹴りを放った。

スタンドによるものではない、生身の足での攻撃だ。

「があああー！」

不意を撃たれ、蹴りを喰らった億泰が吹き飛ぶ。

すかさずモーリンはスタンドを出現させ、ザ・ハンドに組み付かせた。

「これで、お前を守るはずのスタンドも、『抑え込まれた』と言う訳だ」

モーリンは、再び生身で億泰に蹴りを入れた。

老人とは思えない、鋭いけりだ。

「糞があ」

億泰は、蹴りを受けながらも、モーリンの足を抱え込んだ。

「ジジイが、無理してんじゃねえぞッ」

億泰は、モーリンの抱え込んだ足を払おうとした。

その時、モーリンは格闘家のように複雑な動きをみせた。

いつのまにか、足を抱え込んだはずの億泰が、逆にモーリンにくみしかれ、関節をかためられていた。

何が起こったのか、億泰にはよく理解できなかった。

モーリンの関節技は、億泰の首を、肩を、足首を完全に極め、絞っていた。

億泰が暴れるたびに、モーリンの関節技がますますきつくしまつて行く……

「若者よ。頑張ったじゃあないか、しかし負けを認めて大人しくしていた方が楽だぞ」

「うるせえぞ、この野郎！」

億泰は、力で無理やり関節技を振りほどこうとした。

だが、その動きを利用され、億泰はモーリンに首を絞められてしまった。

酸欠で目の前が真っ赤に染まり、まぶたの裏がチカチカしてくる。力を入れようとしても、なかなか力が入らないのだ。

「ほほーっ。さすが若者、中々のパワーじゃな。しかし、無駄な努力よ」

モーリンが嘲笑った。

「お前の技と力では、俺のホールドから抜け出ることはできんわ」
悲しいかな、モーリンの言葉は正しかった。

億泰は必死に暴れたが、暴れるが暴れるほど関節がさらに深く極められていく……

やがて、億泰はグツタリとして、抗うのを止めた。

「ようやくあきらめたか……ヨシヨシ……てこずらせおつて」

モーリンが満足そうに言った。

ぐったりとした億泰に、モーリンが止めをかけようとした。思いつきり体をそらし、億泰の首を締め上げる。

その時、へつと億泰が笑った。

「ああ、あきらめたぜ。俺あ頭悪いからよお。一度に二つの事はできね〜のよ……だから、もうあきらめたんだよ」

「おお、愁傷なことだのオ」

ヒヤヒヤヒヤ。モーリンが笑った。

「だから……あきらめたぜえ〜ツ ステゴロの方はよお！」

億泰の目が、光った。

ガボンツ！

突然、モーリンの左肩が、そして左腿がえぐれた。

「!?なんだとお!!!」

痛みに耐え切れず、モーリンは億泰のホールドを解いた。傷口を押えて、地面を転げまわる。

その隙に、億泰は立ち上がった。

億泰の背後では、億泰のスタンド・ザ・ハンドが、プラネット・ウエイブスを組みしいていた。

プラネット・ウエイブスの左肩と左腿が、モーリンと同じように不自然にえぐれていた。

ザ・ハンドが、削ったものだ。

「貴様ツ……集中していたな。スタンドの操作に」

地面に突っ伏したモーリンが、億泰を睨みつけた。

「俺のスタンドの攻撃は、痛てえからよお〜お前、俺のザ・ハンドに勝てると思つてたのかヨ……!?!」

億泰は、モーリンを見下ろした。

その時……

ドウオンツ!

今度は、立ち上がった億泰の左腕に、突然『孔』が空いた。

500円硬貨を一回り大きくしたような孔だ。

その孔から、血が噴き出してきた。

「ウオオオオ!!——痛ってえ……なんだこりや。やつべえー」

やられちまったぜえ。

何が起こったのか理解できないまま、億泰は傷口を抑え、膝まずいた。

ドオオンツ!

その億泰の左足に、またしても、500円硬貨大の穴が一つ空いた。

ドドウワンツ!

そしてもう一つ、左脇腹が抉られるツ!

「ガッー」

たまらず、億泰は地面に這いつくばった。

その足元に、見る見るうちに血だまりができていく。

「ハツハハ。何だってえ? 『お前のスタンドに勝てると思ってたか』
だ っ て え?」

モーリンは、噴き出る血を抑えながら笑った。

「もちろんだ」

「こ……このやろく〜」

億泰が怒鳴った。

「てめー何しやがった。答えろツ!」

「お前は、我が攻撃をまともに食らった……いいだろう、教えてやろう」

モーリンは、億泰の腰を踏みつけた。

「……我がスタンド、プラネット・ウェイブスは、『宇宙から隕石を呼び寄せることが出来る』能力なのだツツ! 貴様の体の孔は、わがスタンドが呼び寄せた隕石が、作ったものよ」

「な……なんだとお……」

「だから少年よ、もう立つな。今は、警告の為に敢えて致命傷を与えなかった。だが、次に立ち上がったら、容赦なくお前の土手っ腹を、打ち抜く」

降参しろ。

モーリンは、億泰を見下ろした。



「アンタも、おとなしくしてなさいよッ」

マーチンの上に乗ったまま、ネリビルは、億泰の陰に隠れていた”スミレ”を捕まえた。

「見て……あんたたちに奪われた両腕に、義手をつけたのよ……これ、手首から銃弾を撃てるの。……便利でしょ」

アナタの体に銃弾を撃ちこんだら、静かになるかしら。

ネリビルは、”スミレ”の手首をねじった。

手首をねじられ、酷く痛いはずだ。しかし、特に反抗をするでもなく、”スミレ”はおとなしくしていた。

「あら、素直ね。珍しい……でもね、容赦しないわよンン」

ネリビルは石を拾って、”スミレ”の頭をその石で殴りつけた。

「ガッ……」

男のような悲鳴を上げて、”スミレ”が這いつくばった。

「まだよ、こんなもんじゃ、許してあげないわ」

ネリビルは、ねじった手首を引っ張り、無理やり”スミレ”を立ち上がらせた。

「チェックメイトだな、坊主」

モーリンが、億泰をさらにグリグリ踏みつけた。

「俺は一度、土下座ってやつが見たかったんだ……やってみろよ」

「けっ、言ってる、ダボが……」

億泰が、ペツと唾を吐いた。

と、その時、”スミレ”が動いた。

「違いますね……チェックメイトは、そちらですよ」

スミレの声ではない、男の声だッ。

”スミレ”は思いのほか素早い動きで、身をねじって、ネリビルの

手から逃れた。

捕まえようとするネリビルの前で、”スミレ”が、顔を覆っていた手をほどいた。

その奥からは、奇妙に劇画調の、スミレのよう……な？顔が、姿を現した。

「……誰、あんた……騙したわねッ！」

「よくぞ聞いてくれました、実は私、宇宙人なんです!!」

劇画調の”スミレ”が、真顔で答えた。

「きさまあ、真面目に答えろッ！」

モーリンが吼えた。

ネリビルの目も、怒りに燃えた。

カントリー・グラマーが出現し、金切り声をあげる。

『K y a a a a a a a a a a a a a a a a!』

その叫びに呼応するように、マーチンが動く。その巨体からは信じがたい速度だ。

マーチンは未起隆に飛びつくと、未起隆の喉を締め上げた。

「グブツ……」

「マーチンちゃんの手にかかって、死になさいッ」

「グブツ……それは、困ります」

突然未起隆の体が、『蛇』に変わった。

蛇は、締め上げようとするマーチンの手を、するりと逃れた。

蛇の動きは止まらず、思いのほか素早い動きで、完全にマーチンから離れた。そして、するり、するりと動き、隣にいたモーリンをがんにがらめに縛りあげた。

「なっ……なんだとっ」

蛇は、暴れるモーリンをもともせず、木の上につるし上げた。

続いて、奇妙なことに、モーリンの真向かいの大木から、『木の枝』がグングンと伸びてきた。

その木の枝が、モーリンの右肩に触れた。

「?ンンンウツ??」

モーリンが首を傾げた。

枝の先が、四つに割れ、開いた。

タ——ンツ!!

次の瞬間、乾いた音と共に、『枝の先』から弾が飛び出した。

モーリンの右肩が、打ち抜かれるツ

続けて、モーリンの左腿・右腿へと、枝が伸びて行く。

そのたびに、枝が触れた箇所が、打ち抜かれるツ!

「グアアッ!」

モーリンの体が痙攣した。

「キツキイ——ツ」

モーリンの真向かいの木の樹皮が、バラリとはがれ、木の隙間からインピンが顔を出した。

インピンは、にらめっこのように頬を膨らませている。

さらにその奥から、猟銃を構えたもう1人の『スマレ』が、現れた。

「あんたこそ動かないで、……、次は急所を狙うわよ……このノータリ
ン」

木の上で、『スマレ』がモーリンに警告した。

「貴様……既に仕掛けていた。と言うことか」

モーリンが、苦々しげに言った。

「フフフ……」

猟銃を構えた『スマレ』を覆っていた木の皮が、はがれた。木の皮は、はらりと劇画調の“スマレ”の顔にかかった。

木の皮は“スマレ”の顔を覆い、変形し、そして現れたのは、未起隆であった。

「驚きましたか?」

「やるじゃあない」

ネリビルはうなつた。

「ロープと一体化できるわけじゃなくて、何にでも変身できる能力つて訳ね……しかも、複数同時に……アナタ、凄い能力を持つてるのねえ。……そうだ、私たちの仲間に入らない?」

「いえ、結構です。それに、私の星では、みんな同じ事が出来るんですよ」

私は、特別な能力を持っているわけではありません……と、未起隆は大真面目に言った。

「形勢逆転って奴よ」

木の上から、スマレが言った。

「わたしたちの勝ちよ。あきらめて、投降しなさい。オ・バ・サ・ン」
「本当う？」

ネリビルが笑った。

「あなたあ、ホントに本気でそう言ってるのお？おめでたいわね。
……フフフ……スマレちゃん、悪いけど形勢を逆転させてもらうわよ。……モーリンッ！わかつてるわね」

「おおおッ、プラネット・ウェイブス！あの木を、……打ち抜けッッッ!!」

モーリンが叫んだ。

ベキッ！

すると、スマレが隠れていた大木に、突然大きな穴があいた。

バリベリベリ

大木はけたたましい音を立てて、へし折れ、未起隆とモーリンの上に降り落ちるッ！

「なんですってエッ？自分も巻き込まれるのに……イカレてるわ……」

スマレは、啞然としてモーリンを見た。

「ウワツハハハハ……わが主、わが救世主のためッ！我がすべてをささげるッッ」

モーリンは満足げに、大木が自分の上に降りかかるのを見ていた。
「ひゃやひゃひゃひゃあああ」

倒れ墜ちる大木の影から、モーリンの狂ったような笑い声が響く。
本物のスマレは、まるでお手玉のように、木から投げ落とされていた。

インピンが、地面に向かって落ちていくスマレのパーカーから、飛び出した。

空中に飛び出したインピンは、尻尾を膨らませて、ゆっくり地面に

降りていく。

未起隆は、その様子を確認してほっとした。あの様子なら、インピンは怪我もせず降りてこられるだろう。

だが、スマイレは危ないッ！

「スマイレ先輩ッ。つかまってください」

蛇に変身してモーリンを縛り上げていた未起隆が、動いた。

崩れかかる大木の下で、未起隆はモーリンを放し、蛇から元の姿に一瞬で戻った。

そして、右手をフック付ロープに変身させた。

未起隆はそのフックを別の木にかけ、力いっぱい引っ張り、スマイレに向かって飛んでいくッ！

ブウンッ！

未起隆は、振り子のように身を揺らして、上から降ってくる大木をかわした。

一方、未起隆に解放されたモーリンは、何もできないまま倒れ落ちる木にぶつかり、地面にたたきつけられていた。

その上に、先ほどモーリンが自分で打ち抜いた大木が、折れ重なった。

モーリンの体が、大木の下敷きとなる。

モーリンの口から響いていた笑い声は、絶叫に代わり……うめき声となり……そして止まった。

「なっ……またお前か……許さないわよお。泣いてもッ、わめいてもッ、あんたを殺すッ！」

上を見上げ、ネリビルが吼えた。

スマイレは、未起隆にだきかかえられ、かろうじて地面に落ちる事から、のがれていた。

「ミキタカゾ、アンタも怪我してるのに私を救ってくれてありがとう……」

「僕は大丈夫です。僕は宇宙人ですが……『男』です。ちよつとの怪我がくらいなら、我慢できます」

未起隆が、頭の血をぬぐいながら言った。

スミレを助けたときに、上から降ってきた木片で怪我をしたのだ。「それより、スミレ先輩は怪我ありませんか」

「アンタのおかげで、怪我はないわ……でも、なんて奴なの、自分を犠牲にしてまで、私たちを道連れにしようとするなんて……」

スミレの足元には、自ら撃ち抜いた大木の下敷きとなったモーリンの腕が見えていた。

ぐったりと力を失ったモーリンの体。その横でピカピカ光っているCDが、妙に場違いに見えた。

モーリンの私物だろうか？

そんな場違いな考えを頭から追い払い、スミレは未起隆の手をひき、木の上に移動した。

安全な木の上に移動すれば、怪我をしている未起隆の負担も、少しは軽くなるはずだ。

「億泰さん、こっちは任せてください」

未起隆が、足元の億泰に声をかけた。

「……未起隆、よくやったぜ。いいか、そのままスミレ先輩を地上に下すんじゃねえぞ……後は、俺に任せな」

「悪運の強いガキどもだッ」

ネルビルは億泰に背を向け、スミレと未起隆の方を見上げて、喚いた。

「こんな悪いガキは、たっぷり血を吸っておしおきしてやるろりりりりいいいい!!」

奇声であった。

（うっげえ〜あのオバサン、すっかり頭のネジがとんでるぜえ〜相手したくねえ……）

しかし、億泰は勇気を奮って小石を拾い、ネリビルに投げつけた。

バシッ！

小石は命中した。

ネリビルはゆっくり振り向き、じろりと億泰を睨みつけた。

小石があたったところから血がタラリと落ち、ネリビルはその血を

ペロリと舐めた。

「この……ビチグソ小僧がああッ！ マーチンちゃんッ」

ネリビルは憤怒の叫びを上げながら、カントリー・グラマーを出現させた。

カントリー・グラマーはマンドリルの耳元に取りつき、なにやら囁いた。

マーチンは、カントリー・グラマーの指示にウギイと吠えた。

そして空高くジャンプすると、億泰の頭上からおそいかかった！

「億泰ううう、先ずは手負いのあんたを倒す事にしたわッ！」

「何言ってやがる」

億泰は鼻で笑って、ザ・ハンドをマーチンに突っ込ませた。

「俺の右手は、無事なんだぜえ〜」

「gugYIIIIIIIIII！」

マーチンは人間の太ももほどもある杭を口から吐き出し、億泰に投げつけたッ。

ガオンッ

すかさずザ・ハンドの右手が唸り、杭を消滅させた。

「唯の猿が俺様におそい掛かるなんて、百年早いぜ」

ザ・ハンドはマーチンを蹴り飛ばした。

そして、とどめを刺そうと、右手を振りかぶる。

そのとき、マーチンの背中からサッカーボール大の火の玉が出現した。火の玉は、億泰に向かって飛んできたッ！

ボオムンッ！

「うおおおおおお！」

かろうじて億泰は火の玉を避けた。だが、億泰の頭は、まるでアイパーをかけたかのようにチリチリになっていた。

「このエテ公ッ！ただじゃあおかねーゾッ」

「ザ・サン……」

ネリビルが言った。

「それがマーチンちゃんのスタンドの名前よ……とっても強いわよお」

ザ・サンは、マーチンと億泰の中間をフラフラと浮かんでいた。火の玉の発する熱で周囲の空気が揺らぎ、辺りの景色がゆらゆらと歪んで見えた。

「ザ・サンだとお。俺様のスタンドと似たような名前を付けやがって、この真似っこ野郎があ！」

削ってやる。

億泰とザ・ハンドが火の玉に向かっていくと、火の玉は2、3度膨らみ、一筋の炎を吐き出した。

幸い狙いは外れ、炎は億泰に当たらなかった。

しかし、炎の熱で億泰の上着が引火した。

「コノヤロー、ノーコンのくせにスゲー火力じゃねーか」

億泰は上着を脱ぎ捨てた。

脱ぎ捨てた上着はあつという間に燃え尽きて、後には灰だけが残った。

「あら……意外と器用にかわすのね」

「あつたま来た。もう手加減しねえ、思いつきり削ってやるぜ」

億泰のザ・ハンドと、マーチンが激突するッ！

触れたモノをこの世界から削り取るザ・ハンドの右手と、

凶暴な野生の力が込められたマーチンの牙、

そして、凄まじい熱量の火球：ザ・サンの放つレーザービームとが

交錯するッ！

ギヤアアア！

悲鳴を上げ、先に倒れたのはマーチンだった。

ザ・ハンドによって、マーチンの右腕の肩から先は、完全に削られていた。

マーチンは、傷口から激しい血を噴出させ、ドウツと倒れた。

「どうだ！……つつ痛てえッツ！」

倒れたマーチンを見下ろす億泰は、すぐに足を抑えてうずくまった。

億泰の足が、反対方向にねじれていた。

ヌ・ミキタカゾ・ンシ（支倉未起隆） その3

「Gi・Ga……」

「いやあねえ、もう」

億泰にやられて息絶え絶えのマーチンを、ネリビルが軽蔑したように見下ろした。

「この子、もう、使えないじゃあない……。あなたア……。かわいいマーチンちゃんを、よくも殺つてくれたわねえ」

億泰を睨み付けるネリビルの目は、憎しみにゆがんでいた。

「でも、これであんたもおしまいね……。動けないものね」

ネリビルは義手の先を億泰に向け、弾丸を発射した。

バシユン！

ガオンツ！

「チツ」

億泰は、しやがんだ姿勢のまま動けないッ！

しかし、ザ・ハンドの右腕が、かろうじて飛んできた弾丸を削った。

「お前なんて、片手、片足ぐらいで、丁度いいんだよお！」

「アハハハ……。あなた、もしかしたらマーチンちゃんを殺ったから、安心してない？ 甘いわねえ……。私の武器が、この義手だけだと思ってるのお？」

ネリビルは、懐から二つの瓶を取り出した。

「何だあ、そりやあ？」

億泰がせせら笑った。

「哺乳瓶か？ のどが渇きでもしたのかよ」

「フフフフ……。あなた、D I O様の事を聞いた事、ある？ D I O様の持つ『不死身の肉体』に、秘められたお力のことを」

ネリビルは、勿体ぶって瓶の蓋を開けた。そして、瓶中の液体を半分飲み干し、残りをマーチンの肉体に振りかけた。

続いて……。別の瓶からウネウネと蠢く奇怪な生物をつまみ出し、マーチンの上に、ポトリと落とした。

奇怪な生き物は、マーチンの眉間に、潜り込んでいく……

「おめー……何だ、それは？」

億泰から、笑みが消えた。

「フフフ……これはね……DIO様のお身体の一部よ。DIO様が我が組織をお仲間に入れて下さった時に、我らに授けてくださったの。それを、大切に培養してたつてえワケ」

「DIOさま……だあ？」

「そうよ、我らの主、DIOさまよ。今の我々はね……」

ネリビルが真つ青な顔で言った。

何を飲んだのか、手足がガタガタ震えだしている。

「……今の我々は かつての——DRESS—Destruction
& Regeneration Enforcement Secret Society (破壊と再生の秘密執行機関) じゃあ無いの。…… 今の我々は、DIO RESURRECTION SECRET SOCIETY (DIO様復活の為の秘密結社) —— DRESS——

我らはDestiny Ruler Enforcement
to Serve as Slave (運命の奴隷) —— DRESS——

……われらが闇のMaster、Messiah、Maitrey
a であられるDIO様を、再びこの地上に呼び戻すための組織……
なのよ」

(??……何を言っているのかさっぱりわからねく)

だが、ネリビルが話したことの中にも、『一言』だけ、億泰に理解できる言葉があった。

その言葉を、聞き流すことはできなかった。

ト ト ト ト ト ト ト ト

「おい……今なんて言った」

億泰が凄んだ。

「……お前、今、DIOって言いやがったのか？てめーまさか……今の
は……あれかッ……」 『オヤジを壊し続けている』 『あれかッ!!』

「フフフ——よくできました、正解ヨ」

ネリビルは、億泰にウインクした。

挑発的に腰をくねらせ、空瓶を億泰に向かって振りたてる。

「そうよ——ここには、アナタのお父さんに『植え付けられていた』のと——いえ——アナタのお父さんを『ぶっ壊した』のと、同じものが、入っていたわよお!!」

ネリビルはもったいをつけながら、ささやく様に、一語、一語、はつきりと区切って

『N I K U N O M E (肉の芽) ♡』

と言った。

「コ” コ” コ” コ” コ” コ” コ” コ” コ” コ” コ” コ” コ” コ” コ”

「何……だ……と」

「フフフ……たしか、あなたのお父さん——虹村塚さんって言ったかしら?——は、D I O様の肉の芽が、暴走してしまったのよねえ」
かわいそうに と、ネリビルが付け加えた。

ネリビルの声は、いつの間にか絞り出すような、しわがれ声になっている。

「てめーが、親父の事を口にするんじゃないよ」

億泰は歯を食いしばった。

ねじれた足に体重をかけないよう、ほとんど片足で立ち、ネリビルを睨みつける。

「てめーに何がわかるッ」

思い出す灰色の日々

……父親が日に日に言葉を、人間性を、人としての品性を失っていくのを、ただ見るしかなかった絶望の日々のキモチ

そして、不意に父親がまともな言葉を取り戻し、『これですべてが良くなる』と喜んだ時のキモチ

だが翌朝起きてみると、父親が完全な『化け物』になっていたとき、そして、一切の意思疎通が不可能になったと判った時のキモチ

その時の兄貴の顔を見たときのキモチ

……友達と一日楽しく遊んだ後に帰った我が家で、怒り狂ったアニキが、腹立ちまぎれに父親を蹴飛ばしている光景に出くわした時のキ

モチ

……その時の父のまるで人間とは思えない泣声

……父を殺すために兄が闇に堕ちた事に気づいた日の、悲しみ、悔しき

……最後の最後で、自分をかばってくれた兄の最後の言葉

……そして、今の少し落ち着いてきた父

そして、幸せだった時の記憶、母と、父と、兄貴と楽しく遊んだ時の、大切な思い出。

(誰にも、どんな奴にもよお、『俺の家族』に、わかった口はきかせねえ〜)

億泰は、ヨロヨロとビッコをひきながら、ネリビルに近づいていく。

「あら、気を悪くしてみたみたいね……。ごめんなさいネツ……。でも、私も引き返せないのヨ。覚悟しなさいね……」

ネリビルの声はどんだんかすれていき、そして……

「!?ギャアアア!!!」

突然ネリビルが、絶叫した。

あつけにとられている億泰たちの目の前で、ネリビルは、恥も外電もなく絶叫を上げ、手足をバタバタと暴れさせ……。地面を寝転がり、のたうちまわり……

不意に、絶叫が止まった。

そしてネリビルは、まるで『先ほどまで暴れていたことなどなかった』ように、冷静な顔で立ち上がった。

同時に、先ほど倒したはずのマーチンが、また立ち上がった。

「まあーたあーせえーええーたーわあーねえ——」

ネリビルが、凶気の笑い声をあげた。

「すぐに済むわ。私自らあんたの血を吸ってあげるからなあああ

A A A A!

「なッ……。なんだ、お前達は?」

いかれてるのか?億泰は思わず気押しされ、後ずさった。

キャハハハハッ

ネリビルは、笑い声を上げながら、億泰に向かって飛び込んできた。

自分の生身の両手で、殴りつけてくるッ
ガボッ!!

それは、ただの生身の攻撃のはずであった。
だが、スタンドで防御したにもかかわらず、億泰はネリビルのパン
チ力に押され、後方に押し込まれた。

「ぐうっ……やつかいなことになったぜえ」

「ぎいやあああー!」

そこに、マーチンの背中から、野球ボール大の火の玉が飛び出して、
再び億泰をおそった。

「あぶね〜」

とつさにザ・ハンドが、火の玉をかき消す。

「隙ありッ!もらった!!」

ネリビルが、億泰に殴りかかるッ!

億泰は体勢が崩れている。避けられそうもない。

その時……

タ ー ン!!!

弾かれたように、ネリビルの体が後方に吹き飛んだ。

スマイレが木の上から、猟銃でマーチンと、それからネリビルを狙撃
したので。

「億泰君ッ!」

スマイレが叫んだ。

「大丈夫?」

「スマイレ先輩……いや、助かった……ゼ……?」

スマイレの撃った銃は、確かにどちらも命中していた。

しかし、猟銃に撃たれたマーチンも、ネリビルも、どちらも額から
血を流しながらも平然としている。

「コ” コ” コ” コ” コ” コ” コ” コ” コ” コ” コ” コ” コ” コ” コ”

「……あなた……人間ですか?本当に、地球上の生き物ですか?」

未起隆がつぶやいた。

「アハハハアア!」

ネリビルは、人間とは思えないほどの高さまで跳躍した。木の上に

いたスマイレを、軽々と抱え上げた。

「!?放せッ、このクソババア!大ぶすッ!……へちやむくれの、腐った
饅頭ヤロウッ!」

「やっぱりあんた、いい根性しているわね」

ネリビルは、暴れるスマイレを簡単に抑え込んだ。

「させないッ!」

未起隆が、ネリビルに掴みかかった。

「フッフ、無駄よ。ばあーい……ハンサムボーイ」

ネリビルは、抵抗しようとする未起隆を蹴り飛ばして、義手に仕込んだ弾丸を撃ち込んだ。

危ないッ!

未起隆は、とっさに紙飛行機に変身して弾丸をよけた。

しかし、もう一発ッ

二発ッ

ついに、ネリビルの放った銃弾が紙飛行機の翼を打ち抜いた。

翼を赤く染めた紙飛行機は、ふらふらと少しだけ飛んで――地
上に墜ちた。

「キヤアアアア!」

ネリビルに捕まったスマイレが、悲鳴を上げた。

「ミキタカゾ!大丈夫?」

「スマイレさん、すみません……億泰さん、スマイレさんを守りきれませんでした」

地面に落ちた紙飛行機が、未起隆の姿に戻った。

未起隆は、右手を抑えてうずくまっている。

その右手には、弾丸が貫通した跡が丸く開き、手を真っ赤に染めていた。

「プーダアアアア!!!」

スマイレの懷に隠れていたインピンが、ネリビルにおそい掛かった。
後足から棘を伸ばし、ネリビルを刺そうとするッ!

パシッ

「……邪魔よ」

ネリビルは、人差し指でインピンをはたき飛ばした。
インピンがはたき飛ばされた先には、未起隆がいた。

互いに強く体を打ち付けたインピンと未起隆は、ふらっと倒れこんで……動かなくなった――

「あのリス、カントリーグラマーの命令を無視したわ……不思議な生き物ねえ……まあいいわ……」

あとで捕まえて、ゆっくり解剖するわ……とネリビルが笑った。

「……このくされ脳筋ババア……わかったわツ、私はどうなつてもいいから、ミキタカゾと億泰君を見逃しなさいよ」

スマレが懇願した。

「諦めて、大人しくするのねツ」

ようやくいい子になったのかしら？

ネリビルが、ペロリとスマレのうなじを舐めた。

「いいや、スマレ先輩、勝負はまだだぜえ〜」

満身創痍の億泰が、強がった。

「だから、まだ泣くのは早いぜえ〜」

「あら……可愛い強い強がりね」

あんまり可愛いから、せめて痛くないように優しく血を吸って上げる。

ネリビルがウインクした。

「ぬかせ、この野郎！」

億泰は、突っ込んで来たネリビルを、ザ・ハンドで迎え撃とうとした。

しかし、ザ・ハンド が近づいてくるより早く、ネリビルはスマレを背負ったまま再び飛んだ。

そして、マーチンの背中に飛び乗った。

「くそつ。先輩を盾にしてやがる」

これじゃ攻撃できね〜 億泰が歯噛みして悔しかった。

(だが、どうしてもコイツはゆるさねえ〜)

「バアア。アナタのお父さんの事、今度ゆっくり教えてあげるね……でも、今回は時間がないってわけ。残念だけど、またねえ?? 次

はたっぷり血を吸ってあげる。うふっ♡」

ネリビルが勝ち誇り、マーチンを大きくジャンプさせた。

「ふんッ！甘いぜ!!」

だが、飛び去ろうとするネリビルに向かって、億泰は、ザ・ハンドの右手を振り下ろした。

「逃がすかよッ!」

シユルルルル

すると突然、ネリビルの手の中から、スマレが忽然と消た。

ネリビルが振り返ると、億泰が、ぐったりとしたスマレを抱えていた。

「何ですってえ」

……このエロガキ、とつとと女の子から手を放しなさい。

ネリビルが怒鳴った。

「……空振りだったって、空間を削っているんだぜくく俺が削った先にあるものは、何でも吸い寄せられるのよ」

先輩は返してもらったぜえ と、億泰が言った。

「何てこと……これで、あんたを殺さないわけには、行かなくなっただじゃあないのよオッ!」

「俺こそ、遠慮なくあんたを削ってやるぜえ」

「がああきいいいい!!その甘くて温かい血をすすってやるわ!」

「おお、こいやッ!」

億泰は片足立ちで、ぴよんぴよんと飛び跳ねながら、ネリビルに向かって行った。

……ところが……

ドゴオンツツツ!!

億泰とネリビルが交錯する直前、突然二人の足元が『爆発』した。

億泰も、未起隆も、爆風をまともにくらって、吹っとんだ。

二人の視界は爆煙にふさがれ、吹き飛んだ衝撃で後頭部を打ち——意識を失った——



億泰の目が覚め、辺りの様子をうかがうと、そこには敵の気配がな

かった。

「……………どうなってやがる」

爆風で、あたりはサンマを焼いたように真っ白にぼやけていた。

ほこりが収まり、ようやく周囲の様子がわかるようになったとき、億泰と未起隆は、スマレがさらわれたのを知った。

1999年11月5日 「M県K市、A山山麓」：

爆破された洞窟をやつとのことので抜け出して、噴上たちが地上に出ると、そこには二人の若者が倒れていた。

二人とも、噴上が知っている男達だ。

「お前、億泰じゃねーか。それに未起隆……………なんでお前達がこんな所にいるんだ？」

噴上は、驚きの声を上げた。

「おい、ひでえ怪我じゃねーか……………どうした、誰かにやられたのか？」
「!?……………」

ポルナレフに助け起こされた二人は、意識朦朧とした状態だった。噴上が誰かも、すぐにはわからない様子だった。

「彼らは、知り合いかい？」

ポルナレフが尋ねた。

「……………ああ、こいつは 虹村億泰、 もう1人は 支倉未起隆、二人とも東方仗助のダチだよ」

「その名前は、ブリーフィングの時に聞いたぜ、どちらも杜王町に住む『スタンド使い』だな？」

ホル・ホースは、噴上に確かめた。

「その二人が、どうしてここに居るんだ……………しかしひどい怪我だぜ」

ポルナレフは、倒れている二人に簡単な止血をした。意識不明でぐったりとしていた二人は、ポルナレフの治療で、だいぶ容態が回復したようだった。

「ニーダ……………」

未起隆の懐から、インピンが顔を出して鳴き声を上げた。

「ノッツォ……………」

育朗が、インピンを見て硬直した。

「まさか、信じられない……君に再び出会えるなんて……」

育郎は、目を潤ませてインピンに向かって手を伸ばし……あることに気が付き、ハッと息をのんだ。

「君と一緒にいるってことは、スマレも一緒にいるはずだ……ノッツオ、スマレはどこにいるんだい？」

「育朗よオ……悪いが、この近くにあんたのスケはいないぜ」

噴上が言った。

「今は、あんたのスケの匂いはしねえよ。ここにいるのは、こいつらだけだ」

「しかし……この子が理由無しにスマレから遠くに離れるなんて、ありえないんだ」

育朗は、近寄ってきたインピンの頭を撫でた。

「一体、何が起こったのだろう」

「……うう……!?　だ、誰かと思えば、噴上さんじゃあないですか、どうしてアナタがここにいますか?」

ようやく頭が少しはつきりしてきた未起隆が、顔をゆがめ、頭を振り振り、尋ねた。

「未起隆あ、それはこっちのセリフだぜ。お前ら、何でこんな所にいるんだ? 何でそんなに怪我してる」

「それはですね……」

ここに理由を話し始めようとした未起隆を、同じく目を覚ました億泰が遮った。

「ふ……ふ……噴上よオ……お前、いいところに来たぜエ……ちよつと……俺たちを手伝え」

「ハあ? なんだつてえ?」

噴上は目を丸くした。前から勝手な奴だとは思っていたが、ここまでは。

「猿の化けものと 馬鹿力のおばさんに……スマレ先輩をさらわれちゃった。俺たちは、奴らからスマレ先輩を助けださねえとならねえ……だから噴上、ちよつと肩を貸せよオ」

億泰は、全身の痛みに耐えながら、歯を食いしばって立ち上がろうとした。

噴上は、頭を抱えた。

億泰の話は、すっかり要領を得なかった。だが、何を言っているか理解できなくとも、億泰が必死なのはわかる。どうやら、適当にあしらってはいけないことらしい。

「チツ……お前、何言ってるのかさっぱりわからねーよ。もっと頭の中を整理してから話しやがれ」

ホラ、肩を貸しな。

噴上は億泰の前にしゃがみ込んだ。

億泰は、噴上の肩を借りて立ち上がった。

「悪いなあ……礼代わりに、今の生意気なセリフは聞かなかったことにしてやるよお〜」

「お前よお……俺の方が年上なんだぜ」

噴上はチツと舌を鳴らした。年長者に話しかける時はもつと丁寧に話しやがれ。

そんなの知ったことか。億泰がうそぶいた。

思わず口論を始めかけた二人に、育朗が声をかけた。

「ちよつと待ってくれないか、億泰君たちに、質問があるんだ……君は今さつき、『スマレがさらわれた』って言わなかったかい？」

育朗が、億泰の肩をつかんだ。

「頼む……教えてくれ……君達は……スマレと一緒にいたの？それで、彼女は今、どこに……」

億泰は、眉をしかめて育朗を睨みつけた。突然話しかけてきた、『いかにも女の子からモテそうな』爽やかイケメンに、隠しきれない敵意をにじませている。

「ああ、いっしょにいたぜえ……それで、テメーは誰だあ？」

失礼したと、育朗は自分の名を名乗り、改めて二人にスマレの居場所を聞いた。だした。

未起隆と億泰は、育朗の迫力に押され、自分たちが杜王町でスマレに出会ってから、先ほどネリビルに誘拐されるまでの顛末を、すべて

話して聞かせた。

「……つと言っわけよオ……動物を操るオバサンが、スマレ先輩をさらっていきやがった」

億泰が、ぶすつと言った。

億泰が話し終わると、未起隆が英語に翻訳して、ポルナレフとホル・ホースに説明した。

「何てことだ」

育朗が、頭を抱えた。

「スマレが、僕を探して……なんとしても助けないと」

「アナタ、スマレ先輩の知り合いなのですか」

何か言いたそうな億泰を遮り、未起隆が育朗に向かって尋ねた。

「僕は、彼女の……幼馴染みたいなものさ……」

助けに行かないと。

育朗は真剣な目つきで、周囲を探索し、スマレが連れ去られたと思わしき痕跡を追って、森の中に入ろうとした。

「育朗くん、ちよつと待て」

ポルナレフが、育朗の肩をつかみ、制止した。

「気持ちわかるが、まずは彼らの傷の手当てをしないとならん。

……二人ともひどい傷だ」

「そうでした……二人ともゴメン」

ハッと気が付いた育朗は、億泰と未起隆に頭を下げた。

「怪我をしている君たちを気遣わず、スマレのことばかり聞きたがるなんて……僕は最低の行動をしてしまった」

許してほしい。と、育朗は頭を下げた。

「おっおう……気にすんなよオ……」

素直に謝られると、何時までも邪険な態度をとるわけにもいかない。億泰は、よしてくれ……と手を振った。

と、ポルナレフとホル・ホースの顔色が、変わった。何か近づいてくる気配に、気が付いたので。

「……おい、ポルナレフ」

「わかってるぜ」

二人はほぼ同時に警戒態勢を取った。億泰達、高校生を中心にはさ
んで、背中合わせでそれぞれのスタンドを、出現させた。

「なんだア〜おっさん達?」

「!?また、追っ手ですか」

インピンを肩に乗せた育朗が、身構えた。

「そうだ、追手だぜ。……そろそろ来やがるぜ……油断すんなよオ」

ホル・ホースが、帽子を目深にかぶりなおしながら言った。

ヌ・ミキタカゾ・ンシ（支倉未起隆） その4

「コーコーセイ諸君、君たちもスタンドを出せッ！」

ポルナレフが、背中越しにクルリと振り向いて、皆に警告した。

「敵が来るぞッ！身を守るんだッ！」

ポルナレフの言葉は、正しかった。

やがて、森の木陰から、一行をぐるりと取り囲むようにして人型の『何か』が現れたのだ。

その『何か』は、吼え声をあげながら、ポルナレフ達におそいかかった。

「G y a x a a a a a a !」

「U k y a a a A A A A !」

それは、判別不能の声を上げながら、小柄な大人程度の大きさの怪物であった。

怪物が、両手の大きなかぎ爪を振り回しながら飛びかかってきた。

その背格好は、人と言うよりもゴリラに近く、その頭部はまるで肉食恐竜のように巨大で、口からは巨大な牙が見え、涎がまき散らされていた。

「おいッ……なんだこれは」

噴上が叫んだ。

「ウツ……うおおおおおッ！ ザ・ハンドッ！」

億泰はあわててスタンドを出現させ、おそってくる敵を迎え撃とうとした。

だが、億泰のスタンドが一体を蹴り飛ばした次の瞬間、別の怪物が、億泰めがけておそいかかってくるッ。

ザ・ハンドはバランスを崩しており、億泰の身を守れない……

絶対絶命！

だが、コーコーセーの傍らには、歴戦のスタンド使い達がいた。

「チャリオッツ！」

「エンペラーッ！」

二人のスタンド攻撃が同時に炸裂した。

億泰におそいかかろうとした怪物が、ぶつとぶツ！

突然の襲撃にもかかわらず、ポルナレフのスタンド：銀の戦車（シルバー・チャリオッツ）は正確な動きで近づく敵を一刀両断にし続けていた。

一方、ホル・ホースのスタンド：皇帝（エンペラー）が、ポルナレフの間合いから離れた敵を打ち抜いていくツ

スキヤットツツ！

バシユツ！

それは、コーコーサー達がまだ状況を把握しきれないわずかな時間であった。

二人の熟練したスタンド使いは、近くの敵を一気に殲滅した。

「まだだ、まだやってくるぜエ」

ホル・ホースが言った。

そして、ホル・ホースは自分の拳銃型スタンド：皇帝から、10発の弾丸を宙に向って続けざまに放った。

ギユユイイ——ンツツ！

ホル・ホースが放った弾丸のスタンドは、一行の回りを高速で回転し始めた。

「へへへツ——これがホントの弾幕ってやつだぜ……お前ら、うかつに手を出すなよ、ドタマがぶつ飛んじまうぜ」

弾丸が、まるで結界のように、ホルホース達の周囲を巡るツ。

うかつに近づいてきた新たな敵が、『弾丸の結界』に近づいた。次の瞬間、頭部を吹き飛ばされ、悲鳴も上げることなく倒れた。

「Ggyaaaaaaa!」

「Gukyaaaaaaaa!」

自分の仲間が次々に倒れていっても、怪物は気にかける様子もなく、黙々と『弾丸の結界』に近づいていく。そして次々と倒れていった。

ついには、結界の外には、怪物の死骸がまるで壁のように折れかさなった。

「しかし、こいつらはナニモンだあ?」

ポルナレフは首をかしげた。

「こんな奴ら、今まで見たこともねーぜ」

おそつてきた敵は、『人間を醜く変形させたような格好をした』異形の生物達であった。

肌は緑色、ホル・ホースの胸ぐらの身長ながらも、鋭い牙と爪を踏み鳴らしている。

「まさに怪物だな……しかし、どうやらコイツ等は、スタンドを見ることはできないようだなあ」

ホル・ホースは新しいタバコを咥えると、格好付けてパチンとオイルライターを鳴らし、火を着けた。

「見えないなら楽勝ツ……飛んで火にいる夏の虫よお。ヒヒツ。このままエンペラーの弾幕にドンドン突っ込んでよお、自爆しちまいな」しかし、いくらエンペラーの銃弾が強力でも、それだけでは怪物たちを完全に足止めすることは出来なかった。

ついに、何体かの怪物が、何発か被弾しながらも、回転する弾丸の壁を抜けることに成功した。『弾丸の結界』を抜けた怪物は、迷うことなく一行に迫ってくるツ。

だが、エンペラーの弾幕を抜けた先には、さらに強力な『剣』が待ち構えていた。

「おそいぜツ」

おそつてくる怪物を見つけ、ポルナレフの目が光った。

チャリオッツが右手の剣を一閃させた。すると、近づいてきた怪物が一瞬で切断された。やはり、悲鳴を上る暇もなく、地面に崩れ落ちた。

一体、もう一体と、ポルナレフは手負いの怪物を、着実に、素早く、倒していくツ。

離れた位置からの皇帝での銃撃、そして近距離でのチャリオッツの剣撃、銃と剣の組み合わせは、恐ろしいほどの強さを発揮していた。

「白人のおっさん二人……強ええ〜〜」

億泰、未起隆、そして噴上は、未だに状況が理解できず、目を白黒

させていた。

億泰と噴上も、スタンドを出してはいた。

だが、億泰は怪我のせいで満足に動けず、噴上のハイウェイ・スターでは、怪物に致命傷を与えることはできなかつたのだ。

「誰がおっさんだ」

ポルナレフは毒づきながら、おそつてきた怪物に剣をふるい続けた。

……と、一体の怪物に剣を突き刺そうとしたチャリオッツの剣が、止まった。

ネチヨリ……

見ると、剣先に、黄色のスライムのような物がまとわりついている。

スライムは、じわじわとチャリオッツの剣を溶かし始めた。

「!?……マジか、こいつは やべー」

ポルナレフは顔色を変え、剣を抜こうとあちこちチャリオッツを振り回した。

しかし、いくら剣を振つても、チャリオッツの剣にはスライムがまとわりついている。

とることができない!

「任せなき——いいッ!」

その時、億泰が自分のスタンド：ザ・ハンドを出現させた。

ガオン!

上手くスライムを振り払えないチャリオッツに代わり、ザ・ハンドが黄色いスライムを、剣ごと削り取った。

「おりゃッ!」

「すまない……助かったよ」

ポルナレフは、億泰に親指を立てた。

「フッフ……空間を削るスタンド……か。強力なスタンド能力だよな……俺には君の能力の恐ろしさが良くわかるよ。さすがは日本のコーコーセーだ」

ポルナレフの脳裏に思い起こされていたのは、自分がエジプトに旅した時の記憶か……

ハンターはネリビルにくすぐられ、その醜悪な顔でうっとり、目をつぶった。

「何だ？奴らは」

敵の正体の見極めがつくまで、突っ込むなよ。

ポルナレフは、高校生達にそう指示した。

だが育朗は、ポルナレフの指示に首を振った。

「スマイレ……僕は……時間がないッ。……僕はこうしてはいられないんだ」

育朗が、覚悟を決めた表情になった。

そして、突然ポルナレフ達から離れ、ネリビル達に向かって、ハンター達のただなかに、1人で踏み込んでいく……

「!?よせッ！育朗くん」

ポルナレフはチャリオッツを出し、あわてて育朗の後を追おうとした。

だがその行く手は、飛びかかってきた、別のハンター達に阻まれた。

「チッ！ホル・ホースッ!!」

ポルナレフは、自分の目の前に立ちふさがるハンターを切り刻みながら、——拳銃使いの相棒——ホル・ホースに怒鳴りつけた。

「おめーが何とかしろッ！」

「とつくにやってるゼッ！すでにエンペラーは、育朗の援護をしているッ」

ホル・ホースは何度もエンペラーを発射し、育朗の周りに弾幕を張ろうとしていた。

「だが……十分じゃねエツ！敵の数が多すぎるし、育朗が素早すぎるッ……敵だけを狙って倒せるほど、エンペラーは小回りの利くスタンドじゃねーんだよオ！」

ホル・ホースは毒づいた。

「Gzyuuuaa!」

ホル・ホースの弾幕をかろうじて逃れたハンター数体が、育朗の目の前に現れた。ハンターは、育朗めがけて一斉にとびかかるッ

「うおおおおっ」

育朗は、地面に転がっていた木の棒を拾い上げ、ハンターにたたきつけるッ

へし折れた木の棒を投げ捨て、背後から迫るハンターを横つ飛びで避けた。

跳び蹴りを放ち、ジャンプして飛びかかってきたハンターを、迎撃する。

「Gzyuaaa!」

蹴りを喰らったハンターが、悲鳴をあげてぶっ飛ぶ。

「負けるかああああ!」

着地した育朗が叫んだ、次の瞬間ッ

グジャアッ!

一体のハンターの鉤爪が、育朗の腹部を深くえぐった。

「うっ……」

悲鳴をあげる間も無く、育朗は前のめりに倒れた。

腹部の血が広がり、地面に血の海が出来上がる……

「な……なんだとオ——」

ホル・ホースは、『皇帝』の弾丸を発射した。

倒れた育朗の首をねじ切らんとしていたハンターは、その銃弾をまともにこめかみに受けた。

ハンターは脳を破壊され、どうつと、育朗の上に折り重なる様に倒れた。

「おっーおい……」

億泰は、信じられないとばかりに、力なくつぶやいた。

「育朗ッ!馬鹿野郎ッ」

噴上は顔を歪めた。

「お前……スケに会うまで、死に切れないんじや無かったのかよ。チツ・チクシヨー……捨鉢になりやがって」

「せめて……これ以上体が傷つかないようにしてあげないと」

未起隆が、鎮痛の表情で蛇に変身した。

敵をすり抜け、育朗が倒れた場所に、駆け寄ろうとする。

その『未起隆が変身した蛇』の尻尾を、ポルナレフが引っ張った。

「!?……待つんだッ」

ポルナレフが、育朗の体を指さした。

「まだ育朗は……イヤ、バオーは、これ位じゃあやられたりしない……
まあ、もう少し見てろ」

「なっ！」

未起隆は、文句を言おうと口を開け、あるモノを目にして、また口を閉めた。

コ” コ” コ” コ” コ” コ” コ” コ” コ”

「バ……ル……バ……」

地に伏す育朗の体から、人とは思えない、唸り声が聞こえ始めた。
見る見る間に、育朗の体は反り返り、そして、膨れ上がっていく……

「バル……バルバル……」

「バルンウツ！」

不意に育朗の体のはねおき、人間には不可能なほどの大きな跳躍を見せたッ！

「なっなんだあ〜」

「あれが、バオーだっ。気をつけろッ。あれに敵だと認識されたら、死ぬゾッ」

ポルナレフが叫んだ。

育朗の体：バオーは、空中にいる間も変貌を続けていた。

髪の毛まで含めた皮膚が、青白く硬化化し、時にバラバラとはがれ、
額には黒い触角状の『何か』が飛び出すッ

「こっ……こりやあヤベエーな」

ホル・ホースが言った。

コ” コ” コ” コ” コ” コ” コ” コ” コ”

彼らの目の前に、『バオー』が仁王立ちしていた。

それは、まさに『異形の怪物』、『現代の獣人』であった。

彼らが見たのは、

―元の体に比べ一回り以上も膨れ上がった体格

―蒼白く、人とは思えぬ無機質な質感を持つ肌

―無表情な顔、無機質な肌、蠟を溶かしたように崩れた目元と、そ

の下にのぞく黄色い目

―まるで彫刻された炎のように一つにまとめられ、逆立った蒼白い髪

―額がパクリと割れ、そこから覗く“紅い”感覚器

そして、不気味さを増しているのが、その動きであった。明らかに知性ある人としての行動・しぐさが、その動きからは読み取れないのだ。

バフツ

と、バオーの体から、何か青白い霧の様なものが噴き出した。その霧は、少し離れた所で再び集まっていく。そして霧は、育朗の姿形をとった。

それは、橋沢育朗のスタンド：ブラック・ナイトの能力。言わば育朗の生霊であった。

『……あれが、僕』

ブラック・ナイトとして姿を表した育朗は、初めて見る『自分自身に変異した姿・バオー』を、その異様を、食い入るように見ていた。『あれが、僕の中に巣食うモンスター……邪悪ツツ……』

育朗は、苦悩の表情を浮かべた。

「バルバルバルバルバルツ！」

バオーが吠えた。

「こ……これが、オリジナル・バオーのアームド・フェノメノン……」
ネリビルがうっとりした声で言った。

「ああ……素晴らしいわあ」

「U g i i y !」

ハンターがバオーにおそいかかるツ！

「バルンツ！」

バオーはとんぼ返りをきつて、その突撃をかわした。

そして空中で、体をねじって頭を下にした。倒立した姿勢で、ハンターの頭を掴むツ！

「A g i i i x t y ! !」

同時に、バオーに掴まれたハンターが激しく苦しみ出した。

「オイオイ……、野郎が掴んだ頭が溶けてるぜ……」

ホル・ホースは、啞えていたタバコをポロつと落とした。

バオーに頭を掴まれたハンターは、バオーの手から逃れようと、手足をバタバタと振り回し、必死に暴れていた。

その頭が、まるでろうそくのようにドロドロと溶けはじめている。

ハンターは絶叫を上げた。

だが、やがて振り回していた手足の動きが止まり、抵抗むなしく、全身がドロドロに溶けていった。やがて、そこにあるのはピンク色のドロドロした塊だけとなった。

「……あれは、バオー・メルテツディン・パルム・フェノメノン。フフフ……溶かされた両腕がうずくわ……でも、さすがね……オリジナルはあんなに強力な酸を出せるのね……」

ネリビルが、ウツトリした口調のままつぶやいた。

「やはりオリジナルの力は、モドレイテッド・バオーの何倍も強力なのね……」

「バルバルバルルッ！」

バオーが舞い、跳ね、群がるハンターにおそいかかった。

バオーに視覚は関係ない。

感覚は、全て額から飛び出す触覚から感じる『匂い』で賄っているッ。

だから、バオーに死角は存在しない。

だから、ハンターが身を隠しながら背後から襲ってきたとしても、問題なく対応出来るッ！

見る間にバオーは、四方八方からおそい掛かってくるハンターたちを蹴散らした。

ト ト ト ト ト ト ト ト ト ト

しかし、すべてのハンターを倒しても、バオーが感じている『嫌いな匂い』は、まだ消えないッ！

敵を、『嫌な匂い』を、追いかけて、バオーは無造作にホル・ホースの作り出した銃弾の結界に踏み込んで行った。

もちろんスタンドに、『匂い』は無い。

よってバオーには、スタンドの銃弾は知覚できないッ。

バオーが、吹き荒れるエンペラーの結界に、無防備に頭を突っ込む

……

バオーが 『銃弾の結界』に入る直前、ホル・ホースは自らのスタンド：皇帝を引っ込めた。

「おつかねええええ—— 間違つて撃つちまったら、俺が育朗の奴に襲われかねねーぜ」

ホル・ホースは、冷や汗をぬぐった。

「こ……この馬鹿野郎ッ……」

大慌てで、ポルナレフはホル・ホースの頭を殴った。

「まだ周りにハンターどもがいるんだぞッ……ボケっ！お前が結界を解いちまったから、奴らが入り込んでくるじゃねえかッ！」

「ああ……」

ホル・ホースは頭をかいた。

「スマン、ハンターどもを忘れてたぜ」

「バアババアアア！」

ホル・ホースの結界がなくなると同時に、ハンター達がおそつてくる！

「バルバルバル！」

バオーの両腕から、鋭い刃が飛び出した。バオーが発現する武装現象の一つ、リスキニ・ハーデン・セイバー・フェノメノンだッ

バオーはその刃を自在に振るい、ハンターたちをあつという間に切り刻んでいく。

「ホル・ホースッ！テメツッ！このバカ野郎オ」

ポルナレフも、自らのスタンド：シルバーチャリオッツを出した。

ポルナレフとシルバー・チャリオッツは、バオーの背後を弧を描くように回る。そして、バオーの後方に構えていたハンター達に剣を突き立てた。

シルバー・チャリオッツの動きは、バオーに勝るとも劣らないスピードであった。

しかも、訓練を積み、経験を重ねたその動きには、一切の無駄が無

いッ

「バルバルバルッ」

シユパシユパシユパッ!

バオーとポルナレフの連携攻撃により、ハンター達はあつという間に、細切れにされた。

「これが、バオー……素晴らしいわ……でも、寄生虫バオーは、まだ成長途中……『変わった』ばかりね。私にはわかるわ……フフフ……」
マキシムがうつとりと言った。

「今はまだ、バオーは本能のまま戦い続けているだけ……そうよ、いわば、バオーはまだ赤ん坊よ。ならば、今ならバオーを倒せるわ……私のイエロー・テンパランスでねえ!」

「ハッ……アンター人じゃ、無理よ」

ネリビルはスタンド：カントリー・グラマーを出現させ、何やらハンターに命令した。

指示に従い、ハンターが4体、バオーの回りを取り囲んだ。
その全身に、イエロー・テンパランスを身にまとっている。

「バルンッ」

バオーが、ハンターにリスキニ・ハーデン・セイバーを突き立てた。
だが、その刃はイエロー・テンパランスに阻まれ、ダメージを与えられなかった。

逆に、バオーの刃を侵食していく……

「バルバル!」

バオーは自らの刃を、切り離れた。それでもなお、わずかに皮膚に残ったイエロー・テンパランスのスライムも、バオーの皮膚ごと、バリと剥がれ落とす。

一瞬、バオーの装甲の下に、体液で赤くただれた育朗の地肌が見えた。

すぐにまたバオーの体液が浸みでてカタマリ、新たな装甲となって表面を覆った。

ハンター達は巧みな連携で、バオーを誘導していく。

その先の地面には、地面に薄く広がるスライム　イエロー・テン

バランスが広がっている……

「チツ、させるかあッ」

ポルナレフはネリビルの意図を理解した。あわてて、バオーの元に近寄ろうとする。

だが、その前に、別のハンターたちが障壁となり、ポルナレフの進路をふさいだ。

「ドッ……どきやがれ、このやろッ！」

ハンターを切り刻みながら、ポルナレフは歯噛みした。

「フフ……育朗を追うのは、イエロー・テンパランスで全身を覆ったハンターどもよ……直接攻撃を喰らえば、このスタンド：イエロー・テンパランスが攻撃した箇所に取りつく……例え取りつく前にすべてやられても、今度は地面を覆ったイエロー・テンパランスがバオーの体に食いつくってワケよ」

ネリビルが、得意そうに言った。

「完璧な作戦よッ！ 頭は使いようッ！ 知性の無い化け物あいてなんて、楽勝よ……」

「グキアヤッ！」

ハンターが、人間のようにムセ、口から何かを吐き出しかけた。

その口から、銀色の、拳程の塊が、顔を出す……爆弾だッ

「フフ、更に、ハンター共に取り付けておいた、戦車一台を簡単に吹き飛ばす爆弾を作動させた……本能のみで闘うオリジナル・バオーでは、この罠は理解出来ないハズよッ」

勝った！

マキシムが、勝ちほこった。

『それはどうかな……まだ僕がいる……僕なら、バオーを止められるはずッ！』

その時、上空から戦いを見ていた育朗の『幽体』が、バオーの目の前に現れた。

『バオーッ、力を貸せっッ！』

育朗が叫んだ。

育朗、いやスタンド：ブラック・ナイトは、全身から管のようなも

のを出現させた。

『管』はバオーに向かって伸びていき、その体にもぐり込んでいく。

そして、『管』に引つ張り込まれるようにして、ブラック・ナイト本体もバオーに近づいていき、バオーの体内にもぐり込む……

『アナタたちの思うようには、させない……』

バオーの体内に戻る直前、育朗は、ネリビルとマキシムを睨み付けて、言った。

ブラック・ナイトが入り込むと、バオーの動きが、止まった。

「……何か、なにかヤバいわ。ハンターどもよ、少し早いが、今、バオーに取り付けッ！」

ネリビルが、叫んだ。

「とつとと止めをさしてッ！」

『遅いッッ！その前に攻撃させてもらうよ……ブレイク・ダーク・サンダー・フェノメノンッ！』

育朗の顔——正確には育朗のスタンド、ブラック・ナイトの顔——がバオーの胴体からびよこんと飛び出し、叫んだ。

バオーが、再び動き出すッ！

両手を高く差し上げる。その腕が、光りだす。

バリバリバリッ!!!

バオーの両手から、まるで雷のように、電気が放出された。

その電気が、イエローテンパランスに守られたハンターたちに流れていく。高圧電流にさらされたイエロー・テンパランスが、ハンターの肉体が、蒸発していく。

雷に打たれた爆弾が、停止する……

バシユツツツ!!!

雷は、バオーの周囲を荒れ狂うように飛び交い始めた。

その雷は、ますます大きくなっていく……

やがて、育朗もバオーの周囲を囲んでいた、無数のハンター達は、皆、全身を黒焦げにして息絶えた。

「……とんでもねーな」

その余りに強烈な破壊力に、ポルナレフとホル・ホースが顔を見合

わせた。

「……」

嘖上と、億泰、未起隆も、顔を見合わせた。

「バルンツッ！」

ハンターたちを全滅させたバオーは、次に、マキシムとネリビルに向き合った。

『さあ、次は君たちだッ』

ゆつくりと近寄っていくバオーに対し、マキシムとネリビルは両腕を上げた。

「育朗……まって……私たちは、もともとアナタと戦う気はないのよ……ただ、アナタと話したいの。それだけよ」

バオーの動きが止まった。青白く光る育朗の幽霊が、バオーの体から顔を出した。

『スマレはどこだ』

育朗の幽霊は、ネリビルとマキシムを睨み付けた。

「アナタ、スマレちゃんが気になるのでしょ？」

マキシムが下卑た笑みを見せた。

「コ” コ” コ” コ” コ” コ” コ” コ” コ” コ” コ” コ” コ” コ” コ”

『何……だ……っって』

育朗が、動揺した。

そこに、二人が畳み掛けるように誘惑を始めた。

「あなた、スマレちゃんに会いんでしょ？」

「スマレちゃんに会いたいのなら、私たちと一緒に来たほうがいいわよん」

『スマレを……まさか』

育朗の声に、隠しきれない恐怖の声色が混じる。

「育朗くん、そうよ、スマレちゃんは私たちの手元にいるわ」

ネリビルが言った。

「彼女を助けてほしかったら、アンタが私たちの仲間になる事ね。どう、約束できる？」

『……この周りにいるハンター達を、ひかせる……それから、ポルナレ

フさん達には、もう手を出さないと約束しろ』

育朗は、重々しく、言った。

「その条件を飲んだら、あなたが私たちについてきてくれるって言うのなら……約束するわ」

『……約束する』

「よせっ……育朗くん 馬鹿な真似はよすんだ」

ポルナレフがあわてて、育朗の下へ走ってきた。

「そうだけ育朗よオ、俺たちを信じてくれ。かならずスマレって女は助け出すぜ」

ホル・ホースが、少し離れた場所から育朗に声をかけた。

「言っておくけど、ホル・ホース達が邪魔をしたら、『生きているスマレちゃん』には会えないからね」

マキシムが意地悪く付け足した。

「おい……調子にのるなよ」

ポルナレフは、シルバー・チャリオッツの剣をマキシムに向けた。「誰を人質に取ろうが、ここでお前たちをぶちのめしちまえば問題はねーぜ。逆にお前たちを、人質に取ってやることも、簡単に出来るんだぜ」

そのポルナレフの手を、そつと育朗が止めた。

『ポルナレフさん……』

育朗は、哀しげにポルナレフに向き合った。

『ボクは……絶対にスマレを危険にさらせません……お願いします……分かってください』

「育朗、俺たちを信用しろ。奴らの口車には、乗るな」

ポルナレフは、育朗の両肩をつかんだ。

「もし奴らについて……」

「……ポルナレフさん、ちよつと待ってくれよ」

そのとき、噴上のスタンド：ハイウェイ・スターがポルナレフのスタンドを抑えた。

ポルナレフのスタンドを羽交いじめしたまま、噴上は極めて正常なリアクションを見せた。

「育朗よお……そのスマレってスケが、お前の探していた女達なのか」

「……」

『……そうだよ』

「……」

その答えを聞き、ふうつと、噴上はため息をついた。

「なら話は簡単だ……俺は、育朗に味方するぜ」

「おい、相棒。そりゃあ無いだろう」

ホル・ホースが言った。

「アマチュアっぽいことはしたくねーんだ。冷静に考えろツ！リスクがちよつとだけ高いだけで、そんなに悪い状況じゃねーだろ？」

「……」

育朗は答えない。

その顔が、だんだんと決意を帯びた表情に変わっていく。

「噴上クン……待つんだ。君は事情がよくわかってない」

ポルナレフが噴上の肩を掴んだ。

「君は、育朗クンの体に潜む『バオー』が、どんなに危険かわかっていない」

「そんなのカンケーねえぜ……俺は、育朗が自分のスケを助けるのに『協力する』と言った」

噴上は、顎を撫でながら言った。

「それが、今だぜツ！」

その声は、少し震えていた。だが、噴上は、すべての気力を振り絞って、ポルナレフに向き合った。

「噴上クン……残念だ」

ポルナレフは、チャリオッツを出現させた。

「……口じゃ勝てないから、実力行使ってわけかい？」

「言ってる、噴上クン……」

噴上に向かって、ポルナレフが舌打ちした。

そのポルナレフの体に、『網』が覆いかぶさった。

『網』の一部が姿を変え、未起隆の顔が現れた。

「!?待ってください、ポルナレフさん。僕もです。事情は良く分かり

ませんが、僕も嘖上さんに賛成します」

未起隆が姿を変えた『網』が、ポルナレフの体を拘束した。

「……俺もだ……その……納得できねえことはあるがよぉ〜」
億泰も立ち上がった。

「俺は、俺の心に従うぜ」

話し合いは、いつの間にかポルナレフ／ホル・ホース組 対 高校生組の様相を呈していた。

未起隆は、ポルナレフを拘束している。その正面には、億泰と嘖上が今にもかみつきそうな顔をしてポルナレフを見ていた。

育朗は、決意を決めた顔つきで、ただ空を見ていた。

どうすべきか、ポルナレフはまだ自由にな動かせる左手で、自分の頭をかいた。

正直、未起隆の拘束を切り裂き、億泰と嘖上、そして育朗を制圧するのは簡単だろう。だが、もしそうしてしまえば、高校生たちを必ず傷つけてしまう。

「……チツ」

ポルナレフは、何かしようとしたホル・ホースを制し、チャリオッツを呼び戻した。

「わかったよ……育朗くん、俺の気が変わる前に行っちゃいな」

『……皆さん、すみません』

育朗は皆に頭をペコリと下げ、ネリビルとマキシマムと共に森の中に消えていった。



「おい……、育朗の奴、ホントに行っちゃまったぜ」

ホル・ホースが肩をすくめた。

「良かったのかよ」

「ああ……これで、気はすんだか？」

ポルナレフは、コーコーサー達をにらみつけた。

「……なんだよ……俺は間違っただけ」

ポルナレフと嘖上は、しばらくにらみ合った。目をそらしたのは、嘖上が先だった。

「まあいい。今から育朗の後を追うぞ」

ポルナレフが言った。

「噴上クン、君のスタンドで追跡を開始してくれ」

「言つたら？俺は育朗の邪魔はしねーッ」

「誰も邪魔をしろと言ってるわけじゃないッ」

ポルナレフが肩をすくめた。

「逆だ……いいか、あの女の所属する組織は、狂信者の集まりだ。……奴らは目的を達したら、スマレって娘も、育朗クンも、むごたらしくバラすぞ」

「なんだってエ」

「俺は嘘は言わん。……だから、しばらく奴らを追い、スマレと育朗クンの身に危害が加えられそうになったら 助け出す必要があるんだ。わかったか？」

「ムウウウ……わかったぜ……しかし、俺がやるのは追跡だけだ」

噴上が答えた。

「それ以上はやらねーぜ。育朗に対する義理つてやつだ」

「俺達も行くぜ」

億泰が口を開いた。

「さつきは育朗を逃がしたがよオ。ポルナレフさん、うまいこと言えねえく〜んだが、あのくそ婆どもにやあスマレ先輩を奪われた貸しがあるぜエ。貸しを返してもらわないとなあ〜」

「そうだな。受けた借りは、返しておくべきだ」

ポルナレフが言った。と、少し離れた位置に立つ、相棒の所業が目に入った。

「おい、ホル・ホース、お前どうしたんだ？」

話し合いから早々に抜け出して、倒れたハンターたちを調べていたホル・ホースは、青い顔で震えていた。

コ” コ” コ” コ” コ” コ” コ” コ” コ” コ”

「おい……やべーぞ、ポルナレフ」

ホル・ホースが言った。懐から煙草とライターを取り出す。煙草をくわえ、オイルイターのファイア・スターターを回す。だが、いくら

「あの時戦った奴らに、そんなやつはいなかった」

「あつたりめーだ。あの女には戦闘能力はまるでなかったからな。スタンド能力も弱くって、死にかけの奴らの魂を封じ込めるのが精いっぱいだったぜ……兄貴たちと違って、ゲームやギャンブルで負かした相手の魂を封じる事も出来なかった……つまりデイヴィーナは、相手に“勝って”からじゃあないと効果を発揮できねー能力を持っている。戦闘にはまるで使えねー能力だ。だから、お前たちが来た時は、こっそり館の陰に隠れていたはずだぜ」

「おい……まさか」

「そうだよ……そのまさかさ……デイヴィーナの奴は、承太郎とD I Oの戦いの場にいたのかもしれない。本当の事はわからねーぜ。なにせデイヴィーナは、そのあと消息を建っちまっただし、俺はそのとき入院してたんだからな。だが、可能性はあるぜ……俺は、……デイヴィーナは『D I Oの魂をコインに変えて持っている』と思う！」

「ばかな……あのD I Oが……生き……」

その時、絶句したポルナレフの持っている衛星電話が、けたたましく鳴り響いた。

東方仗助と橋沢育朗その1

【報告書】

【被追跡者プロフィール】

【聞き取り調査結果】

被調査者番号：BA1593

「ああ、いくちゃんね？懐かしいわね……かわいいそうに、交通事故でお父さんとお母さんと一緒に死んじゃった子よね。ウチの子の一つ上だったかしら？そう……もし生きていたら、もう25歳になるのね……」

被調査者幼少時の友人の母親（51才）

「えっ、あの育ちゃんの話が聞きたいの？ふうん？いいわよ……そうね、あの子は『いい子』だったわよ。大人しくて優しい子でね。うちの子もよく遊んでもらってたわ。そうそう、仮面ライダーのお話が怖いってね、結構怖がりな子だったわ……ほかに何か、聞きたいことがある？」

被調査者の友人の母親（54才）

「そうね……ちよつと出来過ぎな感じ？何でもソツなく出来て」

被調査者の友人（24）

「ああ、あの氷の張った池に落っこちちゃった子ね……そうね、偉い子だったわ。あの子、池に落ちて怖かっただろうに、全然それを周りに言わないのよ。でももしかしたら、色んなストレスをため込んでるタイプかもね。それで、突然に爆発するタイプ」

被調査者が旅行中に泊まったホテルの女将（62）

「育朗？おーっ……あいつは『いい奴』だったのによ——何っーか。あれだ……自分から何かする奴じゃなかったな。でも黙っていても皆から一目置かれるっーか」

被調査者の友人（24）

「こんな事があったよ。僕が上級生にいじめられている時、たまたま通りかかった育朗くんが、一緒に殴られてくれたんだ」

被調査者の友人（24）

「あいつは、シャイな奴でよー……でも打ち解けると気さくで面白い奴だったぜー」。真面目な顔でつまんねーオヤジギャグを連発したりよお。だが、ギターはあまり上手くなかったな。俺のほうが全然うまかった」

被調査者のバンド仲間（28）

「えっ……あの人が、無事なんですか？あの人は私を命がけで助けてくれたのに、優しく気遣ってくれて……いい思い出です」

被調査者と最後に接触したと思われる一般女生（30）

被調査者番号：CD59983

「ジョースケか、あの子優しい子だったよね。意地悪されても全然怒らないの」

被調査者幼少時の友人の母親（45）

「そうよ、今のあの子の髪形を見たらびっくりするくらい、温厚な子供だったわよ……でも、お母さんツ子でね。お母さんから全然離れないのよ」

被調査者が通った幼稚園の保育（36）

「ジョースケ君はイイ子だったわ、いつもニコニコして……だけど、自分が大切にしているモノをバカにされると、そりゃあもう、人が違ったように怒り出してねえ」

被調査者が通った小学校の同級生（16）

「ひっ……」 恐怖のあまりコメントを拒否。

被調査者が通う高校の近隣の不良グループのリーダー（19）

「おおっジョースケは俺のライバルだぜ。アイツはツエエー……。でも、格ゲーじゃあ、25勝20敗で、俺が勝っているんだぜッ！」

近隣の小学生（11）

「ポッ♡」

近隣の女子中学生（14）

「男気があるっすー！あの人が立てた伝説の数々は物凄いッスよ。超ヤバッす。しかも、普段は滅茶苦茶に優しいーのに、何か理由があつて怒り出すと超怖いッス。そこがカッケーッス！あこがれるウツス！」

近隣の男子中学生（14）

「頼りになる奴だ。ちよつとのんびりしておるが、同級生からも人望がある」

被調査者の高校の担任（57）

「……アイツはちよつと危ない所もあるが、だが良い奴だよ」

近隣の警察官：後日被調査者の祖父であったことが判明（1999年に故人となる）

1999年11月6日 「DRESSの基地」：

頬にあたるコンクリートのざらつく感触に気が付き、スマレは目を覚ました……

目を覚ましたはずだ。しかし、目を開けても何も見えない。

当然だ。周囲は墨を流したような真の暗闇で、自分の手足さえ欠片も見えないのだから。

スマレは当惑して、耳を澄まして周囲の気配を探った。昔の記憶がふつと蘇る。確か8年前、ドレスの研究所が崩壊した時の鍾乳洞も、同じくらい暗かったような気がしたのだ。

（ここはどこだろう）

「ミキタカゾ、億泰」

暗闇の中、スマレは仲間の名を呼んでみた。

だがその声はスマレが思っていたよりも大きく響いた。そしてその音が止んだ時、完全な闇が再びスマレを包んだ。完全な暗黒、完全な静寂……時間感覚も、スマレは自分が誰なのかも忘れてしまいそうな程の、『完全な孤独』の中にいた。

（いくらミキタカゾと億泰を呼んでも一切返事がない。どういうこと？）

しばらくして、ようやくスマレは何が起こったのか、自分が森の中で襲撃者と遭遇してさらわれた事を思い出した。

そう、億泰とミキタカゾ、そしてスマレは森の中にあつた廃墟の近くで、DRESSを名乗る二人のスタンド使いの襲撃者と戦つたのだ。

DRESS……スマイレ達の人生を狂わせたその忌まわしき組織、そして恐るべき生物兵器：バオー……

スマイレは昔、自分をDRESSから救ってつくれた少年、橋沢育朗の事を思い出した。彼……育朗も、DRESSにバオーとして体を改造されていた。

だが彼はその強力な力で、自分を助けてくれた……自分自身を犠牲にしてまで。

億泰とミキタカゾ、二人とも無事だろうか。

スマイレは、育朗の探索に二人を誘ったことを、実は激しく後悔していた。

もともとあの二人は、ドレスとは縁もゆかりもないのだ。もし、スマイレが声をかけなかったら、今頃は二人とも杜王町で、いつも道理の平穏な日々を過ごしていたはずだ。

あの二人を、育朗のような目に合わせてはいけないのだ。

(お願い……二人とも無事でいてちょうだい……)

スマイレは心から二人の無事を願った。

……そして、もう少して育朗に会えたことを、思い出した。思わず悔しくて、思いつきり拳を床に叩きつけるッ 手加減抜きで叩きつけた手は、まるで骨折でもしたかと思うくらい、激しく、傷んだ。

だがその痛みが、『完全な孤独と後悔』に飲み込まれそうになっていたスマイレの気力を、再びよみがえらせた。

コ” コ” コ” コ” コ” コ” コ” コ” コ” コ”

「そうよ、もうあの時とは違うわ……もう何もできずにつかまっているだけの私じゃあないのよ……何があっても、ここから脱出して見せるッ」

真暗の中、スマイレはあちこち手探りをしながら立ち上がった。そして、自分のスタンド、ウィスパール・イン・ザ・ダーク(WitD)を出現させた。

WitDが、つまりスマイレのスタンドは、額から飛び出すとクルリとスマイレの周囲を一蹴した。

黒い蝶のビジョンを持つスタンドが、ぼんやりとあたりを照らしな

がら部屋の中を飛びまわる。

周囲は真の闇に覆われており、スマレの裸眼では何も見えなかった。だがスタンドの視界を通せば、暗闇でも、周囲の様子が手に取るようにわかるのだ。

WitDによる探索の結果、ここは、完全にコンクリートで覆われた、窓ひとつない密室であることも分かった。

ドアらしき壁の切れ目はある。だが部屋の内側には、ドアノブもなく、どんなに押ししてもピクリともしなかった。

やつとの事で探し出した通風孔も小さく、スマレがその中に入って部屋から脱出する役には、たまたなそうだ。

つまり、ここは完全な密室だった。

しかし、あきらめるわけには、いかなかった。

スマレは、自分を奮い立たせた。

自分は、もう無力だった9歳のころと同じではないのだ。

ただ育朗が助けてくれるのを待っていた、あの時のようには、できない。スマレは、ミキタカゾと億泰君、そして多分、育朗に助けもらうまで、ただ待つているつもりはなかった。

それに、もし自分のせいでもたしても育朗が……そしてあの二人が、無謀な戦いを強いられることになったらまらない。

もし戦いの結果、取り返しのつかない事が起こってしまったら……スマレはそう思うと、じっと助けを待つことなど出来なかった。

むしろ、自分があの三人を助けるのだ。

自分には、それだけの力があるはずだ。

六助爺さんと圭婆さんのところで過ごした8年間を、思い出せ。

幼少のころ、スマレが可能な限りマタギの六助爺さんの狩りに同行していたのは、いつか育朗と再会し、サバイバルの日々に戻ったときに備えるため……だったはずだ。

六助爺さんは、そんなスマレの思いを分かったうえで、それでも後継ぎができたと喜んでくれたのだ。そして辛抱強く、スマレに自分のマタギの技すべてを教えこむ努力をしてくれたのだ。

だから、今のスマレは、昔と比べられ無いほどたくましく成長した

……ハズだ。

例えばマツチ一本で、森の中で火をおこすことが出来る。そればかりか、狩りをしたり、山にあるものを食べたりして、1人でひと月以上を生き抜くことも出来るだろう。

ツキノワグマと一対一で正対しても、猟銃の一発で撃ち殺すことができる自信さえ、ある。

だから、出来るハズ。

スマレは目を閉じ、WitDの操作に意識を集中させた。そして、その能力で壁の向こうを、未来を、探り始めた。

1999年11月6日 「M県K市名もなき高原」：

「くそお……救えなかったぜ?!」

夕暮れ時、意に反して、デビットとヨーコ・ゾンビを倒したシヨックから立ち直れず、仗助は1人、キャンプの隅でがっくりと肩を落としていた。

そんな仗助を見ていられず、早人がココアを差し入れてくれた。

「仗助さん……ヨーコさんの事は仕方ないよ」

「おー」

仗助は、ココアを受け取りながらも、心ここに非ずといった風にはぼうつとしていた。

「仗助さんがいなかったら、僕等は全滅していたよ」

「おー」

「みんな、仗助さんを頼りにしているんだよ。感謝もしてる」

「おー」

「……」

「お??」

「………所で………仗助さんはアンジェラの事が好きなの?」

「お??いやッ早人、おめー何を言っているんだッ」

ぼーっとしていた仗助は、早人の言葉にあわてて手を振った。

「お前、ホントに油断も隙もネーな」

「……ねえ仗助さん、聞いてほしいことが、あるんだ」

早人が、真剣な口調で言った。

その口調に、仗助も態度を改めた。仗助は、早人の正面で足を組んで胡坐をかいた。顔の高さをも早人に合わせ、仗助は、正面からまっすぐ早人に向き合った。

「なんだよ?」

「明日の朝、本当に助けが来ると思う?」

早人は、不安そうに尋ねた。

「あつたりめーだぜ。俺たちは、全員安全な杜王町に脱出する」

ニカつと、仗助はわらい、早人の肩をたたいた。

「きつと明日の昼過ぎには、お前は、母さんと一緒に昼飯を食つてると、俺は思うぜエエ」

「でも……ねえ仗助さん、本当にいいのかな。本当に僕たちが、ここから逃げちやつても」

早人は、顔を引き締めた。

「あのゾンビたちは、人を食べてゾンビに変えちゃうんでしょ……:じゃあ、もしこのままほっておいたら、ゾンビ映画みたいに、この世がゾンビだらけになっちゃうんじゃないかって、僕は心配なんだ」

「もちろんゾンビ共に、そんな事を許す訳にはいかねーすよ。だからゾンビどもは、ここで全滅させなきゃなんねー」

「やっぱり、仗助さんもそう思うでしょ。だったら、僕たちだけ逃げるわけにはいかないよ」

勢い込む早人の肩を、仗助がポンとたたいた。

「……早人よお、おめーが一番にやらなきゃいけないのは、自分の母さんを守る事だ。違うか」

「……もちろんだよ」

「じゃあ、お前は母さんのそばにいてやれ。それがお前が一番にやるべき事っすよ」

「でも、もしゾンビが近くの町や……杜王町まで来たら、大変なことになるよ」

「もちろんそんなことはさせねーっすよ。この仗助君が」

任せとけ と、仗助は胸をはった。

「……じゃあ、もしかして、仗助さんは僕たちと一緒に逃げないで、ここに残るっていうの」

早人は、泣きそうな顔になった。

「おお???。ヤッパリそれは、俺がやらなきゃならない事だと思っスよ」

仗助は、ニカツと歯を見せた。

「じゃあ、やっぱり僕も残るよ。仗助さんだけを残しておけないよ」

早人は、仗助にしがみついた。

仗助は、優しく早人の手をはずし、早人の両肩をグつつかんだ。中腰になり、再び視線を合わせる。

「違っぜ早人才???さっきも言ったがよお——、お前の仕事は、おふくろさんを守る事だぜえ???それに、お前には大事な頼みがあるツスよ。……杜王町に帰ったら、億泰や康一にこの件を話してくれないっすか？俺がこっちで戦っている間に、近隣の村や杜王町にゾンビが入り込むのを、アイツらに防いでもらわなきゃならぬ——」

「でも……」

「早人、頼む。お前や俺のお袋達を守ってくれ」

仗助が、手を合わせた。

「お前だけが頼りだ」

仗助に、いつまでも頭を下げさせたくない。早人は、不承不承うなずいた。

「……わかりました。……でも、仗助さん、気を付けてよ」

任せておけ。仗助は早人と固い握手をかわした。



翌朝未明、キャンプの救援にSW財団から派遣されたという男たちの姿を見て、仗助と早人は目を丸くした。

「グレート……お前たち、億泰、噴上、それに未起隆じゃねーっすか。お前ら、何やってんだ。どうしてこんな所にいる?」

「仗助くっお前こそ、どうしてここに居るんだ……しかも、早人の奴もいっしょかよ」

億泰が、ニヤツとしながら、答えた。

「それにやあ深いわけがあるんだが……!?……ちよつと待てエお前たち……ひでえー怪我してるじゃねーツスか！今直してやるツスよ」

仗助は笑みを引つ込めた。億泰も、未起隆も、そして噴上も、全身傷だらけなのだ。

仗助はスタンド：クレイジー・ダイヤモンドを出現させ、順番に三人に触れていった……すると、三人の怪我は、一瞬にして『治った』。その様子を、ポルナレフとホル・ホースが興味深げに見ていた。

「ずいぶん、パワーがありそうだな……俺の知っている『アイツ等』のスタンドに似てやがる……」

「そうか、あれが噂の『治す』スタンドか……助かったぜ」

ポルナレフが、仗助に話しかけた。

「君は、この三人の知り合いかい？」

「そうです、ところで事情はよくわかりませんが、アンタ達がこの三人を助けてくれたんすか」

仗助は、ありがとうございます。と、ポルナレフとホル・ホースに頭を下げ、自分の名前を名乗った。

「そうか、君が東方仗助くん……ジョースターさんの……お子さんかあ」

ポルナレフは、仗助をまぶしそうに見た。そして、手を差し伸べた。「俺の名はジャン・ピエール・ポルナレフ……シヨースターさんや承太郎とは、あ……昔の旅仲間って奴だ。ヨロシクな」

「ハア……初めまして……東方仗助ツス」

仗助は、ペコリと頭を下げた。

東方仗助と橋沢育朗 その2

そこへ、アリッサが顔を出した。

「貴方たちが、ポルナレフさんとホル・ホースさんですね……SW財団からの『救援』として、助けに来て下さって、ありがとうございます……」

口では礼を言いながらも、アリッサの口調からは落胆の色が隠せなかった。

「私は、SW財団がヘリか何か、ここから脱出するための『手段』を送ってくれる事を、期待していたのですが……」

「ベイビー、お前の落胆は良くわかるぜえ」

ホル・ホースが、アリッサの手を取った。

「しかし安心しな。俺が来たからには、もう何も恐れることはないぜ。ヒヒヒ……」

「そうなのでしよう……アナタがたほどの腕前なら、ゾンビ等など恐れないでしょうね」

アリッサは、さりげなく腰に手を回そうとするホル・ホースから脱出した。腕を組み、ポルナレフとホル・ホースをニラミみつける。

「でも、我々はほとんどが非戦闘員なの。失礼だけど、あなた達だけでここに居る学生たちと、SW財団の非戦闘員全員を守りきれるとは、思えないわ」

「レディ、あなたの懸念はもつともだ」

いつの間にか、ちやつかりシンディと話していたポルナレフが、今度はホル・ホースとアリッサとの会話に、割り込んだ。

「正直な所、俺たちは、『たまたま別件でこの近くで仕事をしていた』のさ。ここには、近いから当座の救援としてやって来たツツ——訳よ。だから今頃は、俺たちとは別に、SW財団からの援護部隊が手配されているはずだぜ」

「そうだぜ、ベイビー……だがアンタはラッキーだぜ。俺と相棒のコンビは無敵だからよオ。……安心しな。それに……このコーコーセイの相棒達も、かなりやるぜえー」

そうですか

アリッサは力なくいった。うなだれながらも軽くバックステップして、今度は、ポルナレフが手をつなごうとするのをかわした。

「つまり我々は、もうしばらくここで耐えなくてはいけない、と言う事ですね」

「残念だがそうだ……だが、これで働きづめだった二人のスタンド使いが、ようやく休息をとれるつつー訳だ。戦力も増強された。俺たちが来たことで、状況はぐんと良くなったと、俺は思うぜ」

ポルナレフが言った。

「……もちろんおっしゃる通りです。助けをいただいて、ありがとうございます」

アリッサが、頭を下げた。

と、突然、アンジェラが、ポルナレフの目の前にゆつと顔を出した。

「あ……あの、あなたJ・P・ポルナレフさんですね、お話は師匠から聞いていましたッ。ジョセフ師匠と共に旅したほど凄腕のスタンド使いの、ポルナレフさんが来ていただけるなんて、光栄ですう。夢みたいですう。……あっ……スミマセン！私、アンジェラと言います。ジョセフ師匠から……」

「おっおい……」

『頭と下半身がはつきり分離している性格』のはずのポルナレフが、突然のアンジェラの早口に、目を白黒させた。

「御嬢さん、初めまして……」

アンジェラのおしゃべりは、止まらない。

「もしよかったら、師匠との旅の話を聞かせてくれませんか……あっ、実は私もスタンド使いなんです??ポルナレフさんは、スタンドの操作方法を修行されたんですね、いったいどんな修行をされたんですかあ？実は私は、波紋も修行しているんです。だから、どんな修行が効果あるのかちよつと教えてほしいんですけど……もちろん、ポルナレフさんが良かったらですけどオ……私のスタンドはお見せします、かわいい子なんですよ。能力は……」

アンジェラの口調は、どんどん早くなって行く。ポルナレフにしてみれば、まるで、『至近距離からマシンガンを撃ちまくられている』ようだ。

結局アンジェラは、マシンガントークにぼかんとしているポルナレフを押し出すようにして、キャンプの隅へ引つ張り、連れて行ってしまった。

その様子を見て、ヒヒヒツとホル・ホースが笑った。
アリツサは、深く、深く、ため息をついた。

1999年11月7日 「とある廃墟」：

その出で立ちからは、生真面目さと、優しさが感じられる。

「駄目だ……行かせないよ」

その日の深夜。

マキシムとネリビルの前に、育朗が立ちはだかった。

そこは、隠れ家としていた古い廃墟の、出口であった。

外は、月ひとつない漆黒の闇だ。

人工の明かりも、全くない。空を見れば、きつと天の川が良く見えているのが、わかったはずだ。

だが、育朗も、マキシムとネリビルも、まったく空を見上げることはなかった。

空を仰ぎ見る代わりに、三人は睨み合っていた。

育朗が、マキシムとネリビルを見つけたのは、二人が、こっそり仗助達のいるキャンプに攻撃をしかけようとしていた姿であった。二人は、口うるさい育朗が寝入った？隙に、こっそりと行こうとしたのだ。

「あら？あなた何を言ってるのかしら？誤解してない？」

私たちは二人で、ただ外に月を見に行くだけよ。

マキシムの下手な言い訳を、育朗は冷たい目で睨みつけた。

「彼等の所には行かせないよ……君たちは約束したはずだぞ、彼等には手を出さないと……スミレに逢わせると……あの時君たちは、僕に

嘘をついたのかッ」

今すぐ引き返せ、さもないと……と険しい顔で迫る育朗を、二人は能面のような無表情で見ていた。

「悪いけど、あなたを、そして『われらの組織についてあそこまで知っている人間』達を、野放しにするわけにはいかないの」

マキシムが言った。

「それにねエ……我々は、彼らのせいで、『ニンゲン』をやめなければならなくなつたわけ……もう太陽を見ることは出来ない……それがどれだけ悲しいことか、わかる？ 私たちは落とす前もつけないわけには、いかないのよ」

わかるでしょ？ ネリビルが、自分の義手を眺めながら言った。

「アンタも、彼等の事なんて、気にする必要ないわよ。元々あんな人間はいなかったってね。忘れてしまえばいいわ」

ト
ト
ト
ト
ト
ト
ト
ト

「忘れちゃえばいいのよ……私たちと敵対するなって、バカな考えはやめなさい」

「育朗くん……君はスマレに会いたいでしょ……ちよつとだけ我慢すれば、すぐに会えるわよ……アナタが『ニンゲン』を止めて、私たちのお願い通りに行動してくれれば……の話だけど」

だから、そこをどいて。ネリビルが、育朗の横を通り抜けようとした。

そのネリビルの義手を、育朗がつかんだ。

「待って……言つたら」

まるで別人の様な、ドライアイスのように冷たく、硬い口調で、育朗が囁いた。

「……あんた、本気イ？」

ネリビルの目が、酷薄に光った。ちよつとお灸をすえてあげる必要があるわ。

ネリビルはゾンビの怪力を利用して、育朗の手を振り払おうとした。

だが、育朗の手はゾンビの怪力をもおさえ込み、逆にネリビルを一

オーが、膝をついた。

効いたみたいね。ネリビルが、満足げに言った。

「アロマ・バットの放つ芳香は、バオーの感覚器を狂わせるの……これでもう、あんたは手も足も出ないでしょ」

「バルツツ」

しかし、バオーはすぐさま跳ね起きた。

そして、まるで猿のように四足で木々を飛び回り、空中にいるアロマ・バットを難なく切り刻んでいく。

「えっ……嘘でしょ?」

ネリビルが、右手を口にくわえた。

『効かないよ……たとえバオーが感覚を狂わせられても、僕がバオーの眼になればいい』

育朗のブラック・ナイトが、バオーの胸から顔を出し、言った。

バオーは、着地後の隙を狙ってきたイエロー・テンパランスの攻撃も、横っ飛びでかわすツ!!

「早いわツ！捕まえきれない……」

『覚悟っ!』

「やるわね……」

ネリビルが笑った。

「でも私が操っていたのは、アロマ・バットだけじゃあないのよ。ようやく『囲み』終わったわ、あんた……対抗できるかしらね」

ネリビルは、再びカントリー・グラマーを出現させた。

カントリー・グラマーは、まるで断殺魔の声のような叫びを、あたりに響き渡らせた。

ザワザワ……バオーは、自分が『悪意の匂い』に囲まれているのを感じ、身構えた。

ザワザワ……

『ゴツ……これは』

育朗の顔が、『嫌悪』にゆがむ。

いつの間にか、バオーの周囲は、蠢く黒い『海』が覆い尽くしていた。

否、それは『海』ではないッ
ネズミだッ！

周囲を覆いつくす何千匹ものネズミが、バオーに一斉におそいかかるッ

「ハハハハハ」

ネリビルがあざ笑った。

「スゴイでしょ……小さくても、幾千もの爪よ、歯よ、かじり取られておしまいッ。アマゾン川でピラニアに襲われた牛みたいに、骨になるまで齧られてしまうといいわア」

ネズミたちが、バオーの肌にその小さな爪を、歯を、突き立てるッ！

一つ一つの攻撃は、小さい。だが、その小さな攻撃が幾千にも重なり合えば、それはものすごい破壊力を秘めている。

「バルバルバルバルバルバルッ！」

バオーが吠え、戦う。

牙爪でッ 蹴りでッ そしてシューティングビースス・ステインガーで……

バオーは、どんどんネズミを打ち払っていった。

打ち払えば、すぐに次のネズミが取りつくッ！

だが、バオーはひるむことなく戦い続けた。そしてついに、バオーの激しい攻撃により、いつしかバオーの周りだけ、ぽっかりとネズミのいない空間ができあがっていた。

ネリビルは、始めのうちこそ笑いながら、ネズミとバオーの戦いを見ていた。

だがいつの間にか、その笑みが止まった。戦いは、徐々に『バオー有利』に傾いていたのだ。

いったん有利になると、後はもうひたすら戦い続けるだけだ。

いつしかネリビルは、バオーの一方的な戦いにあんぐりと口を開け、恐怖に身を震わせていた。

「ちよつと……嘘でしょ？これだけのネズミを相手にしているのよ」

なんて戦闘力、とネリビルは畏怖したかのように、言った。

一方、バオーは休むことなく動き回り、その牙爪を振り回していた。「バルバルバツバツバツ！」

バオーの牙爪は、まるで海を切り開くモーゼのように、押し寄せるネズミの大群を切り裂き続けるッ

だが、どれほど戦っても、多勢に無勢では勝てない。

「キャワワワワッ」

ついに一匹のネズミが、バオーの攻撃をかいくぐって、バオーの足に、深く、深く噛みつく事に成功した。その肌から、青黒い 寄生虫バオーの体液があふれた。

それを契機に、もう一匹、もう一匹 と、ネズミたちが集まってきた。そして瞬く間に、ネズミがバオーを覆い尽くしていく。

「バルバルバルバツ」

バオーは、あつという間にネズミにまわりつかれ、すぐに頭までネズミに覆われた。

それでもしばらくは、バオーの手だけがかろうじてネズミの山から飛び出していた。

だが、すぐにその手も、山に覆われ、見えなくなった。

「キャハハッ……そうよねえ、いつまでも抵抗できるわけがないのよ」
ネリビルが、少しほつとしたようにはしゃいだ。

「ネズミどもッ、今度こそバオーを食べ尽くすのよ！」

キワアーツと言う、ネズミ達が興奮してあげる声が響いた。

「ちよつと……何考えてんのよッ！あの男、ネズミなんかにあげるにやもつたいないわよ」

マキシムが言った。

「あのイケメンの血……美味しそうじゃあない？」

「何言ってるのアンタ。チャンスに手を緩められるほど、オリジナル・バオーは甘い相手じゃあないでしょ」

やれるときにとことんやるのよ。と、ネリビルが目を向いた。

だが……

グチャヤアアアッ！

突然、バオーを覆っていたネズミの山が、『溶解』した。

『溶解』したネズミの山が盛り上がり、そして

ヌポウウウツ

『溶解した肉』から、手が生えた。

その手が交差し、ネズミの山を引き裂いた。その山から、悠然とバオーが現れる。

「ヴオオオムー！」

溶けたネズミの山の上で、バオーが咆哮を上げた。

その様は、餓えきった野生の捕食獣に酷似していた。

育朗Ⅱバオーが着ていた服は、あちこちネズミに噛まれ、ボロボロに千切れていた。

しかし、肌には傷一つついていない。ネズミの歯では、バオーの硬質化された肌を食い破ることは、できないのだッ！

「……やんなっちゃう……あなた、もしかしてかすり傷一つ付いてないって、ワケえ」

ネリビルが、肩をすくめた。

「ちよつと……どうするのよ。あのコ、予想以上の規格外っぷりじゃない」

マキシムが、ネリビルの背中を蹴った。

「まだまだ手はあるわよ」

ネリビルはうなった。

「マキシム、あんたちよつと時間を稼いでなッ」

「なっ……」

マキシムは一瞬怒りで顔を青ざめ——そしてすぐに、『ひどく冷静な顔』でうなずいた。

「フン……わかった。私がやるわ……あなたは、しばらく引っ込んでなさい。むしろ、あんたが来る前に片つけてやるわ……」

マキシムはスタンドで自分の体を覆った。その能力で、着ていた上着を、自ら溶かす。

すると……上着の下から、『全身を覆うブルーラバーのボディスーツ』が現れた。

マキシムは、背中に垂れ下がっていたフードを被り、ジッパーを降ろし、ゴーグルをはめた。

所謂ド級の、ボンデージファッションだ。

「マキシム……あんたゾンビのくせに変態？そういう性癖だったわけえ？」

その様子を見て、ネリビルが、呆れ気味に言った。

「アンタみたいな変態を相手にしなきゃならないなんて、育朗君もかわいそうねえ」

「アハハハ……」

マキシムは、乾いた笑い声を上げた。

「セクシーでしょ……これが私のプロテクターよ。これで私は完ぺきな、何とでも、好きに言うがいいわ」

再び出現したイエロー・テンパランスが、マキシムのボディ・スーツの上に覆いかぶさる。

「ガガガガガアー！」

マキシムは、奇体な雄叫びを上げながらバオーを襲うッ！

「バオーッ！私(ゾンビ)のフルパワーを、受け止められるかしらあ？」

メギョオオンッ

マキシムは、野球ボール大のイエロー・テンパランスの固まりを作ると、バオー目がけて投げつけたッ

しかしバオーは、その攻撃を簡単にさけた。

「バルッ」

「そう……当然あんたは避ける。……でも、ほんのチョッピリ体勢がくずれたわよ」

バオーがスライムをよけた所を、素早く踏み込んだマキシムのパンチがおそうッ。

「そして……体勢がくずれたあんたは、私のパンチをブロックするしかない……全てが予定通りだわ」

マキシムの言葉通り、たまらずバオーがパンチを受け止めた。

そして次の瞬間、マキシムを覆っていたイエロー・テンパランスがバオーに降りかかった。

イエロー・テンパランスが、バオーの体を浸食していく。

「だから、この攻撃が本命ってわけえ」

マキシムが、クククつと嗤った。

『馬鹿な……僕の体が、スライムに喰われていく……』

育朗が、焦ったように言った。

「ホントは、直接あんたの体を喰い千切りたいけどお……スタンドごしで我慢するわあ……降参しなさい」

そうすれば腕一本くらいで、許してあげる。

マキシムは、上唇を舐めた。

しかし、マキシムの提案を、育朗は一蹴した。

『僕はどんな事があってもスマレを守るッ！……噴上君達もだ……』

育朗の言葉とともに、バオーの体を構成する細胞が、微弱な電流を発生させ始めた。

バオーの一つ一つの細胞が生んだ電気は、体内を駆け巡り、互いに混ざり合い、強力な電気を放電するッ！。

グオ——ン！

バオーの体から発せられた電気が、イエロー・テンパランスを焼くッ

マキシムは。電気ショックで一瞬体を硬直させた。

だがマキシムは、全身から煙をたなびかせながらも、まるで何事もなかった様に立ち上がり、再びバオーに組みついた。

「アハハハ……我慢比べよ。楽しいッ」

煙を吐きながらも、焼け残ったスライムがバオーを再び覆うッ

『くっ……もう一度だ……ブレイク・ダーク・サンダー！』

グオ——ン！

「アハハハハ」

グオ——ン！

『もう一度だ！』

グオオオオオオ——ン！

「アハハハハア」

『これでどうだ!』

グウオオオオオオ——ン!!

「アツハハハハハツ」

何度電撃を喰らっても、マキシムは恍惚の表情を浮かべ続けていた。

だがその一方で、マキシムのゴーグルの隙間から、血が吹き出始めていた。

噴き出た血は、ブルーのラバースーツの上にかかり、まるで血の涙を流しているようにも、見えた。

(ううっ……マズイツ……ブレイク・ダーク・サンダーは一発撃つ度に激しく体力を消耗する……ラバースーツのせいで電撃の効果も弱い。しかも相手はゾンビ……我慢比べは此方の分が悪い、このままでは僕の体が徐々に喰われてしまう……ならば……)

「バルンツ!」

バオーはゾンビの怪力をものともせず、マキシムを押しさえつけた。……そして、なんと……メルテツティン・パルム・フェノメノンの強酸液を、一気に噴出させたツ!!

『グウウツ!』

跳ね返った強酸液をかぶったバオーの皮膚が、煙を上げていく。

「アアアアアツツ! イータアイイ!!」

一方、まともに強酸液をあびたマキシムは、絶叫を上げながらのたうちまわる。

「イイ、イイイイイツ!」

バオーにより、身に着けていたボディスーツがドロドロに溶け、ところどころ素肌と一体化している。スタンドである、イエロー・テンパランスさえも溶かされているのだ。

一体化していない皮膚は、グズグズにただれ、皮膚の下の赤い肉がむき出しになっている。

その様子を見て、ネリビルが楽しそうに嗤いだした。

「フフフ。マキシム、よかったわねえ、あなた、肌がすっかり溶けて……きれいになったじゃあない」

スベスベよ、とネリビルが笑った。

「……アンタよくやったわ。これであの子を呼ぶのに必要な時間が、稼げたわ」

「ぎやあああああああああああああああああああああああああああああああ
あああ！」

ネリビルは、足元でのたうちまわっているマキシムを、容赦なく踏みつけた。

笑うネリビルの隣に、2体のクリーチャーがヌツと現れた。

一体は巨大なマンドリル・マーチン！そしてもう一匹は……

「ちよつと遅れちゃったけど、あなたのお友達が来たわ……紹介するわね……彼が、モディレイテッド・バオー……レッド・ヘルムよっ！」

ネリビルが、高らかに言った。

現れたのは、通常のおおきさ3倍近い、巨大なヒグマだ！

熊はネリビルの命令により、その体に眠る寄生虫バオーを目覚めさせた。アームド・フェノメノンを発現させ、その姿かたちを変身させる。

ただでさえ巨大なヒグマが、モディレイテッド・バオーの影響ですらに巨大化していく……

「フッフ……オリジナル・バオー対モディレイテッド・バオー……一体、どちらが勝つのかしらねえ」

楽しみだわ？ ネリビルが、楽しそうに言った。

東方仗助と橋沢育朗 その3

1999年11月7日 「M県K市名もなき高原」:

杜王町の高校生達は、キャンプ場から少し離れた空き地に集まっていた。それぞれに激しい戦いをくぐり抜け、久しぶりに出会った彼らは……

「ぎやはははは、お前マジかよ」

「ひー腹がいてえ……イツイヤ、グレートだぜ」

「ナヌツ……」

「億泰さん……これで良いんですよ……そう思えば、どうって事無いんです」

「よおー……そのコーヒー、取ってくれよ?」

……ただ だべっていた。

「仗助よおろろ。俺あ、嬉しかったんだぜえ」

飲み干した缶コーヒーを真つ平らに踏み潰しながら、億泰がこぼした。

「お——ツ……わかるぜえ、億泰ウ?。そりゃあ、うれしいよなア——」

仗助は、腕組みをしてウンウンと、うなずいた。

「そんな美人が話しかけてくれりゃあ、誰だっとうれしいよ」

「そうだろう、俺達は頑張ったんだぜ」

「ええ、億泰さんは大活躍でしたよ」

未起隆は、至極マジメにうなずいた。

「億泰さんが体を張ってくれなければ、僕らは助かりませんでした」

「チツ」

噴上は、不満げに舌打ちした。

「そうは言っても、お前達、育朗のスケを助けられなかったじゃねーかヨ」

「ナヌ?」

「大体、何を勘違いしてやがったんだ」

噴上は鼻で笑った。

「スマイレは育朗のスケで、おめ??のスケじゃねーだろうが、この色ボケ野郎……鏡を見ろっんだ」

「よせよ。そりゃー言い過ぎっても……」

ドガツ

あわてた仗助がとりなす前に、億泰は噴上を殴りつけた。

「ああああん？偉そうな口をきいてんじやねーぞ、僕チンよく泣かすぞオ？」

「あああ???おめーみてーな阿呆が何言ってるんだ」

みぞおちに一発入れられた噴上は、痛えな……とむせながら億泰に詰めよった。

億泰と噴上はにらみ合った。……が、突然、億泰はがっくりと肩を落として、しやがみ込んだ。

「そおだよなあああ」

億泰はなげいた。

「スマイレ先輩は、捕まっちゃまった……だから俺らあ、どうすればいいかわからねーよ……俺はただ、目の前の奴らとやりあっただけだ。未起隆が頑張ってくれなけりゃ、俺達も、奴らにつかまってたろーしよお」

「おう……しかし、しかたねーぜ。俺たち全員、グレートにへビーな状況だったんだからよおー」

仗助は、さりげなく億泰と噴上の間に入った。

「聞いた話じゃあ、かなりヤバイ能力のスタンド使いとやりあつたんじゃないか。……お前たちじゃなきゃ、対抗できなかつたと、俺は思うぜ」

「おお……だが、スマイレ先輩を助け出さなきゃならねえ……」

こんな時、アニキならどうすんだろうなあ

ぼそつと口にされた億泰の言葉を、仗助達は皆、聞こえなかつたフリをした。

「今、私の仲間も宇宙から探しているのですが……」

未起隆が、真剣に言った。

「どうしてもスマイレ先輩が、見つからないんです」

「……仗助、どうやってこの状況に落とし前をつけるつもりだよ」
噴上が尋ねた。

「この状況、ヤバすぎるぜ……爆弾使いのスタンド使いに、ゾンビ……しかも育朗の奴までドレスの連中についちまったかもしれねー」
「そりゃあーグレートな状況ツスね……それで、その育朗クンってどんな奴ツスカ」

「優等生クンだよ、仗助……俺やお前とは、人種が違う野郎だ……真面目で、誠実、イケメンって奴だしよー」

ダチになるようなやつじゃねえ……億泰は、鼻息荒くいった。

「……だが、奴は強ええぞ。あの『バオー』ってのはヤバい能力だぜえー」

「僕達も見ました、育朗さんが変身した『バオー』が、敵を掴むところを。……『バオー』がその手で、ただ掴んだだけで、その掴んだものがドロドロに溶けてしまいました。……それに『バオー』が、体から電撃を放って敵を黒こげにしたのも、確かに見ました」

未起隆はブルツと体を震わせ、あんな人は宇宙のどこにもいなかったと付け足した。

「グレートオ……」

『変身』するのかよ、仮面ライダーみてえだな。仗助が、真剣な顔で腕を組んだ。

「育朗は、その スミレってスケを追って行っちゃった。そのスケの為なら何でもやりそうだったからな……もしかしたら育朗は、スケを人質にとられて、俺たちの敵に回るかもしれネ??ツ」

噴上は顎をかいいた。

「ヤバすぎるぜ、育朗と、いや『バオー』と戦うのはよオ……アイツは強ええーツ……しかも、相当気合いが入ってやがる。なんつーか、『スケが助かるんなら自分の事なんてどーでもイイツ』、て思いつめてやがる」

「彼は……育朗さんは、ドレスって組織によって、その『バオー』に変身する能力』を与えられたって、言っていました。ドレスっていう人たちは、一体何者なんでしょうか?」

今の地球人の技術力でできる事とは、思えませんよ。と未起隆が言った。

「俺にやあわからねくくだが、ドレスの連中は因縁的に、全員俺の敵だぜえ〜」

億泰は、つぶしたコーヒーマグの缶を、ザ・ハンドでかき消しながら言った。

「あのババアは、オヤジのことを笑いやがった……それは、『俺やアニキの生き方』を嘲笑ったのと、同じことだぜえ、絶対許さね〜」

「お前だけじゃねー。ドレスは俺たち全員の敵だぜ、億泰よおー」

ところで、爆弾のスタンド使いは、確かに吉良じゃなかったんだな？ 仗助は、噴上に確認した。

「なんつつ——か、……俺が思うに、カギはやっぱり、その育朗って人だと思っスよ」

仗助が言った。

「その『美人のスミレ先輩』は、きっと無事だぜ。だって、育朗クンを味方にするためにやあ、スミレ先輩に手を付けるわけにやあいかね?? もんなあ。……だからよオ——」

仗助は、噴上を見た。

「噴上裕也、まずはおめーだぜエ。おめーが育朗クンを探せ……その間に、俺たちは、早人達を安全な場所に連れてかなきゃならねー」

「それで、どうすんだよ」

「それから、反撃開始よ??」

仗助は、クレイジー・ダイヤモンドを出現させ、近くの石をぶつ壊した。壊れた石は、クレイジーダイヤモンドの力で、まるで芸術作品のようにひん曲がって再修復された。

「このキャンプをおそって、人を殺したのも奴らの仕業に違いねー。奴らを全員まとめて叩き潰してやるぜ」

ボンッ!

気がつくと仗助の髪型が崩れていた。まるで、腹の底から湧き出る様な仗助の怒りが、発散されたため、髪が逆立ったかのようだ。

「……」

仗助はくしを取出し、細心の注意を払って、丁寧に髪型を整え始めた。

ジリリリンッ!

そのとき突然、警報がひびきわたった。アリッサが仕掛けた、『ゾンビの侵入を感知するためのトラップ』に、何かが引つかかった音だ。

仗助達は、顔を見合わせた。

「さっそくゾンビがお越しになったぜ……気合い入れろよお——」

それから、絶対ゾンビにかまれるな と、仗助は付け加えた。

「奴らにかまれたら、自分たちもゾンビになっちゃうっすよお。そうなっちゃうたら、俺でも『直せ』ねえ」

「おお……なんだかよくわからねーが、要するに、やられる前に削っちめえば、いいんだな」

億泰がうなずいた。

「……仗助、向うだ。向こうから……肉が腐ったみてーな強烈なニオイを感じるぜ……偵察に行くぜ」

噴上は、ハイウエイ・スターを出現させ、嫌なニオイの元へ送りこんだ。

ニオイのものは、キャンプ地すぐ近くの草むらに、大勢潜んでいた。人間?

だが感じるのは、強烈に腐敗したニオイ、生臭い血のニオイ——ゾンビだッ!

「居やがったぜ!ゾンビだ」

ハイウエイ・スターは体を分裂させ、手近なところにいたゾンビにとりついたッ!

「とりあえず、一体倒しておくぜ。たっぷり養分を吸い取ってやる………なっ………」

グゲゲゲゲッ

噴上は、急に込み上げてきた吐気に勝てず、地面に昼飯の残りをぶちまけた。

養分ではなく、『とてつもなくどす黒いもの』が、スタンドを通して送られてきたのだ。それは、『全身が徐々に腐っていく』ような、そん

な感覚のモノであった。

「ぎゃあああああ！」

ゾンビたちが、一斉にキャンプをおそう。

「晩飯の時間だぜえ……食事を、血iiiiiiiiiiをよこせい！」

「噴上さん……」

未起隆が、地面にうずくまっていた噴上に駆け寄った。

「大丈夫ですか？」

「……宇宙人野郎か……お、俺は、大……丈夫だ……」

噴上は、再びスタンドを出した。

ハイウェイ・スターで、近づいてくるゾンビを殴りつけるッ。

しかしゾンビは、ハイウェイ・スターの攻撃などものともせず、二人に迫ってくる。

「血iiiiiiii！血袋ども待つてろおお!!」

ゾンビが拳を振り上げ、殴り掛かってきたッ

「くそッ」

やむを得ず、噴上はゾンビの攻撃をハイウェイ・スターに受け止めた。

しかし、ゾンビの怪力はハイウェイ・スターよりもはるかに強い。

噴上はハイウェイ・スターごと、吹っ飛ばされた。背後にいた未起隆もろとも、地面をゴロゴロと転がる。

「ぐあああああ！」

起き上がった噴上の目の前に、ゾンビの拳が迫るッ

「お前の血iiii、くれええええええ！」

「うおおおおおおおッ！」

だめだ、助からねエ……噴上は、目をつぶった。

「おりやつーこっちに、こいッ」

間一髪！

噴上と未起隆に止めを刺そうとしたゾンビは、その直前に後方に引っ張られた。億泰のザ・ハンドによって、引き寄せられたのだ。

待ち構えていた仗助と億泰が、ゾンビを迎え撃つ。

「さあて……グレートに……ぶちかますぜッ」

そしてゾンビは、二人のスタンドにボコボコに殴られ……瞬殺された。

「……億康う……仗助え」

噴上は、悔しさと安心感とであふれ出た涙を、強引に拭った。

「噴上裕也、未起隆、おめえ達のスタンドは近距離の戦闘向きじゃねえ、無理すんなよ」

仗助が言った。

「チッ」

噴上は歯噛みし、ヨロヨロと立ち上がった。

その噴上めがけ、またしてもゾンビが一体襲い掛かるッ

「ゴブツ」

噴上はかろうじて、ハイウェイ・スターでゾンビの一撃を受け止めた。

だが、噴上は再びパワー負けし、再び未起隆の足元まで吹っ飛ばされた。

『ドラララッ！』

仗助のクレイジー・ダイヤモンドが、再びゾンビを粉碎した。

「ちっ……ちくしょう」

やっぱり、自分には戦えないのか……噴上は、苦い思いをかみしめた。

「噴上さん！」

未起隆が、自分の能力、アース・ウィンド・アンド・ファイアーで『二本の金属バット』に変身した。バットは二本とも、噴上の手の中に飛び込んだ。

「武器になりました。これで、奴らを倒してください」

「お前、そんなものに変身して、本当に大丈夫なのか？」

噴上が尋ねた。

いくら金属バットとは言え、ゾンビの頭を殴れば凹みもするし、下手すれば折れるかもしれない。

そうなったら、本体である未起隆にとっても、ただでは済まないはずだ。

な」

「おー、グレートだぜ……あの分ならあんまり心配いらねーな」

「仗助もクレイジー・ダイヤモンドでゾンビを蹴散らしながら、言った。た。」

「億泰、俺達も行くぜ??早人やSW財団の人たちが心配だからよお」

「おーよ」

億泰が、ゾンビの頭部を削り取った。

「この仗助、億泰コンビの破壊力を、このダボ共に思い知らせてやろくぜえ〜」

「もう誰も死なせやしねー。……いいか億泰、俺達がみんなを守るんだぜ」

仗助が言った。

1999年11月8日 「DRESSの基地」:

スタンド(幽波紋)、それは生命エネルギーが作り出すパワーを持った像。それは守護霊のように『傍らに立ち』(Stand by me)、『困難に立ち向かう』(Stand up to)ためのもの。

スマレは何度も何度も失敗した挙句、ついにドアの向う側に自らのスタンド: WitDを出現させる事に、成功した。

今、スマレの脳裏には、『扉の向こう側に出現させたWitDがパタパタと羽を飛ばたかせて、ゆっくりと扉の反対側を旋回する』はつきりしたイメージが浮かんでいた。それは非常にはつきりしたイメージであり、ただ想像しているときに心に浮かぶイメージとは、明らかに質が異なっていた。

今、スマレは思うようにWitDを動かせていた。そして、同時に、WitDはスマレに、未来のビジョンを送り続けていた。

『未来のビジョンを見ること』は、スタンドが発言していない、幼少期よりできていた。子供のころには、『心を滑らす』と呼んでいた技だ。

スタンドとは、幼い頃に身につけた『心を滑らす』能力の、さらに先にあるモノであることを、スマレは理解しつつあった。

億泰とミキタカゾの能力を知り、スタンドの概念を理解したことで発現したW i t Dは、実は気が付かなかっただけで、スマレが子供のころからずっと傍にいたのだ。

「やった……W i t Dが、扉の向うにドアノブを見つけたわ」

スタンドの操作に集中するために目を閉じていたスマレは、無意識の内に独り言を漏らしていた。

「W i t Dで回せるかしら……ダメだわ……そもそもノブには鍵がかかってる…… 鍵はどこ……」

スマレは、W i t Dを操作して鍵を探し始めた。W i t Dがスマレの脳裏に送ってきた映像によると、スマレが閉じ込められているのは、どうやらドレスの研究所あとの、一つのようなだった。

パタパタ……W i t Dが、蝶が飛んでいく。

W i t Dが飛ぶ廊下は、薄暗く、がらんとしていて、ほとんど明かりもない状態だった。

廊下はL字型に曲がっており、時折ポツン・ポツンと鍵のかかったドアがあつた。しかし、それらのドアの奥には、人の気配が一切しなかつた。

廊下の奥へ進んでいくと、パスワード付きのドアが見えた。

パスワードを入力するためのコンソールを見て、スマレの心臓が高鳴つた。

パスワードならコードを『予知』して、カギを開けることができる。

そうだ……こうやって列車のドアを封じるパスワードを『予知』して、その『扉を開いた』ことによって、スマレは育朗に出会つたのだ。このパスワードを予知できれば、きっとまた育朗に会える。

今度は、私が彼を助けるのだ。

さらに何度か集中することで、スマレはW i t D越しに『心を滑らせる』事に成功した。

心を滑らせ、パスワードの番号を予知する。このドアを開けることは可能だ。

しかし、W i t Dを使ってパスワードを入力しようとしたまさにそ

の時、W i t Dがスマイレに、とあるビジョンを見せた。

スマイレはそのビジョンを見て、息をのんだ。

ドアの向こうに狂暴な怪物が徘徊している姿が、ビジョンとして見えたのだ。

それは、緑色の皮膚―鱗―を持った人間を上下に押しつぶしたような怪物であった。

屍生人（ゾンビ）ではなさそうだ。だがスマイレは、もし自分がこのドアを開けたら、あつという間にこの怪物に食われてしまう事を察知した。

ダメだ。他の部屋を試さなければ。

スマイレはがっかりして、W i t Dに廊下を引き返させようとした。

ところがその時、スマイレは、W i t Dを通して誰かの話し声を聞いた。その声は、パスコードの部屋から聞こえるようであった。

（誰？）

スマイレは、W i t Dをドアの空気取り入れ口に止まらせた。空気取り入れ口の小さな隙間からは、とぎれとぎれではあつたが、その人物の話す声がかすかに聞こえていた。

パスコードの部屋にいる人物は、どうやら電話越しに誰かと話をしているようだった。

「イエッサー……報告がありました。そうです。モーリンは、やられる前に必要な仕事を終えています。目指すものはもうすぐ手に入りそうです。ええ、オルダスが対応して……」

ドアの空気取り入れ口から中を除くと、気弱そうな少年が、何か電話のように物を持って話し込んでいるのが、ちらりと見えた。

「ええ……予知の女のスタンドも奪えます。もちろんです。手筈は整っています……彼女の力を奪えれば、ボスに抵抗できるものはいません……ええ、わかっています……」

話はまだ続いていたが、スマイレはぞつとして、W i t Dをドアから離れさせた。

『予知の女』とは、自分のことに違いなかった。どうするのかは知らないが、誰かが私の『予知』の力を欲している。

狙われているは、育朗だけではなかったのだ。

このドアからは逃げられないことがはつきりしたが、WitDを使ってまだやることはあるはずだ。

たとえば、先ほど通り過ぎたいくつかの部屋の中を、調べてみるのもよさそうだ。

組織が自分の能力も狙っているのならば、絶対に脱出しなければならぬ。

自分の能力を奪われ、育朗たちを倒すのにこの力が悪用されるようなことは、あってはいけないのだ。

思いつくことは、できる事は、何でもやってやらなければ……

どのドアにも、空気取り入れ口を兼ねた鉄格子付きの小窓が取り付けられていた。WitDが通り抜けるのに、ちょうど良い大きさだ。WitDは適当に選んだドアの小窓を通り抜け、部屋を一つ、一つ丁寧に調べて回った。

どれも家具ひとつない殺風景な空き部屋だった。しかし3つ目の部屋を調べたところで、スマレは、ついに目指すものを見つけたと思った。

その部屋は物置として使われていたようだった。正体不明の瓶やら、ノートやら、不気味な標本などが、棚いっぱい並べられていた。

そこに紛れて、小さなクリップの針金がきらりと光っていた。

部屋の窓にも鉄格子がはまっていたが、天井には、空調ダクトの吹き出し口が見える。スマレが入れそうな大きさだ。

何とかこの部屋まで行ければ、空調を通って脱出できるかもしれない。

と、スタンドを通して見るビジョンが、急激に薄くなり……スマレは、自分が真っ暗闇の中、汗だくで床に倒れていたことを知った。

コンクリートの粒が汗で体にへばりつき、たまらなく不快だった。

東方仗助と橋沢育朗 その 4

「ふうっ……スタンドの操作って、想像していただけたよりも消耗するのね」

スマレは、一度スタンドをひっこめると、汗を拭き、ホコリをぬぐい、一息ついた。

ほんの数分、スタンド操作に集中していただけなのに、もうくたくただ。

だが、あまりノンビリもしてられない。

スマレは、もう一度スタンドを出現させた。目を閉じ、スタンドの操作に集中する……

やった……今度は、一度目と違って一発で扉の向こう側にW i t Dを発現させ、先ほど見つけたクリップまで誘導することができた。ほんの短い時間で、スマレはスタンドの操作を急速に習熟してつつあった。

「クリップ……力の弱いW i t Dでも、ギリギリ動かせるわね……」

W i t Dは、その前足でクリップをつかむと、ゆっくり少しずつクリップを伸ばし、針金を作った。

それを苦勞してドアノブまで運ぶ。ドアノブの中に、クリップでできた針金を少しづつ、少しづつ送り込み、鍵穴の形状を探っていく……

完全な暗闇・静寂の中にいるスマレは、W i t Dの操作に完全に集中することができていた。

鍵穴の形状を微細な針金の振動で察知しながら、カギが合うように、クリップの形状を鍵穴に合わせていく……

そして、その『瞬間』は突然現れた。

キュイーンッ

不意に、スマレがスタンド越しに感じていた『W i t Dの周りの空間』が、鮮明度を増した。まるで、近眼の人間が眼鏡をかけたように、世界が変わって見える。

集中すれば、W i t Dの百分の一ミリ以下の細かな動きまで、手に

取るようにわかる。わかるだけでなく、気が付くと、クリップの針金を、髪の毛一本以下の精度で調整することができている。

スマレは胸を高鳴らせた。

もう少し、あと一息で鍵が開く……

カチャリ

驚くほどあっけなく鍵が回り、スマレを閉じ込めていたドアが開いた。ドアの隙間から光がこぼれ、新鮮な空気が部屋に流れ込んでくる。

音をたてないように気を付けながら、スマレはドアをそつと開けた。

ドアの外では、W i t Dが、光を放ちながら優雅に舞っていた。

1999年11月8日（早朝） 「とある廃墟」：

バシユツ！

マーチンのザ・サンが放った光線を脇腹に受けながらも、バオー……オリジナル・バオーは、ひるまず突進した。

バオーは、素早くジャンプし、マーチンの放つ光線を避けた。

マーチンの防御をかくぐり、爪をふるう。

マーチンの腹を、切り裂いたッ

「ギユアアアスッ！」

『これで終わりだッ』

育朗が叫んだ。

バオーは反対側の手を、振り上げた。

その手から出現させた刃で、マーチンの首を切り落とすッ

「ヴァルンツ」

バオーは、まだカタカタと言っているその首をつかみ上げた。

その首が、ドロドロに融解した。

そこに、バオーと化したヒグマ、レッド・ヘルムがおそいかかった。

巨大熊の爪牙の一撃が、バオーの顔面をおそう！

「バルバルバルッ！」

バオーが前転して、レッド・ヘルムの爪牙を避ける。

「ヴオオオオオオオ！」

レッド・ヘルムの爪牙は、バオーの背後の大木をまるでマッチ棒のようにへし折った。

『うううっ……ものすごいパワーだ』

育朗がつぶやいた。

『あの破壊力はモノスゴイ』

「フフフ、同じ寄生虫バオーに強化された者同士なら、当然元々の力が強い方が勝つてわけ」

ネリビルが笑った。

「それにアナタ、マーチンちゃんを殺るまでに負傷しすぎよ……レッド・ヘルムツ！育朗をバラバラにしておしまいッ！」

「ヴァル・ヴァル・ヴァル・ヴァル！」

レッド・ヘルムが吼え、そして背中から巨大な『斧』を、何本も出現させた。

「これが、レッド・ヘルムのリスキニハーデン・セイバー・フェノメノンよ。フフフ……ごめんね、これ……アナタのものより……何倍も、『太くて大きい』のおくく」

ネリビルは卑猥なポーズをして、育朗を挑発した。

「バルツ」

バオーは腕から刃を出現させ、レッド・ヘルムに斬りかかったッ！ オリジナル・バオーの刃とモデュレイテッド・バオーの斧、互いの刃がぶつかり、押し合った。

リスキニハーデン・セイバー同士の、つばぜり合いだ……

『クツ……強い』

だが、レッド・ヘルムにくらべ、体格が劣るバオーが、圧力に押しされ、一、二歩、後ずさった。

「ホラホラ……頑張らないと、真つ二つに斬られちゃうわよんツ」
ネリビルが煽った。

（押しでは勝てないッ、ならば……ここはあえて『引く』ぞ）

バオーは、あえてレッド・ヘルムとの鏝迫り合いから、力を抜いた。

のしかかってくるレッド・ヘルムの圧力をかわして、後ろに飛びすぎる。

そして、サッカーのスライディングタックルのような体勢で、レッド・ヘルムの後ろ右脚首を蹴り飛ばした。

レッド・ヘルムはバランスを崩し、バオーもろとも地面に突っ込んでいった。

ドドオオ——ン！

土埃が立ち込める中、レッド・ヘルムは苛ただしそうに咆哮をあげ、立ち上がった。

驚いたことに、レッド・ヘルムの本体には傷一つない。

しかし、背中の『斧』がすべて、根本から切り裂かれていた。

地面に突っ込んだすきに、バオーが切り落としたのだ。

一方バオーは……オリジナル・バオーも立ち上がった。

バオーは、全身に切り傷を受け、さらに左腕が斬り飛ばされていた。

レッド・ヘルムの『斧』を切り落とそうとしたときに、逆に斬られたのだ。

『やはり、強い』

育朗が、顔を歪めた。

(モデュレイテッド・バオー……確か、バオーとしての能力を抑えて、安定性を向上させたと言っていた。ならば、バオー固有の能力はコチラが上のはず。バオー………ここはお前に託すッ)

「バルバルバルバル！」

バオーが叫び、レッド・ヘルムの周囲を飛び回る。

頭部への蹴リッ

残った右腕のリスキニハーデン・セイバーを、振るう。

レッド・ヘルムが反撃しようとする間を与えず、オリジナル・バオーは、その能力をフルに発揮してレッド・ヘルムを攻め続けた。

手数で、力に対抗するのだ。

「ヴァール！」

業を煮やしたレッド・ヘルムが、爪牙を大振りする。

バオーは身をかがめ、爪牙を簡単にかわした。

一方、空を切った爪牙の勢いで、レッド・ヘルムがたたらを踏む。チャンスだ。

『よしッ、シューティンググビースス・ステインガー!』

育朗の声に従い、バオーはレッド・ヘルムの顎めがけて、発火能力を持つ毛針を放った!

「グアアアッ」

レッド・ヘルムの顎に、目に毛針が刺さり、炎を上げるッ。

だが、レッド・ヘルムは、目の負傷も、炎も、ものともしなかった。対抗して、全身から毛針を放った。それも、バオーに倍する量だッバシユッ!バババババッ!

レッド・ヘルムが放った毛針によって、バオーの放った後続のシューティンググビースス・ステインガーは、すべてが弾き返された。しかも弾き返された毛針の一部がバオーに命中し、空気と反応して発火していく……

『ううう……炎が、僕をおそうッ!』

バオーは、火のついた上着を抛り出した。

ほうりだした上着は、見る見るうちに炎を上げ、燃え尽きていった。『シューティンググビースス・ステインガーは効かないか……ならば次だ、喰らえッ、メルテツデイン・パルムッッ!』

2匹の『バオー』——オリジナルとモデュレイテッド——は互いの手を組み合わせて、押し合った。

その手から、バオーの特殊な体液がにじみ出る。その体液はバオーの体表で成分を変え、酸になったッ! これが、メルテツデイン・パルムだっ!

互いの酸が飛び散り、周囲の木や草が、しゅうしゅうと白煙を上げて溶けていく……

しかし、ほとんどのものを溶かしてしまうメルテツデイン・パルムは、互いに効かなかった。

否、実際は、酸はバオー達を溶かしていた。

しかしバオーは、体が溶けるよりも早い速度で、次から次に新しい装甲が生産しているのだ。

そのため、酸では、互いにダメージを与える事が出来ないのだ。

『グオオオオオオ……これならどうだ、とっておきだ……くらすえ、ブレイク・ダーク・サンダー!』

育郎のスタンド、ブラックナイトの顔が現れた。と、同時に、バオーがまるで白鳥が舞うように両手を広げ、頭を下げた。

バオーの右腕が発光し、電撃を放つツ!

バリイイイツ!!

「無駄よツ、ノー・ミイ・ニングウ」

ネリビルが叫んだ。

同時に、レッド・ヘルムの背中が背びれのようなものが隆起、発光し始めた。

その背びれが光り、スパークが飛ぶ。背びれから、バオーへ電撃が飛ぶつ。

バリ!バリバリツ!

『くっ……』

ブラック・ナイトが顔をゆがめた。

電気は電圧の高い方から低い方へと、流れる。

当然、全身の筋力が大きいほうが、作り出せる電圧も高い。

ザバアアアアアツ!

雷撃が、レッド・ヘルムからバオーに向かって、流れていた。

バオーはぐらつと揺れ、全身からしゅうしゅうと煙を吐き出した。

とっておきの武装現象である、電撃：ブレイク・ダーク・サンダー

さえも、撃ち負けたのだ……

「ハハハハハツ」

ネリビルが笑った。

「ごめんねえ、言っただけでなかったけど、レッド・ヘルムの素体は、ただのクマじゃあないのよ。実は彼には、あらかじめ生体改造を施してあるってわけエ……だから、モデュレイテッドには発現しえない、『オリジナルしか持っていない能力』も使えるって理屈よおっ」

(だめだ……基本性能ですべて相手が上回っている……しかもあの分厚い筋肉と装甲、普通に戦っては勝てない……ではどうする?)

大勢を立て直すため、バオーはいったん飛び上がった。近くの木の上に着地する。

すぐにまた飛び上がり、バオーは高い木々のてんぺんに近いところまで、木を登った。

(考えろ、どうすれば致命傷を与えられるのかを)

木の上で、育朗は必死に考えた。

木の上なら、レッド・ヘルムの攻撃も届かない。少しは考える時間が取れるはずだ。

だが、そのもくろみは甘かった。

「ヲオオオーン！」

レッド・ヘルムは爪牙をふるい、バオーのよじ登った大木を、簡単に打ち砕いたのだ。

『くっ』

バオーは、やむを得ず大木から飛び降りた。そこを、レッド・ヘルムの爪牙がおそうッ！

(やるしかないッ!!この力に対応するには、やはりスピードだ。パワーは速度の2乗に比例するはず)

おそい掛かるレッド・ヘルムの攻撃を、バオーはすべて いなし、そらし、まともに受けずにかわしていく。

「しやらくさい、力で圧倒してしまいなさいっ」

ネリビルの命令にこたえ、レッド・ヘルムはいったん距離を取り
……

バオーに向かって、突進してきた。

まるで新幹線が正面から突っ込んできたのかと、間違うばかりの圧力の暴力が、バオーに迫るッ！

(そして、技だ。ボクシングのカウンターや、柔道の投げ技のように相手のパワーを逆用するッ)

『セイバー・オフッ！』

バオーは、リスキニハーデン・セイバー・フェノメノンの刃を、レッド・ヘルムに投げつけた。

バオーの腕から外され、飛んでいった刃は、狙い正しく、レッド・

ヘルムの額に刃が突き刺さった。

しかし……しかし、レッド・ヘルムの突進は止められないッ。

「ヲオオオオ——」

バオーは全身をまりのように丸め、レッド・ヘルムのぶちかましを受け止めた。

10トンを超えるレッド・ヘルムの激突を正面からくらったバオーは、まるでバレーボールのアタックのように吹き飛んでいく。

ベシバキッ……

ドグガアアアア——ンン！

吹き飛ばされたバオーは、杉の立ち木に叩きつけられた。バオーを支えようとした立ち木は、軒並みへし折れてしまった。

これらの木は、ただの野山の立木ではない、どの木も樹齢300年は越えるかという大木だ。

その大木が、まるでボーリングのピンのように何本もなぎ倒されていた。

オリジナル・バオーの骨格は強化され、皮膚は強靱なプロテクターとなっている。

しかし、それでもなお、レッド・ヘルムのぶちかましはバオーの体をえぐり、激しく負傷させていた。

「ガ・ギ・ギ・ギ・ギイ」

バオーは、折れた立木の隙間から立ち上がった。

レッド・ヘルムに向かって、へし折れた立ち木を蹴り飛ばす。

バオーが蹴り飛ばした枝は、レッド・ヘルムが爪牙の一発で粉々に粉砕した。

「レッド・ヘルムは、あんたができる事ならなんでもできるわよ、育朗」
ネリビルがせせら笑った。

「まあ、元々の素体がヒグマと人間じゃ、勝負にならないわね。あなた、良くやったわ」

『いや……人間には……あきらめず困難に立ち向かい、勇気と知恵で乗り越えることができる力があるッ、先人から積み上げられ、継がれてきた経験と技術があるッ……それが人間の力だ！』

育朗が叫んだ。

『僕は、あきらめないッ』

「ハンッ……笑わせないでよ」

ふらふらと立ち上がったバオーに、再度レッド・ヘルムが突進する。

「ニ・ン・ゲ・ン？違うわ。アンタは“元”人間よ……アンタは、私たちと同じ”モンスター”よ」

ネリビルが嘲った。

「モンスターが、ニンゲンの振りをして格好つけてるんじゃないわよおおおッ！」

バオーは四足になり、後方にジャンプした。

そして……空中で体勢を立て直すと、立ち木を右手と両足でつかみ、蹴ったッ！

反動をつけ、勢い良くレッド・ヘルムへ向かっていく。

（もつと速度を……回転だ。バオーの突進に、回転の速度を上乗せしたカウンターだッ）

育朗の思いにこたえるように、バオーは、空中で体をそらせ、大きく手を振りかぶって回転するッ。

「ウオオオオムー！」

バオーのリスキニハーデン・セイバーが、さらに長さを増す。

バオーは、まるで一振りの回転する刃となり、レッド・ヘルムに正面から向かっていったッ！

『……どうだッ』

メザアアアアン!!

レッド・ヘルムの右上半身が、バオーによって切り離された。

しかし、しかし、レッド・ヘルムは、弱った様子もなくまた立ち上がった。

メメタアアア

そして、バオーに切断されたレッド・ヘルムの右上半身からは、赤肌色の滑つとした触手が生えた。

レッド・ヘルムは、初めこそ少し戸惑ったように触手をペチン、ペチンと動かしていた。

だが、すぐにその使い方を理解し、失った前足と同様に自由自在に使い始めた。

「育朗……今のは恐ろしい技だったけど、モデュレイテッドの回復力を甘く見たわね」

ネリビルが言った。

「同じ手は二度と聞かないわよ……もう勝ち目はないわ、降伏しなさい」

「V a u u u u u u !」

レッド・ヘルムが跳躍し、オリジナル・バオーに突撃するッ！

『まだまだ……一緒にいくぞ、バオー！』「ヴオオオオオム！」

とつさに、バオーは、レッド・ヘルムの振り下ろす左前足を掴んだ。

瞬時に、身をひるがえす。

そして、片手での一本背負いをレッド・ヘルムにしかけた。

グツギヤアアアアンツツッ！

レッド・ヘルムは、バオーの投げによってその巨体を宙にまわせ、激しく背中を打ち付けた。

『ここだっ』

バオーはすかさず、レッド・ヘルムの手をつかみ、その頭に両足をかけた。

柔道で言う、腕ひしぎ十字の格好に持っていく。

「ヴォーム！」

レッド・ヘルムは触手を、バオーの胴体に巻きつけて、ひきはがそうとした。

そして同時に、バオーの右足に噛みつくッ！

『クソッ』「ウオオオオオオム！」

バオーは、無事な左足で、レッド・ヘルムの頭部を蹴った。

そして、足を噛み千切られる前に、バオーの左足が、レッド・ヘルムの顎を蹴り砕くことに成功した。

バオーは左足でつけた反動を利用し、全身を巻き込むようにひねり、……逆に、レッド・ヘルムの右腕を、ねじきった。

そのままチョーク・スリーパーに移行し、レッド・ヘルムの首を直

角にひねる。

レッドヘルムは、どうつと倒れた。

すぐに立ち上がろうとバタバタともがくが、その手足は、空しく土を掘り返すだけであった。

『とどめッー』『バルッ！』

バオーは、レッド・ヘルムの傷口に手を突っ込む。

それは、振り切り切った右手のあった後だッ！

「ギイイイイー！」

泣きわめくレッド・ヘルムを押しさえつけ、バオーはレッド・ヘルムの体に、右腕をずぶずぶともぐりこませた。

そのたびに、レッド・ヘルムが、悲鳴を上げた。

「バルバルバルバル！」

バオーが叫ぶと同時に、レッド・ヘルムの胴体の内側から、4本のリスキニハーデン・セイバーが飛び出す。

それは、レッド・ヘルムの胴体につきいれられた、バオーの腕から飛び出したものだ。

それぞれの刃は真っ白に輝き、高圧電流が放電されている。

次の瞬間、その傷口から白煙が上がり、……レッドヘルムは黒焦げとなった。

「バカな……複数のアームド・フェノメノンを、同時に使えるなんて……」

マキシムが、おのきの声を上げた。

レッドヘルムは、それでも生きていた。

だが、激しい痛みを身を悶えさせ、苦しげに呻いていた。



「バルッ……」

バオーは苦しむレッド・ヘルムに近づき、その首をそつと抱えた。

バオーとレッド・ヘルム、同じ寄生虫バオーの素体となったモノ同士が視線を合わせた。

バオーは今、苦しみながら死んでいく同胞の悲しみのおいをかいでいた。

その悲しみにおいては、バオーを介して、育朗の心にも響いた。
『苦しめてスマナイ……君は悪くない……悪いのは君を改造し、バオーを寄生させたドレス。せめて……安らかに逝ってくれ』『バル……』

バオーの指先から、小さな針の様なもの飛び出した。

その針は、レッド・ヘルムの首筋にもぐりこんだ……

すると、たちどころにレッド・ヘルムは大人しくなり、幸せそうに目をつぶり、そして『眠るように』死んでいった。

「何？……あんな能力知らないわ……あれは、まさかバオーの新しい武装化現象なの？」

またしても、ネリビルはおののいた。

『名付けて、バオー・ブル・ドーズ・ブルーズ・フェノメノン（Bull doze blues phenomenon）』

育朗が悲しげに言った。

今、バオーが指先から放った針には、『バオーの体液を変質化させた薬』が入っていた。

バオー・ブル・ドーズ・ブルーズ・フェノメノンとは、その薬によって相手に麻酔をかけたり、眠らせたりする、静かなる武装化現象であった。

バオーは、レッド・ヘルムを静かに横たえた。

そして、ヨロヨロしながらゆっくりと立ち上がった。その装甲はどこどころ破壊され、動いたびに、その奥から赤い肉が見えていた。

バオーは満身創痍の状態で、レッド・ヘルムに斬られた自分の左腕を拾い、元通りにくつつけた。そして、振り返った。

バオーの顔の上に被さるように、育朗の、ブラック・ナイトの貌が、被さった。

『これで終わりだ。もうこれ以上やらせないッ 守るッ スミレを、仲間をッ！』

育朗が、叫ぶ。

「ヒッ！」

鬼気迫る様子で迫ってくるバオー…育朗の姿に、ネリビルは思わず後ずさった。

『どこだ、スマレは、どこにいる』

バオーが、ネリビルの首をつかんだ。

『本当はこんなことはしたくない……でも……話さないなら、君を……溶かすッ』

「ヒッ、止めて…… ヒッ ヒヒヒヒ」

ネリビルが、イヤイヤと手を振った。

『話せ……頼む。話してくれ』

「ヒッ……」

ネリビルが口を開けた。

ガボンッ！

その口から、蛆虫達が飛び出し、バオーの顔面に飛びつくッ。

『!?なっ』

突然、蛆虫に顔面をおそわれたバオーは、電池が切れたようにくずれ落ちた。

アームドフェノメノンが解け、バオーは、育朗の姿へ戻っていく。

「はあっ……はあっ……」

間一髪、ギリギリのところまで助かったネリビルは、腰が抜け、無様に地べたに這いつくばった。

「ギリギリよ……これ以上はできないわ」



「まさにギリギリか……いいところで、間に合ったようだなあ」

二人組の男たちが、森の奥から現れた。

二人とも、派手なヒップホップ風のブカブカな服を着ている。話し方からすると、アフリカ系アメリカ人のようだ。

二人組の1人は、2M近くある巨体だった。

その後ろに、そばかすだらけのパツとしないイタリア系の少年が後をついてきていた。

「テイラー……あんたのユニカーズを飲み込むなんて最悪の経験だったわ……もう絶対やらないわよ」

ネリビルが、恨み言を言った。

「そう嫌うなよ……傷つくじゃあないか」

テイラーと呼ばれた、2M近くある方の男が肩をすくめた。

「なあ、オルダス」

「別に……俺のスタンドじゃあないしな」

残る1人のアフリカ系アメリカ人、オルダスも、テイラーとは異なる理由で肩をすくめた。

「何を言われても俺はハッピーだぜ。ほしいものは、手に入れたからな」

そういうと、オルダスは背後に引いてきたミカン箱大のケースを、一瞥した。

「しかし、正に一石二鳥ってやつだったな。これで究極の戦闘生物と、その素体を、同時に手に入れる事が出来た……それにしても、マキシム、マーチンとレッド・ヘルムを連戦で破るとは、まさに究極の戦闘生物の素体に、ふさわしいな。さぞかし預言者様も、ウチのボスも喜んでくれるだろう」

オルダスは、無造作に研究所の扉を開けた。不思議な事に、扉の向う側には海が浮かんでいる。

「ボスが呼んでいる……俺は、ドアーズで一足先に帰って報告をしなければならん、後は任せませ……イヤ、ドツピオは俺についてこい。ボスはいつも通り、お前の口から直接報告が聞きたいだろうからな」

これは好きにつかないな——オルダスは、ポケットから一つかみのコインをテイラーに渡した。

「3日間だ、3日間だけドアーズを貸してやるよ」

そう言うと、オルダスは、ドツピオと呼んださえない青年とともに、ドアの向こうへと消えていった。

一度しまったドアを再びあけると、今度はその先には普通の部屋があった。

ネリビルとテイラーは、意識を失った育朗を、協力して建物の中に運び込んだ。

「ところで、明日からSW財団の奴らは、俺に任せな」

テイラーが言った。

「俺のユンカーズで奴らを食い尽くしてやるからよオ」

ホル・ホース その1

1999年 11月 9日 未明 「M県K市 名もなき高原」:

リリリリイ、リリイイ、リリイ：リッ……………：リリリ

ヴォ——ッ、ヴウオオ——：ヴッ……………：ヴォ——

夜の森は、虫やカエルの声がそこらじゅうから響いている、意外とうるさいものだ。

逆に、その音が急に止んだら何か危険が迫っている事、例えば『ゾンビが迫ってくる』と言った事がわかるわけだ。

今も、急に虫の音が止んだところがある。

ホル・ホースは、音の止まった個所を調べるために忍び足で森の中を進んでいった。そしてポツカリと音が止んだ場所を覗き込む……すると、薄暗い中モゾモゾ動く影がチラッと見えた。ヒトか、あるいはツキノワグマほどの大きさの影だ。

その動くものをサーモグラフィで覗いてみると、熱原は映っていない。つまり、その動く影の体温は、外気とまったく同じ温度だということだ。

間違いなかった。

メギャン!

ホル・ホースは自分のスタンド：暗殺銃エンペラーを手の中に出現させた。

ゾンビだ。

近づいてきた影を見てホル・ホースの理性がそう判断した時には、すでにエンペラーの弾丸は発射された後であった。

ゾンビは——自分の獲物：ホル・ホースが近づいてきたことを認識できないまま——頭部を撃ちぬかれ、一言も声を発する事もなく倒れた。

「ヘッ」

手ごたえからして、完璧に致命傷だ。

倒れたゾンビを一顧だにせず、ホル・ホースは周囲の警戒を続ける。もうすでに、ホル・ホースの頭の中には先ほどゾンビの事など、欠片

も意識に残っていないかった。

超一流の暗殺者であったホル・ホースは、銃を撃つにあたって、一切の気負いも、タメを作ることも無い。彼にとつて、敵を殺すために行う作業——スタンドを具現化し、操作するための特別な思考——は、まるで『パンにバターを塗るような』当たり前の作業なのだ。

標的を認識すると同時にスタンドを具現化させ、間髪入れずに撃つ。そして、余韻に 浸ることもなく頭を切り替え、次のなすべき行動——撤退——に移り始める。

ホル・ホースはその一連の流れを、ほとんど習い性のように、息を吸うように自然にやってのけることが出来る稀有な才能があった。

スタンドを具現化させ、銃を撃ち、ターゲットを殺す。そこには特別な感情が入り込まない。

伝え聞くところによると、イタリアマフィアの骨のあるギャング達は『ぶつ殺す』と言う言葉は使わないのだそうだ。なぜなら、真のギャングなら『ぶつ殺す』と思つた時にはすでに行動に移っているからだという。

だが、ホル・ホースは、自分はその一枚上手を行くと自負していた。なにしろ相手を『ぶつ殺すと思う』必要さえないのだから。

時計を確認すると、深夜5時少し前だ。ポルナレフと見張りを代つてから3時間がたっている事になる。

夜明けまでは後1時間、もうすぐもつとも危険な時間帯が終わる。「だが油断するなよ、オイ……ホ」

ホル・ホースは自虐的な笑みを浮かべた。油断すればどうなるか、それは11年前にさんざん思い知らされていた。

見張りを続けながら、ホル・ホースは過去を、あの日、D I Oの死を知らされた時のことを改めて思い出していた。



11年前のその時、俺：ホル・ホースがいたのは病院のベッドの上だった。ちょうど、承太郎達の襲撃に失敗して入院していた時だ。

D I Oの消滅を伝えに来たのは教団の幹部だと名乗る男だった。

「D I O様が死んだ」

その男は淡々と俺にそう伝えた。

「なんだってエ？」

「あの男たち……ジヨースターの者どもが、ディオ様を……」

男は俯いて、言葉を切った。その拳が固く握られ、ブルブル震えているのを、俺は見つけた。

その話を聞いたとき、俺はマジで驚いたね。確かに承太郎達は強かった。だが、その『強さ』は、しょせん俺達と同じ次元のモノであった。俺がチョッピリだけ体感した、ディオの『次元を超えた』強さとは比較にならない。

俺は、承太郎達はディオに一瞬にしてやられると確信していたのだ。

(そうかよ……ヤツラ、やりやがったか……)

不思議と——イヤ、不思議じゃあないか。俺はディオに忠誠を誓ったが魂まで売っちゃあいなかったからな——その話を聞いた時に初めに俺が感じたのは、『喜び』の感情だった。

男は、俺の横で何やら話し始めた。

「だが、まだあの方の魂は消滅したわけではない。これから我々はD I O様の復活に全力を尽くす。そう、あの方もまた一度われらの代わりに受難を引き受け、そして復活するのだッ！復活の暁にD I O様は、必ずやわれらを天国に導いてくださるであろう」

その男の話声はダンダンと甲高くなっていき、最後になると半分白目を向いてあたりかまわず絶叫していた。

(狂信者だ、完全にイツちまってるぜ……コリヤア手におえねえ)

俺はゲンナリとしてその男を観察した。

「そうかい……アンタたちの幸運を祈るぜ」

「ホル・ホース、貴様にも働いてもらうぞ……D I O様は確かに貴様を『認めて』おられた、その『力』を我らに差し出すのだ」

その男は、にやっと笑って懐に手を入れようとした。

その時、男がなぜ懐に手をやったかは知らない。なぜなら、俺はその瞬間——男が懐に手を突っ込む前に——男の眉間を打ち抜いたからだ。



その後、ホル・ホースは間髪入れずにエジプトを脱出した。

あの時同じ病院に入っていたスタンド使いの兄弟の行方は今も知れない。振り返ると、すぐにエジプトを脱出したのは正解だったのだ。

エジプトを脱出後、ホル・ホースはほとぼりを覚ますためにアルジェリアやスペインにしばらくの間潜伏していた。

当時のことは思い出したくない。

手持ちの現金もほとんどなく、知り合いの女を訪ねてはその日暮らし……のみじめな毎日だったからだ。

そんな逃亡の日々に転機が訪れたのは、それから一年後、やむなく受けたアメリカ政府からの依頼であった。

依頼は、当時中東で長く続いていた戦争にからむ、生存率の低い危険なヤマだった。だが手持ちの現金がカラになっていたホル・ホースは、背に腹を代えられない状態ではなかったのだ。それに、どれほど危険な山であっても、成功した暁にはアメリカ政府に恩を売り、D I Oの作った組織から隠れられる事が出来るのだ。

複雑な思いを抱えながらも、ホル・ホースは、その依頼を受諾した。それからというもの、ホル・ホースはアメリカ政府のエージェントとして、文字通り世界を飛び回っていた。

ポルナレフとコンビを組み始めたのは、初めてのヤマから二年目の事だ。始めのころこそギクシヤクしていたのだが、近接戦闘に特化したポルナレフと、遠距離に強いホル・ホースとは相性が良く、二人が組むとミッシヨンの難度が驚くほど下がった。

それ以来二人は、不本意ながらアメリカ政府よりコンビとして取り扱われてきた。

7年前の世界一危険な都市シウダー・ファレスでのヤマ、3年前の南アフリカのヨハネスブルクでのヤマなど、他のエージェントにはで

きない危険な荒事は必ずこのコンビに回され、そして乗り越えてきたのだ。

エージェントになってから10年、ポルナレフと組み始めてもう8年も経つ。

年月が経ったものだ。

そうやって、ヤマを踏むごとに、ホル・ホースは昔のハマも、DIOから受けた圧倒的な恐怖も、いつしか思い出すことが少なくなっていた。

しかし今、ジョウスケ・ヒガシカタとその仲間を見ると、どうしても承太郎とその祖父ジョセフ・ジョースターのことを、そして1年前の恐怖を再び思い出してしまふ。

加えて、ゾンビやハンターと呼ばれたクリーチャー……

ホル・ホースは身震いした。

あれらはその昔、DIOが戯れで作ったものとはほぼ同じ姿をしていた。無関係なはずはなかった。

どんなに気のせいだと自分を納得させようとしても、この一件の陰にDIOの影を感じざるを得ない。

DIO……あの男のことを思い出すだけで　ぞくり　と寒気を感じ、ホル・ホースは体を自分の掌でこすった。

あの圧倒的な恐怖、威圧感、かなわないという気持ち、あこがれる気持ち、押しつぶされそうな恐怖、不安……もうあんな思いは二度としたくなかった。

「……へっ……」

ホル・ホースは苦笑いした。　ビビリ過ぎだ。あの男は、11年前に確かに死んだはずだ。

リリリ……鈴虫のうるさい鳴き声が、またしても一瞬、静かになつたような気がした。



億泰達と合流した翌朝、仗助は日が昇り始める前から、テントの中で目をさましていた。

どうやらテントの下に石があったらしい、その石が仗助の背中をゴリゴリとつつき、その痛みで目を覚ましたのだ。

仗助と一緒にテントに寝ている杜王町の男子コーコーサー達は、みな気持よさげに眠っており、起きる気配はまったくなかった。テントの中は昨晚のゾンビの襲撃の後に開かれた宴会——と言つてもその場に出たのはオレンジジュースとポテチだけだが——の跡で、壮絶なまでに汚れていた。

……隣で、噴上の肩に億泰が頭を乗せて眠っていたようにも見えだが、きつと気のせいだろう。ウン。

そもそも本当ならキモすぎるし……

完全に目を覚ました仗助は、するりとテントを抜け出した。

テントの外は薄明かった。まだ周囲の様子はぼんやりとした影しか見えない。物音も、ほとんど聞こえなかった。

「うう——サミッ」

仗助はブルツと体を震わせた。まだ日中は残暑が残っているが、朝はもうずいぶんと肌寒い。少し考えて、仗助は早朝の林を歩いて回ることにした。少し動かないと、体が凍えそうなのだ。見張りを兼ねられるし、体も暖まる。一石二鳥だ。

仗助がしばらく森を歩いていると、ぽつかりと開けた小さな野原があった。そして、その野原の中央に、ポルナレフが1人で立っているのが見えた。

ポルナレフは小石を投げては自分のスタンドでその小石に穴をあけるといふ事を何度も繰り返している。

良く見ると、ポルナレフが投げた一つの石には5つの穴が開いている。どの小石もほとんど同じサイズの同じ大きさの穴が開いている。恐ろしいほどの技の冴えだ。

おはよう。

仗助が近づいてくる気配に気がついたポルナレフが、スタンドを引っ込めてニカッと笑った。

「誰かと思ったら仗助君か……早いな、ジョースターさんは旅の間一番遅くまで眠っていたが……息子の君は、早起きなんだな」

「いろいろ考えていたら眠れなかつたんす」

仗助が言った。

「ポルナレフさんこそ、こんな朝早くから何してるんすか？」

「スタンドの正確な操作の為の練習だ」

ポルナレフが言った。

「……二十年以上昔に、とある理由から始めた、スタンドの操作を素早く正確に行うための修行さ」

そうか、もう二十年か……ポルナレフは感慨深げに空を見上げた。

「もう練習する理由なんてないんだがな、すっかり習慣づいてしまつて、今じゃもう止めようにもやめらねえ——つてヤツだ」

仗助は、そんなポルナレフにかける言葉が思いつかず、しばらく黙つて立っていた。

「……失礼した。年寄りみたいなセリフで嫌になるが、ちよつと昔のことを思い出してな」

ポルナレフは、そう言うと、仗助をまじまじと観察した。

「……なるほどな、君がジョースターさんの息子だと聞いたときは驚いたが、確かにこうやって見ると……少し面影があるかもな」

仗助は、ちよつと微妙な表情を浮かべた。

「あのお……じじいと……いや、父親と比べるのはやめて欲しいっス」

「おおツとーそうだった。君の事情は聞いている……スマンな、俺はデリカシーにかけていたぜ。失礼した」

許してくれ とポルナレフは深く頭を下げた。

「いや……ええ——と、確かに嬉しくないッス。でも、そこまで真剣な話じゃあないっス……頭下げるの、止めてくださいよオ——」

仗助はあわてた。

「ジジイも俺も、実は周りが気を使うほどには気にしてないんすよ。俺たちは……おれは納得してます。ただ、それに付いてはお互い口にしないほうが楽つてだけっス」

仗助は、足を止めてポルナレフに正面から向かい合った。

「……ところで、ポルナレフさんに少し教えてほしいことがあるっス」

「先ほどの詫びもある。何でも言ってくれ」

「仗助は大きく息をすって、一息に話し始めた。」

「俺は……俺は、一昨日知り合いの人達を、自分のスタンドで倒……イヤ……殺してしまいました……二人ともいい人でした。でも、一旦ゾンビになっちまったら、俺には二人を『治せ』なかった……ただ、『殺す』しかなかった……この手で……」

「仗助はクレイジー・ダイヤモンドを出現させ、じつとそのスタンドの手を見た。」

「ポルナレフさん……ゾンビって一体なんなんすか。それに奴ら……ドレズはその育朗って人の体に何をしたんすか？」

「本当に、彼らはもうもとに戻れないんすか。最後の質問は、ほとんど怒鳴り声だった。」

「……残念だが、一度ゾンビや寄生虫バオーにおかされたものを助ける術は、見つかっていない」

「ポルナレフが真剣に答えた。」

「これは確かだ。君はできる事をやったんだよ。仕方がなかった」
「……」

「仗助はがつくりと頭を落とした。」

「なんで、あんな生き物が存在するんすか。『吸血鬼』とか、『寄生虫バオー』とか、あんな生き物が自然に生まれるとは思えないっス」

「そうだ。もちろんあれは自然に生まれたものでは無いぜ」

「ポルナレフは、少し考えて、付け加えた。」

「……そうだよな、仗助くん、君には俺の知っていることを話しておこう。本当なら口外できない秘密情報って奴だが、キミは知っておいた方がいいだろう。君自身にも関わりがある話だしな……」

「ポルナレフは切り株を見つけて腰かけると、仗助にも座るよう促した。」

「長い話だ。事を完全に理解するためには、君の曾祖父であるジョナサン・ジョースター氏の代からの因縁と、彼の孫、君の父親である

ジョースターさんが若いころに経験した戦いにさかのぼって説明する必要がある……」

「ジジイが若い頃に経験した戦い……第二次世界大戦の事ツスカ……ジジイはパイロットとして日本と戦ったって聞いてます」

「いや、違う……確かに第二次世界大戦はとても重い話だが、今からするのはそれよりチョツピリ昔の話だ」

ポルナレフは、仗助の父、ジョセフ・ジョースターについて、語り始めた。

ホル・ホース その2

仗助は、ポルナレフが語る話を目を丸くして聞いていた。

それは、夜の一族：柱の男達とその男達が作り出したゾンビや吸血鬼……石仮面の話であった。

それは、夜の一族と神秘の赤石をめぐる若き日の父親の冒険譚であり、ジョースター一族とDIOと言う名の男との世紀をまたがる因縁話であった。

どれも、初めて聞く話だった。

「そうなんすか……知らなかったつすヨ……ジジイの奴からはそんな戦いがあったことさえ、聞いたこと無かったつす」

承太郎さんからも、仗助はそう言つて唇をかんだ。

「こんなことを言つて、慰めになるかは知らん」

ポルナレフが言った。

「だが、実は俺も、承太郎も、最近S W財団の記録を読むまでは知らなかった話なんだぜ」

「ジョースターさんはああ見えて自慢話もしないし、昔のことを話したがる人だからな……俺の知ってることも表面的だが、あの娘、アンジェラは波紋の一族だから俺よりもっと詳しい事まで知っているかもしれない」

聞いてみてくれ　と言うポルナレフの一言に、仗助はあいまいになづいて見せた。

「それで、今の話で、ゾンビってのが　石仮面をかぶった吸血鬼　――　承太郎さんが倒したDIOみたいな――　によって作られた怪物だってことはわかったツス。その石仮面ははるか昔に夜の一族の為に作られたものだって事も」

ポルナレフはうなずいた。

「そうだ、おそらく組織がDIOの体細胞を採集し、何らかの方法でゾンビを作成するエキスやウイルスの分離・培養に成功したんだろうな」

それが、今俺たちが戦っている敵の正体だぜ。

「なるほどっす。そっちはわかりました」

仗助はギョツと両拳を握り、唇をかみしめた。ポルナレフの目を、真つ正面から見据える。その視線の強さからは、承太郎や、ジョセフと同じパワーを感じる。まさしくジョースターの血統だ。

その顔つきは、友人達と戯れていた時とは全く違う、戦う漢の、貌であった。

(こうやって見ると、やはりジョースターさんと承太郎の血縁だな)

ポルナレフは感慨深く、仗助をみやった。

「それでもうひとつ教えてください。皆の話にちよくちよく出てくる……橋沢育朗くん……てヒトは何をされたんすか？ ゾンビと、育朗くんは何のかわりがあるんすか？ それと、俺とのかわりって何すか？ 何がからむんすか??」

「……では話の続きに戻ろう。今の疑問に答えるため、もう少しだけ話を聞いてくれ……ジョースターさんと戦っていたカースの野郎が『究極生命体』になった時だ……その場に、日本帝国軍からナチス・ドイツに派遣されていた若き天才日本人研究者がいた」

「……まあ、そんなヤローがいても不思議はないっすねー」
ポルナレフがため息をついた。

「そいつの名前は『霞の目』と言うらしいぜ。後にドレスと言われる研究組織の主任研究者となった男、マッドサイエンティストだ」
「へえ……」

「狂った研究者だ —— いつか俺が止めをさしてやる ——」
ポルナレフが言った。

「本当のところ、奴がどうやったのかは知らない。だが奴は、その場にほんのちよっぴり残った究極生命体の細胞を入手したらしい。奴はその細胞を培養し、バイオテクノロジーの技術でその細胞をもとに多くの生物兵器を作り出したってワケだ」

「その一つが育朗くんに植え付けられた バオーって事っすか」

「そうだ、バオーは『霞の目』が生み出した もっとも恐ろしい生物兵器だぜ」

ドレスが生み出した生物兵器は他にもいるぜ。俺も、承太郎も、

ジョースターさんもそいつらとずっと戦ってきた。

長い戦いだ、と、ポルナレフはため息をつき、話を終えた。

「さあ、戻ろう。もう皆も起きてくるころだ」

いつの間にか、すっかり辺りは明るくなっていた。



ホル・ホースは、夜勤明けの眠い目をこすって早朝のキャンプ場を歩いていた。

とつとと眠りたい。思わず出てしまった大きな欠伸をかみ殺して、宿舎（テント）に向かっていく。

だが、テントまでの道のりの途中で、噴上裕也とアンジエラ・チャンの話し声が、ホル・ホースの耳に入った。

（オイオイ、コーコーサーよオ、あのレディも俺のもんだぜ）

ほとんど反射的に、ホル・ホースは噴上とアンジエラの話に強引に割り込んだ。

「よオレディ、あんた、波紋使いなんだってな？」

……別に、ホルホースが見張りをしている間のほとんど寝ていた噴上が、美味しい事やろうとしている事にカチンと来た訳でも、自分がないところで若者たちが青春するのを邪魔したくなかった訳でもない。

……はずだ。

「あら、あら、モテモテトリオのお一人のホル・ホースさんじゃあないですかあ?！」

アンジエラは、話しかけてきたホル・ホースに笑いかけた。

「どうしたのですか？ 私はあるんだ達のタイプじゃあないと思うんですけど……ホル・ホースさんは、シンディさんみたいな美人さんが好きなんだと思っていました」

「おいおい、誤解だぜ」

アンジエラの棘のある話し方に戸惑いながら、ホル・ホースが言った。

「俺はただ、礼儀正しい男なんだ……好みのタイプかどうかでレディへの接し方を変えるような男じゃあないぜ」

「……あら、それは失礼な事を言っちゃいました。ゴメンなさい」
アンジエラは素直に謝った。

「いいって事よ??っ。ちなみに、俺の好みのタイプは、強くてよく笑う
女さ……つまり、あんたはストライクど真ん中よ、ベイビー」

じゃあ仲直りのしるしを……とアンジエラの肩に手を回そうとした
ホル・ホースのみぞおちに、アンジエラは軽く肘を入れた。しかも
ただの肘打ちではない。軽く波紋を込めた一撃だ。

ホル・ホースは丸々一分間息ができなくなり、真っ赤な顔になった。

「本当にあなた達には感謝していますッ……でもごめんなさい！私は
もつとシャイな男がいいんです。ナンパな人はちよつと……」

アンジエラはゴメンナサイッ と頭を下げた。

「おいおい、ナンパってよお……それは何か、俺と相棒達のことかよ」

ホル・ホースは、気を取り直しておどけて見せた。

「確かに相棒のポルナレフと、この噴上君はナンパ野郎と言われても
仕方ないかもしれねえ。でも、俺は違うんだぜ。俺は女を尊敬してい
る。当たり前だよな、女がいるからこの世は回ってるのだからヨ」

「ちよつと待て、この俺をオッサンたちと一緒にしないでくれ」

噴上も抗議した。きらつと歯を光らせ、キメキメの顔でスイツと
アンジエラにせまる。

「よく考えろ、俺はナンパなんてする必要さえねーんだ。ほら、俺を見
ろ……どうよつ。わかるだろおう？控えめに見ても、ミケランジエロ
の彫刻のようなこの俺、裕ちやんをみればよお……」

この俺ほど美しければ、スケが勝手によつてくるのよ。

と大真面目に話す噴上の話を、アンジエラは引き気味に聞いてい
た。

「そうね、すげー美しい……ですね、ミケランジエロさん。ところで教
えてほしいのは、アナタのことじゃなくて仗助のことなの」

アンジエラが言った。

「仗助はどこにいるの？知ってたら教えてくれませんか」

「ああ……仗助のヤローならあそこで、ポルナレフと話をしていたぜ」

軽くあしらわれ、少し鼻白みながら、噴上が答えた。

「ホントツ？ありがとう、お二人サン」

軽くあしらわれて憤然としている噴上とホル・ホースを残して、アンジエラはイソイソと仗助のところへ走って行った。

そのあとには、ちよつと唾然とした『自称？』色男の二人が残された。

「オイ……ホル・ホースのおっさんよお??つ。割り込みたあひでえよ」

噴上は納得いかない様子で、ホル・ホースに詰め寄ろうとした。

「オイオイ……てめーのナンパの失敗を、他人に押し付けるんじやねーぜ」

やってられねーぜ、相棒。

ホル・ホースは肩をすくめて噴上の抗議をうけながすと、大あくびを噛み殺しながら自分のテントの中へもぐりこんだ。

テントの寝袋に潜り込んだホル・ホースは、先ほどのアンジエラとの会話に触発され、11年前に出会った女、デイビーナ・ダービーのことを思い出していた。



デイビーナは初めて会った時から、ずっと陰気な表情をしていた女だった。

無理もない、幼少のころから兄二人、ダニエルとテレンスに、まるで兄弟ではなく家政婦か何かのようにこき使われ、罵声を浴びせられていたのだ。

確かにダニエルとテレンスはスタンド使いとしては一流だった。二人とも、あのDIOから『天才』とまで言われた男たちだ。しかし、女をあそこまで追い込み、本来の美しさを封じ込ませる、クズ野郎達でもあった。後に彼らが承太郎に敗れ、再起不能となったことを知っ

た時には、心からざまあみろと思ったものだ。

女から感情を奪ってどうする。女が笑い、子を産み、人とつながっていく事で、かろうじてこの世は存続しているのだ。女が笑うから世界には価値がある。

兄二人に無能とさげすまされ、表情のない人形のようなだったデイビーナ。

ホル・ホースは、そのデイビーナをなにくれと気にかけて、話しかけ、微笑ませ、その無表情だった顔に表情を取り戻させてやった事を誇らしく思い返した。



ホル・ホースの思考は、デイビーナの身の上から、より気になる事へと移っていく。

気になっていたのは、『デイビーナは、承太郎にやられたD I Oの魂を回収・保管しているのか』であった。

デイビーナの能力は、まさしくそのための『保険』の為のモノだったのだから。



あれは確か、エージェントの紹介でエジプトに渡り、D I Oと面会した日の事だった。引き合された何人かのD I O配下のスタンド使い達の中に、デイビーナがいた。

デイビーナははたから見ても一目でわかるほどオドオドし、委縮していた。そんな人間が何故D I Oの近くにいられるのか、不思議に思った事を覚えている。

そんなデイビーナが、その日のウチに自分からホル・ホースに接触してきたのは、意外でもあり、だが想定内のことでもあった。

新しい仕事仲間の情報が必要だったホル・ホースは、渡りに船とばかりにデイビーナに付き合い、問われるがままに自分の事を語った。

デイビーナが兄の差し金で送り込まれている事は『承知の上』だ。

『セフィロトの樹』よ」ホル・ホースの脳裏に残る11年前のデイビーナは、自分のスタンド ワン・ツリー・ヒルの秘密を恥ずかしそうに

そう話していた。

「ベイビー……悪いが俺には意味が分からねー。お前ほど学がねーからよ」

あの時、クスッとデイビーナは笑って、自分のスタンドを出してくれた。

「ケテル、コクマー、ビナー、ケセド、ゲブラー、ティファレット、ネツァク、ホド、イエソド、マルクト、ダアト……人間の体をセフィロトの樹にみたてて、その11か所へ金貨をおいていくの。このワン・ツリー・ヒルで精神を閉じ込めた金貨をね。そうすると、この金貨に封じ込めた魂を、別の肉体に宿らせることが出来るってわけ」

この能力はD I O様にささげたものよ。デイビーナはうつとりとした口調で、そう言っていた。

「D I O様……あの方のお力になれるのなら、私はなんだって耐えられるわ」

「……そうだな、だがデイビーナ、お前がただ耐えているだけであったら……D I O様は喜ばないと思うぜ」

ホル・ホースは用心深く言った。

「D I O様は、お前も天国へ連れて行こうとされている。『本当のお前』をな……俺には分かるんだ……だから、お前はもつと本来のお前を表に出した方がいいぜ。美しいお前をな。そうすれば、D I O様のお眼鏡にかなうだろうぜ」

「フフツ、ありがとうホル・ホース」



優しいのね……そう言って笑ってくれたあの時のデイビーナは、確かに美しかった。

あの頃、デイビーナはさすがのように、自分の存在をすべて注げるように、熱狂的にD I Oに忠誠を誓っていたハズだ。

そんな女が、あのとき……ディオが殺られた時に何もせずにおとなしく引っ込んでいるだろうか？

考えれば考えるほど、ホル・ホースはデイビーナがD I Oの魂をコインに変えているはずだと確信を持つようになった。

ホル・ホース その3

噴上が教えてくれた場所にアンジェラが着いた時、そこにポルナレフはいなかった。

だが、仗助が残っていた。仗助は、1人双眼鏡をのぞいて何やら探している様であった。

「仗助ッー」

アンジェラが声をかけると、仗助がビクツと背筋を伸ばした。

思わず仗助が取り落とした双眼鏡は、ぱつと変身し、未起隆の姿に戻った。

「やあアンジェラさん」

双眼鏡から元の姿に戻った未起隆は、アンジェラに礼儀正しく挨拶をした。

正直、仗助の友達は何奇妙な人ばかりだった。アンジェラが見たところによると、その「奇妙な」仗助の友人達のなかでは、未起隆が一番まともに思えた。

……あくまで比較的 だが。

「ちよつと、仗助、未起隆君、何を見ていたの……まさか…アンタたちアリッサさんとシンディさんの着替えを覗いていたんじやあないでしょうね」

アンジェラはにやつと笑って、未起隆の脇腹を突つついた。今度は波紋なしだ。

「よっ……よせよ、何を言ってるんだ！」

仗助が真っ赤になって否定した。

「……怪しいわねえー。早人には黙っててあげるから、本当のことを言っごらん」

アンジェラは、ニヤニヤしながら尋ねた。顔を赤くしている仗助を見ていると、ついつい色々突っ込んでしまいたくなるのだ。仗助が見せるリアクションが、いちいち可愛くて仕方ない。

「イエ……怪しくなんてありませんよ」

未起隆が、すまして答えた。

「……僕は宇宙人なので、人間の女性の着替えには興味ありませんし……もちろん人間の女性は美しいとは思いますが……」

「見てたのは、木だけ」

仗助が言った。気のせいか、少し早口だ。

「でかい木を探してたんだ」

「木イ？木なんて探してどうするの」

嘘つくんなら、もっとまじな事を言いなさいよ。アンジェラは、腕組みをして仗助を見下ろした。

「いいや、嘘じゃあないぜ……いいことを思いついたんす」

今度は、仗助がにやつと笑った。

「上手くいけば、全員安全な場所へ送り届けられるツスよ」



仗助のアイデアはシンプルであった。

それは、『スタンドで櫛のようなものを作り、それに乗って海岸まで移動して、助けを呼ぶ』というものだ。ゾンビが外に出れない日中を利用して、海の近くへと移動するのだ。

キャンプに立てこもっている全員が参加した徹底した話し合いの結果、最終的に仗助のアイデアは皆に受け入れられた。

そして決まったのなら行動は早いほうがいい。一行は、その日のうちにキャンプをたたんで移動する事にした。

「もう決まったことなので、とやかく言いませんが、相当な距離の移動になるわね」

アリツサが顔をしかめた。

「海までは2日はかかると思わねば」

「いいや、ベイビー……あれを見ろよ。俺たちは、今日の晩までには海岸線につけると思うぜ」

ホル・ホースが指差す先を見て、アリツサは驚きの声を上げた。

ホル・ホースがアリツサに見せたのは、スタンドを使って乗り物を作っている様子だった。

「皆さんがただ『見ているだけ』で、独りでに木が加工されていく……これが……スタンドですか……」

スタンド使いではないアリッサの目には、木が独りでに形を変えているように見えるだろう。

スタンド使いであるホル・ホースの目には、仗助のクレイジー・ダイヤモンドが折り取り・繋ぎ直した木を、億泰のザ・ハンドが削る。そうやって作った丸木舟の上に、未起隆が人数分の座席に変身する……そんな様子はつきりと見えていた。

その間、噴上裕也はハイウェイ・スターであたりの様子を見張っていた。そのスタンドが森の中に消え、定期的に噴上の元へ戻ってくるのも、見えた。

若きスタンド使いたちの頑張りで、まるでロケットのような形の木製の車が、あつという間に出来上がっていく。

「何か、カッコいいですね」

早人がはしやいだ。

「この……車なら、何処だつて行けそうだ」

「削るスタンドに、破壊した物を混ぜ合わせたり、直したりするスタンド、それに何でも化けられるスタンドか」

ホル・ホースは、感心したように言った。

「コーコーサー達、やりおるぜえ。こいつら何でも作れそうだな……だが、こりゃあ、言っちゃ悪いがあれだ……あの話に聞くネズミーランドのアトラクションそっくりだな。なんていうか、メルヘンチックってやつだ」

「そうっすねえー」

仗助が笑った。

「まあ、見てくれは気にしないように、お願いします。でも、メルヘンケツコーじゃねーっすか」

メルヘンな結末にしたいものっすね。

「みんな、車ができたぞ。乗り込んでくれ」

ポルナレフが、待機しているSW財団チームに呼びかけた。

「これが、車？どうやって動くのよ」

「いつ、こんなものを作ったのかしら」

ポルナレフの指示に従って、SW財団の職員と、早人が、丸木にお

ずおずと乗り込んだ。

彼等の座る座席の四方を、スタンド使い達が固めた。丸木の前方にはポルナレフと噴上が、後方にはアンジエラと億泰を、そして真ん中にはホル・ホースと仗助が陣取った。未起隆は全員分の椅子とシートベルトの担当だ。

「それじゃ出発するわよ、しっかりつかまっついていてねえ」

全員の登場を確認すると、丸木の後方からアンジエラが朗らかに宣言した。

「スケーター・ボーイ!!」

アンジエラの肩から、スタンドが顔を出した。

猫のぬいぐるみを思わせるそのスタンドは、ピヨンとアンジエラの肩から飛び降り、丸木に触れた。すると、丸木の前後に、早人の身長程もあるスタンドの車輪が出現した。

『丸木』が、『丸木車』になった。

車輪は、スタンド使いでない早人やS W財団の職員達には、見えな
い。

車輪がついて急に宙に浮き上がった『丸木車』に、非スタンド使い達からどよめきが上がった。

「目標は30km先の海岸だ。頼むぞアンジエラ」

「了解。ポルナレフさん、任してください」

一行を乗せた丸木車は、そのファンシーな外見にそぐわない滑らかな
さで動き、海を目指して勢いよく坂を下って行った。

「うわああ!」

「早人お、しっかりつかまってるよ……しかし、グレート。まるで
ジェットコースターだな、こりゃあ」

「うおおおおおおお」

「お〜早え〜」

「余計な事をしゃべるなよツ、舌をかむぜえ——っ」

一行を乗せた丸木車は奥深い森の中、木々や下ばえのシダや雑草を
縫うように、グングンと加速していく。

「アンジエラのスタンド、やりおるな」

ホル・ホースは、顔をほころばせた。

「何て強力なスタンドだ……尊敬するぜ。この分なら、海まであと半日ってとこだ」

と、その時だ。噴上が、ピクピクと鼻を動かした。

「!?……ポルナレフさん、なんかヤバい。危険な匂いがするぜ!」

噴上が警告を発した。

「……こりゃあ、この間の怪物どもだ……来るぞ!」

「オイオイ、まじかよぉ〜」

億泰をはじめ、スタンド使い達は、自分のスタンドを出現させた。

コ” コ” コ” コ” コ” コ” コ” コ” コ” コ”

「シシヤアアー!!」

「ウジャアアー!」

「ギャギャツギャツ」

突然、丸木車の前方から、横から、そして上方から、唸り声が鳴り響いた。

「来るぞツ! 気をつけろツ!」

ポルナレフが叫んだ。

「そこだぜえツ!」

ホル・ホースの銃が爆ぜる。

その先から悲鳴が上がり、物陰から小柄な人型の怪物 『ハンター』がヨロヨロと現れ、倒れた。

そのホル・ホースの攻撃をまるで待ち構えていたかのように、ハンター達が丸木車の周囲、上方から姿を現し、おそいかかってきた。

「グレートオ。アンジェラあ、絶対、丸木車を止めるんじゃねーぞ」

「仗助、わかつてるわツ」

ガクンと、大きく『丸木車』が揺れ、スピードを増した。

だがハンターが、そのスピードをさらに越えて加速し、襲いかかるッ!

「この、ダボガツ!」

「けっ、切り刻んでやるぜツ」

「いくつスよ……『ドララララッ!』」

「ブヒヤヒヤヒヤッ……エンペラーの、いい的だぜエ」

待ち構えていたスタンド使い達が、応戦する。皆、凄腕のスタンド使い達だ。襲いかかってきたハンターは、あっという間に撃退された。だが、すぐに次のハンターたちが、襲ってくる。

ハンターの数が、多すぎるッ

ジャルンツ!

丸木車の真ん中、仗助やホル・ホースの目の前にハンターが降って来た。

「うっ……うわああああ」

ピーターが叫んだ。

不幸にも、突然ハンターが目の前に現れたのだ。

「ギユアアアアッ」

ハンターはピーターにおそい掛かった。次の瞬間、丸木車の上から

ピーターの姿が消えた。

「うおおおおおおお!」

ピーターは叫びながら丸木車から放り出され……そして、激しく激突して動かなくなった。

『ドラアッ!』

一步遅れて、クレイジー・ダイヤモンドがハンターを吹き飛ばすッ

!

「ピーターッ! いやああああああああ」

シンデイが、悲鳴を上げた。

「!? マジぜ……ピーターさんが落ちちまった……ホル・ホースのおっさん、後は頼むぜッ!」

仗助は、ピーターを追って丸木車から飛び降りるッ。

仗助は自分めがけて群がってきたハンターを吹き飛ばし、地面に横たわるピーターに向って全力疾走した。

「もう誰も殺させはしねーぞ!!!」

「仗助さん!」

早人が叫ぶ。

「アンジエラ、止めて！ 仗助さんが……」

「仗助え！ 待ってるおくすぐそこに行くぜえ」

億泰がどなった。

だが、仗助は大きく手を振って、助けに来ようとする者たちを止めた。

「バカヤローツ……俺は大丈夫だ。だから止まるなツ！ 降りるなツ！ 止まったらお前たちがハンター共にやられるっスよオ！ アンジエラ、お前ら、そのまま行けえ——ツ……早人オ……しっかりやれよツ！」

叫ぶ仗助の周りを、木の上から飛び降りてきたハンターたちが追いついていく。

アンジエラは、仗助の方を振り返った。

アンジエラと仗助の目がぶつかり……そして、アンジエラは大きく頷いた。

グギユンン！

丸木車は加速をグンと増した。

仗助の姿はハンターの姿に隠れ、丸木車にいる一行の視界からは、あつという間に隠されてしまった。

『ドラララッ！』

スタンドラツシユの声も、微かになつていく……

「ダメです。億泰さんッ」

丸木車から飛び降りようとする億泰を、未起隆が必死に引きとめていた。

「てめツ、未起隆アツ、止めるんじやねえ」

「億泰サンツ！ 駄目です。僕たちは丸木車の人たちを守らなければ」

「だから、仗助をみすてるわけにやいかねくだろがッ！」

「わかってるわよッ！ でも先に行くようにって、仗助が言ったのよ。仗助は絶対に自分でなんとかするわ」

彼を信じるのよツ。

アンジエラが言った。

「……そんなこと言ってオメェ〜自分たちが助かりたいだけじゃね〜のか？」

「ちよつとアンタ、私が軽く言ってると思ってるわけ？」

億泰とアンジェラ、それに未起隆は口論を始めた。

そのそばに、ハンターが近づいてきた。

「おいおいおいおいッ」

ホル・ホースは丸木車の後方にせまるハンターに向けて、エンペラーを撃ち続けた。

「お前ら、まず今やらなきゃいけないことが口喧嘩か？ホントにガキか？」

「ギャンー！」

「ギャルルッ！」

エンペラーの弾丸を喰らったハンターが、次々と倒れていく。

「こおらツガキ共、自分のやらなきゃならん事をやりやがれ!!」

ホル・ホースは丸木車の後方に向かってどなりつけた。

と……

ドゴオオオオオン！

と激しい音がして、丸木車が一瞬宙を舞った。

森の中の小さな崖を飛び越えたのだ。

「ぐおおおお」

エンペラーを両手持ちで撃っていたホル・ホースは、衝撃で飛び出そうとする体を支えきれず、丸木車から飛び出した。

「くつそおお、落ちてたまるか……エンペラーACT2、サタニツク・マジエスティー！」

ホル・ホースのスタンドが一度姿を消し、そして再び現れた。

機械人形に似たそれは、エンペラーの銃からいくつかの部品を剥ぎ取り、本体のプロテクターを増やした。

銃のうち残った部分は、ねじ回しやアイスピック、あるいは小刀のように小さくてとがっていた。

「オリヤアアアアッ！」

ホル・ホースが、その『小刀』を丸木車に突き刺すッ。

ギャルルルル

ホル・ホースめがけおそい掛かってくるハンター達の爪を、エンペラーAct2：サタニック・マジエステイーのプロテクターが防ぐ。

サタニック・マジエステイーは、力が弱い形態だ。ハンターの爪を、直接受け止めることさえできない。

だがプロテクターによって、その爪をそらす事はできる。

そう、これがホル・ホースの、まさに『とっておき』の能力だった。

暗殺銃の威力を弱めることで身にまとうことが出来るプロテクター…この能力をDIOに隠していたおかげで、エンヤ婆からの攻撃や、トト神の間違った予言による事故から身を守ることができたのであった。

バシユッ！

ホル・ホースの背中から、ロボットの様なスタンドの腕がにゅうツと現れた。その手に握った小さな『ピストル』が、襲ってくるハンターの喉にめがけて弾丸をうちこむツ

「ギイヤアアツ」

ホル・ホースを襲ってきたハンターは、喉を打ち抜かれて崩れ落ちた。

バシユッ！

バシユッ！

ホル・ホースが丸木車にしがみついている間も、ホル・ホースの背中から飛び出したスタンドの腕は『ピストル』を放ち続け、周囲のハンターを打ち抜いていく。

「ビヒツ…：…そう簡単にこのホル・ホース様がやられるか…：…なに！！」

だがその時、ホル・ホースは致命的な問題——エンペラーを分解して作った小刀では自分の体重を支えきれない事——に気が付いた。

ズリッ

ホル・ホースの体は、徐々に下にすべり落ちていた……このままでは地面に足がぶつかり、そして丸木車から振り落とされてしまうだろう。

その事実気が付いたホル・ホースは、悲鳴を上げた。

「こりやあまじーぜツ……ポルナレフ、助けてくれえー！」

「やかましい……いい年こいて、テメーは何をやってるんだ」

丸木車の先頭にいるポルナレフが、毒づいた。

「仗助は自分から丸木車をおりた……それに比べればなんてことねーだろうがツ、それクレー自分で何とかしやがれっ」

「チャリオツツ！」

ポルナレフはシルバー・チャリオツツの甲冑を外し、分身させた。

大声を出すホル・ホースには目もくれず、前方に群がるハンターたちを分身したチャリオツツが一気に切り伏せていく。

「おい、見捨てないでくれえー！」

ホル・ホースから情けない声が上がった。

ズリッ

さらにホル・ホースの体が落ちる。懸命に足を縮めるが、もうすぐ下には地面がある。

ホル・ホースの視点からは、地面は相当なスピードで後方に流れていった。

「うおおおおおッ」

ホル・ホースが悲鳴を上げた。

その時だ。救いの手が差し伸べられたのは。

「ホル・ホースさんツ、つかまってください」

未起隆だ。未起隆は、自身の変身能力：アース・ウィンド・アンド・ファイヤの力でロープに変身し、ホル・ホースの目の前にぶら下がった。

「大丈夫ですか、いま引き上げます」

下半身をロープに変身させた未起隆は、ホル・ホースの体の周りにロープを回し、丸木車の上に引き上げようとした。

ゆっくり、ホル・ホースの体が、引き上げられる。

「ビビヒツ、助かったぜ相棒」

ホル・ホースは助けられる間も、後方に、上空に、エンペラーを連射続けた。

「今の仕返しをしてやるぜ。ヒヤヒヤヒヤヒヤ??全滅しちまいなあ」

エンペラーの弾丸は四方に飛び、あつという間に射程内のハンターを射殺した。

しかし、まだまだ射程外からハンターが追いかけてくる。

「おいおい、一体何匹いやがるんだヨ」

ホル・ホースは毒づきながら、エンペラーを連射し続けた。

一方、丸木車から飛び降りた仗助は、自身のスタンド・クレイジー・ダイヤモンドがピーターを引き起こした所であった

ハンターにやられ、高速で走る丸木車から突き落とされたピーターは、だがまだ幸運なことにチョップピリ生きていた。

クレイジー・ダイヤモンドの能力で、ピーターの傷を治す。すると、ピーターはパチンと目を開き、復活した。

「!?……僕は……助かったのか?」

ピーターは、あつげにとられたように言った。

「ふう、グレートっ。意識が戻ってよかったツス」

仗助は止めていた息を吐いた。今度は、間に合った。

『ドラフラッ!』

すかさずおそい掛かってくるハンターを、クレイジー・ダイヤモンドでぶち飛ばす。

ハンターは一体、一体、時には数匹同時におそい掛かってきた。その都度クレイジー・ダイヤモンドがラッシュで瞬碎していく。気が付くと、仗助とピーターの周囲を幾重にもハンターが取り囲んでいた。

「オイオイオイ、たかが二人にちよいと大げさすぎね——ツすか?」

周囲を囲むハンターの数に気が付いた仗助は、冷や汗をぬぐった。

「仗助君、わざわざ助けてくれてありがとう。君は命の恩人だ」

ピーターが言った。

「だが、僕を助けたせいで、君まで危険な目に合わせてしまった……君は僕を置いていくべきだった」

「なあに言っているンスか」

と、周囲を囲むハンターの輪に切れ目ができた。

その切れ目の奥をのぞいた仗助は、チツと舌打ちした。

「今更何を言ってるんすか。しかし、確かにグレートにやばい状況っすよオ——ツ……ピーターのオッサン、悪いが自分の身は自分で守ってくれないっすか？」

「……当然だ、君の足手まといにはならないように努力するよ」

「グレートオ……じゃあ早速ですけど、少し離れてくれませんか」

仗助が真顔で言った。

「ちよつと面倒なことになりそうなんでよお??」

仗助の視線の先には、橋沢育朗が立っていた。

ホル・ホース その4

コ” コ” コ” コ” コ” コ” コ” コ” コ” コ”

東方仗助と橋沢育朗、二人の男が向かい合った。

二人は、ほぼ同学年のように見えた。どちらも背が高く、印象的な外見であった。

だが、似ているのはそこまでだ。

東方仗助：身長185cm、まるでラグビーの選手のようなゴツイ体の上を持ち、イギリス系アメリカ人の血をひく、堀の深い顔立ちに、緑がかったアーモンド形の目を持つ、美丈夫だ。その頭には、特徴的なりーゼントヘアがのっている。町中でであつたら、10人中10人が恐怖を感じ、同時にどこことなく信頼感を抱かせる、そんな容貌の男だ。

橋沢育朗：身長178cm、まるで芸能人のようにすらりとした体型に、スツキリ、爽やかな顔立だ。ツリ目ぎみの切れ長の目の上には、サラサラの長髪が風になびく。

その出で立ちからは、生真面目さと、優しさが感じられる。町中であつたら、いかにも女の子からキヤーキヤー言われそうだ。

育朗は、真っ黒なジーンズと長袖Tシャツを着ており、Tシャツには白抜きの模様で髑髏と牙と天使の羽が描かれていた。その胸元につけられた金色のピンバッジを見て、仗助は眉をしかめた。

コ” コ” コ” コ” コ” コ” コ” コ” コ” コ”

ハンターの群れが、後ろに下がった。育朗と仗助……そしてピーターの周りだけ、ポツカリと空間が空いた。

ピーターはあわてて近くの木によじ登り、二人から、そしてハンターからも距離を取った。

ト” ト” ト” ト” ト” ト” ト” ト” ト” ト”

「育朗くん、初めまして」

仗助はポケットに手を入れたまま、橋沢育朗に向って歩き出した。

「アンタの事は、噴上やポルナレフさんから聞いてます……元氣そうっすね——ッ。安心しましたよお」

「君のそのあ……格好は……君は……そうか、君が、億泰君が言っていた東方仗助君だね」

初めまして と育朗が手を差し伸べた。

仗助が歩みを止めた。

差し出された手は、握らない。

「……それで、やっぱり気が変わって、俺らの所に戻って来てくれたんすか」

大歓迎ツス。と、仗助は不敵な笑みをうかべた。

「億泰や、未起隆 それから 噴上裕也が世話になったぞ——っすね、そのお礼もしなきゃいけないっすねえ??」

「……仗助君……頼む、君に頼みがあるんだ」

育朗が苦しそうに言った。

「頼むから 皆を呼び戻してくれないか……君たちに危害は加えない。後三日だけ、ここに動かずいてくれたらそれでいいんだ……それから、スマレを僕の元へ連れてきてくれッ！」

「育朗ク??ン、そいつは無理な相談ツス。だってハンターたちを杜王町に近づけるわけにはいかないんすよ。誰かが警告しなきゃやなんねー」

『ドラアッ!』

仗助は予告なしでクレイジー・ダイヤモンドを出現させ、周囲を囲んでいるハンターの一匹に石を拾って投げつける。

「G a a a a !」

石はハンターの胴体に大穴をあけ、ハンターはひっくり返って動かなくなった。

「約束する……僕が杜王町に警告する、だからここは僕を信じて引き返させてくれないか……ハンター達は、責任をもって僕が抑える」

仗助は、首を振った。

「ところで、かっこいい格好してますね。どっかで着替えたんすか？」

そのピンバッチもいかすツス？」

ピンバッチのその ” D ” って刻印はどんな意味っすか？

仗助の質問に、育朗は答えなかった。

「もう一つ聞いてもいいかい、なんでアンタは『スマレ先輩が俺たちのところにいる』って思ったんだ」

「……………」

「いや……………せつかくだが、今の先輩は信用出来ね??」

仗助は、育朗の額を指差した。

そこには『木の芽のような肌色の突起』が突き出ており、時折ピクピクと脈うっていた。

「それ……………知ってるぜ。肉の芽って奴っす……………そいつに取りつかれた奴は、ある男に強烈に忠誠心を抱かされるらしいじゃねーか。D I O って言ったっけ？そいつの名はよお?」

D I O という言葉を聞いて、育朗の顔が醜く歪んだ。

「何を言ってる?……………僕は……………僕の考えで……………D I O 様が正しいと信じているツ！」

その邪魔をするものは誰であろうと許さない。育朗は、はき捨てた。

「やっぱりかよ。今のあんたは育朗クンであって育朗クンじゃねー」。だから、俺が『治して』やるぜ……………俺たちを止めたきや、俺を倒してからにするんだなあ！」

ポキポキと、仗助が指を鳴らした。

「仗助君、君とは鬨いたくなかったよ」

育朗が悲しそうな顔をした。

「君とはいい友達になれるかもしれないと、思っていたのに……………」
「……………俺も残念すよ……………さあ、変わりな、バオーによおー」

仗助が促す。その声にか呼ばれるように、育朗は、二、三度身を激しく震わせた。体を大きくのぞけさせる。全身から『黒い汗』がふきだし始める。その体が、一回り大きく、膨れ始める。

「仗助クン……………俺はS W 財団の保管している資料を読んで、バオーの能力を知っている……………説明させてくれ……………」

木の上からピーターが言った。

「いいかい、バオーの本体が人間の脳幹に潜む小さな寄生虫だって事は聞いてるな。仗助君、気を付けろ……」

「うっす」

仗助がうなずいた。

その目前で。育朗は瘡にかかったように、体を震わせつつづけている……

ピーターは、早口で説明を続けた。

「まず寄生虫バオーが、宿主の生命の危機を感じ取る。すると、寄生虫バオーは宿主の脳を麻酔、分泌する体液が皮膚を硬化化しプロテクターに変えて行く。その体液は全身の筋肉も同時に膨張させ、人間離れした怪力を与える……」

育朗が体を震わせる度に、まるで昆虫が脱皮するようにパラパラと皮膚が剥がれ落ちた。その剥がれた皮膚の奥から、最強の生物兵器、バオーが徐々に姿を現していく。

その体から、青黒く透き通った育朗の『生霊』が抜け出した。

ピーターの声に、恐怖の色が混じる。

「いいか……バオーに視覚は必要無い。必要な情報は頭部から飛び出した触角から得る。蠕虫による生体武装をもつ兵器……Biologic Armed Ordnance by Helminth……これが……これが、バオー（BAOH）だッ！」

わずかな間に、育朗の外見はすっかり変わっていた。

全身が青白いプロテクターの様な肌に含まれ、体も二回り大きくなっている。バオーの頭の触角が、まるでそれぞれ独立した生き物のように仗助の方にザワザワと動いていた。

育朗は『バオー』への変身を終えた。

仗助は、ポキポキと拳を拳を鳴らした。

「なるほど、そうっすか……これが『バオー』っすね?。スゲーカッコイナ……グレートだぜ……ピーターのおっさん、もう少し安全なところまで下がってくれないっすか」

もつと木の上に登っていきください。仗助は、やさしい口調で言っ

た。

バオーは獣のように四つ足で地面を引つ掻き、落ち着かない風に頭を激しく上下させていた。そこには、人がましい気配が、育朗の雰囲気がまったく感じられない。

「ウオオオーム！」

バオーが、けだもののような咆哮をあげた。

『行くよ……バオーツツ』

そこに、育朗の『生霊』……いや、スタンド：ブラック・ナイトが再び取り着くツ。

するとバオーは、突然これまでの獣じみた挙作をピタリと止めた。そして 今度は、逆にひどく人間臭い挙作で立ち上がった。

バオーはグルグルと肩を回し、仗助に向かって拳を構える。ボクシングのような構えだ。

と、バオーの胸元から、育朗の幽霊がゆうつと顔を出した。

『……仗助君、覚悟は出来たかい？いくよ』

「おお……いつでもいいつスよ」

仗助は、クレイジー・ダイヤモンドを突進させた。

クレイジー・ダイヤモンドと、バオーの攻撃が交錯するツ！

『ドララツツ！』

「バルバルバルツツ！」

クレイジー・ダイヤモンドの強烈なラッシュが飛ぶツ。

だがバオーはそのラッシュを避け、かわし、そして受け流していくツ！。

爆風のような攻撃をすり抜けて、バオーが、クレイジー・ダイヤモンドの懐に踏み込んだ。

そして……

『おしまいにしよう……僕の射程距離内に、入ったよツ！』

バオーが、仗助めがけて殴りかかる！

間一髪、仗助はバオーの一撃をスタンドで防御し、カウンターの一撃を放つツ！

バシンツツ！

バオーと、クレイジー・ダイヤモンド&仗助が、互いに距離を取って向かい合った。

『噂通り、強い』

育朗がスタンドの幽体をバオーの胸から突き出して、言った。

バオーの体には、あちこち岩がめり込んでいた。

確かにクレイジー・ダイヤモンドの一撃は空をきっていた。だが、その拳が地面を爆発させるようにえぐっていたのだ。

その爆発で飛び散った岩が、バオーの体に命中した……と言う訳だ。

一方で、バオーの拳も、本体である仗助の左肩をわずかにかすめていた。

仗助は、脂汗を書いていた。

「とんでもね——……コイツ、生身でスタンドの攻撃についてこれるのかよ……しかもスゲーパワーだぜ。ちきしょー、ほんのチョピリ、紙一枚分かすただけで左肩が脱臼しちゃったぜ」

仗助はクレイジー・ダイヤモンドを操作して、はずれた自分の左肩を入れなおした。

「ぐあっ………いっ痛ってえ——ツツ」

『だが手加減しない、覚悟してもらおうっ！』

バオーは、仗助に向かって駆けだした。

『ドラアアアア！』

再び放たれるクレイジー・ダイヤモンドのラッシュ。

バオーは、その攻撃をトンボを切ってかわした。

着地後、まるで飛び込むようにして放たれた3度目のラッシュも、バオーはステツプバックして避けた。

そしてラッシュの終わりにカウンターを入れるように、バオーは蹴りを放った。

『ドラッ』

クレイジー・ダイヤモンドは、左拳でバオーの蹴りを迎撃するツバシッ！

『やむを得ない……！』

今度はバオーの両腕から刃が飛び出して、仗助に斬りかかる！

「気をつける、仗助ッ！あれは、バオー・アームドフェノメノンの一つ。バオー・リスキニハーデン・セイバー・フェノメノンだ！」

ピーターが叫んだ。

バオーの繰り出す刃が、次から次へと仗助をおそうッ！

間一髪、仗助はダッキングを繰り返して、リスキニハーデン・セイバーを回避しつづけた。

「グレート……回りの木がストローをハサミで切ったミターにスパッと切れちまった……スゲー切れ味してやがる。しかし、問題なく避けたぜ」

『ドラララッ！』

ついに、クレイジー・ダイヤモンドのラッシュユが、バオーのガードを弾く。

『うわああっ』

バオーが、膝をついた。

とどめをさそうとする仗助に、バオーが毛針を飛ばすッ。

仗助の顔面に向かって、何十もの鋭い針が飛ぶッ

「うおおっ！」

クレイジー・ダイヤモンドは、スタンドの指でその毛針をすべてキャッチした。摩擦熱に反応してその毛針に火が付き、燃え落ちた。

「あつぶねー、何だこりゃあ。燃えてていくぜ……」

「バオー・シューティングビースス・ステインガー・フェノメノン！」

ピーターが言った。

「仗助、バオーの髪の毛は体から離れると空気に反応して燃え上がるんだ。その髪を、針のように硬質化させて弾丸のように打ち出せる……気をつけるよ」

「へええ……コエーコエー。しかし、俺には意味の無い攻撃ツスねー」

仗助がにやりとした。

「むしろチャンス」

バシユツ……

なんと、先ほどクレイジー・ダイヤモンドがキャッチした毛針が、バオーの頭に戻って行く。

そして……

ガギイイ！

『馬鹿な……弾丸が僕の頭に食い込む』

育朗：バオーが、頭を押さええてうめいた。戻ってきた毛針が、バオーの頭部にズブズブと穴をあけ、もぐり込んでいくのだ。

「……ただ直した訳じゃねーツス」

仗助が言った。

「直す前に、ピーターさんからもらった弾丸の中に、毛針を封じこめておいたぜ……これの、自動追尾弾の威力はどうよ。このままだと、弾丸があんたの頭蓋骨に食い込むぜえ。降参しろ……そうすれば、自動追尾弾を解除してやるよ……」

『仗助えー最強の生物兵器、バオーの回復力を舐めるなツ!!』

育朗が吼えた。

バオーは頭を掻きむしった。頭部に食い込む弾丸をつまみだし、溶かし始める。

「あれはバオー・メルテツティン・パルム・フェノメノン　かつ。しかし……指先だけから溶解液を出せる程の繊細なコントロールが出来るとは」

木の上から、ピーターがうなった。

「グレート……コイツは一体、何種類の能力を持っているんすか」

「……いや……仗助、君の攻撃は効いてるぞ。見ろ……やつは立てないんだ。脳にダメージを受けたか？」

ピーターの指摘のとおり、バオーはぎこちなく立ち上がろうとして失敗し、派手な音を立てて無様に転んだ。

『何だって……』

育朗が顔色を変えた。

ピーターが、木上から言った。

「仗助君、チャンスだ。今の内に奴にとどめを」

れ、毛が逆立つ。バオーに変化していくッ！

「チツ……クレイジー・ダイヤモンド ツー！」

『遅い。モデュレイテッド……飛び掛かれ……そして、仗助のその変な《髪型》をグチャグチャにしてやれッ』

育朗が、冷静に言った。

プチンッ

「何だとゴラアアッ!!!!!!」

仗助が吼える。!!!!!!」

仗助の目つきが変わり、凄みを増した。

『ドウオララアアッ!』

これまでよりも素早く、パワフルに、クレイジー・ダイヤモンドの連打が、バオーに『変わった』犬たちにおそいかかるッ。

「なんだあとうツ、このクソがアツツ!!」

「ヒツ……」

まるでジキルとハイド。そんな仗助の変化に恐怖の悲鳴を上げたのは、ピーターだ。

『ふっ……冷静さを失ったなツ!』

育朗は、してやったりと笑みを浮かべた。

育朗に操られたバオー・ドッグが、恐ろしいほどの速度と連携でクレイジー・ダイヤモンドの攻撃を避け、同時に仗助におそい掛かった。

黒犬と白犬が足元を、残ったもう一匹の白犬が口から触手のような物を振り回して、仗助に打ち付けるッ！

「ヴァール！」

「ガアル！」

『ドウラアアッ!』

だが、クレイジー・ダイヤモンドは、逆にバオー・ドッグの触手を掴みとり、宙に放り投げたッ。

「ギユワン！」

放り投げられたバオー・ドッグは、少し離れた立木に体をひどく打ち付け、倒れた。

残り、おそつてくるバオー・ドッグは二匹ッ！

一匹は足首に食いつくと見せかけて、その直前、喉笛めがけて飛びかかってきた。

仗助は喉笛めがけて飛びかかってきた一匹の攻撃を、生身で避けた。

『ドラッ』

攻撃を避けられ、腹を見せたそのバオー・ドッグの首を、クレイジー・ダイヤモンドが締め上げるッ。

そして……同時に攻撃してきたもう一匹のバオー・ドッグに対して……なんと仗助は、生身の『自分の拳』で迎え撃ったッ！

「ぐあああー！」

当然生身の人間にバオー・ドッグをたたき伏せる力はないッ。

仗助は弾き飛ばされ、ピーターの登っている木に激しく体をぶつけた。

肺から息をすべてたたきだされ、必死にあえいだ。

眉間の感覚器に一撃を食らったバオー・ドッグは、ほんの一時ふらついた。だが、すぐに再び唸りだした。

クレイジー・ダイヤモンドが、手に持ったもう一匹のバオー・ドッグを投げつけるッ！

「ギャンー！」

二匹のバオー・ドッグがぶつかり、悲鳴をあげた。

何とか立ち上がった仗助の右こぶしはグシャグシャにつぶれ、体中傷だらけだった。

「おおおおおおお！」

だが、仗助はそんな怪我など意に介さない。休むことなく、クレイジー・ダイヤモンドのラッシュを、バオー・ドッグにぶつけるッ。

『ドラララララララララララララララララッッッッ!!!!』

イヤ、スタンドの攻撃だけではないッ！仗助はスタンドの攻撃に織り交ぜ、自分の生身の拳、蹴り、そして頭突きをバオー・ドッグにぶつけていくッ！

「怒らああッッッッ！」

『生身でバオーに殴りかかるなんて、無謀な……』

育朗が、あきれたようにつぶやいた。

「育朗お——、テメーもぶちのめすツ!!!」

切れた仗助が、バオーに向かって駆け出したその時！

「ヴァルツ！」

物陰に隠れていたもう一匹が、仗助をおそった。

その一頭は、他のバオー・ドッグよりはるかに小柄であった。

だが、不意を突いたその突進はクレイジー・ダイヤモンドの防御をかわし、仗助の足首をはらった。

「うおっ」

「ヴァルヴァアアアル！」

その、小柄なバオー・ドッグは、一瞬バランスを崩しかけた仗助を、地面に引き倒した。

「クツ！おおおおお」

かろうじて、クレイジーダイヤモンドは、バオー・ドッグの致命的な攻撃から仗助の身を守っていた。

だが、不利になった体勢が災いして、小柄なバオー・ドッグの連撃はじわじわ仗助を追い詰めた。

いつしか仗助は、ほとんど動くことができないう状況に追い詰められていた。

『フッフ……切り札は最後に見せるものなのさ、仗助君』

育朗が、その小さな愛玩犬のような犬の額から姿を現し、仗助の目の前に自分の顔を突きつけた。

『仗助君……もう一度尋ねる。この件からは手を引いて、僕たちの事は忘れてくれないかな』

「……それで、早人や億泰はどうなる……あのゾンビどもはどうなるんすか」

仗助が、尋ねた。

『……君一人だけなら助けられる』

「へえ……そりああスゲ——な」

誰かのことを思い出したのか、仗助は不敵な笑みを浮かべた。

「だが悪いけど、断らせてもらおうツスよ??」

『……そうか……残念だよ、本当に』

育朗は下を向き、傍らに控えているバオー・ドッグに合図を送った。バオー・ドッグは、大口を上げて仗助をかみちぎろうとした。

ボフウンツツ

と、仗助の体が浮き上がり、後方に下がっていく。

『なんだこれは?』

「クレイジー・ダイヤモンド、あんたがさつき斬った木を『直す』。その木の枝をもつてりや、俺の体も、『元の木がある所』まで引つ張られていくって寸法つす」

仗助は、手ぐしで髪をかきあげた。

「残念だぜ。俺も、正気のアンタと話してみたかったツス」

プシュツ!

クレイジー・ダイヤモンドは、ピーターから譲り受けた銃弾を子犬のバオー・ドッグに向かって放った。

「ギャンツツ!」

子犬のバオー・ドッグが、悲鳴を上げて倒れた。

『やるじゃあないか、でも、これで終わりさ。時間稼ぎも終わった。バオーは『回復した』よ……』

育朗はバオー・ドッグの支配を解除して、ふわっと離れた。

「なんだつてえ、てめええー」

仗助はなんとか立ち上がり、育朗を睨みつけた。

だが仗助は、すでにボロボロに見えた。

バオー・ドッグにやられた足首を引きずり、グチャグチャになった右手をだらりと下げている。

一方バオーは、まるで何のダメージも受けていないように、すくつと立ち上がっていた。

『仗助君……ずいぶん苦しそうだね。完全回復したバオーと、まだ戦えるのかい?』

「ぬかせ、さつきとかかかってこい……」

仗助は言った。だが、本当のことだ。仗助は、すでに満身創痍の状

態であった。

だがその時、育朗の幽霊―スタンドビジョン―がまるでTVに磁石を近づけたときのように、不意にぼやけた。

『……なんだ……バオー お前は何をしているんだ?』

そう言った育朗の声までも、擦れて良く聞こえなかった。

見ると、なんと回復したバオーが、自らの額に指を突っ込んでいた。

バオーの指先からは強酸液が滴り、自らの額に根を張った肉の芽とその周辺を溶かしている。

肉の芽の触手が苦しげにのたうち、バオーの右手にもぐり込もうとする。だが触手の動きはバオーのプロテクターに阻まれ、むなしく触手はペタン、ペタンとバオーの手を叩いていた。

その動きも、次第に弱くなっていく……

コ” コ” コ” コ” コ” コ” コ” コ” コ” コ”

「ヤロー、自で『肉の芽』をえぐりだしていやがる。なんでだ?」

「そうか……バオーはおいで周囲を判断する。今バオーに埋め込まれている『肉の芽』を不快なおいと認識したんだ」

ピーターが言った。

『よせ、やめるんだバオー……それは、いいモノなんだぞ……』

育朗は薄れゆくスタンドを操り、再びバオーに取りつこうとした。

だが、バオーは肉の芽を引き抜く手を止めない。

そして……

バシユツ!

バオーは、肉の芽を完全に引き抜いた。肉の芽はメツテイルデン・パルム・フエノメンによりあつという間に溶かされていき……その直後、バオーは突然前のめりにボタンと倒れた。

倒れたバオーの体が、一回り小さくなる。そしてその姿はミルミルと元の育朗の姿に戻っていく。

『ドラッ』

クレイジー・ダイヤモンドが、地面に落ちた肉の芽をすりつぶした。

その瞬間、育朗の幽体から『憑きものに取りつかれたような』表情が消えた。

スタンドの像がいよいよ薄くなっていき、やがて姿を消した。

と、同時にバオー本体の変身も解け、生身の育朗が姿を現した。

しかし、育朗はピクリともしなかった。

ピーターが木から降りてきて育朗の様子を診断した。だがピーターは、すぐにうなだれて首を振った。

「残念だよ。肉の芽は引き抜かれるときに寄生者の脳を傷つける。脳を傷つけずに肉の芽を引き抜けるのは、知られている限りでは 承太郎博士のスタンドだけだ……残……念だよ……だが、育朗くんは、もうおしまいだ」

ピーターは、悔悟の表情を浮かべた。

よくても一生障害が残る。最悪、植物人間か……

ところがピーターのその話を聞いて、むしろ仗助はニヤツと笑った。

「いいやグレートだぜ、これで、育朗くんも無事に元に戻る事が出来るんだからなあ??」

仗助は倒れている育朗に近づき、頭部にクレイジー・ダイヤモンドの一撃を加えた。

メキユ——ンツ

すると次の瞬間、育朗の頭部の傷が消え去った。

「これは……噂による君の力か?」

ピーターが目を丸くした。

「先程までピクリとも動かなかった育朗君が、今はゆっくりと呼吸を続けている。素晴らしい、これなら彼は助かるだろう」

「ふう……さて、早人達を追いかけつつすかね。ピーターさんは怪我ないっすか」

仗助は額の汗をぬぐい、櫛を取り出して乱れた髪型を整え始めた。

カラ……カラ、カラカラッ……

と、育朗の足元や育朗の周辺に、複数の小石が転がって来た。

「なんだあ??」

仗助はなんとなしに小石をつかもうと、一步踏み出した。

その小石に手りゆう弾のような持ち手がついている……

「ジョ……仗助君……」

突然、ピーターが恐怖に満ちて、ガタガタと震えだした。

「あそこに……」

ピーターは川沿いにある大岩の頂上を指差し、そして後さずりして逃げ出した。

そこには、一人の男が立っていた。全身にまるで、蜘蛛の巣のような網目のタトウーを入れた、奇妙な格好をした男だ。

コ” コ” コ” コ” コ” コ” コ” コ” コ”

「何だあ???」

仗助は、その男から発せられる異常な『恐怖』に少し戸惑いながら、言った。

「……東方仗助、バオーを倒すとはな……思ったよりもヤル……だが、これで終わりだッ」

男が宣言した。

同時に、仗助の手にある小石についていた『ピン』が、するりと抜け落ちた。

「何かヤバい!!」

仗助が叫び……小石が『爆発』した。

栗沢スミレ その1

1999年 11月 9日 午後「M県K市 名もなき高原」:

換気ダクトを抜けて建物から脱出したスミレは、WitDで探知した育朗の居場所を指して、森の中を歩いているところであった。

ドガアアアア——ンツッ!

突然、先の方で爆発音が聞こえた……ような気がした。

(何?)

スミレは、先を急ぐ足を止め、耳を澄ませた。爆発音は、スミレが目指している方向から聞こえたように思えた。

(今の音は……育朗の居場所を探知した場所?……そこで爆発が起こったの?)

WitDで探索すべき時だ。

スミレは嫌な予感を押し殺し、手に持っていたサバイバルナイフをシースに収めた。このナイフは通風口から逃げ出す時に、物置にしまわれていたものを見つけ、ちよつと拝借したものだ。

「よいしょ……なかなか大変ね……」

そしてスミレは手じかな木にしがみ付き、その上によじ登った。

幸い、その木は下から見えていたよりも手がかり、足がかりとなる枝や木のコブなどがおおく、思っていたよりも登りやすかった。

木の上はうっそうと葉に覆われ、下から見上げられても見つかる心配はほとんど無さそうであった。

ここに隠れていれば、周囲に気を払うことなく、スタンドの操作に集中できるはずだ。

スミレは木の上に体のおさまりがいいところを探し、そこによりかかるとWitDを飛ばした。

樹上で目をつぶり、WitDの操作に集中する。スミレのスタンド:WitDは小さく、速度も遅く、力もない。だが決して誰にも怪しまれずに周囲を探索する事ができる。こんな森の中で、誰も一匹の蝶に気を留めるわけがない。深い森の中の探索に、WitDは最適なのだ。

W i t Dは森の中をヒラヒラと飛んでいき、ついに爆発が起こったと思われる場所に到着した。その場所の光景をW i t Dを通して確認して、スマレは震えあがった。

コ“ コ“ コ“ コ“ コ“ コ“ コ“ コ“ コ“ コ“

——そこでは、大規模な爆発と崩落が起こっていた——

川沿いにあつたらしき大きな岩が崩れて、周囲を埋め尽くしていた。焼け焦げた巨木がなぎ倒され、土は掘り起こされ、瓦礫があたり一面に散らばっていた。

そして、そこには、1人の大柄な男が気を失って倒れていた。男の全身はボロボロだ。ピクリとも動かない。

もしや……

W i t Dが恐る恐る近づき……スマレは止めていた息を吐き出した。その男は、育朗ではなかった。

スマレは、W i t Dを倒れている男の鼻先にそつと移動させた。そして、男の息が力強く規則正しいのを確認してさらにホツとした。どうやら、ひどい怪我を負ってはいるが、この男の命には別状ないようだ。

「うわあ……」

倒れている男の『髪型』を見て、ウゲエつとスマレはぼやいた。それは、まさにヤンキー漫画に出てくるような、絵に描いたような見事なりーゼントだ。

この男は、億泰君も真つ青なドヤンキーだ……

りーゼントの大柄な男……

もしかして、彼は噂に聞く、葡萄ヶ岡学園の『東方仗助』ではないだろうか？

スマレの通う高校は仗助とは違っていたが、その高校でも時折名前を聞くほど、東方仗助は地域の有名人だった。スマレも、彼の名前を憧れを込めてつぶやく女の子に、何人もあつたことがある。

実は彼が、『超強力なスタンド使い』だということは、億泰から聞いていた。そうであれば、彼が近隣の高校にまで噂がとどろくほどの有

名人だったことも、納得いく……まるで都市伝説のような数々の逸話も、超キレやすいと噂されるそのおつかない性格を含めて……だ。

確たる根拠はないが、スマレは初めてみるこの男が『東方仗助』である事に、不思議なほどの確信を持っていた。

常識的に考えれば、杜王町にすむ彼が、こんな山奥に倒れているのは、信じがたい。ここは、杜王町から150Kmは離れたところなのだ。だがもしかしたら、スマレと同じように、『東方仗助』も、この森に、スタンド使いとしての何か特殊な用事で来たのかもしれない。

と、WitDのすぐ近くで微かに人の声が聞こえた。

スマレはWitDを仗助の鼻から、近くの花へと飛ばした。WitDを花にうずもらせながら、スマレはスタンドの『耳』に神経を集中させた。

やがて話し声が、聞こえ始めた。

「……と……この辺……だ」

「……いぞ。待ち……び……ところだ」

「やつ……失礼しました」

しばらくすると、人声はだんだん大きくなり、そしてWitDのすぐ近くまでやってきた。三人の男がいるようだった。

「さすがの威力ですね。……『素体』がすっかりこの下に埋もれてちまつてまさあ……こりやあ、掘り出すにはウンボか、とんでもねーパワー型のスタンドが必要ですよ」

軽い口調でそう言ったのは、黒人の大男だ。

「パワー型のスタンド……もう一度、あ……貴方様の出番でしょうか？」

太ったインド系の男が、三人の最後尾を歩いている奇妙な格好をした長身の男の方向を向き、ひざまづいた。

(うわっ……) た

その、長身の男を目にしたスマレは、なぜだか『猛烈な恐怖』に襲われた。

⌘ ⌘ ⌘ ⌘ ⌘ ⌘ ⌘ ⌘ ⌘ ⌘

その男は……その男をW i t D越しにその男を見ているだけなのに、スマレは 男から発せられる独特な雰囲気にもまれていた。

スタンドの感覚越しに感じる男の『色』は、完全なる漆黒、暗黒色だッ！

「いや、いや、チャダよ……今の私に、そこまでの力はないよ」

その男は自らしゃがみこみ、ひざまづいている男と目線を合わせた。

「パワーが必要な局面では、むしろお前の『能力』を期待しているよ」

「ハッ」

チャダと呼ばれた男が、さらに深く頭を下げた。

コ” コ” コ” コ” コ” コ” コ” コ” コ” コ”

スマレは、その奇妙な格好をした男から目を離すことが、出来なかった。

その男は、ウェーブのかかった金髪の、浅黒い肌の美男子であった。だが、その全身には、まるで蜘蛛の巣のような、網状のタトゥーが入れている。

何故なのか、スタンド越しに見ているだけなのに、この男が少し動くだけで、男が普通の言葉を話すだけで、これほどまでに恐ろしいのか！ まるで、周囲の温度が下がったかのように、寒気を感じるのかッ！

男が涼やかに言った。

「私はまだ、『本調子』じゃあないんだ……知ってるだろう？ 例の力を借りて、この世にかりそめの姿を現しているだけなのだからね……」

男は、背中から『黄金の羽』を出現させた。スタンドの羽だ。その羽を揺らすと、控えていた二人の男が、ビクリと身をよじらせた。

男は、少し悲しげにスタンドの羽をなぜ……そのスタンドを消した。

「今の私は、スタンド、オエコモバを持つエルネスト、それ以上でも、それ以下の存在じゃあないのさ……今の私の力では地中を掘り起こ

して『素体』を確保する事は無理だよ……そのつもりもない。それよりだ、奴との連絡は取れたか？」

「奴とは？」

「奴よ、今SW財団の者どもと一緒にいる奴よ。もう一度聞く、奴とは連絡取れたか？」

「はっ デイ……エルネスト様、貴方からのメッセージは伝えましたが、まだ奴からの返答はありません」

「わかった、まあSW財団の奴らの目を盗むのも難しいのだろう、これ以上は接触をさげ、しばらくは奴からの連絡を待つてくれ」

「わかりました……エルネスト様」

「フン……その間に、こちらの彼の……東方仗助の処理だけでもしておくかな」

エルネストは、倒れている東方仗助を見下ろした。しばらく黙って仗助を見ていた後、エルネストは懐に仕舞い込んでいた瓶を、取り出す。

仗助の額へ、瓶からつまみ上げた『なにか』を、ポトリと落とした。

すると、たちまち仗助は身をそらせて何事かを叫びだし、そして、すぐにおとなしくなった。

スマレには、それが非常に『邪悪な』ものだということが感じられた。



「GuGiGyaaaaa!」

不意に自分の生身の耳元に叫び声が聞こえた。スマレは我に返り、周囲を見回した。

(何の声?)

ト ト ト ト ト ト ト ト ト ト ト

叫び声をたどって足元を見ると、木の根元に、爬虫類のような緑色の鱗をもつ人型の怪物が立っているのが見えた。

それは、長い腕に巨大な爪を持ち、牙の生えたトカゲ然とした顔は

大きく、ひらべつたい。額からうねって伸びる突起は、頭側部めぐって背中までつながっていた。

怪物は木の上にいるスマレを見上げ、大口を広げ、ヨダレを撒き散らし……そして、『飛び上がった』。

「GuGyiyiiiiiiii!」

飛び上がった怪物は、スマレのいる枝のすぐ下に飛びつき、そして素早く幹を登ってきた。

「来るなああ!」

スマレは、木の枝の隙間からよきつと顔を出した怪物の頭を、必死で蹴った。

「ギジャアアアッ」

ちょうど片手を木から離していた怪物は、スマレからの思わぬ攻撃にバランスを崩し、木の下に落ちるッ!

「ギイヤアウー!」

地上に蹴り落とされた怪物は喚き、後ろに飛び退いた。その反動を利用して、再度跳ね上がる。ッ

(速いッ!止められないッ!!)

ガボッ!

スマレは、咄嗟に棒切れを拾い上げた。その棒切れ顔の前にかざすと、ごちそうを差し出されたかのように、怪物が噛みついた。

棒切れは、スマレの手から簡単に奪い取られた。

棒は、怪物の頑丈なアゴにとらえられ、瞬く間に細かく噛み砕かれた。

あわてて、スマレは何とか逃げだそうと中腰になった。

そこに、怪物が裏拳を叩きつけた。

バキッポキツイイ!

「ううううッ!」

とつきにガードしたスマレの右手が折れ、ぐにやりと曲がった。

不安定な木の上でバランスを崩し、今度はスマレが、登っていた木の上から地上に叩き落とされたッ!

「いやああ——」

あまりの痛みに絶叫を上げながら、スミレは落ちていった。
ドガッ！

「うっ……」

スミレは、樹上から地面に落ちた。

だが不幸中の幸い、大きな怪我はなかった。スミレが落ちたのが、柔らかな灌木の上だったからだ。

だがしかし、怪物も、すぐにスミレを追って飛び降りてくるに違いない！

(うううう……来るッ！怖いッ！)

絶体絶命の状況だった。

たとえば、普通の女の子がドールベルマンに襲われればどうなるか。その女の子はなすすべもなく、無残にかみ殺されてしまうはずだ。

ましてやこの怪物は、この人型のトカゲ然とした怪物は、ドールベルマンなど足元にも及ばないほど獐猛なプレデターであった。たとえば一撃でもその攻撃を食らってしまったえば、その瞬間にお終いなことを、スミレは本能で理解していた。

(……もしあの鉤爪を喰らったら、きつと、何の抵抗もできないままこの怪物に食われてしまうに違いないわ)

しかも、いかにスミレがマタギとして訓練を積んでいたとしても、今は銃を持っていない。スミレが頼りにできる武器は、わずか一振りのサバイバルナイフだけなのだ。

怪物と、スミレの目があった。

怪物は、まるで笑っているかのように大口を開けた。

ダラダラと、涎がその口から滴り落ち、スミレのすぐ足元を濡らした。

「ギヤアアアア……」

「ああっ……育朗、お願い、私に力を……」

スミレは、シースからサバイバルナイフを再び取出し、身構えた。ナイフを両手で持ち、祈るように体の前に掲げる。

と、その時、W i t D がまるで閃光のように一瞬、スミレの額にあらわれた。

すると、スミレの脳裏に、『片手のない怪物が、木の上から飛びおり、スミレに向って大きく口をあける絵』が——ビジョンが——見えたッ！

（5秒後、怪物が右側に飛びおりて噛みついてくる！）

ザアザザッ！

直後、スミレの見たビジョン通りに、怪物が飛びおりて飛び掛かってきたッ。

（見えたッ！）

一瞬早くその様子を予知していたスミレは、かろうじて怪物の突撃を避けた。

しかし、続けての怪物の蹴りまではかわせないッ。

「グウウアアア！」

何とか先ほど骨折した右手で蹴りをブロックする。

蹴りの衝撃と、右手がちぎれそうなほどの痛みが、スミレをおそう。

ガンッ！

どこか遠くで、自分の体が壊れる音が聞こえた。

地面に突っ伏したスミレに向って、怪物がおそい掛かるッ。

（ダメー避けられない!!）

と、その時、怪物の顔面に小さな影が飛び掛かった。

見慣れた、リスのようなその姿は……

「インピン！」スミレが叫んだ。

「イーダアアアッ！」

インピンは怪物の顔面を蹴り、怪物の顔を駆け上がった。

怪物が左腕を振り回し、インピンを捕まえようとするッ！

しかし、インピンはちよこまかと動き、巧みに怪物の手を避け——

—怪物の左目に、後足から飛び出した針を突き立てた！

「ギイイヤアアアッ！」

怪物が左目を抑えた。

その隙に、インピンは意気揚々と近くの木に飛び移った。

「プーダア」

樹上に隠れる直前、インピンはスマレに向って振り向き、自慢げに鳴いた。

(!? 今ヨッ！)

W i t Dがまた一瞬だけスマレの額にあらわれ、閃光を発した。閃光の奥に、未来の様子を見せる。

スマレの脳裏には、『怪物が左目を抑えたままぐるりと回り、見当違いの方向へ爪を振り回す』という未来の絵が、はつきりと見えた。

怪物が、再びおそい掛かってきた。

チャンスだ。

事前に怪物の動きがわかっていたスマレは、かろうじて爪の一撃を避けた。

怪物は、W i t Dの力で予期した通りの軌道でおそいかかって来た。

怪物の一撃を避けられたのは、本当にギリギリであった。

必殺の一撃を避けられた怪物は、バランスを大きく崩し、つんのめった。

スマレは、体勢が崩れた怪物の首筋に向かって、全身の力を込めてサバイバルナイフを打ち下ろした。

「ギイイイイイ」

首筋にナイフの一撃をくらい、怪物が地面に突っ伏した。うつぶせのまま、バタバタと手足を振り回す。

まだ、致命傷ではない。

「喰らいなさいッオオオオオオ!!!」

スマレは歯を食いしばって怪物に馬乗りになり、二度、三度とナイフを打ち下ろした。

もう一撃、さらにもう一撃、もう一撃ッ……

スマレが攻撃するたびに怪物は悲鳴を上げ、手足をバタバタと暴れさせた。

だがその動きも次第に弱弱しくなり——やがて、怪物は動かなくなつた。

栗沢スミレ その2

1999年 11月 9日 午後「M県K市 M山近郊」:

丸木車はスピードを上げ、後を追ってくるハンターを瞬く間に振り切った。

それから 2時間程走っただろうか、海を目指して進んでいた丸木車が、不意に止まった。

「どうしたの?」

「大分海に近づいたわ……だから、私はここまでよ」

アリツサの問いに、アンジェラが答えた。

「ここまでくれば海岸までもう少し。後ちよつとで、SW財団の方々から送られてくる救援を待つだけになるつてわけ。たぶんもう危険はないわ」

「あなた、何言ってるの?」

「本当に悪いと思っっていますけど、でも、丸木車での移動は終わりにさせてください……私はまた出発地に戻るわ……戻って仗助を助ける!」

アンジェラが宣言した。

「本気なの?」

「……ハイ」

「へええ〜お前、怖くて逃げたんじゃあ無かったのかよ〜〜じやあ俺も行くぜえ、残った二人を助けによオ〜〜」

億泰も、日本語で宣言した。

億泰には、英語でかわされる会話は一切わからない。だが話の雰囲気と、『仗助』と言う名前が出たので、アンジェラとアリツサが『仗助を助ける』為の話を始めたと理解したのだ。

「俺はスミレ先輩も、仗助のアホも助けなきやならね〜〜だから俺も一緒に引き返すぜエ」

「なんだ?彼はなんて言ってるんだ」

ポルナレフが首を傾げた。

「ポルナレフさん、億泰さんは自分も引き返すといっています」

未起隆が、億泰の日本語を翻訳した。

「僕も行きますよ……スミレ先輩を助けないと。それに、億泰さんが行くのなら通訳もいるでしょうし」

「……俺もだ……俺も、行くぜ」

噴上がガタガタ震えながら言った。

「そもそも俺がいなければ、スミレを探せないだろ……育朗のスケを探すのに協力するぜ?! アイツらを探せるのは、俺のハイウェイ・スターだけだからなあ」

「さて、まだ早いぞ」

ポルナレフが異を唱えた。

「まだ、安全な場所とは言えない。もう少し動いて、全員が隠れられる場所まで動いた方がいい」

「へッ……おあつらえ向きに、ここから3Km離れたところに丁度いい隠れ場所があるぜえ——」

ホル・ホースが地図上の一点を示した。

「海から突き出た小さな岬がある。ここなら守るによさそうだ」

「アホか、袋小路じゃねーかつ」

「いいや違うぜ。確かに袋小路に見えるが、よく見ろ、岬の周りはずべて高い岸壁に囲まれている。防護にはもってこいの場所だぜ」

「そこまで早人達を連れて行ければ、守るのもグツと簡単になる。」

ホル・ホースは、ポルナレフに反論した。

ポルナレフと、ホル・ホースの二人は軽く口論を行った後で、アンジエラを取り囲んだ。

「なあベイビー……もう少しだけ、我慢してくれ」

ポルナレフが、アンジエラのほうへ顔を突き出した。

ホル・ホースが、アンジエラの腕に手をやった。

「ガキどもも、落ち着けよ。ヒヒツ。安全なところまで移動したら次に仗助を助けに行くぜ……まずはやるべき事を一つ一つやるってえわけよ」

アンジエラは釈然としない様子で、なにか口を開こうとした。

「レディ……気持ちはわかる。だが、もう少しだけ移動しよう。そうすれば、我々の半数を仗助の保護に振り分けられる」

ポルナレフはホル・ホースを押しつけ、アンジエラの肩をそつと抱えた。

「でも、スミマセン、いくらポルナレフ先輩の意見でも私には受け入れられません……こうしている内にも仗助が助けを必要としているかも……」

二人を振り払うために身をゆすりつつ、アンジエラが言った。

「我がままなのはわかっています。でも、やっぱり、私は仗助を探しに行きますッ！」

アリツサは腕組みをして、アンジエラにつめよった。

「ねえ、ちよつと待ってよ……私たちもピーターと仗助君の事は心配よ……でも解って欲しいの……戦闘班が去った後で、もし一匹でもハントーが残っていたら、私たちは……」

虐殺されるわ、とアリツサは早人の方を見ていった。ここにいるのは大人だけじゃあないのよ。

「解ってますよ」

アンジエラが頷いた。

「だから、私1人でいきます」

「そりゃあ駄目だぜ、ベイビー。みんなで行くか、行かないかだ」

ホル・ホースが首を振った。

「みすみす、お前を死なす訳にはいかんぜ」

「構いませんッ！私は命を賭ける覚悟です!!」

『私は命を賭ける』などと簡単に言うな！」

ポルナレフが一喝した。

「簡単になんて考えてませんッ！」

アンジエラが怒鳴り返した。

「だから、私1人で行くって言うてるんですッ！」

アンジエラも一步も引かない。

ガクセー達と、大人たちが束の間、にらみ合った。

と、その時 川尻早人が手をあげた。

「僕も……仗助さんを助けに行くのなら、僕も一緒に行きますッ」
「何を言ってるの……ダメ危険なのよ」

アリツサが、言語道断とばかりに首を振った。

「私たちは、あなたのお母さんと約束したのよ。あなたを危険な目に合わせないってね」

「でも、僕も……僕だって仗助さんを助けたいんですッ！」

ポルナレフは、顔をほころばせた。

しやがんで早人の肩に手を置いたポルナレフは、一言、一言、早人に言い聞かせた。

「早人くん……君は勇敢だな。尊敬するぜ。だけど、こういう役目は大人の仕事だ。俺たちに任せてくれないか」

勇敢なガキだな。なあ？と、ホル・ホースが意味ありげにアリツサに笑いかけた。

アリツサは頑なに顔を強ばらせ、ホル・ホースの視線を避けた。

「じゃあ、スタンド使いの皆さんが、皆で仗助さん達を助けに行ってください」

早人は、真つ赤に紅潮した顔で言った。

「僕の……僕たちの事は心配入りませんかからッ」

「……早人くん……」

しやがみ込んだままのポルナレフが、早人の顔を覗き込んだ。

「だがいいのか？君は……今言ったことがどんなに危険か、本当にわかっていて、それでもそう言ってくれるのか？」

「……本当は怖いです」早人が言った。

「でも、もし今仗助さんを見捨てたら、僕は自分が絶対に許せないんです」

「早人くん……気持ちにはわかるけど、いい考えだと思わないわ……危険なだけよ」

アリツサが早人を翻意させようとアレコレ話しかけた。

だが早人の決意は固い。ついにはこれまで黙っていたシンデイまでもが早人の意見に同調したことで、アリツサは不承不承うなずいた。

「わかったわ、アナタ達はドレスと決着をつけに行く。後は我々3人

の民間人で何とかしろってことね」

何とかしてやろうじゃあないの。

「いや、いや、誤解だぜ」

ポルナレフがあわてて言った。

「君たちの護衛に、二名のスタンド使いを残す」

そういうと、ポルナレフは未起隆とホル・ホースに、ここに残って彼らの護衛につくように頼んだ。

「でも……」

ためらう未起隆に、アンジェラが話しかけた。

「未起隆くん……あなたたちが早人達を守ってくれば安心だわ。そして、杜王町のほかのスタンド使いたちに連絡を取って、万が一私たちが撃ち漏らしたゾンビどもが出たときには、アナタたちが町を守ってね。ええ——とそれから、億泰の通訳は、私がやってあげる」

「……わかりました。早人サン達は、私とホル・ホースさんのコンビで守ります」

未起隆は、しばらく考えてからうなずき、『責任重大ですね』と、顔をこわらばせた。

もちろんホル・ホースは、二つ返事で残ることを了承した。

「決まったな」ホル・ホースが言った。

「行くのは、ポルナレフ、億泰 それからアンジェラと噴上……ここに残るのがアリツサ、シンデイ、早人、未起達、それに俺様だ。 ヒヒヒヒッ……心配するな、俺がゾンビどもに負けるわけがねえ。ちゃんと全員無事に脱出させてやるさ」

「……お願いします」

アリツサが頭を下げた。

「さて、行くか」

ポルナレフが残った一行を振り返った。

「いいか、勝手な行動をするなよ。1人の勝手な行動が全員の足を引っ張るからなッ！このまま、キャンプのあった場所まで引き返すぜ」

ポルナレフは丸木車に飛び乗った。 そのあとに続き、他のスタン

ド使いも丸木車に乗り込む。

「気を付けて……それから、絶対仗助さんを助けてねッ」

再び逆方向に動き出した丸木車に向って、早人が大声で言った。

「任せなサイ〜」

億泰が早人の方へ振り返り、胸をたたいてみせた。

1999年 11月 9日 夕刻「M県K市 名もなき高原」：

「ウグツツ！」

何とか怪物を倒した後、スマレはその辺の適当な枝を切りとった。歯を食いしばり、切り取った枝を折れた腕にしばりつける。添え木とするためだ。

右腕はひどく折れているようで、振り回すと脂汗が流れるほど傷む。だが、まだ何とか我慢できる。

自分の治療を終えた後、スマレはWitDを飛ばし、近くに他の怪物が残って居ない事を、そしてエルネストと東方仗助の一行がこの場を完全に立ち去った事を、慎重に、何度も何度も確認した。

そして、何かおかしな兆候があったらいつでも逃げだせるよう注意しながら、慎重に爆発の跡地へと忍んでいった。

爆心地と思われる場所を、自分の目で調べてみる事にしたのだ。

今、自分がやるべきなのは この場に残って他の被害者が残されていないか調べ、救出する事だ。

スマレは自分にそう言い聞かせると、WitDを出現させた。そして、自分の目とスタンドの感覚の両方を使って、爆発の跡地を注意深く調べていった。

得体の知れないものに寄生させられた仗助も、心配だった。だが、少なくとも仗助には当面の心配はない。ならば今は、まず目の前の惨状の中に生存者がいるかどうか、搜索するのが先だろう。

(……育朗は無事なの……まさか?)

探し続けるスマレは不安、いや、抑えがたい恐怖を必死で押さえつ

けて、W i t D の操作に集中していた。W i t D の予知では、確かに育朗がここにいた筈なのだ。

(もし育朗がこの瓦礫の下に埋もれていたら……)
いくろう

何処にいるの？

今助けるから、待ってなさい。

不安に身を震わせながらも、疲労困憊の体に鞭を打ってスミレは必死に搜索を続けた。

スミレは、体中を泥だらけにし、爪を割り、瓦礫をめぐり、地面を掘り返し続けた。出てくるのは、土くれや倒木、石ばかり、ごく稀に先ほど倒したのと同じような怪物の遺体を掘り当てるばかりだった。

もう半日は探し続けているが、探している生存者は見つからなかった。

(もう……だめなのかしら……)

あきらめ、悲嘆にくれかけていたころ、W i t D が瓦礫の山の切れ目、溪流のふもとに生きている人の気配を感知した。

W i t D からの知らせは、スミレの胸の奥にポツと暖かい火を灯した。

(育朗なの?)

スミレは心弾ませてW i t D が感知したあたりに移動した。

そこは、巨大な岩が崩れた個所だ。すぐ近くで割れた岩が溪流をせき止め、小さなダムを作っている。

ガリっ、ザツ…シユツ！ ザツ！

スミレは、W i t D が指し示す場所を、一心不乱に掘り進めた。
素手で土を掘る。

瞬く間に瓦礫に埋もれている硬い石や、砂利がスミレの手を痛めつけ、爪を割り、指先を血で真っ赤に染めた。左手だけでは、掘り進めるのに時間がかかる。スミレは、折れた腕も使った。折れた腕は動かすたびに、悲鳴を上げる。

だが、スミレはそんな痛みには全く注意を払わず、ただひたすらに

瓦礫を掘り続けた。

怪我なんて、かまうものか。

あれから——育朗と鍾乳洞で別れてから——長い時間が経っていた。もうスマイレも、あのころのようなちっぽけな少女ではない。だが今でもスマイレは、いまも変わらず、彼の顔を、声を、立ち振る舞いを、そして香りを、まるで目の前にいるかのように、くつきりと脳裏に蘇らせる事が出来た。

これまでの8年間の間に、育朗に話したい事を沢山ためていた。

小さなころ囲炉裏を囲んで聞いた、六助じいさんの話がどんなに面白かったか。森の奥深いところにある小さな溪流が、森がどんなに美しいのか。今、どれだけ素敵な仲間たちに囲まれているのか。そして、どれだけまた会いたいと思いつづけていたのか。

高校で自分がモテていることを知ったら、育朗はどんな顔をするのだろうか。ちよつとは焼きもちを焼いてくれるだろうか。そんな想像までして、スマイレはちよつと顔を赤くした。

「ううっ」

！近くで人のうめき声が聞こえる——怪物の声ではない——すぐ足元からだ。

スマイレは高鳴る胸をおさえつつ、しゃがみ込み、両手で瓦礫を掘り返した。

固い土を掘り、岩を取り除いていく。WitDからの情報によると、あとほんの少しで上にかかっている土を取り除くことができる。

もう少し

もう少しだ

ひとときわ大きい瓦礫をのけると、瓦礫の奥に空間が見えた。その空間の奥には……横たわる人の胴体があるッ！胴体は規則正しく動いている——男物の服を着ている——

彼は生きている！

間に合った！

「育朗!!」

スマイレは最後の力を振り絞って、男の体を覆う瓦礫を取り除いて
いった。

栗沢スミレ その3

もうすぐ会える。もう少しだ。

お願いだから、無事でいなさい。アンタは強いから、大丈夫よね。

この岩を取り除けば、顔が見える……

……だが、違っていた……

現れた顔は、育朗では無かった。

救出したその男が着ているのは、背中に大きくSWとロゴが貼られた、た作業服だった。

そもそも男は、日本人でさえなさそうだった。茶色がかった髪、鼻筋の通った目鼻立ち、こんな時でなければなかなかハンサム？と思えるような渋いオジサンだ。

男は完全に気を失っていた。スミレは折れそうな心を励ましながら、苦勞して男を瓦礫の隙間から引きずり出した。

近くを流れる溪流の水を汲んで口に含ませると、その男はゆっくりと目を覚ました。

「ううっ……君が助けてくれたのか。ありがとう」

助け出された男が感謝のことばを述べた。英語だった。

「あなたは……？」

「……僕はピーター。SW財団と言う財団に努める……研究者さ」

ピーターは、頭が痛む と言う風に自分のこめかみを抑えた。

「……この森には研究のために来たんだけど……いや、ひどい目にあったよ」

（SW財団？ 確かミキタカゾがそんなような財団のことを口にしたことを聞いたことがあるような気がする）

この男は誰なのか？信用できるのか？DRESSの人間とは思えないが……スミレは状況を飲み込めず、少し混乱していた。

（もしミキタカゾに関連しているのなら、洒落がわかって、たぶんUFOの研究なんかしている、少し左巻きの財団なのかも？でも、どうしてそんな関係なさそーな財団がこんな危険なところに来たの？

……育朗、あなたは何処にいるの？」

少し頭がはつきりしてきたピーターが、スマレの手をつかんだ。切迫した口調で、スマレに警告する。

「君、ここは危険だ。出会わなかったか？——恐ろしい怪物がこの辺りをうろついているんだ——早く、この森から脱出しないとツ！」

ピーターの言う怪物とは、さつきスマレにおそい掛かってきたあの怪物のことだろうか。

「怪物って、なんですか。ここで何があつたの？」

スマレの質問に、ピーターが顔をしかめた。

「……すまない、君に余計な危険を呼び込みたくない。だから詳しいことは話せないんだ。だが、君こそどうしてこんな山奥にいるんだい？」

と、WitDがスマレの額に出現した。

すると、スマレの脳裏に、ピーターがミキタカゾや億康と一緒にいた光景が浮かんだ。三人は、他の仲間と一緒に木で作った船のようなものに乗っている。

だが、その船が怪物に襲われ、ピーターの目の前に怪物が現れ……

ビジョンが消えた。

だが、今のビジョンを見てピーターがミキタカゾと億泰の味方だと言おう事が、はつきりとわかった。ならば、味方のはずだ。

スマレは心を決めた。本当の事を話そう。

「私の名前は、スマレって言います。S市の高校に通う、ガクサーです。この森には仲間……やっぱり同じコーコーサーのミキタカゾさんと億泰さんと一緒に来たわ」

スマレは、これまでに起こったことをかいつまんでピーターに話した。

「そうか、君がスマレさんか」

ピーターが目をぱちくりとさせ、そして顔を暗くした。

「そうか……ならば話のつじつまが合う」

「お願いです。ここで何があったか、教えてください」

「……………わかった」

ピーターは大きく何度も息をすって、自分が経験したことを、スミレに話してきかせた。

元々、この地のとある『怪異』を調査するために、このあたりでキャンプをしていたこと。

突然、怪物に襲われたこと。

丸木車を作って、海まで脱出しようとしたこと。

脱出の途中で怪物に襲われ、丸木車から落ちたこと。

怪物に襲われ瀕死の重傷を負った自分を、東方仗助が助けてくれたこと。

……………そして、東方仗助と橋沢育朗が戦ったことを、ピーターは話した。

スミレは、ミキタカゾと億泰が無事だったことを知って顔をほころばせ、育朗が元気な姿を見せたことを知って一瞬涙を溢れさせ、そして二人の戦いを聞いて真つ青な顔になった。

「育朗と……………仗助君が戦った？」

あの伝説のヤンキーと……………育朗が？

「そんな……………それで今、育朗はどこにいるんですか？」

育朗と戦ったという仗助は、傷だらけで倒れていた。ならば、育朗は今どこにいるの？

スミレの質問に、ピーターは顔をゆがめた。

「……………育朗君も……………ここにいますよ」

「えっ……………」

コ〃 コ〃 コ〃 コ〃 コ〃 コ〃 コ〃 コ〃 コ〃

そう言つてピーターが指差したのは、爆心地の中心に転がる巨大な岩の下だ。

その岩は地面に半分うずまっている巨大な岩で、2階だての民家ほどもある大きさがあった。

「……………爆発が起こったときに、育朗君がこの、『大岩』に押しつぶされ

るのを見たよ……この岩は今横倒しになっているけど、爆発が起る前は、今見える崩落した所の端、この溪流の横に直立していたんだ……」

「ちよつと、うそでしょ……」

スミレは呆然として、横倒しになり、半分地面にうずまっている巨大な岩を眺めた。

「いく、ろお……」

1999年 11月 9日 夕刻「M県K市 屍人崎近く」：

ポルナレフ達と別れた後、早人達はホル・ホースの先導で順調に海岸へ向って進み、夕刻には海岸近くを走る細い県道に到達していた。周囲に人の気配がないとはいえ、文明の、人の住んでいる気配がする所について到達した一行は、緊張から解放され、ほっと安心して息をついたところだった。

「助かったわね……」

喜ぶアリツサに、ホル・ホースはニヤツとうなずいた。

「そうだな、ベイビー。ついに文明がある所に近づいてきたってわけだ」

ホル・ホースは地図を開いて、一行に見せた。

「周りの地形を見るに、今いるところは大体この辺だ。だが、この辺りはほとんど民家がねーな」

「でも噂だと、この道路はほとんど使われていないはずですよ」

未起隆が、ポンと早人の靴から元の姿に戻って言った。

「確か途中の道が狭くて、状態も悪いので、一週間に一回、車が通ればいい方だよ」

未起隆は声を潜め、しかもこの道路には幽霊がいるという噂もあるんですよ。と低い声で付け足した。

「へッ」ホル・ホースが笑った。

「俺たちには宇宙人がついてるんだぜ、幽霊なんて怖くねーだろう」
イヤイヤ、宇宙人だって幽霊は怖いです。未起隆が首を振った。

「それで、どうしますか」

シンデイが尋ねた。

「まだ、無線も携帯電話もつながらないみたいですよ。ここで車が来るのを待ってますか、それとも……」

「その『それとも』の方だな」

ホル・ホースが地図上の一点を示した。そこにはぼつんと民家が書かれている。

「どんな物好きかしらねーがよ、こんな所にポツンと住んでるやつがいる、そこに行こうぜ。電話ぐれーあるだろ。何、あとたった1 Km くれーよ……なんて場所だ？ シニンザキイ？」

その、屍人崎という地名の意味を聞いて、ホル・ホースはうげえ……と心底嫌そうな顔をした。

「そうね……縁起が悪そうな名前だけれど、道もない山を進むよりはるかに楽ね」

アリツサがため息をついた。

「半端に休むより、動き続けていた方がいいわね……さっそく出発よ」



一行は、ホル・ホースの提案通り、県道を辿って進んでいった。

県道とはいえ道は細く、曲がりくねり、あちこちに急坂があった。舗装されていない砂利道や、ところどころでは少し崩れている所さえもあった。だが、それでも道なき山を進むより、はるかに道中は楽であった。

一行は順調に進み、小一時間ほど歩いた後、無事目指す民家に到達する事が出来た。

そこは、『県道から森の中へ伸びる細い道の行き止まり』にぼつんと立つ農家で、今時珍しい純和風の建物だった。困ったことに、早人達がいくら大声を上げて呼びかけても、農家からは誰も出てこようとしなかった。

「誰も出てこないわね……車はある、でも人の気配がしないわ」
アリツサが言った。

「これは……マズイかも知れませんね……これ以上近づく前に、もう少し調べてみましょう」

未起隆が、ポンと双眼鏡に化けた。

その双眼鏡をホル・ホースがつかみ、周囲の様子を調べた。時折舌打ちをしながら、丹念に周囲を探っていく。

もう、周囲は随分と薄暗くなってきた。もうすぐ、日も沈むだろう。

メギヤンツ

ホル・ホースは双眼鏡を放り投げると、自分のスタンドを出現させた。

「あなた、何やってるの？」

アリツサが尋ねた。

スタンドは一般人には見えない。だが、まるで子供の戦いゴツコのように人差し指を突出し、手を拳銃の形にしているホル・ホースを見れば、彼が自分のスタンドを出現させていることぐらいは、一般人でも予想がつく。

「この民家は何かヤバい、静かすぎるぜ」

ホル・ホースは、黙って待機しているよう一行に指示して、1人、農家へ入って行った。

ホル・ホースが探索をしている間、未起隆は、表面を岩に擬態した空間を作り、一行をその中に隠した。

しばらくして、ホル・ホースが門をくぐって出てきた。肩をすくめ、首を振っている。

「誰もいねー……だがどうやら、ゾンビが『どこから来た』のか解ったぜ」

ホル・ホースが言った。

「ドレスの奴らは、このあたりの村を一つ壊滅させやがったに違いない。そして、村人を全員ゾンビにして周囲の家や俺たちを襲わせたんだ。おそらく、この家の連中は奴らに『喰われ』た」

「どうしてそう思うの？」

アリツサの問いに、ホル・ホースは首をすくめた。

「この家に住んでいた家族らしい死体を、見つけたぜ。それからこの家だが、表から見ると普通だが、裏はめっちゃめっちゃにぶっ壊れているぜ。こんなにも家をぶっ壊せる奴はよお……重機でも使わない限り、ゾンビか超パワーのスタンド使いぐらいなもんよ」

「そう……所で、今のところ危険な奴らは近くにいないのね」

「ああ……この周囲にはいないね。プロの俺様が念入りにチェックしたんだ。間違いねえ」

ホル・ホースは懐から葉巻を取出し、カッコつけた動作で火をつけた。

「じゃあ安全って事ね。私も見てくるわ」

アリツサが言った。

「何か役に立つ情報があるかもしれない」

「オイオイ、中はひどいありさまだぞ、危険はないから止めねーが……中に入ったら何を見る事になるか、覚悟していけよ」

「わかったわ」

アリツサは、シンデイと未起隆を連れて、農家の門をくぐった。

だが早人は、三人の後についていこうとしたところで、ホル・ホースに首根っこを引っ掴まれた。

「ボーズはだめだ。この奥にアンサンが見ているモノなんかねー」

「どうしてですか」

「家族の死体があるって言ったろ？」

「……ひどいものを見る、覚悟はできてます」

「ダメだ……こりゃあ、覚悟のもんだいじゃあねえ……ガキが見るもんなんざ、この奥にやあ、なにもねえ——ぜ」

ホル・ホースが首を振った。

早人は、ホル・ホースが妥協する気が無いのを見て取って、三人の後を追う事を、あきらめた。

「……そうですか、納得はできないけど、わかりました」

早人はホル・ホースに向き合った。と、言っても、特に話すこともない。

世代が違いすぎるし、これまで暮らしてきた環境も違いすぎる。そ

う思つて少し気まずい思いをしていると、ホル・ホースがポンと早人の頭を撫でた。

「兄ちゃん、さつきは——『自分達を置いて、ジョースケを助けてくれ』つて言ったのは——かつこよかつたぜエ。あんさん、肝つ玉の太い、かなりヤル小学生だなあ……いろいろ武勇伝も聞いてるぜえ」

ホル・ホースは拙い日本語で、早人に話しかけた。

「武勇伝だなんて」

早人は、うつむいて言った。

「……そんなものないですよ。僕なんて、成績も、運動神経も、なんのとりがらの無い普通の小学生です。僕はただ、必死だっただけです。ただ、父さんと、母さんと、仲良く暮らしたかっただけ……」

でも、お父さんは殺されてしまった。早人はゴシゴシと目をこすつた。そして、だからこそ母さんは僕が絶対守るんです と力強く、言った。

「そうか ボーズ、お前は残されたお母さんを、守りたいか」

ホル・ホースが、いつになく真摯に言った。

「当たり前です」

「母さんを幸せにしたいのか」

「ええ……」

早人は少しむつととしていった。

「母さんには僕しかいないんです。僕が父さんの代わりに母さんを守るし、幸せにするんだ」

「ビビヒツ。立派なことだ。末恐ろしいガキだな」

ホル・ホースは、ふつと煙草の煙を空中に吹いた。

「……だがな、ボーズ。お前は間違つてると、俺は思うぜ」

「なんですつて?」

早人が怒つた声で聞き返した。

「お前の母さんはよオ??お前の親なんだよ」

ホル・ホースが言った。

「いいか、『親』なんだ。話をきいてりや、ずいぶん立派な母さんじゃねーか——尊敬するぜ——そしてお前は『子供』だ」

「わかってますよ……何を当たり前のことを言ってるんですか？」

早人は、ぷいっとホル・ホースに背を向けた。

「へッ」

肝心な事を言う前に嫌われちゃったかな……とホル・ホースは苦笑いした。

「ダメだな、日本語じゃあ上手く話せねー。いや、違うな。やつぱりガラジねーんだ。ガキに偉そうな口をきくなんてよ。ヒヒッ」

ガキが元気で幸せじゃねーと、親は幸せになれねーんだぜ……

ホル・ホースが言わんとしたその言葉は、ついに口にされる事は無かった。

ジャン・ピエール・ポルナレフ その1

1999年 11月 9日 日没直後「M県K市 名もなき高原」:



そこは砂漠であった。ポルナレフは、墜落しているヘリコプターの近くに落ちている水筒を見ていた。

「ポルナレフ 水筒を攻撃しろ」

「……いやだぜ *** お前が……くわしてやりやあいじやねーか」

「ぼくだっていやだ!」

「自分がいやなものを人にやらせるなツ! どおーゆー性格してんだためーッ」



山の尾根を上る丸木車の上で、ふとポルナレフは昔のことを思い出していた。

あのつらく、厳しく、だが振り返ると楽しかった旅のことを。当時の事を思い出すと、今でも夜に寝れなくなるほど後悔に襲われたり、ニヤニヤが止まらなかつたり、顔が赤くなつたりする。

本当に、いろいろな出来事があった旅であった。

「ポルナレフさん、どうしたんですか? ニヤニヤして……失礼ですけど、ちよつと気味が悪いですよ」

隣で、そんなポルナレフの様子を見ていたアンジェラが、恐る恐る指摘した。

「へっ?」

ポルナレフは追憶をやめ、あわててこれからのことに意識を引き戻した。

「イヤ、すまん。ちよつと考え事をしてた……それより噴上クン、そろそろ『ハイウェイ・スター』を探索に出してくれないか?」

噴上は、ポルナレフの指示に素直にうなずいた。

「了解だぜ。ポルナレフのおっさん。探索に出すのは50メートル

先、でいいか？」

「いや、もつと先だ。500メートルくらい先を探ってくれ」

「其処まで行くと、自動操縦モードになっちまう。大まかな位置しかわからねーが、良いのか」

「構わない。やってくれ」

「了解っす、ポルナレフさん……だが億泰ッ、コイツはグースカ寝やがって、いい気なもんだ、ムカつくぜ」

噴上は、だらしなく眠っている億泰を見てチツと舌打ちした。だが、ポルナレフの指示通りハイウェイ・スターを出現させ、丸木車の前方を走らせる。

億泰の方は、今の内に出来るだけ休養を取れと言うポルナレフの言葉を文字通りに受け取り、少しでも深く休むために、丸木車の上で大口をあけて眠っている。

ポルナレフは、涎を垂らしてだらしなく眠っている億泰を見て、またニヤツと笑った。このコーコーサー達は、一緒に旅をした『奴ら』よりも見た目はアホそうだ。だが、もしかすると性根は『奴ら』よりも真っ直ぐ、純朴で、イヤツ等なのかもしれない。

それは単にもしかしたら、地方都市のガクサーと、日本屈指のオサレ都市である湘南地方のガクサーとの違いかもしれない。

確か、コイツらは当時の『奴ら』より、年齢もちよつと下か。

そう考えて、ポルナレフは苦笑した。当時の『奴ら』も、今ここにいる『彼ら』も、今の自分の半分以下の年齢なのだ。

気を引き締めねば。

自分はもう、ただ『彼らの仲間』なだけではいられないのだ。当時のジョースターさんのように、自分がリーダーとして『彼ら』を導き、先輩としてのアドバイスをしなくてはならないのだ。勝手に動いていい立場じゃあない。

ガラじゃあない。

がらじゃあないが、自分がリーダーって奴をやらなければ。

「『！スピードを落としてくれッ、ハイウェイ・スター』が何か嗅ぎ付けたぜ」

噴上が、後方のアンジエラに声をかけた。

「了解イツ」

アンジエラがスピードを緩め、ゆっくりと丸木車を動かしていく。すると、先行していた噴上の『ハイウェイ・スター』が、走って戻ってきた。ハイウェイ・スターは、丸木車を小さな森の広間——『行き』に、多数のハンターを始末した戦いの跡地——へと案内していった。

「感知したぜ……このあたりに、仗助のポマードの匂いがプンプンしやがる」

噴上は、丸木車が下ってきた道とは異なる、別の狭い木々の切れ目を指差した。

「ハンターどもの匂いが多すぎてよくわからねーが……ここを何体かのハンターが上がっていったようだぜ。仗助の匂いもここにある……悪いが、ピーターのおっさんの匂いはしねーな」

「仗助が捕まっちゃまった、と言う事だろうな」

ポルナレフが言った。

「噴上クン、他の人間の匂いはしないか？」

「ああ、匂いがあるぜ。人数はよく把握できねーが、確かにハンターとも、仗助とも違う臭いの持ち主が何人かいるぜ」

「……よし、俺たちも後を追うぞ。丸木車はここにおいていく。噴上君は引き続き『ハイウェイ・スター』を前方に出して周囲を偵察してくれ……『十分気を付けてな』……あ——先頭に行くのは アンジエラ、君だ。その次が億泰、噴上。そして俺がしんがりだ。イイな」

ポルナレフは、億泰をたたき起こし状況を説明すると、アンジエラの後ろに付かせた。

「アンジエラ、真っ直ぐだ。しばらく真っ直ぐ丸木車を走らせろ。奴らが近づいてきたら、ハイウェイ・スターが感知して、お前に知らせる。だから合図があるまでは真っ直ぐだ……お前たち、先をいく事ばかりに集中しすぎるなよ……ハンターや仗助を倒したスタンド使いが、途中で俺たちをおそってくるかもしれん。それを忘れるなよ」

「……うっす」

周囲がうんざりする程ごまごまとした指示を出していたポルナレフを、噴上が遮った。

「ポルナレフのおっさん……近づいてい来るやつがいるぜ……悪いッ仗助の匂いに集中しすぎて、気づくのが遅れちまった。来るぜー」

「何人だ？」

ポルナレフは、噴上が指し示す方向に自分のスタンドを出現させた。

「1人だ」

んっ？ と 噴上が微妙な表情を一瞬見せた。

「この匂い？」

そして……

ガサツ

草木をかき分け、何者かが近づいてくる……

待ち構えていたポルナレフ達の前に現れたのは、スマレであった。

「億泰ッ！」

姿を現したスマレは、億泰の元気な姿を見て、顔をほころばせた。

「こんなところでまた会えるなんて、思ってたなかったわ。元気そうで良かった……ところでミキタカゾは？」

「スマレ先輩じゃあないっすかあ〜」

億泰は歓声をあげてスマレの手を握りブンブンと振った。

「逃げられたんですね。良かったッス。心配したんすよ」

「お、億泰も元気そうね……それで、ミキタカゾは？」

「訳があつて別行動してますが、アイツも元気っすよお〜」

億泰の返答に、スマレは良かったあ とニッコリ笑った。

「あなたが栗沢スマレ さんか」

初めまして とポルナレフが手を差し出した。

「貴方は……」

「俺の名は、ジャン・ピエール・ポルナレフ……アメリカ政府に雇われた、エージェントだ」

「!?……アメリカ政府のッ」

スマイレが、さつと顔を曇らせ、ポルナレフから距離を取った。

「……いや、誤解するな……俺は、彼を助けたいんだ」

ポルナレフは、スマイレにこれまでの事情を話し始めた。

二人が話しているとき、噴上がスマイレの手を勝手にとって、その手の甲に自分の唇の辺りを近づけた。

パンツ！

「ちよつとおつ、あんた何者？何すんのよツ！」

とつさのことに、スマイレはその手を振り払い、噴上のほほを張った。

パシツとほほを張られた噴上は、もう一発、と目を三角にして手を振り上げたスマイレを見て、まっつくれ とあわてて両手を挙げた。

「まっつつてくれ。誤解だツ、おれはただ匂いを確認しただけだツツ」

「何ですつてえ？」

スマイレの眉がキリリと上がった。

「匂い好きの変態つてわけ？」

「ちよツ……待つてくれ。あんた、育朗の探してたス……人だろ？」

噴上の言葉に、スマイレは目を丸くした。噴上の襟をつかみ、激しくゆする。

「育朗？アナタは育朗を知っているの？どうして？」

1999年 11月 9日 日没直後「M県K市 屍人崎近く」：
農家の中に入ったアリツサ達が戻ってきたのは、それから約半時間後だった。

アリツサも、シンディも、そして未起隆も、農家の中でホル・ホー
スの警告通りの惨状 —— 血だらけで真っ赤に染まった部屋の真ん
中に、腹と頭を噛み千切られた男女の遺体が積み上げられている ——
を目にして、皆青ざめた表情で、吐き出しそうになっていた。三人
とも、ついさつき悪夢から覚めたかのような、顔だ。

「警告したろう、素人にはきついつてな」

ホル・ホースはそう言うと、優しくシンディとアリツサの二人の手

を引いて、芝生の上に座らせた。当然、男である未起隆は、どんなにしんどそうでも完璧に無視だ。

「見たか？あの死体を」

ホル・ホースの質問に、アリッサとシンディは顔を強張らせながら、うなずいた。

「対して収穫はなかったわ。わかったことは……」

三人の中でいち早く震えを止め、シンディが説明しはじめた。

「……この主人は植松 秀彰さん 今年50歳の壮年の男性で、最近結婚した奥様と 赤ちゃん……アミちゃんって名前だったらしいわ……そして年老いたご両親の5人家族だったようね」

シンディは、ブルツと体を震わせた。

「赤ちゃん以外の死体はすべて確認したわ。赤ちゃんは見つからなかった……食べられたのかも……」

「アナログ式の腕時計が、2時を指していたわ」

アリッサが言った。

「襲撃は朝2時に行われたようね、それから電話線が切られている……当然NETもないし、携帯の電波も届かないわ」

それから、車も破壊されていたわ と、アリッサが付け加えた。

「持ち物を見る限りでは、ここのご一家はあまり裕福な暮らしではなかったようですね……強盗の犯行ではないようです。少しあった貴金属やお金はそのまま残ってましたから」

未起隆も、青白い顔で言った。

「ゾンビだ……」

早人が言った。

「ホル・ホースさんの言うとおり、この家は、ゾンビに襲われたのに違いないよ」

ホル・ホースが、うなずいた。

「そうだな、俺もこの家がゾンビに襲われたと思うぜ。計画変更だ。もうひと頑張りして、この家の裏山を越えた先にある海岸まで行くでしょう。ここはお宅たちには、チョイと危険すぎる場所だぜえ」

アリッサ達はうなずいた。

「そうね、しんどいけれどもう一頑張りしましょう」

「早人くん、もう少し頑張れる?」

シンデイの質問に、早人はうなずいた。

「……もちろんです、頑張りましょうッ!」

「いや、早人君はずいぶん頑張りました。だから、少し僕が手伝いますよ」

未起隆は、そう言うとき ポンツ とその姿を変えた。

変身した未起隆は、早人の体を、包んでいく。早人の足の上には新しい靴として、ズボンの上に新しいズボンとして、上着を、そしてゴーグルのようなものが付いたヘルメットとして、形を変え、早人を包んだ。

「なっ!」

驚いている早人の耳元に、未起隆の声が聞こえた。聞こえてくるのは、早人の耳に装着されたイヤホンからだ。

『突然スミマセン。これはなんと、僕達が宇宙船で着ているパワー・スーツをまねたものなのですッ。もちろん僕はパワー・スーツそのものの機能を再現ではないのですが、僕の力を早人君に貸すことができます』

これで、楽に歩けるようになりますよ……と、未起隆は満足げに言った。

「あ……ありがとうございます、でも いいですよ。こんなにしてもらったら 未起隆さんに悪いですよ」

(まるで漫画ヒーローのコスチュームじゃあないか。正直恥ずかしい……うわあ、シンデイ姉さんがあきれてみている……)

早人があわてて元に戻ってくれと頼んでも、未起隆はどこ吹く風だ。

早人は恥ずかしさのあまり、早くアリッサとシンデイの視線から逃れたいと願った。そして小走りに駆けて、先に行くホル・ホースに追いつこうとした。

そのとき、軽く走ったはずの早人の体が、ピヨンと空を飛んだ。そして、たった一歩でホル・ホースのもとへと到着した。

「何だあ」

拳銃を構えたホル・ホースが目を丸くしている。

……拳銃？早人も、目を丸くした。これが、もしか……ホル・ホースのスタンド、エンペラーではないのか。

そう思つてホル・ホースを見ていると、今度はゴーグルが上に跳ね上がった。すると、ホル・ホースが手をピストルの形にしているように見える。——拳銃は見えない——だが、再びゴーグルが下りてくると、拳銃が見える。

「これは……」

『そうです。私の能力を貸すと言つたでしょ……これで、早人クンにも、私が見えているもの……スタンドを見る事が、出来るようになったのです』

未起隆が誇らしげに言つた。

「スゴイヤ」

早人は興奮した。

「じゃ未起隆さんが手伝つてくれたら、僕も仗助さんや億泰さんのスタンドが見れるんだ」

はしやぐ早人の耳に、微かに何かが聞こえた。

誰の泣き声だ？

「ちよつと静かにして、何か聞こえるよ？」

早人が耳を澄ませると、それは2階の屋根から聞こえてくるようだった。

先ほどと同じ要領で、力を込めてポンと飛び上がると、早人は簡単に二階の屋根に飛びつくことができた。

そして……屋根の上に登ってみると、その雨どいに丸められた布団が引つかかっていた。泣き声は、そこから聞こえてくるように思えた。

(まさか……)

『早人サン、行ってみましょう』

早人&未起隆は、屋根の上を走って雨どいのところまで行つた。そこにあったのは、青地に泳ぐ魚がプリントされた子供用の布団だっ

た。

ガムテープで乱雑に留められている布団を開くと、その中には、3歳くらいの小さな幼児がくるまれていた。

ジャン・ピエール・ポルナレフ その2

1999年 11月 9日 日没直後「M県K市 屍人崎近く」：
「君、大丈夫?」

早人が声をかけると、幼児は腹の底から絞り出したような大声で泣き始めた。

「おかああああさああん!!! おかあさんッ。おかあさんッ! おつがああああざああああんッ」

「どつどうしたの、泣かないで……もう大丈夫だよ!」

「おがああさんどごッ! アミちゃんッあ! いだい!!!」

アミと名乗った幼児は、ズビビと鼻をすすった!。涙と鼻水とでぐちやぐちやになった顔をすり寄せ、早人に思いつきりしがみつく。

「アミちゃん、落ち着いてッ! もう大丈夫だからッ!!」

早人はすっかり動揺して、その子を抱いたままピョンと二階の屋根から飛び降りた。

ますます火がついたように大声で泣き始める幼児。あわてて、シンデイに泣き叫ぶ幼児を押し付け、早人は何が起こったかをシンデイに説明しようとした。

ところがシンデイが幼児を抱くと、その子はますますヒステリックに暴れ始めた。

「ギイヤアアアアア!」

「大丈夫よ……落ち着いて! キヤア!」

思いつきりのけぞった幼児が、シンデイの手から飛び出す。

「危ないっ」

間一髪、幼児が地面にぶつかる前に、早人が体を投げ出してその子を抱きしめた。年が少しでも近いからか、早人が抱きしめていると、幼児が少しづつ落ち着いていくのがわかった。

だが、シンデイが近寄るとまたその幼児はヒク ヒクと大泣きをする兆候を見せた。

「よしよし……頑張ったな、もう大丈夫だよ……お兄ちゃんが守つてやるからなあ……」

早人は、優しく幼児を抱きしめた。そしてシンデイとアリツサに、『しばらく自分にまかせるように』と目で合図をした。

アリツサが困ったように頭をかきむしり、そしてシンデイに話しかけ、また家の中に入って行くのがちらりと見えた。

「ヒン……ヒン」

やがて、泣き疲れた幼児が目を閉じた。

アリツサが、建物からいくつかの荷物を抱えて戻ってきた。

「当面の紙おむつとか、タオルとか、その子の着替えとか、それからおんぶ紐を持ってきたわ……元々この子のものなのだから、ちよつと拝借しても、泥棒にはならないわよね」

アリツサは、「でも これどうやって使うのかしら？」と、おんぶ紐を見て首をかしげている。

シンデイも、どうすればいいか戸惑っているようだった。

未起隆も、もちろん早人も、おんぶ紐の使い方など知らなかった。

一行は、いったいどうすればいいのか、と頭を抱えた。

「あ……」

早人は、アミが『ジヨジヨとズボンを濡らしていること』に気が付いた。

恐ろしいことに、未起隆の変身したスーツにも、何か『黄色い液体』がついている……

「こっ……これは……」

コ” コ” コ” コ” コ” コ” コ” コ”

『……早人さん、この子のオムツを変えてあげてください』

未起隆が、観念したような悲痛な声で言った。

「……アミちゃん、おしっこ 出た」

わたし、何にもしてないよ？ と言わんばかりに、アミがつぶらな瞳を見開いて、言った。

「どうしよう……オムツなんて替えたことないよ」

早人が言うのと、私たちもよと、アリツサとシンデイも顔を見合わせている。

「こ、これはピンチだよ」

だが、いつも助けは、意外なところからやってくると相場が決まっている。

今回のピンチに最も役に立ったのは、本当に意外な人物であった。

「オイオイ……ベイビー、こいつはおれの出番じゃねーか？」

おぼつかない手つきのシンディや早人を、見ていられなかったのだろう。ホル・ホースが二人を押しつけてアミを抱きあげた。そして、慣れた手つきであつという間におむつを取り替えてしまった。

「えっ？」

驚く仲間をしり目に、ホル・ホースは手早くおんぶ紐を、アミに装着した。そして、そつとおんぶ紐を担ぎ上げると、アミを優しく背中に担ぎ上げた。

アミは抱き上げられた一瞬愚図ったが、誰もがぞつとしたその一瞬を乗り越えると、あつという間にスヤスヤと眠りに落ちた。

「よし、いい子供だな……先を行こうや」

ホル・ホースは、チュツとアミのほっぺにキスをした。

「スゴイ……尊敬します」

「あんだ、どうしてそんなに手馴れているの？」

「お子さんがいらつしやつたんですか？」

「……子供はいね——ツ！だが、昔子連れの女と付き合った事があるんだよ。じつと見てんじゃねーぞ、さっさと先を行くぞ」

おんぶ紐を身に着け、背中に幼児を背負った子連れガンマンは、どう鼻屑目に見ても似合つてなかった。

ホル・ホースは、煙草を吸おうと胸ポケットを手さぐりして……アミを背負っていることを思い出して、不承不承その手を止めた。その顔が、不満げにぷつと膨れた。

「……………ぷつ……………」

「フフフ……………」

思わず失笑する女性陣に、ホル・ホースはいかにも不本意 といった風に顔を曇らせた。

その顔が、さらに笑いを生む……

だが、その時だ。

「血イイイイ！」

突然、叫び声が県道の方角から聞こえた。

「血の匂いだあ！腹いっぱい吸ってやるぜえ」

声は次第に大きくなる。

「ねえ……プロの人が確認したから、この辺りには危険なものはいないんじゃないかってっけ」

アリツサがホル・ホースを睨んだ。

「あれだけ泣き声がすれば、そりゃ聞きつけてやってくるだろーよ」

ホル・ホースがため息をついた。

「下がってろ」

「ギシャアアアア!!」

家の門をくぐって、ゾンビ達が現れた。

「おらあッ」

すかさず子連れガンマンがエンペラーを連射つ、あらわれたゾンビを瞬殺するッ！

「……すごい」

「へッ『簡単』だぜ、ベイビー」

ホル・ホースは、気取ったポーズでシンデイの手を取った。だがその時、ホル・ホースの背中の子供が、カッと、目を開いたッ！

「あッ……」

ホル・ホースがしまった……と、言った表情で、アミを見た。

アミと、ホル・ホースの視線が、ぶつかる。

⚡ ⚡ ⚡ ⚡ ⚡ ⚡ ⚡ ⚡ ⚡ ⚡

「ヒッ……ヒギー！」

アミは胸いっぱい息を吸い込み、大声で泣き始めた。

「まっ まじーぜッ……落ち着け、アミちゃんよおー。ホラホラ、ブルー・バアーブルー・バアー」

あせるホル・ホースの背後に、新たなゾンビが迫るッ。

「しまった、エンペラーの防御が間に合わねー」

ホル・ホースが硬直した。

「うわあああああああああ！」

間一髪ッ！　ホル・ホースに飛び掛かろうとしたゾンビの前に、早人が飛びこんだ。

早人は空中で、怪物の頭を蹴りつけるッ！

不意打ちの攻撃を受けたゾンビが、吹き飛ぶ。

だが、吹き飛ばされたゾンビは何事もなかったように起き上がった。今度は、早人に向ってゆつくりと向きなおる。

「このガキ……やつてくれたなああ〜」

「小僧ッ、まずはお前の血から、先にいただくぜえ！」

「うっ……うわああ」

ゆつくりと迫り来るゾンビに、早人は1歩、後ずさった。

ホル・ホースは、まだアミにかかりつきりだ。

『早人君、大丈夫です。ボクがついてます』

早人のイヤホンから、未起隆の声が聞えた。

『ゾンビは、頭を潰せば、倒せます……ボクの力を貸します……大丈夫、できますよ』

「うっ、うん……わかってる」

早人の右腕に被さっていた『未起隆スーツ』が、バラリと離れた。離れた服が、再びまとまって、未起隆の右腕になった。

その右腕の一部が、鉄の棒に変化した。

早人が鉄の棒を受け取ると、未起隆の右腕は再び『未起隆スーツ』となって、早人の腕を覆った。

『この鉄棒を使ってください……これで、ゾンビを叩きますよ……大丈夫、君なら簡単です。』

未起隆は、早人を鼓舞した。

『勇気を出して、素早く、断固としてやらなくては』
「小僧ッ！」

ゾンビが早人におそい掛かるッ！

「うっうっうわあああああああ！」

早人は、高くジャンプしてゾンビの攻撃を避けた。

そして鉄棒を思いつきり振りかぶって、ゾンビの頭部を殴りつけた。

すかさず、横殴りに鉄棒を薙ぎはらい、もう一体のゾンビの頭を刈るッ！

「Juuuuuu………」

「Gi Gi Gi Gi」

頭を吹っ飛ばされ、ゾンビは倒れた。

「うっ………」

その凄惨な光景に、早人は口を抑えた。

『……早人サン……辛いでしようが、今は耐えて下さい』

未起隆が、優しく言った。

ターン！

遅ればせながらアリッサとシンデイも銃を取出し、近くのゾンビに狙撃を始めた。

ゾンビたちは全身に銃弾を浴び、一体、一体と倒されていく。

「ふー！ふうーッ」

アミが大きな声で唸る。

「ちよつと、その子黙らせられないのー！」

アリッサがわめいた。

「その子の泣き声がゾンビを呼ぶのよッ」

「じやかましいい」

ホル・ホースはおんぶ紐を外すと、アミが凄惨な光景を見ないで済むよう、暴れる幼児の目をふさいだ。

「早人オ、未起隆ア、この子連れて先に行きやがれ！後は俺が始末するぜ」

「わかったっ」

早人は、ホル・ホースからアミちゃんを受け取ると、出来る限り優しく抱っこした。そして、海に向って一目散に駆け出した。

ここから3 Km、山の稜線を北西に行つたところだ。そこに古い病院後の様な廃墟がある。仗助もそこに囚われているはずだ。

ハイウェイ・スターは、一行に 近くの高台に廃墟があること、廃墟の中から仗助のにおいを見つけたことを説明した。

仗助の近くには、他にも4人の人間 —— おそらくスタンド使い—— がいることを伝えた。

それから、クリーチャーが無数に廃墟の中を徘徊していることも。

「二手に分かれるか」

噴上が提案した。

「陽動作戦だ。どちらかが正面突破。もう一方は裏口からまわって攻撃するっていうのはどうよ？」

「どうかしら」

アンジエラが首をかしげた。

「一緒にまとまって行動したほうがいいんじゃない？ 陽動作戦なんて、かっこいいけど私たちは5人しかないのよ。バラバラに動いたら、危険よ」

ポルナレフは、噴上の考えに賛成した。

「二手に分かれるのは悪い考えじゃあないぞ。だが、やるのは陽動作戦じゃあない。挟み撃ちだ。今晚、俺が1人で忍び込んで仗助を取り戻す。お前たちは正面からこの施設を攻略してくれ……」

「正面からあ？ どうやるんだ」

噴上が尋ねた。

「噴上くん、キミのハイウェイ・スターに、連絡係をやってもらおう。俺は仗助を確保したら。建物から敵を追い出してやる」

「おお……悪くねえな」

アンジエラに翻訳してもらい、ようやく話についてきた億泰が、うなずいた。

「俺は正面から乗り込んで、奴らをノシながら行けばいいんだろ？ わかりやすくしていいぜ」

「悪いわよッ」

アンジエラはノンノンと、指を振った。

「ポルナレフさん……いくら凄腕のポルナレフさんでも、1人じゃ無理だと思います。私のスケーター・ボーイも遠くまで行けて偵察に向いています。だから潜入するのは、私とポルナレフさんの二人にしませんか」

「しかし……」

反対しかけたポルナレフを、億康が止めた。

「いいぜえ……ポルナレフさん、アンジェラを連れていきなよ……残った俺達だけで問題ねえぜ。キツチリ正面突破してやるよ」

「そうよ、単独行動は危険よ」

あなたまでやられて、肉の芽を植えつけられたら、ヤバイわ。スマレがズケズケと言った。

だが君たちが危険だ……そう言おうとしたポルナレフは、ふと宙を見つめ……やがて苦笑して頷いた。

「……そうだな、単独行動は危険だな……わかってるよ……」

だがお前達、勝手な行動をとって命を無駄にするなよ。ポルナレフは、優しく——しかし正直気味い声色で——付け加えた。

「お、おっお……俺のスタンドは時速60kmで遠くまで走れる。ハイウェイ・スターだからな。奴らを引っ掻き回してやるぜえ」

「私も、自分の身は自分で守るわよ」

スマレが言った。スマレは、サバイバルナイフを腰に差し、ピーターから受け取った拳銃を手に持っている。

「銃弾の数には制限があるけど、ナイフもあるし、私にはWitDの予知能力もあるわ」

「銃なら俺達が持ってきたのもある。潜入には使えないから、スマレが持っているといいだろう」

ポルナレフはそういうと、スマレに自分とアンジェラが持っていた二丁の拳銃をホルダーごと手渡した。

「重くなるが、銃ごともってきな」

「……ありがとう……」

「だけどスマレ先輩よく、あんたは別に、仗助の救出に絡む義理は無いんだぜえ」

億泰が、心配そうに言った。

「あら、そんなこと無いわよ」

スミレは、自分の為に体を張ってくれた億泰とミキタカゾの為にやるのだ。と言った。

「もう……私の『用事』は終わってしまったし」

と、スミレは哀しげに付け足した。

「……………」

皆が黙り込む。

「!?待って。まだあきらめる必要はないわッ。仗助さえ助け出せれば、きつと大丈夫よ」

アンジェラが、スミレの手を取った。

「岩が崩れているのなら、仗助のスタンド、クレイジー・ダイヤモンドで元の状態に『直せば』いいのよッ」

「あッ……………」

スミレの顔が、みるみる明るくなった。

「そう、仗助なら、育朗クンの上に覆いかぶさっている岩を取り除けるわ……まだきつと間に合うわよ。育朗クンは助けられるわッ」

「そうね……そう、次は私が育朗を助ける番なのよ」

スミレがうなずいた。スミレの声は話すたびに力が宿り、そしてはずんでいった。

「よおし、じゃあそろそろ行くぞ。覚悟はいいな」

ポルナレフは、億泰、噴上、そしてスミレの肩をどやしつけた。

「おとりの役目は、お前たちに任せるからな。億泰、噴上、スミレ、気合入れろよおー……だがいいな。無理するなよ。ヤバくなったら、絶対に逃げる……………」

（俺の仲間の、かつてのコーコーセードモに負けるなよ……………」

ポルナレフは、もう一度三人の肩を力いっぱいドヤした。

（なんだか俺はコーコーサー達に弱いらしいな）

ポルナレフの脳裏では、かつて共に旅した『仲間』の面影が、三人の上にかぶっていた。

『彼』と『彼女』は、家族であった。

彼らは互いがまだ幼いころに出会い、そして同じ過酷な運命を共に過ごしてきた群れの一員だった。

周囲には彼らと同じ運命を背負った群れの仲間が他にも大勢いた。だが、『彼』にとって『彼女』が、『彼女』にとっては『彼』が、他と比較できない特別な存在であった。理由などない、それは、二人が幼い時からわかっていた事実だった。

二人は過酷な運命を共に甘受し、励ましあい、よりそって生きてきたのだ。

そして、二人の間に『子供』が生まれた。子供の笑い声、走り回る声……子供のすべてが、彼らの『灰色の生』を、色とりどりの美しい世界に変えた。

幸せだった。

だが、それももう終わりか。

『彼』は自分達の生命がもうすぐ終わることを知っていた。まだちよつぱり生きてはいる。だが、いつまで持たないだろう。

暗闇の中、少し体を動かすと、愛する『彼女』と、『息子』に触れる事が出来た。

『彼女』も『彼』同様息も絶え絶えだった。あの崩れ落ちる岩の下敷きになる『息子』をまもるために、二人は身を投げ出したのだ。だが二人ともまだ生きている。

『彼女』もまだ生きており、『彼』と『息子』を気遣っているのが感覚として伝わっていた。

『彼』はなんとかして『彼女』を力づけたいと願ったが、だが『彼』に出来る事はほとんど残されていないのは、良く理解していた。

——『息子』の息はだんだん弱くなり、その生命力の匂いが今にも消えそうになっていた。

——『彼』の全てを託すべき存在が、いま、消え去ろうとしていた。

もし、願いがかなうなら、自分が『息子』の怪我を引き受けられた

なら……

何とかして、自分のこの残された命の力を、自分に移植された“何か”の生命エネルギーの力を『息子』にあげる事が出来ないのか。『彼』は心の奥底から願った。『彼女』もまた、『彼』と同じ考えであることはわかっていた。自分達の命を我が『息子』へ……

ズルリ

そして、『彼』の思いに応えるような、奇跡が起こった。

ここは魔法の土地だったのか、この土地が、自分の生命力を吸い出し、そして『息子』の元へ流れていくのが解る。代わりに『息子』の傷が、痛みが『彼』に流れ込んでくる。

その痛みは望むところだ。その痛みは、『息子』を守っている実感を与えてくれるものだ。

ときおり意識が遠くなり、『彼』は自分の命が消えていくのを感じていた。だが、『彼』には恐怖はなかった。それは『息子』に生命力が戻るのを、命が助かるのを感じているからだ。彼が感じているのは、歓喜であった。

『彼』——バオー・ドッグ——が最後に感じたのは、心温まる『息子』と『彼女』の匂い、そして自分の体から『何か』がぬるりと出て行く感覚だった。

1999年11月9日

深夜 「A山近郊の廃墟」:

夜になった。

ポルナレフとアンジェラは、一言も口を聞かず、こつそりこつそりと動いた。ハンターやゾンビの目を逃れて物陰から物陰に身を隠しながら、進む。

幸いな事に、周囲には壊れたコンクリートブロックやら、繁茂した背の高い雑草やら、あちらこちらにあった。姿を隠す場所には事欠かなかった。

たつぷりと時間をかけ、話し合い通りに目指す廃墟へ到達したところで、ようやく二人は一息ついた。

「ポルナレフさん……右手の壁の後ろに、ハンターが一匹いるわ。でもその周りには誰もいないみたいですよ」

アンジェラが囁いた。アンジェラは右手に水をたたえたコップを持ち、コップの表面の波紋を見ている。

「そろそろですよ……ポルナレフさん」

「よしッ」

ポルナレフは、タイミングを計って、壁の向こうにチャリオッツを出現させた。

バシユンツ

シルバーチャリオッツは、本人の視界が無いところで、何かを見ることはできない。見えない状態で、壁の向こうの気配だけを頼りに、剣をふるった。

壁の向こうで、チャリオッツのレイピアが、何かを切り裂く感覚があった。

「手ごたえあつたぜ、殺ったか？」

アンジェラがコップの波紋を見てうなづく。

それを見て、ポルナレフは満足げにチャリオッツを収納した。

「スケーターボーイは、すでにあたりの探索を終えています……近くに何も敵はいないようです」

「そうか……じゃあ、行くか。俺が殺ったハンターが見つかる前に、仗助を探しだすぞ」

ポルナレフとアンジェラは、隠れていた壁から離れた。そして、目指す施設に向かって堂々と歩いて行った。

壁の裏には、先ほどポルナレフが倒したハンターの死体がびくびくと動いている。ハンターはポルナレフによって、一撃で首を刈り取られていた。恐ろしいまでの剣のさえた。

「さてと、どこから入るかね——そうだなあ、このあたりにすツカ」

ポルナレフはチャリオッツの剣で、建物の壁に小さな穴をあけた。その穴に、アンジェラのスタンド：スケーターボーイがすりと入り込んだ。建物の中を、偵察するのだ。

スケーターボーイが入り込んだ先は、暗い、狭い、廊下であった。

近くには、何もいないようだ。

ゆつくりとスケーターボーイが周囲を見回すと、廊下を折れた先に、扉があるのが見えた。

残念ながらスケーターボーイの力では、ドアを開けることもできない。だが空気取り入れ口から中の様子を除くと、奥は広い部屋になっており、なにやら動き回る人影が見えた。話し声も聞こえる。

「ああああ、あったかい血がほしいぜ。あのお方が探している娘この血を飲んだら、うんめえ——だらうなあ。あの小僧もだ」

「バカッ、黙れッ あの方々の耳に聞こえたら……」

「だがよお、あの小僧の変な頭を見てッと、ヒヒッ……ど・どうも、か、か、か齧りたくなんねーか？」

「ガガガガッ チゲーネエ……」

うげ……

アンジェラはゲツソリした。

扉の奥にいるのは、間違いなくゾンビだ、そして、たぶん仗助の事を話している……アンジェラはスタンドをひっこめ、建物の中で聞いたことをポルナレフに報告した。

「わかったわ、どこかはわからないけど、仗助はこの建物のどこかにいるみたい」

アンジェラは、ポルナレフに言った。

「それから、建物の中にゾンビがいるわ」

「わかった。ではさっさと侵入して、仗助を助けようか」

バシユツツ！

ポルナレフは今度は壁の穴を大きく切り取り、自ら建物の中に入っていた。

「そのゾンビは、どっちだ」

「……こつちです……気を付けてください」

「なるほど……」

ポルナレフはアンジェラの警告に耳も貸さず、無造作に建物を突き進んでいく。

そして、迷うことなく突き当りのドアを、ドカンと蹴り開けた。

ガアアンツ！

「な……なんだオメツ」

ブシュツ！

「ア……ア・ゴツ！」

チャリオツツは、そこにいたゾンビを問答無用で切り刻んだ。

「もう一匹は、どこにいやがる？」

「危ないツ！」

残ったゾンビは、部屋の物陰に隠れていた。

そのゾンビは、ちょうど自分に背を向けて探索しているポルナレフを背後から襲おうとしているツ！

「ポルナレフ先輩ツ！避けてくださいッ」

アンジェラはゾンビにむけて、波紋を帯びた飛び蹴りを放つ！

「XGyeeek！」

アンジェラの波紋をまともに食らったゾンビは、まるで熱湯をかけられた雪だるまのように、白い煙を上げて……溶けていった。

助かったぜ。

ポルナレフはアンジェラに親指を立てると、興味深げに侵入した部屋の様子を調べていった。

「ふん……ここはなんだ。管制室か何かかあ？」

二人が入った部屋は、円形をしていた。壁面には、たくさんのモニターや操作パネルなどがところ狭しと据え付けられている。

コンソールに積もった埃の厚みを見ると、あまり使われていないようだった。だが、まだ主要機器の電源は生きていた。

「これ、検視カメラのモニターかしら」

アンジェラが適当に選んだスイッチを切り替えると、目の前のモニターには外部の様子が次々と切り替わった。

「便利ねえ……あたりの様子がよくわかるわ」

アンジェラはモニターをぱちぱちと切り替えていき、やがて、目指すものを見つけた。

ジャン・ピエール・ポルナレフ その3

1999年11月9日 深夜 「A山近郊 T鋏山跡」:

「またまた連れて来たぜえ??っ」

森を抜けて噴上の『ハイウェイ・スター』が走ってくる。その後からはわらわらと ゾンビや、ハンター達が追いかけていた。

噴上は『ハイウェイ・スター』に血染めの シャツを羽織らせていた。

スタンドはスタンド使いにしか倒せない、それはゾンビとハンターの気を引くための目印だった。 シャツの血は噴上自らの血で、スミレが持っていたサバイバル・ナイフでチョツピリ自分の腕を切って絞り出したものだ。

ハイウェイ・スターに導かれたゾンビとハンターが、三人を見つけて歓声をあげた。

「Giyaaxaa!」

「Thicchi Chiiiiixtu!」

「Dowryy!」

意味不明の歓声を上げながら、ハイウェイ・スターが連れてきた怪物たちは億泰達めがけて走り寄ってくるッ!

「うわ……改めてこうやって見ると、気持ち悪いわあ、このバケモンッ!死にやがれッ!」

スミレが嫌悪感に顔をゆがめながら、ハンドガンを連射して、近くに寄ってきたハンターやゾンビの額に撃ち込んだ。

だが、どちらのクリーチャーも、倒れる仲間には見向きもせず、ぎらぎらした目で三人に向かって駆け寄ってくる。

「手筈通りに俺のハイウェイ・スターが怪物どもを引き付けた。億泰う、そのあとはお前の番だぜ」

「おうよ。俺が一匹残らず退治してやるぜえ〜」

億泰は、スタンド:ザ・ハンドをハンターの一匹に突っ込ませた。

ガオオンッ!

ザ・ハンドが右腕を一振りするたびに、ハンターの頭が無残にも削

り取られる。

「Giyaasi」

隣にいるゾンビが大声を上げ、億泰に向かって駆け寄ってきた。

だが、そのゾンビを、『ハイウェイ・スター』が狙い撃つッ

『ハイウェイ・スター』は非力さを補うために、石を両手に持つてそれを武器代わりに使っていた。噴上から離れた遠距離で、ハイウェイ・スターはゾンビの頭を破壊していく。

「フハハハ……さあ——、派手に暴れるぜえイツツ」

噴上は、『ハイウェイ・スター』を走らせた。

『ハイウェイ・スター』が走るたびに、その後ろをゾンビとハンターが追いかける。

時折足を止め、数体のゾンビを破壊しては、また動く。

さんざんゾンビを引つ掻き回したところで、後ろから億泰が襲い掛かるっ！

億泰のスタンド：『ザ・ハンド』が、ゾンビの体を削っていく！

「おううつ。このまま突っ切って、仗助のやつを助けだしてやるぜえくく」

億泰は、吠えた。

その億泰を少し離れた死角から襲おうとしたゾンビの頭が、吹っ飛ぶ。

スマレが、ゾンビの頭を狙撃したのだ。

「急ぎましょ……」

まだ硝煙の登る銃をおろし、スマレが言った。

「今、WitDのビジョンが見えたわ、ビジョンの意味は完全にはわからないけど、私は、なるべく早くポルナレフさん達に会う必要があるみたい……」

「うつす……そういう事なら、まかせてくださいよ」

それからどれだけ戦ったのか、いつしか三人は人っ子1人いない村に足を踏み入れていた。

その村に入ると、途切れなく噴上と億泰におそいかかってきた怪物たちが、ぴたりと動きを止めた。

ザザザツ—— 風が吹き、田んぼの後に生えた雑草を揺らした。

「()は？」

「……廃村のようね」

杜王町から北の方へ行くと、けっっこうこんな感じでドンドン村がなくなってるのよ。と、スミレが言った。

「私の故郷も、もう一緒に暮らしてるお爺さんとおばあさんの二人しかいないわ」

「そうなのか……でも、だれも住んでなくてよかつたぜ」

こんなバケモンがうろついているところに人が住んでいるところがあつたら『最悪』だったからな。

嘖上が言った。

「とつとと通り過ぎようぜ」

ガサガサガサ

三人は、雑草をかき分け、かき分け進む。

朽ち果て、崩れかかった古民家の庭も、元々道だったと思わしきところも、すべて雑草が生い茂っていた。

三人は知らない、この廃村は、昔、T町と言われ、今は廃坑となつてしまったT鉱山の鉱夫とその家族で栄えた村であった。一時期は大いに流行つたが、すぐにその鉱物を掘りつくしてしまい、設立から、わずか10年ほどで再び消え去ってしまった町であった。

「なあ……」

嘖上が、スミレに尋ねた。

「言いつらいんだが、育朗の体の事、あんた知ってるのか？」

「何言ってるの？知ってるわよ。寄生虫バオーに侵されてるんでしょ」

「いや……そうじゃねえ……いや、イヤ……そうだ。……それで、このままいくと……育朗が後何か月かで寄生虫バオーに体を喰らいつくされちまうんだ」

「……知ってるわよ」スミレが言った。

「あなたの予知はこの件について、何か言ってるのか？」

「いいえ……知らないわ。なんでだか知らないけど、ワタシの予知は、

育朗のことについては、ほとんど働かないの……」

スマイレが言った。悲しそうだ。

「なあ、いいのかよ、そんなんで……おりやあ——納得いかねえツ」
噴上は、なおも言った。

「だってよお、理不尽だろ。アイツ、そんな目に合っている奴じゃねーだろ」

「わかってるわよッ！」

スマイレが怒鳴った。

「いいわけないでしょ……でも、だからといってどうすればいいのよッッ！………いまの私にできる事は一つだけ、ワタシは……私だけはどんなことがあつたって育朗の横にいてあげるの」

「そうか……アンタ、強い奴だな」

「……強くなってるわよ」

「育朗はよお……黙っていたけど、……俺たちにはみせねー用にしていたけど、アイツはずっと『絶望』してやがったヨ」

そう言う二オイがしたんだ。噴上は、ぼそりと付け加えた。

「俺がこんなこと言う義理じゃあねーかもしれねえけど、アイツを、育朗のヤツを支えてやってくれよ」

「……もちろんよッ」

スマイレは、目蓋をこすった。

「ところで、何で怪物共、ここにやあ入ってコネーンダ？」

ずっと黙って二人の話を聞いていた億泰が、まったく違うことで首をひねった。

「そりゃあ、ここには、怪物達が怖がるようなもつとオツカネーものがあるんだろ」

フンツ と噴上が鼻を鳴らした。気が利かねー奴だ。

「気をつけましよう」

スマイレがいつもと変わらない風に言った。

と、噴上が足を止めた。

「待ちなあ……匂いがするぜエ。腐った匂いがよオ」

⌘ ⌘ ⌘ ⌘ ⌘ ⌘ ⌘ ⌘ ⌘ ⌘

「あら、随分ね……」

廃村の崩れかけた民家の影から姿を現したのは、おなじみネリビルと、新顔の黒人の大男だった。

「はぁーい 億泰、久しぶりねッ」

ネリビルが、億泰にウインクをして見せた。

「三人だけ……やってくれたわね……陽動に引っ掛かっちゃったわけかしら？」

「おいおい、俺にスケと戦えってか。よしてくれよ??っ」

嘖上が頭を振った。

「お前たちは、俺たちのコンビにやあかなわなないぜ。降参しろ」

「ご親切ね。好きになっちゃうかもオ……でも、そういうわけにはいかないのよ、ハンサム君。あんた達にこれ以上邪魔させるわけにはいかないからねえ??だから私はテイラーと一緒にあんた達と戦わなければならぬってわけ」

なんて悲劇的ッ ネリビルは笑った。

「せめて、あんたたちの血を吸って、私たちの仲間にしてあげるわよ」

「へい、色男よオ」

テイラーがふぎけた口調で言った。

「ネリビルと戦うのがいやなら、俺がお前の相手をしてやろうか?お前がちよつとでも俺の相手になれるだけの力があればなあ」

「……スマレ先輩よお、ここは俺たちに任せて先に行ってくれ」

億泰が小声で言った。

「頼むぜえ〜」

「……頼んだわよ、億泰、嘖上クン」

スマレは、蒼白な顔でうなずいた。

「あんなクズに負けないわよね」

「モチロンだぜえ〜ッ」

「まっかせなあ!」『オリヤアアアアッ!』

ザ・ハンドとハイウェイ・スターが、同時に突っ込む。

「先手必勝だツボケえツツ！」

「あら怖い」

しかし、ネリビルはハンター達にジャンプさせた。ハンターは、億泰を飛び越えて噴上に飛び掛かった。

「でも、まずはあんたよ、色男君♡」

「おおおおお、来いやあ！」

噴上は吠えた。

1999年11月10日 未明 「A山近郊の廃墟」：

ポルナレフがドアを開けると……そこには東方仗助が待っていた。

仗助はトレードマークの髪形を変え、金髪に染めたぼさぼさの頭にしていた。

「よお、元気で安心したぜ」

仗助は二人にむかって、ぼそりと言った。

その部屋は、元々は倉庫だったのだろう。打ちつばなしのコンクリート床に、ガランとした空間が広がっていた。部屋の中には赤錆の浮いたコンテナが転がり、あちこちにスパナやねじ回し、ボルトナット等が雑多に散らばっていた。部屋の壁には、鉄製の棚が括り付けてある。

ポルナレフ達が入ってきた扉の反対側には、少し開きかかったシャッターがついていた。

そのシャッターの隙間から月明かりが差し込み、仗助の影を長く伸ばしていた。

「仗助……無事なのか？」

「ああ、おかげで大分調子がいいツスよお??」

「どうやってここまで潜入したの？」

「……ああ、なんとなくここに来ればアンタたちに合える気がしてたんスよ」

仗助の態度が何かおかしい。大体、大事にしていたあの髪型を変えるなんて……本来ならあり得ないことだ。

アンジエラは嫌な予感を押し殺し、努めて明るく答えた。

「そツか。無事で良かった。ホントに心配したのよ。じゃあ急いで、ここを脱出しましょ。ここにはもう用は無いし、みんな待ってるわよ」

「……いや、悪いがそりゃあ出来ね——ツス」

仗助は悲しそうに首を振った。

「……仗助くん……前の変な髪形はやめたのか？」

仗助のもとに近寄ろうとするアンジエラを、ポルナレフが抑え、尋ねた。

「ちよっ……ポルナレフさん……どうして」

アンジエラが真っ青になった。

普段は温厚な仗助だが、髪形をけなされると 途端に人格が変わり、誰彼かまわず殴りかかる超危険人物になるのだ。

だが……

「いやー、そろそろ髪形を変えてみようかなって思ってたね??」

仗助がおどけてみせた。

「やつぱり、薄々変だと思ってたんすよ……それで、あの人より『もつと尊敬できる人』の髪形を真似してみたんですけど、なかなかいいでしょう」

コ〃コ〃コ〃コ〃コ〃コ〃コ〃コ〃コ〃コ〃

「……DIO……か」

「そうっす」

仗助は、クレイジー・ダイヤモンドを出現させた。

「すみませんが、二人にはちよつと静かになってもらいます」

「仗助……お前も操られちゃったのか」

ポルナレフは顔をしかめた。

(ジョースターさんのお子さんだ。怪我をさせたくないが……仗助クンのスタンド：クレイジー・ダイヤモンドは手加減できる相手じゃない。悪いが、いきなりとっておきを出すぜ)

「チャリオッツ & エメラルドソードオツ！」

シルバーチャリオッツは、右手に銀色に輝くレイピアを、左手に『緑

色に光る日本刀』のような刀を出現させた。

「へえ??カッケースタンドッすね。」

さすが、あの人が『認めた』スタンド使いっすね。

仗助が言った。

「レイピアと二ホントウの二刀流だぜ」

ポルナレフは、仗助を睨みつけた。

「俺たちを静かにさせるといったな。やれるもんならやってみろ。実力だな。だが、しよぼい攻撃だったら……おめー、チャリオッツに切り刻まれるぜ」

「やめて……」

アンジェラがポルナレフのスタンドを見て、震え上がった。

「ポルナレフさんのスタンドで斬ったら、仗助が死んじゃうよ……」

「アンジェラあ??大丈夫だ」

仗助がにやりと笑った。

「ポルナレフさんよ——オ。あなたのスタンド、確かにカッケーっす……だけど、そんなストロイ刀なんかで、この俺の、クレイジー・ダイヤモンドのラッシュをとらえられると思ったら、大間違いだぜえー」

「行くぞ……仗助。せめてもの情けだ、痛みは与えん！」

ビシンッ! シャシャッシャッ!

ポルナレフは、チャリオッツに剣を振らせた。ピツとレイピアの剣先を、仗助に向ける。左手に持った二ホントウは、肩に担いている。

「こえーこえー」

仗助がおどけた瞬間、チャリオッツが飛び込んだ。レイピアを、突き出すッ。

だがチャリオッツの突きは、ことごとくかわされた。

そして、チャリオッツが剣を引き戻すタイミングを突いて、クレイジー・ダイヤモンドが突進、その拳がポルナレフをおそうッ

バババッ!

ブウンッ!

「クッ！」

今度は、クレイジー・ダイヤモンドのジヤブを、チャリオッツがギリギリダツキングでかわした。

そこからは、一進一退の攻防が始まった。

幾度も突き出されるレイピアをかくぐり、はねのけ、クレイジー・ダイヤモンドはチャリオッツの懐に入ろうとした。

一方、そうはさせじとチャリオッツは素早く動き、直線的なクレイジー・ダイヤモンドの突進をさばき続けた。

……チャリオッツとクレイジー・ダイヤモンドは、互いにクリーンヒットを与えぬまま何度も交錯した。

バミンツ！

二人はいったん距離を取り、互いの隙を探った。

「さすが……承太郎さんの元相棒つすね。あんた強ええわ」

(クレイジー・ダイヤモンド……さすがに強い。……だが、こんなものか？ 汎用性の高い『直す』能力に加え、基本性能が高い正統派のスタンドと聞いているが……)

「もういっちょよくっスー！」『ドラララッ！』

再び突っ込んできたクレイジー・ダイヤモンドのラツシュをチャリオッツがさばく。

だが、ポルナレフは、その攻撃が腑に落ちず、首をかしげていた。

(仗助のスタンド：クレイジー・ダイヤモンド……情報ではスピードと正確性が若干落ちるものの承太郎のスタープラチナと同等以上のパワーを持つはずだ……しかし、こりゃあ……)

考え込むポルナレフに隙を見つけ、クレイジー・ダイヤモンドが右こぶしを上段から振り下ろす。

だがチャリオッツはそれも難なくよけて、体勢が崩れたクレイジー・ダイヤモンドを蹴飛ばした。

(……確かに早い……だが、普通だ。こんなモンじゃ、俺のチャリオッツや、承太郎のスター・プラチナに比べりゃあ、二枚落ちの実力だぜえ？)

「おい……それがお前の本気か……承太郎の話じゃあ、お前もつとヤ

ル奴だと聞いてるぜ」

仗助にむかって、ポルナレフが挑発した。

「本気だせよ、東方仗助。今のままじゃ、勝負にもならねーぜ」

「……さすがに判りますか?」

仗助が頭をかいいた。

「実は最近ちよつと調子悪いんす。なんかクレイジー・ダイヤモンドのキレがなくなってるって感じなんすよねー……でも、俺の『直す』能力はさえまくりっすけどね」

ビシユツ

「何いッ?」

突然ポルナレフの足に、鋭い痛みが走った。

見ると、ポルナレフの足元を棘が刺さっている。

バシユンツ!

ミルミルうちに、棘は大きくなった。そして、棘はポルナレフの足を貫通して天井まで飛んで行った。

「先に床にむかって銃弾を撃ち込んだいたッす。それを今『直した』ってわけッす」

仗助が不敵な笑みを浮かべた。

「足を痛めましたね。どんどんいくっすよ……『ドラアアアアアアアア!!』」

「甘いぜ、エメラルドソードッ」

チャリオッツの左手のニホントウが、クレイジー・ダイヤモンドの左足を薙ぎに行くッ!

クレイジー・ダイヤモンドは素早くジャンプして、ニホントウの一閃を避ける。

「フン。また体勢が崩れたぜ」

ポルナレフが勝ち誇った。

「俺の、勝ちだ」

「うおおおお。クソッ! そんなに素早くて正確に動けるスタンドなのに、そんなに射程が長いなんて知らなかったっすよ……」

空中に飛び上がったクレイジー・ダイヤモンドの左肩に レイピア

ポルナレフはチャリオッツの左手の二ホントウを、仗助の胸に突き刺しているッ!

だが、不思議なことに仗助は特段痛みを覚えた様子もなく、元氣そうにしていた。

「こっつ……こりやあ???」

「仗助え、お前は動くなよ……我が 新しい能力 エメラルドソードは望むときに非実体化することが出来る……お前が少しでも動いたら、エメラルドソードを実体化させ心臓を斬る……」

「……いやあ……さすが承太郎さんの相棒つすね……どうやって俺のラッシュをよけたんですか」

「簡単だぜ、カツチュウを外した。そうすれば倍の速度で動けるって訳だ。 オイツ!! アンジェエラ!」

「ハイッ」

「仗助を、波紋で気絶させろッ」

「わかりましたあ!」

アンジェエラが涙をグイツと拭いて、スケーター・ボーイを出現させた。

確かに『波紋』を喰らわせれば、仗助を正気に返らせられるかもしれない。

「いや、いま眠らせられるわけには、いかないつすね」

と、ポルナレフの体がグイツと後ろに引っぱられ、同時に仗助が天井に向かって上昇した。

「うおっ……」

ポルナレフが振り返って背後を見るッ。

すると、ポルナレフが引つ張られている先に、杭が突き出ているのが見えた。

「チャリオッツ!」

カリンッ!

あわててポルナレフは自分に突き刺さろうとしている杭を、シルバー・チャリオッツに切り落とさせた。

「……くっ……いつの間に、俺の体にこの杭の破片を仕込んで立つて

わけか……そして、仗助の奴はあのプラットフォームの部品を一つ持って戦ってたってわけだな。それを直した」

「そうっす。仕込ませてもらってました」

天井近くのプラットフォームに到達した仗助が、下を見て笑った。その時だ。

「ポルナレフさん、後ろッ」

背後に迫る何かに気が付いたアンジェラが、叫んだ。

「すぐ逃げてえッ」

ボガアアアアンツ!!

突然、ポルナレフの背後が爆発した。

チャリオッツは咄嗟に周囲の空気を切り裂き、爆発を弾き返すッ。

「!?なんだと……」

「いやあ……さすがっすね……オエコモバの爆弾でも仕留められないとはねえ」

仗助がプラットフォームから飛び降りた。

爆炎の中から、長身の男が姿を現した。

男の肩には、鴉のような外観のスタンドが止まっている。

「紹介しますよ、こいつはエルネスト……スタンドは触ったものを爆弾に変える能力。オエコモバっす」

仗助が言った。

「そうかよッ」

ポルナレフは、よろよろと立ちあがった。

ディオ・ブランドーとDIO その1

かつてディオ・ブランドーと言う男がいた。

彼は今から100年以上昔、19世紀末のイギリス下層階級生まれの男であった。彼は、強く数奇な運勢、高い知性と並外れた意思の力、そして漆黒の覚悟を持っていた。

そして、ジヨナサン・ジョースターと言う男がいた。

彼はディオと同じ年代にイギリスの地方貴族（ジェントル）階級に生まれた男であった。彼は強烈な魂の爆発力、素直な心と頑強な肉体、そして黄金の精神を持っていた。

……そして、彼は『ジョジョ』と呼ばれていた。

対照的な性格・生い立ちを持つ二人の運命は混ざり合い、二人は互いを兄弟として育った。

そしてそれはまだ二人が数奇な運命に巻き込まれる前、寄宿舎での学生生活を送っていたときの事だ。彼らの父親のジョージ・ジョースターが、休暇中の二人をエジプトに連れて行ったことがあった。

二人は、そこで『奇妙な冒険』に巻き込まれた。

「は——ッはあ——ッ……ジョースター卿ありがとうございます………ジョジョ……おッ……君が助けてくれたのか」

「……いや、君がサソリを防いでくれなかったら、僕たちは逃げられなかった……ありがとう、……ディオ」

「気合い入れるよッジョッジョオオオオッ」

「……キミこそ……ディオッ！」

その『奇妙な冒険』の間、エジプトの地を歩き回る間に、二人は『自分が生涯において目指すべき何か』を見つけた。

1人は空を見上げて星をみて、もう1人は地面の泥を見て——
目標を——見つけたのだ。

「これは？そうか、興味深いな……フン。だが、今の俺には手に入れるべき術もない……だが、いつかきつと、すべてを手に入れた後には……」

「太古の人々は何を思い、何を信じ、何を夢見て生きていたんだろう

……ああ、それを学ぶことが出来れば、僕たちはもつと先に行けるのかな……」

だがその後、二人の運命は変転する。

ディオは自らのめぐらした陰謀が仇となり、養父に毒をもったカドでついに追い詰められた。だが彼はその時、義理の父親の血と石仮面の力で——人間を辞めたのだッ！

「俺は人間をやめるぞー！ジョジョーッ！！ 俺は人間を超越するッ！
ジョジョおまえの血でだアーッ！！」

ディオが人間を止めた後、兄弟は三度に渡って相戦い……そして互いに大西洋に沈んでいった。

「いくぞー！ジョジョー！そしてようこそ！我が永遠の肉体よ！」

「ディオ……君のいうようにぼくらはやはり ふたりでひとりだったのかもしれないな、奇妙な友情すら感じるよ……そして今、ふたりの運命は完全にひとつとなった……」

「ジョジョ……!?……いつ……死んでいる……！」



二人の物語は、1889年の大西洋で終わったはずだった。

だが時がたち、二人の新たな物語が始まる。

不死身の吸血鬼となっていたディオが、ジョジョの肉体を奪い、100年の時を超えて復活したのだ。

復活したDIOは世界を見て周り、この時代に対する知識を増やして行った。DIOにとって、100年の時を経たその世界は驚異だった。

永遠をいかにして生きるべきか？彼は少年時代に見つけた『目標』を今こそ手に入れるためエジプトに渡り、そこで新たな力：スタンドを得て旅だった。

「ふん、少年よ……このDIOと取引をしようって言うのか」

「俺はアンタが誰モノなのか知らねえ、き……興味もねえ……だが、この《矢》を買ってほしい……あんたならこの値打ちがわかると聞いた！」

「貴様ッ！ 誰に向かって話しているかわかっておるのか、馬鹿者

がッ!!」

「なッ……体が動かんッ……キング・クリムゾンッ時間を吹き飛ばせッ……馬鹿な……時……時間を吹き飛ばしたのにまだ体が動かん！」

「ヒヤヒヤヒヤッ……貴様がどんな能力だろうが、この《ジャスティス》にかなうものかッ！D I O様以外に私の能力を破れるものなぞおらんわッ！」

（くっ……やられるッ……こんな所で、『悪魔』と呼ばれたこの俺がッまさか、まさかッ！）

「フフフ……気に入ったぞ、小僧。エンヤ婆、構わん。この少年に金を払ってやれ」

「あッ……ありがてえ……」



D I Oは自分と同じスタンド使いを生み出す『弓』と『矢』を持って世界中を回る。

イギリスを……

「フン……跡形もないな……兵どもが夢のあと……という訳か」

アメリカを……

「自動車か……このD I Oが生まれた時代は、馬車しか走っていないかった」

「太陽アレルギーだという事を信じてくれてありがとう。いつかわたしに合いたいと思ったらこの矢に気持ちを念じて呼んでみてくれ……心に留めておいてくれるだけでいい」

「D I Oに会いたい……人はなぜ出会うのか　きっと彼ならその答えを知っている」

そして日本を……

「咳、吉廣、貴様らの仕事は日本である「組織」に接触することだ」「その『組織』とは？」

「正確には、元『組織』らしい。フン……その組織の研究者が、私の『体質』に興味を持っているかもしれんだ。見過ごしてはおけないからな」

「わかりました」

「……チツ……何でただのボロツチー写真野郎と、ツルムまにやいかんのかよ」

「その組織はアメリカでも活動しているらしい……お前たちが動き出したことは、『神父』にも伝えておいてくれ。アメリカ側の調査は『彼』に任せようと思ってるからな」

そしてDIOは気づく、自分のスタンドの持つ強大な力に。そして、若き自分がエジプトの地で見出しかけたもの、真に自分が目指していたもの……天国に行く方法に。

彼は天国に行く準備に取り掛かり、そのために再び漆黒の意思で、ありとあらゆる邪魔なモノを無慈悲に踏み潰していった。

「幸福とは、無敵の肉体や、大金を持つ事や、人の頂点に立つ事では得られないというのはわかってる。真の勝利者とは、『天国』を見た者の事だ。どんな犠牲を払っても、わたしはそこへ行く」

「……『君は……普通の人間にはない特別な能力を持っているそうだね……ひとつ……それを私に見せてくれるとうれしいのだが』……ヤツを本当に恐ろしいと思っただのはその時だった ヤツが話しかけてくる言葉はなんと心が……やすらぐんだ」

「わたしの《ザ・ワールド》をDISCにして奪えば君は王になれるやれよ」

「そんな事は考えたこともない……君は王の中の王だ……君がどこに行きつくのか？ 僕はそれについて行きたい……」



だが、DIOが『天国』へ行くためにおかしたその非道は、結果としてDIOの元へ自分の宿敵、ジョースターの家系を呼び寄せる事になった。

100年前の世界で生涯を終えたジョナサンは、その血を、その黄金の精神を、魂の爆発力を、彼の子孫に確かに受け継がせていたのだ。「このくそつたれ野郎の首から下は わしの祖父ジョナサン・ジョースターの肉体をのつとつたものなのじゃああ——あああ!!」

「やつらは』 この俺の存在に気付いている***ジョナサンの

一族は……排除せねば……………」

「D I O様、大丈夫ですか？御けがは……さあ、治療してください。私の血をお吸いになって」

「デイビーナ……君は、私にとって安らぎだ」

「D I O様」

「君は私にとって代わりのいない人間だ……信頼しているよ。私の体はまだ少し本調子ではないんだ。だから方が一の時は頼んだよ。信じている、デイビーナよ……」

「もちろんです、D I Oさま、私のすべては貴方のためにあるのですから」

そして、再びエジプトの地で、D I Oとジョナサン、二人の運命は再び交わる。

「人間は誰でも不安や恐怖を克服して安心を得るために生きる……お前は優れたスタンド使いだ……殺すのは惜しい……私に永遠に使えないか？永遠の安心感を与えてやろう」

「初めて会うのに、ずっと昔から知っている男……そうわしはずっと知っていた……懐かしい相手ではない。………わしらジョースターの血はこいつといつか会う事を知っていた」

「これで………ジョースターの血統もようやく途切れてしまうと言うわけだな わが運命に現れた宿敵どもよ さらばだ」



そしてD I Oは《ジョースターの血統と引き継がれる黄金の精神》にまたしても敗れた。破れた彼は、これまでの人生で他人から奪ったものをすべて返し、塵となった。

「じじいは……決して逆上するなど言った……しかし……それは………無理つてもんだッ！こんなことを見せられて、頭に来ねえヤツはいねえッ！」

「クツクツクツ 最終ラウンドだ！ いくぞッ！***WRYYYYYYYYY——ッ」

「てめーの敗因はたったひとつだぜ……D I O…… たったひとつの単純な答えだ……『てめーはおれを怒らせた』」

だが、DIOは本当にこの世から消滅したのだろうか？

「あああDIO様……ええ、分かっております。今がその……万が一の時なのですね」



1999年11月10日 明け方 「A山近郊の廃墟」:

無事に廃墟に潜入したスマレは、恐る恐る目の前のドア——があった跡——をくぐった。ドアは、先ほど、突然スマレの目の前で吹っ飛んでいた。

ドアの跡をくぐり、建物の中に入ると、そこには全身ボロボロのポルナレフと、同じく左肩から血を流している仗助とが、対峙していた。アンジエラが、部屋の隅につつぶしていた。

仗助の隣には、二人の男が立っている。

二人の男の内1人は、むき苦しい口ひげを蓄えた小柄で小太りのインド人だ。その男からは恐怖を感じなかった。

だが、もう1人の派手な格好をした若い男、その男からは、圧倒的な恐怖の匂いが発散されていた。

コ〃 コ〃 コ〃 コ〃 コ〃 コ〃 コ〃 コ〃

「これは、これは……君を探していたよ」

派手な格好の男が、スマレを見てにっこり笑った。

「予知の少女よ、やっと会えたね」

声を聴いて、スマレはその男が誰だか理解した。

この男はエルネストだ。

あの時、東方仗助に邪悪な『何か』を植え付けた男だ。

「仗助が、肉の芽に……」

アンジエラが言った。

「逃げて……スマレ。逃げて、億泰君と噴上を連れてきて……」

「!? わかったわ」

スマレは我に返り、部屋から飛び出そうと振り返った。

だがそのスマレの手を、エルネストが捕まえた。

ト ト ト ト ト ト ト ト ト ト

「そうはさせないよ。それに、私は君の能力が欲しいんだ。スマイレ、君の能力を私に役立ててくれないかい？」

後悔はさせない。代わりに永遠の安心をやろう。

「なに……貴方……誰なの？」

「君が探し求めている『彼』にも、『安心』をやろう」

スマイレの問いに答えず、エルネストは話し続けた。

この男の声を聴いていると、すうっと『この男の言う通りにしたい』と言う欲求が沸き起こってくるのは、どうしてなのか……

「なに、『君たちが恐れていること』が何か、私は知ってるよ……君たちが不安を感じるのも無理はない。今迄辛かったろう……わかるよ。かつての私も、君達と同じような苦しみを感じていたからね。だが、だからこそ、私なら君たちを救える」

エルネストは手を伸ばした。

「君達に永遠の幸せを約束しよう……君達にはその権利がある。ちよつと、私に協力してくれるだけで、その権利が手に入る」

その男の微笑みに、スマイレは何故か胸が締めつけられた。男がこちらを見るたび、頭がくらくらとしてくる……

コ〃コ〃コ〃コ〃コ〃コ〃コ〃コ〃コ〃コ〃

「頼む、手荒なことはさせないでくれ、マドモアゼル」

エルネストは、少しぼうつとしてしているスマイレの腕を『優しく』とつた。

「ハッ……離してクソオヤジツ！やり方が汚いのよツ。だいたい何んだって言うの——？わ……ワタシに何をシロって……イ、ウノ……？」

スマイレの抗議は、エルネストに見つめられているうちに、なぜか勢いを失い、尻つぼみになった。

「スマナイが君の能力をくれないか……実は、ある男に君のその素晴らしい《能力》を渡す約束をしまっけていてね」

「な……何ですってえ……？」

「私にも良く理解できないが、彼が言うには、『絶頂に居続けるために、君の力が必要なのだそうだ……』」

エルネストは、優しい口調で言った。

「確かに、君の『力』は素晴らしい……」

「あ、あああ……」

「だが、私には、君のその力は、彼には『過ぎたる力』だと思っただがね……自分の器を超える力を手に入れたとき、その力はいとも簡単に、かの人にとってのエピタフ（墓標）となる……そう思っているんだがね」

だが、契約は契約。ビジネスはビジネスだからね……と、エルネストは優しそうな口調でつぶけた。そして次の瞬間、スマイレの額をギリギリと締め上げた。

エルネストは、そのほっそりとした姿からは想像もつかないほどの膂力で、スマイレの体を左手一本で高く、差し上げた。

「まだ、DISCが出来きつてはいないようだが、無理やり取らせてもらうぞッ」

「クッ…… あ、あああ!!」

宙ぶりにされたスマイレが、悲鳴を上げた。

と、エルネストがスマイレをつかんでいた手を放し、ぱつと飛びのいた。

パシユツ!

エルネストが飛びのいた直後、その空間をシルバーチャリオツツが切り裂いた。

ポルナレフは、満身創痕の体から力を振り絞り、エルネストに相対した。

「貴様ッ! その薄汚い手をスマイレから離しやがれッ」

「ポルナレフ、またしても邪魔するかッ!」

エルネストが、スタンドを出した。

「だが無駄無駄無駄ッ! 跡形なく消し去ってくれようッ!」

その時

「ちよつと待つツスよー、エルネスト」

と、東方仗助が、天井から飛び降りてきた。

「ポルナレフのオッサンは、俺が仕留めるっす……アンタは引っ込んでくれ」

「何だと……」

エルネストが仗助を睨みつけた。だが仗助も一步も引かず、逆にエルネストを睨み返した。

コ〃 コ〃 コ〃 コ〃 コ〃 コ〃 コ〃 コ〃

「わかった……お前に任せよう」

フツと、エルネストが笑った。まるで風船から空気を抜くかのように緊張を解き、スタンドをひっこめた。

「だが……わかってるな、仗助」

「……ああ」

仗助が自らのスタンド：クレイジー・ダイヤモンドを出現させた。

『天国』へみんなを連れていくために、俺が何をしなければならぬか、よオ——く理解してるツすよ」

「……やってみろ、一対一だろうが、二対一だろうが、それとも三対一だろうが、同じことよ！」

ポルナレフは、エルネストと仗助に、スタンドのレイピアとニホントウを、それぞれ突きつけた。

「かかってコイツ！」

「グレートツ。行くつすよオーツ。ポルナレフさん」

仗助が、凄惨な、だがどこことなく悲しげな笑みを見せた。

ディオ・ブランドーとDIO その2

ギューイーンッ!

「仗助え、もうやめてっ」

そこに、アンジェラが突進してきた。

スケーター・ボーイの能力で、靴につけた車輪をフル回転させ、仗助めがけて加速していくッ。

それは、人間とは思えないほどの素早さだ。

その隙に、スマレがポルナレフに駆け寄り、よろよろとしているポルナレフの肩を支えた。

「仙道回転蹴りッ!」

アンジェラが、波紋を込めた回し蹴りを放つッ!

だが、仗助のクレイジー・ダイヤモンドは、アンジェラの回し蹴りを難なく防いでいた。

『ドラッ!』

クレイジー・ダイヤモンドの力を利用し、アンジェラはいったん引き下がった。

懐からトンファアを取り出し、そしてひるむことなく仗助の懐に飛び込む。

『ドラッ!』

「!?くうッ……」

今度は、圧倒的なパワーのクレイジー・ダイヤモンドの蹴りを、アンジェラがかわした。

身をかわしざまに、波紋を込めたトンファアの連撃を撃ち込む。

「トンファアー波紋連撃イ——ッ!」

カッ!カッ!カッ

だが、トンファアの連撃も届かない。全て、クレイジー・ダイヤモンドの拳に撃ち落されてしまったのだ。

アンジェラはムキになって連撃を撃ち込み続けているすきに、仗助本体に足首をつかまれた。

「無駄ッス!」

仗助はアンジエラの足首を持ち上げた。

『ドラアッ！』

宙づりになったアンジエラは、仗助のスタンドに放り投げられるツ

「キヤアッ」

だが、アンジエラは空中で姿勢を変え、ダメージなくきれいに着地した。

「さすが仗助……強いッ！」

「クレイジー・ダイヤモンド、あの方のスタンドにどことなく外見が似ているな……そのパワーもだ」

(やはり、あの方の『肉体』と強いつながりがあるからか?)

エルネストが感想を漏らした。

仗助は、ペツと唾を地面に吐きつけた。

「アンジエラよお——出来ればお前とは戦いたくねー」

降参してくれ。

「だめよ仗助、そうはいかないわ」

アンジエラは、再びスケーター・ボーイで突進する。

「私がアンタを止めるッ！」

「よせえ——ッ、これ以上は手加減出来ねえ——！」

仗助が辛そうに言った。

「!? ジョウスケ、お前がやりづらいのであれば、私が殺ろうツツ」

エルネストが言った。

スタンド：オエコモバがジャケットのボタンを引きちぎり、アン

ジエラに向かってばらまいた。

「ボタンを爆弾に変えた……さらばだ」

「馬鹿野郎ッ！ エルネストッ、てめー何てことしやるッ」

仗助がエルネストを突き飛ばし、爆弾を掴もうと手を伸ばした……だが、届かないッ。

「こんなもの——」

アンジエラがスタンド：スケーター・ボーイの『車輪』の力で急回転し、空を舞った。

ドガアア——ン!

アンジエラの背後でボタン爆弾が爆発し、爆風がアンジエラを仗助たちに向かって押し出した。

「コオオオオオオオ……」

(そうよ、波紋を一撃でも入れれば、仗助を気絶させられるッ)

「アンジエラアッ!」

仗助が、クレイジー・ダイヤモンドでアンジエラを殴りつける!

ガスッ……

(クッ!こすただけでもモノスゴイ威力だわ、でも、これなら当てられるッ)

アンジエラはギリギリ、クレイジー・ダイヤモンドの初撃をかわすッ。

「行くわよ。スタンド越しの波紋ッ!!ウルトラヴァイオレット・オーバードライ……ッ」

そのとき、横合いから飛び込んできたエルネストが、アンジエラの波紋を込めた一撃をかわして、生身で体当たりした。

「なっ!?!」

「ほらッ」

吹っ飛ばすアンジエラを、クレイジーダイヤモンドが追撃する。

「しまったっ」

(クレイジー・ダイヤモンドのラッシュユが来る……)

体を丸めて防御姿勢を取ったアンジエラに、クレイジーダイヤモンドが手に持った何かを投げつけた。

すると……次の瞬間、アンジエラは網の中につかまり、天井裏に吊り下げられていた。

すぐに、スマイレも全身を拘束された格好で、アンジエラの隣に吊り下げられた……

スマイレとアンジエラは、網の中で必死に暴れた。だが網は丈夫で、びくともしなかった。

「しまった……」

残るはポルナレフ1人。

「クツ……二人とも今解放してやる。待っている」

ポルナレフは、天井から吊るされた二人に向かって、声をかけた。だがそのとき、ポルナレフの足元が突然膨れ上がった。

「うっ……」

バランスを崩したポルナレフに仗助が投げた網が飛び……結局、あっけなくポルナレフは拘束されてしまった。

「チツ……しまったゼツ。ガツチリ捕まえられちゃった。動けねーッ」

「わっ……私もです。何もできないッ」

アンジエラは、網に『波紋』を流してみても、力なく首を振った。

『波紋』のエネルギーはすべて床に散らされ、まったく効果を上げられなかったのだ。

「暴れても無駄デス。下手に動こうとすれば、体を痛めますよ」

仗助の隣にいた口ひげの謎のインド人が、ユーモラスに首を左右に振りながらポルナレフとスマイレ、アンジエラの前に立った。

「プライマル・スクリーム！」

インド人がそう叫ぶと、三人を囲んでいた床がぐぐつと盛り上がった。

そして三人を、上半身だけを残した状態で、さらにガツチリと拘束した。

1999年11月10日 未明 「A山近郊 T鉾山跡」：
プツツ

吐き出した唾には、血と折れた歯が混ざっていた。

色々な処が腫れあがって上手く口もあけられないし、目蓋も良く開かず、敵の姿さえよく見えない。

（俺は、いったいこんな所で何をしてるんだ。もう寝ちまおう……：そ
うだ。元々俺にはカンケーない話じゃあねーか）

一瞬、意識が飛びかけた。思わず目をつぶった一瞬、残してきたス

ケたちの顔が浮かぶ。

（イヤ、まだ寝るわけにはいかねー。そうだ、俺がここで倒れたら、奴らは杜王町も襲うに決まっている。そうはさせねー、俺のスケには手を出させねー）

噴上は再び気合を込め、目の前の敵を睨みつけた。

「あらら、色男が台無しねえ」

ネリビルが嘲笑った。

少しもつたいなかつたかしら？

「ぬかせーこのドブス」

噴上はガクガクする足を抑えて、大見得をきった。

だが、それが全くのハツタリである事は、自分でも良く分かっていた。た。

実のところ、噴上は気を失う寸前の処まで追い詰められていたのだ。

今までにここまでやられた事は2回しかない。

一度目は、珍走団の抗争上、止む無く相手の特攻隊長とステゴロのタイマンを張った時だ。奴は強かったが、何とか踏ん張って引き分けに持ち込むことが出来た。

もう一度は、東方仗助とスタンドで 遣り合った時だ。その時は噴上はボコボコに負けた。そう、完膚なきまでに。

だが、そのどちらの時も、少なくとも『殺し合い』ではなかった。今回の相手は確実に噴上の命を狙ってきている。 まともに一撃を受けたら、それで終わりなのだ。

「G i a a a a a !」

ジャンプから振り下ろされるハンターのカギ爪が、噴上をおそうツ
!

「おりゃあああッー！」

噴上は、カギ爪をハイウエイ・スターで防御した。

だがハイウエイ・スターは、近接戦闘向きのスタンドではない。

ハンターの物理的なパワーを支えきれず、ハイウエイ・スターが膝をついた。

噴上も、スタンドのフィードバックを受けて両膝を地面につく。強烈な圧力に、噴上の肉が、骨が、関節が悲鳴を上げた。

だが噴上には、それでもまだ反撃の余力が残っていた。

『おりゃああつ!』

ハイウエイ・スターは、その手に持っていたナイフを、ハンターの脳天に叩きつけた。

「C y a a a a a a !」

悲鳴を上げて、ハンターは崩れ落ちた。

だが、ハンターに続けて、ネリビル自身が飛び込んできた。

「非力なスタンドで頑張るじゃないッ。でも、これならどう?」

ネリビルは、楽しくてたまらないとでもいうような口調でいい、噴上を殴りつけた。

ゾンビの強烈な拳が、噴上を襲うッ!

「くそッ」

防御のために、噴上は慌ててハイウエイ・スターを呼び戻した。

だが、間に合わないッ!

「ぐおお!!」

かろうじて直撃は避けたものの、自らをゾンビと化したネリビルの拳は強烈だった。

かすただけなのに、その鉄の拳は噴上にダメージを与え、吹き飛ばした。

「あら、無駄に頑張るジャナイ……弱いくせに」

ネリビルは、ペロリと下口唇を舐めた。

その唇から、尖った牙が覗いた。

「あなたの血を飲むのが楽しみ。ドンドン行くわよー」

ネリビルは、ジャブを打ち込んだ。噴上をなぶるかのような、手打ちのパンチだ。だが、その軽い一撃でさえ、侮れない。

「ち、チクショウ」

悔しいが確かにヤバイぜ。

ハイウエイ・スターの力で、噴上は必死にネリビルの攻撃をさばき続けた。

一発でもまともに喰らったら、終わりなのだ。

ゾンビであるネリビルの攻撃は、重く、早かった。

徐々に嘖上は押され、押し込まれていった。

「降参しなさい、色男クン——そうすれば、せめてあんまり痛くない様に殺してあげる。むしろ気持よく逝けるかもよ♡」

「なっ、ナメヤガツてよお——」

嘖上は怒りに、ブルブルと震えた。

「か、か、返り討ちに、してやるぜ」

「フフフツ」

ネリビルが頭に手をやってセクシーポーズをとり、嘖上を見下した。

「そうよ、そうよねエ……出し惜しみはいけないわよねえ……そうだっ、あんたに……とううっておき を見せてあげるわアン」

ネリビルの肩にスタンド：カントリー・グラマーが出現した。

カントリー・グラマーが耳障りな金切り声をあげた。

その金切り声が、止んだ時だ。

カサ ガサカサツ カサガサガサガサツ

何かが近づいてくる音がした。

廃村にはこびる放棄された水田の跡から、はこびるススキやなにやらを踏み倒し、突き進む音が、聞えるっ。

「何だ、何が来やがる？」

この嫌なおいはなんだ？

「すぐわかるわよ」

不安そうにきよろきよろする嘖上を、ネリビルが嘲笑った。

「せっかちは損よ、楽しみに待ってなさい」

「!？」

と、ようやく嘖上にも、何が近づいてくるのかわかった。

「マジか……」

嘖上は隠れ場所はないかと、あたりを見回す。

だが隠れる場所など無かった。

嘖上が右往左往している間に、荒れ果てた水田跡の藪を掻き分けて

現れたのは、都合三体の巨大な大蜘蛛だった。

大蜘蛛は涎を垂れ流しながらもガチガチとその牙を打ち鳴らし、びっしりと剛毛（黒く、濡れている）が生えている八本の足をカタカタと打ち鳴らす。

気絶しそうになるほどの悪臭と、ガラスをひつかいたような鳴き声。

その口が、おぞましく蠢いた。

噴上を、補食する気だ。

噴上は足が震えてきた。

あんな化け物に食われるなんて、ゴメンダ。

「ウエブスピナー：液グモよ……あなたに對抗できるかしら？」

ヒヤウ：ハアツ ハハハアツ！ ネリビルが高笑いを上げた。

噴上の脳裏に、チラリと三人のスケ達の顔が浮かんだ。

「うおおおつ、止めろおツ！」

「J i w s s h h h u u u w w w !」

ウエブスピナーが、悲鳴を上げる噴上に飛び掛かった。



「ハイッ！兄ちゃん。さっきの威勢は如何したんだよおお?!」

テイラーが嘲笑った。

「ちっ」

億泰は、油断なく地面を睨み付けていた。

棚田を少し降りた所にいる噴上のピンチも見えている。

だが噴上の苦境も気になってはいたが、今の億泰に手助けが出来る余裕は無かった。

ボコツ

目の前の地面に穴が空き、そこからアオダイショウ大の蛆虫が何本も飛び出した。

これが、テイラーのスタンド、ユンカーズだ。

「ブン」

飛び出してきたピンク色の蛆虫は、すかさず億泰のザ・ハンドが掻き消した。

「お前、ほんとにキシヨク悪いスタンドを使いやがってよお〜だが、この俺の敵じゃねえな」

億泰は蛆虫の残骸を踏みつけ、テイラーに向かって全力で走った。「うぼおおああああア！」

威勢のいい口調とは裏腹に、テイラーは億泰から逃げていた。

だがただ逃げているわけではない。口から人差し指大の蛆虫のようなスタンド、ユンカーズを次々に吐き出しながら逃げている。

テイラーを追って崩れかかった民家の角を曲がった億泰は、嫌悪に顔を歪ませた。

億泰とテイラーの間に、蛆虫たちがうごめいているッ！

蛆虫達は億泰の周りをぐるりと囲み、周囲の地面をほぼ埋め尽くしていた。

蛆虫たちは小刻みに身を伸縮させ、口から何かの液を垂れ流し、億泰の周りを取り囲んでいた。

その隙に、テイラーがまた億泰との距離を取った。

「へッ、何度やったって同じだよ。お兄ちゃん、あんた、とろすぎるんだよお」

「調子に乗りやがってよお〜」

億泰は、何とかテイラーを自分のスタンドの射程距離に入れようと、悪戦苦闘していた。

だが、テイラーに近づこうとするたび、ユンカーズが無数に表れて億泰をおそってくる。

億泰が何とかそれを排除しているすきに、テイラーは再び距離を取ってしまう。

その繰り返しであった。

「フン……お前のスタンド、シンプルに強いよなあ。だがああ、スタンドの能力つてのは、単純な強さなんかじゃあ計れねーよおなあ。あれだ、バカとスタンドは使いようって奴だ」

(億泰の奴は感情的で挑発するとすぐ我を忘れると聞いたぜ……ここは奴を出来るだけ怒らせてやる)

テイラーは挑発を繰り返した。

「お前はバカだからなあ、スタンドをろくに使えやしねーだろーなあ」
又シャッツ

テイラーはトラッシュ・トークで億泰をあおりながら、隙を見てザ・ハンドの左足、右足と、ユンカーズを食いつかせていった。

「うるせーぞこの野郎!!」

ザ・ハンドがあわてて左手を地面に向けて振りまわす。

「おっと、おめー動きがど鈍すぎるなあ」

又シャッツ、又シイイツツ

テイラーは余裕の笑みでさらに一匹、もう一匹と、ザ・ハンドと億泰に取りつく蛆虫の数を増やしていく。

蛆虫が一匹取りつくたびに億泰の顔がゆがみ、目に見えて動きが鈍くなつて行つた。

「てめー動くんじゃねーゾオ、削つてやるからよお」

「へッ……このブンブン丸野郎、ちよろ過ぎるんだよお!」

「こつ、この野郎オ……」

(へッ、だいぶカツカ来てやがるぜ、よし、ダメ押しだな)

テイラーはさらに億泰を挑発した。

「こんなぼんくらじゃあ、兄貴も浮かばれねーよなあ……お前、もしかしてポンコツのお前の父親よりも頭悪いんじゃねーかあ」

コ〃コ〃コ〃コ〃コ〃コ〃コ〃コ〃コ〃コ〃

「だがよお、お前の親父も D I O 様のおかげで死ねねー体なんだつてなあ」

ヒヤヒヤヒヤとテイラーが笑つた。

「お前、せめて父ちゃんが普通に死ぬるようにしてやりたかつたらしいなあ……知ってるぜえ、アホなお前は、親父を普通に死なせてやる術を、自分から棒に振つちまつたんだろ?」

「何だ……と?」

「お前、親父さんを殺せるスタンド使いを、自分の手で殺つちまつたらしーじゃねーか。ヒヤツヒヤツヒヤツ……あのキラァ・クイーンならよお。お前の親父を再生のままなく木端微塵にできたんじゃあねーか? ああああ?」

バカな息子を持つと、化け物になっても父親は苦勞するよなあ。
同情するぜえ。

テイラーが調子に乗って言い募ると、億泰は黙ったまま沸々と怒りを蓄えているように見えた。

しかし、台風後のダムのように、臨界線ギリギリまで水位が上がった億泰の怒りは、遂に『決壊』した。

「貴様ツ、許せん!!!」

(来たぜ！大振りの奴だツ！奴の左手を避けて無防備などてつばらにイー、ユンカーズをぶち込んでやるぜ)

テイラーは勝利を確信し、にやつと笑った。

「オラツ」

ザ・ハンドが大きく振りかぶった。

(よし、今だ！)

テイラーが一步後ろに下がった。

ボゴオウツ!!

ザ・ハンドの左手が空を切るツ

あまりにも大振りなその一撃を簡単に避け、テイラーは自分の両手、口、鼻、目、耳など ありとあらゆる穴から、蛆虫を何回りも大きくしたようなテイラーのスタンド：ユンカーズを吐き出すツ。

ドロレレレエーツツ

吐き出されたユンカーズは、億泰を食い尽くそうと四方八方から同時におそい掛かるツ！

(ヨシツ、勝った。隙だらけだぜ)

テイラーは、勝利を確信し、ニヤリと笑みを浮かべた。

「クソツ！ まけねえぞおく……グツ。ウオオオオツ！ いつ……痛ってえ!!」

抵抗する億泰が、ユンカーズに飲み込まれそうになっていく……

「ヒヤツヒヤツヒヤアア、お前の負けだ！ ユンカーズツ！ 奴を食らい尽くせツ —— ガツ?!」

と、突然テイラーの動きが止まった。

なぜか、体中に、無数の『足跡』が食い込んでいたのだっ！これは、

スタンドだ。

「なっ……」

戸惑うテイラーの目の前には、顔を晴らした噴上裕也が立っていた。

「ファ……ファイウエイ・スターを、じ、じ動操縦、モードにしたぜ。お前の体力をすべて吸い尽くしてやるッ！」

話しながら、噴上の顔の腫れがどんどん引いていく。それと同時に、テイラーの体から力が抜けて行つた。

「きっ……貴様」

テイラーは億泰を睨みつけた。

「ほらよッ！」

億泰は、力を失った蛆虫を払いのけた。

「貴様ッ！怒ったふりはワザと……冷静に演技をしていたのか……うっ……ウギイイイッ!!」

テイラーは力なく、崩れ落ちた。

ハイウエイ・スターが、テイラーの体からさらに生命力を引き出していく。

テイラーの体のなかで、ハイウエイ・スターが触れている部分が徐々に透き通り、背後の骨格がボンヤリと見えてきた。体が見る見るうちにやせ細り、声からもだんだん力を失っていく。

「ああ、ああ……あ……」

「コイツは任せたぜ、噴上よお」

億泰はもう一度ビュンツ と空間を削り、そしてネリビルの真正面に瞬間移動した。

億泰のスタンド：ザ・ハンドの空間を削る能力の応用だ。

「ほりゃっ」

ザ・ハンドがその右手を振り回す。

すると、三体の大蜘蛛：ウエブスピナーが瞬時にその体を削り取られ、倒された。

ザ・ハンドの、空間を削り取る能力によるものだ。
「今度は手加減しねぐぜ、ネルビルさんよオ」
億泰は、癡猛に言った。

ディオ・ブランドーとDIO その3

ガオンツツ！

「なっ」

あわてるネリビルに向かって、ザ・ハンドが容赦なくその右手をふるった。

その何でも削る右手は、ネリビルの足をも削りとった。

「!?イヤアアアア！」

両足を削り取られたネリビルが、絶叫した。

「私のあああ足イイイイ！」

「へっ、ゾンビ相手なら、遠慮なしに『削れる』ぜえツツ」

億泰は胸を張った。

「き、貴様……策士だな」

テイラーがつぶやいた。ハイウェイ・スターに『養分』をすいとられ、意識朦朧となっていた。

「?あああ……日本語をいやがれ」

何言ってるわからねーぞ。億泰がふんぞり返った

……英語で話されていたテイラーのトラッシュ・トークは、億泰には全く意味が分かっていなかったのだ。

「ばか……な」

テイラーは気を失った。

1999年11月10日 未明 「屍人崎」:

大きな欠伸を噛み殺し、ホル・ホースはまたしても独りで夜の見張りについていた。

SW財団と合流してからずっと、ポルナレフと二人で交代しながら夜警にたっていたので、かなり睡眠不足気味だ。だがそれは自己犠牲やチームプレー精神の為などではない。自分の安全のために、素人に夜間の警護を任せたくなかったからだ。

月明かりを海が反射し、意外なほどに周囲を明るく見せていた。時おりうち打ち寄せる波が、幾重にも重なり、ゴウゴウと言う海鳴りを響かせている。静な夜だった。山の中を歩くこと3時間、ようやくたどり着いた海岸沿いの岬は、ホル・ホースたちの一行のモノを除いてまったく人の気配がしなかった。

だが、朝日が登ればS W財団の迎えが来るはずだ。

そうすれば非戦闘員を送り返して、ゾンビどもの掃討に移る事が出来る。敵にスタンド使いがいないのであれば、ゾンビの掃討など簡単な仕事だ。

「ヒン！……」

と、少し離れた所にまとめて建てたシエルターの一室から、アミの泣き声が聞こえた。すぐに、一緒に寝ていた早人が起きて、いろいろとアミに話しかけているのも聞こえた。

おそらく早人は、いまだに例の『未起隆スーツ』を着ているのだろう。

ホル・ホースはあることを思い出して、プツと笑った。日本の彼女の家に転がっていた漫画を覗き見たこと、を思い出したのだ。

『未起隆スーツ』を着た早人はその漫画の……何だかって言う名前の『漫画の主人公』が強制的に融合・強化された『殖装体』とか言うものに、そっくりだったのだ。話の筋はうろ覚えだが、あれも確か、『宇宙人』が着ていた宇宙服が元だったような……

未起隆の奴は、絶対あのマンガを読んでいたに違いなかった。

あの野郎ツ。ありやあ、『宇宙人』なんかじゃあ、ない。ただのマンガ好きのガキに決まってる。

ホル・ホースは再びニヤリとした。

だが、どんなに追い込まれても、奴は自分が宇宙人のふりを絶対改めようとしなかった。

そういう意味では、中々のタマかも知れなかった。事実 未起隆が補助する事で、ただの小学生であるはずの早人の能力が格段に高まっている。

あの後、ゾンビを全部始末してから早人達に追ったホル・ホースが、

結局、早人が目的地に到達するまでは追いつけなかったほどだ。

早人とアミのいるシエルターからは、何やらあわただしい声がまだ聞こえている。

耳を澄ますと、どうやらアミがまったく泣き止まないようだった。

「チツ……」

ホル・ホースはもう一度周囲を確認した後で、シエルターの元へ戻った。

シエルターの入り口近くに行くと、早人が困った顔で必死にアミをなだめようとしているところであった。

「ポーズ……貸してみろ」

ホル・ホースは余計なことを言う手間を省き、早人の手からアミをとりあげた。

そして、アミを『民家から取ってきた毛布』に包み、優しく抱っこした。ゆっくり、ゆっくりと揺すってやる。すると、やがて、アミは安心したのか、微笑みを浮かべて再び眠りについた。

「イイカ……この子が慣れていた匂いにくるむんだゼエ。安心するからな。それから、抱っこする時は、体から離れた場所で手だけで支えようとするんじゃないぞ。不安定な大勢だと、この子が不安がる……いいか、こうやって心臓の音を聞かせてやるのよ」

腹が膨れて、清潔で、安心すりやあ、赤ん坊は寝るぜ。

ホル・ホースは饒舌に、早人に赤ん坊の扱い方を説明した。

「あ……ありがとうございます」

早人は頭を下げた。『未起隆スーツ』に包まれて、早人の顔は見えない。

「いいって事よ。今どきのポーズが子供の世話なんてしてるわけがねーよなあ。ヒヒツ」

と、二人の話を聞きつけたのか、シンデイが別のシエルターから出てきた。

「あらあら、夜泣きかしら……アミちゃんは元気？」

シンデイはホル・ホースが抱っこしている幼児 —— アミ —— の顔を覗き込んだ。

「可哀想に……この子にとって、今日はとんでもなく恐ろしい一日だったのよ。たった一日で家族をすべて斬殺されたんだから」

トラウマにならなきゃいいけど。

シンデイは、アミのほほをそつと撫でた。

「強く生きてほしいわね」

「ガキは強いもんだぜ……よく気を付けてやりやあ心配いらねーよ」

ホル・ホースが肩をすくめ、少しの間だけ早人にアミを抱っこさせた。

「あら、意外と冷たいのね」

「余裕がねーだけだ。このガキをちゃんと育てるためにやあ、まずは俺たちが生き残りやならんのだぜエ」

「……そうですね。でも、私たちは、ホル・ホースさんがいてくれるから、安心してらるわ……本当に、感謝しているわ……」

「気にすんなよ、ベイビー……あんたこそ、災難だったな。だが、もうすぐ安全な所に帰れるってわけだな」

ホル・ホースは、再びアミを抱っこして、そういった。

「フフフ。そうですね。早くみんなで、安全なところに戻れるといいですね」

「……何か飲みますか？ コーヒーを作りますよ」

早人が言った。

「あら……是非お願い」

だが、穏やかな夜は、何かが近づいてくる物音によって、終わりとなった。

ガサ……

「ホル・ホースさん……もしかして……」

いち早く異変に気が付いたのは、早人であった。『未起隆スーツ』によって強化された聴力のおかげだ。

「ああ、その『もしかして』かもしれないな」

ホル・ホースは、三人を背中にかばった。

「シンデイ、ボーズ、ちよつと下がってろ……アミを落とすなよ」

ホル・ホースも、しばらく前からその音の持ち主が 1人でゆつく

り、ゆつくりとキャンプに向って歩いてくる気配には気が付いていた。

ただ、その音の持ち主がキャンプの外、スタンドの射程距離外で一旦止まり、それ以上近寄ってこなかったもので、当面放っておいたのだった。

近づいてきた人間がエンペラーの射程に入った。そう判断してホル・ホースは立ち上がり、エンペラーACT2：サタニック・マジエステイーの腕だけを、出現させた。その腕は、エンペラーの銃をつかんでおり、物音がした方向に向けた。

バシユツ

次の瞬間、ホル・ホースは躊躇なく、その人物の足元を、エンペラーで打ち抜いた。

「ヒツ」

足元を打たれたその人物は、みっともない悲鳴を上げ、しりもちをついたようであった。

「おい止まれ、その奴……撃たれたくなければ、膝をつけてゆつくり、ゆつくりこつちに這ってこい。赤ん坊みたいにな……バカ野郎、立ち止まるんじゃない。動き続けろ、ゆつくりだ」

ホル・ホースは、男が奇妙な動きをした瞬間にエンペラーを打ち込むつもりで、近づいてくる人物に警告した。

動きの弱弱しき、遅さから おそらく 近寄ってきているのはゾンビでも、ハンターでもない事はわかっていた。だが、その人物の肉体がいかに弱くても、そいつが強力なスタンド使いであれば、危険きわまらない事態になるのだ。

が、その男は ホル・ホースの警告を聞いて、逆に安どのため息をついた。

「その声は、ホル・ホースさんか……待ってくれ……僕だ。ピーターだよ」

キャンプにあらわれたのは、ピーターだった。

一体どんな目にあったのか、ピーターの上半身は血で染まり、まるでマラリアにかかったかのように全身をがたがたと震わせていた。

「おい、おい……………どういうことだった、こりやあ？東方仗助はどこだ？」

「ピーター！大丈夫？」

シンデイが駆け寄り、ピーターを抱きかかえた。

物音を聞きつけ、アリツサもシエルターから出てきた。



何故ピーターがここに来れたのか？疑問は膨らむ。だが流石に子供とレデイの前で、疲労困憊の男を質問攻めにするのははばかられた。

ホル・ホースは、ピーターが応急手当を施され、水分と栄養補助食を与えられるのを焦れた気持ちで見っていた。

もし今ここにいるのがホル・ホースだけだったなら、そんな事情など気にもかけずピーターを尋問しただろう。

残念だ。そんな思いさえもチラリとわいていた。

「あ……………ありがとう……………」

少し体力が快復した所で、ピーターは丸木車から落ちた後で何が起こったのか、ポツリ、ポツリと説明を始めた。



「……………それで、その青年がオリジナル・バオーに『変わった』のね」
アリツサがピーターに確認した。

「ああ……………バオーと仗助君が戦って、仗助君がバオーを気絶させる事に成功したんだ」

ピューツと、ホル・ホースが口笛を吹いた。

「東方仗助、噂通り恐ろしく強いよね……………あの……………最強の生物兵器を
一対一で打ち破るなんて」

シンデイは、顔を強張らせた。

「ああ……………仗助君は強かったよ」

ピーターは、暗く沈んだ声で言った。

「だがその時だ、その時……………何か爆弾のようなものがその場に投げ込まれたんだ。仗助君は俺を庇って……………」

バタンツ！

「ばかな、信じないぞッ！そんなこと……仗助さんが、やられたなんて」
早人は、思わず立ち上がって叫んだ。

「そうです。僕も信じません。仗助サンは、あの恐ろしい爆弾魔と戦って、勝ち残った人デスヨ……」

未起隆は首を振った。

「さつき、シンデイさんも言っていた様に、仗助サンは《恐ろしく強い》人です。僕は無事を信じています」

だから、大丈夫ですよ。

未起隆は動揺する早人の肩を叩き、優しく慰めた。

早人と未起隆が少し落ち着くのを待って、ピーターは話を続けた。

「私は幸運だった。あわやと言う瞬間に、仗助君が私を爆心地から突き飛ばしてくれたから、かろうじて生き残る事が出来たんだ……」

「……そうですか」

シヨックが抜けきれない早人は、力なく立ち上がった。

早人はアミを抱っこすると、自分のシエルターへ、トボトボと歩いて行った。

「って事は、——残念だが——後はポルナレフの奴が、『スマレって娘を救い出せるか』って話だけが残った訳だな」

ホル・ホースも立ち上がった。

「まあ、『女を助ける』のなら、ヤル価値は大いにあるがな……俺は少し眠るぜ。3時間たったら起こしてくれや」

「そうね、もうすぐ夜も開けるから、少しでも休んでおかないと……」

「ピーター……まずはゆっくり休んで。私はシンデイのシエルターにいくから、私のシエルターを使っていいわよ」

ホル・ホースの言葉をきっかけにして、皆自分のシエルターに戻ろうとした。

「待ってくれッ」

ピーターが皆を引き留めた。

「もう一つ、皆に言っておかなければならないことがあるんだ」

コッ コッ コッ コッ コッ コッ コッ コッ コッ コッ

「おい、何だってんだ？」

ヘラツとした顔で振り返ったホル・ホースは、ピーターの真剣な顔と目が合い、どうしたことかと、首をかしげた。

「この中に、****がいるんだ」

ピーターが言った。

「何だつて?」

「我々の中に、****がいるんだよ」

「おい、よく聞こえねーぞ。もっとでかい声で言えよ!」

ト ト ト ト ト ト ト ト ト ト ト

「この中に1人裏切り者がいる。DIOの信望者が、我々の中に紛れているんだ!」

ピーターが叫んだ。

「何言ってるの」

アリツサが眉をしかめた。

「ばかばかしい事、言わないで」

「我々の身元は、SW財団が徹底的に調査しています。裏切りものが入り込む隙など……」

シンデイが首を竦めたまさにその時、不意にシンデイの左肩に、ナイフが『現れた』!!

ナイフは、シンデイの左肩に突き刺さっていた。

「なっ」

シンデイは左肩を抑え、地面に突っ伏した。

「ナイフ……私の体に刺さっている……ど……して?……い……痛い」

肩から溢れる血が、シンデイの体を濡らし、地面に広がっていった。

コ" コ" コ" コ" コ" コ" コ" コ" コ" コ" コ"

「僕は、見ていない!」

早人が言った。

「シンデイさんがナイフに突かれるのを!!……ナイフは、突然シンデイさんの体に突き刺さった状態で現れたんだ……まるで……『時間が止まった』ように突然だったッ!」

「!?皆動くなあ!!!」

ホル・ホースはアリツサからいち早く離れ、皆に指先を向けた。

ボゴオツ!

突然、早人の足元が土煙を上げた。ホル・ホースがスタンドの暗殺銃で地面を撃つたのだ。

「お前ら、動くなよ。一步でも動いたら……かわいいそうだが『撃ち殺す』ぜエ」

ホル・ホースは皆を見渡し、酷く冷酷に、言った。

「そう、ホル・ホース……あんたが裏切り者だったって訳ね」

アリツサが、ホル・ホースを睨みつけた。

「うるえーぞ……黙れ」

ホル・ホースが、アリツサの足元を撃った。

「ヒツ」

アリツサはおびえ、口をつぐんだ。そしてホル・ホースに促されるまま、ひき下がった。だが、時おりまだ反抗的な目で、チラチラとホル・ホースを睨んでいる。

「ホル・ホースさん……お願いだ、せめてシンデイの治療をさせてくれないか」

ピーターが懇願した。

「僕に、あのナイフを抜かせてくれ」

ホル・ホースが一瞬 ためらい、そしてゆっくりと早人に向かって銃口を向けた。

「おい……宇宙人野郎、早人から離れな……お前がシンデイのところに行つて、ナイフを抜いてこい。治療をしてやれ」

「なっ……医師ではない彼に……何故だ?」

「駄目だピーター。お前が歩き回るのは許可しねえぜ。動いていいのは、宇宙人野郎だけだ。わかったか?」

「……わかりました」

未起隆はパツと変化して早人から離れ、元の姿に戻った。

すると、早人の視界からホル・ホースの持つスタンド：エンペラーの拳銃が消えた。

未起隆は、ホル・ホースを刺激しないようゆっくり、ゆっくりと慎重にシンデイの所に歩いて行つた。そして、何度かためらった後、一

気にナイフを引き抜いた。

「あああッ」

あまりの痛みに、シンデイが大声を上げた。

「患部を抑えるんだ！」

ピーターが叫んだ。

「タオルで血が止まるまで、患部を抑えつつけろ！」

「!?わかりました！」

未起隆は、左手をタオルに変化させ、必死にシンデイの傷口に押し付けた。

「ヒッ」

早人にだっこされていたアミが目をさまし、そして泣き出した。

「おねいちゃん、ないてる！ バンバン持った おじさん こわいッ
!!」

「大丈夫だよ。心配いらないよ アミちゃん……怖くないよ」

早人は、あわてて愚図るアミを抱きしめ、なだめた。

その時、早人は『ある事』に気が付いて愕然となった。

（何だって？ もしかして、バンバン って、エンペラーの銃の事？このコ……スタンドが見えるのか……まさか）

コ〃 コ〃 コ〃 コ〃 コ〃 コ〃 コ〃 コ〃 コ〃 コ〃

（『時間が止まった？』そんな能力……時間を止めるスタンド使いなんて、本当にいるの？ 誰がそのスタンド使いなんだ……この子は？）
「ふえええええん!!」

アミは、早人の腕の中で泣き続けた。

山岸由花子 その1

1999年 11月 10日 朝 「M県S市 杜王町」：

「ユカコ、《お》電話よお〜」

階下から母親が、ニヤニヤしながら山岸由花子を呼び出した。

「わ……わかったわッ」

二階の自屋で本を読んでいた由花子は、寝そべっていたベッドから飛び上がった。階段を飛び下りるようにして、玄関へ走る。

今どき珍しいことに、山岸家の電話は玄関の横にしかない。しかも、玄関の隣は母親の私室だ。

必然的に、そしてオゾマシイことに、山岸家にかかってくる電話はほぼ全て母親がとる、と言うわけだった。

由花子も大学生の兄と中3の弟と一緒にだいぶ抗議をしたのだけれど、電話機を追加するための交渉の場で、弟が『このせいで彼女と別れた』とウカツに口にし、それですべてがオジャンになった。

弟は、後でキツチリシメておいたが……

由花子は母親から電話を奪い取ると、ニヤニヤしている母親を睨みつけた。母親が後ろに下がったのを確認してから、いそいそと受話器に出る。母親が『《お》電話』とワザワザ《お》を付けるときは、電話の相手は決まっている。

「……はい、由花子です」

（こんな時間に電話してくるなんて、康一君らしくないけど、どうしたんだろう？ もしかして、寝る前に私の声が聞きたくなっただったりして……フツツ）

「由花子さん、こんな夜遅くにごめんね……実はさっき承太郎さんから連絡があつてね——」

電話越しに聞こえる康一の声……由花子はうつとりと目をつぶつて、その声を堪能した。

「いいのよ康一君、電話をくれてありがとう。時間なんて気にしないでよ」

由花子は弾んだ声で康一と話をしていた。だが、話が進むにつれて

その声が硬い声に変わる。

「……………そう、わかったわ …………… 私も協力する」

由花子は、しきりに礼を言う康一に 水臭いわね と優しく言っ
て電話を切った。そして母親のところに行き、『これから外出しな
ければならない』と説明を始めた。

1999年 11月 10日 早朝 「M県K市 名もなき高原」：
ずっと昔から、『怪物』が自分の中に巣くっているのを、知っていた。
ずっと、自分の中の『怪物』が、自分の感覚を、感情を、痛みを、共
に感じているのを。知っていた。

そして、『怪物』が『自分の体を少しづつ変えていく』のを、確かに
感じていた。

恐ろしかった。

『怪物』の事を知ってから、常にどこかに、じわじわと感じる恐怖心が
あった。それは、幼いころに経験した、徐々に割れていく氷の上にい
る感覚と同じものだ。氷がゆっくり割れる。だんだん、だんだん、
ゆっくりと、危機が迫ってくる、だが逃げるすべがない、あの感覚……
だがその一方で、自分と『怪物』は共に戦い、お互いの感情を、力
を、命を、そして運命を長い間共有してきたのもまた、事実であった。
戦いの中で、『怪物』の意思と、自分の意思が混ざり合い、一つにな
る……そんな経験を何度もしていた。

わかっていた。自分もまた、間違いなく『怪物』なのだ……と。
この真つ暗闇の中、最後を迎える時に一緒にいるのも、たぶんお互
いだけだ。

……それもまた、良いかもしれない。

そう、この『怪物』は、ただの『怪物』ではない、自分にとっては、
一番近い『相棒』でもあるのだから。

だが今、男は、自分の体の中にいる『相棒』が、ぐったりと動かな
いでいる事に気が付いていた。

男は、相棒に向かって、そつと語りかけた。

『…………お前も、もうおしまいなのかい？…………そうさ、こうやって人知れず暗闇で終わるのが、僕たちにふさわしい終わり方なのかもしれないね』

男はそう語りかけた。そして、あきらめと、奇妙な満足感の入り混じった気持ちで、眠りにつこうとした。昔のように。

だが、だが、その時、男の心にある少女の面影が浮かんだ。

その顔が、男を心地よい眠りから引き戻した。男は自問自答し、奈落に引き込まれるような心地よい、眠りの誘惑に抗った。

(…………駄目だ！ ……のまま心地よい微睡の中で過ごすことを、誰が許す？僕は、僕たちはそれを許さない！ ……せめてあの子を、スマイレを守りきらねば…………)

男は、橋沢育朗は、漆黒の闇の中で意識を取り戻した。

体はピクリとも動かせない。

息苦しく、そして目を開けても何も見えない。

そこは、まさに漆黒の闇の中だった。

当然だ。地面の下に埋められているのだから。

息さえも、満足にできない。

(相棒、もう少しここで頑張ってくれ…………僕は、行くよ…………)

『ブラック・ナイト！』

育朗は、自身のスタンド能力で『幽霊』となつて、するりと岩をすり抜けた。

『幽霊』は多量の土砂をもぐり抜け、再び地上に出て、あたりを見回す。月明かりに照らされ、『育朗』の目に映った光景は、気が滅入るものだった。

育朗の本体が埋もれているハズの土の上には、巨大な岩塊がデンと鎮座していたのだ。

一体何百トンの重量なのか…………いくらバオーと言えど、この岩塊をどけて地上に出るのは難しい。仮に何とかして地上近くまで来ることが出来たとしても、この岩塊を砕いている間に、酸欠で死んでしまおうだろう。

いや、今だつて危ない…………残っている酸素は、例え仮死状態であつ

ても、それ程長く持つとは思えない。おそらく、後3時間ぐらいか？

自分1人の話なら、この土砂の下で『相棒』とともに終わるのもよかつた。誰にも迷惑をかけない安らかな死……それが得られるなんて、自分にとっては望外の幸せだ。

だが逝く前に、スミレだけは助けておきたかつた。彼女を助け、せめて自分の短い命にも意味があつたと思ひながら、逝きたいのだ……(だめだ、僕1人では脱出できない……助けが必要だ)

助けを求める『育朗』の脳裏に、これまでに知り合つた強力なスタンド使い達の顔が思い浮かんだ。

きつと、ハイウェイ・スターなら、僕の体を再び見つけてくれるだろう。

シルバーチャリオツツなら、この岩塊を切り刻める。

ザ・ハンドなら、削り切つてしまえる。

そして、東方仗助のクレイジー・ダイヤモンドの能力ならば、きつとこの岩塊を砕き、弱つた育朗の体を、回復させられるはずだ。

僕は彼らのことはよく知らない。でも、彼らは僕を助けてくれる。なぜだかわからないが、それは確信できる。

まだ希望は残っている。

育朗は助けを求め、周囲の探索を始めた。

1999年11月10日 早朝 「屍人崎」：

「いいな……誰も、動くんじゃあねーぞ」

ホル・ホースは冷や汗をかきながら、アミを除く1人1人に順繰りに指を向けていった。

早人には見えないが、その指にはホル・ホースのスタンド エンペラーの拳銃があるはずだ。

「俺の許可がでねーうちに、ちよつとでも動いたら、ソイツは脳天に風穴が開くことになる。わかつたかッ！」

早人は、ホル・ホースから少しだけ離れた処 に立っていた。

疲れはてていた、もう3時間は立ちっぱなしなのだ。早人はアミをだっこしながら、岩場に寄りかかってぐったりしていた。

「ぶーぶー……あけちゃメ……」

アミは、たまに寝言を言いながら、早人の腕の中でスヤスヤと寝ていた。

ずっと抱っこしているので、早人の腕はジンと痺れ、もうほとんど感覚がなかった。

「……どうぞ」

未起隆がトレーを手に持って近寄ってきた。そして早人に、配給——パンと暖かい白湯、それから固形ミルク——を手渡した。未起隆はホル・ホースの指示により、皆に配給食を配る役目を引き受けさせられていたのだ。

「ありがとう、未起隆さん」

「いえ……今の僕に出来るのは、この位だから」

未起隆が、力なく微笑んだ。

「……早人くん、疲れていると思うけど、もう少しでS W財団の救援が到着します。それまでの我慢ですよ……とところで、アミちゃんは元気ですか？」

「うん……寝ています」

「少しだけ、抱っこを代わりますよ」

アミの抱っこして、その寝顔を眺め、未起隆が笑みを浮かべた。

「アミちゃんが起きたら、その固形ミルクをお湯にとかしてあげて下さい」

未起隆は、そっと眠っているアミの頬に触れた。

「ちゃんとお湯は冷ましてからあげてくださいね。肌と同じ温度になつたら飲みごろです」

（アミちゃん……）

早人は複雑な思いでアミを見ながら、そっとアミの頭を撫でつづけた。

まさか、アミにスタンド使いの素質があるなんて、思ってもみなかった……

(この子のスタンドは一体どんな能力なのだろう。でも、今はみんなには黙ってしよう。アミちゃんが疑われないようにしてあげないとね……)

安らかに眠るアミの寝顔を見ていると、こんな時なのに心が落ち着いていく……

「未起隆さん、ありがとう」

「どういたしまして」

しばらくして、未起隆はアミを早人に返した。そして、隣にいるアリツサの処へと別のトレーを運んでいく。

アリツサは、苦虫を噛み潰したような顔で、未起隆を睨みつけた。

「ブン……やっぱりあんた達は、グルだったって訳ね」

配給を受け取ったアリツサは、未起隆に向かってはき捨てた。

「いいタマじゃない。ずっと私たちをだまし続けてたのね！」

「僕は、何にも知りませんよ——僕は、『裏切り者』じゃあない……デス」

さすがの未起隆も、一瞬、顔を真っ赤にした。その後、その怒りを飲み込み、冷静な口調で話を続けた。

「アリツサさん、こんな時だからこそ、今こそ、いがみ合うんじゃないで、皆が冷静になるべき時だと思っんですよ」

「なっ……」

「失礼しますよ……」

アリツサが反論を考えている間に、未起隆はピイツとアリツサに背を向けた。そして、別のトレーを持って、隣のピーターの元へ向かった。

その様子を見ていた早人は、アリツサの暴言に眉をしかめていた。(アリツサさん……なんでこんなに怒りっぽい人がSW財団のリーダーなんだろう？少しヒステリー気味な所もあるし……)

早人はアリツサの様子をこっそり観察した。

率直に言つて、アリツサは有能なリーダーだ。でも、親しみを感じ

るタイプではない。どちらかと言えば、冷酷なタイプだ。早人は、昨日のアリツサの言動——アミが泣くせいでゾンビがやってくる——と、『ゾンビのいる山の中にアミを置いて行こう』と言ったことを、どうしても許し、忘れる事ができなかつた。

早人は、アミを優しくなせた。

(こんな小さな子を置いて行こうとするなんて……あの人は、冷血で自分勝手だ)

……だが、いくら自分勝手だからと言って、自分たちを裏切つてDRESSの側につくだろうか？

早人には良く判らなかつた。

それに、そんなことをして、アリツサに何の得があるのだろうか？

未起隆は、隣のピーターに配給を配っていた。

ピーターはアリツサと違い、大人として落ち着いた風であつた。

いたずらに騒ぐことなく、ピーターは冷静に配給を受け取つた。未起隆に礼を言い、シンデイの手当てをした時の未起隆の手際の良さを褒めた。

「いや、未起隆くんは本当に良くやってくれている。君がやってくれなかつたら、シンデイは助からなかつたよ……」

「いえ、ピーター先生の指導のお蔭です」

未起隆は、頭を下げた。

危機に陥つても、ピーターは冷静で、紳士的だ。

だが早人は、そんなピーターを不振のこもつた目で見つめていた。

(ピーターさん……山を歩いて下りてきたんなら、山を登つていたポルナレフさんたちに会わなかつたのかな？なんで血が付いたシャツを着ているんだろう？誰の血？)

正直、早人はピーターがいうように『仗助が殺られた』とは信じていなかった。

(ピーターさん……僕は信じません。仗助さんが死ぬなんてありえないです……きつとピーターさんが間違えたか、嘘をついているかどっちかだ)

正直、早人はピーターが嘘をついていると考えていた。いや、そう

思いたかった。

ピーターが嘘をついているのならば、仗助が生きている可能性があるからだ。

だがその一方で、早人は、ピーターが嘘を言っていればいいな……と思っている自分を、自分の願望を、客観的に認識できていた。

ピーターの隣は、シンデイだった。

シンデイはぐったりと横たわり、岩に上半身をもたれかけていた。未起隆の懸命な手当てのおかげで、シンデイの容体は、だいぶ安定してきたようだ。

未起隆は、再び丁寧にシンデイの傷口を確認し、頭の横に白湯を置いた。

「ずいぶんしつかりしてきましたね。もう大丈夫ですよ」

「フフ……ありがとう」

受け答えるシンデイの声も、だいぶしつかりしていた。この分ならすぐに元気になるだろう。

「アナタは命の恩人だわ。いつか、ちゃんとお礼をするわね」

「では、無事に杜王町にかえったら、美味しいパスタをご馳走して下さい。杜王町には、それは素晴らしいレストランがあるんですよ」

「……フフフツ、それは楽しみね」

早人は、シンデイに『ナイフが突き刺さった』時のことを、思い返した。

(シンデイさん……無事で良かった。考えるんだ、誰も気が付かないうちにシンデイさんにナイフを突き刺すことが出来るなんて、誰だ?)

最後に残ったホル・ホースに配給を配ると、未起隆は無言で、ホル・ホースと早人の間に座り込んだ。

ホル・ホースはずっと顔をひきつらせ、冷や汗を何度もぬぐいながら、一行をじっと睨みつけていた。

はたから見ても、今にもきれいなほど緊張している。

(ホル・ホースさん。本当に余裕がなさそうだ……暴走して銃を乱射

されたら、僕たちはどうすればいいんだろう)

「ホル・ホースさん……少し休みましょう」

「うるせえ——ッ。宇宙人野郎ッ、黙ってる」

ホル・ホースは未起隆に向かって、ヒステリックに叫んだ。

未起隆は肩をすくめ、しゃがみこんだ。何を考えているのか、膝を抱えてじつと地面を見つめている。

早人は、その様子をじつと隣で見ている。

(未起隆さん……なんだか、未起隆さんは信用できそうな気がしてるんだけど……)

誰が『裏切り者』なのか早人なりに考え、整理していく。本当なら、今まで一緒にサバイバルをしてきた仲間は誰一人疑いたくない。だが、ここにいる誰か一人が、シンデイを刺したことは間違いないのだ。早人が考え、整理した結果は以下のようなになった。

怪しい人 : アリツサ、ピーター、そして ホル・ホース

信用している人 : シンデイ、未起隆

守らなくてはいけない人 : アミ

(思い出せ……シンデイさんがナイフを喰らったとき、そのナイフの柄はどちらを向いていた?)

早人は仲間を1人、1人を順番に見詰め、必死に考えをめぐらせていた。

(今まで一緒にいて、何か『不自然』な言動をとる人は、いなかったかな?)

1999年11月10日 早朝 「A山近郊 T鋤山跡」:

今まで闇に閉ざされていた林道が、朝日に照らされた。廃村からDressのアジトへと至るその林道は、ほぼ獣道同然に荒れ果てていた。だが、これから負傷した体を押して、この林道を登って行かなければならない。

スマイレを追いかけるのだ。

噴上はまだ痛む体を無理やり動かし、寝転がっている億泰に向って手を差し伸べた。

「オラッ、億泰ウ……肩をかすぜ」

クタクタに疲れ切ってはいたが、テイラーの養分を吸って回復していた噴上は、億泰よりは余力を残していた。

「無理すんな、俺を置いて行けよ。お前は早くスマレ先輩達と合流して、仗助を助けに行け」 億泰は噴上の手助けを断り、自分は後から行く と言い張った。

噴上と違い、ユニカーズに吸いとられたパワーが、回復していないのだ。

「てめー、ふざけてんじゃねーぞ」

噴上は、億泰の抗議を無視して、肩を担いで歩き続けた。

「いや、俺はちよつと休んでから行くぜ。クヤシイが、今の俺はセリヨクにならねえからよお」

「……そうだな、確かに、ちよつと怪我したくれーで泣き事をほざく奴はいらね——なあ……セリヨクにならねえ——」

噴上は、いらいらとした口調で言った。

「だから、お前一人で行けよ……俺は後から追っかけるぜ」

億泰は、力なく首を振った。

何を言ってるやがる。噴上は億泰の襟を掴み、締め上げた。

「確かにヘタレてる奴はセリヨクにならねえ??。だがよお……『無敵』の右手だ。あの仗助を倒しちまう程の敵と戦うにやあ……絶対にお前のスタンドが必要だぜ。お前の、『無敵』の右手がよお」

だから、俺が連れてってやるぜ。

噴上は、億泰の右肩を担ぎ上げた。そして、ハイウェイ・スターが億泰の左肩を担ぐ。

億泰の両側を、生身の体と、スタンドで支え、一歩、一歩進んで行く。

「へっ………馬鹿野郎が」

億泰が、ニヤつと笑った。

厨二……いや、ヤンキー臭丸だしな会話をしながら、二人はゆつくり、ゆつくりと進んだ。半死半生のネリビルとテイラーを置いて、荒れ果てた廃村を出ると、切り立った山の間を縫うようにわずかに残る林道を、進んでいく。

事前のハイウェイ・スターの調査によれば、この林道跡を抜ければ、目指す組織の建物に到達するはずなのだ。

「仗助の奴を助けたらよお、一発ぶん殴ってやるぜエ……あの野郎、1人でカッコつけやがったからよお……」

億泰が言った。

「『左手』で、か?」

「『右手』でだ……おっと、スタンドでじゃね……奴は俺の拳で直接、思いっきり殴ってやるぜえ」

億泰が笑った。

だが次の瞬間……

「!?グハツ!!」

突然、億泰が白目をむいた。体をビクビクと痙攣させ始める。

そして、驚いている噴上の目の前で、あつという間にぐつたりと頭を垂れた。

「……おい、どうしたんだよ」

噴上は億泰の様子を確認し、顔色を変えた。億泰の様子がおかしい。

「お前、ガタガタ震えてるじゃねーか……どうしたよ、寒いのか?」

「うろううつつ」

億泰は、何かを話そうと必死にのどをかきむしり……そして、意識を失った。

「冗談はよセツ つまんねーぞ テメえー!!」

噴上は、意識のない億泰を肩からおろした。その体をそつと地面に横たえて、様子を確認する。

まだ息はある。

心臓もしつかり脈打っているようだ。

だが、億泰はまったく反応しない。

声をかけても、頬を叩いても、ピクリともしない。

コ〃 コ〃 コ〃 コ〃 コ〃 コ〃 コ〃 コ〃 コ〃 コ〃

噴上は、億泰の服に『人差し指大の穴』が開いているのを見つけた。脇腹だツ。

あわてて傷口を確かめると、そこには、

―黒く

―濡れている

―剛毛の生えた

巨大な昆虫の足が刺さっていた。

「!?馬鹿な……」

噴上は、あわてて億泰の脇腹に刺さっていた足を引き抜いた。傷口は小さいツ。だが億泰は白目をむき、ピクピクと体を震わせている。意識がほとんどないようだ。

(こりあああ、毒か……?)

「クククク」

下方から笑い声が聞こえた。

噴上は、林道の下を覗き込む。するとそこには、うつ伏せとなったネリビルが、笑っていた。二人を追って、両腕で這って来たのだ。

「彼、ウエブスピナーにやられたのね」

「お前、意識があつたのか……答えるツ！億泰がどうなったのか……どうすれば奴を助けられる？」

噴上は、ハイウェイ・スターをネリビルの目前に出現させた。

「ハ ハハハツ――ひゃひゃひゃツ――ヒヒヒ」

ネリビルは壊れた時計のように、カタカタと首を振って笑った。

「かわいそうにイ。ウエブスピナーの毒、は犠牲者をゆっくり麻痺させるわ……やがて、息をするための筋肉まで麻痺していき、最後には心臓まで麻痺するのお」

助かる手段はないわ……ネリビルが楽しそうに笑い、右手に掴んだ『何か』を噴上に向かって投げつけた。

ビュンツ

「クツ……ハイウェイ・スター」ツツ

墳上はスタンド：ハイウェイ・スターを飛ばし、ネリビルの頭を殴りつけた。

「ギャビィィィ……」

ネリビルは吹っ飛び、今度こそ確実に昏倒した。

一方、左手に痛みを感じた墳上は、自分の手を確認した。そして、最後にネリビルが投げたモノが何かを知って、頭を抱えた。

「やっちまったぜ……チクショウ……」

コ〃コ〃コ〃コ〃コ〃コ〃コ〃コ〃コ〃コ〃

親指大の太さの黒い剛毛の奥から、毒々しい黒と黄色の縞模様地の肌がぞく。『それ』が、墳上の左手の甲に、おぞましくも突き刺さっていた。

そう、『それ』はウエブスピナーの爪だ。

そうと認識した途端、左手がカツと熱を放ち、吐き気がこみ上げってきた。

「うう……うっ……」

墳上の視界が暗転した。

そして、何もわからなくなった。

1999年11月10日 朝 「屍人崎」：

黙って互いをにらみ合う時が、何時間も続いていた。

いつの間にか日がのぼり、少しづつ暖かくなってきた。

「……」

早人は、かじかむ足を小刻みに動かし、少しでも早く体を暖めようとしていた。

「……あなた、どうして私たちを裏切ったのよ」

長い沈黙の時間を破り、アリツサがホル・ホースを詰問した。

「あんたが昔、DIOに雇われた暗殺者だったってのは、知ってるわ、でもその契約はとっくに終わったんでしょ、どうして？」

「へっ？」

ホル・ホースはあつけにとられた顔で、マジマジとアリツサを見つ

めかえした。肩をすくめ、バカらしそうな口調で言った。

「オイオイ、よく考えろよ。俺がS W財団との契約を破棄して『裏切った』だど？何をどう勘違いしたらそう思えるんだあ？……言っちゃあ悪いが、アンサンたちを殺るのなんて簡単なんだぜエ。もし俺がアンサンの敵だったら、もうとつくに殺ってるぜエ」

「何を言ってるのよ。今も、私たちにスタンドを向けてるクセに」
アリツサが鼻を鳴らした。

「そりゃあ仕方がねー。この中に『裏切り者』がいるんだからよオー」

ホル・ホースは額の汗をぬぐった。

「ねえ、ピーター……誰が……誰が、『裏切り者』なのか、本当に知らないの？」

シンデイが尋ねた。ナイフを喰らったシンデイは、呂律が回っていない。つつかえ、つつかえゆくりと話していた。

「あなた、何か聞いて無いの？」

「わからないんだ」

ピーターは、かぶりを振った。

「わ……私がその話を聞いたのは本当に偶然だったからね。聞こえたのは、『S W財団のヤツラに忍び込ませた奴と、連絡とれたのか？』って言葉だけさ」

「……つまり……私たちの中に、恐ろしい能力を持つ裏切り者がいることはわかっているけど、それが誰だかわからないって事ね」

シンデイは喘ぎ、喘ぎ言った。

「それだ、そいつが問題だぜ……」

ホル・ホースは、遠慮なく1人1人をにらみまわした。

「D I Oのスタンドは『時間を止める』能力を持つてやがった。思い出せや……さつきシンデイの胸に『ナイフ』が突然突き刺さったよなあ……いいか、時を止めている間にナイフを突き刺すってのは、ありやあD I Oがよくやっていた手だぜ……つまり、どうやってかしらねーがお前らの誰かがD I Oのスタンドの力をほんのチョツピリ、使えるってえことだ」

「ほんのチョッピリ？」

「もし裏切り者の能力が長いこと『時間』を止められるって事なら、僕たちはもうとつくに全滅してる　って事が言いたいのかい？」

「その通りだぜエ、ピーター」

ピーターの言葉に、ホル・ホースはうなずいた。

そして、SW財団の三人をにらみつけた。

「悪いが、アンタたちを監視する必要がある」

「アンタだって、怪しいわよ……」

「スタンドは1人に一体だ。だから俺と未起隆は、裏切り者の『容疑者LIST』にはいないって訳よ」

「どうかしら？あんたの言葉をどうやって信じろって言うのよ」

アリッサが疑わしそうに言った。

「そのルール、例外はないの？」

ホル・ホースの目がすつと細くなった。

「Ms. アリッサよー、アンサンこそ自分が『裏切り者』じゃあないって言う証拠を出せや」

「な！……私たち……私とシンデイ、ピーターの身元はSW財団の綿密なチェック済みよ」

ありえないわよ　アリッサが鼻を鳴らした。

「ハッ……そりやどうかかな？……昔、DIOはSW財団の身元チェックを受けた船員の中によ、スタンド使いを紛れ込ませたことがあったぜ。身元調査なんか、ごまかすのは簡単なんだよ。——しかも、その時やあ《船長》がそのスタンド使いだっただぜ……どう思うよ、『調査隊のリーダー』さんよオ——」

「そんな……」

未起隆が困惑した。

「じゃあ、誰でも可能性があるってことじゃあないですか」

未起隆の発言を機に、皆が一斉に話し始めた。

皆が一斉に自分じゃあないと、身の潔白を必死に主張し始める。皆が自分は裏切り者ではないと断じ、そして相手に対しては、辛辣な疑問を投げかけ始めた。

次第に、お互いの声が少し甲高くなり、大きくなり、言葉が刺々しくなっていく……

山岸由花子 その2

「アンタよ、アンタに決まっているわッ!!」

アリッサがホル・ホースを怒鳴りつけた。

「この裏切り者ッ 何が『女を尊敬してる』よ、馬鹿にすんじやあな
いわよ、この、エセ フェミニストッ!」

アリッサの右手が、腰に触れた。そこには拳銃があることを、皆は知っていた。

「さてよ、僕はこの未起隆の方が怪しいと思う。宇宙人だなんて、頭のネジが切れたふりをして、俺たちをけむに巻いているんだッ」

「イヤイヤ、宇宙人だからって、頭の中にネジは入ってないですよ。それではロボットです」

「バツ：馬鹿にするなあッッ!」

「二人とも動かないでッ!!!」

口論は、いつしか怒鳴りあいが変わっていた。

（いけない、これじゃあ『裏切り者』に倒される前に、僕たちは自滅してしまう）

早人は唇をかんだ。でも、どうすればいいんだ。思いつかない……
そのとき………

「ダメッ!!」

いつの間に目を覚ましていたのか、アミが早人の腕の中から叫んだ。

「みんな、おつちやメツ。なかよくしなさいッ!」

「アミちゃん……」

SW職員とホル・ホースには日本語のアミの言葉は分からない。だが言っている意味は伝わったのだろう、年長者達は皆、ばつが悪そうに黙り込んだ。

アミは、ぴよんと早人の手から飛び降りると、腰に手を当て、大人たちに指をつきつけた。

「メツ。おつきなコエださないのッ……わかった? ケンカしないの? バンバンのおじちゃんも、おつきなお人形をもってるおじちゃん

も……わかった？」

アミはそういうと、おぼつかない手つきで早人が持っていた哺乳瓶をひったくった。中のミルクを、ゴクゴクとうまそうに飲みほす。腰に手を当てた、堂々たる飲みっぷりだ。

「プツ」

その光景を見たアリツサが、くすつと笑った。その笑い声を皮切りにして、皆の言葉が再び穏やかにかわっていく。

「おっ……おう」

「そうね、私としたことが……」

「これは、一本取られたね。この子に教えられたよ」

皆が穏やかさを取り戻していく。

だがその中……

日本語で話されたアミの言葉、その意味を完全に理解していた早人と未起隆だけが、顔色を変えていた。

二人は、アミの言う『おっきなお人形を持ったおじちゃん』……ピーターを睨みつけた。

「どうした？ 『僕の貌』 に、なにかついているのかい？」

ピーターが、心なしか低い声で、言った。

「コ〃コ〃コ〃コ〃コ〃コ〃コ〃コ〃コ〃コ〃コ〃コ〃」

「……ピーターさんに質問があります」

早人が尋ねた。

「アナタは、どうやって裏切り者がいるってわかったんですか？ それに、なんでシャツが血に塗れてるんですか？ あなたは自分の血だって言ってたけど、そんなわけないんです。だって、仗助さんの能力なら、血も一緒に治しちゃうはずなんです」

「ねえ……さつきアミちゃんに怒られたばかりでしょ。やめましよう」

「そうはいかないんです」

シンディの言葉を、未起隆が遮った。

「……つたく。せっかく仲間割れの危機が回避出来そうだったのに。子供はこれだから」

アリッサがわざとらしくため息をついた。

「アリッサ、シンデイ、ありがとう。でもちよつと待ってくれよ。子供が言ってる事さ、ムキになる必要も無いよ」

ピーターがへへへと笑った。

「僕が裏切り者？そんなわけあり得ないでしょ。もし僕がに裏切り者だったら、みんなに警告なんてしないよ」

だが……その笑みはこれまでピーターが見せたことがない、下卑た笑みだった。

立っていることにつかれたアミが、抱っこして と早人に両手を開いた。

（この子……アミちゃんがスタンドを見れることを言っちゃダメだ）

求められるままに抱っこをしながら、早人は思った。

（アミちゃんの身が危ないし、もしかしたら……この子が疑われちゃうかもしれない）

未起隆が首を振った。険しい顔だ。

「ピーターさん……早人クンの質問に、答えてください。ピーターさんは、なぜ裏切り者がいると、わかったんですか？そして、なんでシャツが血に濡れてるんですか？」

「……この血は、僕たちをおそった怪物の血だよ」

「なるほど。それで、『裏切り者』がいると知ったのは、どうやってですか？」

「あ……あの男だよ——僕たちのキャンプをおそった男が、仗助クンと戦っているときに裏切り者がいると言ったのを聞いたんだッ！」

ピーターは腕組みをして、未起隆を挑発的に睨みつけた。

「つまり……ピーターは裏切り者じゃあないって事よ」

シンデイが言った。

「そうよ、そもそもSW財団の研究員は本当に厳正な身元Checkを受けているのよ。しかも、一回じゃあないの——抜き打ちのCheckは、私たちも知らないタイミングで年に何度も行われているのよ」

さつきは感情的になっちゃったけど、やっぱり論理的に考えると、

怪しいのはS W財団の研究員以外の人じゃあないかしら……ア
リツサは、疑わしげにホル・ホース、未起隆、早人、そしてアミを眺
めた。

(マズイよ……アミちゃんがスタンド使いだつてことを隠したまま
で、ピーター……さんが……がスタンド使いだつてことを、どうやって
伝えればいいんだろう……)

早人は唇をかんだ。

1999年11月10日 朝 「A山近郊の廃墟」：

「クッ！チャリオッツ!!」・

ポルナレフは、チャリオッツの足が新たなスタンド：プライマル・
スクリームの能力によって、がちり拘束されている事に気が付い
た。

それはまさに11年前、船と一体化したスタンドに拘束されたのと
そっくりの感覚だった。

「チャダのスタンドは超強力っス」

仗助が言った。

「一旦掴まれたら、もう逃げられませんよオ——」

バシユバシユ！プシユッ！ピスッ！ギャツギャツ！

「抜かせ！」

ポルナレフはチャリオッツの剣を、目も留まらぬ速さで足元のスタ
ンドに何度も突き入れた。チャリオッツの剣は、ポルナレフを掴む壁
を粉々に砕いた。

「こんなモノで俺を止められるかッ！」

「逃げるなッ」

チャダがスマレとアンジェラを捕まえている壁から、自分のスタン
ド プライマル・スクリームの本体を出現させた。

それは、通常のスタンドの優に二倍はある、巨大な石の塊のような
スタンドだった。

『G y a a a a a a a a A A A A A A A A !』

プライマル・スクリームはその名の通り、耳がつぶれそうなほどの

野郎ッ」

「そうっすよね……俺も、ポルナレフ先輩が理解してくれるとは、あんまり思ってたなかったっす……ポルナレフ先輩にわかってもらおう方法は、一つだけっすよね」

仗助は髪の毛をかきあげ——スタンド：クレイジー・ダイヤモンドを出現させた。

「チャダ、エルネスト……アンタたちは他の方々か逃げるのを抑えろ。ポルナレフさんは俺が相手するッす！」

そういうと、仗助がポルナレフに迫るッ！

「チッ……ちよつとだけマジイ——状況だぜ……アンジェラ、スマレ、お前たちは逃げろ」

シャリッソソ

ポルナレフはスマレとアンジェラを背中にかばうと、背後の壁に丸く穴をあけた。

「悔しいが……いくら俺でも、あの三人を同時に相手に勝つのはチト難しいぜ。一度引く……俺が時間を稼ぐ隙に、逃げろッ！」

「なっ、そんなこと出来ないわよ」

スマレは首を振り、この場から逃げ出すことを拒否した。

「オリヤアア！」

チャリオッツは8体に分身、片手にレイピア、片手にエメラルド・ソードを持っておそい掛かるッ

8体の分身から繰り出される、16振りの剣撃ッ！

『ドララララッッ！』

クレイジー・ダイヤモンドの拳が迎え撃つ

「分身なんて、全部迎え撃ちまえば問題ないっすねエエエ——
——ッッ!!!」

仗助が噛う。

「フン、無駄ッ！」

同時に、エルネストがオエコモバを出した。シャツのボタンを外し、そのボタンをオエコモバに近づける……爆弾を作るためだ。

ザシユッ！

「させるかよおッ！」

チャリオッツの分身の一体がすかさずエルネストの前に現れ、エルネストの右手を切り飛ばすッ！

「甘いぜッ……おめート口過ぎだアッ！ 俺と仗助の勝負を邪魔すんじやねエ——ツツ」

「グオツ!!U r r y y y y y y y y!!」

右手を切られたエルネストが血をまき散らし、傷口を抑えて絶叫した。

だがエルネストは、絶叫しながらも、切り落とされた自分の右手首をポルナレフめがけて蹴りだしたッ！

「何?……ハッ……マズイゼッ！」

ポルナレフは、『蹴り飛ばされた右手首』に、爆弾の信管が付いているのを見た。

(げえっ、ヤロー正気か?自分の体を爆弾に変える何てよお。マジーぜッ。チャリオッツが間に合うか、ギリギリだぜ)

ポルナレフは身をひるがえし、アンジエラとスミに向かって飛んでいく『爆弾』に手を伸ばすッ。

その手が、空を切った。

(だっ……だめか、間にあわねー)

アンジエラとスミレの驚愕した顔が、目に飛び込んできた。

その時、ポルナレフがあけた穴から何か、『影』が飛び出した。

その『影』は、アンジエラとスミレを、自分が入ってきた穴の向う側に押しやった。

そして、『爆弾』を掴むツツ

ドガンツツ!!!

『爆弾』が、白煙を上げ、爆発した。

ポルナレフは、爆風によって全身を床に叩き付けられた。

アンジエラとスミレは、『影』によって爆風をさえぎられ、無事であった。

「G u i i i i i i i i x t u !」

アンジエラとスミレを助けた『影』は、ハンターであった。

『爆弾』をまともに掴んだハンターも、生きていた。何とハンターは、『爆弾』を掴んだ片手を自ら切り落とし、オエコモバに投げ返したのだッ！

「えっ？ハンターが……私たちを……どうして？」

スマレが、困惑したように言った。

まさか……壁穴の向う側から確かめるようにハンターの背中に手を伸ばすスマレを、立ち上がったポルナレフがひっ捕まえた。

「とつとと逃げろッ！」

ポルナレフはチャリオッツを使って、スマレとアンジエラの二人を無理やり壁の穴から遠くへ押し出た。

「ちよつとおー！」

「いいから行けッ！」

ポルナレフは二人にそう怒鳴ると、くるりと振り返って背後の敵に備えた。

『爆弾』を投げかえされたエルネストもまた、無事であった。

爆発の直後、ほぼ同時に、仗助がエルネストの右腕を治していたからだ。

「エルネストよオ——、オメエ——無茶するんじゃあねーぜ。完全に爆散しちまった後だと、俺の能力でも、もとに戻せねーんだぜ」

仗助が言った。その声には、怒りがこもっている。

ト ト ト ト ト ト ト ト ト ト

「しかもオメエ——、スマレとアンジエラが巻き込まれるのを承知で、やりやがったろ！」

仗助は エルネストの襟を掴み、持ち上げた。

「貴様こそ、余計なことをしておって……俺の怪我など無視するのでベキだった。そうすれば、爆弾を完全に爆発させられた。少なくとも、あのハンターは始末出来たッ！」

D I O様に身をささげた俺が、体を失う事にためらうかッ！

エルネストもまた、怒っていた。

激昂するエルネストは、仗助の手を乱暴に振り払った。

「チツ……ふぎけんなよ、テメエ——」
仗助は肩を怒らせ、エルネストを真っ向から睨みつけた。

一方、壁の外に押しやられたスマレは、まだぐずぐずと立ち止まっていた。

壁の向こうに突然現れたハンターの姿を、何とか確認しようとして必死に穴の向こうの気配を探っている。

そのスマレの手を、アンジエラが強く引つ張った。

「行くわよツ、早く億泰達を連れてこないと」

「ちよつと、待って。お願いツ！」

スマレが首を振った。

もしかして……今の『黒い影』は……

「気持ちには良くわかるわ……でもダメよ。私たちが早く億泰を連れて帰らないと、ポルナレフさんが！」

アンジエラは、嫌がるスマレの手を引き、強引に先を急がせた。

(!?あれは、もしかして……育朗?育朗、な、の……まさか?)

アンジエラに手を引かれて走りながら、スマレは後ろをチラチラと振り返っていた。

ゴオオオオン!

不意に背後の壁が膨れ上がり、爆発した。

天井が崩れ、がれきで、廊下が塞がった。

そして、塞がった壁がブロック状にバラバラと砕け、チャダが顔を出した。

『G y a a a a a a a a a a A A A A A A!』

チャダに続き、壁からプライマル・スクリームが顔をだし、大声を上げた。

「!? 来るわよ、何か投げてくる。気を付けてツ！」

スマレの額にWitDが閃光のように輝いた。WitDがスマレに、『未来のVision』を、一瞬だけ届けたのだ。

『G z y u a E W E
!!!!!!』

プライマル・スクリームは壁の一部をむしり取り、絶叫を上げながら、二人に向って投げつけてきたッ。

「ッ！」

アンジェラは、とっさにスマレを肩口に担ぎ上げ、飛び上がった。波紋のエネルギーを両足に集めるツツ

ドゴオオンンツ！！

アンジェラは空中で身をひるがえし、チャダが投げってきた壁の一部に、両足で着地するツ

波紋のエネルギーで、壁にくつつくツ！

その瞬間、アンジェラの足に、強烈な衝撃が伝わり、二人をおそった。

「あああッ！」

アンジェラは苦痛のうめき声を上げた。

スマレは、肺からすべての空気を掃出してしまった。目の前が、一瞬暗くなる。

二人の乗った『壁』が、廊下をぶっ飛んでいく。

「グハツ！！……ううっ、スケーター・ボーイツ！」

アンジェラは、プライマル・スクリームの投げつけた壁に、スタンドの車輪を出現させた。

二人を乗せた『壁』は、廊下の行き当たりに向かって、グングン進む。まるで、吹っ飛んでいるような、ものすごいスピードだ。

ギユウイイイ——ンツ！

アンジェラは、『壁』の上で身をひねった。まるでスケボーに乗っているかのような、自在な動きだ。

廊下の天井に、スケーター・ボーイで作った車輪がくつつく。『壁』の動きが制御できる！！

二人は、まるで上下が逆転したかのように、天井を滑っていく。

「くつつく『波紋』よ——絶対私から手を離さないでねツ！！」

アンジェラは、抱えていたスマレに、どなった。

突然、スマレがどなった。

「!? アンジェラ、右に避けてツ」

「!?ッ 了解っ!!」

ドゴゴオオオン!

スマレの言葉に従い、アンジェラが少しだけ右に移動した直後、プライマル・スクリームの投げた石塊が二人のすぐ左を通り過ぎるッ

「次、左、それから、もう少し左ッ」

「わかったわッ」

ボゴッ!

ドガガッ!

ジェラとスマレはW i t Dの予知に従い、プライマル・スクリームが投げる石塊を右に、左にと、小刻みに避けながら、天井を滑っていく。

が、目の前で廊下が右に曲がっている。

二人の目前に、ぐんぐんと壁が近づいてくるッ!

「このままだと、激突するわ!」

スマレがうめいた。

「大丈夫よ、しっかりつかまって!!」

アンジェラが、スマレの手をしっかりと握って、言った。

グウギイヤアアア——ン!!!

『壁』に乗った二人は、廊下の曲がり角に猛スピードで侵入していった。

まるでジェットコースターのように、天井から壁、床、壁、そしてまた天井へと、グルッと回転していく。

ガガガッ!ジジジッ!

二人がボード代わりに乗っている『壁』が、擦れ、ガタガタと跳ね回る。

「クウウウッ!ずれる——グリップがッ!」

遠心力で頭に血が上り、目が回るッ!

意識が飛びそうになるッ!

廊下を曲がったすぐ先に、ドアがあったッ!

「キツキヤアアッ!」

「まだまだあッ!」

アンジェラは悲鳴を上げるスマレを小脇にかかえ、身をひねった。スケボー代わりの『壁』を、全身の力をこめてドアに蹴りだすッ！
ボツゴオオ——ンツ！

ドアは砕け、二人は建物の外に投げ出された。

「……逃げられたデスか」

もうプライマル・スクリームの速度では、追いつけない。

チャダは舌打ちをして、視界から消えた二人に向かって唾を吐いた。

1999年11月10日 午後 「屍人崎」：

「本当です」

シンデイが言った。

「SW財団の身元は嚴重にCheckされているのよ、ホル・ホースさんの言うとおり、11年前にDIO……の仲間にもぐりこまれた事件の反省から、今は本当に検査が厳しくなっているんです」

「そうよ……だから、怪しいのは『私たちではない』、怪しいのは、アナタと未起隆——それから——早人クンかアミちゃん ってワケよ」
アリツサが言った。

「ツマリ、僕らこそ裏切り者だと言いたいのですか？」

未起隆がゆっくり、ゆっくり尋ねた。

「いくらなんでも、早人クンやアミちゃんまで疑うなんて、本気で言っているのですか？」

「確率の問題よ……それに、先に私たちの仲間を裏切りモノ呼ばわりしたのは、早人君とアンタじゃあないの」

「……僕らには、理由があるんです」

「そう？でも、私たちにも理由があるわけ……ピーターが裏切り者とは思えない理由がね」

アリツサが言った。

「ワタシには、あんた達スタンド使いたちの方が、よっぽど怪しく思えるわッ！特にホル・ホース……あんたよ。アンタ、元々DIOの部下

だったじゃない。いつまた裏切っても、全然おかしくないわッ」
「フン、さつきから言ってくれるねえ……だが、いいことを思いついたぜ」

ホル・ホースが腕を組んで、仲間をぐるりと見回した。

「お前たちを試す、いい方法がなあ！」

ホル・ホースは、右手を未起隆に向けたッ！

メギャンッ！

ホル・ホースの右手から、スタンド：皇帝が姿を表す。

皇帝の銃口が、未起隆に向くッ！

「!?何をするんです?」

未起隆が叫びながら、地面に伏せた。

「皆、伏せてくださいッ！」

バシユッ、ギャン、ギャン、ギャンッ！

ホル・ホースはスタンド：エンペラーの銃口を他の仲間順繰りに向け、弾丸を連射したッ！

エンペラーの弾丸が、未起隆、アリツサ、シンデイ、ピーターそして 早人に向って高速で飛んでいくッ！

「逃げてくださいッ!!」

未起隆は必死に叫んだ。

だが、超音速の弾丸は、未起隆の警告がみなに伝わり、理解されるよりも早く標的に着弾するッ！

その時……

「アミチャン、大丈夫?ダメだよ気を付けないと、」

早人は弾丸に気が付かず、尻餅について泣きそうになっているアミを抱っこしようとしていた。

「!?アナタ、なにをやってるの、なんで伏せてるの?」

アリツサは、必死に叫ぶ未起隆を見て、首をかしげている。

「あああッ……水が飲みたいわ」

シンデイは苦しそうに頭をかかえてしやがみ、目を閉じた。

「フン！」

「うわあああああッ」

未起隆は、目をつぶった。

パシユツツ

だが、エンペラーの弾丸は、5人に命中する直前に消滅した。

「!?これは?」

恐る恐る目を開けた未起隆は、自分も含め、皆が無事で見つけ、あつけにとられた。

コ〃コ〃コ〃コ〃コ〃コ〃コ〃コ〃コ〃コ〃

? 「……見つけたぜ、やっぱりお前じゃねーか、この……マツチ

ポンプ野郎があッ」

ホル・ホースが、『ある人物』を睨みつけた。

「覚悟はいいな、オメ——、ただじやおかねえ——ぜ」

「……そうかつ、そういう事だったんですね」

やっぱり と状況を理解した未起隆がうなずいた。

「ホル・ホースさん、未起隆さん、どうしたんですか?」

「あなた、何をしたの?」

「怪しいとは思っちゃあいたが、まさか言い出しつpegが、本当は裏切り者だったってかア——」

ホル・ホースが、その『男』を指さした。

「早人と宇宙人野郎が正しかったって事かよ……」

コ〃コ〃コ〃コ〃コ〃コ〃コ〃コ〃コ〃コ〃

その男とは、ピーターであった。

ピーターの背後から、巨大なスタンドの腕が出現していた。そのスタンドが、エンペラーの弾丸をつまんでいる……

「ホル・ホース……貴様、よくもやってくれた」

ピーターが、ふらりと立ち上がった。その目は黄色く血走り、今までの理知的な見た目など、もう何処にも見つからなかった。

「もう少しで、もう少しで、『お前達全員が、同士討ちを始めるところが見れる』と、楽しみにしていたものを……ホル・ホース、俺は貴様を、昔からほんのチョッピリだけ目をかけていたのに、残念だ。殺さなくてはならないとはなッ」

ヴオオ——ン!!

ピーターの体から、チラリと強大な、禍々しいビジョンが全身を現した。

「!?全員、ピーターから離れろォー!」

ホル・ホースが怒鳴った。そう言ったホル・ホース自身が真っ先に走り出し、この場を離れていく。

「ふっ……いきなり逃げ出すか……だがまあ、あながち間違った判断でもないな。普通ならな……だが、この私に背を向けるなど……愚か者よッ!」

ピーターがホル・ホースを追って、走り出すッ!

ザシュツ!

走っていたホル・ホースは、不意に姿勢を落とした。走る勢いそのままに、地面に向かって飛びこむ。

岩だらけの地面を、サタニツク・マジエステイーのプロテクターで防御し、前周りに一回転する。

その直後、ブンツと何かが飛び、それまでホル・ホースが走っていた地面が、吹っ飛んだ。

ピーターのスタンドが投げた岩が、地面をえぐったのだ。

ホル・ホースは受け身をとった反動でぐるりと半回転して、右手をピーターに向けた。

「死んじまいなッ」

ホル・ホースが嗤うッ。

だが、何故かその言葉を機に、ホル・ホースの体に無数の細かい擦り傷が現れ始めるッ。

キュイン!ザシュツ!バキツ!

ホル・ホースとピーターの周囲の岩が、次々にはじけ、細かい破片が飛び散っていくッ!

まるで弾丸のように、破片が早人たちのまわりに飛んで来る!!

「早人クン!!」

とつさに未起隆が早人の上におおい被さり、飛び散る岩の破片から、早人の身を守った。そのまま再び『変身』して、早人の体を覆っ

ていく。

早人の体の上に、見る見るプロテクターが取り付けられた。そして、ヘルメットに取り付けられた『バイザー』が早人の目を覆っている。

すると、早人の目に ホル・ホースがエンペラーの弾丸を何発も打ち込み、ピーターがそれをはじき返しているのが幽かに見えた。

ちらつと見える巨大な腕が、ピーターのスタンドなのか。

良く見えない。

あまりの速さで行われる攻防を、早人の目では捉えきれないのだ。メギャン！バシユツ！

ガンツ カンツ！

ピーターが跳ね返した弾丸は、ほぼすべてが跳弾となってホル・ホースに跳ね返っていく。

たいていの跳弾は、ホル・ホースの手元に来るはるか前に消されていた。エンペラーの弾丸は、ホル・ホースの意思で出し入れ自由なのだ。

消すのが間に合わなかった一部の弾丸は、ホル・ホースにあたる直前に急に方向を変える。ホル・ホースを避け、後方に飛んでいく。

さらにいくつかの弾丸は、ホル・ホースの全身を覆うプロテクターにあたり、致命傷こそ与えないまでも肌に無数の切り傷を作っていた。

「こ、この、エンペラー Act 2 サタニック・マジエステイーは、よお……11年前に自分のスタンドを喰らって入院した時に『完成』したのよ……二度と、自分のスタンドを喰らって、大怪我しちまわないためになあ」

だからお前、弾丸を跳ね返したって、無駄だぜ。

ホル・ホースは雨のように弾丸をピーターにぶち込みながら、ヒヤヒヤヒヤッと笑った。

(ホル・ホースさん、頑張って……)

早人は息をころしながら、二人の戦いを見守っていた。

ふとアミに目をやると、食い入るようにホル・ホースとピーターの

やり取りを見ている。

やはり、アミにもスタンドが見えているのだ。

「早人さん、みんなを安全なところに……」

早人の耳に、未起隆の声が響いた。

早人は我に返り、アミを懐に抱えると、近くにいたアリツサのところにジャンプした。

「!?早人くん、何が起こっているの?」

アリツサとシンデイは、すっかり戸惑った様子でピーターとホル・ホースの対峙を見ていた。

「SW財団の人間は、みんな厳密な審査を経た上で採用されているっ
て言ったでしょ。それなのに、一体ホル・ホースは何をしているの?」

彼を止めないと……と、シンデイが言った。

「アリツサさん、シンデイさん、こっちに」

早人は、二人の手を必死に引いた。ピーターから離れたところに誘導する。

「ピーターさんが『スタンド使い』だったんだ。あの人が……裏切り者
だったんだよ」

「何を言っているの?」

アリツサが呆れたように、言った。

『……私が見ました……ピーターさん……のスタンドを』

早人の胸が急に盛り上がり、未起隆の顔が浮き出た。その顔が口を
開き、そう言った。

『ピーター……さんは、そのスタンドで、僕たちを殺そうとしていま
す』

バシユツ!

バシツ!

バツ、バツ、バツ!!

狭い空間に銃弾が飛び交うッ!

「ウオオオオオオオオッ!」

雨あられと降り注ぐホル・ホースの弾丸。

だがその弾丸を、ピーターはことごとく打ち返すッ!

(チツ、らちが明かかねーぜ……だが攻撃を止めら、それこそおしまいだぜえ)

一見冷静にピーターを牽制しているように見せて、ホル・ホースは、実は内心冷や汗をかいていた。

防御の方にも能力を割り振った状態では、弾丸の威力が落ちる。だから今、エンペラーの『弾丸』が打ち返されていても、それはある意味、当然であった。

だが、もし防御を捨てて攻撃して、万が一弾丸を跳ね返されたら、そこでゲームオーバーだ。

ホル・ホースには、防御を捨てて攻撃する覚悟は、なかった。

「貴様こそ、無駄なあがきよ……」

ピーターは、余裕たつぷりに言った。

「このまま近づいて、お前のどてっ腹に風穴を開けてやろう……プロテクターなど何の役にも立たん」

山岸由花子 その3

ザッ ザッ ザッ

「無駄ッ！WRYYYYYiiii！」

弾丸の雨に足を止められることなく、ピーターが近寄ってくる。

ピーターはポケットに手を入れ、まるで近所の公園を散歩しているような風情だ。

「ウオオオオおおっ——ッッ」

ホル・ホースが銃を撃ちながら、ジリ、ジリと後ろに後ずさりした。

(くっそーどうすりゃいいんだよお??)

ターンッ！

と、その時、銃撃音がした。

ピーターの背後から、シンデイが狙撃したのだ。

「無駄ッ！」

だが背後からの銃撃でさえ、ピーターのスタンドは苦も無く弾き返す。

跳ね返された跳弾は、シンデイの足元の岩を砕いた。

「シンデイ……なぜだ。なぜ君が僕を撃つんだ」

ピーターは、ほんの束の間シンデイを見やり、ペロリと舌を出して自分の唇を舐めた。

「無駄、無駄ッ。弾丸程度の動き、たとえば360度、どの方向から撃たれたとしても、この私なら簡単に対処できるのさ」

ピーターの気が、一瞬ホル・ホースから離れた。

覚悟は決まらない。だが、ホル・ホースは自分のプロテクターを、限界ギリギリまで薄くした。そのぶん

のスタンドパワーを、攻撃に回す。

「ソーカヨッ！試してみるかあ？オッラッラッララアッ！」

ホル・ホースの『皇帝』から、まるでレーザーの様に途切れなく弾丸が発射された。力を振り絞り、これまでよりも弾速が早まっている。

皇帝の無数の弾丸が、ピーターをおそう！

「フツ」

ピーターが、ニヤツと笑い、額の汗をぬぐった。

ピーターはホル・ホースの渾身の攻撃を、そのスタンドで弾き飛ばしていく。

その弾丸の一部が、ホル・ホースの体をえぐる。

だがホル・ホースは、臆することなく全力で、弾丸を放ち続けるツ！

「なかなかやるじゃあないか……褒めてやるよ、ホル・ホース……」

「近づくんじゃあねーツ!!!」

ホル・ホースが叫んだ。

「そうか？だが、近づかなけりやお前をぶち殺せないからな……『腹に穴をあけてやる』と言ったろう？」

ピーターは、優しく、まるで諭すように答えた。

「ホル・ホースよ、昔のよしみで、キサマに特別な扱いをしてやろう……慈悲をかけてやる。キサマは、『あまり痛みを感じないように』殺してやるぞ」

「てっ D I O さ っ …… D I O み て — な こと 言 っ て る ん じ や ね —
ー ツ ツ」

ホル・ホースは、甲高い声で叫んだ。

声が裏返り、もはや悲鳴のようだ。

(くっそお?!これだけやっても、ダメなのかよオオツ)

逃げるか？そんな思いが頭をよぎり、だがすぐに逃げられるわけがない……と、ホル・ホースは考えを変えた。

「まだわからんのか？ホル・ホースよ……私が……『私達』が、D I O 様と一心同体だと言う事を……」

ピーターは、ワザとらしく頭をかいた。

姿かたちは違えど、その口調、しぐさは、確かに『あの男』にそっくりだ……

「クツ……」

気圧されたホル・ホースは、後ずさった。

バンツ！

だが早人が投げた渾身の一投も、同時に放たれたホル・ホースの銃弾も、無情にもピーターのスタンドに弾き返された。

早人の隣ではアリツサが銃を撃ち続けていた。

「ピーター………いっただいどうして………」

引き金を引くアリツサの表情は、苦痛にゆがんでいる。

「ピーターさん………」

早人の頭から、ニユルンと、おにぎり大の『小さな未起隆』が、顔を覗かせた。

「僕はアナタのことをよく知りませんが………でも、こんなことになって残念ですよ」

「フン………下らぬことを、ペチャクチャと………」

ピーターがニヤリと笑った。

「おりゃああああああっ」

バスツ

プシュツ！

ターンツツ！

正面のホル・ホース、右後方のアミ、早人、未起隆、アリツサ、そして左後方のシンデイ、三方から同時に、ピーターを攻撃するッ

だが、ピーターのスタンドは前方からのホル・ホースの銃弾を弾き返し続ける一方、簡単に後方からの攻撃をブロックし、そして跳ね返した。

「グツウウウー！」

「ああああああ」

『ウウウウウウ………痛いデス………』

跳弾が返ってきた。

早人は自分の投げた石を左肩に、アリツサは銃弾を右わき腹に受けた。

あまりの痛みに、二人は傷口を抑えながら膝をつき、地面に突っ伏した。

未起隆の声が、早人の脳裏に響いた。

『ウウウウウ………すみません早人くん、私がいながら、アナタに怪我を

させてしまつて……』

……君を守り切れる自信がない、もう動かず寝ていてください。

「未起隆サン……危険なことは解つてます……」

そんな未起隆の願いを無視して、早人は歯を食いしばつて立ち上がった。

折れた右肩を庇いながら、早人はもう一度ピーターに投げつけるための石を拾つた。

「僕は、ぼくは……生きて、お母さんを守るんだッ！——仗助さんにも約束したんだッ！——そのために、お前を倒すッ!!」

早人が、宣言した。

「フン……小僧……お前から死にたいらしいな」

ピーターは、懐からフオークを取り出した。そのフオークを投げつけようと、早人に向かつて大きく片手を振りかぶる。

……少しだけ、ピーターの動きが止まった。

その時だ。

バシユッ！

突然、ピーターの顎が『縦に』跳ね上がった。

「なっ……」

ㇿ ㇿ ㇿ ㇿ ㇿ ㇿ ㇿ ㇿ ㇿ ㇿ

ピーターの足元の地面に、『蟬が地上に出てくる時に開けるような』親指大の穴が開いていた。

次の瞬間、その穴から再び何か飛び出し、ピーターの顎を再び打ち抜くツツ！

「ガッ」

顎を撃たれたピーターは、まるで『バトミントンのシャトルを打ち上げたよう』に吹き飛んだ。

そして、背中から地面にたたきつけられ、動かなくなった。

ヌプッ！

ピーターの頭からは一枚のDISCのようなものが飛び出し、海中へ吹っ飛んだように見えた。

「へへハ……ヒヤッハッハッ……エンペラーの弾丸で地面に穴をあけて

いたのよ」

ホル・ホースは、早人を見てウインクした。

「安心しな……峰うちって奴だ。殺しちゃいねーよ。アミの前でコロシはできねえ??ヒヒヒッ」

「でも、まさかピーターさんが……」

早人は複雑な思いで、ピーターに近づいて行った。

ひっくり返って意識を失ったピーターの胸には、3つのコインが埋め込まれていた。

そのコインを見ると、それまでヘラヘラと笑っていたホル・ホースが、今度は真っ青な顔になった。

1999年11月10日 昼 「A山近郊の廃墟」:

全身から血を噴出すハンターの肩口から、橋沢育朗のスタンド：ブラック・ナイトが顔を出した。

育朗は、心配そうにポルナレフに呼びかけた。

『ポルナレフさん、怪我はないですか?……ご無事で何よりです』

——そして、自分勝手に仲間から飛び出して、すみませんでした。

『育朗』はポルナレフに頭を下げた。

『育朗』クン……いや、助かった」

ポルナレフは尋ねた。

「君は今、近くににいるのか?無事なのか?スミレちゃんの話では……」

『ええ……僕の体はまだ——でも、どうして仗助クンが?まさか、彼も

僕と同じように……』

「そうだ、『肉の芽』にやられている」

『なんてことだ……』

元はと言えば僕のせいだ。

『育朗』は、唇をかんだ。

その頃…… 仗助とエルネストのにらみ合いは、終わりに近づいていた。

「仗助、お互い意見の相違はあるだろう。だが今やるべき事は奴らを排除することだ、違うか？」

「わかってるぜ。ただムカツ腹が立っただけだ……わかってるぜ」

仗助は、最後にエルネストをもう一にらみして、腕組みをした。

「お手並み拝見だぜ、エルネストよオ」

「フツ……」

エルネストが砂を掴んで拾い上げた。そこに、エルネストのスタンドの翼が触れる……

「喰らえイッ この砂弾を避けられるかッ」

エルネストは、手に取った砂をポルナレフたちに投げつけたッ

『ううっ！』

育朗が顔色を変えた。

空中に広がる、小さな砂粒の一つ一つ……それがすべて、小型の爆弾に変じているのが、見えるッ！

「!?チャリオ——ツツ！」

ビュワンツ！バシユツツ!!

だが、エルネストの爆弾は、ポルナレフのスタンドと相性が悪い。

砂粒の爆弾は『育朗』とポルナレフに触れる手前で、すべてチャリオツツのレイピアに切り落とされた。

しかも、ただ切り落としただけではない。チャリオツツの鋭い剣先が空気を切り裂き、爆風をエルネストに向けて吹き飛ばしたッ

「我がスタンド：シルバー・チャリオツツの剣先は、空気を切り裂きスタンドの『炎』でさえ弾き飛ばすッ」

ポルナレフは、エルネストに人差し指を突きつけたッ！

ボゴオーンンツ！

弾き返された爆炎が、エルネストをおそうッ！

「グオオオツ」

エルネストは後方に飛び、爆炎の直撃をかろうじて避けた。だが、爆風にあおられ、吹き飛ばされた。

「Urrrrry! やるじゃあないか、ポルナレフ!!」

エルネストは壁に叩きつけられ、耳と目、そして頭部から血を流し

ていた。
だがダメージを受けながらも、エルネストは楽しそうに笑いつづけた。

山岸由花子 その4

「チツ……しぶとい」

ポルナレフは舌打ちした。エルネストと仗助に備えながら、隣のハンターをちらりと見る。

『育朗』……ハンターは完全にお前の制御下にあるのか?」

『ええ、僕の思うように動かせます——ところで……さつきちらつと見たあの子、あの子——スマイレですよね』

クシヤツと育朗の顔が歪んだ。

『大きくなった……でも確かに面影がある……すぐわかった……』

二人が話している間に、仗助がエルネストの手を取り、引つ張り上げた。

仗助のクレイジー・ダイヤモンドに触れられたエルネストは、一瞬でその怪我が『治った』。

「エルネストよオ……次は、俺がいくぜ。お前は俺の指示に従え、いいな」

仗助が言った。

「フツ」

エルネストは苦笑した。

「わかったよ、東方仗助、お前の言う事を聞こう」

(……あれが仗助クンの能力…… 僕たちは『爆弾の破壊』と『壊れたものを直す』 スタンドを同時に相手にしてるのか)

育朗は、仗助の恐るべき『治す』能力を改めて目にし、顔を引き締めた。

ポルナレフも、二人をにらみつけていた。

「……『破壊』と『再生』のスタンドの組み合わせ——厄介だよな」

だが、先に相手にすべきは仗助だ。

『強力なスタンド使い二人を相手取ること』

『仗助に致命傷を与えず無力化すること』

この二つを同時に実行することが、自分に出来るだろうか?

ポルナレフは、またチラリとハンターから顔を出している『育朗』の

顔を見た。

真剣な育朗の貌。

本来ならこんな戦いの螺旋に巻き込むべきではない、真面目な好青年の戦う貌。

ポルナレフの心が、決まった。

「育朗……ここは俺に任せろ——君はスマレに会いに行け」
『!?えっ?』

育朗は、きよとんとした顔をした。

「お前は、時間を大事にしろ。だからここは俺に任せて、一刻も早くスマレに会ってこい」

ポルナレフがニヤツと笑った。チャリオッツの左手で、親しげに育朗の肩を叩く。

「イヤ……悪いけど、そうは行かないっすよ……」

仗助は、壁のかけらをクレイジー・ダイヤモンドに拾わせた。

「この壁を……『直す』」

壁のかけらを、クレイジー・ダイヤモンドが投げつけた！
ものすごい速度だ。

「危ないッ」

ポルナレフと『育朗』は左右に別れ、飛んだ。

二人の間を、壁のかけらが唸りをあげて通りすぎる。
ベシヤツ……

高速で飛んできた壁のかけらは、轟音をたてて二人の背後の壁に衝突した。

が、破片が飛び散る前に、クレイジー・ダイヤモンドの『直す』能力が働く。

壁の欠片は碎け、再びくつつき、まるで粘土のように、ポルナレフが開けた壁の穴を、ふさいだ。

「まだまだツスよおー」

仗助が釘を拾った。

Tシャツの裾を千切った。それは、ポルナレフの返り血がこびりついたTシャツだ。

その血を、釘に塗りこむ。

「仗助、私も手伝おうか」

仗助の前にスタンド、オエコモバが浮かんだ。

ビュンツ！

クレイジー・ダイヤモンドが、釘をオエコモバの足元ギリギリをかすめるように撃つツ

『G a a a a A！』

オエコモバが鳴く。

そして、オエコモバの足元を飛びぬけた釘には——手りゆう弾のピンのようなモノが取り付けられていた。

その、手りゆう弾付の釘に付着した血が『直され』、ポルナレフに向かって飛んでいくツ！

「ウオオオオ」

ポルナレフはなんとか避けようと、近くのコンテナの陰に隠れた。

だが、釘はヌルつと飛行する方向を変えた。

ポルナレフ達が隠れたコンテナの方向に真っ直ぐに飛んでくるツ

！

自動追尾爆弾だツ！

しかも、一発ではない。

仗助は、立て続けに三発の、自動追尾爆弾を放っていた。

三発の自動追尾爆弾が、それぞれ異なる軌跡を描いてポルナレフを襲うツ！

（ヤバいぜ）

ポルナレフの額に、汗が吹き出る。

シルバー・チャリオッツが、迎撃しようとしてレイピアを構える。

『イヤツ……ポルナレフさん、ここは僕に任せてツ！』

そのとき、『育朗』が動いた。

『育朗』のスタンド：ブラック・ナイトが、ポルナレフの前に立つツ！

バシユツ

釘が、スタンドの幽霊であるブラック・ナイトを通り抜ける。

だが、通り抜けるときに、スタンドの影響か、釘についていた信管

が外れたッ

バフンッ!

「馬鹿なッ」

ポルナレフは爆発の直前、カッチュウをはずしたチャリオツツで、『育朗』をハンターの方向へ蹴り飛ばした。

そして猛スピードでレイピアを振り回し、信管の外れた爆弾と自分の手前の空気を切り刻んだ。

爆風の前の空気を切り裂き、爆炎を弾き返すッ!

ドツグゴオオ——ン!

「ウオオオオオ!」

自分たちに向かって跳ね返ってきた爆炎を、仗助とオエコモバは必死に避けた。

「……ポルナレフさん……イヤ、マジで尊敬するッす」

仗助が言った。

「さすがはD I O様もみとめたスタンド使いつすねー」

「はっ、言ってる……」

そのとき……

ぐにやりっ

突然、ポルナレフ達の背後の壁がゆがみ、膨れ上がった。

壁は、まるで焼きかけのホットケーキから浮き上がってきた泡のように、膨らみ、破裂した。

その泡から、スタンド：プライマル・スクリームが顔を出した。

続けて、チャダのとぼけた顔が、壁の穴からピヨコンと飛び出した。

「……おいチャダ、貴様 予知の少女はどうした?あの波紋少女は殺せと言ったが、予知の少女を殺すことは許さんぞ……」

エルネストの言葉に、仗助は眉をしかめた。

「スマン、エルネスト様……逃げられてしまいました」

チャダが、おずおずと言った。そしてすぐに、まるでスキヤットのようになり、自分がいかに頑張ったか、だがいかに運がなかったのか、言い訳をまくし立て始めた。

エルネストはチャダの言い分を完全に無視しながら、眉をひそめて

いる仗助の肩を、ポンと叩いた。

「仗助、怒るな。あの波紋使いが……いや、その一族がD I O様の天敵になり得る……そのことは、わかっているだろ」

「ああ……だがよお……」

気にくわねえ……仗助が低い声で言った。

エルネストはその様子をじつと観察し、やがて言った。

「……わかった。波紋の少女にお前がこだわるのなら、お前が責任を持つのなら、その女の始末は、お前に任そう」

「勝手なことをぬかすなア!!」

『育朗』の操るハンターと、ポルナレフが、三人におそい掛かった。

『G y a a a a a a a a a a a a a a a a!』

すかさずプライマル・スクリームが、二人の前に壁をつくる。

だが、壁が伸びあがってくる速度は、『育朗』と、ポルナレフのスピードに追い付けない。

「遅いッー」

二人は壁を飛びこし――

ブツチイ

『何だ?』

イヤ、二人が壁を飛び越そうとした瞬間だ。そのとき、壁が、二人の方向へ千切れ飛んでいった。恐ろしいスピードだ。

中にいた二人は、なすすべもなく壁に跳ね飛ばされた。そして、その『プライマル・スクリームの壁』にあつという間に取り囲まれていく。

「グッ……ばかな……」

『これは……仗助クンの能力の応用か?』

「そうつす、床に付いていたアンタたちの『血』を直したツス……」

仗助が、なぜか少しホットしたように言った。

「よかったツス。お二人を傷つけずに、捕まえられて」

『クッ……ハンターを動かせられない』

育朗は、必死にハンターを抵抗させていた。

その様子を、ポルナレフはじつと見ていた。

『育朗』、お前は行け……」

『!?ポルナレフさん?……でも、僕はッ!』

「このガキッ、いいからさっさと行けエ!」

ポルナレフはチャリオッツを上半身だけ出現させた。チャリオッツの上半身は、まだ拘束されていなかったのだ。

下半身を固定されたチャリオッツは、クルリと身をひるがえしてハンターの方を向き、エメラルド・ソードを、育朗もろともハンターめがけて振り下ろすッ!

ザッシヤアッ!

『な……』

エメラルド・ソードは育朗のスタンドをすり抜け、ハンターの肉体だけを切り裂いた。

「Gyaaaaaa!」

ハンターの上半身と下半身が切断され、プライマル・スクリームに掴まれていなかったハンターの上半身が、床に崩れ落ちた。

そして、ハンターの上半身にとりついていた『橋沢育朗』は、再び自由の身になっていた。

1999年11月10日 日没後 「屍人崎」:

日が沈みかけたころ、ようやく海岸線沿いに近づく車が、見えた。

「あれは?」

「……SW財団の車に違いないわ」

シンデイが、元気な声で言った。シンデイは先日未起隆の手当てのおかげか、大分体調も回復してきたようだった。

「私たち、助かったのね……」

シンデイはクイツと立ち上がると、道路脇へと歩き始めた。

「迎えに行ってくるわ」

「ちよつと、あんたも怪我してるのよ……無理しないで」

アリツサが、弱弱しくいった。

脇腹を抑える手の隙間から、血がにじんでいるのが見える。自ら撃った弾を弾き返され、負傷したのだ。

「大丈夫よ。もうすっかりよくなつたわ……今はアリツサ、アナタの方が怪我がひどいのヨ、あなたこそ静かにしていて」

シンデイは道路の横に立ち、大声を出しながら大きく手を振り続けた。

(やった……これで、僕たちは助かるんだ)

早人は心底ほつとしていた。

ガクツと全身の力が、抜けた。

これで、アミを安全なところに連れて行くことが出来る。S W財団の本部にも連絡が取れた。今頃は杜王町の他のスタンド使いの人達も、町を守るための行動を開始してくれているハズだ。——仗助さんも、スミレさんも、みんなきつと無事だ。

早人は、がんじがらめに縛られているピーターを悲しげに見やった。

がつくりとうなだれているピーターの胸には、三つの傷口が見えた。ホル・ホースがピーターの胸に埋め込まれていたコインを、無理やり取り出した跡だ。

そのホル・ホースはピーターから少し離れたところに立っており、時々コインを眺め、また、ピーターを見つめている。

キキーツ

車がシンデイを見つけ、停まった。

(ついに助かるんだ……)

早人の心が、泡立つ。

アリツサが、歓声を上げた。

ガチャリ

シンデイがドアノブに手をかけ、ドアを開く……

開かれたドアから出てきたのは、金髪の大男だった。

その男は……

「仗助サン！」

その男を見たたん、早人は安心感で胸がいっぱいになった。

「早人……」

なぜか、東方仗助は早人を見つけて 少したじろいだ様子だった。「そうか、無事だったかよ。そりゃあよかったぜ………ホッとしたよ。だがよお……」

仗助の目から、笑みが消えた。

そして、仗助の背後からゆらり、とスタンド：クレイジー・ダイヤモンドを出現させた。

何故、スタンドを出すんだろう？

それに、何故こだわりの髪型を変えたの……

早人は、フツと心に浮かんだ疑問を、必死に押し殺そうとした。

その時……

「動くなあぁッ!!」

ホル・ホースが怒鳴った。

メギヤンツ！バシユツ！

ホル・ホースは叫ぶと同時に、自身のスタンド：エンペラーの弾丸を発射した。

エンペラーの弾丸は、大きく弧を描いて飛び、仗助の頭部を打ち抜ぬこうとした。

ホル・ホースが放った銃弾は、クレイジー・ダイヤモンドがとっさに投げつけた岩と正面衝突した。

空中で岩が破裂し、辺りに破片を振り撒くッ！

「えっ？仗助さん!!……ホル・ホースさん、どうして？」

早人はすっかり面喰っていた。

ト ト ト ト ト ト ト ト ト ト ト

「突然危ないっすよ、ホル・ホースさんよオ——」

仗助は、エンペラーの銃弾を拳で撃ち落とした。

「仗助……貴様……なんで裏切った。コノヤロー」

ホル・ホースが吠えた。

オイ………テメ——……そのドアの後ろは何だ？まさかと思うが……そのドアの向こうに見えるのは、奴らの基地じゃあないだらうな」

「そうだと言ったら、どうするんすか？」

仗助が、サラツと尋ねた。

「……シンデイ、仗助から逃げろツ！　そして仗助エツ！　テメエ——
わっ、ぶっ殺すっ！」

ホル・ホースが、立て続けにエンペラーの弾丸を放つ。

『ドララッ！』

だが、エンペラーの弾丸はまたしても、すべて仗助のスタンド……
レイジー・ダイヤモンドに撃ち落された。

「ホル・ホース先輩よお……こんなコーゲキ、『無駄』だぜえ？……そ
れに、アンタが『裏切り者』を非難すんのかい？」

仗助は、懐から櫛を取り出し、丁寧に金髪に櫛を入れていく。

「お、おりゃあ、奴との契約はとづくに終わってる。別に裏切っちゃい
ねえ——ツ」

ホル・ホースが言った。

「俺が何をしようと、奴とは関係ネ——ぜ」

「なるほどね——。ビジネスライクな関係って奴ツスカア？」

『ドラッ！』

仗助は、クレイジー・ダイヤモンドで地面を殴った。

拳圧で、岩と、土が吹き飛び、ホル・ホースに向かって飛んでいくツ
！

「おおおお——おおっ！」

ホル・ホースは必死にエンペラーの弾幕をまき散らした。飛んでく
る土砂の威力を少しでも相殺させようと、足掻く。

だが、無数の泥、岩、土に打たれ、ホル・ホースは膝をついた。

「シンデイ、なにしてるツ。俺がひきつけているうちにさっさと逃げ
やがれツ」

ホル・ホースは銃を連射させながら、叫んだ。

だが……

「クツ　クツ　クツ……」

苦戦するホル・ホースをあざ笑うかのような、押し殺した笑い声が
響く——シンデイからだ。

「クツくつクツ ムダムダ無駄ア！」

「眼の奥に狂気の色をたたえたシンディが……叫ぶ。

ドグシヤツ！」

叫び声とともに、まるで『ろうそくを溶かすように』シンディの体がドロドロと崩れていった。

「シ……シンディさん……」

うそだ……早人は、目の前の光景が信じられず、唾然としていた。あの優しかったシンディが……

そして、崩れたシンディの体の中から現れたのは——マキシムの顔だ。

だが、マキシムの貌は醜く、赤く、腫れあがり……そして下半身と両腕が無くなっているッ！

マキシムが顔を出すと、『シンディ』であった体は一気に崩れた。そして、黄色のスライム状になり……SW財団の車を覆った。

「何だとお？」

ホル・ホースが唇をゆがめた。

「クツ、いつの間に入れ替わっていやがったッ」

「仗助さん、逃げてッ」

早人は無我夢中で叫んだ。

まさか、『裏切り者』が、もう1人いるなんて

——しかもシンディさんが——

早人には、まるで悪夢の中の出来事のように思えた。

一体、いつの間に入れ替わったんだろう？あの優しかったシンディさんは、何処に……

これが『夢』ならばよかったのに……

そして、なぜ自分たちが仗助サンと戦わなければならないの？

酷すぎる……

早人は、にじむ目をこすり、叫んだ。

「仗助さんも、ホル・ホースさんも止めてッ！二人が戦うなんて、相手を間違っているよッ」

「早人才、騙されるなッ！今は、こいつもD I Oの手下なんだよおッ」

ホル・ホースが、仗助を襲撃した。

だが、またしてもホル・ホースの弾丸を、仗助はあつさりと跳ね飛ばした。

「ホル・ホース先輩。アンタのスタンドは接近戦じゃ何もできねー。やられちまいなア」

仗助が走るッ！

「へっ、やられるかよ……皇帝……Act2 サタニック・マジエステイーだッ！」

ホル・ホースは皇帝をかまえ、体にプロテクターを出現させた。

『ドラララッ！』

「ガッ ガボッ！ ゲフウッ！」

ホル・ホースは、クレイジー・ダイヤモンドの攻撃をプロテクターで受け流した。

超強力なクレイジー・ダイヤモンドの攻撃を、歯を食いしばって受け流す。

そして、エンペラーを構え、至近距離から、皇帝の弾を仗助のドテッパラにぶち込むッ！

「こうすりゃあ、俺だって接近戦もできるんだよ。なめんなよッ!!」

ホル・ホースは、防御に集中しておろそかになっていた仗助の足を、払った。

そして、バランスを崩した仗助の頭部に、弾丸の雨を降らせようとした。

『ドララララッ！』

だが、クレイジー・ダイヤモンドは先ほどのピーターがしたよりも簡単に、エンペラーの弾丸を全て叩き落とす。

そして……

「グオッ！」

叩き落とされた弾丸が、『直って』ホル・ホースの顔面をおそうッ！

間一髪のところでした。スタンドを消したものの、一瞬目を回したすきに、懐にもぐり込んだ仗助の生身のラッシュがホル・ホースをおそっ

た。

「ウゴォー！」

ホル・ホースが吹き飛ばすッ！

そして仗助が、ゆっくりと一行の方を向いた。

⌘ ⌘ ⌘ ⌘ ⌘ ⌘ ⌘ ⌘ ⌘ ⌘

「さて、皆にはもう一度戻ってもらおうツスヨ」

仗助が一行に言った。

「ナツ？」

「うつ……」

プシュツ

クレイジー・ダイヤモンドが、手に持った『何か』を一行に向かって弾き飛ばした。

「クツ！」

「アアアツ！」

「チツ！」

高速で飛んでくるその緑色のものが当たると、たちまちそれが『網』に変わった。

『網』の中に、1人1人、拘束されていく。

アリツサ達は何もできないまま、仗助が開いたドアの中に次から次へと引き込まれた。

いや、仗助の投げた『網』を避けたものがいた。

アミ

アミを抱っこした早人

そして未起隆の三人だ。

未起隆は早人のプロテクターとなっていた。

そのため、未起隆スーツの力をかり、網が早人にかかる一瞬前に、『アミを抱っこしたまま飛び下がる』ことが出来たのだった。

「未起隆、早人……そうだよな、お前たちが、いたな」

仗助は肩を落とした。

すぐさま、クレイジー・ダイヤモンドが早人たちめがけて、緑色の『網』を撃つ。

バシユツ

「ううう……ウオオオオ！」

とつきに、早人は、足元に転がっていた石を放った。

パシユツ

『網』は石に絡まり、そしてスルスルとドアの中に引きこまれる。

「仗助さんッ！お願いだよッ、やめてよッ」

どうということだかわからず、混乱したまま、早人は仗助に背を向けて走り始めた。

「グレートだぜ……」

少し躊躇した後、仗助は走っていく早人を見逃した。

唇をゆがめて、走り行く早人に背を向けた。

「後を追うのは止めたぜ。逃がしてやるッス……アバヨ、早人オ、未起隆ア」

心なしか、その声はどこか満足げであった。

「いいの？」

アンタがやらないなら、私が……そう言いかけたマキシムは、仗助の目つきを見て、あわてて言葉を濁した。

「帰るぜ」

そう言い捨て、仗助は『ドアーズ』のコインが貼られた車のドアノブに、手をかけた。

その時、車の中にいた本当の『乗員』が行動を起こした。

ドジュウツ！

『音』が響く。

まるで、その『音』にはじかれたかのように、車をくまなく覆っていたイエロー・テンパランスが、突然吹き飛んだ。

ドサツ

「なっ！何っ？」

スタンドのフィードバックにより、マキシムも吹き飛ぶ。

無様に吹っ飛んだマキシムの上に、『岩』が落ちてきた。

「グッ」

マキシムはわずかに身に残っていたイエロー・テンパランスで、

岩の直撃を防いだ。だが……

「なっ……止められないッ……岩が……迫ってくる……どうしてよッ！」

マキシマムが支える岩がどんどん重みを増していく。

そして、イエロー・テンパランスの防御膜をじわじわと浸食していく……

「ちよっ、仗助 助けてッ」

「ダメだ。そりゃあできねー。その能力を解除しようとするにやあ、俺も命を懸けなきゃいけないっすからね??」

そんなつもりはねーっす 仗助の冷たい言葉が返ってきた。

「ガッ……ガ」

話している間にも、岩はどんどん圧力を増していく。

そのうちに、岩の重さが、イエローテンパランスの防御力を超えていく。

……やがて、マキシムは岩に押しつぶされ、今度こそ意識をうしなった。

バタン！

車の反対側のドアが開き、出てきたのは二人のスタンド使いだった。

広瀬康一と山岸由花子の二人だ。

『S H I T 命令通り 石を重くしてゾンビのスタンド使いを倒しました』

小柄な人型のスタンド 『エコーズACT3』が広瀬康一のところに戻って、報告した。

『これで、残る《敵》のスタンド使いは後1人デス』

コッ コッ コッ コッ コッ コッ コッ コッ
「仗助クン?」

康一は変わり果てた仗助を見て、口ごもった。

何と言っているかわからず、ただ仗助を指差した。

「おー……コーイチにユカコじゃねーかあー」

こりゃあー杜王町のスタンド使いが勢ぞろいだな 仗助は唇をゆ

がめた。

「由花子さん……どういふ事なんだろう?」

下がっていて、僕が……そう言っつて由花子の前に出ようとする康一を、由花子が引き留めた。

「……わからないわ、でも……」

ザワザワ……由花子の髪の毛がザワメキ、しなり、延びていく。

由花子の髪はミルミルうちに腰まで伸び、足首まで伸びる。

そしてザワザワとうごめき、ギユギユツツと互いにこすれあいながら地面を這うように動き、仗助に向かってまるで蛇の様に近づいていく。

ラブ・デラックスの髪の毛は、ギユツと固まり、小柄なヒト型を取る。

自身の髪の毛を自由自在に操るスタンド、由花子のラブ・デラックスが仗助をおそうッ!

『ギユギユ……ギユラ……ギユララツツ!!』

ラブ・デラックスの『髪の毛の拳』がクレイジー・ダイヤモンドに殴り掛かった。

『ドラアツ!』

対するクレイジー・ダイヤモンドが、迎撃する。

『史上最高のスタンド』スタープラチナのガードさえも弾き飛ばすことが出来る、超強力な拳が、ラブ・デラックスの『髪の毛の拳』に襲い掛かるッ

ビシヤッ

「ぐうッ……こりゃあ、まじーぜ」

仗助が、顔をゆがめた。

『髪の毛の拳』は、クレイジー・ダイヤモンドの拳に触れた途端、『ばらけた』のだ。

ばらけた髪の毛は、あつという間に伸びて、瞬く間に仗助とスタンド：クレイジー・ダイヤモンドの両腕を拘束した。

「知ってる? 髪の毛って、一本で150g位は支えられるのよ。この髪を何千本かまとめれば、3〜500Kg位の引っ張り強度があ

るってわけ」

私の髪は、普通の髪の10倍は強いわ。

アナタのスタンドで引きちぎれるかしら？

由花子が嘲った。

「くっ……やるじゃんか。ユカコよお」

「気安く呼び捨てにするんじゃないわよオツ！」

それまで氷の様に冷たい態度だった由花子が、突然絶叫した。

同時に由花子の髪の毛がいつそう仗助を締め付けるツ！

「がんじがらめにした後で、思いつきり締め落とす。そして、口からチ

○ポコを引きずりだしてやるわ、このチ○○コ野郎ツ！」

「いっ……いやだなあ、由花子さんってばあ??」

………康一の言葉は、(幸い?)由花子の耳にはとどいていなかった。

「その首をねじ切ってやるわ。東方仗助ツ」

由花子は目を怒らせ、吐き捨てるような口調で言った。

その目元、眼輪筋がピクピクと痙攣している……

「グッ……」

仗助の首に由花子の髪の毛が巻き付いた。すぐさま、締め上げにかかると、

仗助の顔が、どす黒く染まった。

「ちよつと、由花子さん！」

「グッ……康一……俺の事なら心配無用だぜえ」

仗助は、ニヤリと笑って見せた。

そしてチョップピリだけ、かろうじて動かさせたクレイジー・ダイヤモンドの左手に、自分の上着のボタンを千切らせた。

そのボタンを潰し、改めて鋭利な刃に変化させる。

「これは、ボタン・カッターだぜえ??」

バシユツ

次の瞬間、カッターが髪の毛を切り落とした。

クレイジー・ダイヤモンドの右手が、あつという間に解放される。

「無意味よ、そんなあがきでこの『ラブ・デラックス』から逃れること

はできないわよッ」

「へッ……」 『ドラリアアッ!』

次の瞬間、自由になった右手で、クレイジー・ダイヤモンドが自分の左腕めがけラツシユを放った。

クレイジー・ダイヤモンドの腕に殴られたラブ・デラックスの『髪の毛』が元の長さに戻っていく

……すぐに左手も自由になった。

『ドラリアアア——ツツツ!!』

クレイジー・ダイヤモンドは止まらない。両腕で益々高速の——数千もの——ラツシユを放った。

その腕に触れた ラブ・デラックスの『髪の毛』を、超高速で次から次へと元の長さに『直って』いく。

そして、ラブ・デラックスは完全に仗助から離れた。

「なっ……なんですってェ」

由花子は氣勢をそがれ、無意識に一步、後ずさった。

「ふ——っ。やっぱり今はお前たちとやりたくねーな。じゃあなア。コーイチ、ユカコ」

仗助は朗らかにさういうと、ドアーズの『扉』に飛び込み、姿を消した。

寄生虫バオー その1

『それ』はまだ幼体だった。ただ本能に導かれ、安全な『家』を、『繭』を欲していた。

『それ』は本能に支配され、高度な知性を持っていなかった。

『それ』は無力であった。単体では、ただ、ただ種の保存本能に導かれ、周囲をうねり這い回り回るだけの存在でしかなかった。

繭として選んだ宿主に身を委ね、その身と子を守るのが、『それ』の生存戦略であった。

だからこそ、『それ』は自ら動き、生存競争を戦うかわり、宿主にその種の限界を遥かに超える程の戦闘能力を与えるのだ。イヤ、より正確にはその『キツカケ』となる『モノ』を宿主に与えるのだ。

その『モノ』を宿主に与えるため、『それ』はゆつくり、ゆつくりと繭の体内に糸のような神経節や分泌管を伸ばしていた。

糸は繭の体に繋がり、『それ』と繭をつないでいく。

糸を介して『それ』は繭から生存に必要な養分を吸収した。そして、ほんのちよっぴりではあるが繭と『それ』は感覚を、知性を、そして感情さえも糸を介し共有していった。

それは、元々は宿主の危機に際して、「宿主」に力を貸せるようになるためのモノであった。

『それ』は繭・宿主の体内を居心地良く感じ、そこに潜んでいられることに十分満足していた。

宿主は『それ』にとつてまさに理想の繭だったのだ。

『それ』の本能にプログラミングされた価値観によれば、宿主とはあくまで、子を育て、我と子を守るための使い捨ての繭でしかないはずだった。

やがて時が来て、子を産むときが来れば、『それ』は無数の卵をゆだねる。

卵はやがて『宿主』の中で孵り、生まれた無数の子達は『それ』と『宿主』をともに喰らい、成長し、そして外の世界に出ていく。

世界を覆い、喰らい尽くす為。

……それが、本能にプログラミングされた、本来の『宿主』の使い道だった。

そして本来『糸』は、『それ』の身を守るために、宿主に力を与えるための道具でしかなかった。

だが、その宿主は強固な意志を持っていた。いつの間にか、『糸』を通じて宿主の感情が、意思が、『それ』に伝わり、いつしか『それ』は本能からの指令に加えて、宿主の意思を尊重して、動くようになっていた。

かつて『それ』と宿主は力を合わせ、自らと 宿主が守りたいと思うモノを取り戻すため、共に戦いもしたのだ。

だがその後、理由もわからぬまま突然宿主が呼吸を止めた。だから『それ』は、我と子を守るために、宿主の命を救うために、宿主を仮死状態にし、子をゆだねるのを止め、自身も眠りに入った。長い、永い眠りに。

そしてその眠りの間も、糸はゆっくり、ゆっくりとその数を増やし、宿主と『それ』とを繋ぎ続けた。

その繋がりは、徐々に強固になっていった。いつしか、『それ』：寄生虫バオーにとって、宿主はただの繭ではなくなっていた。

そしていま暗闇の中で、再び宿主が呼吸を止め、眠りに落ちようとしていた……

もはや寄生虫バオーは、宿主と一心同体であった。寄生虫バオーは、自分の体が溶けていくような心地よい まどろみの中に堕ちていった。

ハズであった。

1999年11月10日 夜：「M山近郊」

「Garuuuuu」

ネリビルは、何者かに担ぎ上げられた状態で目を覚ました。

何事か？と周囲を確認して、ネリビルはほっと息をついた。

意外なことに、ハンターがネリビルを運んでいるのだ。

本体であるネリビルが気絶している間に、ネリビルのスタンド：カントリー・グラマーが周囲にまだ少し残っていたハンターたちを呼び寄せたのだろう。

「そう、いい子ねえ」

ネリビルは、自分のスタンド：カントリー・グラマーの喉をくすぐった。

「なんだよ……お前のスタンドも、俺のスタンド同様に勝手に動けたのかあ？」

いつの間にか、テイラーも目を覚ましていた。ハンターの背中に揺られていることに気が付いたテイラーは、バニックになりかけ……ネリビルの馬鹿にしたような視線に気が付いた。

「お前、ホントの能力を秘密にしてやがったな……だがおかげで助かったぜ。ヒヒヒヒ」

「あら、この子が勝手に動けるなんて、今まで知らなかったわ——私のスタンド能力もまだ成長しているのよ」

ネリビルは目をわざとらしく見開き、眉毛をぱちぱちとさせた。

そうかよ……テイラーは、肩をすくめた。

「まあいいぜ……それで、俺たちはどこに行こうとしているんだ？まあ、地獄へ……って訳じゃあないだろうがよ……」

イヤ……テイラーは、はき捨てるように付け足した。

「まあ、何処であれ俺たちのいる処が、地獄か……」

（そうよ……この地獄から逃れるために、私たちはDIO様におすがりするしかないの）

ネリビルは心の中で呟いた。

飛び交う弾丸、爆発音、血、自分をつかむごわごわした毛むくじやらの手……子守唄代わりの泣声……

地獄と言う言葉から、うつかり幼少時の記憶を思い出しかけ、ネリビルはブルブルツと首を振った。

忘れるのよ。

あの、かわいかった、光を信じていた幼子はもうどこにもいない。

今の私は、DIO様のしもべ……

それが、私の幸福……

物思いにふけるネリビルの横で、テイラーは話し続けていた。気もそぞろなネリビルの様子には、気づいていないようだ。

「——ところで俺は、ユンカーズを解き放つておいたぜ。だからあの二人——億泰と噴上——の方は問題ないってわけだ。もうすぐ、確実に始末できる」

テイラーはにやつと笑った。

「今頃、ユンカーズは奴らが倒したハンターやゾンビ共を『喰って』とんでもねー力を蓄えてるはずだからな——つまり今のところ、俺たちは自分たちの身の安全だけ考えて動けばいいってことよ。できれば、なんとかしてDIO様と合流したいもんだが」

ハンターたちは、森の奥へ、DRESSの基地とは反対方向に移動しているようだった。

一度、ネリビルは、ハンター達を基地の方へ向かわせようとした。だが命令を下す直前に気が変わり、そのままハンターたちが進みたい方向に、ただ進ませていた。その方が、距離が稼げると考えたからだ。

もう少し経つと、日が登り始めるはずだ。ネリビルは、焦り始めていた。早く日中も日陰になる場所を探さなければ、おしまいだ。できればこのまま、森の中の鍾乳洞にでも隠れた方がいい。

もし、DIO様のお近くに早く戻りたいとかなんだとか、テイラーがうるさい事を言ってきたら、テイラーの奴は喰ってしまおう。何も身を隠す場所がないところで、みすみす朝日を迎えたくはない。

フレッシュなテイラーの血……ゴクリ とネリビルのどが鳴った。日が登る前に安全な処に隠れるためには、もう少し早く移動する必要があるだろう。

ネリビルはカントリー・グラマーに命じて、追加で何体かのクリーチャーを呼び寄せさせた。



「Gxyzuaaaa!」

「Dbyazagazyatede!」

クリーチャー達は、カントリー・グラマーの呼び声にこたえて続々と現れた。一体、また一体と森の中から姿を現し、一行に合流していく。

クリーチャーの数が増えるたびに、ネルビルは新たにやってきたクリーチャーに命じて、自分とテイラーを担がせた。そうして、そのクリーチャーに体力の限界まで道を急がせる。クリーチャーがつぶれそうになったら、また新しいクリーチャーに二人を運ばせる。

これで少しは早く進める。後少しで、あらかじめ森の中に用意していた避難所に、たどり着けるはずであった。

だが

「Garyyuuuuuu！」

突然、聞き覚えのないクリーチャーらしき咆哮が、聞こえた。近くからだ。

戦いを前にしたときの様な殺気が込められた咆哮。しかも、あきらかにハンターの鳴き声ではなかった。

ネルビルは周囲をよく見ようと、自分を担いでいたハンターに命令した。ネルビルの命令に答え、ハンターは、上半身だけとなったネルビルの体を、上に掲げる。

一見、周囲は静かだった。ジョースターの血族達がおそってくる気配もない。

だが『何か』おかしい。

ガチャツ！

「Barururur……」

と、背後から何か聞こえた。

枯葉が擦れる音、岩が落ちる音、そして、うなり声だ。

ネルビルがあわてて振り返ると、そこにいたのはハンターではなかった。

「馬鹿な……アンタ、生きてたって言うの……」

ネルビルは、かすれ声でつぶやいた。

そこにいたのは、まるで黒い狼のような獣だった。その獣は、まるでホラー映画の怪物のように、下半身がうねうねと動く触手に覆われ

ている。

バオー・ドッグだ。

コイツは忘れもしない、ネリビルに反旗を翻し、両腕を奪ったあのバオー・ドッグであった。

いや、『あの時』は、普通の犬の大きさだった。だが今は、ホツキョクグマ程の大きさになっている。変わりすぎだ。

モデュレイテッド・バオーの回復能力が、暴走した結果なのだろうか。

「Garuu……」

バオー・ドッグは黄色い目でネリビルを睨み付け、牙を剥いた。

モデュレイテッド・バオーの回復能力が異常発現したその姿は、まさに怪物だった。

「おい、ネリビルッ。テメエ何を呼び寄せやがった？」

テイラーが、泣き声を上げた。

黙ってな。

ネリビルは、テイラーを無視して、バオー・ドッグ……であった怪物を、睨み付けた。

「何？アンタやるってえの？ご主人様に向かって……生意気ね」

ネリビルは、精神を集中させた。

以前この怪物が歯向かって来たのは、理由がある。あの時は、暴れまわるバオー・ドッグに心の何処かで『恐怖』を抱いてしまったのだ。だからあの時は、カントリー・グラマーの能力が、十分に発揮出来なかった。

しかし今は違う。DIO様の眷属、屍生人（ゾンビ）として生まれ変わった私に、恐怖など無いのだ。

『キュアアアアア！』

カントリー・グラマーは、これまでで最も甲高く、大声量の金切り声を上げた。

その金切り声には、周囲の動物を支配する力がある。

声を聴いて、近くのハンターたちが、ビクツと身を震わせ、地に伏せた。

バオー・ドッグも、体をこわばらせる……

これで大丈夫……この怪物も支配出来るはず。

ネリビルは、にやりとした。

再びバオー・ドッグをしもべにできたら、戦力が大幅に上がる。もう、逃げなくてもいいだろう。

——だが、その怪物は、ブルブルと身を震わせると、声など聞こえていないように、動き出した。カントリーグラマーの金切り声に、一切反応しないッ！

「馬鹿な……」

「G i p h y a a a r u u u u」

バオー・ドッグは奇妙な唸り声を上げながら、テイラーを運んでいくハンターに、おそいかかった。そして、あっさりとハンターを蹴散らす。

テイラーが、地面に放り出されるッ。

「チッ」

地面に落ちざま、テイラーが口をプツと膨らませた。ユンカーズを、バオー・ドッグに向かって吐きかける。

「G y a r u r u u u u u u u !!」

バオー・ドッグの頭に、ユンカーズが喰らいつくッ！

ユンカーズは、それぞれ身をくねらせ、振じった。バオー・ドッグの頭に歯を立て、穴をあけて体内に入り込もうとする。

「の……の、脳みそを吸い尽くしてやるぜえ〜」

俺のユンカーズは、オリジナル・バオーさえも倒したんだぜ。

テイラーが震え声で強がった。

しかし……バオー・ドッグはブルツと苛立たしげに頭を振ると、全身から毛針：シューティングビースス・シューティングを、発射した。

ブシュッ!!

ブシュッ!!

ブシュッ!!!

バオー・ドッグの頭に喰らいつこうとしていたユンカーズは、皆、至近距離からシューティングビースス・シューティングの直撃を受け、弾

き飛ばされ、地面に縫いとめられた。

ボツ

そして、地面に縫いとめられたユニカーズは、シューティング・ビース・ステインガールの発火現象に巻き込まれ、あっという間にすべて燃え尽きていった。

「げぶっ……ばっ……ば……か……なあ」

テイラーが、喉をかきむしった。

一本のビース・シューティングが、テイラーの喉を貫いていたのだ。

「V u o o o o o ……！」

同時に、ネルビルをかついでいたハンターも、毛針の攻撃を受けていた。

毛針は空気と反応して燃え上がる。その炎に焼かれ、火だるまとなったハンターは、ネルビルを地面の上に放り出した。

「クツ……」

ネルビルは、必死に地面をかきむしり、なんとかバオー・ドッグから離れようとした。

バオー・ドッグは、ネルビルではなく、テイラーに目を付けていた。テイラーに向かって、バオー・ドッグが近寄っていく。

そして、無造作にテイラーの右足を踏みつけ……

その足を、体表から発生させた酸で、グチャグチャに溶かした。

「なっ……ぎいやあああ!!」

喉を貫かれたにもかかわらず、テイラーが悲鳴を上げた。

「やめっ……止めッ……あああ ああ ああ あ」

「Baruxu、Barurunn……」

バオー・ドッグは大口を開けた。そして、すすり泣き、悲鳴を上げるテイラーを、あっさりと頭から一飲みにし始めた。

まずテイラーの頭が、肩が、腕と胴体が……そして最後に時折ビクビクと震える足が、バオー・ドッグの口の中に消えて行った。

「やめなさいッ！」

ネルビルはカントリー・グラマーを飛ばし、バオー・ドッグに命令

した。

「テイラーを、吐き出しなさいっ！」

だが……バオー・ドッグはカントリー・グラマーの命令には一切注意を払わず、逆にカントリー・グラマーを、前足で踏みつけた。

「グハッ」

スタンドが踏みつけられたフィードバックが、ネリビルを襲った。ネリビルは、地面に押し付けられ、這いつくばった。

何故、バオー・ドッグがスタンドを触れるの？

……ネリビルの疑問は、バオー・ドッグが口からテイラーのスタンド、ユンカースを吐き出した事で解決した。

あああ……なんてこと、この怪物はテイラーの頭をDISCごと喰ったのだ……

絶望に染まるネリビルが最後に見た光景は、大きく口を開けた、バオー・ドッグの巨大な牙だった。

1999年11月10日 夜 「R峠」：

緑深い山々の針葉樹の森に、紅葉した広葉樹の葉がまるで雨のように降っていた。

スミレとアンジェラが意識不明の二人 —— 虹村億泰と噴上裕也 —— を見つけたのは、その森を通る山道の上であった。

無事にアジトを抜け出すことに成功したスミレとアンジェラは、スミレの予知に従って億泰と噴上を探し山道を走った。そして、山道をだいぶ進んだ先、下り坂が終わり、丁度廃村が見下ろせる所で、ついに二人を見つけたのであった。

「億泰クンッ！ 噴上クン！ 目を覚ましてッ！」

スミレは、意識不明の二人に向かって必死に話しかけた。だが、二人ともまったく反応がない。

コオオオオオオッ……コオオオオオオオオオオオオオオオオオッ

スミレの隣では、アンジェラが二人の手を握って、生命のエネルギー『波紋』を流し続けていた。

だが、いくら『波紋』を流しても、呼びかけても、二人はまったく

目を覚まさず気配がなかった。二人とも呼吸はしっかりしているし、心臓も規則的に動いている……だが何をしても無反応なのだ。

「まさか、一人がやられているなんて……」

スマレは激しい後悔の中にいた。やはり、自分一人で育郎を探しに行くべきだったのだ。関係ない人をムリヤリ連れてきたスマレが、すべていけなかったのだ。

だが、だからこそ、何としてでも二人を助けなければ。

まず、スマレは二人を乗せきれぬ大きさの板切れを探すことにした。板切れがあれば、何か二人を乗せる担架のようなものを作ることが出来る。二人を担架に乗せることが出来たら、アンジエラのスケーター・ボーイで二人を安全な場所に動かせるはずだ。

この森の中ならば、丈夫な木などいくらでもあるはずだ。スマレは WitD を上空に飛ばし、何か担架の材料に使えるものが無いか探させた。

だが…… WitD は、担架となる素材を見つけるより先に、3台のバイクがこちらにやってくるのを感知した。

そのバイクがやって来る方向は、まさにスマレたちが逃げてきた所、Dress の基地のある方角からであった……

「ねえ、アンジエラ……」

スマレの警告に、アンジエラもうなずいた。

「ワタシにもバイクの音が聞こえてくるわ……追っ手？それとも、ポルナレフさんかしら」

「……違うわ、来るのはどうやら『敵』ね……どうやら上の方から来るみたいよ」

スマレはジーンズにはさんでいた拳銃を引き抜き、安全装置を外した。昔、六助じいさんに教わったように拳銃を両手で構え、静かに近寄ってくる敵を待つ。

確かに拳銃は猟銃とはまるで扱い方が違う。だが、WitD で『構えた方向に発射した場合』の『結果』を予測すれば……

「噴上クンと億泰をここに置いてはいけないわ……誰であろうと、ここで戦わなければ」

と300Kg近くある ビッグオフロードバイクを片手で持ち上げ
……スミレに向って、投げつけてきたッ!!

「!?」

しかもそのバイクには、何か『巨大な手榴弾の信管の様なもの』が
ついている事をWitDが知らせてきた。

WitDが警告したという事は、その『信管の様なもの』は危険な
のだ。おそらくエルネストのスタンド、オエコモバがそのバイクを爆
弾にかえたのだ。

もう逃げる時間はない。

バシユ!バシユ!

他に手はない。

スミレはバイクに向って二発弾丸を撃ち込んだ。

WitDによる予知の補正を借りて、弾丸は狙い過たずバイクに着
弾するッツ

ドツゴオオオオン!!

バイクは弾丸が着弾した瞬間 —— ちょうどエルネストとスミレ
の間で —— 爆発した。

「なッ……」

爆風に吹き飛ばされたスミレは、すぐ目の前に黒づくめのスミレが大男がい
るのに気が付いた。先程バイクを投げつけて来た男だ。

大男は、爆風から身を守ることせず、足元にいるスミレめがけて
飛び降りて来たのだ。

ズギユ——ンツ

スミレは飛び降りてきた大男に向って、再び拳銃の引き金を引い
た。

弾丸は確かに命中した。

が、だが、大男は少しのけぞっただけだ。

まったくダメージを受けた様子がないッ!

「Dudadadadadaxtu!!」

「まさか……ゾンビ?」

「違うよ」

スマイレの頭上の道から、エルネストの声がした。

「紹介しよう、モニカとグレッグの二人を……二人は、我々がメネシスと呼んでいる生体兵器だね。ゾンビとバオーの技術を下に改造したのだが、ゾンビのような知能はない……だが太陽の下を歩けるし、バオー程とはいかなくても、それなりの回復能力をもっているのさ」
ほら、挨拶しろ。

エルネストが、モニカ、グレッグと呼ばれた怪物に命令した。
すると、二体の不気味なクリーチャーが、まるで良く躡けられた子犬のように、ピヨコンと頭を下げた。

「可愛いダロ？中途半端な性能でお蔵入りになっていたんだが……こちらもコマ不足だね、保管用カプセルに入れていたコイツ等まで引っぱり出してきたーと言うわけさ。だが、戦闘能力は折り紙つきだ」
君はここで終わりだよ。

ザザシユ！

エルネストも、スマイレの頭上から山道を滑り降りてきた。

「馬鹿ね、格好の的よッ」

スマイレは息を整え、寒気と心臓のドキドキを少しでも鎮めようとした。
た。

人に銃を向ける事。

それは、けっしてやるべきではない、殺人行為……

だがっ！

スマイレは歯を食いしばり、エルネストに拳銃の標準を合わせた。

「フン、無駄っ」

斜面を滑り落ちながら、エルネストがスタンドを出現させた。

そして、斜面の途中で立ち木の枝を折り取り、スマイレに向かって投げた。

その枝にも、先ほどと同じ爆弾の信管のようなものが見える。

あれも、スタンドの爆弾だ……

「こんのおおおッ!!」

スマイレは銃の標準をエルネストから爆弾にかえた。爆弾を、撃ち落としたりしたっ！

スマイレの放った銃弾を受け、爆弾が爆発した。
ボツガンツ!!!

「チツッ！」

エルネストは、爆風を避けて地面に伏せた。

「行け！メネシス：モニカ！」

「Stdarrzuuu！」

モニカと呼ばれた方のクリーチャーが 意味不明の叫び声をあげ、
右手を大きく振り上げた。

右手には、本来の手の代わりに、『棘だらけの鉄の骨組み』で作られた、棍棒のような器具がついている。

モニカは、その器具の先に丸い鉄球 —— 棘棘が付いた —— を取りつけると、大きく振り回して 投げつけたッ！

ゴウツ！

とつさに鉄球が飛んでくる方向を予知して、スマイレは地面に伏せた。

その頭上を、うなりを上げて鉄球が通り過ぎる。

「!?」

スマイレは地面を転がりながら、照準をモニカに向けた。

一瞬の躊躇、だがその瞬間 さつきまでスマイレが寝ていたところに鉄球が叩きつけられるッ！

「うわああああああああ!!」

スマイレは地面を転がって鉄球を避けながら、モニカに向かって拳銃の引き金を引いた。

パシ、バンツ！

一発、二発、拳銃を引くたびに強い衝撃がスマイレの手に響く。

反動で、拳銃が手から飛び出そうになる。

アドレナリンの過剰放出でも誤魔化しきれない痛みが、スマイレの骨折している右腕に響く。

だが、そんなくだらない痛みを気にしている余裕など、無いッ!!

寄生虫バオー その2

「Stdarrzuuu!」

モニカと呼ばれた方のクリーチャーが 意味不明の叫び声をあげ、右手を大きく振り上げた。

右手には、本来の手の代わりに、『棘だらけの鉄の骨組み』で作られた、棍棒のような器具がついている。

モニカは、その器具の先に丸い鉄球 —— 棘棘が付いた —— を取りつけると、大きく振り回して 投げつけたッ!

ゴウッ!

とつさに鉄球が飛んでくる方向を予知して、スマレは地面に伏せた。

その頭上を、うなりを上げて鉄球が通り過ぎる。

「!?」

スマレは地面を転がりながら、照準をモニカに向けた。

一瞬の躊躇、だがその瞬間 さつきまでスマレが寝ていたところに鉄球が叩きつけられるッ!

「うわあああああああ!!」

スマレは地面を転がって鉄球を避けながら、モニカに向かって拳銃の引き金を引いた。

パシ、バンッ!

一発、二発、拳銃を引くたびに強い衝撃がスマレの手に響く。

反動で、拳銃が手から飛び出そうになる。

アドレナリンの過剰放出でも誤魔化しきれない痛みが、スマレの骨折している右腕に響く。

だが、そんなくならない痛みを気にしている余裕など、無いッ!!

「DusWaaaooooo」

モニカは意味不明の叫び声を上げながら、スマレを捕まえようと突撃してきた。

スマレはとつさに身を沈み込ませ、モニカの足元をすり抜けるようにして突撃を避けるッ!

「うあああああつ」

スミレは顔をゆがめた。

モニカの足を避けるためにスライディングするとき、激しい痛みが右腕をおそったのだッ！

だが、それを気にする暇も……無いッ！

スミレは必死にその衝撃と痛みを抑え込みながら、さらにもう一発、もう一発とモニカの心臓に弾丸を命中させて行った。

モニカは着弾の瞬間、わずかに身を揺らしたただけだ。

また、スミレにむかつて鉄球を振りかぶった。

あの鉄球がかすりでもしたらそれで終わりだ。

スミレは必死に立ち上がり、モニカの振るう鉄球の攻撃を避けようとした。

だが……自分の立ち上がる動きは、まるでスローモーションで再生されているように、のったりと感じた。

一方、モニカの鉄球は、確実にスミレを粉碎すべく滑らかに動いている。

明らかに、自分の動きよりも鉄球の方が早いッ……

「ああ……間に合わない……」

スミレは目をつぶりかけた。

だがその時、スミレの目の前にアンジェラが飛び込んできたッ！

「おりゃあああ！リーバッフ・オーバードライブ!!」

アンジェラは、スピードが出るようにと、スケーター・ボーイの車輪を自分の肘と足首に取り付けていた。

猛スピードのスライディングで、アンジェラがモニカの懐に飛び込むッツ。

アンジェラはスライディングの体勢：低い姿勢から伸び上げるようにして、ひじを撃ち込むッツ

肘うちは命中し、モニカの体勢を揺らがせ、鉄球の向きを変えさせた。

「Guooooon」

波紋を込めたひじ打ちでモニカが怯んだ隙に、アンジェラは地面に

飛び込むようにして転がった。

モニカの拳による反撃を、ギリギリかわす。

「ウウツッ！」

攻撃は避けた。

だが、わずかに拳がかすったその衝撃だけで、アンジェラは吹き飛ばされるッ！

「フンツ 無駄なあがきよ」

エルネストがせせら笑った。

「お前の貧弱な攻撃でメネシス・モニカを止めることは出来んよ」

「ガツ……」

吹き飛ばされ、地面に激しく背中を叩きつけられたアンジェラが、苦しそうに立ち上がった。

「まだよ、まだ私はあきらめないわよ……エルネスト、あんたが何をたくらんでるかなんて興味はないわ。私はただあんたとそのデクノポーを叩き潰して、仗助を取り戻すッ」

ペツと吐いた唾には、血が混じっている。

「だいたい、そんな変な格好、あんたかっこいいと思ってるわけ？ 趣味じゃあないのよ！」

「そうよ、このド変態ヤロオー。全身網のタトウって、あんたSM好きのド変態なんでしょ」

スマレが、毒づいた。

タアアア——ンンツッ！

スマレは追撃しようとしていたモニカの肩を狙撃し、またしても鉄球の狙いを外させた。

「スマレ……遅れてゴメンね。オクヤス達を安全な場所まで降ろした後、またここまで上がってくるのに手間がかかった……でももう大丈夫よ、ここからは一緒にやろう！」

「ええ、私たちが奴らを倒すのよ」

「そうよ、あの男達を取り戻すわよッ！ 狙った男をアイツ等に横取りされてたまるもんですか。……こんなヤツラに、私たちは負けないわよッ」

狙った男は必ず落とす！
アンジエラが胸を張った。

(……恥ずかしい)

だがスマイレも、決意を込めてアンジエラの言葉に頷いた。

「そうよ、絶対に取り戻すわッッ！」

「下らん！」

再び、エルネストが爆弾を投げた。

「!?何度やっても無駄よっ」

すかさずその爆弾をスマイレが狙撃、撃ち落とすッ!

バゴツツツ!!!

爆風が視界をふさぐッ!

その隙に、またしてもアンジエラが、モニカの懐に入り込み……

コオオオオオオオ——ン

「くらえっ! 千烈脚、波紋疾走(サウザンドバースト・オーバードラ

イブウツ)!!」

アンジエラは、回し蹴りからの連続蹴りをモニカに放った。

170Cm程の細身の女性が放つ、3M近い巨人への果敢な連撃ッ

!

ドッ ドッ ダッ ダダッ ダッ ダダダダッ ドダダダアツッ

!!

「Guxyiiiiii」

頭に一撃、そして全身に無数の蹴りを受けたモニカは悶え苦しんでいた。

アンジエラの蹴りの1つ、1つに波紋が込められているのだ。

モニカは、攻撃を受けるたびにその巨体を揺るがせた。

そして、ついに地面に倒れこんだ。

「GYAAAAAaaaaaa!」

全身から煙を出して、モニカが倒れ落ちる。

「ふーっ ふ——っ ふう—— 次、あんたよッ」

肩で息をしていたアンジエラは、倒れたモニカをしり目に、再び立ち上がった。

そして、次のターゲットであるエルネストを追撃すべく、駆けだした。

その時だ。

不意にスマイレの額に、電撃が走り……電撃の切れ目からスタンドの蝶：ウイスパー・イン・ザ・ダーク（WitD）が発現した。

WitDはその羽でスマイレの目をおおった。

額に走った電撃によって真っ白になったスマイレの視界に、とある『未来のビジョン』を見せる。

「!? アンジェラ、ダメっ！引いて！」

WitD の見せた予知の内容を理解したスマイレが、叫んだ。
ブンツ

とつさにスケーター・ボーイを操作して後ろに飛びずさったアンジェラの頭のすぐ横を、銀色に輝く何か飛び抜けた。

「ブン……貴様に差してやるつもりだったが、まあいいだろう」

背後からその『銀色のもの』を投げたエルネストが、再びゆらりと木の陰から全身を現した。

「そろそろ私もこの体と精神にようやく馴染んだみたいだね。本気をだすチャンスが、まだ残っているといいのだが」

「何ですって？」

スマイレが拳銃でエルネストを撃った。

タアアア——ンンンツ
ペシユツ！

スマイレの撃った銃弾は エルネストのスタンド、オエコモバが出現させた『翼』に防がれた。

エルネストは、その『翼』を自分の背中から、まるで、『天使の羽』のように出現させていた。

弾かれた弾丸はそのまま左右に分かれて飛び、エルネストの背後で爆発した。

ファサツ

エルネストが、スタンドの『翼』をはためかせる。
すると、エルネストの体が宙に浮かび上がった。

「フフフ……ようやく馴染んできたよ。これで、我がスタンドの能力を存分に使えるというものだ」

エルネストは空中をゆったりと飛んだ。

依然としているスミレとアンジェラの頭上で羽ばたき、二人を見下ろした。

天使などではなかった。漆黒の翼をはためかせたその様子は、まるで、悪魔のようだ。

空中でエルネストが上着を脱ぎ、上半身をさらけ出した。

その体には 4つのコインが 正方形を描くように埋め込まれている。

コインが、黒光りをしている……

「アンジェラ……お前には当たらなかったが……だが問題ないっ 死ネイ！」

ズブズブズブ

「Gxyuuuuuuuuuu!!」

背後で絶叫が聞こえた。

振り返る。すると、崩れかかっていたモニカの頭に、エルネストが投げた銀色の『何か』が沈み込んで行くのが見えた。

「あれは何？あんな何をしたの??」

「……『ファイヤー・ガーデン』それが名前だ……己の意思とは関係なく全身から炎を噴き上げつづけるスタンド。このスタンド能力を貴様にくれてやって、貴様が自らを丸焼きにする様子を楽しもうと思っていたのだ」

だが、貴様が丸焼けになって死ぬことには、変わりないな。

そういうと、エルネストは腕組みして フンツ と鼻で笑った。

「Gyaaaaaaaaa!!」

炎を上げたままモニカが咆哮をあげた。

そして次の瞬間、全身からさらに激しく炎を吹き上げた。

モニカの体は火による破壊と、肉体能力による再生をものすごい勢いで繰り返し、やがて人間体 とは思えないほどその体を歪めていった。

モニカがさきほど右手に取り付けていた器具などが、ぬるりと現れた触手に覆われていく……

「くっ」

啞然としているアンジェラに、再び鉄球が横殴りにおそい掛かる！

ズルッ

「しまったっ うわああああッ」

かろうじてアンジェラは、鉄球を避けた。

しかし足を滑らせ、山の急斜面を転がるように転落してしていく。

「ううっ、しまったわ」

アンジェラは、とっさにスケーター・ボーイで斜面に張り付き、墜落を回避しようとした。

だが、張り付いた斜面そのもの土がもろく、また落ち葉が幾重にも重なっているため、勝手に崩れ、すべり、落ちて行く。

「チッ……手間をかせさせる」

エルネストは舌打ちした。

控えさせてたグレッグの肩にのり、アンジェラを追って斜面をすべり降りていった。

「アンジェラー！」

斜面に駆け寄ろうとしたスマレに、背後から炎をまとった触手の一撃がおそった。

「!?」

ヌルンッ

WitDの警告が走り、とっさに触手の直撃は避けることが出来た。

だが、触手は拳銃にまきつき、スマレの手から拳銃を奪った。

「しまったわ」

「Su……Muu Raaaaaa aaaaa aaaaa aaaaa!!!」

振り返ったスマレに、全身から炎を噴出したモニカがおそい掛かった。

ザザザ——ツツ

アンジエラもまた、斜面を滑り落ちていた。

しばらく滑って、森の中でぽっかりと空いた小さな空き地にたどり着いた所でようやく体が止まった。

落雷か何かで巨木が倒れてできたのか、この空き地にはゴロゴロと炭化した木が転がっていた。

そしてその地で、アンジエラはたった一人で『巨大なクリーチャー』と『超強力なスタンド使い』に相対していた。

「この、アマツ、チョコマカとオオツ」

「鬼さんこちらあ?? 手えのなる方へえ??ツ」

圧倒的に不利な状況のなか、アンジエラは倒木が多い地形を利用して、反撃を行うチャンスを虎視眈々と狙っていた。

ギヤルウツ ギヤルツ

アンジエラはスケーター・ボーイの車輪を靴と手袋、それに両手足のパッドに出現させていた。スタンドの車輪をフル回転させ、急停止、急反転、急加速を繰り返し返して攻撃を避けている。

スケーター・ボーイの機動力をフルに引き出したことにより、頭部へ激しくGがかかっていた。そのGは、波紋で頭部への血流をコントロールして酸素の供給を確保する事で耐える。

そうすることで、ブラックアウトを回避し、驚異的な挙動を実現しているのだ。

ボツ！ ボガツ！ ボツ！

エルネストがアンジエラに向けて多数の小石をまき散らす。

それらの小石がすべて爆発し、地面に大穴を開けた。

だが、アンジエラはその爆弾をすべて回避して見せた。

回避する動きの隙を突こうと振り上げられたメネシス：グレッグの振り回す刀も、ヒラリとかわす。

スタンドと波紋の精密なコントロールによる高機動による回避だ。

アンジエラは精神と体力を振り絞り、必死で、敵の攻撃をかわしていた。

アンジェラはとつさに体を浮かせ、グレッグの拳を空中で受け止めた。

ベギヤアアアアアンツ!!

「きやあああああああ!」

グレッグの拳は、アンジェラの腕をへし折り、近くの地面にアンジェラを吹き飛ばした。

波紋を全身に流して、傷の痛みを和らげたアンジェラがやつとのとで立ち上がる。

すると、目の前には巨大な氷の塊が浮かんでいた。

「あッ……あああッ」

グレッグのスタンドが現れ、自らが作り出した空中の氷塊にそつと触れた。

バリッ!!

次の瞬間、空中に浮かんだ氷塊が割れ、飛び散った。

幾つにも割れた氷片がアンジェラを再びおそうツツ

バシユツッ! プシユツッ!

「うわあああああ!」

アンジェラは、氷片を避けられなかった。

粉碎された氷のかげら達が、アンジェラの体を切り裂く!

「う……う……」

アンジェラはなんとか致命傷となる部分の攻撃だけは、ガードしていた。

だが、片耳を吹き飛ばされ、四肢、肩等に何発かの氷片を食らっていた。

血は出ない。氷片が触れた部分が凍り付いたからだ。

「貧弱、貧弱ウツ——だが、なかなかアガクじゃあないか」

もしかしたら、生きてまま仗助に引き渡せるかもしれない……

エルネストが、余裕の表情で見下ろした。

「ハあ ハあ ハあ……」

アンジェラは波紋の呼吸を乱していた。その靴から、スケーター・ボーイの車輪さえも消えてしまっていた。

「フツ……逃げ回るだけで力を使い果たしたか……とどめだ、サツサとやれい!! グレッグ……この女の両足を凍らせ、そして砕いてしまえッ!」

「Gyaaaaaaa!」

グレッグが自らの刀に氷をまとわせ、アンジェラの足めがけて振り下ろす。

「はっは——はぁ——はぁ——ツツ」

目の前に迫る氷の剣ツツ!

だが、アンジェラの目はまだ絶望していなかった。

いや、その目には希望をたたえた不敵な笑みが光っていた。

「かかったわね……」

「何だど?」

コ” コ” コ” コ” コ” コ” コ” コ” コ” コ”

ピシツツ

次の瞬間、どこからともなく現れた『糸』がグレッグとエルネストの体に絡みつき、二人の動きを止めた。

「なんだ……体が動かん?」

どう、お師匠様譲りの戦略は?

アンジェラはヨロヨロと立ち上がり、挑発的に腰に手をやった。

「フフフ……私の地元の台湾からほんのチョッピリ南に行った島にね……『サティポロジア・ビートル』っていう芋虫がいるのよ……その虫から作った糸はね、波紋伝導率が100%なの。私の服は、その糸で織られた特製なの」

おしやれでしょ。アンジェラが笑った。

「何だど?」

「その糸をね……こっ所りスケーター・ボーイで逃げ回っている間に、近くの地面に張り巡らせておいたってワケ。アンタたちが近づいてきていれるかどうかは賭けだったわ——でもその賭けは勝ったッ! もうあなたたちは動けないわ……」

「き……貴様」

「S u D a a a a a Z u u u !」

コオオオオオオ——ッ

「そして、喰らいなさい、糸を通した『波紋』 ブラック・バタフライ・オーバードライブッ！」

アンジエラは左手で『糸』を引っ張る。

その糸に、『波紋』を込めた右拳を叩きつける！

「G y a a a a a ! !」

サティポロジア・ビートルの糸が、アンジエラが放った波紋を100%伝える。

波紋は……まずグレッグの右腕を切り落とす……そしてエルネストへ……

だが

「無駄アア!!!」

バシユンッッ!

次の瞬間、『糸』はエルネストのスタンド、オエコモバにより一瞬にして爆破された……

「なんですって、そんな……」

アンジエラは膝をついた。

「ハあ ハあ……こ……れが、私の精いっぱいだったのに……」

「女、よくもやった。せめてもの情けだ。粉々に粉碎してくれるッ」と、言いかけたところで、エルネストが眉をしかめた。

バ……バル……バル

何か、遠くで獣が吼えるような声が聞こえたのだ。

バル・バルバルッ!

吼え声は、どんどん大きくなっていく。

「チッ……ヤツが復活したのか」

エルネストはペツと唾を吐き、そして……

「オエコモバッ! 奴が来る前に女を爆破しろッ」

オエコモバの翼が伸び、アンジエラをおそうッ!

見開かれたアンジエラの目に、ハッキリと迫り来る翼が見えた。

羽の毛筋や緑色の光沢までが細かく見える。

(いやよツツ！あの翼に触れたら、爆破される……)

だが、あまりの疲労に体が動かないッ

と……

ズルウツ

突然、エルネストの体が一瞬だけ後方にずれた。

同時に、オエコモバの体も連動して後ろに引っ張られた。

ブウンツツ

アンジエラは、鼻先にオエコモバの翼の一振りが巻き起こす風を感じた。

アンジエラを爆弾に変えるための翼の一撃が空振りに終わったのだ。

それは本当にギリギリのタイミングであった。

「!? 貴様ッ」

エルネストは、とっさに自分の靴だけをオエコモバに爆破させた。

「フフツ……やらせてもらったわ。敵が勝ち誇った時こそ、反撃のチャンスなの……よ……」

アンジエラが舌を出した。

エルネストの靴に現れた車輪、それは、スケーター・ボーイが付けたものであった。

エルネストが吼え声に気を取られたその一瞬、わずかに残った『糸』に伝わらせて、エルネストの靴に車輪を取り付けたのだ。

一瞬、ほんの一瞬だけ車輪が逆回転し、エルネストとそのスタンドを、後方に高速移動させたのであった。

「バルーバルーバルバルバルツ!!」

次の瞬間、何者かがものすごい勢いで飛び込んできた。

そして、アンジエラの前に立ちふさがり、オエコモバに刃をふるった。

ザアザザ——ッ

ズズズ——

「クウツ！放してッ」

「ウヲオオオオツ！」

扉の奥から、次々と網に引つ掛かった仲間たちが引きずり込まれてきた。

クレイジー・ダイヤモンドの能力によつて『直された』網は、あらかじめチャダのプライマル・スクリームによつて部屋中に張り巡らされていた工業用の網に次々に一体化していった。

ホル・ホースと仲間たちは、まるで蜘蛛の巣に引つ掛かったトンボやチョウのように、その網に絡みつき、動けなくされていた。

仗助は、扉の向こうに行く前に、網を引きちぎって持つて行つたのだった。

その網の塊を、仗助はホル・ホース達に投げつけ、そして『直した』。直つた網は、元に戻ろうと一気に広がり、ホルホース達をひっかけた。そして、元の網があつた場所へ飛んで戻っていく。

このしかけで、仗助はS W財団の調査チームをあつという間に捕まえたのだった。

「……ホル・ホース、手つ前エエエはよオオオ??何やつてんだよおつ！」

ポルナレフは、その中の一人にホル・ホースがいるのを見て、がっかりした。

「お前よお——本ツツツ当オオに情けねえな。それでもプロかよ」

「あああ?誰が言つてやがる??お前こそ、うかうか掴まつてるんじやねーか」

ホル・ホースが口をとがらせた。

「それに、俺の方のチームは非スタンド使いばかりだったんだぜえ、戦えるスタンド使いを全部連れてつたお前の所に見てーに行かないのはあたりめーじゃねえか！」

「クツ……だが、俺は高校生達を全員、安全なところに逃がしたぞ……」

おりやあ、彼らが無事ににがすために、『敢えて』おとりになってつかまっただよ。お前みてエエ——に警護対象のSW職員ごとかまるよーなマヌケなことほしねーぜ」

「にやにおツ……俺こそ『敢えて』奴らのアジトに侵入したってわけだ。お前と一緒にするな」

「ハツSW財団を連れてか？お前そんなにバカだったのかよ？」

「ナヌウニオオオオ、お前、コーコーサーと正面から勝負して、見事にやられたくせによオ」

「二対一だ、仕方ねーじゃねーかツツ、お前こそあつという間にやられやがって……さつき仗助が出ていってから、あんまり時間がたつてねーぞ」

「おつ……おりやあ連戦で疲れてたんだよツ」

調子が悪かったんだ。ホル・ホースは少しばつが悪そうに、テンガロン・ハットを深くかぶりなおした。

「……ねえ、意味のない口げんかなんて止しなさいよ」

二人の様子を見て、アリツサが冷めた口調で言った。

ガチャツ

扉が開いた。

二人が不毛な口論をしているところに、東方仗助が入ってきた。

口論している二人をしり目に、仗助が手にしていたゴム片を『直す』。

プシュツ！

次の瞬間、扉の向こうから最後の1人、マキシムが飛び込んできた。そのマキシムにもう一度仗助が『触れる』と、その次は切断されていった四肢が。何処からともなく飛んできて、マキシムの体に収まった。

「アツ……あんたあツ!!」

激昂しかけたマキシムは、だが仗助がチラリと見せた表情を見て、怯えたように黙り込んだ。

「……………」

ポルナレフと、ホル・ホースは言い争いを止め、押し黙った。
バタン！

仗助は扉を閉めた。そして、未だに言い合いをしているポルナレフとホル・ホースの二人を見て、頭をかいた。

「味方同士で口げんかつすか……グレート。こりやあ”ヤレヤレ”っすねー」

「仗助……その言い方をヤメやがれ」

ポルナレフとホル・ホースは、青筋を立て、イラツとした調子で、声をそろえて仗助を睨みつけた。

「よりによって、お前からそのセリフを聞くと、イラつくぜ」

「……いやあ、済みません」

仗助は律儀に謝ると、順々に網に囚われたかつての『仲間』に自身のスタンドで『触れて』いった。仗助が触れる度に、そのスタンド能力によって皆の怪我が治っていく。

「ねえ、仗助……クン……どうして」

アリツサが尋ねた。

「仲間を裏切つて こんなこと続けるの、もうやめなさい……あなた、苦しそうよ」

「……どうしたもねーつすよ。俺も、DIOが言っている 誰でも天国に行ける グレートな方法つてのがもしあるんなら、みんなで行けばいいじゃねーかって、そう思ってるだけっすよ」

だから、こいつらにも協力してるんす。仗助は、嫌悪感をむき出しにして控えているチャダとマキシムを睨みつけた。

「アイツ等も……早人も、未起隆も、噴上や億泰の奴も、後できつとわかってくれるはずだぜ」

仗助は隅っこに止めてあつたバイクにまたがり、バルンツとバイクのエンジンを起動させた。

「アンジエラちゃんも、今のあなたを見たらなんて思うかしら」アリツサが尋ねた。

「なっ……アイツは関係ーねーツス」

仗助は心なしか顔を赤らめ、首を振った。

「でも、そーっすねえ。アイツ等を迎えに行つてやらなきやならねー」

エルネストの奴には、任せておけねーからな。

仗助はブルンと、バイクを回転させると、明らかににじみ出る嫌悪感を隠そうともしないまま、チャダとマキシムに命令した。

「お前ら……俺はエルネストを追うぜ。お前は余計なことをしねーで、ちゃんと皆さんを安全に見守つてろよ」

仗助は、マキシムをにらんだ。

「わ……わかつてるわよおつ、イケズツ♡」

マキシムの揶揄を無視して、仗助はチャダを睨みつけた。

「それから、チャダ……オメーわかつてんな」

「承知していますよ。仗助さんの指示通り、コインをすべて扉の向こうに運べばいいんですよね」

「そうだ。いいか、『この部屋にあるすべてのコイン』だぞ」

忘れたらただじゃおかねー 仗助の威嚇に、チャダはイカにも言うとおりにしますよ。と仗助を宥めた。

バルツ…ブルウンツ！

さんざん念を資した後で、仗助は、バイクに乗って去っていった。仗助が去った後には、ホルホース達とチャダ、マキシムが残った。

寄生虫バオー その3

「やだやだ……あの子、まだ開き直れてないようねエ」

仗助の後姿を見ながら、マキシムがわざとらしく笑い声をあげた。同意を求め、隣のチャダに話しかける。

「……あんた？ちよつとは返事しなさいよ」

チャダは話しかけてくるマキシムを無視して、ポケットから何かを取り出した。

それはコインだった。

チャダは一枚のコインを、つい先ほど仗助が出て行ったドアに張りつけ……そのドアを開けた。

すると、理屈に合わないことにそのドアの先には『南国の昼間の景色』が広がっていた。

ドアの先には、プールと、さらにその先に、海まで見える。

(!?なんだ、こりゃあ?)

ポルナレフは首をかしげた。なんとなく、なんとなくだが、その景色に見覚えがある気がする。

「チャダ……だからアンタ、いったい何をしてるのよ?」

眩しそうにマキシムが言った。

「何って、コインの回収ですよお」

チャダはそう言うのとピーターの体を確認して、舌打ちした。

「あらら、コインがありませんね。ジョースケが彼の怪我を直したときに、コインも一緒に戻ってくると思っただんですがねえ——」

フン……ホルホースさん達のポケットにもないみたいですねエエ。どうしましょうか?」

チャダは携帯を取出し、ピーターの体にコインが残っていないことを話し相手に伝えた。そして、首を横に振り振りマキシムの方を向いた。

「さてと……ピーターのコインは残念でしたが、あと一つ回収できそうなコインがここにありませんね……」

チャダはマキシムに向ってニタニタと笑いながら手を伸ばした。

「ちよつと……あんた、まさか……私のコインを奪おうっていうの？」
マキシムは警戒心もあらわにチャダの手の届かないところに飛びのき、自分のスタンド：イエロー・テンパランスを出現させた。

「……警告しておくわよ。私に少しでも触れようとしたら、あんたの体を喰ってやるわ」

コインは渡さない。マキシムは歯をむき出しにした。

「何言ってるんですか？」

チャダが首を左右に振った。

「マキシムさん、ワタシのスタンドは無機物と同一化するスタンド、生物を喰らうアナタのスタンド能力の対象外じゃあないですか」

それに、あなたのスタンドには興味ありません。

「うるさい！近づくなッ」

マキシムは先手必勝とばかりに、イエロー・テンパランスをチャダに飛ばした！

「DIO様のお印を渡すものかッ！」

だが、チャダのスタンド：プライマル・スクリームは、すでにマキシムの足元まで侵食していた。

チャダ本体がイエロー・テンパランスを喰らうよりも早く、プライマル・スクリームはマキシムを拘束した。そして扉の向こう——太陽の元へ——放り飛ばした。

ブワン！

ザザザアア……

「Dummmmmnn！」

マキシムが、悲痛な絶叫をあげた。

扉の向こうの『強烈な日光』に照らされたマキシムの体が崩れていく。髪が、頭皮が、塵となり、その奥に隠れていた白い頭蓋骨が露出していく。その頭がい骨さえも、グズグズと崩れていく。

「XaXxXzuaDebzat!!!」

マキシムは両手をついてはいずり、何とか日陰に行こうとした。だがその両手が、あつという間に塵となつてくずれ……空しく陽がサンサンと当たる地面をのたうちまわる。

そして、あつけなく全身が塵になり、マキシムは消えた。

最後には、コインだけが地面に転がり、太陽の光を反射して輝いていた。

残ったそのコインを、扉の向こうにいた人物が回収するのが見えた。

——だが、逆光で顔は確認できない——
扉がしまった。

「あれまあー、きれいさっぱり消えちゃいましたね……さてと、ワタシはゆつくりしますか」

チャダは何の感情もなく、マキシムが消えるのを見終えて大きく伸びをした。

と……

パシユツ!!

「アギイツ!?!」

振り返ったチャダの脳天に、チャリオッツのレイピアが突き刺さった。

ポルナレフの最後の奥の手だ。チャリオッツのもつレイピアの剣先を、チャダに向けて飛ばしたのだ。

「俺たちを舐めたな、馬鹿な奴だ」

ポルナレフが言った。

「あぐろう」

後向きに倒れかかったチャダは、運の悪いことに、ホル・ホースが構えていた銃口の真正面に、その身をさらした。

1999年11月10日 夜 「R峠」:

「!?!」

スマレはWitDの予知に従って、地面に飛びこむように前周りを受け身を取った。

ついさつきまでスマレが立っていた所を、グレッグの炎の鞭が抉った。

地面に飛び込んだ衝撃で、 またもや右腕に激しい痛みがおそう。
ガガツガツガツ！

激しい痛みをつとめて無視して、スミレは拳銃でグレッグの頭を狙撃した。

ポルナレフから受け取っていた、二丁目の拳銃だ。

弾丸の元々の狙いは確かだった。

だが、グレッグの周囲を渦巻く激しい上昇気流によってその軌道はそらされた。

グレッグのスタンド：ファイヤーガーデンの吹き出す炎が周囲の空気を暖め、激しい上昇気流を作っているのだ。

グレッグの肉体は、自身のスタンドが出す熱により焼け爛れ、どんどん炭化し、蒸発していく。……だが、その同じスタンドの能力なのか、その肉体は燃えていくのとはほぼ同じ速度で回復していく。

そのため、たとえ命中しても、弾丸の威力は上昇気流の壁と、熱によって弾が溶かされていることで、威力が半減しているのだった。

加えて、超回復力により、銃撃によって受けた傷もどんどん治っていく……

だが、たとえ威力は半減していたとしても、どんどん回復されたとしても、スミレにできるのは銃撃を続けることだけだ。

銃弾は確実にグレッグの急所をとらえ、着弾のたびにグレッグをよろめかせてはいるのだ。

撃ち続けるしかない。

（少しは効いてるツ？ やっぱり止めをさすには、どうにかしてあの炎を止めないと……でもどうやって？ 思いつかない……アンジエラを待つ？ 駄目よ、アンジエラは1人で二人を相手にしているのよ。私がお助けに行かないと）

どのくらいこうやって戦っているのか、もしかしたら、まだ大して時間は経っていないのかもしれない。

だが、スミレはすでに疲労困憊だった。

酸欠で目がチカチカする。銃を撃つたびに鈍器で骨を殴られたような衝撃が右腕をおそう。

ガツ ガガガツ

それでも尚、スマレは震える手で銃を構え、必死でグレッグの攻撃を避けつつ、弾丸を送り込み続けた。

そして……

「Gaxtuu」

遂にグレッグが膝をついた。

グレッグは絶叫を上げながら体を掻き毟り、その肌の奥の肉を露出させ……そして、肉があふれ始めた。

全身が膨れ上がったグレッグは、のたうち回りながらもその体をどんどん増殖させていく。

両手など、まるで熊手のように巨大に膨れ上がっている……

「Gwee！」

咆哮とともに、グレッグが再び立ち上がった。

膨れ上がった体は、もはや人間の原型をとどめないほどの異形と化している。

異形の怪物はスマレに吠え掛かり、一步一步、ゆつくりと近づいてきた。

「……」

絶望的な状況

だがすでに、スマレの感情はすっかり麻痺していた。

スマレは無表情に弾丸を再装填し、再び銃口をグレッグに向け、機械的に引き金を引く。

弾丸はグレッグの周囲を覆う炎に、からめ捕られていく。

「Buooooh！」

グレッグが、まだホンのチョツピリだけ原形を留めているその右手で、刀を振り上げた。

刀からも、炎が吹き上がる……

炎の熱で空気が揺らめき、景色が歪む。

（ああ……クツソツ!!……これは避けられないわ。 もう少しだったのに……育朗、ゴメンツ）

炎をまとった刀が、スマレにまさに振り下ろされようとする――

その時だツツ。
ジユワツツツ

……スマレが思わず閉じていた目を開くと、目の前には、まるで幽霊のように透き通った青年の『ビジョン』があった。

青年の『ビジョン』が、グレッグの持つ炎の刃を両手のひらで抑えているのが見えた。

『ウオオオオおっ』

その青年は炎の刃をグレッグから簡単に刀をひねりとり、未だ燃えているその刀身を、叩き折った。

その声は???

スマレの胸が、トクン と鳴った。

「G s s y a a a a a !」

グレッグの拳が、青年をおそうツ。

だがメネシスの拳は、何の障害も、ダメージを与えることも無く、青年の幽体をただ突き抜けた。

一方で、その腕から吹き上がる炎は、青年の幽体を焼いた。

青年は、苦悶の喘ぎ声を上げた。

苦悶の声を上げながらも、青年はその苦しみに怯むこと無くグレッグに取りつき、その体で噴き出る炎を叩き消そうとしていた。

『撃て、スマレツ!!』

その幽霊の青年、橋沢育朗が、スマレの方をシツカリと振り向き、叫んだ。

「!?はいッ!」

スマレは拳銃を構え、育朗が抑えているグレッグの眉間に弾丸を送り込んだ。

バシユツ!

「A g i i i i i i i i x t u !」

炎の障壁を失ったグレッグは、眉間を正確に打ち抜かれ、静かにたおれた。

「育朗ツ!!」

スマレは育朗の幽霊に両手を伸ばした。

懐かしい育朗の笑顔、シツカリと肉のついた体、手

……だがスマレの手は、育朗の体を突き抜けて、ただ空を掴んだ。

「ああああ……」

育朗は少し困った様に、まるで泣いているかのように顔をくしゃくしゃにして、笑いかけた。

『スマレ……かい?』

スマレは、ゴシゴシと強く目をこすった。

眼をパチパチさせ、大きく息を吸って……につこり笑った。

「……久しぶりねッ! 橋沢育朗くん」

『スマレ、やつぱり……大きくなったね』

まるで満月が山影から顔を出すように、育朗の顔がみるみると明るくなった。

「ちよつとツ、大きくなった、だつてえ?」

スマレは髪の毛をかき上げながらむくれて見せ、すぐに真顔になった。

「ねえ、むちやくちやしないで……メネシスの炎をその……ゆ……ス
タンドの体で消そうなんてさ」

『他に方法が無かったからね』

育朗が肩を竦めた。

炎に炙られた育朗の体は、幽霊の体にも関わらず黒く焦げ、ところどころが欠落していた。

当然、育朗は酷くダメージを受けていた。

育朗の声の端々からは隠し切れない苦しさが漏れていた。そして育朗の幽体自体も、まるで壊れかけたテレビに映る画像の様にその像が薄れ、時折チカチカとまたたく。

「ホント——バカなヤツ……無茶しないで」

スマレは両手で包み込むように、そつと育朗の顔の輪郭——幽体の——をなぞった。

『いつだって、支えるさ』

今は君に触れられないけどね。

育朗はそうとうと幽体の手を伸ばし、スマレの頭をそつとパフパフ

した。スマイレの髪が育朗の手を突き抜け、ピョコンと反対側に飛び出す。

「コラ、ジョシコーサーに『触る』ですってエ」

それはセクハラよお。スマイレは涙でぐしよぐしよの顔を無理やり歪めて、笑い顔を作った。

「……………」

両手で丸く輪を作った。

そしてそつと、目を閉じる。

『スマイレ…………』

スマイレが作った腕輪の中に、育朗の幽体が入った。

育朗も手を伸ばし、スマイレを包み込んだ。

育朗のオデコとスマイレのオデコが、ゆっくりと近づいていく――

と、スマイレがブルブルツと首を振った。

「イケナイワッ！ダメ、駄目ヨ、今…………この下でアンジェラが戦っているの。早く助けに行つてあげないと」

『そうだね…………』

育朗は、にっこり笑った。

（これが育朗クン？…………違うわね —— 育朗クンの意識はないみたい

—— 動きが人っていうより、動物っぽいわ）

アンジェラは、オリジナル・バオーの背中を見ていた。絶体絶命の危機を脱したことを、いまだに信じられない気分が続いている。

（でも育朗クンの意識がないとしたら、どうして、オリジナル・バオーが私を助けるわけ？そもそも、どうやって大岩の下から脱出できたの？）

今、目の前で起こっていることが、よく理解できない…………

パスンツ！

突然、オリジナル・バオーのリスキニハーデン・セイバーが煙と化した。アンジェラを庇ったため、代わってオエコモバに爆破されたのだ。

「バルツ」

バオーにはスタンドは見えない。

しかし、エルネストの殺意の匂いを嗅ぎとることは出来る。

嫌いな殺意のニオイが再び強くなるのを感じ、バオーは、身構えた。

「バオー!!懲りずに現れたか……今度は塵一つ残さん!」

貴様は用済みだ。すでに貴様を超える素体を回収してるのだよ。

エルネストが叫んだ。

エルネストの叫びに呼応して背中中の翼が大きく広がり、オリジナル・バオーに向かって打ち下ろされたツツ。

バオーには、その翼の攻撃は見えていない……

ガシンツ

だが、オエコモバの翼による一撃は、アンジエラによって弾かれた。

「よそ見るんじゃあ無いわよ……アンタの相手は、ワタシ」

「馬鹿なツ。貴様、我がスタンドに触れておきながら、何故爆弾化せん?」

エルネストが戸惑ったように言った。

「フフフフ……知りたいの?……種明かしは、弾く波紋よ。弾く波紋でアンタの能力を弾き返してやったわ」

へへへとアンジエラが笑った。

「そうよ……信じるべきは『汗』、流した『涙』、『努力』の量よ……アンタを倒すのは『波紋』だったんだわ。スタンドの操作に使ってた集中力を、より強い『波紋』を錬ることに使う……覚悟しなさいよ」

コオオオオオオオオオオオオオオオオオツ!!!

アンジエラの体が、うつすらと光り輝き始めた。

「バルバルバルバルンツ!」

その横で、バオーは確かに感じていた。

強烈な悪意の匂いを。そして、それに対抗しようとしている黄金のような美しい匂いをツ、太陽の様な生命力溢れる匂いをツツ。

目の前には『キラいな悪意の匂い』をはなつ敵がいる事も、わかっ

ていた。

だがバオーは思った。

(この悪意の匂いを止めるのは、自分ではない) と

自分の敵は、嫌いな匂いは、まだ他にもあった。

バオーは、すぐそばのもう一つの『腐臭に満ちた悪意の匂い』に向き合った。

(そうだ、自分の敵はコイツだ。この嫌な匂いを止めてやるッ)

バオーは思った。

「ハハハ」

エルネストは、バオーがくるりと自分に背を向け、モニカにおそい掛かるのを見て笑い声を上げた。

「馬鹿が、二人同時に攻撃してくれば貴様らにもチャンスもあつたものを……ほんのチョピリだけ現れた逆転のチャンスを、自分達でフイにしおって」

プツツ

エルネストは懐から水筒を取り出し、グイと一口クチに含んだ。

それを、霧吹き of 要領で吐き出すッ!

宙を舞う水滴を、オエコモバの翼がアンジェラへ向かつてはたき飛ばした。

オエコモバの能力、爆弾化ッ。その能力で、水滴の一つ一つにスタンド爆弾の信管を付けるッ!

「ヒヤッヒヤッ!! 跡形も無く吹き飛べッ」

エルネストが笑った。

コオオオオオウ

だがアンジェラは引かないッ。

スケーター・ボーイを出現させ、水滴で出来た爆弾の霧に、むしろ自分から突っ込んでいく。

ガキイイ!!

爆弾の霧がアンジェラに触れた。霧の粒が集まってより大きな水滴となり……

プルンッ

水滴爆弾は、まるでゼリーの様に震え……爆発しなかった。

「馬鹿な」

エルネストが唾然とし、あわてて自分の身を守ろうと防御の姿勢を取る。

だが、遅い！

コオオオオオ——オオツツ

「ふるえるハート！燃えつきるほどヒ——ト！！喰らえ、サン

ライト・イエロー（山吹色の）・オーバードライブツツ！！」

懐に入り込んだアンジエラの拳での一撃が、エルネストの周囲を覆う翼：スタンド、オエコモバを粉碎ツ

アンジエラの拳は翼を突き抜け、エルネスト本体に届き——波紋をエルネスト本体に流したツ！

グウイイイイインツツ

「ギイイイイツツツツツ！」

全身に波紋を流され、スタンドを粉碎されたエルネストは、全身から血を噴き出した。

「ヒーツヒ——…ヒー」

アンジエラは跪いた。

両手を地面につき、何とかして呼吸を整えようとする。

「どう、波紋は流れたのかしら……こっ……これが限界……」

エルネストがもがいているすぐ隣で、アンジエラは、まるで電池が切れたオモチャの人形のようにぐったりとしやがみ込んだ。



「バルバルバルバルツ！」

一方オリジナル・バオーは、もう一体の敵と戦っていた。

オリジナル・バオーの相手は、DRESSが作り出したバイオロジカル・ウエポンの最高傑作であるメネシス、その最後の一体であるモニカであった。

「Uruuuuu！」

モニカは何やら意味不明な叫び声をあげ、その強大な力で、手に取り付けた鉄球を振り回していた。

その鉄球の速度、威力は絶大であることは、たまたに鉄球が地面や立木にあつた際に、対象を文字通り粉碎してしまう事からも知れる。

幾らバオーが驚異的な回復力を持っているとしても、それはあくまでも生物 としてのそれだ。もし一瞬で身を碎き、体を粉碎するレベルの直撃を急所に受けてしまえば、命が危ういのだ。

「バルツ」

ジャルンツ！

そんな状況を知ってか知らずか、バオーは両手、両足を上手く使つて俊敏に鉄球を躲していた。

そしてその捕食動物的な本能で、隙を見つけて蹴りや拳、鉤爪の一撃を単発ながら確実にモニカに当てていた。

いまのところ、バオーにはモニカの攻撃が当たっていない。

だが、状況はバオーに不利であつた。

モニカの身には氷のプロテクターが覆っており、単発攻撃が致命傷となるのを防いでいた。

それにより、攻撃を当てた側のバオーの手足のほうが冷氣によつて凍り、傷つき始めていたのだ。

「バルツ」

何度かの無駄に終わった攻撃の後、バオーは隙は少ないが威力に劣る単発の拳や蹴りの連打は『効果が薄い』ことを本能で理解した。

そして、バオーはモニカの胴体に飛びついた。

メルテツデイン・パルムの強酸でモニカを溶かそうとするツ！

「Uruuuuuu !!」

バリユウウンツ！

だが、モニカの体を溶かす前に、メルテツデイン・パルムの強酸さえもが凍らされた。

さらには強酸を作り出しているバオーの左手までもが、凍り始めるツツ！

「バルンツ」

ガ・ガツ・ガツ！ボボツ

「Uryxaaaaaa！」

え上がるのとはほぼ同時にモニカの能力で一本、一本と凍りついていく。

「バルバルバル!!」

だが、一本の毛針を凍らせると、すぐさま二本のシューティングビースス・ステインガーが突き刺さる!

「Guryyaaaaa!」

「バルバルバルバルバルバルバル!!!」

しだいに、凍らせるよりスピードよりも早く、次から次へと炎をあげるシューティングビースス・ステインガーがモニカをおそう!

「ShyaaaaaeeeeAAA!!!」

やがて、モニカは全身から炎を吹き出し、絶叫を上げて崩れ落ちた。

否、まだ戦いは終わっていない。

(まだ嫌なにおいは消えないッ)

バオーは武装化現象を解かず、構えた。

「Aaaaaa」

バオーの本能は、正しかった。まるで炎の塊のようになって、モニカが再び立ち上がったのだ。

全身が燃え上がり、生身の部位が骨と内蔵と体内の軟組織の一部、そして筋肉だけとなった状態であったにもかかわらず、モニカは地面を駆けまわって炎を消す事に成功していたのだ。

火が消えると、傷ついた部位が剥がれ、そしてまるで風船を膨らませているようにピンク色の肉が膨れ上がり、逆にモニカの体が大きくなっていった。

スタンド能力のためか、ピンク色の肉は直ぐにぬらぬらと光る銀灰色に変わり、辺りの温度も急激に下がり始めた。

「Aaaaaa!」

モニカはのたうちまわる。

その体からぬらりと尻尾が生え、耳が蝙蝠のように大きくなり、背中から無数の突起が出現した。

「Aaaaaa!!」

モニカの顔がまるでサイのように顔が細長く引き伸ばされ、鼻先か

アンジェラは、崖の上でたった一人でメネシスと対自しているスミレの事を思った。確かにスミレはタフな女の子ではあったが、そのスタンド能力はおよそ戦闘向きではない、独りでメネシスと対決させるのは荷が重いはずだ。

(やっぱりゴメンナサイ、私には貴女を助けられないかも……)

その時、銃声が響いた。

銃声を感じたバオーはピタツと立ち止まった。

バオーは少しの間上を見上げ、銃声がした方角を確認するそぶりを見せた。その後、ピヨンと飛び上がり、無造作にアンジェラの上に着地した。

栗沢六助とオケイ その1

1999年11月10日 夜 「K岩」:

「おお——い、ばあさん……オケイばあさんよお……わしの猟銃は、どこにやったかな？」

六助爺さんは猟銃を探して、家のあちこちを歩き回っていた。

「いやだワ、おじいさん」

ケイ婆さんがホホホと笑った。

「銃なら、先週ほら、スマレが来た時に持って行ったじゃあないですか……ちよつと、ボケちゃったんじゃあないでしょうね？」

「なんじゃと？ スマレの奴、ワシの銃を持っていきおったのか？」

六助爺さんが驚いて言った。

「もちろん、先週スマレに銃を触らせたわ。だがスマレは、『チョット触るだけですぐ返す』と、言っておったんだがなあ……あの娘は、嘘だけはつかない子なのに」

「あら……」

心配そうな顔をしたケイ婆さんを、大丈夫じゃ、そうだった確かに弾を抜いた銃を渡したワイ……と、六助爺さんはあわててごまかした。

だが、その言葉とは裏腹に、六助爺さんは真剣に心配し始めていた。

日本は、世界で一番銃の所持が難しい国の一つである。

そしてスマレはまだ17歳だ。——六助爺さんがたつぷり手ほどきした——その銃の腕前から、スマレは空気銃の所持こそ特例で許されてはいたが、猟銃の所持許可を得ることが出来る年齢には達していない。

日本において、勝手に銃を持ち出したらどんなに大変ことになるのか、わからない子でもないだろうに。そもそも犯罪だし、今後、銃の所持許可を得ることも難しくなるだろう。

もちろんスマレに限って、銃を間違った目的に使うことはないとかかってた。悪い男にだまされて、銃を持ち出す……という事もあり得ない。何か困ったことがあれば、必ず自分たち夫婦に相談してくれ

るはずだ……『あの少年』の事以外は。

そういえばあの時、猟銃を見せてくれ　と頼みに来たスミレは、少し思いつめたような目をしていた。

六助爺さんは知っていた。

スミレがそういう目をするときは、必ず『あの少年』に関連したときなのだ。『あの少年』……親を殺され、得体のしれない組織によって『怪物』にされた、礼儀正しい少年：橋沢育朗に関連した何かだ。

六助爺さんは銃を探すのを諦め、裏庭の物置へと歩いて行った。

そこは、六助爺さんが初めてスミレと、育朗の二人と出会った場所であった。

あの朝、ケイ婆さんが、二人がここで震えているところを見つけたのだ。二人は追っ手から逃れるためにここに隠れていた。あの時の二人の疲れ切った様子は、忘れることができない。

六助爺さんは思い出す。

その夜、和やかに4人で話した夕食の事を

深夜に訪れた、『政府の人間』のふりをした襲撃者の事を

スミレがさらわれ、彼女を助けるために1人出かけた育朗の顔を

そして、

疲れ切ったスミレが　——育朗を連れずに——　戻ってきたときの表情を……

自分たちの家に再び戻ってきてからずっと、スミレは育朗にいつか会えると信じているようであった。

六助爺さんとケイ婆さんは、内心、残念だが育朗は死んでしまったのだろう　とあきらめていた　——表面上はスミレに合わせ、育朗が戻ってくるのを待っているふりをしていたが——

あの時、スミレの話を聞いた限りにおいては、状況は絶望的に思えた。

そもそもあの少年が元気だったら、8年もスミレをほうっておくはずがないのだ。

思いついて家に戻り、電話からスミレの携帯電話にかけてみたが、やはり不通であった。

スマレ…… こんな時ではあったが、六助爺さんは、この8年間もてる愛情をたっぷり注いで育てた愛娘の事を愛らしく、そして誇らしく思いやった。

スマレは、杜王町の高校生宿舎で1人暮らしをしているのにか、ほぼ毎週のように自分たちの家に顔をだし、なにくれなく色々やってくれる。

彼女の存在が無くなった生活など、今の六助爺さんには想像もつかない事態だった。彼女が笑い、話す言葉にどれほど魅了されていたか。傷ついた心を、どれだけ救ってもらったか。

彼女は確かに血がつながった本当の子供ではない。だが、六助爺さんとケイ婆さんにとっては、実の子供以上の存在と言ってもいいかもしれないなかった。

田舎暮らしがいやで、都会に出て行つた三人の息子など、実の子供ながらまったく実家に顔を出しに来ない。長男など、風のうわさでは結婚し、孫までが生まれたらしいのに……一度も孫の顔を見せてくれたことがない。

長男のことを思い出し、六助爺さんは鬱々とした気分になった。やはり、自分はよい親ではなかったのか。

実はスマレにも、顔も見たくないほど嫌われているのでは……

子供はスマレだけではない。もしかしたら他の子にもまだ何かしてあげられることはあるかも知れない。時間がある時に、考えてみなければ。

まだまだ元気なつもりだが、もうじき67歳になるのだ。

いつまで元気でいられるのだろうか？ 誰にも言わないが、最近はそのようなことを考える事も増えてきていた。

自分はともかく、気にかかるのは、ばあさんとスマレの事であった。あと少し、あと5年も元気でマタギを続けていられれば、なんとかスマレに大学まで行かせてやる事ができる。

悲しい事だが、育朗のことを忘れられれば、あの子も幸せになれるだろう。もしかしたら、孫を抱くことも出来るかもしれない。

あの子が結婚するところを、この目で見たいものだ。

六助爺さんは独り言を呟いた。

なにやら気がせいいてたまらなかった。

猟銃が一本なくとも、まだ武器はある。

六助爺さんは少し考えて、残っていた二本目の猟銃の手入れと、遠出の準備を始めた。

もう少し日が昇ったら、少し、この辺りを——海の方角でも——見回ってみよう。

1999年11月10日 夜 「R峠」:

まるで、美味しそうなアイスクリームに齧り付く子供の様にも見え
た。

オリジナル・バオーは両手両足でアンジェラを抑え込むと、たつぷ
りと時間をかけて、その『匂い』を件分していた。

「バルンツ」

オリジナル・バオーが、能面のように無表情な顔をアンジェラの目
の前に突き付けた。ザワザワ……額の触角器がざわめき、アンジェラ
の額をくすぐる。

「う……うっ……」

アンジェラは、圧倒的な暴力の塊が自分に触れている感覚に、自分
を調べている恐怖に、必死に耐えていた。育朗の意識がない今、この
オリジナル・バオーは、まさに一匹の獣も同然なのだ。

野生のライオンの群れに紛れ込んだほうが、いまの状況より遙かに
マシと思えた。それは、例えれば戦車の砲身に括り付けられている様
な感覚だ。

戦車の乗り手、寄生虫バオーのほんの一瞬の気紛れで、アンジェラ
の命が無残に終わる事は間違いなかった。

この、オリジナル・バオーに押さえつけられている自分の手足、こ
れが次の瞬間に溶けださない保証がない……

「ブル……」

幸いな事に、アンジェラの匂いに満足したバオーは、アンジェラの

検分を止めた。そして、今度はアンジェラからエルネストに視線を移した。

「!?」

……次の瞬間、バオーはまるで獲物におそいかかろうとする飢えた狼のように後足をたたみ、エルネストに向って身がまえた。

「くっ……」

波紋でマヒしている体に鞭打って、エルネストはよろよろと立ち上がった。

身構えるバオーに対抗しようと、スタンドを出現させる。

だがエルネストのスタンド、オエコモバは現れたかと思ったら直ぐに瞬き、消えた。

「な……なんだと、スタンドが出ない」

エルネストは動揺して、その声が裏返った。

「……ばかな……こんなはずはない……お……俺は、D I O様の魂のお力を、最も強く受け取ったのだぞッ!」

アンジェラにはわかった。

エルネストの症状は、まさに『波紋』による神経の麻痺症状だ……おそらく、神経の麻痺により、一時的にスタンドを出現させることに支障が出ているのだ。

「バル……」

バオーが、今にもエルネストに飛びかかろうという様子を見せた。先ほどのアンジェラに対する様子とは異なる、明らかに敵を倒そうという動きだ。

エルネストは麻痺している首をガクガクと回し、アンジェラを睨みつけた。

……そして、ゲラゲラと笑い始めた。

「ここまでか……ヒヒヒヒ」

エルネストは笑い、そして自分の腹に手をかける。

「D I O様……今お返しします」

エルネストは、熱にうなされていいる重病患者のように、強い酒を煽った後のアルコール中毒者のように、神を信じる狂信者のように、

宙を見つめ ……

スタンドを、出現させた。

——チカチカと揺らめく、今にも消えそうなオエコモバの翼が、そっとエルネストに触れた——

ドヴァンツ!!

「ウオオオオオ!!!」

爆弾と化したエルネストの腹から、炎が噴き出した。

それにも構わず、エルネストは火を噴く自分の腹に指を突き入れ

——まるでそこに扉でもついているかのように—— 自分の腹をパツクリと開いた。

「なっ……」

凄惨な光景に、アンジェラは目を覆った。

ヌプッ!

と、なぜかエルネストの腹から、血まみれの手が飛び出した。強大なパワーに溢れた、だが包帯に覆われた、どこか病的な印象のあるスタンドの両腕だ。

「ビィヤアアアッ!」

全身から炎をあげ、血まみれのエルネストが叫ぶ。

「あ” あ” ああああッ……D I O 様、D I O 様ああ——!!」

エルネストの腹から現れた腕は、二の腕まで突き出された——そのあとに続くはずの顔は見えない——そして、ひじを直角に曲げ、さらに手首をくるつと曲げ……そのままエルネストの胸をえぐった。

「あ、あ” あ” ああああ” あ” あ” アア——ツツ!!!」

そのスタンドの腕は、エルネストの胸部をえぐってコインを奪った。そして、もう一つ、エルネストの頭部に指を突き入れ、そこから『何か』を引き抜こうとする。

「ウオオオオオム!」

血まみれのエルネストに、バオーがおそい掛かるッ!

スタンドの腕は、エルネストの頭から『何か』を引き抜いた。

そして、またエルネストの腹へ、闇へと、きえていった。

残されたエルネストが、迫りくるバオーを睨みつけた。

「バオーよッ！俺は貴様にはや・ら……レンツッ!!」

バオーの攻撃よりわずかに早く、再びオエコモバが出現した。

姿こそびつくりするほど小さくなっているが、今度はスタンド・ビジョンがくつきりと見えている。

そのオエコモバの翼が、まるで繭のようにエルネストの全身を覆う。

ボフウン!!

……エルネストは、自分のスタンド能力で自らを爆破し、塵となつて消えた。

「アンジェラ、大丈夫？」

崖の上からスマレと、橋沢育朗の幽霊：ブラック・ナイトが顔をのぞかせた。

『バオー、お前か？』

育朗：ブラック・ナイトが、バオーに話しかけた。

「ブルツ」

オリジナル・バオーは育朗の存在を感じると、上を見上げた。

「バルルルンツ」

『バオー……お前、どうやってあの土の中から脱出できたんだ……？』

「バルツ」

一瞬、まるで対話をしているかのように、育朗：ブラック・ナイトとオリジナル・バオーの視線がぶつかった。

そして、オリジナル・バオーは、唐突にアームド・フェノメノンを解いた。

まるで糸を切った操り人形のように、急にガクンと崩れ落ちるバオー：育朗の体を、アンジェラはあわてて支えた。

パラパラ……バオーのプロテクターが剥がれ、その下から育朗の肌が、素顔が現れ始めた。



「……バオー・ブル・ドーズ・ブルーズ・フェノメノンツ！」

育朗の薬指から飛び出した小さな注射器が、アンジェラに『バオアの体液』を送り込んでいった。

注射器から染み渡る薬が、アンジェラの体を冷たくしびれさせる。だがしばらくすると、怪我をしている部位が熱く、ほてっていき……。そして痛みと出血がだんだんと無くなってきた。

先に治療を受けていたスマイレも、だいぶ気分がよくなったようだ。酷く痛めていた右手も、治療を受けた後は随分マシになった様子であった。

「これで、怪我の治りが早くなるはずだよ。二人とも、ひどい怪我だ。しばらくは休むといい」

大変な目に合ったんだね……。再び自分の体を取り戻した育朗が、優しくスマイレたちに言った。

「……ありがと、いくろう……」

スマイレが、モジモジと言った。

「どういたしまして」

だが、本当にもう無茶はやめてくれよ。

育朗はそういうと、ポム とスマイレの頭をなげた。

ボツ

スマイレの顔が、赤くなった。

「ふむ……アナタが橋沢育朗くんね」

初めまして アンジェラがしげしげと育朗の顔を覗き込んだ。

「なるほど、イケメン君ね……。まあ私は外見重視派じゃあないから、スマイレとはかぶらないわね そうそう……。ゲフツツ」

ちよつとツツ、

スマイレはアンジェラの背中を強くたたいた。おしゃべりなアンジェラが、それ以上余計なことを口にしないように睨みつける。

「わかったわよ、スマイレエ……。それで……。育朗くん、君のその力で助けてほしい事があるのよ」

アンジェラは、よく事情が分からずニコニコしている育朗を、億泰と噴上のもとへと連れて行った。

「噴上くん……。これは……」

育朗は、意識のない二人を見て笑顔をひっこめた。

すぐに育朗は、二人へブル・ドーズ・ブルーズを放った。すると、硬直していた億泰と噴上の体がしだいに弛緩していき……やがて二人が意識を取り戻した。

「う……」

「オクヤスツ！目が覚めたのねツ。良かったあ??」

スマレが億泰に飛びついた。

「おっおお〜」

状況を良く掴めずカチンコチンに固まっている億泰を、育朗が少し強張った笑顔で見ている。

「何い、億泰う きさま、この裕ちゃんをさておき……」

同じく意識を取り戻した噴上が、億泰にかみついた。

「スマレ……億泰が困ってるよ?!それに、いいの?」

アンジエラがスマレを突つついた。

「?あら、イヤだツ」

はつと我に帰ったスマレは、億泰を突き飛ばした。

「ぐオツ!」

億泰はゴロリと転がり、地面に背中をぶつけ、目を白黒させた。

「プーダー!」

億泰のポケットで眠っていたインピンが、抗議の声を上げて億泰の下から這い出してきた。インピンは、フンと億泰に顔を背け、スマレに飛びつくツ。

スマレはインピンを頭に乗せたまま、少し困った顔で、育朗、億泰、そしてアンジエラと噴上を何度も交互に見やった。そして、幸せそうに笑い出した。

その笑いに誘われるように、育朗も、億泰も、噴上も、アンジエラも笑い出した。

笑うたびに、その笑い声は大きくなり、楽しい気持ちが止まらなくなっていく……

バミイイイッ

だが、皆が笑っている中で、突然スマレのW i t Dが出現した。

不意に現れたスマイレのスタンドに、皆の笑いが止まった。

「何？スマイレ……どうしたの？」

育朗が、気遣わしげにスマイレの顔を覗き込んだ。

スマイレは、こわばった顔で指先を近くの岩——エルネスト達がやってきた方角だ——に向けた。

「見えた……『彼』が来る……もうすぐよ」

「彼？」もしかして……と顔を上げたアンジエラに、スマイレはうなずいて見せた。

「そうよ……あなたの探している人よ」

コオオオオオオ……

アンジエラは複雑な表情で『波紋』の呼吸を再開し始めた。

「念の為……念の為よ……『波紋』をみんなに流すわ。チョツピリだけどみんな少しは回復できるはずよ……」

「このにおい……そうか、ヤツかよ???」

噴上もまた、少しおびえたように言った。

「マジか……あいつ、マジなのかよおお??? ツ」

バリー！

突然、育朗の額の上部 髪の毛の生え際の部分の皮膚が裂けた。そこから『バオー』の触覚器が出現した。

「……そうか……来るんだね『仗助』君が—— 噴上くん、僕も彼の『意思』の匂いを感じたよ」

育朗は、自分が『気配を感じたい』と念じただけで『バオー』の触覚が出現したことに驚きを感じながらも、顔を引き締めた。

スマイレはもとより、アンジエラも、億泰も、噴上も 負傷が酷く戦う事は出来そうもない。

もし『仗助』が敵として現れたのなら、自分が対抗するしかないのだ。

(僕に、出来るのか……彼を『殺さず』戦闘不能にするような戦い方が) 育朗は、バオーの高すぎる殺傷能力を思い、ひそかに苦悩した。

「!?なんだよ、仗助がくるってのか？ みんなどうしてわかるんだよ

？」

億泰は、まだマヒが残る体を何とか動かそうと奮闘していた。何とか立ち上がったかと思うと、すぐによろけ、しりもちをつく。

その億泰に、アンジェラが『波紋』を電流のように流した。

億泰のマヒが、徐々に解消していく。

「ふーだあ」

インピンは、いつの間にか舞い戻っていた億泰のポケットに波紋を流され、びっくりして飛び出すと、再びスマレの髪にへばりついた。

ブルンツ

バイクの音が聞こえてきた。

WitDの予知どおりの位置から、一台のバイクが音を立てて走ってきた。バイクとその乗り手が一行の目の前に姿を現す。

そして……

「億泰ウーそれから嘖上も……アンジェラも無事だったのかよオオ???

ツ ホツとしたぜえ」

「!?っ、マジだったかよ」

「仗助え……」

ト ト ト ト ト ト ト ト ト ト

そこに立っていたのは、やはり東方仗助だった。

仗助はヒラリとバイクから降り、皆の前で腕を組んだ。

「——アンタが、予知能力が有るッて言うスマレ先輩ツスね。成程、美人っスね——」

はじめまして……仗助はペコリとスマレに挨拶をした。

「どうやら、エルネストの野郎もやられちゃったかあ——」

しかたねー奴だ。だが、お前らが相手じゃ当然かもな。

パシユツ

仗助は、懐から緑色の網を取り出した。自身のスタンド、クレイジー・ダイヤモンドの指先でそれを一行に向けて弾く。

だが……

「おりやつ」

シユルルルツ

網は不意にその軌道を変え、億泰の目の前に現れ……

「ほらヨッ〜」

億泰のスタンド、ザ・ハンドの能力でかき消された。

「グレートだぜ、億泰ウ」

仗助はへへへと笑って、ポケットから別の網を取り出し――
舌打ちして投げ捨てた。

「何だよ……チャダの奴もやられちゃったのか」

でもやっぱりだな、奴はだらしがねー奴だったし、さすがはポルナレフさんツて事っすか。仗助は不敵に、そして少し嬉しそうに笑った。

「さて、これで先輩達にとって、敵はあと1人って事っすね。……残ったのはオレ独りってわけだ」

仗助が肩を回した。

「……だが、今のあんた達のなかでマトモに戦えるのは、アンタ独りだろ……こいよ……育朗くん……第二ラウンドだ」

ト ト ト ト ト ト ト ト ト ト ト

仗助は、橋沢 育朗を指差した。

「仗助くん……君も僕と同じように肉の芽を植え付けられているだけだ……君は敵じゃあない」

戦わない方法はないのかい？ 育朗は首を振り、尋ねた。

「!? そうよツ、仗助、私の言うことを聞いて……ガフツ」

仗助は、何かを言いかけたアンジェラに向かって、脱いだ学ランを投げつけた。

思わず受け取った学ランが変形し、アンジェラはあつという間に拘束された。

「……口で何を言っても、無駄っすよ……アンジェラ先輩、育朗先輩」

仗助は、スタンド：クレイジー・ダイヤモンドを出現させた。

機械と鎧が融合した騎士、筋骨隆々のその姿は、それは、ただならぬほど強力なパワーを持っていることを、その姿が『見える』者達に容易に感じさせる。

コ コ コ コ コ コ コ コ コ コ コ

「……そうだね……仗助君、第二ラウンドだ……バオー 僕に力をツ
！」

育朗は両腕を顔の前でクロスさせるようにした。そして、人間とは思えないほどの跳躍力で飛び上がった。

そしてちょうど跳躍の頂点で、育朗の体からスルリと青白く光るものが抜ける。育郎のスタンド、ブラック・ナイトだ。

バラ……バラ・バラバラッ

育朗は、空中でクルリと一回転して着地した。その体は一回り大きくなっており、肌が青白く変色していた。

その肌を育朗の手がかきむしると、バラバラと肌の一部が崩れた。顔の肌の下にある黒っぽい目が、のぞいた。

そう、もうそこにいるのは、育朗ではなかった。

これが、これが、これが、バオーだッ！

鋭い牙をもつ肉食獣の様な、青白い異様な外見を持つ人型の生体兵器。

現代の狼男。

その姿はまさに怪物であり、ただ立っているだけで、その持つ悪魔的な強さ、恐ろしさを周囲に感じさせていた。

栗沢六助とオケイ その2

「バルル……バルル……」

バオーが、うなり声をあげた。

『今いくよ……バオー』

そこに、先ほど育朗の体から抜けた青白い光——育朗本体の意識と一体化したスタンド：ブラックナイト——が入り込んだ。

ブラック・ナイトの体から無数の管が伸び、バオーとつながる。

スタンドと肉体をつなぐその管は、どんどん短くなっていき、ブラック・ナイトとバオーの体が重なっていく。

そして、

キュウイイイ——ンツ

『!?ハッ これは……』

バオーに完全に憑りついた時、これまでと異なる不思議な感覚が育朗をおそった。

完全に、ブラック・ナイトとバオーの体が重なっているのだ。

これまでは、ブラック・ナイトでバオーの体を操るといっても、行動の主導権は寄生虫バオーに依存する部分が多分にあった。それゆえ、バオーに育朗が考えた通りの精密な動きをさせる事など、もつてのほかであった。

だが今は、バオーと育朗が完全に一致している感覚がある。

今では指先の一つ、一つまで育朗の意思が正確にバオーを動かす事ができた。だが同時に、相棒である寄生虫バオーもまた、『一緒にいる』事を育朗は感じていた。

バオーの本能的意識が育朗の精神とまざりあい、一つに溶け合っている。

バラバラの意識を持ちながら、しかし互いの感情・思い・感覚をハッキリと共有している。と言えばよいだろうか。

つい先ほど、メネシスの放つ炎を身を削って消した、そのスタンドの欠損部分さえ、もはや埋まっている感覚があった。

その欠損を埋めているのは、この8年ずっと共に眠りについていた

『相棒』の意識だ。

…… 自分をこの過酷な運命に導き、そしてまた後30日以内に自分の命を奪うであろう死神

…… だが 自分を救ってくれた少女を救い出す為に共に戦った『戦友』

…… 8年もの時を共に過ごした『相棒』

…… 寄生虫『バオー』の意識とその生存本能を、育朗は自分の傍らに感じていた。

（『バオー』……僕は自分の運命に後悔は無いよ）

育朗は自分の内部にいる、『相棒』にそつと語りかけた。

「準備できたな……じゃあ育朗くん、行くぜえッ」

育朗の感慨など関係なく、仗助が突進してきた。

仗助の横に立つ巨大なスタンド、クレイジー・ダイヤモンドの拳がバオーをおそうッ！

育朗は、リスキニハーデン・セイバーを出現させた。

（仗助君を殺したくない。刃は潰しておくんだ）

育朗の意思に呼応して、刃が丸くなって行く。

「バル、バルッ！」

バオーが、リスキニハーデン・セイバーを振るった。

幾ら刃を潰していても、バオーの怪力で振るわれた刀がまともにあたれば、一撃で仗助を戦闘不能に出来るはずだ。

『ドラァァッ！』

だがクレイジー・ダイヤモンドは、バオーの振るう刀を、時にのぞけり、時にダッキングし、そして時に拳で払いのけた。

その防御のための動きの隙をぬって、容赦のない攻撃がバオーをおそう。

『ドラッ！』

『ドラララッ！』

『ドラララララァッ!!』

やはり、仗助のクレイジー・ダイヤモンドは攻撃・防御共に恐ろしい程に基本性能の高いスタンドであった。

その動きが、攻撃が、すべてが機敏・正確で、しかも恐ろしいまでのパワーを持っているのだ。

普通のスタンドやクリーチャーでは、仗助とクレイジー・ダイヤモンドを前にしてまともに立つこともできないだろう。

(やはり、強いッ！どうすればいい？どうすれば彼をひどく傷つけることなく、無力化できる？)

バオーに、クレイジー・ダイヤモンドの攻撃を受け流し、ガードする役を任せ、育朗は考え続けた。

その時……

「無駄ッ!! ドラァァァァァ」

育朗：バオーの足をクレイジー・ダイヤモンドが払った!

『うっ……強いつ』

「ガードが甘いぜ、育朗クンよおッ」

仗助はよろめいたバオーに体当たりをぶちかまし、クレイジー・ダイヤモンドで追撃をかけた。

『まだまだだッ!』

バオーは身を丸め、ボクシングで言うビーカブー・スタイルを取った。そのスタイルでクレイジー・ダイヤモンドのラッシュを受け止め、すり抜けて、近づいていき、接近戦を挑む。

仗助のふところにもぐり込む……リスキニハーデン・セイバーを振るった!

『仗助君ツツ、君を止めるッ!!』

「甘いッ」

クレイジー・ダイヤモンドは、バオーの刀を両手のひらで受け止め、へし折った。

そして、そのまま蹴りを放つ。

ボゴオツ!

バオーはクレイジー・ダイヤモンドの蹴りをまともに受け、後方に吹き飛ばされた。

「手加減しちやあ、この仗助君に勝てないっスよお——っ」

吹き飛ばされたバオーは、空中で身をひるがえした。着地と同時に

四肢を地面に食いこませ、勢いを止めた。

そして、両腕をまるで鶴の翼のように頭上にかかげ……リスクニ
ハーデン・セイバーを仗助に飛ばした。

『セイバー・オフ』『バルルツ』

『ドラアアア』

仗助は、飛んでくるバオーの刃を、地面を『破壊』し、そして『作
り直した』壁で防ぐ。

「バルバルバルツツツ」

しかし、その壁でできた死角を利用して、バオーが仗助に迫ってき
た。

『仗助クン、スマナイ』

バオーの両腕が、発光する。

「ウオオオオオオオ 何かヤバイぜ」

クレイジー・ダイヤモンドは自身の本体である仗助を殴り、突き飛
ばした。

ドツガラガラガラツツツ!!!

その一瞬後、つい先ほどまで仗助がいた場所とバオーを結ぶ空間が
白く発光した。

そして、その光の中に生えていた草木が真っ黒に炭化しているッ！

「あれは、バオー・ブレイク・ダーク・サンダー・フェノメノンッ」

アンジェラが叫んだ。

「SW財団の報告書を読んだことがあるわ。バオーの体細胞は強力な
電気を生み出せるとッ……あれが、それッ？ちよつと、育朗ツツ や
り過ぎよ……」

バシバシ、バザーツ

「痛つてえ……しかもズボンがちよつと焦げちまった……危うく全身
がハンバーグになるところだったぜえ——。これ、『ばあばりい』で
作ってもらった刺繍入りの特注品なんだぜえくく」

自分のスタンドに殴られ、崖下に突き落とされた仗助が顔をしかめ
た。

「育朗先輩……あんたマジだな」

『仗助くん……君のスタンドは強力すぎる。遠慮はできない』

育朗が、崖上から仗助を見下ろした。

「そうかいッッ」

仗助は、自分と共に崖上から落ちてきた岩を『直した』。崖上に戻っていく岩の上に乗った仗助は、その上昇の勢いを利用してさらに高く飛び上がり、バオーの頭上から攻撃しようとするッ。

『甘いッ！』『バルッ』

だが、スタンドを使った仗助の跳躍をも、バオーが上回った。

跳躍してからのバオーの蹴りを、空中でクレイジーダイヤモンドが受けるッ。

追撃とばかりに、着地した隙を狙ったクレイジー・ダイヤモンドの一撃は、バオーが両手で受け止めた。

「バオーってあんたの本体だろ。あんた、なんで、生身でスタンドの攻撃を受け止められるんすか？」

『……それが、僕の……ブラック・ナイトの能力さ……そして、とどめだ』

バオーの両手が、光る。

『決まった、ブレイク・ダーク・サンダーだ。この距離からなら避けられないよ』

仗助君、降参してくれ。

そんな育朗の願いを、仗助は首を振って拒絶した。

「……こんなんで勝ったと思ってるんすか？いいや……また俺の勝ちだぜ」

ブワッッ

突然、バオーの周りをゴムタイヤが覆い、バオーをゴムの中に閉じ込めた。

このゴムは、メネシスが投げつけたモンスターバイクのタイヤのゴムだッ！

そのゴムをクレイジー・ダイヤモンドで作り返した『膜』がバオーを覆っていく。

『こんなもので……僕を止められるかッ』

た1人では何もできないわよ」

と、スマイレが自分のスタンド、WitDを出現させた。

「スマイレ先輩、止せよ。アンタじゃあ俺をどーこー出来ねえー」

仗助がWitDをつまんだ。

ピシッ

「あっ……」

自分のスタンドを圧迫されたスマイレは顔をゆがめた。

「スマイレ……止めてくれ、仗助君！」

「育朗、動くなあッ！」

とつきに前に出ようとする育朗を見て、仗助が怒声を発した。

「育朗くん、頼む……俺にこれ以上ひどいことをやらせないでくれ

……」

「……仗助君、頼む」

スマイレを離してくれ……何でもする。育朗が頭を垂れた。

仗助の顔が、ゆがむ。今にも泣きだしそうだ。

そのとき……

「さてよ、仗助エ〜ッ！」

億泰が、ヨロヨロと立ち上がった。

「正気に帰りやがれ、この馬鹿野郎……がッ」

億泰は、まだ体のしびれが取りきれないままヨロヨロと歩き、仗助に自分の手が、スタンドが届くところまで近寄っていった。

「億泰、それ以上近づくな」

仗助が警告した。

「いくらお前が相手でも、容赦しねーぜ」

「……そりゃこっちのセリフだよ、バカ野郎……スマイレ先輩をとつとと放せヨオ」

億泰が睨みつけた。

「俺のザ・ハンドは手加減できねー。覚悟しろよ」

仗助はつらそうな、今にも泣きだしそうな顔を一瞬見せ……だがすぐに厳しい顔にもどった。スタンドに代わって、自らスマイレの手をねじりあげ……そして、クレイジー・ダイヤモンドを億泰の目の前に

出現させた。

「……いいぜエ——お前とは長い付き合いだから……お前のスタンドをだせよ、またサシでやってやるぜ、億泰よお——っ」

「へえ〜？〜そうかよ。だがお前みたいなアホに俺のスタンドはもつたないぜ」

億泰が言った。

「オレは確かに頭悪いがよ〜〜だがそんなオレでもホントの馬鹿野郎は分かるんだよ。馬鹿野郎ってのは、自分に取って何が大事なのか、分からなくなったヤツだよ。………今のお前や、兄貴みたいなよオ……何だあ？、その馬鹿丸出しの髪型は？」

「オイ………今、なんていった、お前？」

仗助の顔色が変わった。

仗助はスマレを、クレイジー・ダイヤモンドはW i t Dを、それぞれ手荒く手放し、億泰に向って拳を構えた。

ポン

W i t D が無数に分裂して行く——

「仗助エ〜〜トットト杜王町に帰るぜ。それで……お前のその髪型も、何ツつくか……あれだ、元のサ〇エさん見てーな カッコ悪いイヤツにもどそうぜエ〜〜っ」

億泰が陽気に言った。

プチッ！

「てめえエツツ!!俺の頭のこと、何て言ったあア——!!!」

仗助の血走った目……だがまだクレイジー・ダイヤモンドは動かないッ！

「カッコ悪いって言ったんだヨ、このダボがあ」

億泰が挑発する。

次の瞬間ッ！億泰の右拳——スタンドではなく自分の素拳——の攻撃が 仗助の顔面をおそうッ！

仗助は血走った目で、億泰を睨みつけ……

「へッ……」

仗助は歯を食いしばり、億泰の渾身の一発を避けもせず、まともに

顔面に受けた。

ドガツツ

そして、分裂したW i t D が崩れ落ちる仗助の額に集まり……肉の芽を引き抜いた。



そしてその10分後、肉の芽を引き抜かれ、意識を取り戻した仗助は……

皆に、まさに完璧な姿勢の、美しい土下座を披露していた。

「申し訳ないツ!!……俺はその、与太話を信じてD I Oの野郎にあやつられてた……だが言い訳はしねーぜ」

仗助は両手をついた体勢から、ピョンと跳ね起きた。そして直立不動で立ち上がり、皆にズバツと頭を下げた。

「スマン！スミマセンでした！　そして……『俺を止めてくれて』ありがとう……」

揺れている。

懐かしい感覚だ。

昔、子犬だった自分が河原で川の増水によって砂州に閉じ込められ逃げられなくなったことがあった。そのとき、母が自分の首を啜えて安全な場所まで運んでくれた時を思い出す。

……母の温かい匂いを思い出す……

だが今、母の匂いの代わりに周囲から漂ってきたのは、血と腐った肉の匂いだった。

『彼』は目を覚ました。

だが何かおかしい。体が動かない……ここは何処だ？

まるで頭に霞でもかかっているかのようなぼんやりした意識の中で、『彼』は記憶をたどり、起こった出来事を思い返そうと務めた。

そもそも自分と『彼女』は『息子』にすべての生命力を渡し、そして満足して逝ったはずだ。

なのに、なぜ目を覚ました？

まだ視界もはつきりしない。だが『彼』には強力な嗅覚があった。周囲の匂いを嗅ぐ……さきほど嗅いだ血と腐肉の匂い、木と湿った土、草の匂い——ここは森の中らしい——そして、すぐそばに懐かしい匂いがした。

心温まる、勇気づけられる匂い。母ではない、『彼女』だ。

『彼女』もまた何が起こったのか戸惑っているようだった。心配ないよ。僕も隣にいる。僕が君を守る。そう伝えようとしたとき、『彼』はもう1人の『男』の存在に気が付いた。

そうだ、例の血と腐った肉の匂いをさせているのは、この『男』だ。『男』もまた、自分たちが目を覚ましたのに気が付いた様子があった。だが、自分たちには一切構わずに森の中を走り続けているようだ。

自分たちのことを危険はないと判断したのか。『彼』は気を害した。すこしこの『男』を痛い目に合わせる必要があるかもしれない。自分は群れのリーダーだったのだ。もともと、『男』は自分の群れの部下だったのだ。誰がリーダーか、思い知らせてやる必要がある。

だが、体が動かない。

チガウ……自分たちがその『男』の背に乗っているのだ。何故だ？ 必死に体を動かそうとしても、どうしても、まるで泥沼にはまったかのようにぬっぺりしたものに囲まれ、まったく体が動かせないノダ。「クウウン」

『彼女』が鳴いた。まるで子犬のような心細げな声だ。

子犬？

その時、『彼』は大事なことを思い出した。

そうだ、この世の何よりも、自分の命より、『彼女』よりも大切な唯一の存在がいる。

『息子』

『息子』は何処だ????????

激しい焦燥感にとらわれた『彼』は、『息子』を呼んで大声で叫んだ。隣の『彼女』も、その叫びに呼応した。

だが、返答はない。

否、『男』が反応していた。これまでは『彼』を無視していた『男』

が、大声で吠える『彼』と『彼女』を感じ、イライラした敵意の匂いを向けた。

そして『彼』は、また何も見えなくなつた。

1999年11月11日 未明 「T村」:

つい三か月前に離れた日本の地——母国——にこんなに早く舞い戻る事になろうとは、まったく予想していなかった。

「ヤレヤレだ。まったく笑えねーぜ」

空条承太郎は乗ってきた車を降り、1人、T村の中へと入って行った。

東北の地方空港に到着してすぐ、SW財団と日本政府の用意した車にのって、この村に到着したのは、つい数分前のことだ。

飛行機の中で入念に睡眠時間を調整した結果、時差ボケこそほとんどないが、それでも長距離の移動は少し体にこたえていた。

無理もない、つい20時間前まではコストリカで海洋の調査とともにSW財団が行っていた古代マヤ文明の遺跡調査に同行していたのだ。それが、この杜王町の北側で行われていた別の調査隊からの SOSを受け、SW財団の仕立てたチャーター機を乗り継ぎ、大急ぎで現地入りしたと言うわけだ。

ゾンビの大量発生……早急に対処し、被害が広がらないようにしなければならぬ。

村は壊滅していた。

元々は寂れた漁村だったのだろう、狭い道に家々が数件固まっており、村の通りは海へまっすぐ続いている。その通りを、承太郎はポケットに手をつまんだまま突き進む。

ジャリッ

海に至るであろう路地を進む。

生きた人間である承太郎が来るのを見て、あちこちから飛び出し、騒ぎ、喚く元住民たち。

「血イイイイ」

そこかしらの路地から、屋根の上から、家の中から、元住民たちが承太郎を取り囲むように現れ……一斉に飛び掛かってきた。

「……スタープラチナ・ザ・ワールドッ！」

承太郎は、自身の背後に、神話の世界から現れた様な強大なエネルギーに満ちたビジョンを出現させた。

そのビジョン：スタンドに命じ、承太郎は自らの恐るべき能力『時間停止』を発動させた。

一瞬にして周囲がセピア色に染まり、音一つない時間が止まった世界が承太郎を包む。

時が止まった世界で、承太郎はジックリとおそい掛かってくる元住民——ゾンビ——を観察した。

おそらくゾンビになる前は皆年老いていたのだろう。つやのある肌にそぐわなず、その服装は年寄りみであり、滑稽なほど体に合っていないかった。

唯一の救いは、この村が限界集落と化しており、小さな子供がいなかったことか。

『時』が、再び動き出した。

『オラオラオラオラオラオラオラオラオラッ!!』

承太郎は迫りくるゾンビを、スター・プラチナのラッシュで一掃した。

スタープラチナの一撃で頭部を破壊されたゾンビは、それでもピクピクと体を引きつかせている。

ゾンビは確かに不死身だが、頭部を破壊すれば動けなくなる。朝になれば、太陽のエネルギーによって残っている肉体もチリとなるはずだ。

承太郎は、陰鬱な気持ちで時折現れるゾンビを倒しながら、寂れた元農村を見て回った。

丹念に辺りを搜索し、撃ち洩らしたゾンビどもがいまいかだろうか、チェックしていく。犬や、猫までも、ゾンビ化していないか、注意を払う。だが、しつこく、病的なほどに念には念を入れて探しても、生

きている人間は1人も存在していなかった。承太郎は、ひとしきり村の探索を済ますと、苦虫をかみつぶしたような顔で車に戻った。

承太郎が車に戻ると、まさに二体のゾンビが車に飛び掛かっていく所であった。

岩をも砕くゾンビの超パワーをもってすれば、車を破壊することなど造作ないはずだ。だが、承太郎はまったく焦らずに、少し離れたところからゾンビが車に飛びつくのを、落ち着いて眺めていた。

バチバチバチ

車は、紫色の光を帯びたスタンドの茨に覆われていた。

「Gbyuuuuu!」

一体のゾンビがその茨に触れ……まるで砂でできた人形のように、崩れ落ちた。

もう一体のゾンビは、相棒が塵となるのをその目で見て……うろたえ、隣の電信柱を引きちぎった。

「GuraaeeeeI!!!」

ゾンビの超パワーでいとも簡単に電信柱が振り上げられ……またストンと落ちて、地面に転がった。

『オラオラオラッ!』

倒れてくる電信柱を、スタープラチナが砕くッ!

電信柱を拾い上げようとしたゾンビは、顔が、手足が、『紙』と化して地面に転がっていた。

車のドアが開き 運転席にいた男・岸部露伴が出てきた。ゾンビが『紙』となったのはこの、岸部露伴のスタンド・ヘブンズ・ドアによるものだったのだ。岸部露伴は、ゾンビの『紙』にかかれた情報を読んで、首を振った。

「ダメだ承太郎さん……このゾンビ達は、どうやら何も知らされて無いようです」

もう少し調べてみますが……そう言うと、岸部露伴はゾンビの横に膝をつき、熱心に『紙』を読み始めた。

「そうか……ただの使い捨てのコマにされたってことか」

むかつくぜ。 承太郎は車の後部座席のドアを開けた。

「ジジイ、どうだ……他に撃ち漏らしはないか」

その前に口にした、生きている奴はいないか　と言う質問には、黙って首が振られていた。

「ふむ……この村にはもうゾンビは残つとらんよ」

車の後部座席に乗っていた老人は、空条承太郎の祖父、そして東方仗助の父、ジョセフ・ジョースターであった。

ジョゼフは自分のスタンド、ハーミット・パープルの能力を使って、車に据え付けられたカーナビのモニターに念写をしていた。

「まだ動いているヤツは、後……四ヶ所……じゃの？」

このあたりの地図上に、赤い点が四つ、ピコン、ピコンと光っている。

承太郎はカーナビの画面を覗き込み、今後の対応の計画を立てた。

「ふむ……大丈夫だ。この、南に向かっているヤツは、ホル・ホースにやらせよう……ちよつと信頼出来ねえが、俺が信頼するスタンド使いを行かせている。問題ないだろう。この、西のヤツはポルナレフがやる。ちと敵がてごわそーだが、そこには仗助もいる。何とかしてくれるだろう」

「……ワシらはこの二カ所、北の海岸線沿いと、東北自動車道の方へ逃げたヤツらを追うワケじゃな……いや、待つんじゃ……」

ジョセフが何ごとかに気がつき、カーナビの画面を広域表示に変えた。

コ〃コ〃コ〃コ〃コ〃コ〃コ〃コ〃コ〃コ〃

「承太郎さん……もう一つだ。もう一つ、こんな所に……カーナビの画面が切れていたから分からなかった……これもヤバイ奴だ……もうすぐ、集落についてしまう」

ゾンビの『紙』の調査を切り上げ、運転席にもどっていた岸部露伴がジョセフが操作するカーナビの画面を指さした。そこには、他のと比べてひとときわ大きい赤い点が瞬いていた。

「なんだと……マズいな」

承太郎が顔色を変えた。

「露伴クン、奴が向かっている先に、人が住んでいる所はないかい？」

露伴は、手元の地図をパラパラ開き、そしてあるページを見せた。
「ある……あります、承太郎さん。どうやら老夫婦が住んでいる集落の様だツツ」

「チツ、ここからだと言間に合わねーな……一番近いのは、ポルナレフと仗助のヤツの所か……」

承太郎は携帯を取り出し、盟友、ジャン・ピエール・ポルナレフへ電話をかけた。

東方朋子 その1

1999年11月10日 朝 「M県S市杜王町」:

「しのぶさん……大丈夫よ……そうよウチの仗助も一緒にいるんだから……ええ、悪い事なんて起こりっこないわ。明日には元気いっぱい帰ってくるはずよ」

東方朋子は、しのぶからかかってきた携帯電話を切り、長々とした電話越しの会話を終えた。電話の声から判断すると、しのぶはすっかり動揺し、情報に飢えているようであった。

無理もない。

先ほど、SW財団と名乗る財団のものから、早人君と……仗助がバイトで向った山で、何か深刻な事件があったらしいと、二人の親族：しのぶと朋子へ連絡があったばかりなのだ。

確かに恐ろしい。朋子はブルツと体を震わせた。

しのぶにとつての早人と同じく、朋子にとつても仗助が唯一の家族なのだ。

本人を前にして口にしたことこそないが、仗助は目に入れても痛くないほどかわいい、自慢の息子だ。その息子が、生死さえはつきりしないほどの危険な目に合っている……だが、確かに恐ろしくはあったが、朋子はしのぶほどには心配していなかった。

自分の息子を信じているのだ。

最近、日に日に最愛のあの男に似てきた息子を。

一方で、しのぶの気持ちもよくわかっていた。

しのぶは、自分の夫を仕事中に失っている。また同じことを繰り返したくないと思っているに違いなかった。そもそも早人君はまだ小学生だ。当然だ。自分だって彼女の立場なら、激しく心配しているだろう。

とにかく、しのぶを連れて対策本部に行こう。たしか、杜王町グラウンドホテルの会議室に対策本部が設置されていたはずだ。

朋子は再び受話器を取った。SW財団のコーディネーターだと名乗った男がよこした連絡先をダイヤルし始める。

そのとき……

ピンポーン

玄関のベルが鳴った。

朋子は誰が来たのか？と玄関ののぞき窓から来訪者の姿を確認し

——大きく深呼吸した後で——ドアを開けた。

そこには、車いすに乗った年老いた女性と、その車いすを押す中年女性が立っていた。

二人とも日本人ではない。

英国系か？

朋子より一回り歳上と思われるその中年女性は、まだ十分に美しさを保っていた。

そして、彼女が押す車いすに乗った年老いた女性……

(私はこの人を知っている。一度もあつたことはないけれど、確かに知っている。)

朋子は、その年老いた女性の目をまっすぐに見た。

二人の視線が、真正面からぶつかりあう……

どちらも、目をそらさなかった。

「貴女が、東方……朋子さんね」

老婦人が言った。

コ” コ” コ” コ” コ” コ” コ” コ” コ” コ”

ト” ト” ト” ト” ト” ト” ト” ト” ト” ト”

「あなたは……」

朋子はいつかはこんな日が来ると、心のどこかでわかっていた。

いつかこんな日が来たら、何て言おうか、ずっと前から色々と考えていた。

だが、どうしてこんなタイミングで……

今は駄目だ。仗助の安否を知ることが最優先なのに……

車いすに乗った老婦人はニツコリと笑った。

てらう事無い、混じりけなしの笑顔だ。

「初めまして、朋子さん……私はスージー・Q・ジョースターよ。……お会いしたかったわ」

「いつ……いつ……」こちらこそ、初めまして」

朋子は丁寧にあいさつを返しつつ、心の中では色々な思考が渦巻いていた。

私は確かにこの人の夫の子を産んだ。

結果的に、この人の夫を、ジョセフをこの人に対して裏切らせたのだ。

もちろん目の前の老婦人を憎むことは出来ない。私にそんな権利はない。

私は、この老婦人を手ひどく傷つけたに違いないし、誰だつてそんなひどい裏切りにあつていい訳がない。

彼女は私を憎む権利がある。私はその憎しみを受け止める覚悟があるツ。

しかし……しかし……私は、私はツ！

あの時、ジョセフを愛さないわけには、いかなかった。

……私は自分の生き方を、息子の生を否定しない！

彼が、仗助がこの世に存在しているのは、絶対に、完全に、正しいことなのだ。

私はすべてを納得して、父親以外の誰に頼る事もなく、誇れる仕事につき、自分で生計を立て、仗助をちゃんと育ててきた。

仗助は、ちよつと暴力的なところはあるけれど、でも真つ直ぐに育ってくれた。自慢の息子だ。

彼女が私を憎むのは無理がない。

でも……絶対に謝れないわ

東方朋子と、スージー・Q・ジョースターは、真正面から向き合つた。

互いの視線はぶつかり合つたままだ。

だが、チリ・チリリ…… と押し殺したはずの罪悪感が、朋子の胸を刺しつつづけていた。

スージーQのこれまで生きて長い年月を反映した、まるで年輪のように刻まれた皺。 温かい、だが少し悲しみのこもった目。

「……なんとまあ、たくましいこと」

アリッサは安心のあまり、地面にしゃがみ込んだ。

「ほオオ?? ツ、コーコーセーども、やりおるぜえ」

ホル・ホースは、へつとシニカルな笑みを浮かべた。正直、不意をつかれたとは言え自分が不覚を取った相手『東方仗助』が仲間と楽しそうにしている光景が、面白くなかったのだ。

「!?ホル・ホースさん……皆さん、誠に申し訳無いです!!」

近づいてきた一行に気が付き、仗助が目を覚ました。仗助は、ピヨンと跳ね起き、直立不動の姿勢で謝罪の言葉を述べた。

何か言いたそうなアリッサを制し、ピーターが疲れきった口調で言った。

「仗助君、君は悪くないよ……元はと言えば僕を庇ってくれたから、肉の芽を植えつけられてしまったのだろう……悪いのは僕だよ。僕なんて……」

そう言うとピーターは、自分が皆を騙し、DIOの命じるがままにホル・ホース達を攻撃した事を謝罪した。

「しかも、僕のせいでシンディが……」

ピーターは、膝をついて泣き出した。

その肩を、アリッサがそっと包んだ。

「……よし、この話はここまでにしよう。……実はな……昔、俺もDIOに騙され、肉の芽を植えつけられた事がある……だからわかるぜ。DIOは……奴の手口は人間が対抗できるような生易しい代物じゃね——つて事がなあ」

ポルナレフはパンと手を打ち合わせて、反省会を終わらせた。

「それよりも、俺達にはまだやる事が残っている。いいか、聞いてくれ……」

ポルナレフは、皆に 承太郎からの伝言を伝えた。



「つまり、俺たちが遭遇した怪物たちが、人里へ近づいているってことか」

安全だと思っていた、杜王町のアケミ達が……噴上は身震いした。

「そうだ、大部分はすでにジョースターさんと承太郎達が処理中だ。だが、奴の手に余る部分は、俺たちがやらなきゃならぬ」

ポルナレフが言った。

「まさか……六助爺さんとケイお婆さんの家が……」

ポルナレフの話の話を聞いて、スマレは真つ青な顔になった。

「大丈夫だよ。僕が助ける。おじいさんとおばあさんは、僕と仗助君に任せるんだ」

育朗は、スマレを抱きしめて言った。

「ダメよ、私も行くわ……」

スマレは首を振った。

「……私が危ないことをアンタに任せて、自分だけのほほんと安全なところで待つててるなんて、期待しないでよ」

「君に、あのバイクは乗れないよ」

「ロープか何かで、アンタの体に、縛りついて行けばいいわ」

アンタには、私の『能力』が必要よ。

言い張るスマレに、育朗はニツコリ微笑んで抱きしめる手に力をこめ……『ブル・ドーズ・ブルーズ』を打ち込んだ。

「!？」

首筋に『ブル・ドーズ・ブルーズ』の麻酔を打たれたスマレは、まるでラジオのスイッチを切ったように、プチンと意識を失った。

ガツクリと崩れたスマレを、育朗は慌てて支えた。

育朗は、少々狼狽して気を失ったスマレの様子を観察した。

幸いなことに少し脈も、呼吸も弱くなっているが、どちらも安定しているようだ。

「ほお——超強力な麻酔だな……大丈夫なのか？」

傍らにいたホル・ホースが尋ねた。

「大丈夫です。呼吸も、脈も安定していますから」

そうは言いながらも、育朗は心配そうに眉をしかめていた。

(なんてことだ……量を四分の一に絞っていたのにこの効き目……今日二本目だからか?……)

オーバードーズ(過敏投与)……と言う言葉がチラリと頭をかすめ

る。

（バオーの体液は強力だ。この能力……ブル・ドーズ・ブルーズは何度も打てないみたいだね……）

だが、幸いなことに、スマイレの体調は安定しているようだ。

育朗は、ホル・ホースにスマイレをゆつくりと引き渡した。

『ホル・ホースさん……彼女を頼みます』

ホル・ホースは、スマイレの頬を微笑んでつつく育朗の様子を見て首をすくめた。

「アンサンよお——意地張らずに一緒に行けばいいのによお」

俺に女を預けていいのかよ。

おどけてみせるホル・ホースに、育朗は、『アナタはいい人です』と生真面目に答えた。

「彼女は僕の希望」

育朗は、そつとスマイレの髪をなぜた。

「おそらく残り三か月も生きられない僕にとっての、希望なんです」

せめてスマイレとお爺さん、お婆さんを助けることが、僕の生きた証なんです。

育朗の言葉に、一行は言葉を失った。

「それよりホル・ホースさん……約束は守ってくださいよ」

育朗は真剣に言った。

「その時がきたら、僕を殺して下さい」

「……任せときな」

ホル・ホースはグイツとテンガロン・ハット を目深にかぶり直した。だが返事をするとき、ホル・ホースは育朗の顔をまともに見なかった。

アンジエラのスケーター・ボーイを除けば、一行に残された高速の移動手段はDRESSSが使っていたビッグ・オフロードバイクが三台のみだった。

このバイクで荒野と森を越え、撃ち洩らしたクリーチャーが六助爺さんとケイ婆さんの住む 集落に到達する前に捕まえなくてはならない。

「……育朗くん、行くぜえ——、そろそろよお?? っ」

ビッグ・オフロードバイクに跨った仗助が言った。

仗助の隣では、噴上が少し心配そうな顔でバイクに乗っていた。

噴上が心配になるのも無理はない、二人が乗っているのはBMW R1150GS、排気量1000CCを超える、今年発売されたばかりのモンスター・マシンだ。

しかも、そのうち一台は、元々は一台は巨体のメネシスに合わせた改造が施されている。到底人が乗れるようなサイズではなかった。なんと、身長180cmを越える仗助が、シートにまたがっても、ハンドルにも、ペダルにも、手足が届かないのだ。

その巨大過ぎるクレイジー・マシンを、仗助はクレイジー・ダイヤモンドに自分の体を支えさせて、『無理やり』乗っていた。

噴上と育朗が乗るバイクは、ノーマルのR1150GSではある。が、それでも、それが乗り手を選ぶ強烈なじゃじゃ馬なことに変わり無かった。

「気合入れるよ育朗くんツツ。このバイクに乗れんのは俺と育朗くんくらいしかいねーんだからよおー」

「……おい、俺を忘れんなよ……」

俺のハイウエイ・スターで搜索しなかったら、そもそも敵を見つけられねーぜ。噴上が少々不貞腐れながら言った。

「しかし、こんなバケモン DRESSの野郎は何だって持ち込んだんだ?」

「……ヤツラの『ボス』の趣味らしいぜ」

仗助が答えた。

「奴ら、俺の近くではDRESSについては何も話そうとしなかったぜ。だが、このバイクを扉の向こうから持ち込むときに、バイクに關してはボスの趣味に付き合わされてたまらんと、ヒーヒーボヤいてやがった」

「迷惑な趣味してやがる」

噴上が険悪な表情になった。

「こんな乗りづれーバイクを選びやがって」

「こんなふーにスタンドをうまく使って運転するしかねえ??ゼ。やれるか、噴上裕也?」

仗助のアドバースに、噴上は、『俺にバイクの乗り方を教えようとするんじゃない?』と、さらに不満を募らせた。

「JET（珍走団）の特隊なめんなよ? 仗助エ」

「おっ……おう——」

返答に困り、仗助は頭を掻いた。

「ハハハッ 頼もしいね。じゃあ……行こうか」

育朗が、少し楽しそうに言った。

「ちよつと待て……仗助、『扉』の事なんだが、一つ確認したいことがある」

三人の会話に、ポルナレフが割り込んだ。

「なんすか?」

「知りたいのは、あの、ヤツラが使っていた遠く離れた場所を繋ぐ『扉』のことさ……俺はチャダって言うスタンド使いが開いた『扉』の向こう側を見た。君は……奴らの組織に入り込んでいた時、チャダが開いたあの『扉』がどこに繋がっているか、聞いていないかい?」

あれは、どこかで見た記憶がある景色だった気がするんだ。

ポルナレフは首をひねった。

仗助は、申し訳なさそうな顔をした。

「あのキシヨク悪い『肉の芽』に取りつかれていたときの事は、まるで夢の中みたいにな、ブーツとして、よく覚えてないんす——いや——確かに『扉』の向こうから声が聞こえてきたときがありましたね。なんだか、英語じゃなかったツス。なんていうんすかねーフランス語? スペイン語? そんな感じに聞こえたツス」

「フランス?」

ふむ……ポルナレフは、少し納得した表情でうなずいた。

「わかった。仗助、俺は心配してねーぞ。早く奴をぶっ倒して来いよ」

杜王町でまた会おう。

ポルナレフは、噴上と仗助、そして育朗の肩を叩いた。

北上している敵を追いかけるのは、バイクの運転が比較的得意な仗

助、噴上、そして育朗の三人に決まっていた。

他のメンバーは、新たに表れた敵……無数の芋虫を全て退治しなければならぬ。ユニカーズが生み出したその芋虫は、目の前の荒野の至る所にウネウネとのたうちまわっていた。

さらに、その小さな芋虫の中心にいる、まるでクジラほどもある巨大な芋虫を倒さなければならぬのだ。

主をなくして暴走しているスタンドと戦う。正直それもまた、ぞつとしない戦いであった。

「仗助え〜こつちは任せときな」

億泰が言った。

「俺がいれば、大丈夫だからよオオ」

億泰は、背中越しに仗助に向かって親指を立た。そして、雨の向こうにぼんやり見える巨大なクリーチャーの方へ歩いて行った。

そこには、ハンターとゾンビの肉体を喰らって巨大化したスタンド、ユニカーズがのた打ち回っていた。既にポルナレフとホル・ホースは、その巨大な蛆虫と相対すべく、準備している。

億泰は、自分のスタンド：ザ・ハンドの瞬間移動能力で、ポルナレフとホル・ホースの横に瞬時に移動した。そして、遠慮なくユニカーズの巨体をその能力で『えぐり』始めた。

sw財団の生き残りであるアリッサとピーターも、三人のバックアップをするため、拳銃を準備しはじめた。



仗助達の隣には、もう1人、アンジエラが残っていた。

「仗助、手を出して」

今はおしやべりしている時間はねーんだぜ……そう肩をすくめる仗助を、アンジエラは無理やりバイクから降ろした。そして、仗助の右手にそつと触れる。

「……ッ！」

痛みに仗助が顔を歪めるのを見て、アンジエラは怒ったように言った。

「やっぱり……アンタは自分の負傷は直せないのだね……」

無理ばかりして……こんなんでバイクの運転なんてできないでしょうが。

「いや??育朗に薬を……ブルドーズを打ってもらったから、大丈夫ですよ」

「嘘おっしやい、育朗のブル・ドーズ・ブルーズは傷を完治させるような物じゃあないでしょ」

せめて、あんたの怪我はワタシが……

コオオオオオオ——ツ

アンジェラは波紋の呼吸をしながら、仗助の手をさすり……
フンツ!

仗助のドテツパラに、思いつきり膝蹴りを叩きこんだ!

ガフツ!

「!?何すんだ……アンジェラ、おめえ——」

思わず前のめりに崩れ落ちかかった仗助は、かろうじて右手を前に突き出して地面との衝突を避けた。

そして……

「おお—— 骨折の跡があんまり痛くねー」

右手をついた仗助は、びっくりしたように目を丸くした。骨折した右手をあれこれ振ったり、握ったり、右手の状態を確認する。

「スゲーぜ。まだちよつと痛エ——が、バイクの運転には何の問題もねー」

波紋か?尋ねた仗助に、アンジェラがうなづいた。

「ディーパス・オーバードライブ……私の生命エネルギーをちよつぴり使つて、あんたの傷を治したわ」

ありがとうよ 礼を言おうとする仗助を、アンジェラは笑って遮った。

「アンタも私たちの怪我を直してくれたじゃあないの、お返しよ……
それに、アンタ達一族をフォローしたり、怪我を治したりするのは、これはもう波紋使いの——それと私の一族の——『伝統』みたいなものよ」

「?」

きよとんとする仗助に、アンジェラは余計なことを口にしてしまった……と、少し慌てて口をパクパクして……しかし結局は話し始めた。

「……私の祖先は、この技でアナタのヒイヒイおじいちゃんの首の骨折を直した事があるって聞いたわ」

それから……アンジェラは一瞬躊躇した。

「17年前、ジョセフ師匠もこの技でアナタのお母さんの命を——」

「ジジイとお袋が？それから、お前……」

仗助は混乱して首を振った。

「アンジェラ……お前の言っていることが良くわからねー。どういう事が良く説明してくれ」

だが、お喋りなアンジェラとしては意外な事に、アンジェラは首を振った。

「私からはこれ以上の説明は出来ないわ、詳しくはあなたのお父様に直接聞きなさいよ」

アンジェラは最後に仗助の肩をポンと叩くと、身をひるがえして仗助に背を向けた。そして、ポルナレフ達を追って戦いの場に飛び込んで行った。



雨が振っていた。

雨は、ポルナレフ達が承太郎からの伝言を伝えに来たころから、ポツポツと振り始めていた。そして今は、自分の手もまともに見えない程の土砂降りとなっていた。

仗助、育朗、噴上の三人は、杜の中を、丸木車の轍を逆走して進んだ。そして遂に、育朗と仗助が初めて戦った大岩の麓に立っていた。

だが、目に入る風景は様変わりしていた。

大岩は、まるで叩き割ったかのように砕かれていた。せき止められていた溪流が、砕けた岩の周りを音を立てて流れている。

「ここだぜ……腐肉——敵の匂い——が、この辺りでプンプン匂いやがるのを、ハイウェイ・スターが感知したぜ……理由はわからねーが、敵はどうやらこの大岩を砕いたようだなあ」

噴上が言った。

「ハイウェイ・スターは、腐肉の匂いがこの辺りをうろろした後で、この先の獣道みてーなのを通って、西に続いているのを感じているぜえ??」

この獣道を5 Km、それから県道を10 Km、それから林道に入って10 Kmだ。

「グレートだぜ。俺たちが追っかけてる『奴』が、この大岩を砕いたってワケかよ。(俺のクレイジー・ダイヤモンド並のパワーが必要だぜ、そんな事するにはよオ)……だが、何でそんなことをしたんスかねエ??」

仗助が首をひねった。

「ここに穴があるよ……たぶん、バオーが這い出たものだよ」

育朗は、ヒト1人が地面から這い出たような穴を見下ろしていた。

「バオー……僕の体は、僕達が追跡しているクリーチャーがこの岩を破壊したのに乗じて、ここから脱出したと言うことかな……」

「!?この場所は……いや、何でもねーぜ」

仗助が首を振った。

「噴上よお??ッ お前の能力のスゴサは分かってるぜ??だから、ここ何が起ったのかももう少し詳しく教えてくれ」

「オイオイ勘弁してくれ……俺は猟犬程鼻が利くってワケじゃねーんだぜ、これ以上詳しい事を読み取れるような匂いは感じられねー」

雨も振りだしちまったしな。噴上は首を竦めた。

「そうか……」

仗助は残念そうな顔をした。

「では、もうこれ以上ここにいても仕方ないよ……仗助クン、行こうか」

育朗は噴上と仗助にバイクに戻るよう、促した。

「おお」

仗助達三人は再び、ビッグオフロードバイクを駆って獣道を上り始めた。

降り出した雨が、また一段と激しくなった。

東方朋子 その2

仗助たち三人が、大岩の前にいたところとほぼ同時刻：

海岸近くの道路では、町から現れたゾンビたちを食い止めるべく

康一と由花子が大車輪の活躍をしていた。

「由花子さんッ」

「ええ……」

康一の合図に、由花子が飛び出す。

「ラブ・デラックス！」

由花子の髪が伸びて、おそい掛かってきたゾンビを捉えるッ。

そして、由花子が足止めした所を……

「ピカッ」

「ギラギラ」

「サンサン」

康一のスタンド：エコーズ・ACT2が、『尻尾から生成した文字』を次々とゾンビに貼り付けた。

「Gurrooo——n！」

エコーズの能力で日光を『体感』させられたゾンビが、絶叫を上げながら溶けていく……

「ふ——っ……これで全ての敵を倒したかな」

康一は、今度はエコーズACT 1を出現させ、周囲に撃ち洩らした敵がいなか探索を始めた。

由花子は、スタンドを自分の近くから遠ざけた康一の身を守るべく、自分のラブ・デラックスを周囲に伸ばし、不意の襲撃に備えていた。

その頃、早人は、安全な車内でアミを寝かしつけていた。

アミは疲れ切っていたのか、周囲を徘徊するゾンビたちを一顧だにせず、車の中でぐっすりと眠っていた。

『早人くん……』

と、何か見つけたのか、未起隆が車外からコンコンとドアをたたいた。

未起隆は、天体望遠鏡に変身して車の周囲の見張りをしていたのだ。

「なんですか、未起隆さん」

早人は怪訝そうな表情でドアを開けた。

すると……

バシユツンツツ

未起隆は再び変身し、早人の体に『装着』した。

「!?ちよつと……何ですか、未起隆さん」

『早人くん、あれはなんでしょう?ちよつと、よく見てもらえませんか? ……康一サンの耳に入れる前に 念の為私が見たものが何か、確認したいので』

未起隆に促されるがままにテラスの外を見た早人は、思わず恐怖で喘ぎ声を出した。

下 下 下 下 下 下 下 下 下 下

「まさか、あれは……」

未起隆の力により、突然早人にも何やら亡霊のように白い人型の影が動いているのが見えた。

白い幽霊は、ここから僅かに離れた海岸線に近いところにいるようだ。

そこは、少し前までホル・ホース達と過ごした所だ。

「未起隆さん……あれは、スタンドです」

ぼくには、あれは未起隆さんのゴーグル越しにしか見えませんッ!

だからきつと、あれはスタンドなんです。

『そうですか……』

未起隆の声が、ヘルメットの中で響いた。

『早人君、申し訳ないけれど、一緒に康一君と由花子サンのところに話に行きましょう』

早人は、少し迷ったが、ぐっすりと眠っているアミをそつと抱えて車内から出た。

「……早人、危ないわよ、車に隠れてて」

なんでアミと早人を外に出したの未起隆? 由花子は、早人が近づ

いてくるのを見つ、険しい顔で注意しようとした。

だが、つづく早人と未起隆の二人の説明を聞いて、由花子はお説教の言葉を飲み込んだ。

「康一君……今の未起隆君の話聞いた？」

「うん——敵かもしれない。みんな気を付けて」

僕が様子を見に行くよ。

そう言う康一に、由花子は満足げな——そして酷薄な——笑みを浮かべた。

「いいえ、康一君。康一君が危ない思いをする必要は無いわ……だって、その敵なら、たった今、由花子が捕まえたんだもの」

いつの間にかここまで伸ばしていたのか、由花子のラブ・デラックスがその白いスタンドをとらえていた。

由花子の頭から、三つ編みが地面を伝い、その先に、漆黒の、10才児程の背丈の『人形』が立っていた。

その『人形』が、白いスタンドと対峙している。

その黒い『人形』の両腕は、まるで巨大なボクシンググローブの様に丸まり、まるで女拳闘士——といった格好だ。

『人形』の腕も、足も、そして胴体も、三つ編み様に硬く編み込まれた髪の毛がより合わさって出来ている。

『何……ダ？……チビスケエ』

その白いスタンドが、漆黒の『人形』を掴みにかかる。

『人形』は身をよじって白いスタンドの攻撃をかわし……そして拳を固める。

腕から、拳から、固く圧縮された髪の毛がギチギチとこすれあい、音を立てた。

『ギュラララララアア——ツツ!!』

ラブ・デラックスが作り上げた『人形』がラッシュを放ち、白いスタンドにおそい掛かった。

『そんなチビすけのラッシュだと？』

『X u X U X U X U u!』

白いスタンドもラッシュを放つ、『人形』と白いスタンドのラッシュ

の速さ比べだ。

そして……………

『ゴブツ』

白いスタンドのラッシュユが、『人形』をとらえた。

そのダメージのフィードバックを受けた由花子が、膝をつく。

『とどメ……………』

拳をふり上げた白いスタンドの動きが、止まった。

白いスタンドの全身を、由花子の髪の毛が縛り上げているッ！

『なんだとッ』

『人形』が放った拳は砕け、その砕けた髪の毛がスタンドを拘束していた。

『Uuuuuu』

そのスタンドは、なんとか由花子のラブ・デラックスを引きちぎろうと身悶えた。

だが……………

『Gyiiiiiiiiii!』

体を動かせば動かすほど、ラブ・デラックスが食い込み、そのスタンドボディが切り裂かれ始めたッ。

「アンタ、誰？何をしてるの……………本体は何処？」

由花子がひどく冷淡に言い、ゆっくり、ゆっくりとそのスタンドの方向に歩き始めた。

「答えなさい……………答えないと……………あんたの体をバラバラにするわよ」

その時だ、突然、周囲を霧が覆い…………… 由花子は戸惑ったようにあたりを見回した。

「何だって？」

康一も驚いたような声で自分のスタンドを出し、周囲を調べ始めた。

「!?何処、どこに隠れやがったのオ！」

由花子は、まるで悲鳴のような大声を上げた。せつかくラブ・デラックスで拘束していた白いスタンドを開放し、あたりの石を手当たり次第に穿り返したり、あらぬ岩を攻撃したりし始めている。

あの煙を吸った……そして、幻覚を見させられているんだ！

と……くるりと包帯をまいた白いスタンドは足を止めた。そのスタンドの目の前には、あたりを手当たり次第に攻撃している由花子がいた。

白いスタンドは、由花子のすぐ隣で悠々と拳を振り上げ……

「あぶない！」

とつさに早人はスタンドと由花子との間に飛び込み、スタンドの拳を受け止めるツ！

「!?キヤアああああツ 早人オツ！どうしたの？」

『うわああああツ！突然ツ どうなったんですか？』

ゴフツツ!!

早人の肩が外れ、そしてスタンドに殴られた勢いで 早人は由花子に激突し、地面に投げ出された。

早人にぶつかった由花子は、後ろに吹っ飛び、大の字で地面に突っ伏した。

早人は地面をゴロゴロと転がり、やつとのことで再び立ち上がった。

『早人クンツ！これは？』

未起隆が尋ねた。

『どこかひどい怪我はしてないですか？致命傷はなかったと思います
が……それにしても、突然何が……』

「未起隆サン、これは、あの白いスタンドの能力だよ」

『!?なんですって』

「未起隆サンツ 僕に力を貸してツツ！」

痛みをこらえて立ち上がった早人の目の前に、その白い包帯のスタンドが立っていた。

『貴様……俺が見えているのかツ……』

白いスタンドが忌々しげに早人を見下ろし、そして もう一度拳を振り上げた。

『子供とはイエ、俺が見えているのであれば許してはおけん。この場で始末してやるウ』

「負けないよッ」

早人は拳を固め、包帯のスタンドに突進しようとした。

その時……

ゴブウツ

白いスタンドが、突然両膝をついた。白いスタンドが手を地面に着けると、その部分の地面が、まるで粘土の上に立っているかのように、凹み、沈んでいく。

⚡ ⚡ ⚡ ⚡ ⚡ ⚡ ⚡ ⚡ ⚡ ⚡

『エコーズ・ACT―3……どう早人君、上手くいったかな？ 見え
ないけど手応えはあったよ』

康一が尋ねた。

そう、このスタンドの膝をひまづかせたのは、康一のスタンド：エコーズの『重くする』能力だった。

そして、康一に幻覚を破らせたのは、未起隆の能力：アース・ウィンド・アンド・ファイヤの能力であった。

未起隆は早人が殴られる前に、『自分の体の一部』をバッチに変換させていた。そのバッチを、早人を殴った相手にとりつけていたのだ。

たとえば白いスタンドが認識できなくとも、自分の体の一部がどこにあるのか感じることはできる。未起隆は、康一にいま自分の体がどこにあるかを逐次伝えていたのだッ。

「分かったよ、未起隆サン。ぼくには見えないけどそこに敵がいるんだね？間違いないみたいだ、僕のエコーズの攻撃にも、確かに手ごたえがあったよ」

敵の場所さえわかれば、ACT―3で倒せる。

康一は包帯のスタンドがいると思わしき方向に指を突きつけた。

「おいッ！そこのお前ッ！降参して姿を見せろッッ」

「こっ……このビチグソがあ!!」

早人を乱暴にわきに追いやり、由花子が立ち上がった。

由花子は、すっかり血走った眼で周囲をにらみつけていた。由花子もまた、未起隆から、白いスタンドの位置を知らされたのだ。

「やってくれるじゃあない……許さないわよおおおおー！」

由花子が吠えた。

「ゲロの代わりに、口から内臓を引きずり出してやるわッ！ギャハハッ」

グツグツグツ！

由花子のラブ・デラックスが幾筋かにまとまり、先端がまとまり、そして奇怪な昆虫のような形をとった。

それは、ロケットに円形の牙の生えた口をつけ、百足ののような足に、トンボのような羽が何枚も付いた、奇怪な昆虫のようなモノだった。

その「モノ」は、由花子の頭上に扇のように広がったラブ・デラックスの先端で揺れていた。

その「モノ」は、おどましくもカチカチと歯を鳴らしながらうごめいている。

「くらえッ 喰らわしてやるッッ 口からぐりこんで舌を引き抜くッッ！ そのまま内臓までかじってあげるわッ」

由花子が叫んだ。

「!?ちよつと、由花子サンッそこまでしちゃ、ダメだッッ」

「わかってるわ、康一君。ちよつと言ってみただけよ……ユカコを信じて、ちゃんと手加減してるわ……」

ふつと由花子が、冷静な口調で康一に答えた。

だがその口調と裏腹に、由花子の頭上にうごめく『髪の毛』でできた蟲たちが、一斉に包帯のスタンドに向かっておそい掛かったッ!!

『ギユチッ ギユチッッ ギユチィッ!!』

「ちよつと、痛めつけるだけよッ 殺しはしないわ……」

ホントよッ

次の瞬間、カランと、未起隆が体の一部を変化させたボタンが地面に叩き落とされた。

そして、急に辺りを包む霧が強くなり、全員がまたしても包帯のスタンドを見失った。

目標を見失った蟲たちが、怒ったようにあたりを飛び交う……

そして霧が去った後、その場にいた謎のスタンドは姿を消していた。

(くそッ……やっぱりコイツら、とんでもねーヤツラだぜ)

先を走っていく仗助と育朗の背中を必死に追いながら、噴上がぼやいた。

三人は、猛烈な雨の中、ボコボコの道ともつかぬ獣道を、大排気量のビッグオフロードバイクを走らせていた。

(大体、この R1150GS はオフロードバイクじゃねーのかよ……なんてエ重さだ……それにこの道……バイクで走れる道じゃねーぞ……無茶させやがって……)

ちよつとアクセルを開けすぎたり、体重移動を間違えたら簡単に吹っ飛んでしまう。いや、たとえ操作を間違えずとも、こんな荒れ地をただ走るだけでバイクが勝手に暴れ出す。

バルンツ

胃のすくむような思いでハンドルを握って、バイクを飛ばす。木々の間をすり抜けながら急こう配の斜面を登り、下りる。

泥だらけのぬかるみに空転する大重量バイクを、スタンドや生身の力で持ち上げる。

ガレ場の岩で滑る前輪を、必死にバランスを取る。

その全ての動きでバイクが暴れ、噴上を吹っ飛ばそうとする。

普通の人間では、1M たりとも進め無い超悪路だ。

その超悪路を、仗助も、育朗も、モンスターバイクを駆って吹っ飛ばしていくのだ。

猛烈な雨の中、どれだけ高い身体能力と精神力、そして度胸が有ればあんなスピードで飛ばせるのか。

噴上には悔しい事だが、命を削るようなその作業を、二人とも淡々とこなしているように見えた。

仗助など、噴上に乗っているものより一回りデカイバイク——メネシス用にチューリング・大型化された超モンスターバイク——に乗っているのに、然程苦勞している様子もない。

当然人間には大きすぎるサイズだから、ハンドルこそ仗助が握って

いるものの、ステップはクレイジー・ダイヤモンドに抑えさせているのに、だ。

クレイジー・ダイヤモンドは、跳ね上がるバイクを押さえつけ、制御し、そして仗助の体を支えていた。一方、仗助本体は大排気量のモンスターオフロードのハンドル操作に集中している。本体とスタンドの完璧なまでに調和の取れた連携——それは、信じがたい程高度な、スタンド操作能力だった。

育朗も、まるで自分が乗っているのが自転車であるかのように、軽々とバイクを操っている。

イヤ、育朗のそれは、ジヨウスケとは違った。育朗の運転は、まるで自分の命などまったく気にしていないような、限界を攻めるキレキレの運転だ。命知らず　と言う言葉がぴったりと合う運転は、普段の育朗の言動とは不釣り合いだった。

イヤ……それは育朗がもう『あきらめている』　と言うことなのか。

噴上に同じことは出来ない。　苦い思いを噛みしめていると、はるか前方から聞こえてきていた仗助と育朗のバイク音が消えたのに気が付いた。

(何だ、何が起こってやがる?)

ハイウェイ・スターが、何か……とても『嫌な』ニオイを感知した。これは……ついさつき嗅いでいた匂いと同じだッ!

そして、前方から『一瞬』注意がそれた。

その『一瞬』、バイクがコントロールを失い、吹き飛ぶ。

岩

足元

フロントタイヤが引つかかり、リアが勢いよく吹っ飛ぶ

頭上に地面

岩　——猛スピードで迫ってくる——

「うおおお……ハイウェイ・スター、俺を守れッ!」

岩にぶつかる寸前、ハイウェイ・スターはかろうじて噴上を抱きかかえた。

火事場のクソ力と言う奴か、ハイウェイ・スターが噴上を抱えたまま獣道をスライディングするように滑って行く。

「おおおおおおお!!」

噴上は必死にハイウェイ・スターを操作した。

なんとかバランスを取り、横倒しになつて背後からぶつ飛んでくるバイクの上に乗る。

(おお……俺もなかなか……)

こんな場面なのに、チラリともし4か月前のあの時スタンドがあつたなら……と 場違いな妄想が走る。

もし、4か月前、橋沢育朗のスタンドに驚いて 交通事故を起こした時、すでにハイウェイ・スターが発言していたら、そうすればあんなひどいけがをすることはなかっただろうに。

だが、噴上が乗っている、地面を滑べっていくバイクの行く先に、巨大な杉の木が迫ってくるのが視界に飛び込んできた。

今度は止められそうもなく、無情にも大木が猛スピードで目の前に迫ってくる。

ぶつかるツツ!

(死?おい、ちよつと待てよ。俺まだやりたかった事を何にもしてない……)

噴上がそう思った瞬間――

『ドラアッ!』

大木がまるで爪楊枝のようにへし折れ、仗助とクレイジー・ダイヤモンドが 登場した。

クレイジー・ダイヤモンドが、なんなく噴上をスタンドごとキヤツチする。

同時に、バイクも、噴上自身の損傷も、一瞬にして『直った』。

「おいおい、大丈夫かよ」

仗助は育朗を抱え上げ、眉をしかめた。

「オマエ、無理スナッって言ってただろおお――がよオ」

だが、何か俺のスタンドのスピードが上がった気がするぜ。仗助は首をひねった。

目の前の『敵』を見て、仗助の顔が引き締まった。

そこにいたのは、文字通りの『怪獣』だった。

たとえば、太古の雷竜程の大きさの巨大な狼。

毛皮の代わりにヒルが全身を覆い、そして巨大なタコの触手が不規則に体から飛び出ししている狼……と言った格好だ。

一步一步、『怪獣』が進むたびに地面が揺れる！

B a r u u u n !

B u u r a a a r u n !

「……もうこんなところまで……おじいさん、おばあさんのところまでは絶対に生かせないッ！」

バルンツ!!

育朗はビッグオフロードバイクのスロットルを前開にして、目の前の『怪獣』に向かって突進して行った。

「オイオイ、育朗くん、気合入ってるじゃねーかよオ——ッ」

一拍遅れ、仗助もバイクで特攻をかけるッ！

地鳴りのようなエンジン音を響かせ、二台のビッグ・オフロードが怪物に向って突進した。

「来いッ！バオ——ッ!!」

育朗が叫んだ。

バイクを走らせながら、育朗の体がまるで風船を膨らませたように一回り大きくなっていくッ

肌がどんどん青白くなり、固化し、そしてポロポロと今の『人間としての』皮膚を垢のように落としていく。

そして……

「バルバルバルバル！」

バオーがそこにいたッ！

バオーはオフロードバイクを『怪獣』に向って蹴りつけたッ。

そして自分もまた両手をクロスさせ、身を守るための防御姿勢を取ったまま飛び上がった。

空中から、『怪物』に向っていくッッ！

「おりゃあああああああああ！」

一方、仗助はバイクをドリフトするように地面を滑らせた。

そのまま、まるでスノーボードに乗つかつているように、滑るバイクの上に立ちあがり、その滑る方向をコントロールし……車体を『怪物』の前足にぶつけたッ！

反動で吹っ飛ぶ仗助の体を、自身のスタンド：クレイジー・ダイヤモンドに支えさせる。

そして……

『ドララァッ！』

宙を舞いながらも、仗助はすれ違いざまに『怪物』のボディにクレイジー・ダイヤモンドのラッシュを叩きこんでいった。

「V u o o o o o o w m !!!」

二人の攻撃を同時に受けた『怪物』が絶叫を上げた。

タコのような触手の内の一本が、唸りを上げて仗助と育朗をおそ
うッ！

『ドラッ！』

仗助のクレイジー・ダイヤモンドが、触手の攻撃を吹き飛ばすッ！
「バルバルバルバルッ！」

バオーが宙を舞い、リスキニハーデン・セイバーが触手を切り落と
した。

『V o g o o o m !!!』

『怪物』は怒りの叫び声を上げた。

怒りにまかせた体当たり……と思わせ、『怪物』は残った触手の先端からリスキニハーデン・セイバーを——オリジナルの5倍近いサイズの巨大な刃を——出現させた。

「うおおお——ッ！」

『バオ——ッ』『バルバルバルッ！』

仗助は、鞭の様にしなつて周囲を薙ぎ払らう触手の根元にしがみつき、リスキニハーデンセイバーを避けたッ！

一方バオーは……バオーは自らもリスキニハーデンセイバーを出現させたッ！

迫り来る巨大な刃を、真正面から切り捨て……

だが背後から回りこんだ新たな触手がバオーをおそうツ！
ズヴァ——ンツ！

『アツ……う、う、あ……』

鮮血が舞い、巨大な刃に四肢を切られたバオーが吹き飛ばされた。
絶体絶命ツ。

いや、そうではなかった。

『ドラララアツ』

吹き飛んだバオーは、あわや地面に激突する寸前に、仗助のクレイジー・ダイヤモンドに支えられていた。

「育朗よお、無茶するなよオオ」

仗助がその『直す』能力を発動させると、バオーの斬られた手足が一瞬にして元に戻った。

『すまない、仗助ツ』『バルツ！』

「いいってことツスよオ——、育朗クンツ」

仗助が獰猛な笑みを浮かべた。

『D o b a b a b a b a a a a x t u !!』

今度は『怪獣』が口から黄色い何かの液を噴出した。

それはおそらく強酸液、まともに食らえば、二人とも一瞬に溶けてしまいかねないほどの量だ。

『ドラララツ!!』

クレイジー・ダイヤモンドは地面を砕き、そして地面を壁状に作り「直す」事で、とつさにシエルターを作った。

強酸液は、むなしくしぶきを上げ、クレイジー・ダイヤモンドが作ったシエルターの壁面を叩いた。

「グレート……こりゃあ何だ？……とんでもねー奴だぜ。俺はこんなやつがいたなんて知らねー」

『あれは、僕だよ……彼もバオーだ……』

バオーからスタンドの顔だけを覗かせて、育朗が顔をしかめた。

『本当に微弱だけど、バオー同士は微弱な電磁波のような物で連絡を取り合っているんだ。——だから、お互いの存在は分かる……正確な数はわからない。……でも、あの『怪物』の中には複数の寄生虫バオー

「がいるよ。それが僕にまでも確かに感じられるんだ」

「なんだって？」

「仗助が頭を抱えた。」

「じゃあ、奴はアンタの何倍も つえーってワケだ」

『イヤ……バオーの力は、そんな簡単な算数じゃあないハズなんだ。』

「育朗は心配そうに言った。」

『バオーの力は、寄生虫バオーが分泌する体液なんだ。その体液が僕たちの体を変化させる』

「その、分泌液をヤツが何倍も多く持つてるってことだろ？」

『そう……それがどういう意味を持つのか……』

「ピシッ……」

『怪獣』の発する強酸液が、シエルターを侵食しはじめた。

「育朗と仗助は、シエルターの壁面に伸びていくヒビを見て、顔を見合わせた。」

「育朗くんよオー、ドーやら今はまだゆっくり話すときじゃあないっスよ」

「俺が隙を作るツス 仗助の言葉に、育朗がうなずいた。」

『分かった。その隙に僕が飛び出したら、今度は僕がアイツの注意をひきつけるよ』

「了解、行くツすよオオオ！ 気合い入れろヨオツ！」

東方朋子 その3

『ドラッー!』

仗助のクレイジー・ダイヤモンドが シェルターから身を乗り出し、手にした石を思いつき『怪獣』に向って投げつけた。

スタンドはあくまでもパワーを持ったビジョン、物理的な強酸液など関係ないのだ。

ガボオツツ

投げた石は、狙い過たずに『怪獣』の口の中に飛び込んだ。

すかさず第二投ツ

第三投ツ

怪物の口の中に石が詰まった。

さらにその石が『怪獣』の口の中で互にくつつき、膨れて口の中をふさいでいった。

これが、物を『作り直す』クレイジー・ダイヤモンドの能力だ。

「今っスよ、育朗クン」

『ありがとう仗助君……次は僕の番だッ!くらえッシューティング
ピース・ステインガー!』「バルバルバルン!」

バシユツ!バシユツシユツ!シユツ!

バオーの放つ毛針が、嵐のように『怪獣』をおそうツ!

しかし、その毛針は怪物にダメージを与えられなかった。

針が肉を深くえぐる前に、怪物の表面に蠢く無数の蛆虫に齧り取られたのだ。

『まだまだア!行くぞ、バオー』「バルツ」

バリバリバリエイ!!

『喰らえッ!ブレイク・ダーク・サンダー&シューティングピース・
ステインガー!!!』「バルバルバルバルバルバルバルバルツ!」

パシユツ・パツ・パパツ・バツツ!

グガア——ン!

バオーの放つ毛針が、電気を帯びて飛んでいくツ!

この電気により、『怪獣』の表面で蠢いている蛆達は白煙を上げて倒れていった。

先ほどはすべてのシューティングビースス・ステインガーが、突き刺さる前にすべてかじり取られた。

だが、今回は毛針は何に遮られる事もなく『怪獣』に突き刺さった。そして、突き刺さった毛針が『大気と反応して炎を上げて燃え上がり』、『怪獣』の体を炎に包んでいく。

『B u s h a a a a !』

怪獣が呻く。そして……

ゴオアツン!

『怪獣』の目から高压の体液が超高速で絞り出され、仗助をおそうツ!

「グツ……」

仗助は、かろうじてクレイジー・ダイヤモンドで、目から出る体液の弾丸を弾き飛ばした。

「危なかったぜーっ……もう少し気が付くのが遅かったら、ヤバかった」

体液の弾丸を出すのと同時に、『怪獣』の顎や肋骨、首筋から管のような物が飛び出した。

『怪獣』は、その管から空気を取り込み、こめかみから突出した角の先から圧縮空気をバオーに向かって噴出させたッ!

『ううっ……何だ? 空気の中にチョップピリだけ……まるでガラスの粉末のような粉が……』

バオーは、致命的な一撃をギリギリ避していた。

しかし、バオーの右足がッ!

身につけているジャケットがッ!

無残にも細切れとなっていた。

『かつ……風かつ! 圧縮された高压の風に紛れ込ませて飛ばしている、ガラスのように尖った粒が体を切り裂いているッ! ——動けない—— どうする……どうすればこの攻撃をかいくぐり致命傷を……』

バオーは残った左足で、圧縮空気の刃から逃れようと必死にもがい

た。

その時、仗助が肩をブンブン回しながらバオーの前に立った。

『ドラッ！』

クレイジー・ダイヤモンドは地面を砕いた。

砕いた土は『作り直され』て、ぶあつい壁を作った。

壁はまたシエルターとなって仗助と『怪獣』との間に立ちふさがり、激しく吹き出してくる圧縮空気の刃を防いだ。

そしてすかさず、仗助はバオーの体の傷をも『直した』。

『仗助……ありがとう』

「育朗よお、さつきわかったみてーに、この壁はただの時間稼ぎにしかならねえ——気合い入れるッ スよおオオ??? ツッ」

ビシッ

そして仗助の言葉通りに、土壁が切り裂かれた。

圧縮空気が……ちようど土壁に背を向けていた仗助の背中を切り裂くッ！

「グウワアアツッ」

仗助は、音もなく地面に倒れた。

『仗助ッ！』

間一髪、怪物に止めをさされる寸前に、バオーが意識が朦朧としている仗助を抱えた。安全なところまで移動させる。

圧縮空気がおそった瞬間、仗助はちようど育朗をかばうような位置に立っていた。だから、育朗：バオーには仗助が盾になったため、ひどいダメージがなかったのだ。

「チッ……くしよおお、やられちまつたぜええ」

仗助は膝に力を入れ、何とか立ち上がるうとし……また地面に突っ伏した。

『仗助クン、いま回復剤を……』

すかさずブル・ドーズ・ブルーズを仗助に撃とうとしたところで、育朗は躊躇した。

仗助には出発直前に、すでにブル・ドーズ・ブルーズを打っていた。副作用のリスクを減らす為、ブル・ドーズ・ブルーズの回復薬をも

さらに形を歪め、おどろおどろしい色に染めたような姿だ。

同時に、『怪獣』の首から上だけがポトリ……と落ちた。

落ちた首は急速に縮み、そして中に取り込まれていた二匹の犬——
黒犬と白犬——が現れた。

「キャウ——ン」

炎を吹き出している『怪獣』が叫んだ。まるで子供のように……

イヤ、その『怪獣』の首の切断面には、確かにもう一匹、子犬の頭が見えていた。

『怪獣』の喉から飛び出した不気味なバオー・ドッグは、スタンドを出した。

それは……そのスタンドはネリビルのカントリー・グラマーだッ

『K u a a a a a a a a !』

カントリー・グラマーは叫び声を上げた。

すると、首のない『怪獣』本体がゆっくりと仗助の方を振り向いた。

ジュルルルルッ

『怪獣』の首の断面からすさまじい勢いで触手が飛び出した。

触手は、断面から顔を出していた子犬の頭を覆いつくし、互いに絡み合い……

巨大な口をもった新たな『頭』を生成した。

(マズイツ……ここは、僕が)

まだうまく動けない仗助をかばおうと、バオーが『怪獣』と、バオー・ドッグの前に飛び出した。

『2対1では不利だ……ここは早めに決着を付けるッ』『ウオオオオウ

——ムー』

バオーが、リスキニハーデン・セイバーを構えた。

その刃は育朗の身長程に伸び、さらには刃先から炎が噴き出した。

(大事なものは、間合と刃先を立てること……)

育朗は、昔高校の武道の授業で体育教師が言っていた事を思い出した。
た。

(相手の呼吸を読むこと、そして円の動きと速度だッ)

バオーは、まるで武道家のように、舞踏家のように、おそいかかる『怪獣』とバオー・ドッグの攻撃をかわし……二体を両断しようとした。

だが……

(しまった。あつ………浅いッ………一撃で倒せなかった)

バオー・ドッグは、育朗のその動きを「ニオイ」で読んでいた。

ト　ト　ト　ト　ト　ト　ト　ト　ト　ト

それは、ほんのちよっぴりの違いだった。

だが、育朗の『殺意』のニオイを感じ取ったバオー・ドッグは一瞬立ち止まっていた。そう、野生の感で危機を察知したバオー・ドッグは、オリジナル・バオーを警戒して攻撃に移るのを躊躇したのだッ

その躊躇がバオー・ドッグと『怪獣』の踏み込みを浅くさせた。

そして皮肉なことに、その浅かった踏み込みが、オリジナル・バオーのカウンターの威力を半減させ……まさに首の皮一枚、ほんのチョッピリだけ『怪獣』とバオー・ドッグを生かしたのだッ！

カウンターが十分に決まらなかったオリジナル・バオーは、体勢が崩れていた。

その崩れた体を、すかさずバオー・ドッグの触手が拘束した。

そして触手は、オリジナル・バオーを持ち上げ、地面にたたきつけるッ！

『グッ！』

ヴオオオオオオオオオオ！

再び、『怪獣』の放つ暴風の刃がバオーをおそうッ！

『怪獣』は風を生み出すために、自ら大量の圧縮空気をため込んでいる。

その圧縮空気の圧力で、『怪獣』の体の一部がはじけ飛ぶッ！

自らから噴出した空気は、『怪獣』の全身を燃え上がらせている……だが、『怪獣』はカントリー・グラマーの命令にしたがい、自分自身を苦しめながら、自分を壊しながら、暴風の刃による攻撃を止めないッ！！

「ギャオオオオオオ！」

『怪獣』は苦しそうにほえた。

その体がまたはじけ、燃え上がった。

だが、攻撃は止めないッ

バサンッ！

遂に空気の刀が、逃げ回るオリジナル・バオーをとらえた。

バオーの足が切断されるッ！

(クッ……しまった……逃げ切れない)

どうしても逃げられないと判断して、育朗は『バオー』に無駄に気がく事を止めさせた。

育朗は、奇妙なまでに落ち着いて状況を分析していた。

そして、致命的な空気の刃が自分とバオーの命を刈り取ろうとするのを、冷静に、ほとんど待ち焦がれていたものがやってきたように、ただ、じっと見つめた。

(……六助おじいさん、すみません。仗助、後を頼むよ………スミレ……どうか、幸せで……)

その時ッ！

「今助けるぞオッ」

ターン!!

銃声が響き、バオー・ドッグと『怪獣』が吹き飛ぶッ！

「!? どうしてッ?」

育朗が顔を上げると、そこには白煙を上げた猟銃を持った老人が、目を丸くして立っていた。

「……お前、育朗かつ!」

老人は倒れている仗助から少し離れた、崖上の小道に立ち戦いの様子を見下ろしていた。

(あれ……は、ばかなッ 六助おじいさん!)

育朗は驚愕した。

(おじいさん……お元気そうだ……また会えるなんて……僕を助けてくれた、でもまずい!あの怪物の前におじいさんを出しちやあダメだ)

「G y a a a a a a a a a a !」

あと少しでオリジナル・バオーにとどめを刺せたところを邪魔され、バオー・ドッグは怒り狂っていた。

「Varurururururu……」

バオー・ドッグはシューティングビース・ステインガーを放った。それは、驚愕のあまり目を丸く見開いている六助爺さんをおそい……

グサツ！

六助爺さんの体に突き刺さったツ！

「うつ……」

シューティングビース・ステインガーの直撃を受けた六助爺さんが、口から血を吐いてぶっ倒れた。ちょうど心臓にあたる部分に、攻撃を受けたのだ。

ボツ……

そして空気と反応した毛針は燃え上がり、六助爺さんの体に火をつけた。

『お爺さんッ』

育朗はブラック・ナイトを飛ばし、六助爺さんの傍らに寄り添った。だが、すでに六助爺さんは、動かなくなっていた。

(死んでいる……馬鹿な……これは……夢だ)

『うおおおおお!!』

育朗は、背後に迫るバオー・ドッグの事も忘れ、号泣した。

一方、育朗に負けず劣らず仗助も動揺していた。

(死んだ……育朗、泣いているのか……爺さんが死んだ……ジジイ……いや……オヤジみてえな爺さんがよオオ……)

仗助は、六助爺さんのそばに這っていった。

そして、傍らで泣いている育朗をみて良平爺さんの葬儀の時を思い出した。

まるで自分の家族を無くした時のように、ヤルセナイ思いを抱いていた。

そして……

(殺させねえ……何としても……何としてもだ)

その『世界』には行けないかもしれない。それでも今、仗助は周りがとてもスローに動いているように感じていた。

その不思議な世界の中で、クレイジー・ダイヤモンドが拳を撃ちつづけ、六助爺さんを『直す』。

そのラツシユの速度が、どんどん素早くなっていく……

一瞬の間に、無限とも思える回数 of 破壊と再生を繰り返したクレイジー・ダイヤモンドは、その能力の限界を超えた。

仗助とクレイジー・ダイヤモンドは、六助爺さんの上に流れている『時』に手をかけ、流れた『時』を5秒だけもとに引き戻した——
「今助けるぞオツ」

五体満足な六助爺さんが、猟銃を抱え、再び『怪獣』とバオー・ドッグを狙撃した。

ターン!!

時が戻ったのは六助爺さん本人のみ。周りの時間は通常通りに過ぎ去っている。

だから、『怪獣』とバオー・ドッグは《5秒前の》六助爺さんにうたれた傷に加え、さらに第二発目をほとんど同じ場所にくらった。

さすがのバオー・ドッグも、一瞬、ひるみ、のけぞった。

そこを我に返ったバオーが飛び込んでいくッ!

「バルバルバルバルッ」

バオー・ブレイク・ダーク・サンダー・フェノメノンッ!

バオーの体から放出される高圧電流が、「怪獣」とバオー・ドッグを同時に痛めつけるッ!

「お前……育朗か?」

そのとき崖の上では、六助爺さんは目の前にいる育朗の幽霊：ブラック・ナイトによく気が付き、目を丸くしていた。

「お前……長いこと顔も見せんくせに、俺より先に、死んじまったのか?この……馬鹿たれがア!」

スマレが……婆さんも、ワシも、どんなにお前に会いたがっていたのか、知ってるのか。

だが、口では怒ったようなことを言いながらも、六助爺さんは目に

いっぱい涙を貯め、喜びの笑みを浮かべていた。

「だが……何でもいい、良かったワイ。よく戻ってきたなあ——」

『お爺さん……お爺さんこそ、よかったツ良くぞ無事で……』

育朗が喜びの涙を流した。

『お爺さん……僕は何て言えばいいのか……』

「なんだ、わからないのか？こんな時は、ただ　タダイマ　と言えはいんジャ」

六助爺さんはガハハと笑った。

「間に合った……ぜえ——っ」

仗助は、すっかり消耗して地面に大の字に寝ころんでいた。

横目で、六助爺さんと育朗が再会を喜びあう光景をほほえみながら見ている。

クレイジー・ダイヤモンドで『時をまき戻す』(Get Back)それが出来る、兆候はあった。

あの最後の瞬間、吉良のとどめを刺すとき、仗助は、空条承太郎のスタープラチナ・ザ・ワールドの時が止まった世界で実際に何をしたか、何となく分かっていた。

キラー・クイーン・バイツァ・ダストが一時間の時を吹き飛ばそうとした瞬間、爆破された岸部露伴の傷を癒そうとしていた時に感じた『感触』を覚えていた。

そして、本来なら間に合わなかったはずの億泰のけがを直し、命を救った時の事も、よく覚えていた。

たとえ仗助が意識していなかったにせよ、それらの経験は確かにスタンドによつて、仗助の魂の奥に刻まれていた。

そして危機において、新たに爆発した魂の力が、仗助の黄金の精神が、クレイジー・ダイヤモンドを新たな覚醒に導いたのだ。

皮肉なことではあったが、肉の芽を埋め込まれた際に与えられた『刺激』もまた、仗助を覚醒させる補助の役割をはたしていた。

だが、戦闘はまだ続いている。

「!?……おい、まずいんじやあないか、お前の体がやられとるぞ。――」

「あれはお前の体じゃあないのか？」

六助爺さんが崖下の戦いによく気が付き、血相を変えた。

六助爺さんの感想は正しかった。

ブラック・ナイトとの共闘ではなく、単体でモデュレイテッド達と戦っていたオリジナル・バオーは、何発か致命的な攻撃をまともにくらい、アチコチを斬られ、溶かされていたのだ。

『！大変だッ』

お爺さん、行ってきます。ここで待つてて……

育朗は慌ててブラック・ナイトを崖下に飛ばし、オリジナル・バオーの体にもぐり込んだ。

(もう思い残すことはほとんどないよ。バオー……またせたね、ここからはずつと一緒に行くッ！)

「ガルルルウンッッ」

育朗とバオーが再び一つになった。

その瞬間からバオーの動きが目に見えて良くなった。

だが……既に大勢は決していた。

すでに、バオーは左足を太腿から切り倒され、右手のひらを半分失い、また全身のプロテクターも今にも剥がれ落ちそうな状態であった。

二対一の状況を、戦略や効果的な身の運びでカバーできる限界はすでに過ぎていたのだ。

バオーは、飛び掛かってきたバオー・ドッグを柔道の要領で投げ返した。

だが、投げられたバオー・ドッグは空中で身をひるがえし、ダメージを受けることなく両足で地面に着地した。

そしてすぐさま、育朗：バオーに向かって再び飛びかかったッ

『くっ……早いッ！強いッ！』

バオーはヤギツバヤにおそい掛かるバオー・ドッグのスピードに対応出来ないまま、どんどん押し込まれた。

(僕の体なんてどうでもいいッ。でも最後にこの落とし前だけはつけるッ！……きれいに勝つ必要はないんだ。このバオー・ドッグを何とかして捕まえられればッ！)

押し込まれながらも、育朗は冷静に起死回生のチャンスをつうかがっていた。

東方朋子 その4

仗助と六助 爺さんは崖の上からその様子を見て気をもんでいた。「くっそおおお——ッ、育朗のヤツ、捨て鉢な戦い方をしやがつてよオ??」

仗助が顔をしかめた。

「あの構え……なんとなく、アイツの考えていることが予想付くぜ……アイツ、相撃ちを狙ってやがる」

「なんじやとオオ……ようやく会えた子をムザムザ失つてたまるかッ!!……援護射撃をッ……クツッ……」

六助爺さんは猟銃を構え、すぐまた降ろした。

「駄目じゃ……どちらも動きが早すぎて、下手すると育朗に当たつちまいかねんワ……どうしようもない」

六助爺さんはうなだれた。

「あの子を……育朗を守ってやりたいが……こうやってただ育朗が戦っているのを見るのはもう辛い……わしらがしてあげられる事は何だ? なにも無いワ」

「……いいや、爺さん、俺は育朗のために一つだけ出来ることを見つけたぜ」

仗助は倒れている二匹の犬を見ながら言った。

何か気が付くことがあったのか、六助爺さんは一人うなずいて再び猟銃を構えた。

「そうじゃな、せめてこいつらが巨大な化けもんに育つ前に、とどめを刺してやらにやならんなあ」

「いいや、逆だぜ、爺さん……こいつはおれが『直す』ッ!」

仗助のクレイジー・ダイヤモンドが、虫の息で倒れている二匹の犬を『直した』。

「ブルルルッ」

「ガルンッ!」

二匹の犬は、突然元気になった自分達に戸惑い……互いをいたわるように舐め合い……そしてその後、何かを思い出したように身を低く

構え、低く唸り声を上げ始めた。

「おい……お前、何かしたのか？」

「こいつらの怪我を『直した』んすよ」 仗助が答えた。

「何だつて？ なんだかわからんが、お前、また敵を増えしおったのかッ！」

一大事じゃ……六助爺さんは唸る犬達を射殺しようとして銃を構えたが、仗助に引き金を止められた。

「おい、青年……邪魔をするなッ！」

「大丈夫つす……奴らは敵じゃあないつす」

仗助は、ムシロしてやったりと言う表情をした。

「むしろ、アイツらは俺たちの味方つすよ……あの『怪獣』の首に見えた子犬……ありやあアイツらの子供だ。かけてもいいッス。だから、アイツらは自分の子供を苦しめているのが誰か、わかってるはずッス！」

仗助の言葉を肯定するように、『治った』黒白二頭の犬が、二手に分かれて飛ぶッ！

……白犬は『怪獣』の懷に飛び込み、壊れていく『怪獣』の体を必死になめ始めた。

そしてもう一頭……黒犬はバオー・ドッグに正面から挑みかかったッ！

「バルルルル！」

「Gyarurururu」

だが、バオー・ドッグはおそつてくる黒犬を、前足の一撃で簡単に跳ね飛ばした。

黒犬は崖の壁に叩き付けられ、血を吐いて倒れた。

「おいおい、待てよ……俺は、お前たちをもう一度死なせるために傷を『直した』んじゃねーんだぜ」

仗助は自分のスタンドに自分の体を抱えさせ、崖下に飛び降りた。重傷を負った黒犬は、仗助が近づいていくと力を振り絞って小さな声で唸り、ガクリと這いつくばった。

「……ふう……ギリギリだったぜ……」

互いにもつれ、傷つけあう二体のバオー……今回の二頭の争いは、徐々にバオー・ドッグに不利になっていく。

「バルンツ！」

そしてついに、オリジナル・バオーがバオー・ドッグをリスキニハーデン・セイバーで切り裂くツ！

いや……オリジナル・バオーはリスキニハーデン・セイバーをバオー・ドッグの体に突き立てて、その体にしがみついていた。

「おいツ？育朗オメエ——まさか」

『!?仗助ツ あとは頼んだよツ!!……行けツ！バオ——ツツツ!!ブレイク・ダーク・サンダーツツ!!』

「!?バルバルバルバルバルバルツツ」

ズツバアアアアア——ンツツ

オリジナル・バオーの全身が白く発光し、全身から電撃を放ったツ
「Gruyaaaaaxtuu!!!」

全身を焼かれ、バオー・ドッグが悲鳴を上げた。

だが、同じくオリジナル・バオーの体も自らが発した電撃に焼かれていくツ

「おい……」

仗助はあまりの熱と光に目を覆い、叫んだ。

「馬鹿野郎オオオツ！早くやめろツ」

『仗助クン……最後に一緒に戦ってくれて、ありがとう』

育朗はカントリー・グラマーを手放すと、自分の体……オリジナル・バオーに戻って行った。

『僕はこのままでだよ……後悔なんてない……伝えてくれないか？スミレに……どうか《幸せに》と……』

「ふざけるなツ！この野郎ツツ……そんなことは自分で言えよオツ！」

その時、再びバオー・ドッグが叫んだ。

「Gruuuuuuuuuu！」

バシュ!!

まるで爆発するように、『怪獣』の全身が弾けた。

弾けた肉片は、すべてニヨロニヨロと動く蛆虫にその姿を変えるツ！その蛆虫たちが近くにいた育朗と、仗助におそい掛かるツ

リスキニハーデン・セイバーでバオー・ドッグにしがみついていたオリジナル・バオー：育朗は、その爆発による蛆虫の襲撃をまともに受け、バオー・ドッグからふり払われた。

「うおおおおおおおおおおつ!!!」

『くツ……』

「バルバルバルバル！」

仗助はスタンドの拳で、オリジナル・バオーはシューティング・ビースス・スティングァーで、飛び散り、おそいかかってくる蛆虫達を迎撃して行くツ！

一方、その爆発の中心から再び子犬が現れた。

支えとなる『怪獣』の体を突然失った子犬は、なすすべもなく頭を下にして地面に向かって落ちていく……

「バウバウバウ！」

ドンツツ！

白犬が身を投げ出して子犬の下に身を投げた。

身を挺して、子犬が地面に直接たたきつけられるのを防いだのだ。

子犬に代わって激しく地面にたたきつけられ、白犬はガツクリとたおれた。その下から赤い血が溢れ出て、地面に広がっていく……

一度爆散した蛆虫たち：ユンカーズが再び一つにまとまって、まるで巨大な蚯蚓のような姿になった。

その巨大蚯蚓は、大きく鎌首をもたげて子犬と白犬の方へ向けた。そして、再び子犬を取り込もうと巨大蚯蚓が突っ込んでくるツツ

「ドウワアアアアツ！」

白犬の血を見て、背後に控えていた黒犬が飛び出していた。

黒犬は、白犬と子犬を庇おうと突っ込んでくる巨大蚯蚓にかみつこうとするツ！

だが、その次の瞬間、巨大蚯蚓はまたしても小さな蛆虫に分散した。小さな蛆虫たちは、行く手をふさぐ黒犬におそい掛かるツ！

黒犬はチラリと背後の白犬と子犬を振り返り……逃げることなく

蛆虫たちをその身に受けた。

「ギイイイイ！」

蛆虫達は、本能に導かれるがまま、黒犬の体に穴がうがち、食い尽くす……

そのころ、意識を取り戻した『子犬』は、オロオロとぐったりとしている白犬の体を舐めていた。

周囲に一切注意を払っていなかった子犬は、だが黒犬の悲鳴をききつけて母親：白犬の体を舐めることを中止した。

子犬は周囲を見回し、目の前に立っている黒犬の背中を見つけた。

子犬は、その黒犬が自分たちをかばうために、蛆虫に生きたまま喰われているのを理解して、悲痛な鳴き声を上げた。

「クウウウンツッ！」

「ブ……バウツ……グ……ウンツ……」

黒犬は、背後の鳴き声を聞きつけ、振り返った。

子犬と黒犬の目があつた。

「グウワツ!!」

黒犬は子犬に向かって、まるで父親が息子を優しく諭すような調子で軽く吠えた……そして、その姿は蛆虫に飲まれ、あつと言う間に消えていった。

「Uwyoooooooooooooooooon！」

子犬が、悲嘆にくれた鳴き声を上げた。

その声を聴き……倒れていた白犬が一瞬首を持ち上げた。白犬は、最後の力を振り絞って子犬に近寄り……その頭を優しく舐め……

ボタンと倒れた。

泣き叫ぶ子犬をしり目に、跳ね散った蛆虫達は、

今度はバオー・ドッグに集まっていく。

そして、バオー・ドッグを中心として巨大な『蛟』に『タコ』の触手がついたような 醜悪 な形へと収束していく……

『蛟』は、飛び掛かってきたオリジナル・バオーの攻撃をその触手で防いだ。

そして、ぱつくりと大きな口を開け、その肩を齧って振り回したツ

！

『ううっ！』

オリジナル・バオーが降り飛ばされるッ

「グルグルグルグルッ」

子犬が泣くのを止め、立ち上がった。

子犬は最後に白犬をひと舐めして…… 小刻みに体を震えさせた。

ブルブルブルッ！

子犬が身を震わせるたびに、その体が一回りつつ大きくなっていく

……

虎毛が逆立ち、まるでライオンの鬣のようにひろがっていく。

額の毛皮が割れ、そこから黒い触毛の塊が現れる。

前足、腹、そして背中から尻にかけてカニの甲羅の様な、白いプロ

テクターのようなものが現れるッ！

「ヴァンツ！ヴァンツ！ヴァンツ！」

そして、そこには武装強化した子犬：新たなバオー・ドッグが立つ

ていた。

「バアウンンン!!」

子犬が、恐ろしい速度で触手が生えた『蛟』に突進して行った。

『……そうだ。あの子も、僕と同じバオー……自分の体だけでなく、肉親さえもDRESSに奪われたんだ』

バオー：育朗は、虫の息だった。

『蛟』の一撃で、これまでの負傷に加えて右肩を大きく食いちぎられたのだ。

戦いのさなかだというのに、バオーのプロテクターがところどころはがれ、その下から育郎の素顔が現れていた。

あまりに深い傷を回復するために、バオーの体液が大量消費されたのか。

その結果、体液が変身を維持する分に足りなくなっているのか？

『まずい……仗助……僕を『直して』くれ……早くあの子を守らないと……』

育朗は、『蛟』に向かって行く子犬を痛ましげに見た。

『あの子はまだ子犬なのに、けなげにも親の仇討ちをするつもりなんだ……僕たちが守ってあげないと』

「……………おお……………」

仗助は、這いずりながら育朗のほうへ向かっていった。

ぷしゅッ

だが……育朗まで後5メートルというところで……

ユニカーズの蛆虫達が、仗助の足に喰らいついた。

一匹、一匹とユニカーズはその数をまして足に喰らいついていき……やがて仗助の足を完全に覆いつくした。

「クツソオ……あと少しの処で」

ガクリ……

ユニカーズに生命力を奪われ、東方仗助がガツクリと頭を垂れた。

出現させたスタンド クレイジー・ダイヤモンドのビジョンさえもが急速に薄れていく……

一方、二人からわずかに離れたところでは、『蛟』が子犬をあしらっていた。

子犬はヒラヒラトと飛び回り、スキを見ては『蛟』の体にダメージを与えようとしていた。

だが……

「ギャウン!!!」

ついに、子犬も『蛟』に強烈な攻撃を受けた。

脇腹をえぐられ、のたうちまわる子犬……

「い……育朗よお……俺にブル・ドーズを撃て」

仗助の頼みに、育朗は首を振った。

『駄目なんだ……ブル・ドーズ・ブルーズは副作用が強すぎる……』

君はもう、2本ブル・ドーズ・ブルーズによるバオーの体液を注入されている。三本目は危険なんだ。

「育朗………お前が俺に、ブル・ドーズ・ブルーズを打つ。俺がお前を『直す』」

『いや……出来ない。むぎむぎ君を殺すわけにはいかないよ——心臓が破裂するかもしれない』

「育朗、やってくれ」

このままじゃどの道全滅だぜ 　　仗助は笑みをうかべた。

『しかし……』

「いいからさっさとヤレヨ!!!」

なおもためらう育朗に向かって、仗助がキレた。

「お前と一緒にするなツツ俺は今ある命を自分から捨てねエエツツ!!」

『クッ!』

育朗が仗助の目をまっすぐ見て、そしてその右手をまるで握手を求めるときのように差し出した。

仗助もまた、右手を差し出す。

育朗の薬指の爪がパカッと開き、そこから針が仗助の手に……飛ぶツツ

「!? うっ……ウオオオオオ!!!」

ドクンツ!

ブル・ドーズ・ブルーズ・フェノメノン、その能力は寄生虫バオアの体液を変質させ、何らかの効果を持った薬と化す事だ。

その元は、生身の人間を戦闘生物……いや、生体武装 (Biologic Arm ed) を持つ兵器 (Ordnance) に変貌させるほど強烈な寄生虫 (Helminth) バオアの体液。

…… そのバオー (BAOH) の体液をオーバー・ドーズされた仗助の体が、まるでパトカーの点滅するライトの様に頻繁に跳ね上がるツツ!

「ウツ……ウウツ!」

仗助が咆哮を上げた。

『仗助エッ……しまった』

やはりやめるべきだった。育朗は臍を噛んだ。

「ウワアアアアツ!」

叫んだ仗助の口から、鮮血が吹き出した。

やがて……

ビクビク と跳ねていた仗助の体の動きが止まった。

『仗助……』

育朗が仗助の容態を確認するために、幽体となってバオーから抜け出ようとしたその時ッ！

仗助の目が再び開く。そして、立ち上がったッ！

『仗助……無事か？』

「おお……グレートな気分だぜ。育朗、礼を言うぜエ??」

仗助は立ち上がると、クレイジー・ダイヤモンドを出現させた。

「後は俺に任せときな」

『なッ……仗助クン、僕も戦うッ』

「悪リイが、命を無駄にするやつとは一緒に戦えネーぜ……」

『……頼む……僕の体は《戦う為》に作り変えられたんだ……もう長く持たないかもしれない』

「……だったら、なおさら残っているその命を大切にしねエとよオ??」
『頼む……《スマイレの為に戦う》それが僕の生きる目的……』 それを奪わないでくれ……

育朗と仗助は、しばらく無言で向き合った。

「………育朗ッ、約束できるか？ 命を無駄にしねエと——生きて、再びスマイレ先輩の元に帰ると」

それは、お前のためってだけやねエ……スマイレ先輩の為っす。出来るか？

仗助の真剣なまなざしを受け止め、育朗がうなずいた。

『……約束するッ！』

「よし、信じたからなッ！」 仗助が笑った。

そして次の瞬間、クレイジー・ダイヤモンドがバオーに触れ……傷を全快させるッ。

「行くぞオッ！育朗オツッ」

仗助が叫んだ。

『!?リスキニハーデン・セイバー・オフッ！』 「バルバルバルバルバルバルバルバルバル！」

だが、バオーの全力の電撃を受けてもまだ『蛟』は生きていた。

『蛟』はその体から煙を立ち上らせていた。だが、その動きは止まらず、叫び声を上げて周囲の木々をなぎ倒していく。

「バルバル……バルツ……バル……バ………」

やがて、バオーが膝をつき……電撃が止まった。

そのバオーの右腕は、今や完全に炭化し……崩れ落ちた。

『くっ……これでもまだ倒せないなんて』

育朗は歯噛みした。

『あと少しだったのに……ここまで力を振り絞ったブレイク・ダーク・サンダーは、もうしばらく打てないんだ』

何か次の手を考えないと………

「いや……まだ手はあるぜ。なぜなら、お前はまだ電撃を放つてねエエーんだからよオオ??ッ」

《約束》を破りかけたテメーに、大サービスしてやるぜ。

仗助が育朗の背後に立った。

そして、クレイジー・ダイヤモンドの新しい力が発動するッ……

「クレイジー・ダイヤモンド……Get Back!」

キュイイイイ——ンツツ

『ほら、撃てるだろう?とどめはお前に譲るぜ、育朗』

仗助は、5秒だけ時が巻き戻った バオー……育朗の背中を、そつと後押しした。

「……バルツ……バルバルバルバルバルツツツ!!!」 『ブレイク・ダーク・サンダー!』

自分だけ時間が巻き戻ったバオーと育朗は、自分ではそうと気が付かないまま全力の電撃を『もう一度』、『蛟』に食らわせた。

『ぐおおおおおおっ』

その隣で、仗助は近くに転がっていたバイクのタイヤを『作り直して、高圧電流を封じるためのゴムシートを作っていた。

そのシートをまるでマントのようにクレイジー・ダイヤモンドにかぶせ、そして……

「おまけだッ」

『ドラララララララアツツ』

クレイジー・ダイヤモンドが弾幕の雨を『蛟』に降り注ぐツツ!

Downnn!

二人の連弾を同時に受けた『蛟』はその変身を解き、空高く吹っ飛び……そしてバオー・ドッグの姿に戻って……パタンと倒れた。

「はーっはーっは——」

バオーが変身を解き、『育朗』に戻った。

「終わった……ぜえ」

「そうだね、終わった……僕たちが、終わらせた」

仗助と育朗は共に地面に寝っ転がり、互いの拳を突き合わせた。

「おいッ! お前たち 大丈夫かッ?」

六助爺さんが、疲労困憊の二人と一匹を助け起こした。

エピソード ―― 育朗と仗助 ――

ブ――ン

バチパチバチツ

ジョセフ・ジョースターのスタンド、ハーミット・パープルが紫色の光を放って病室を照らしていた。

だが、その光は育朗とジョセフにだけ見えている。病室にいる他の人間 ―― 自衛隊、アメリカ海軍それぞれから派遣された医師と、S W財団のお抱え研究者 ―― には見えない。

彼らはスタンド使いではないからだ。そのため、スタンドの放つ光も見えないのだ。

彼らは、ただ病室の壁をじつと見つめていた。

その顔は皆、固い。

「……準備OKよ」

「了解だ、そろそろ始めるかのオ??」

ケイト教授の合図で、ジョセフの左手から伸びるハーミット・パープルの茨が 育朗の全身を包み込んだ。

そして、右手から伸びる茨は、テーブルの上に置かれたプロジェクターに伸びていく。

ブ――ン

ハーミット・パープルが強い光を放つ。

それと同時に低い音がして、プロジェクターが自然に起動した。プロジェクターは、医師たちが見つめる壁に、ある写真を出現させた。照らし出された写真を確認して、その意味を理解すると、医師達は一斉にざわめき始めた。

「これは……」

ケイトは、その写真を見て パーツと晴れ上がったような笑みを浮かべた。

「信じられない、これは奇跡よツツ」

「雲一つない、い???いッ天気だのお」

六助爺さんは空を仰いで元気よく言った後、すぐに似合わないため息をついた。

まさに、旅立ちに相応しい日だ。だが、まだ早過ぎる。もう少し、もう少しだけ出発を遅らせたっていいじゃないか。六助爺さんは、少し恨めし気に出発の準備をする若者に近づいて行った。

杜王病院の駐車場では、ようやく診察から解放された育朗がバイクにまたがっていた。

バイクの後部にはS W財団から送られたテントや何やらがくくりつけられている。育朗は、近づいてきた六助爺さんを見て、顔をほころばせた。

これから、育朗が出発する所であった。一緒に同行するのは、ホル・ホースであった。

スマレではない。

育朗の出発の意思は、S W財団の関係者と、六助爺さんにだけ伝えていた。仗助たち杜王町のコーコーサーと……スマレには伝えていない。別れがつらくなるからだ。

「オイ、本当にいいのかよ」

ホル・ホースの言葉に、育朗は晴れやかな顔で頷いた。

「いいんです……もう十分に」

「精密検査の結果によると、アンサンの中の寄生虫、バオーが卵を産む確率は20%しか無いんだぞ……助かる可能性が高いんだと、諦めが良過ぎねーか？」

ホル・ホースが肩をすくめた。

「でも、僕がいる限りDRESSが僕を狙い続けるに決まっています……やっぱり、僕はここを離れた方がいいんです」

自分に残された時間がどれほどあるかはわからない。だからこそ、スマレには自分のことなど忘れ、幸せになつてほしいんです。

そう言つて微笑む育朗を、六助爺さんはきつく抱きしめた。

「育朗……お前が決めた事なら、わしゃ何も言わん」

六助爺さんは、育朗の目をまっすぐ見て言った。

「スマレの事は心配するな。まだまだわしも元気じゃからのお」

そう言いながらも、置いて行かれるスマレの気持ちを想像して、チクリと心が痛んだ。

「お爺さん……」

本当にいろいろありがとうございました。育朗は深々と六助爺さんに頭を下げた。

「……じゃあ、行くぜ」

ブルンツ

ホル・ホースはバイクのエンジンを始動させた。

「わかりました……」

お爺さん、お元気で。

育朗はもう一度六助爺さんと握手をすると、バイクにまたがり、エンジンを始動させた。

ブルンツ

キュルツ キュルツ キュル……

「!?おい、こりゃあ……」

だが、育朗とホル・ホースがアクセルをいくら吹かしても、全くバイクが動かなかった。

よく見ると、髪の毛のようなものがバイクを持ち上げ、後輪を空転させている。

「!?……なんだい……これは……髪の毛……」

育朗が唾然としている間に、バイクを覆う髪の毛はどんどんその数を増やしていた。

「そこだッ！」

だが、気配を感じて育朗が投げた石は、木の陰からスルスルっと現れた髪の毛に阻まれた。

そして……もの陰から現れたのは、山岸由花子だった。彼女は、自身のスタンド：ラブ・デラックスの能力によって髪の毛を動かす、バイクを止めていたのだ。

「……行かさないわ」

由花子は、そう呟いた。

「あなた……カツコ良くないわよ……女の子を置いてこっそり出て

いこうとするなんて……」

コッ コッ コッ コッ コッ コッ コッ コッ コッ コッ

「君ッ——お願いだ。このまま僕を行かせてくれ」

育朗が、バイクから降りた。

バリッ!

右手に刃を……リスキニ・ハーデン・セイバーを出現させ、バイクにからみつく『髪の毛』を断ち切る。

「見てわかるだろ……僕は……普通の人間じゃあない。ここにいてはいけない人間なんだ……頼む」

「駄目よ」

由花子は育朗の頼みをきっぱりと断った。

「アナタの体が普通じゃあない?——それは私たちスタンド使いだって同じことよ。そんな『クダラナイ』ことを気にしてるのなら、あなたやっぱり杜王町にいるべきよ……それに、アナタが話すべきなのは私じゃあないわ……」

ジャリッ

トッ トッ トッ トッ トッ トッ トッ トッ

育朗が振り返ると、そこには目を怒らせたスマレが立っていた。

「あら、橋沢育朗くん……貴方は、どちらに行かれるおつもりなのでせうか?」

まあ、私には『関係ない』質問かも知れませんがドオッ!

ジャリイツツ!!

危機を察知し、ホル・ホースと六助爺さんがこっそり育朗を置いて逃げ出していく……

残された育朗は、困った顔で立ち尽くした。

「スマレ……わかってくれ、僕は……」

「何ッ!? 貴方まさか、逃げようとしてたわけじゃあないでしょうねエ?!」

スマレは育朗の正面に立ち、腕組みをした。

「貴方……私の『覚悟』を見くびってないでしょうねエ!!!」

「いや……スマレ……さん。そのオ……」

「何イツ!？」

スマイレが、またしてもキツと育朗をにらみつけた。

「アンタの体の事ならとつくに知ってるわ……だから、こそ　もう独りで抱え込んだり、独りになろうとしないでッ……」

私が、アンタのそばにいてあげる。

聞いている？

何があっても、私はアンタの横にいるわ

ツツツ

スマイレの頬を一筋、涙が流れた。

古来女の涙は幾多の英雄を陥落させてきた。ましては普段は強気な女の涙……

「ゴメン……僕が間違っていました」

橋沢育朗は、その破壊力に『完敗』した。

仗助が目を覚ますと、真つ先に入ったのは　川尻　早人の笑顔だった。

「仗助兄ちゃんッ!」

「おおお、早人　無事に脱出できたか」

仗助は飛びついてきた早人の頭をグチャつと撫でた。

「……息子がお世話になりました」早人の母、しのぶ　が仗助に頭を下げた。

しのぶは愛おしげにアミを抱っこしている。

「ニイーちゃんッ」

アミが早人のまねをして、仗助にくつついた。

「おっおおお??ッ　早人のイモートだなッ　げんきじゃねエえか」

仗助はにつこり笑ってアミの体を持ち上げた。

「そうだよ。僕の妹さッ」

早人は胸を張った。

結局、アミのスタンド能力は判からないままであった。その能力が今後どうなるかも不明だ。

S W財団のケイト教授が言うには、アミのスタンドは、おそらく彼女がもつと成長したところに自然に表れるはずだという事だった。でも、精神的に安定した生活が続くことで、結局は発現しない可能性もあるのだそうだ。

結局、この先どうなるのかはよくわからないという事だ。

それでいいと早人は思っていた。

未来は、わからないほうがいい。

アミは、早人にすっかりなついている事を考慮され、川尻家で引き取られることになった。

また、母親とジョセフが話しているのを立ち聞きしたところによると、アミの養育費と言う名目でS W財団からそれなりの金額が月々支払われることになっているようだった。

愛くるしいアミに母親はもうメロメロな様子だったし、これでもいいのだ。もしかしたらアミのおかげで父親の事で苦しんでいる母親の心も、少し楽になるかもしれない。

早人は、少しだけこの先の希望が大きくなったのを感じていた。

「早人、しばらく仗助さんとお話しててね……わたしは朋子さんを呼びに行くわ」

しのぶはそんな息子の様子を眩しそうにながめ、病室を出て行った。

◆ ◆
「目が覚めたようだな」

仗助が早人と話していると、ガチャリと病室のドアが開き、ジョセフ・ジョースターが姿を現した。

「……オヤジ……」

「仗助……ワシの頼んだ仕事で、迷惑をかけたな」

ジョセフが仗助の手を握った。

「しかし、良くやってくれた、頑張ったな」

「いや……俺は……」

シユルルルッ……

握った手を伝わって、ジョセフのスタンド：ハーミット・パープル

の茨が仗助を包んだ。その茨を通してジョセフの波紋がじんわりと仗助の体を温めていく……

「……ジジイ……オヤジ……わざわざ来てくれたのか……ありがとう」

「何、丁度ホリイに会いに日本に来ておったからの」

「……言いにくいケド、早人の母さんがお袋を呼びに言ったぜ」

「……ああ……わかっとする、あまり長くゆっくりはしておれん……な」

「!?僕、母さんを引き留めてくるよッ!」

バタバタつと足音を立て、早人が病室から出て行った。そして、病室には父と息子……ジョセフと仗助の二人だけが残された。

「……何か飲むかい？」

「いいよ……済まんがここに来る前に夕食をすませておつてな」

「そっ……そーっすか」

二人は少しの間黙っていた。だが、それは必ずしも気まずいだけではない、穏やかな、互いを思いやる暖かな時間だった。

「……それで、育朗たちはどうしたっすか」

沈黙を破ったのは、仗助からであった。

「ああ……あの青年か」

ジョセフが言った。

「彼なら無事じゃよ、今回の件でお前に礼が言いたいとおつたがのオ」

「いや、俺は」

仗助が頭をかいた。

「俺は何もしてないっすよ」

「そんなことはない。お前がいなければSW財団の研究部隊は全滅してたじやろう。それに、あの若者たちも、組織につかまってひどい目にあっていたじやろう」

「仗助エツ」

ボタン と勢いよくドアを開けて、アンジェラが飛びついてきた。「よかった。心配したのよ……」

「おお……アンジェラ……その……悪かったな。あの時は俺が俺でなかつたからな……許してくれるか」

「フフフ……一度デートしてね」

そうしたら許してあげるわ アンジェラが仗助の頬にキスをした。バチツ!!

その瞬間、波紋——ジョセフのものより生命力に溢れる——が仗助の頬から全身を駆け巡るツツ

「おッ……おおー」

まるで電気ショックを受けたように、仗助はピンと体を伸ばした。

「フフ……すぐ元気になりそうね……」

「……オホン」ジョセフが咳払いした。

キャツ ごめんなさいッ！ お師匠さまッ！ アンジェラが顔を赤くして、病室から駆け出して行った。

そのあとには、少し唾然とした親子が残された。

「……お前たち、こんなことを聞くのはなんだが……付き合ってるのか？」

「なツツ……そんなわけねえ?? ツツス！」

ジョセフの問いを、仗助は顔を真っ赤にして否定した。

「ア……アイツの事はよく知らねエエ——んす。付き合うとか、それ以前の問題ツスよオ」

「そお?? かあ?」

ジョセフはニヤツと笑い、そして話題を元に戻した。

「お前たちのおかげで事件が終息したんじや、あそこでお前たちが奴らを食い止めなければ、大変な被害が出ておった所じや」

胸を張りなさい。ジョセフの言葉に仗助は、はにかんだような微笑みを返した。

「……………オヤジ……あの、それで奴らは一体何もんだったんすか、あのゾンビは……」

「ゾンビどもはすべて退治したよ。安心しなさい……あの者たちは、我々の敵じや。かつて我々と戦ったDIO という男を信奉している者どもだ……だが、奴らも追い払った。杜王町はまた安全な場所

になったワイ」

「じゃあ……これで、一件落着つてわけっすね」

「それがな……」

ジョセフが不意に真顔になった。

「お前に、言わなければならん事があるんじやよ」

「ゴクツ……なんすか……」

「仗助、いいか……落ち着いて聞いてほしいんじやがぁ……」

真顔で説明しようとしているジョセフの耳が、背後から突然ひねられた。

「イタタタタタタ」

「……お父さん、いつまで待たせるのよ」

そこには、5人の女性が立っていた。1人はジョセフとほぼ同じ年代の白人女性、もう1人はその女性が抱っこしている赤ん坊、そしてジョセフの耳をつねっているのは40代後半の美しい白人女性だツ！

赤ん坊には見覚えがあった。あれは、ジョセフが杜王町で出会った透明な赤ん坊、静だ。

そしてさらにその後ろに、アジア系の美女と、その女性が手を引いている4・5歳の幼女が立っていた。

「オマエがジョースケかツ？」

なぜか幼女が仗助を睨みつけてくる。

「おっおおお??そうだぜエエ?」

「ジョリーンツツ、初対面の人にはコンニチワでショツ ……仗助クン、夫が色々お世話になったみたいね」

幼女の手を引いていた美女が、仗助に手を差し伸べた。

「えっ?夫って……もしかして……」

仗助は、目を白黒させたまま美女の手を握り返した。

「わかったわよ、ママ……よろしくなツジョースケツツ」

ジョリーンが、ふてくされたように言った。そして、パシツと、仗

助とその美女の握手をしている手をはたいた。

「ジョオリイイ——シンツツツちゃんといサツしなさいツツ」

美女が目を三角にして、ジョリーンをしっかりとつけた。だがジョリーンも一歩も引かず、美女に何やら早口で言い返している。

仗助は、あつげにとられてその様子を見えていた。

突然英語交じりの日本語で話しかけられ、その直後に母娘が遠慮なしに繰り広げる口げんかを間近で見させられているのだ。

一体何が起きているのか、よく状況に適応できていないまま仗助が呆然としていると、ジョセフの耳をつねっていた白人女性が仗助に話しかけてきた。

「初めまして……会いたかったわ……弟くん」

温かい、聞いていると心が安らいでくるような声であった。

「あなたは……」

「息子が世話になってるわね。私は空条ホリイよ」

ホリイと名乗る女性は、ハウ アー ユー！と陽気に挨拶して、仗助に手を差し出した。

「よッよろしくツス……ってことは……」

えっ？仗助は口げんかをしている母娘を見る。あれは、やっぱり、もしかして……

そして、静を抱っこしているおばあさんは、もしや……

ちらっと隣のジョセフを見ると、ジョセフはその大柄な体を可能な限りちぢこませ、もじもじとしている。

「なるほどね……あなた、お父さんの若いころにそっくりよ」

ホリイが、少し満足げに言った。

えっ？ 仗助が鏡を見る……そこにいたのは、ピンピンと長髪を無造作に伸ばした青年の姿だった。

金髪に染めた髪を黒く染め直しているので、髪の色はこげ茶色だ。

仗助はわかっていないが、その色がまた、仗助をジョセフの若いころに似せていた。

「そう、そっくりよ」

そういうと、ホリイは 植物を編みこんできたリスのようなビ

ジョンのスタンドを出現させた。

「それから……アナタのスタンドも、私のスタンドと能力が似ているわね」

そのリスからイチゴのツタのようなものが伸び、仗助の周りを包んだ。

そのイチゴから立ち上る香りに、ジョースター家の女性陣に囲まれていた仗助の緊張が、すっと溶けていく……

でも今は能力を使うべきときじゃあないわよね。ホリイはニッコリ微笑んでチラツと見せたスタンドを引っ込めた。

「そうそう、私がスタンドを使う事は、男達には内緒よ」

ホリイが父と弟をジロリと見据えた。

「これは、むしろ男達を守るためよ」

はい……仗助とジョセフは神妙にうなずいた。

「ホリイ……姉さん……ツスカ……すると……」

仗助は恐る恐るホリイの隣の老女の様子をうかがった。

老女は微笑んでいた。

「初めまして、スージーQと申します。そう……あなたがジョウスケね」

ようやくあえたわ。スージーQは破顔した。

「これまでの話は聞きました。あなたのお母様は、あなたを素晴らしい人に育てたようね」

「……いや、その……なんていったらいいか……」

（うおおおおお……別に俺が何かした訳じゃねーのに気まじいっス）

「貴方が私のことを何も気にする必要はないわ」

スージーQは優しく仗助に語りかけた。

「馬鹿な夫が迷惑かけました……勝手なのは承知ですが、あなたとどうしてもお知り合いになりました」

そして、勝手だけどアナタにも私たちのことを 許し、受け入れて

欲しいの ——アナタのお母さんがそうしてくれたように——
スージーQはそう付け加えた。

パタン

ドアが開き、母親が、東方朋子が満面の笑みを浮かべて部屋に入ってきた。

「仗助ッ！目がさめたか？」母親が朗らかに笑った。

「ううッ……」

母親を見たたん、不覚にも仗助の視界がぼやけた。

その仗助の隣では、彼の父親：ジョセフ・ジョースターが、彼が日本で覚えた最大級の謝罪を示すポーズ：MAX土下座を敢行していた。

エピローグ ――その先へ――

噴上は、病院のホールに待機していた。

つい数か月前まで入院していた病院にいるのは、正直気分がいいものではなかった。だが噴上は、心配して病院に駆けつけてくれた「アケミ」「ヨシエ」「レイコ」の三人をひとまず帰して、ただ待っていた。と、ハイウエイ・スターが探していたニオイを探知した。

予想通りかよ。噴上は舌打ちして病院のホールを抜け出した。そのまま小走りに走って裏の駐車場に出る。

そこには、探していた二人がいた。

二人は両手に荷物を抱え、今から旅立とうという格好だ。黙って行くとしたのだろう。水臭い奴等だ。

「噴上くん……」

育朗が、ちよつと気まずそうに笑いかけた。

「育朗オ、オマエやっぱ黙って行くこうとしたのかよ??」

噴上は、育朗の肩を軽く殴った。よく考えると、この病院に入院させられたのは育朗の『幽霊』に驚いたからであった。

そう考えると、何だかくすぐつたい、不思議な気持ちになった。

「ああ……仗助くんにも礼を言いたかったけど、彼を今邪魔しちやいけないみたいだからね」

育朗が答えた。

育朗の隣には、スミレがぴったりとくっついていた。

そして、二人の足元には子犬がまとわりついていて。銀色がかったグレー地の虎毛が生えた、きれいな子犬だ。子犬の背中にはリスのような動物がちよこんと乗っていた。

リスモドキの名前は、インピンだったか。

意外と可愛いものの好きの噴上がリスモドキの名前をようやく思い出すと、スミレが子犬のほうの名前を教えてくださいました。オリオン座の源氏星と平家星から、ゲンペーと名付けたらしい。可愛い名前だが、実際は育朗と同じバオーだ。しかも、寄生虫バオーを3匹もその身に宿している、正真正銘『超強力』な戦闘生物だ。

「どこか、行く当てがあるのか」

「まずは墓参りに行くよ。父さんと母さんの、それからスマレが昔いた孤児院に行ってみようと思うんだ。その後は……昔世話になった人がいるんだ。その人のところにしばらくだけお世話になるつもりさ」

SW財団の方も援助してくれるしね。育朗はそういうと、少し先でバイクを止めて二人を待っているホル・ホースをちらりと見た。

ホル・ホースは煙草を揺らし、話が終わるのを待ちながらも、あたりに油断なく目を配っている。

「……僕が、僕に何かあっても彼が『処理』してくれる事になっているんだ」

育朗が微笑んだ。

「そ……そうか」

パシッ

深刻そうに話す育朗の背中を、スマレが叩いた。

「大丈夫よ、育朗ッ……なにがあっても、私がついてるからねッ」

「ハハハ。ありがとう」

育朗は、今度は晴れやかな笑みをスマレに向けた。

「おおう……ここにいたのか、探したぜエエ」

三人が和やかに話し合っているところに、億泰と未起隆、そして康一と由花子が現れた。噴上がハイウェイ・スターを飛ばして知らせていたのだ。

「スマレ先輩……良かったですね」

由花子の無愛想な言葉に、スマレはニツコリ微笑んでアナタのおかげよと言った。

由花子は、ちよつと首をすくめると、すぐにプイツとまた立ち去っていった。

「まあ、アイツの態度は気にスナナよ」

悪い奴じゃあないが、ちよつと周りが見えてないんだよオ。億泰が言った。

その隣では、康一が何も言わずに……ただ首筋をボリボリとかいて

いた。

「ミキタカゾ……オクヤス…… お世話になりました」

スマレは二人に頭を下げた。

「アナタたちが助けてくれなかったら、育朗と会えなかったわ」

「ミキタカゾ……クン？　ありがとう。君達がスマレを助けてくれたことは忘れないよ」

ところで、ユニークなあだ名だねと付け加えた育朗に、未起隆は胸を張った。

「なにいつてるんですか、本名です……私　宇宙人なんですよ」

「ありがとうね、ミキタカゾ」

何か言おうとした育朗を制して、スマレが未起隆を抱きしめた。

「……それから、億泰君　君にも　ありがとう　しか言えないけれど……本当にありがとう」

育朗は億泰に手を差し出し、二人は固く握手を交わした。

「……おっ……おう」

グスツと鼻をすすりながら、億泰が涙目でうなずいた。

「あんた達……良かったなあ」

グス

「……もし、しばらくして落ち着いたら、杜王町に顔を出せ。歓迎するぜ」

噴上が言った。

「どうだ、一緒に族をやらないか」

「ハハハ……いいね」

育朗が笑った。

「僕は……バオーが落ち着いた事がはっきりするまでは、しばらく旅に出ようと思ってるんだ。僕が眠っていた8年以上の時間を埋めたいからね……そのあとで、今後のことはゆつくり考えようかな」
(もし、この先も僕が生きていられたなら……)

育朗は、心の中でそうつけ加えた。

「承太郎さんからは、僕さえその気になれば、ぶどうカ岡高校への編入手続きを取ってくれると、言ってもらったんだ。前向きに考えてみる

つもりさ」

グスツ

もう一度、億泰がひときわ大きく鼻をすすりあげた。

「……この恩は忘れないよ。杜王町のために。もし、僕の力が役立つことがあれば、いつでも力を貸させてもらおうよ……それから、仗助君にもよろしく伝えておいてくれないか」

「わかっているぜ……またな、育朗、スマレ」

ブルンツ！

「じゃあー！」

「またねツ！」

育朗とスマレを乗せたバイクが走り去る。

ブルルル……

その後を、ホル・ホースが車で追いかけていった。助手席にはゲンペーとインピンがちよこんと乗っている。

「おうっ！ガキども元気だなツ！アミを頼んだぞツ！！縁があったら、またコンビを組もうぜエエ？ ツ」

ホル・ホースはすれ違いざまに4人に手を振った。

「ガウンツ！」「ぶーだあ！」

ゲンペーとインピンは車の座席から後ろを向き、遠くなっていく三人に向かって尻尾を振った。

「またなあ〜！！」

億泰・噴上・未起隆・康一の四人は、道路真っ直ぐに走って行く二人の姿が見えなくなるまで、ずっとその場で二人を見送っていた。

夕日に照らされた道路の先で、一度、スマレがバイクの上から振り返ってこちらに手を振るのが見えたような『気が』した。

「……さあ、行こうか。億泰よお……お前、もう泣きやめよ」

「そうですね。億泰さんは大活躍だったじゃあないですか」

そんなに強い億泰さんが、なんで泣いてるんですか？未起隆が真面目くさった口調で言った。

「でも、お似合いの二人だったね」

康一の一言で、億泰はさらに目をウルウルとさせた。

「…………おっ…………おう…………グスツ」

「やれやれ…………」

ジョセフは隙を見て仗助のいる病室から抜け出し、ため息をついた。

何もわかっていない静を除いた四人の女性がチラチラ飛ばして来る冷たい視線に、いたたまれなくなったのだ。

とくに、孫の娘、徐倫の視線が痛すぎた。あのひ孫は、父に似て強気な性格をしている。何でもつい数か月前——父親の承太郎が日本で吉良吉影と戦っていた頃——に高熱を出して寝込んでいた頃も、一言も泣き言を言わなかったらしい。

仗助とスージーQ、ホリイの三人が仲良く話しているのを見ると、なぜか涙が出そうになってきて耐えられなかったという事もあった。

東方朋子にあの場で何と言えばよいのか、何にも思いつかないと言うこともあった。

「…………ジジイか、仗助とおふくろ…………それに おばあちゃんの様子は どうだ？ それから、徐倫と妻は…………」

病室の外にいた承太郎が、目ざとくジョセフを見つけ、声をかけた。承太郎の横にはポルナレフがいて、コーヒートを片手に何かを楽しそうに話し合っていたようだ。

ジョセフは、ポルナレフの手から缶コーヒーを受け取った。

久しぶりの気の置けない仲間同士の会話。滅多に訪れない、この先二度とあるかわからない黄金の時間。

互いに成長し、歳をとり、責任を背負い、滅多にあえず、普段話す口調さえ変わっても、こうやって再会すればすぐにあの頃と同じような時間が流れる。

いつか仗助も、杜王町の仲間たちとこんな時間を持つことだろう。

ジョセフはふとそんなことも思いながら、二人の会話に混ざった。

「ジョースターさん…………さすが…………若いっすね」

ポルナレフがにやにやと笑った。

「俺も、ジョースター師匠のように 何歳になっても現役でいないとね……おい承太郎、怒るなよ。ジョークじゃあないか」

「……別に怒っちゃいけないさ……仗助はジジイに似ず、頼りになる、『誠実な』いい男だしな」

「お前たち……もう少しワシに優しい言葉をかけられんのか」

老人は敬うもんじゃぞ……ジョセフはぶつぶつといった。だが、孫の承太郎がこれほど屈託なく笑うのを見るは、久しぶりだ。それは、嬉しかった。

「ハハハ。とつても尊敬してますよ」

俺も、エジプトでであったあの素敵なマレーナにまた会いに行こうかな。ポルナレフが言った。

「しかし、針のむしろつすね、ジョースターさん——まあ身から出た錆って事つすね?」

クツクツクツ??

「ムムムウ……ポルナレフ……しかし、貴様も少し老けたんじゃあないかあ?」

「なんですとオ!ジョースターさん」

ポルナレフがかみついた。

「俺はあの後も修行を欠かしてないんすよ。俺の新たな能力・エメラルドソードの力を見たら肝つぶしますよオ——ツ」

「そおかのお??聞いた所じゃと、ワシの息子にボコボコにやられたそうじゃあないかあ……お前、もう年なんだから無理するなよ」

「クツ………承太郎、お前はこの後はどうするんだ」

形勢悪しと見たポルナレフが、唐突に話を変えた。

「……弓と矢の情報がなくなっちゃった……俺は……D I Oの奴が残した子供たちの後を追うぜ……奴の残した組織が、D I Oの子供たちに接触したら事だからな。D I O R E S U R R E C T I O N S E C R E T S o c i e t y (D I O様復活の為の秘密結社) — D R E S S —だと、ふざけやがって」

承太郎は真顔になった。

「DRESSをぶっ潰すのは俺たち大人の仕事だ。これ以上あの子たちを犠牲にするわけにはいかねー」

(ヤレヤレだぜ……この件が片付くまで滅多に家族に会えなくなるな……)

だが、承太郎のその眩きは、口に出ることは無かった。

「俺は、デイヴィーナ・ダービーを追うぜ」

ポルナレフが言った。

「俺は組織の本拠地を探して潜入する……お前 俺から連絡するまで、お前の方から連絡取ろうとするなよ……組織にばれたら事だから」

「わかった……またしばらくは会えないってことだな」

てめーは忘れようだったって忘れられねー しょうもねー奴だがな。承太郎が笑った。

「DIOが復活するのなら、狙うのは育朗の体じやろうな……そちらはホル・ホースに守らせる事にしたワイ」ジョセフが言った。

「あいつを、信用するのか」

ポルナレフがあからさまに疑わしそうな顔をした。

「あれでも契約には忠実な男じゃよ……育朗のボディガードにはちやうどいい」

万が一の時は、その他の『役目』もしなくちやならんからな……ジョセフはボソツと付け足した。

「……とにかく、これで杜王町への危険は回避できた。一件落着という訳だな」

ポルナレフが笑った。

「しかし、杜王町のコーコーサー共、アイツらには驚かされたよ……日本のコーコーサーがヤルのは、お前と……カキョーインを見てたから知ってたが、アイツらもお前らに負けないな」

「ああ、仗助たちは問題ない。例えスタンドあっても、その力に溺れる事もないじやろ。彼らには『黄金の精神』が宿っておるからな」ジョセフが言った。

「……ああ、そうだな」

承太郎が微笑んだ。

「俺達の『何か』を彼らが継いでくれた……俺はそう感じるのさ」

「……『俺達』か……エジプトに行ったら、マレーナの所のほかに、行くべきところがあったな。アイツらにも、今回の話をしてやらねーとな」

ポルナレフが言った。

「アヴドウル、イギー………口にしなくても、三人の頭にある思いは同じであった。」

「ところで……ジジイが協力した例のアレ……ケイト教授の書いた育朗の調査結果を見たぜ……育朗の脳にいた 寄生虫バオーは育朗に完全に融合した様だな」

承太郎が言った。

「そうじゃ」

ジョセフが腕組みした。

「どうやら育朗と仗助が一回目に戦った際に、あの爆弾のスタンドのせいで、S W財団と仗助が調査していた不思議な土地に生き埋めになったらしい」

「あの、混ぜたものが一つに融合するという不思議な土地のことか」

「……そうじゃ。おそらくその土地の力でバオーと育朗が融合した……育朗が連れているあの犬もそうだ……しかも、寄生虫バオーは、育朗に融合した影響で生殖機能を失った可能性が高いようじゃ」

「そうか……すると、『寄生虫バオーが育朗の体を食い破って出てくる』ことはないってことだな」

承太郎がうなずく。

「あくまで可能性だが、そうじゃ。その可能性が高い。だから二人を行かせることにしたってワケじゃ」

「そうか……好青年だったな……あの二人がこれから幸せに暮らせることを願うぜ」

ポルナレフが真顔で言った。

「そうだな……三人の男は若い二人のこれからを祈って、缶コーヒーを打ち合わせ乾杯した。」

「神父様……大丈夫ですか」

海岸線沿いに小さな船が停泊していた。その船の船上で、1人の神父が油汗を流していた。

「ああ、大丈夫だよ。問題ないよ、デイビーナ……危ないところだったが、これで無事コインも、素体も回収出来たよ」

神父と呼ばれた男は、そう答えると傍らに控えさせていた自分のスタンドに向き合った。

神父のスタンドは、白い、包帯で覆われた不気味な外見であった。

『カインシュウしてきましたタ』

スタンドはそう言うと、懐から神父の手に幾つかのコインを手渡した。

「ふむ……これで、彼らの手元にあるコインを受け取れば、コインの方は全部回収できた事になるな」

神父はデイビーナの後ろに立つ気弱そうな少年に会釈した。

少年は、黙ってうなずく。

「DISCの方はどうだ？」

次に神父は、そのスタンドの血まみれの腕から三枚のDISCを受け取った。その一枚、ピーターにSW財団を裏切るよう命令を書き込んだDISCをへし折ると、残りもう一枚、エルネストから取り返した自分の一部のスタンド能力：『DISCを誰にでも押し込める能力』を封じたDISCを、自分のスタンドの頭部に押し込んだ。

「ん？残り一枚は……ああ、ファイヤー・ガーデンの残りカスか……もう水をお湯に変わる程度のスタンド・パワーしかのこせなかったな」

だが何かの役には立つだろう。神父はそのDISCも懐にしまい込んだ。

「何枚かは回収できなかったか……しかし、必要な投資と考えよう」

「神父さま……無茶です。ご自分のスタンド能力を他人に貸し与えるなんて」

デイビーナ・ダービーが首を振った。

「D I O様ご復活のために、アナタはカギとなられるお方。その能力に代わりはありません。そうそうお力をみだりに失いかねないような事はもう止めて下さい」

「だが、そのリスクを犯さなければこの成果は手に入らなかったよ」

神父は満足そうに答えた。

「二人の極悪人 —— マキシムとエルネスト —— の魂の力もコインに移し終えた」

「……D I O様のお力は強すぎました」

デイビーナがうつむいた。

「ワン・ツリー・ヒルでD I O様を呼び返すには36人以上の強い魂の力が必要です。11個のコインに、22個のパスに……そして三個のコインをつないだ三角形に、強い魂を入れなければなりません」

「彼が並はずれているのは当然だろう……彼は、『王』なのだから。コインにはすでに魂が込めてある。今回の件で3つの三角形にも魂を込められた」

回収できなかつたピーターの分の魂は、私のホワイト・スネークがゾンビたちから集めたからね。神父は手をこすり合わせた。

「それに宇宙から落ちてきた『素体』と、ジョースターの一族の血」

「そうですね……いよいよ、もうすぐですね」

「そうだね、たまらなく『興奮』するよ……ところで、君たちが回収した素体の様子はどうだい？ Mr. ドツピオ」

「……今解析しています」

ドツピオと呼ばれた少年が声を潜めた。

「素体はうちの組織では調べきれませんでした、フランス警察にちよつとしたコネがあるので、その鑑識科を使っています」

「それは……信用できるのかい？」

「もちろん」 死人に口なし です。

ぼそつと付け加えられたそのモノ騒がせな一言は、確実に神父に聞こえたはずだった。しかし、『聖職者』であるはずの神父は、まったく何の感想も漏らさなかつた。

「それで、どうだい？ 使えそうか？」

「リスクは高いですが、行けそうです」ドツピオが答えた。「鑑識化の人間は、この宇宙から落ちてきた隕石にまだ生きている細胞があちこち存在しているのを見て、目を丸くしていましたよ」

1999年に空からやってくる恐怖の大王……ノストラダムスの予言は正しかったんですね。

「……『彼』にはふさわしい肉体を用意しておかなければならない。この素体は彼の肉体の元となるものだ」

大事に取り扱えよ……神父の脅しに、ドツピオは酷薄そうに笑って見せた。

「待つてください。まだ取り引きは終わっていませんよ。あなた達は、まだあの、予知の少女の力を奪って無いじゃあないですか」

約束のブツは、予知能力のDISCと引き換えです。

「そうだったな、いやMr. ドツピオ、その約束を守ろう」

神父はそう言うと、自分の頭から一枚のDISCを取出した。

「!?これは」

「予知能力のDISCさ、あの少女のものではない。これは、ほんの数秒先しか見えない能力さ……しかし、100%完璧な未来を予知できる……私が持っていたモノだが、少々惜しいがこれを君に渡そう。このスタンド：エピタフを」

これで、『君たち』は完璧になる。

そう言うと、神父はドツピオの頭にDISCを押し込んだ。

空条貞夫の孤闘 ——— 1982 ——— その1

1982年6月25日：アメリカ ニューヨーク
カチャカチャカチャ……

甲高い笑い声、グラスに氷がぶつかる音、ナイフとフォークが食器にあたる音などが、ときおりフロアに響く。

悔しいかな、フロアに響くその演奏は、そんな小さな音さえ邪魔に感じるほど心に響いた。

J O J O・ジョセフ・ジョースターは、帽子を目深にかぶって、ジャズバーの隅にすわってある丸テーブルに一人で座っていた。時折、手にしたスコッチをチビチビと飲み、ピッチャーがわりのクアーズをがぶ飲みする。シングル・モルトの最高級スコッチを飲んでも、すばらしい演奏を聴いても、その『苦虫を噛み殺したような』表情は、変わらなかった。

彼の視線は、ジャズバーの中央で演奏する『日本人』に固定されていた。

サックスを持ったその日本人は、周囲のミュージシャンとは一線を画す程の圧倒的な技術で、情熱的な音を奏でていた。

店を見渡すと、その演奏に聞き惚れ、すっかり心を奪われている観客が大勢見える。

面白くない。

J O J Oは無然としていた。

(確かに人の心を揺さぶる力をもった音楽をしおる……ムカツ腹立つが、それは認めてやろう。だが……)

気が付くと、いつの間にか演奏が終わっていた。演者達が観客になにやら話しかけている。

観客はスタンディング・オベーションで演者を称えていた。しかも、感極まった観客の一人——ゴージャスな美人だ——がその『日本人』に駆け寄り情熱的なアプローチを始めている。

なぬツツ

思わず立ち上がりかけたJ O J Oは、その『日本人』がさらつとその女性をかわしたのを見て、再び腰を下ろした。

ちよつとホツとした自分が、全くもって気に入くわない。もう十分じや。

J O J Oはそつとホールから出ていった。帰宅しようとして店をでて、運転手を呼ぶために外で控えていた駐車場の管理人に話しかける。

ところが……

「お義父さん、来てくれたんですか」

J O J Oが車が来るのを待っていると、背後から、おっとりした声で話しかけてくる者がいた。

『奴』だ。

J O J Oは軽く舌打ちをしながら振り返った。帽子を目深にかぶり、見つからないようにしていたはずなのに、この男はどうやって自分を見つけたのか。

「フン、お前と話す言葉などないワイ」

J O J Oは、自分の最愛の娘を寝取った憎き男と正面から向き合った。

「演奏……どうでした？」

目の前の男はくつたくなかない笑みをうかべていた。男はJ O J Oの苦虫を噛み潰したような渋い表情にも、まったく怯るんでいないようだ。

——この男——J O J Oはイラツとして、ポケットに入れていたチケット——とつくにグルグルに丸めている——を取り出し、男の鼻先に弾き飛ばした。——波紋を込めて——

だが、朴訥で無口なその男は、波紋を込められた紙玉をさつとつかみとつた。そして、まるで何もなかったかのようにペコリと頭を下げた。

思い出した。

このシャイな男は、サククス奏者と言うだけでなく、日本の古武道の達人でもあった。

最愛の愛娘、ホリイとの馴れ初めも、そうだ。

ニューヨークの路地裏で、スージーQとホリイがガラの悪いゴロツキに絡まれている所を、この男が『格好良く』助けたと言うワケだ。……なんだって、ワシはあの時二人からちよつとでも目を放したのか……………

格好良く妻と娘を守る役は、俺のものなのに……

もう何百回目にもなる後悔を振り払い、J O J O はむつつりと言った。

「もう聞いておるだろ……………ワシは暫く日本に行く。例のM市近くの箱モノの件だ……………忌々しいが、協力してやる」

「……………」

貞夫は黙って頷いた。

「クソツ。いいか貴様ツ、ニューヨークに顔を出せよ。少しはホリイとジョータローに、父親らしい顔も見せてやれ！」

J O J O は、それだけを一気にまくしたてると、足を踏み鳴らし店から出ていった。

一人残された貞夫は、何やら考え深げにホールに戻った。

ホールに戻ってきた貞夫を見つけ、観客達が騒ぎ出した。

そのあけつびろげな賞賛に、貞夫は思わず顔を赤くしてうつむいてしまった。下を向いたまま、身をちぢこませてカウンターに向かう。どれだけ海外で演奏をしても、欧米人のこの辺りのノリには、どうしても慣れることが出来ないのだ。

気分を変えようと、貞夫はカウンターに残されたバーボンを手に取った。今考えるべき事は演奏の事ではない。義父、ジョセフ・ジョースターの協力を取り付けることができた事だ。

貞夫はバーボンをグラスに移し、水を注ぎ、一息にあおった。

そして、フロントの電話を借りてあちこちに電話をかけた。

8月15日：日本

第一印象は最悪だった。

東方朋子は、ゼミの教授のついで夏休みを利用して引き受けたバイ

ト——アメリカからやってきた不動産屋の秘書兼通訳の仕事——にホトホトうんざりしていた。

何と言ってもこの不動産屋がサイアク。

故郷近くのM市の不動産開発に來たと言うこの男は、いい年して無駄にエネルギーシユで、ワガママ、ブシツケ、ガサツ、騒々しく、軽薄ツ!!

絵に書いた様なヤンキーなのだ。

しかも、ことある事に日本の男の悪口を言いまくるとききた。どうやら一人娘がかつてに日本人と結婚したとかで、日本人に恨みがあ
るのだそうだ。

子供かツ!

(やっぱり男は渋みよ、渋みツツ)

朋子は、手荒いハンドル操作で追い越し車線に移った。追い越し車線に移ると同時にリンカーンのアクセルをグツと踏み込み、一気に加速させる。

「オーツノオオオウ——ツツ!」

「大丈夫かあ、ジョジョオツ?」

「ああ、大丈夫、アチチチチ……」

「ヒヤツ、ヒヤツ……ヒヤツツ」

「ジン・チャン、テメエ笑ってんじやねえ!」

後部座席から不動産屋：ジョセフ・ジョースターとその相棒の騒ぎ声が聞こえた。騒ぎ声に交じる罵詈雑言から察するに、急加速の反動で、冷まそうとしていた熱々のたこ焼きを口のなかに放り込んでしま
い……舌を火傷をしたようだ。

いい気味だ。

朋子は、バックミラー越しに後部座席のジョセフの様子を見て、ほそくえんだ。

朋子と不動産屋、そしてジン・チャンと言う台湾人——不動産屋のビジネス・パートナーなのだそうだ——の三人は、レンタルしたリンカーンで、東北道を北に、長旅の途中であった。

目指すはM県M市、朋子が生まれ育った杜王町から、さらに北上し

たところだ。

そこで、観光を兼ねて『今回の物件を下見する』をするのだそうだ。

まったくいいご身分なこと。

朋子は、アクセルをさらに踏み込んでいった。



——4日後——

8月19日：日本、M市近郊の地下施設

観光も終わり、朋子のバイトも終わっているハズのころ。

本当ならもう東京に戻っているハズのころ。

東方朋子は、まだM市の近くにいた。

いや、ここはM市の近くのはずであった。

「……やってられないわよ」

朋子は、怒ったような口調で言った。

「こんな所にいつまでもいられないのよッ。あのメガネ、覚えてなさい。私をこんな真つ暗な倉庫に閉じ込めておくなんてさあ」

だが、口では強がっていても、朋子は湧き上がる恐怖を抑えきれずにいた。

朋子は、暗い密室に監禁されていたのだ。

狭い部屋には椅子が一つあるきりで、その椅子に朋子は座らされていた。

もう、丸一日はこうして椅子に縛り付けられている。乱暴こそされていなかったが、明かりひとつない部屋に、ずっと放置されているのだ。

どうしてこんな事になってしまったのか。

苦い後悔とともに、朋子は昨晚の事を思い返していた。



昨晚は、朋子は不動産屋のスケジュールに合わせて、M市近くのひなびた温泉宿に泊まっていた。

時刻は、深夜3時。しかし、無駄にエネルギーシユな不動産屋のテ

ンションに振り回され、すっかり疲れはてていた朋子は、しかしまだ眠れずにいた。

その温泉宿は、日本の古い民家を改造して作ったものらしく、趣こそあったが空調に不備があった。おりしもその夜は熱帯夜で、朋子は寝ぐるしい夜を過ごしていたのだ。

どうしても寝れずに、あきらめて夜中に窓を開けて、外を眺めていた朋子は、そこである物を目にした。

窓のそこには、まるで幽鬼のような青白い顔をした女性が、小さな子供の手を引いて立ち尽くしていたのだ。

その女性は、窓の外、道路を挟んだ向かい側の山の上で、うつろな目で宿の明かりを見ていた。ちょうど、道路に立っている照明に照らされ、朋子の寝室から女の様子がよく見えていた。

その女はザンバラ髪で、ぼろぼろの服を着ている。

まるで暴行を受けた直後のように見えた。

……子供は、泣いているようだ。

何があつたの？警察に連絡すべきかしら……

朋子が心配になって様子を見てみると、その女性と目が合った……すると、その女性は

にやあつ

と笑った。

その口角がつり上がった笑みが、夜の暗闇の中、スポットライトに照らされているかのようにポウツツと浮かび上がっていた。

そして女性は、子供の手を引いてパツと身をひるがえすと、山の上へ姿を消したのだ。

無気味であつた。

だが、その女の奇妙な笑みと子供の涙に、朋子はほっておけないものを感じた。

(あの笑み……普通じゃなかったわ、もしかすると……)

万が一、その子供に取り返しをつかない事が 起こるかもしれない。い。

だから朋子は、二人を追いかける事に決めて、部屋を飛び出したの

だ。

宿を抜けて道路を越え、森に入り……そして、山の急斜面で足を滑らせ、谷底に落ちてしまったのであった。

「痛たたたッ……クツ、どじったわ……あれっ？どうしてこんな所に？」

谷底に滑り落ちた朋子は、目の前にあるものに気がつき首をかしげた。

全く人が足を踏み入れる事がなさそうな谷底に溪流が流れており、そのほとりに小さなお堂が立っていたのだ。

足を滑らせて足を挫いた朋子は、少し休もうとそのお堂の扉を開けた。

驚いたことに、そのお堂の中に何やら近代的な研究設備が拵えてあり……うかうかと顔を出した朋子は、有無を言わさずその研究設備の警備員に取り押さえられた……と、言うわけであった。

その後、何が何だかよくわからない間に、この小さな部屋に放り込まれ、まるまる1日は放置されている処であった。



朋子が監禁されている部屋には、まったく明かりがなかった。周囲の物音も、時折ゴーツとうなるエアコンの音以外は聞こえない。

朋子は、次第に時間感覚を失いかけていた。

その真つ暗闇の中、カチャカチャカチャ……何か、固い音がするものが近づいてくる……

始めは幻聴かとおもったが、そうではないようだ。

何かが、近づいてくる……

「痛いッ！」

と、朋子は左手に走る激しい痛みで顔をゆがめた。

（『何か』が私の手をかじっている）

朋子は必死で体をよじり、左手にかじりついたものを跳ね飛ばそうとした。

だが、その『何か』は朋子の抵抗などものともせず、さらに左手に牙を埋め立てるッ！

「ああああ——ッ！」

あまりの痛みに朋子の体がのぞける。

プチン

その時、朋子の両腕をしばりつけていたロープが切れた。

『何か』が間違つてかみついたのか。

「うあああああああああああ！」

朋子は自由になった右手で、左腕に食らいつく甲羅を持つ『何か』を掴んだ。

それを、思いつきりコンクリートの床に叩きつけたッ！

「このっこのっこのっ！」

床に落ちた『何か』を、朋子は二度、三度と、思いつきり踏みつけた。

「はあーっはあーっはあ——ッ」

壁を探つて、部屋の明かりのスイッチを見つける。

ボォーン

低いうなり声がして、部屋の明かりがついた。朋子が閉じ込められていた倉庫の様子が明らかになった。

「ううううっ」

朋子の左腕をかじった『何か』は怪物じみた——ドブネズミほどの大きさがある——虫であった。その虫は、部屋の真ん中の床を緑色の体液で汚しながらまだピクピクと身をひくつかせていた。

（なんてオゾマシイ。変な病原菌を持ってないでしょうねッ）

朋子は、髪を縛っていたスカーフをほどき、左手にキツク巻いて止血をした。あまりの痛みに、涙がにじむ。

（あの男たちは、私をどうするつもりだろう。ここは何処……どうやって逃げ出そう？）

朋子は混乱し、その考えは支離滅裂となり、とりとめを失いつつあった。

（なぜあの時、勝手にあの子を追いかけて行ってしまったのだろう）

襲ってきた後悔の念と自分に対する怒りの思いは、しかしすぐに恐怖の波に飲み込まれた。

ガチャ……カチャ

部屋のドアノブが音を立て、回り始めたのだ。

7月25日：アメリカ、ハリウッド近郊

「……そう、J O J Oは貴方と行き違いで日本に行ったのね」

庭で薔薇の手入れをしながら、エリザベス：リサリサが言った。

「はい」

ホリイはプウツと頬を膨らませた。

「珍しいわね。J O J Oが貴女の訪米の時に休暇を取らないなんて」

リサリサはクスツと笑った。

「仕事が忙しい」ねえ？……我が息子ながら、あの子は『糸の切れた風船』みたいなところがあるからねえ……」

油断大敵よ。そういつて笑うリサリサを見て、ホリイは全く面白くなさそうにしていた。

「サダ君も『仕事が忙しい』んですって。おかげで、ジヨータローがすっかり暇にしてるわ」

もう帰ろうかな。

ふくれる孫娘を、あら もっと長くいてね とりサリサがなだめた。

「ジョセフと違って、サダ君は真面目な子だから、きつと仕事が終わり次第すぐ駆けつけてきてくれるわよ」

年齢を経た祖母と孫娘が、いろいろ話しながら仲良く庭仕事をする。

そんな穏やかな午後の時間は、突然現れた侵入者に乱された。

ドジャツ！

「誰？」

リサリサが手折った薔薇を投げつけた。

老いたとはいえ『波紋法』の継承者がなげた薔薇は、茂みの影に潜んでいた侵入者に命中した。

波紋が込められた薔薇をぶつけられた侵入者が、そのショックで痺れ……ハデな物音を立てつつ尻餅をついた。

「なっ！おばあ様……ローゼスと呼ばなくてはッ　ここは危ないわ、早く立ち去りましょうッ」

侵入者が尻餅をついているすきに、リサリサとホリイはその場を離れて助けを呼ぼうとした。しかし、壁を乗り越えてやってきたもう一名の侵入者に、その行く手をふさがれた。

⌘ ⌘ ⌘ ⌘ ⌘ ⌘ ⌘ ⌘
「何者ッ！」

リサリサが、誰何の声をとばすッ

侵入者は二人とも黒いスキー帽を首までおろしていた。目のところに開けた穴には黒いサングラスをハメており、まったく顔が見えない。

「やつと見つけた……」

侵入者が嬉しそうに言った。

「さあ、《あれ》をよこせ、ババア」

「アナタッ」

人を呼ぶわよ、下がりなさいッ！ホリイがリサリサを背中に隠し、男に警告した。

「あの人の情報どおーり奇妙な技を使うな、ババア。だがそんな弱っちい技で、俺達は止められないぜえ」

侵入者はせせら笑い、そしてホリイを見て舌なめずりした。

「トコロでお前、年増の癖に上玉じゃあねえーか」

へへへへッへへ

「貴方ッ、言葉を慎みなさい」

「ひっひひっ……安心しろよ。たっぷり『優しく』してやる。俺無しでは生きていけねー位に喜ばせてやるぜえ??ッ」

下品なことを叫びながら、侵入者がベルトを解いた。その瞬間ッ
ジャリ

奥の木戸から、誰か庭に下りて来るものがいた。

「母さん、大おばあさん、紅茶を持って……はっ！何だ、お前たちはッ
！」

庭の裏道を越えてやって来たのは、小学生の男の子、空条ジョータ

ローであった。

「何だ。ガキか」

侵入者はニヤニヤ笑った。

「うへへへへっ……息子の前で母親を***ってのは面白そうだ。ヒヤッヒヤッヒヤッ、サアイコオオ——ツツ。お前がいけないんだぜ、ババア。お前がおとなしく『あれ』を引き渡してりや、こんな事は起こらなかつたのによお」

侵入者はニヤニヤしながら、黙って立っているジョータローに近づいて行く……

と、

ボガツ！

「オラッ！」

いきなりジョータローは、侵入者のスネを蹴り飛ばしたっ。

思わずしゃがみ込んだ侵入者の顎が、ちょうどジョータローの肩あたりに下がった。

ジョータローは、おあつらえ向きの高さに来たその顎を、もう一度思いつきり殴りつけたッ！

まるで電気ショックを受けたように、侵入者は身をのけぞらせ、前のめりに倒れた。

「このガキイイ——ッ」

思い知らせてくれる。

もう一人の侵入者が、胸ポケットに手を伸ばすッ！

——だがその手に、リサリサが投げつけたスコップが突き刺さるッ！

「あっ！」

侵入者は取り出しかけた拳銃を落とし、しゃがみ込んだ。

ドガツ！

襲撃者の顔面に、ジョータローの拳がめり込むッ！

「ヤレヤレ……子供だからって舐めんなよ。おらおらおらっ！」

ジョータローが、侵入者に拳の雨を降らせるッ

物音を聞きつけた執事のローゼンが駆けつけた頃には、侵入者は

すっかりボコボコにされていた。

「二人とも、大丈夫？」

ローゼンが侵入者を縄にかけて去っていくと、ジョータローは、(先ほどのふてぶてしい姿とは大違いの)あどけない表情で、二人の方を振り返った。

「ジョウタロー」

リサリサは、発音しにくそうに曾孫の名を呼んだ。

「ありがとうネ。でも、貴方が無理することはないのよ」

「おおばあちゃん、お母さん、怪我はなかったかい？」

ジョータローは心配でたまらないと言った口調でホリイとリサリサの元へ駆け寄ってきた。

先ほどのクールな口調は、まるで残っていないかった。

「あら、私たちなら大丈夫よ」

ホリイがウインクした。

「私のジョジョが助けてくれたからね……でも、無理しないで。リサリサ大ばあちゃんが助けてくれたからよかったけど、あの男達が最初から銃をつかっていたら、どうするの」

「大丈夫だよ。アイツらが飛び道具を持ってたとしても、また違ったやり方をしただけだよ」

リサリサ大ばあちゃんと、父さんが色々教えてくれたとおりに、やるだけさ。

ジョータローが右手を開き、持っていたビー玉を見せた。

ジョータローは、そのビー玉を近くの石に投げつける。すると、不思議なことに石の方が砕けた。

「フッフ……アナタもやっぱ『ジョジョ』なのね。頼もしいワ」

リサリサは、ジョータローの頭をぐしゃぐしゃと撫でた。

(……でも、私が『あれ』をまだ持っていることがどうしてばれたのかしら)

その夜、リサリサは、ホリイに貞夫に連絡するように伝えた。貞夫に、大切な、渡さなくてはならないものがあるのだ。

(確かメッシーナも引退しているはず……今の波紋の一族には頼りた

くないわ……ジョセフも戦いから離れて長い。ジョー・タローはまだ子供よ。だから彼よ、彼しかいない、貞夫クンにこれを託すわ……我々とも違う不思議な『能力』を持つ彼に……)

長いこと自分に託されてきたアレは、未だにリサリサに託されたまま。もう本来の役目を終えたのかもしれないが、アレを託され、管理する重圧をほかの人に渡すのは正直気が進まない。

だが、もう潮時なのだろう。

物思いに沈むリサリサの胸には、赤い宝石が揺れていた。

8月19日：日本、M市近郊の地下施設

「よお——ッ?!」

ドアを開けて部屋の中に顔を出したのは、ジョセフ・ジョースターであった。

「キイエエエイトッ! ってアレッ??」

鉄パイプを持って扉の影に待ち構えていた朋子は、入ってきた男の顔を見て驚愕した。だがすでに放たれた渾身の一撃を完全に止めることは出来ないッ

ガツツツン!

J O J Oは朋子の鉄パイプをまともに頭に受けかけ、悶絶した。

かろうじて直撃こそ避けたものの、かすったその一撃が、J O J Oの意識を一瞬飛ばしかける。

「オ——・ノオ——ッ——信じられね——このアマツ!」

「!? 何でアンタがいんのよッ!」

朋子は、振り下ろした鉄パイプ——椅子から外したものだ——を慌てて放り投げた。

鉄パイプが頭に直撃すれば、命にもかかわる。朋子はJ O J Oに駆け寄り、介抱しようとした。

だが、J O J Oは邪険に朋子を振り払うと、頭を抑えて立ち上がった。

「何で来たって、そりゃあー助けに来たに決まってるだろうおが」

「何でアンタが」

いつものように朋子とJ〇J〇は、口喧嘩を始めかけた。だがその時、部屋の隅に開いた小さな穴から、まるで湧いて出るように鼠虫が出てきた。

二人はピシャッと口をつぐみ、互いに顔を見合わせた。
ジャリリツツ ガリリツツ

鼠虫の群れが床をひつかき、気味の悪い物音をたてる。

「オーマイガッ！なんじゃありやあ？さすが日本。ネズ公まで気持ち悪いぜ」

「はあツ??アンタ脳ミソが溶けて無くなっちゃったの？あんな変な生き物が自然界にいるわけないでしょ」

「……なんだかわからんが、とつとと退散しようぜ……気持ち悪いイ」
「そうね。異議なし」

二人があわてて部屋を出ようとする、鼠虫が一斉に飛び掛かってきたッ！

「キイイイ——ツツ」

「いやっ！」

朋子は、一番近くの鼠虫を蹴とばした。

だが、そのすぐ後ろにいた別の鼠虫が、朋子に飛び掛かる。

「うわああああああ」

「おおおうツツとツ」

朋子に鼠虫が噛みつきこうとする直前、J〇J〇が鼠虫を払いのけた。間一髪のタイミングだ。

ブギイイツ

J〇J〇に払いのけられた鼠虫が、床に叩き付けられる。すると何故か、その周りにいた他の鼠虫達も動きをとめた。

「あつ、ありがとう」

「ヨシっ、奴らが出てくる前に扉を閉めるぞ」

鼠虫の動きが止まった今がチャンスだ。二人は力をこめて、それぞれウンウンとうなりながら部屋の扉を閉めた。

扉の裏側で、再び動き出した鼠虫達がカリカリと扉を齧る音が聞こ

えた。

ドアの外は、リノニウムの床が貼られた、廊下であった。ぼうつと、非常用電源の位置を示す青いライトが、列をつくって光っている。

かつん

足音が、響く。

「……とにかく、ここから逃げ出しましょう」

「そうだな……おいッ、アンタ怪我しているのか？」

J O J O は、朋子の手から血が滴り落ちているのに気が付いた。

朋子の傷ついた手を観察したJ O J O は、その傷口の酷さにちよつと顔をゆがめた。

「ええ……馬鹿をやっちゃったわ」 ついさつき、部屋に入ってきた蟲に噛まれたの、でも大丈夫。

気丈に振る舞う朋子の手を、J O J O がブシツケに掴んだ。

「！チョット、痛ッ」

「いいから我慢しな」

J O J O はまるでいたずらっ子のように、鼻をピクピクとうごめかせた。

「オーバードライブッ！」

コオオオオオッ！

奇妙な呼吸音とともに、J O J O の体がボンヤリと光る。

その光が、J O J O の手から、朋子の傷口へ渡っていく。

すると、その光に触れたところから、ミルミルと血が止まり、朋子の傷が塞がっていく……

同時に、腕の痛みも無くなっていく……

やがて、朋子はきよんとした顔で腕を振った。傷は完全には直っていない。だが血は止まり、傷口もふさがり、そして痛みもほとんどなくなっている。

「……どういう事？」

「これでヨシ。応急処置だが、だいぶマシだろ」

J O J O は朋子の傷を再び確認し、満足げに言った。

「!?ねえ、これ一体どういうこと?アンタ今何をしたの?」

驚く朋子に、J O J Oは肩をすくめ、これは『波紋』だ、と答えた。『波紋』は生命のエネルギー。この『波紋』をアンタの傷口に流したつてわけだ。だから傷が治ったつーわけよ」

「……ありがとう。何だかさっぱりわからないけど、お礼を言っておくわ」

朋子が言った。

「それはそうとして、一体なんなの、ここはツ?あの化け物は?アンタ何か知ってるでしょ、教えなさいッ」

「知るかよ。オリヤあ、アメリカ人なんだぞ」

だが、こりゃあ昔を思い出すぜ。J O J O は不敵な笑みを浮かべた。

「朋子よお、無事に帰れたかったら、覚悟しろよッ」

「なっ……何様よッ!呼び捨てにしないで」

朋子は、J O J Oの言葉に反発して見せた。

だが一方で、朋子は、お守りにすぎるようにJ O J Oの背後に移動した。

そして、まるで、捧げものをするように、鉄パイプを両手で構えた。

二人は周囲に注意を払いながら、恐る恐る廊下を進んでいく。

ト ト ト ト ト ト ト ト ト ト ト

「来たぞッ!」

突然J O J Oがささやき、再び不思議なリズムの呼吸を始めた。

コオオオオオオ——ツツ

「えっ?」

朋子は、またしてもJ O J Oの体が光るのを、『確かに見た』と思った。

そして次の瞬間ッ!

ドガン!

廊下の曲がり角から、なにものかが飛び出してきた。

そのものは、歯をむき出して二人に跳びかかる。襲撃者だッ!

だが、まるで襲い掛かってくるのが予めわかっていたかのように、

シュツ

襲撃者のその口から、ねろん と赤黒い舌が飛び出した。

朋子が慌てて手で顔を庇う。

左手に鋭い痛みが走った。

「チツ……大丈夫か？」

J O J O が襲撃者の舌を掴み、引き抜いた。

すでに朋子の左手には、感覚がなかった。

「血止めだ……オーバードライブッ」

J O J O は光る手で、朋子の怪我した左手をきつく握った。

激しい痛みと流血が、朋子の左手を襲う。

「痛ったあああいッッ！」

朋子が、思わず大声を出した。

「!？」

「血いっ!!」

「D u e e e r i i i ! !」

朋子の悲鳴を切っ掛けに、ゾンビどもが次から次へと廊下に現れ、おそいかかって来た。

空条貞夫の孤闘 — 1982 — その2

「クツ来るなッ」

ボゴッ

「こっこのおおおおッ」

どれ程、意味の無い絶叫をあげながら襲い掛かって来るゾンビどもを倒したのか。

鉄パイプを持つ朋子の手は、なかなか上がらず、足腰もガクガクだ。だけど大丈夫。

朋子は不思議な信頼感を持って、隣で戦っているJ O J Oのほうをチラリと見た。

朋子は、いい年して無駄にエネルギーギツシユで、ワガママ、ブシツケ、ガサツ、騒々しく、軽薄なこのヤンキーを、今は信頼できると感じていた。この男は、危険を顧みず平然と朋子を助けに来て、こんな非常識な状況でも全く動じず、平然と対応しているのだ。認めるのは癪だが、並はずれた人物なのは間違いなかった。

(なんて男なのッ)

朋子はJ O J Oの背後から鉄パイプをふるいつづけた。

「オリヤッ！ リーバツフ・オーバードライブッ」

ブツシユウウウツツ！

肘打ちを入れた怪物の顔が、煙を上げて蒸発していった。

「おりやっ」

ひねりを入れて顔面に叩きこんだJ O J Oの脚が、その怪物を後方に吹っ飛ばした。

続けざまに襲ってくる別の怪物の顎を、波紋を込めたアッパーカットで跳ね上げる。

そしてまた、次の怪物に備えるッ

J O J Oはこんなに絶望的な状況にもかかわらず、不敵な笑みを浮かべていた。

朋子を背後に庇いつつ、襲い掛かってくる化け物達に波紋を食らわせ続ける。

一体、また一体と拳を振るうたびに、化けモノ共の体は波紋で焼かれ、蒸発していく。

彼にとつては、(あの『究極生命体』とガチンコでやりやった時に比べれば) こんな状況はピンチでも何も無いのだ。

屍生人など、J O J Oにとつては雑魚としか感じない。

「このッ！このッ！ドラアッ！」

東方朋子の声が、J O J Oの背後から聞こえた。

(おおッ！ただのアーパー女子大生だと思っていたが、なかなか……)

J O J Oは、自分の背後から、隙について鉄パイプを振りおろす朋子をチラツと見て、つい目を細めた。

「やるじゃあねーか」

「こつ……こつ……こう見えても剣道3段なの。警察官のお父さんに習ったのよ」

ハハハ言う荒い息を抑えながら、朋子が言った。

その言葉通り、鉄パイプを構える格好は、なかなか様になっていた。その『振り』も、素人ばなれした鋭さを持っている。

その様子を見て、J O J O は何故か不機嫌になった。

この場にいる、いるわけがない、ある男の事を思い出したのだ。

一瞬、J O J Oの注意がそれた。

「ちよつとッ！」

と、その時、朋子がJ O J Oを突き飛ばした。そして、J O J Oの背後に立ちふさがり……

ズツギユウウツン

朋子の肩に、ウネウネと動く触手が突き刺さった！

「ッ!!」

そして、朋子は悲鳴を上げる間もなく膝をつき、崩れ落ちた。

「あつ！朋子オツ！……馬鹿な、俺を『かばった』のか？」

朋子に突き飛ばされたJ O J Oは、唾然とした。なぜあのととき余計なことを考えたのか……悔いても悔いきれない。慌てて朋子の様子を確認すると、ありがたいことに命に別状はない様だ。だが、早急な治療が必要な状態であった。

「……余計なことを。ダガ同じ結果よ…フフツ」

⚡ ⚡ ⚡ ⚡ ⚡ ⚡ ⚡ ⚡ ⚡ ⚡

JOJOが目をあげると、そこには青白い顔の幽鬼のような女と、ゾンビがいた。

ゾンビの口から吐き出された触手が、朋子をおそつたのだ。

女は、笑っていた。

そして、二人の背後には、朋子が気にかけていた『子供』がいた。いや…それは『子供』ではなかったのだ。そこにいたのは、子供とほぼ同じ身長の子人であった。泣いていると思つたそれは、涙のようにペイントされた顔の模様であつたようだ。

「オーテップ、俺はヤツに備える。だからここは、お前に任せたぞ」

小人は、その外見に不釣り合いなしわがれ声で女にそういうと、背後の闇に消えた。

見た目とは違い、女は小人にしたがつているようであつた。女は闇に消えた小人の言葉に『わかりました』と丁寧に答え、朋子とJOJOに向き直つた。

「あ…アンタはッ」

朋子が目を見張つた。

朋子は、真つ青な顔で自分の肩に突き刺さりびくびくと震えている触手に、そつと触つた。

そつと触るだけで、耐え難いほどの痛みが、触手を通して肩に送られる。

「アンタ…ワタシを追つてこなければ生きてられたのにね」

オーテップと呼ばれた女は、青白い顔で微笑んだ。

「ワタシ、おせっかいな人嫌いなものよ」

死んで？

オーテップは懐からナイフを取り出し、朋子に向かって投げつけたッ。

バシユツ！

だがそのナイフは、JOJOの手によってつかみ取られた。

「なっ……」

「ケッー！」

J O J Oはナイフを放り投げると、朋子の肩に突き刺さっている触手を掴んだ。

そして、触手に波紋を流しこみ、一気に引き抜く。

『Dujiijiiiii』

波紋はゾンビに伝わり、ゾンビは一瞬にして溶けて、茶色のネトネトした水溜まりになった。

「ううっ！」

体内に入り込もうとしていた触手を、無理矢理引き抜かれた。朋子は必死に歯をくいしばり、激痛に耐えた。

「朋子よオ……この借りは忘れねエぞ」

無茶しやがって……J O J Oが優しく朋子の肩に触れ、波紋によって傷口を止血した。

J O J Oは振り返ると、オーテップを睨みつけた。

「オイ、このクソビッチ……テメエただじゃおかねーぞ」

オーテップは、落ち着き払った仕草で、手首にバンドで止めていた『注射器』を取り出した。

『注射針』を自分のコメカミに差し、何かの薬剤を、注入していく。

「フッフッフ……さすがジョセフ・ジョースターツ！老いたとはいえ、あの究極生命体を倒した男……アンタには私の本当の姿を見せてあげるわ……ワタシの……プロト・バオーの姿を……」

オーテップが注射器を投げ捨てた。髪をかき上げ、笑う。

タラリ……と、ほんのちよっぴり、注射液がほほを伝って流れる。

笑い声はどんどんヒステリックになって行き……

プシュツツツ！

オーテップの肌が、ボコボコと膨れ上がった。

その青白かった肌は、血色を取り戻した。テラテラと照る、ピンク色に変色する。

肌の下で膨れ上がった血管が、ニルンと浮き上がる。

そして血管が膨れ上がり、オーテップは全身から赤黒い血を噴き出

したツツ!

ドガッ

噴き出した血がオーテップの肌に触れ、固まっていく。固まった血は青白く変色して行く。

頭部から、うねうねとネズミの尻尾を思わせる触手が伸び、髪の毛を巻き込んで固まっていく。

こめかみがパツクリと割れ、その空間から太く、黒い触毛が顔を出した。

「嘘でしょ……うわあああつ……」

朋子が悲鳴をあげた。

恐怖のあまり、手にしていた鉄パイプを取り落しかけ、あわてて握り直す。

そこには、異形の怪物が立っていた。

「ママママ……ンムアウツ!ンムアウツ!」

怪物が、聞きづらいしわがれ声で、唸った。

その怪物はJ O J Oがこれまでであった怪物、屍生人、吸血鬼、夜の一族のどれも異なる生命力に満ちていた。生臭いまでの生命力と、プレデターとしての圧倒的な殺意と歪んだ本能に支配された人獣、それが目の前にいる『レディ・プロト・バオー』であった。

「M u x u u u u …… N N m x t u u ! N m a a U o a W o o o x t u !!!」

生臭く、荒々しく、だがどこことなく淫靡な様子で、プロト・バオーは吠え声を上げた。

「うおおおっ!」

プロト・バオーは驚くべき速度で跳躍ッ

J O J Oに飛び蹴りを食らわすッ!

J O J Oはかろうじて蹴りをかわした。

攻撃をかわす動きを繋いで、バックハンドブローを、プロト・バオーに放つ!

「ぐおおおおおおっ」

だが、バツクハンドブローを放ったJ〇J〇の左拳に、プロト・バオーの髪の毛が、触手のように巻き付いていく。

巻き付いた髪の毛の先端が、J〇J〇の左拳を穿つッ！

「いってええええええええ」

J〇J〇は、髪の毛から手を引き抜くと、痛みのあまり二転、三転して転げまわった。

(朋子の奴、さつきはこんな痛みには耐えたのかよ)

ドゴオオオツ

そのJ〇J〇を見下ろし、プロト・バオーは、まるでフリーキックを蹴るような蹴りを何発も入れるッ！

「ゴッゴブウウウツ」

到底避けられない。J〇J〇は体を丸めて防御姿勢をとった。プロト・バオーの蹴りのダメージを少しでも弱めようとじっと耐える。

「まあむううっ！んんむうウツツ！」

プロト・バオーが満足気に蹴りをいれ続けるッ。

だがJ〇J〇は、プロト・バオーの攻撃タイミングを冷静にはかっ
ていた。

タイミングよく体を伸ばすと、プロト・バオーのサッカーボールキックの威力を利用して、宙に飛び上がるッ

「調子に乗りやがって、喰らえッ、この野郎ッ！」

J〇J〇は空中で体をひねり、回し蹴りをプロト・バオーに放った。

J〇J〇の放った渾身の回し蹴りは、プロト・バオーにさらっとかわされる。

まるで野生の狼のような、俊敏な動きだ。

ブン

着地したJ〇J〇を、プロト・バオーのタックルが襲うッ！

「うおおおおおおッ」

J〇J〇はとつさに身を沈め、プロト・バオーのタックルをさばき、柔道の巴投げの要領で放り投げた。

「ゼーゼーゼー……」

(くっそお、きついぜ。母さんは、50歳の時にカーズの野郎と正面か

ら渡り合ったが、ワシはもう60を超えてるんだぜ……認めたくはないが、これ以上正面からやりあうのは、キツイゼ)

「ハッ！うおおおッ」

バシユッ！

プロト・バオーが投げた小石が、まるで弾丸のようにJ〇J〇を襲うッ！

何とか初段をかわしたJ〇J〇は、上着を脱ぐとそこに波紋を流した。

上着を波紋によって硬化させ、プロト・バオーの放つ次段を、何とかその上着に受け止める。

プロト・バオーは、続いて回し蹴りを放つッ！

その蹴りも、ブロックするッ

だぎJ〇J〇は、蹴りの威力に、思わず膝と右腕を地面についてしまった。

(しまった、これじゃあとつきに動けんッ)

プロト・バオーは、とどめとばかりに両腕を大きくふりあげ……

「ンムアウッ！ンムアウッ！」

プロト・バオーの両手……その手から、忘れることは出来ないあの敵、『カーズ』の輝彩滑刀の様な鋭利な刀が現れるッ

「ンムアウッ！ンムアウッ！」

だが、プロト・バオーはJ〇J〇ではなく、朋子に駆け寄る。負傷し、満足に動けない朋子に向かって、その刃をふるうッ。

「何よッ！私をなめるんじゃないわよッ！」

朋子は、鉄パイプを上段にかまえ、プロト・バオーを向かい撃とうとするッ！

「馬ッ鹿野郎ッッ」

J〇J〇が叫んだ。

朋子の鉄パイプが、プロト・バオーに振り下ろされる。

だがプロト・バオーの刃のほうが、朋子の鉄パイプより、はるかに早い……

その時……

ガクツ

朋子に肉薄していたプロト・バオーが突然体勢を崩した。

プロト・バオーの足には、黒いひもが結び付けられていた。

それは、J O J O が巴投げを放った時に、抜け目なくプロト・バオーの足に結びつけておいたものだ。

J O J O はその紐に波紋を込め、渾身の力で引つ張るツツ

「んんがあツツ！」

足が後方に引つ張られ、プロト・バオーの体が後方に泳いだ。

だが体勢が崩れたまま、それでもプロト・バオーは『輝彩滑刀』の刀を朋子に振るうその手を止めないツ！

プロト・バオーのその一撃が、父良平の得意技、『下段からの刷り上げ』に重なる。

けいこ場で、試合会場で、何度も行つた父との稽古が、朋子の体を無意識に動かすツ。

「舐めるんじやあないわよツ」

朋子はとつさに鉄パイプで、輝彩滑刀の刀を叩き落とした。

輝彩滑刀は鉄パイプの先端を切り落とす！

……だが、刀の矛先はずれ、朋子の肌を皮膚一枚、切り裂くだけにとどまる。

朋子は怯まなかった。振り切った鉄パイプを掴む手首を返し、間髪入れずにプロト・バオーの頭部へ再び一撃を放つツ！

「ドラツツ！」

朋子の一撃は狙いあやまたず、プロト・バオーの額にあらわに露出している触毛をえぐった。

「ンムオオオ——ンツツ！」

プロト・バオーが、頭を抱えてよろめいた。

「キヤアアアツ」

どこかやられたのか、朋子も鉄パイプを放り出してしゃがみこんだ。

「おおおおお——ツ強ええ」

J O J O はゴクリと唾をのみ込んだ。

「だが、残念なことに致命傷じゃあないみて——だなあっ！後は任せな」

自信満々のJ O J Oが懐から取り出したものは……………

「ヨーヨーオ？アンタ何を考えてるのツツ」

朋子が驚いて、大きな声を上げた。

「おおおお——ツと、俺は大まじめだぜえ」

J O J Oはくるっと手首を一捻りさせた。

すでに巻き上げていた二つのヨーヨーを両手に持って、プロト・バオーに向かつて降り下ろすツツ！

「くらいいッ！必殺くウツツ！ヨーヨー・ムーブッ！」

「そんなの、通じるわけないじゃないツツ」

朋子の嘆きをよそに、自信満々のJ O J Oが放ったヨーヨーがプロト・バオーに飛ぶツツ。

「Nmooooooooon！」

プロト・バオーは、腕から輝彩滑刀の刃を出現させ、ヨーヨーを断ち切ろうとしたツ。

だが

スカッ

輝彩滑刀が宙を切った。

ヨーヨーが、波紋の力で空中に静止したのだ。

「はっ、かかったな」

J O J Oが目をキラキラさせ、右手にからげたヨーヨーの糸を拳で叩いた。

再びヨーヨーが動きだす。

「V b u a r u x t u u u！」

もう一度、プロト・バオーはヨーヨーを『切断』しようとした。だが、その瞬間ツ！

まるでフォークボールのように、ヨーヨーの進路がガクツと沈んだ。

先ほどJ O J Oがプロト・バオーの足に縛りつけていた紐を、ヨーヨーが巻き込んだのだツ

倒れたプロト・バオーの体がひび割れ、その皮膚の下から元の人間の姿が現れた。

「……やったか…それにしても、なんだ、こいつは。吸血鬼じゃあねーみてえだが？」

何者だ？ J O J O はヒョイツとオーテップの顔を覗き込んだ。

と、その時

バタツ

J O J O の背後で、何かが倒れる物音がした。

振り返ると、朋子がうつ伏せの姿勢で倒れていた。

「おいっ！ しっかりしろッッ」

ジヨジヨは、☒朋子を抱きかかえた。

「ゴボツ」

朋子が、黄色い胃液を吐いた。

「だ、大丈夫よ。ちよつと気持ちが悪くなっただけ」

「そんな……いや、そうだぜ、朋子ッ。すぐに良くなる」

J O J O は朋子の手を握った。その手は熱をもち、ガタガタと震えている。

J O J O の脳裏に、吸血鬼のエキスを注入されてゾンビに変わっていった哀れなもの達の姿が、浮かんだ。

「まつ、まさか……あのとき、ゾンビ野郎の『エキス』が、朋子の体にはいっちまったのかッ？」

「何言ってるのよ……大丈夫だって……」

気丈な言葉とは裏腹に、朋子の顔は青ざめていた。

ポタ……

鮮血が、床に落ちた。

「オ……オイ、朋子オ、お前」

「あつ……だっだから大丈夫だって……アハハハ」

朋子が、青ざめた顔で笑った。

腹部にあてている朋子の手が、血に染まっていた。

その時は鋭利すぎてわからなかったのだ。

先ほどのプロト・バオーが放った輝彩滑刃が、朋子の腹部を深く

切っていたことに……

「馬鹿言ってるんじゃないやあねエツ」

J〇J〇は一瞬狼狽した顔になり、だがすぐに決意をこめた顔で立ち上がった。

「……時間がねえ……朋子、オマエには『借り』があるぜ……今それを返すツ！ 伝えるぜ……波紋を通して俺の生命力をツ」

コオオオオオオ

「(究極深仙脈疾走) デイーパス・オーバードライブツツ！」

それは、100年前、彼の祖父：ジヨナサン・ジヨースターが彼の師匠：ウィル・〇・ツエペリから引き継いだ生命の力……

J〇J〇は自分のありつただけの生命力を絞り出し、その力を波紋に乗せた。

そして、そのパワーを惜しむことなく、東方朋子に注ぎ込んだ。



ガラガラ

遠くで サイレンが鳴っていた。

「……バイオ・ハザードが発生、15分後に基地を破壊します」

録音された音声と思われる無機質な声が、繰り返し研究所内に流れていた。

ガラガラ

やがて、どこかで天井が崩れる音が始まった。

ガアアンツ ドツ ゴオオンツツ

そして、研究所の一画から爆発音が響いた。

朋子が目覚めると、目の前にはJ〇J〇が倒れていた。

「……よッ……よお。目が覚めたか」

その声はすっかりしわがれている。

イヤ、声と髪だけではない。J〇J〇の顔には深いしわが刻み込まれ、肌には生気がなかった。髪も、すっかり白髪となっている。

「……傷は治した。後はこの揺れが収まったら、ここを脱出するだけ

だワイ」

「なっ……」

驚いた朋子が周囲の様子を確認すると、そこは巨大な岩やコンクリート片に囲まれた、小さな小部屋のような空間になっていた。た。

朋子が気絶している間に、J O J O が運び込んでくれたのだろう。へっ。ワシ等の勝ちだ。やっつけてやったぜ。

J O J O は、ニヤリと朋子に笑いかけた。

「アンタ……なにがあつたの？あの怪物にやられちゃった……の？」
「だから、勝ったっていったろうが。やられるものかよ。だけど、チョッピリ精力をつかいきつちまった……やりすぎて足腰がたたねー」

J O J O は、にやつと笑った。

「……おまえは次に、ちよつとッ！ふざけないでJ O J O ……と、言う」

「ちよつとッ！ふざけないでJ O J O ……はっ！」

朋子は、驚いて口をふさいだ。

「アンタ……ホントに一体どうしたの。その髪……」

朋子はJ O J O の頭をそつと抱え、優しく語りかけた。

「体が冷たいわよ、ジョセフ、アンタまさかッ」

「大丈夫、心配いらね——ぜ」

J O J O は、朋子にウィンクしてみせた。

「すぐ助けが来る」

その言葉を口にした直後、J O J O は気を失って倒れた。

「!?ねえ、ちよつと、しっかりしてよッッ」

ドガッ

ちよつと落盤が、朋子達のいる小部屋の入り口をふさいだ。

崩れた岩盤に囲まれた小さな空間は、光が一筋も入らない真の暗闇に包まれた。

真つ暗闇の中、朋子はJ O J O を抱えて途方に暮れた。

「ちよつと、J O J O ……ジョセフッ、アンタ体温がどんだん下がって

るじゃない……何とか体を温めてあげないと、死んでしまうわッ
どうしよう……」

朋子は、唇をかんだ。

8月22日：北上高地山中

J O J Oと朋子が行方不明になってから3日後、空条貞夫は二人の足取りを追って、山林の中を歩いていった。

崩れやすい腐葉土で覆われた急峻な山を、泥だらけになって、登っていく。

山には、立木、倒木、下草や蔓植物が密集しており、その移動は困難を極めた。

貞夫は、事前にジョセフから聞いていた情報を元に、北上山地の奥深くに入り込んでいた。

森に踏み込んでからもう5日はたつ、本当の目的地を敵に知らせないために、足取りを偽装する必要があったためだ。

だが、もうあまり時間も残っていない。

貞夫は、義父：ジョセフ・ジョースターのことは、あまり心配していなかった。なんとと言っても、彼は歴戦の猛者なのだ。

自分ごときが彼のことを心配するなど、おこがましい。

心配しているのは、自分に残された時間のことであった。

今はジョセフの相棒という触れ込みで、潜入していた波紋の一族：ジン・チャンが、『ジョセフが姿を消した場所』を偽装し、敵の目を別の場所にひきつけている。

この隙について、貞夫が探索を行っているのだが、チャンができる時間稼ぎも、せいぜい後数日、と言うところだろう。

それまでに探索を終えねば、DRESSはまたすべての証拠を消去し、深く地に潜ってしまう事は目に見えていた。

そうなれば、再び奴らのしつぽを掴むチャンスを得ることは、難しいであろう。

政府の上層にもDRESSの関係者が存在している。だが、この捜

索を終えることができれば、待ち焦がれていた証拠が得られるであろう。

貞夫はそう確信していた。

この証拠を得られれば、貞夫が何年もかけて綿密に内偵を進めている成果が実を結ぶ。そうすれば、日本に潜む闇、DRESSの影響を（公的には）一掃出来るはずなのだ。

だが、それはもう少し先のこと、今はまだ、がまんするときだ。

（細心の注意が必要だ。DRESSはまだ侮れない、醜いファシストどもの最後の残り香だが力を持っている……）

貞夫自らが動かず、義父に探索を依頼したのも、政府の裏切り者に情報が漏れないようにする為であった。

空条貞夫は、世界的に知られるジャズ・ミュージシャンとしての表の顔の他に、公安委員会のエージェントとしての裏の顔を持っていた。

聴く人誰もが深く引き込まれる、素晴らしいサククスを吹く男。

だが同時に、日本ではほんの数人しか許されていない、国際的なマードライセンスを持つ公安委員会のトップ・シークレット・エージェントでもあった。

『牙』、『黒き天使達』と並び称される日本の力の一つ、それが空条貞夫であった。



「DRESS……まさかこんなところに基地があったとはね……良くも見つけ出せたものだ。さすが、お義父さん……と言うところか」

ジョセフがくれた情報通りに探索を進めたおかげで、さほど時間もかけずに貞夫は、人知れない溪谷に崩れかけたお堂を発見することができた。

お堂の床を探ると、崩れかかった手掘りの洞窟があった。

その洞窟に入り込み、らにその奥に隠れる研究所に潜入しようとした貞夫は、一人の少年に行く手を遮られていた。

洞窟をこえて到達した『リノニウムで床が覆われた小さな広間』

「……………」

「怪物とは、御愛想だな」

大士の皮膚がひび割れ、崩れた。

崩れた皮膚の裏から、カサカサに乾ききったシワだらけの肌が顔を出した。

「この体はいらん、もうポンコツだから……」

大士は、舌打ちして露出した肌に軟膏を塗り、顔全体をおおうように包帯をまいていく。

「でも、お前が来てくれてうれしい。ワシの治療には、その石が必要だったのじゃ……お前の持つ、イヤ……赤石の持つ、『生命のパワー』……がな」

君のお義父さんをここにおびき寄せれば、君も来てくれると思っていたよ。

小暮が言った。

さあ、それを渡しておくれよ。

小暮が両手を出した。

その背後に、揺らりと『何か』が出現した。

ザシュツッ！

その『何か』に向かって、貞夫の居合切りが走るッ

だが、小暮は……小暮のスタンドは、貞夫の刀を防いだ。

「パワースレイヴツッ！」

小暮の叫び声とともに出現したスタンド。それは、ピンク色のテラテラと光るつぎはぎだらけの肌を持ち、ブクブクと肥え太った醜い外見をした、巨人であった。

パワースレイヴが、攻撃態勢をとった。

その拳から、圧倒的なパワーを感じるッ

ゴアツッ！

超高速の剛拳がうなる！！

パワースレイヴの攻撃を、貞夫は落ち着いてすりぬけた。

ベキイツ

かわした拳が周囲の木々を、岩を、土塊をぶっ飛ばし、クレーター

を作るツッ

「ほう……貴様……『見えている』のか？」

小暮が、睨み付けた。

「それとも、ただ殺気に反応しただけか？」

⚡ ⚡ ⚡ ⚡ ⚡ ⚡ ⚡ ⚡

「……………」

貞夫は黙っている。

そして八双——刀を左側に持って斜めに右肩に切っ先を傾ける
刀の持ち方——に構えて、ジリジリと小暮によっていった。

小暮が、フンと鼻を鳴らした。

「まあいい、我がスタンドの、この圧倒的なパワーに対抗出来るものな
らやってみるがいいッ」

再び、パワースレイブがラッシュをかけるツッ！

ザサユツ

パワースレイブの攻撃をかわしざま、貞夫はもう一度居合い抜きを
放つ！

その斬撃は、今度は命中した。

ボトリ……と小暮の体の一部が、落ちる。

左の膝下だ。

「そうか貞夫ッ、やはり貴様『見えている』のだな？」

小暮は、切断された左膝を抱えて、笑った。

不思議なことに、その傷口からはほとんど血が流れていなかった。

「貴様、ただの剣術使いかと思ったが、スタンド使い……と言うわけか
……フム……では、貴様の能力が未知な今、迂闊に近づくのはリスク
が大きいか……」

小暮は、片足でピョンピョン跳ねながら後ろに下がっていく。

「待てツッ」

貞夫がその後を追いかける。

だが貞夫が小暮に追い付く前に、パワースレイブが二人の間に立っ
ていた支柱を、へし折った。

ベキツッ

すると、支柱に支えられていた大量の土砂が、一気に崩れた。
ゴボツ、ゴボツ

貞夫は土砂に巻き込まれないように、とつさに背後に飛びのいた。
降り注ぐ土砂が、土埃を立ち込め、周囲が見えなくなった。
やがて、立ち込める土埃が止む。

小暮の姿は、どこにもみえなかった。

「クソツ逃がした……千載一遇のチャンスを」

貞夫は、いらただしげに首を振った。

「イヤ……だが、今はあんな奴のことなどどうでもいい、お義父さんを
探さない」と

貞夫は気を取り直すと、刀を地面に突き刺した。

床を、切り抜くツ

ボゴツ

床下の穴をのぞくと、そこには暗黒が広がっていた。

下のフロアの様子は、見えない。

手に持っていた刀を鞘に納め、貞夫は、階下に広がる暗黒の空間に
身を躍らせた。その所作には、一切の躊躇が見られなかった。

階下の空間は、真の闇であった。

飛び降りた貞夫は、身を低くして、敵の攻撃に備えた。

暗闇の中、何かおぞましい生き物が蠢いている感覚があったのだ。

ふっ……と空気が動く。

同時に、空条貞夫が刀の鯉口を切った。

ズバアアッ！

「H:Jiiiiiiii」

「Tejerriii?Tekeerrii!」

闇の向こう側にいた『何者か』が、悲鳴を上げて倒れた。

手ごたえあり……

貞夫は、振りぬいた刀を素早く鞘に収めた。

収めた刀の柄に、再び手をかける。

しばらくそのまま油断なく構え、いつでも抜刀できるようにする。

『何者か』の気配を探りつつける。

やがて、その『何者か』が確実に息絶えたことを確認した後で、貞夫はゆっくりと構えを解いた。

ライターに火をともし。山を登っているときに作った手製のたいまつに、その火を移す。

周囲を照らすと、足元には貞夫を襲った怪物が、倒れていた。

体中がブクブクに膨れた、異形の怪物だ。

完全に胴体が両断されているのに、まだ生きている。

怪物は、目をギラギラと輝かせ、這いつくばった姿勢で、貞夫に向かってズリズリと進んでくる。

貞夫は、たいまつを口にくわえ、刀の柄に手をやった。

次の瞬間、怪物はみじん切りにされ、今度こそ息絶えた。

「あまり、ゆっくりしてられないな」

怪物を処理した貞夫は、懐から『赤い石が埋め込まれたペンダント』を取り出した。その石は、エイジャと呼ばれる、波紋の一族の至宝だ。

そのペンダントに意識を集中させる……エイジャの赤石を持ったままぐるりと回転すると、その方角によって、赤石が熱を持ったような感覚がある向きがあった。赤石が、J O J O が放っている特殊な生命の『波紋』を感じ、反応しているのだ。

貞夫は、赤石の反応がでる方角を探して、暗闇の中を歩きだした。

「ここかな？」

貞夫は、赤石を片手に時折襲い掛かってくる怪物を切り伏せつつ、暗闇をさまよった。

小一時間ほどそうして暗闇の中を探索しただろうか。やがて貞夫は、崩れた岩壁の前で足を止めた。

『波紋の反応』は、その岩壁の向こうから来るようであった。貞夫は、再び刀の柄に手をやる……

ズジャアッ！

貞夫が刀を振ると、岩壁が切り落とされた。その裏には、すっかり衰弱し、意識を失っている彼の義父：ジョセフ・ジョースターと、ジョセフを優しく抱きしめる若い女性が座っていた。

「あ……アンタは？」

すっかり弱り切った若い女性が、貞夫に向かって弱弱しく問いただした。

「ああ……ボクは公安のモノだよ」

貞夫が、微笑みを浮かべた。

「君と、ジョセフ・ジョースター氏を助けに来たものです。もう大丈夫ですよ」

貞夫はゆっくり近づくと、その若い女性にタオルを放った。

今日にしているとある『光景』に少々困惑しながら、貞夫はJ O J O に近づいていく。

「……私は無事よ……でも、J O J O の意識が……」

若い女性が、すすり泣いた。

その時、J O J O が目を覚ました。

「サダアツ！ テメエ遅えぞ、馬鹿野郎ツ」

ぐったりとしていたJ O J O がギョロリと目を開け、貞夫に悪態をついた。

「お義父さん、下調べだけの約束だったじゃあないですか」

貞夫が言った。

よかった……抑えきれない笑みが、その唇に浮かぶ。

「危ないことはしないと、おっしゃっていたのに」

「フン……お前のような若造には任せておけんワ」

「……イヤ、さすが義父様です」

感服しています。貞夫は頭を下げた。

「おかげで助かりました。私一人ではこうはできませんでした」

「クツ……お前は俺をナメているのか？……まあいい……サダよ、お前に頼みごとをするのは忌々しいが……後始末はまかせたぞ」

そう言うと、J O J O はまた気を失った。

空条貞夫の孤闘 — 1986 — (NEW!)

1985年7月某日：アメリカ ルイジアナ：ラファイエット

「……………ああ……………すまん……………急に予定の無かった追加公演が決まってね……………スポンサーの都合で、どうしても断れない……………つまり、まだ帰れないんだ」

空条貞夫は、電話越しに謝罪した。

……………電話越しに沈黙が漂う……………

電話の向こう側には、息子がいた。

『……………そうか、仕方ない……………俺はいいさ……………でもオフクロには、直接あやまつといたほうがいい……………言っておくけど、おふくろ、ずいぶん前から楽しみにしていたんだぜ……………父さんが誕生日に帰ってきてくれるのを』

やがて、沈黙を破り、息子の承太郎が答えた。もう母親の誕生日に帰ってこないことは、予想していたのだろう。いたって冷静な口調だ。

昔はもう少し寂しがってくれたのに……………と寂しく思いつつも、息子が素直に話を聞いてくれたことに、確かにほっとしていた。

だがホツとした自分に、罪の意識も感じている。

「そうだな……………じゃあ、電話を切るよ……………またな……………」

実家への電話をきると、貞夫は安っぽいモーターのベッドに腰をおとした。

タバコの煙で赤茶けたモーターの壁をぼうっと眺め、貞夫はしばらく物思いにふけた。

義父：ジョセフ・ジョースターと共にドレスの日本支部の一つを壊滅させてから、3年が経っていた。

ドレス本体の所在を示す手がかりは、まだ無い。

手を尽くしてはいたが、いまだに貞夫はDressの影を見つづれずにいる。

貞夫は冷蔵庫に行き、クアーズの缶を取りだした。ベッドに腰掛け、タブをこじあけると、一息に飲み干す。良く冷えたクアーズの

ど越しに、さきくれだった気持ちがおほんの少しだけ、おさまっていく。ベッドに腰掛け、缶ビールを片手にぼうつととしていると、再び電話がなった。

妻からか……淡い期待をいだきながら受話器を取る。

違った。電話から聞こえたのは、しわがれた声だ。義父・ジョセフ・ジョースターの声だ。

義父に依頼していた、調査結果が出たのだ。

「お義父さん、病気の具合はいかがですか」

尋ねると、いつも通りフンと鼻をならす音が聴こえた。だが、少し弱々しい。

義父は一年前に原因不明の高熱に倒れ、復帰したばかりであった。……一年前、大西洋に沈んだ沈没船から、『とあるモノ』が引き上げられたという噂をきき、調査に行つてすぐに、倒れたのだ。

『サダよ……貴様に父親呼びわりされる筋合いはないワ』

グス……電話越しに、義父が鼻をすする音が聞こえた。

義父の憎まれ口に取り合わず、貞夫は、続く言葉を待った。

果たしてジョセフは、この電話をかけたそもその目的である、最新の『奇妙な』情報を話し始めた。ジョセフは、自分のネットワークを利用して、『奇妙な事件』が起こっていないかどうか、調べる。貞夫は、ジョセフの情報を調査し、DRESSの存在を探る糸口がないかどうか、調べる。

それが、演奏旅行とは別の、今回の訪米の裏の目的であった。

ノートを取り出して、ジョセフの話しの要点をまとめていた貞夫の指が、止まった。

ジョセフ曰く、ここから少しだけ離れた小さな町に、『幽霊屋敷』があるのだという。

「幽霊屋敷？」

興味をひかれ、聞き返した。

『そうじゃ……フム……そうじゃのお。ここは、調べてみる価値があると思うぞ、なぜならのお……』あれが運び込まれた形跡があるからじゃ……ワシラの探しておる”あれ”がお……』義父が、のん

びりと言った。

「あれ？」

『ああ……』あれが、『ドレスの秘密兵器』が搬送された形跡があるんじゃない』

ジョセフは説明をつづけた。

その話を聞きながら、貞夫は手にしたノートに、『幽霊屋敷を調査、バオー搬入？』と赤字で書き込んだ。

その建物は、農場とはいえ、大邸宅であった。イタリア風ビクトリア様式とも呼ばれる、アメリカの伝統的な形式の邸宅だ。その建物の中心には、ゴテゴテと装飾の施された巨大な時計塔が立っている。その時計塔の両脇に、二つの三階建ての建物が伸びている。

中庭には、立ち枯れ果てた木が一本、残っていた。

「ここか？ジョースターさんがおっしゃっていた『幽霊屋敷』は？」

エジプト人の若者が、尋ねた。

その若者は、頭髪をいくつもの筒状にまとめ、ゆつたりとしたケープのような服を着ていた。街中なら明らかに場違いなその格好は、しかし荒野の真っ只中に建つ古い農場の前では、似合っていた。

建物を見つめる二人の間を、風が吹き抜けた。風は埃や枯れ葉を巻き上げ、『幽霊屋敷』の庭を通りすぎていく。

「ぎやうううっ」

若者がさげたバスケットの中から、不機嫌そうなり声が聴こえた。

若者はあわててふところからガム——コーヒー味なのだそうだし——を取り出すと、バスケットに押し込んだ。

すぐさま、クチャクチャとガムを噛む音、興奮しているらしき鼻息が、バスケットの中から聞こえてきた。

もう放してやったらどうだ？

貞夫の提案に、その若者：モハメド・アヴドウルは首をふった。

「サダオ、それは出来ない。イギーは手におえないんだ」

貞夫は、目をむいた。ジョセフ・ジョースターが自分の代わりによ

こしたこのエジプト人の実力は、良くわかっていた。

そのアヴドウルでさえ手に余るとは……少し信じられない気持ちでバスケットをマジマジと見てみると、そのカゴのすきまから、何か『砂』のようなものが、こぼれたように思った。

「サダ、潜入の前に、偵察に行くべきだ」

二人の背後に立っていたバックアップ隊のリーダー、ルデイ・バロウズが言った。

貞夫達のバックアップチームとして、日米合同の超極秘チームがこの潜入作戦に同行していた。

バックアップチームは4名からなっている。

リーダーのルデイとボビイ・バートンは、アメリカのFBIから、才堂 雅春は日本の警視庁特科中隊（SAP）から、そしてジン・チャンはSW財団からの出向者だ。

第二次世界大戦の闇をいまだに引きずる組織：DRESS。貞夫達は、DRESSの動きを、もう何年も追いかけていたのであった。

「もう少し情報を集めたほうがいい……ここは、慎重に行こうぜ」

旧友、ジン・チャンが貞夫の肩をたたいた。ジン・チャンもバックアップチームの一人として、この探索に参加してくれていたのだ。

「わかった。頼むぜ……」

貞夫はうなずいた。

貞夫の許可を得て、バックアップ・チームが少しづつ前方に展開をはじめた。

姿勢を低く、地に伏せるような格好で、ジリジリ進み、手にした観測機器を建物に向ける。

貞夫も、双眼鏡を手にとった。ゆっくりと『幽霊屋敷』の周囲を観察する。

『幽霊屋敷』の回りは高い赤茶色のレンガ塀にとりかこまれている。周囲には隣接する建物もない。

窓はくすみ、中のようすは見えない。

ルデイが片手をあげた。ルデイはバックアップ・チームをその場に残したまま、ジリジリと貞夫達の元へ戻ってきた。

「……確かに誰かに使われているな。サーモスコープで探ると、誰かが窓の近くに立っているのが確認できた」

ルデイの報告に、貞夫は眉をしかめた。覚悟してはいたが、やはり『敵』は自分達がここにいることに気がついている……という事だ。

「……無線の類いは使っていない。だが、『放射線』が検出された。人体には影響ないレベルだが、気を付けたほうがいいダロウ……」

ルデイはそう言うと、時計塔の上を指差した。

「放射線の発生源は、ちょうどあの時計の裏だ」

「わかった……潜入するのは今晚10時ではどうかな？夜に紛れて、近づこう」

アヴドウルの提案に、貞夫は首をふった。

「いや……時間を置けば敵に対策をとられる……今、乗り込もう」

「……そうか……そうだな。わかった」

貞夫の言葉に、アヴドウルが頷いた。その顔が、不意に歪む。

「サダメッ！気をつけろッ」

ボウツ

周囲の温度が高くなった。

アヴドウルの『能力』 スタンドだ。スタンドにより、炎が産み出されたのだ。

「気を付けろッ！敵だッ………なにか『影のようなもの』が、屋敷から延びてきたぞ」

アヴドウルはそう言いながら、バスケットのふたを開いた。

バスケットの中からは、ブサカワ……なボストンテリアが1頭、ぬつと顔を出した。不機嫌そうな様子だ。

アヴドウルが連れてきたのは、犬であった。

犬は、ガルルとアヴドウルに対して唸った。見るからに機嫌が悪そうだ。犬は身を縮め、アヴドウルの背中に襲いかかるそぶりを見せた。だが、不意にその姿勢を解いた。

犬はかわりに、そうつとアヴドウルの背後に隠れる。

「なん………だ？」

その犬の『奇妙』な動きにつられて、貞夫は農場の方を見た。

コ” コ” コ” コ” コ” コ” コ” コ” コ” コ”

いつの間にか、農場：幽霊屋敷の入口に、一人の男が立っていたのだ。

男は、ポケットに両手をつまみ、ただ突っ立っていた。小柄な男。その男の『影』が、動いた。

『影』が、伸びる。

伸びた『影』の目が、無気味に光る。

ジユギユウ——ン……

『影』が、バックアップチームに向かって伸びていく。まるで、蛇が体をくねらせていいるように、くねくねと動く。

「!?何かマズイッ……逃げろッ」

アヴドウルが、叫ぶ。

「お前たち、下がれッ」

ルデイが叫んだ。

その叫び声をスイッチにして、ジン・チャン達、前方に展開していたバックアップチームの面々が、あわてて動き出した。

グニユリ……

だが三人の動きよりも一瞬早く、『影』が伸び、偵察に出ていた三人に触れた。

「!?」

「!くらえイッ」

次の瞬間、アヴドウルが叫ぶと、その前方に炎が出現した。

エジプト十字架の姿をしたその炎は、『影』に向かって轟音をあげながら、飛んでいく!

『影』はグニヤリとその進路を曲げ、炎をよけた。今度は貞夫達に向かって、『影』が延びていく。

『影』が一瞬、アヴドウル達に、そしてつぎに貞夫に、触れた。

ガタリッ

『影』に触れた貞夫の視界が、揺れる。

地面につきだしている石に躓いたかのように、視線が下がり、地面

が近くに見える。

「マジシャンズ・レッドツ！」

「ガルルルツ！」

アヴドウルと、ボストンテリアが叫んだ。

すると何処からともなく『砂』が現れた。『砂』が近くの小石を飲み込む。そして、まるで大砲のような形に変化した。

砲台のさきから、小石が『影』の先の男に向かって、飛んでいく。

おなじく『炎』が現れ、『影』を焼き払うツ

二人が、それぞれの持つ『能力：スタンド』で攻撃をかけたのだ。

だが、その攻撃に移る直前に、スタンドの像が一瞬歪む。

そして……

『炎』は、急速にその範囲を狭めた。

『小石』は、まるで子供がパチンコで飛ばしたように、勢いを失い、放物線を描いて飛んでいった。

ベシツ

ジュツ

『小石』も、『炎』も、その本来の威力とは程遠いささやかな力で、目標を攻撃することとなった。

だが、そのささやかな攻撃でも十分な威力があったようだ。

「……ヒイイイツ」

『砂』に攻撃された男は、二人と一匹に背を向けた。悲鳴を上げて『幽霊屋敷』に飛び込み、ドアを閉めた。

「逃がすかッ」

悲鳴を上げる男を追って、貞夫も走り出した。

だがすぐに、足が絡まる。貞夫はもんどりうって、勢いよく地面に頭を打ち付けた。

隣で走り出していたアヴドウルも、やはりすつ転んでいる。

いや……

ト ト ト ト ト ト ト ト ト ト ト

「……アヴドウル……お、おまえ……」

「サダ……いったいどうしたんだ、お前……その姿は」

「キャウン」

コ” コ” コ” コ” コ” コ” コ” コ” コ” コ”

二人は……二人と、一匹は顔を見合わせた……

貞夫の目に映ったのは、見慣れていたアヴドウルの顔ではなかった。そこに見えているのは……まだ7歳ほどの、あどけない少年の顔であった。少年は、ついさつきまでアヴドウルが着ていたゆつたりとしたケープに包まれている……

アヴドウルの目に映ったのも、やはり10歳ほどの、ティーンエイジャーになる手前の日本の少年だった。その少年は、切れ長の鋭い眼をしており、貞夫が持っていたのと同じような刀を、大事そうに抱えていた。

そして、二人のすぐそばには、生意気そうな、生後半年ほどの子犬がきやんきやんと吠えている……

その背後には、ルデイに似た金髪でにきびだらけの少年が、怯えてしやがみこんでいる……

「クウン……」

子犬が、鼻を鳴らした。

「お……お前、もしかしてイギー……なのか？」

あどけない子犬に、アヴドウルが戸惑った。

オズオズと子犬に向かって手を伸ばすと、イギーは甘えて手に鼻先をこすりつけた。まるで猫のように、今にもゴロゴロと喉を鳴らしそうだ。

イギーは、あどけない子犬になってしまったのだ。

「コイツ……コイツが『甘えてくる』だとお……」

アヴドウルは、気味が悪そうに、そう言った。

一体……自分たちはどうなってしまったというのだ。

貞夫は、子供に戻ってしまった自分たちに、唾然とした。

「シクシク……ウエ——ン」

「……サダ……いったいこれは？」

「ボク、どうしてここにいるの？おかあさんは、ドコ？」

子供に戻ったのは、バックアップ・チームもであった。

いや、ルデイを除く彼らの状態は、貞夫達よりも、深刻であった。貞夫達の現在の年齢が10才前後だとすると、ジン・チャン達の年齢は、6才程度に見える……………

影に接触していた時間が、長かったからであろうか。肉体だけでなく精神まで幼くされたバックアップチームの面々は、なすすべもなく泣くばかりであった。

「ウワツ」

「助けてッ！」

と、不意にバックアップ・チームの面々が、地面に引き倒された。その体には、いつの間にかフックつきのロープが絡み付いている。ジャリジャリジャリジャリッ！

ロープが引っ張られ、バックアップ・チームの面々が『幽霊屋敷』に引っ張られていく。

引っ張られた三人が、必死に手を伸ばす。

だが、その手に届かない……………

「ウワァ——ッ助けて、おにいちゃんたちッ」

ジン・チャンの声だ。

「ジンッ！」

ジン・チャン達を追いかけようとした貞夫は、たたらを踏んで立ち止った。

貞夫たちに向かって、幽霊屋敷から何かが跳んできたのだ。

それは、今ジン・チャン達をとらえているフックと、同じものだッ

「くっ」

貞夫は、フックを避け様、居合い斬りを放つ！

ザッ

貞夫に裁ち切られたフックは地面に落ち、『まるで乾いた植木鉢に水をやったかのように』、消滅した。

だがその間に、バックアップ・チームの者たちが『幽霊屋敷』に引きずり込まれる……………

「しまった……………」

アヴドウルが下を向いた。

とにかく、このままボーっとしていることは出来ない。彼らを助けなければ。

「追うぞ、アヴドウル、イギー……ルデイは、後方に1km下がって待機していてくれ」

貞夫が言った。

ルデイは、確かに戦士として非凡な能力を持っていた。だが、あくまで普通の人間だ。

子供になってしまった今、足手まといとなる可能性の高いルデイは、連れていくことはできない。

「……わかった、気をつけろよ」

ルデイがうなづく。

「お前もな……俺たちが侵入してから、一時間たって何も起こらなかったら……町まで戻って、応援を呼んでくれ」

「うん……」

ルデイがうなづいた。

「やってみるよ……」

「さだ、いこうッ！」

アヴドウルが言い、ダボダボの服を切り詰めて走り出した。

子犬も……イギーも、二人の後を追ってよちよちと歩き出す。

二人と一匹は『影』を操る男を追いかけて、『幽霊屋敷』に入った。

バタン

建物に入った瞬間、玄関のドアが勝手にしまった。

同時に、ドアの外からブルルルンと言う、車のエンジン音が聞こえた。

ドルルルル……

そのエンジン音は、どんどん遠ざかっていき、やがて、何も聞こえなくなった。

しまった。逃げられたのか……

貞夫は頭をかきむしった。

車で逃げたのは、あの、『影』を操る男に違いなかった。

「チツ」

貞夫とアヴドウルはドアに取り付き、全力で引つ張った。だが、金属製のこのドアは、外から門をかけられたのか、びくともしなかつた。

「マジシャンズレッドツツ」

アヴドウルが叫んだ。

するとアヴドウルの横に、鳥の頭を持った怪人……の子供のような像が、現れた。その怪人は、高く両手を掲げ、ドアに手を触れた。その手から、チヨロチヨロとした炎が現れ、そして消えた。

怪人は、アヴドウル有能力、炎を操るパワーを持ったビジョン（幽波紋）だ。

ジョセフ曰く、それはスタンドと言う、一種の超能力なのだそうだ。「クソツ……だめだ、ドアが焼き切れない……マジシャンズレッドの力が……弱まっているみたいだ」

アヴドウルは、悔しそうにドアを蹴とばした。

「……」

刀なら切れるだろうか……貞夫は、手にした刀に手をやった。だが、脱出より先に、やらなくてはならないことがある。まずは、屋敷に引き込まれたバックアップ・チームの面々を、助けなければ……

「……ぎやうううっ」

イギーが、唸った。

その視線の先を見ると、血痕が点々とたれ、ロビーの横手にある扉に、伝わっているのが見えた。

アヴドウルは貞夫にめくぱせをして、ゆっくりとそのドアに近づき、開けた。

ドアの奥は渡り廊下になっており、血痕はその廊下を渡って、突き当たりのドアまで延びていた。

「キュワワワワ……」

イギーが怯えたように唸り、アヴドウルの肩に乗った。

「ハハハハ……お前が俺を頼るなんてな……もしかしたら、子犬のうちは、可愛い性格だったのか？」

「……なんだお前は……お前が、ボビイをやったのかッ」

貞夫の詰問に答えるかのように、小男は巨大な鋏をシヤキシヤキと打ち鳴らす。

『ウイキイキイキイキイツッ』

小男は、涎を吐き垂らしながら、二人と一匹に向かって駆け出したッ！

「うっ……敵っ」

アヴドウルが、吠える。

「ギャワワワワッ」

イギーが、小男に向かってスタンド；ザ・フルを放つッ！

小柄な小男に向かって、子猫ほどの小さなスタンドが、襲い掛かるッ

イギーのスタンドも、小さくなっているのだ。

ジャキッ

小男：鋏を持つシザーマンが、ザ・フルに向かって鋏をふるう。

ザシユッ

だが、鋏は何もダメージを与えることなく、ザ・フルの砂の体をすり抜けた。

「焼き尽くしてやるぜッ！マジシャンズレッドオオッ」

アヴドウルが叫ぶ。同時に、スタンド：マジシャンズレッドが出現し、炎を生み出す。

だが、生み出された炎は、焼き尽くすというには、ささやかすぎる大きさであった。

ほんの小さな炎が、シザーマンの右腕に触れる。

「Z t y a a a a a a a x t u !」

だが、シザーマンは絶叫した。

ささやかな炎が、それでもシザーマンの右腕を燃やしたのだ。

右手を失ったシザーマンが、わずかにひるむ。

すかさず、貞夫が駆けるッ

カチャッ

貞夫は、抱えた刀を、引き抜クッ。

シザーマンを、横なぎに一刀両断にするうッ
その瞬間、シザーマンの姿が、掻き消えた。

「……これは？」

「スタンド……ということかな」

アヴドウルが首をかしげた。

「つまり、あの化け物は……誰か本体が操っているってことかな？」

「ガールルルッ」

「そうか、相手がナチュラルな化け物よりも、スタンドだってえのなら、少しは気分がまし……か」

貞夫は鼻を鳴らした。

「とにかく、この屋敷から脱出して、あの『影』野郎をぶちのめさなきゃあならん」

「……でも、この幽霊屋敷は、僕らを掴まえるための罠だったってことが分かったね……だから、十分に警戒しながら探っていこうね」

アヴドウルが言った。

「ガールルッ」

イギーが、不満そうにうなった。

二人も、そしてイギーも、少しづつ、話し方が、その精神が、見た目相応になりつつある……

(まさか……な……)

貞夫は、嫌な予感を振り払い、幽霊屋敷の探索を、始めた。



一時間後：

二人と一匹は、すっかりくたびれていた。

スタミナも子供に戻ったらしく、普段ならなんてことない移動が、体に響いていた。

探索は、あまりはかどっていなかった。

この幽霊屋敷には、部屋がいくつあるのか？

大邸宅なのはわかってはいたが、ここまでとは思わなかった。

いくつかもの部屋を探索し、だが何も手がかりが無いままに次の部屋に移っていく。

そんなことの、繰り返しであった。

たいていの部屋には、ほとんど何の家具も、装飾もなかった。ある部屋には、ベッドと小机、そして空っぽの本棚があった。

ある部屋には、椅子が一つ、ポツンと置いてあるだけであった。

そして、今開けた部屋には、一面に鳥の死体が散らばっていた。

「うっ……」

アヴドウルが顔をしかめる。

「サダア……気持ち悪いよ……」

アヴドウルは、外見相応の子供のように、貞夫の手をぎゅつと握った。

子供っぽいその言葉に、貞夫はぞつとした。まさか、ついに精神まで子供に戻ってしまったのか……もしかして、自分も……

「ギャルツ」

イギーが、鼻をクンクンと鳴らした。

砂が出現し、小さなスタンド……を出現させた。その猫なみの大きさのスタンドが、部屋の隅にひっくりかえって落ちていた大きな鳥籠を引きずってくる。

「おい、イギー何をしているんだ？」

サダオの質問に、イギーが得意げに吠えた。

良く見ると、ゆがんだフレームの奥に、一匹のカラスが閉じ込められていた。

「気を付けてよ……何か、変な病原菌に侵されているかも……」

「むっ？」

カラスは、弱弱しく頭をもたげ……

なぜか、笑ったように見えた。

バシユツ！

突然、カラスの体から醜く膨れ上がった人型の巨人が出現した。

『X h a t u x a t ! ! !』

巨人は、意味不明な絶叫を上げた。そして、カラスが閉じ込められていたフレームを、まるで神のように引きちぎった。

同時に、巨人の背中から複数のフックが出現し、二人と一匹を襲

うッ!

「ガッ……」

余りの至近距離の攻撃に、フックがよけられないッ!

二人と一匹の体に、フックが引つかかるッ!

「馬鹿なッ!では、このカラス野郎が、フックで俺たちを攻撃したのかよッ

「ぎゃわわわわっ」

カラスが、してやったりと叫ぶ。

ヒト型の巨人が、フックの根元につけられたロープをつかむ。貞夫達ごと、ロープを振り回す。

貞夫、アヴドウル　そして　イギーの体が、宙を舞うッ!

空中で一瞬体が止まり、胃の中がでんぐり返るような不快感の後、グイツと引つ張られる。

床が、高速で迫ってくるッ!

貞夫は、必死に、頭と床のあいだに右腕を差し入れた。

ガチャアンッ

二人と一匹は、激しく床にたたきつけられた。

かろうじて前回り受け身を取った貞夫は、それでもその威力に肺中の息をすべて叩き出され、喘いだ。喘ぐと、叩きつけられた痛みで体が悲鳴を上げる。

他の仲間を気遣う余裕は、なかった。

だがどうやら、アヴドウルも、イギーも、床にたたきつけられる直前に自らのスタンドを出して、身を守っていたようだ。

「大丈夫か……」

仲間に話しかけると、アヴドウルもイギーも、弱弱しく笑みを浮かべた。

『V x u a t!!!』

再び、醜い巨人のスタンドが叫ぶ。

再び、アヴドウルとイギーが宙吊りになった。

貞夫はまだ床の上だ。

貞夫の体を拘束していたフック付ロープが、焼切られていたのだ。

アヴドウルのおかげだ。

「うおおおおおっ！」

貞夫は雄たけびを上げながら、宙を舞うアヴドウルとイギーを追って跳んだ。

宙で刀の鞘を掴み、鯉口をきる。

一息で刀を抜くッ！

ザシユッ！

「ガッ……助かった」

「ギャウウウッ」

アヴドウルとイギーは、床にたたきつけられる前にフックから解放された。

解放された一人と一匹は、勢いを失い、ふわりと天井に放り投げられた。

そして、自分のスタンドを使って、ブジに着地した。

一方貞夫は、再び刀をひらめかせ、飛んできたフックを、すべて空中で切り落としていた。

空中で刀を鞘に納め、床に手をつき、着地の衝撃を吸収する。

バタン

そのとき、ドアが開いた。

ドアの奥には、シザーマンがたたずんでいる。

背後には、スタンド使いのカラス、目の前にはシザーマン 挟み撃ちだ。

しかし、貞夫には仲間がいた。

「クッ！まじしやんずれつどッ!!」

アヴドウルがか細い声で叫んだ。

鳥頭の小人が出現し、シザーマンに組みかかるッ

『X g u t a x t u !!』

シザーマンは、どことなく嬉しそうに叫びながら、マジシャンズレッドに駆け寄った。ヒョイツヒョイツと跳び、躍り、跳ね上がって、手に持った巨大な鋏を、マジシャンズレッドに突き刺そうとするッ！
鋏は、マジシャンズレッドの手のひらを貫通したッ。

「うわああああっ！」

アヴドウルが悲鳴を上げた。その手から、血が噴き出す。

『B z y u u u u ! !』

シザーマンも、悲鳴を上げた。その肩から炎が立ち登っている。手を鉄で負傷しながらも、アヴドウルが火をつけたのだ。

シザーマンが、ひるむ。

その一瞬のすきに、貞夫は体勢を整えていた。

刀を上段に構え……シザーマンを袈裟斬りにするッ！

『B g a a a a a a !』

気味の悪い悲鳴を残して、シザーマンの姿がかき消えた。

その直後、刀を持っていた貞夫の手が、強くひねられた。

カラスのスタンドが放ったフックが、貞夫の刀をからめ捕ったのだ。

刀は宙を舞い……窓ガラスを突き破って、建物の外へ投げ出された。

刀を奪われた貞夫は、ひねられた右手首を、無事だった左腕と腹で抱えるようにし、かがみこんだ。

「ぎやうううううっ！」

イギーが、叫ぶ。

砂のスタンドが、カラスの羽を切り裂くッ！

カラスが、悲鳴を上げた。

「アアッア——ッ」

そして、刀を追うようにして窓を突き破って外に飛び出し……墜落した。

「イッ……イギー……ありがとうよ」

貞夫は、脂汗を流しながら、イギーに礼を言った。無事な方の手で、差し出された頭をなでる。

『ぎやうううう』

褒められたイギーは、床を転がって喜んでいる。

「さだ……だいじようぶっ」

アヴドウルが心配そうに尋ねた。

「……やっちゃまったよ……ちよつと手当てをさせてくれないか」

貞夫が言った。

その手首が、青黒くはれ上がっている。元の太さの、倍ほどに膨れ上がっていた。

(……チエツ、これでは、刀を振れない……か)



「よし……これで、なんとかいけるかな」

なんとか手首を固定し終えた貞夫は、心配げに覗き込むアヴドウルとイギーに向かって、無理やりニヤリと笑って見せた。

あのスタンド使いのクラスが入っていたケージの骨組みを使い、手首の周りを補強したのだ。

まだうっ血している為、手首を心臓よりも下にもつてくると、息がとまるほど痛い。

だが、なんとかなるはずだ。

ゆつくり、部屋を出る。

探索を続けなければ……

アヴドウルとイギーが、おそるおそる貞夫の後ろをついてくる。おそらくどちらにも、例の『影』に、貞夫よりもほんのちよつぴりだけ、長く触れていたのだ。そのために、イギーもアヴドウルも、貞夫よりも子供に戻っているのだ。……おそらく、その精神状態までも……

と、貞夫は少し空気が動いているのを、感じた。立ち止まり、肌に触れる空気の動きを、探る。間違いない。わずかだが廊下に風が吹いている……

先ほどは感じなかったものだ。

貞夫はとりあえず、その風が吹いている元を探すことにした。

「さだあ……」

アヴドウルは、ぎゅつと貞夫の服の裾を掴んだ。

「そのきず、だいじょうぶ？」

足元には、イギーが怖そうに体を擦り付けてくる。

「……くうん……」

「ああ、心配するなよ」

貞夫はクシヤツとイギーの頭をなで、アヴドウルの肩をたたいた。「片手でも、刀が無くてもやれるさ……兄イちゃんは、素手でも強いんだぞオ。たつぷり修行したんだ」

「修行ツ！」

アヴドウルの目がぱあつと輝いた。

「兄イちゃん、ニンジャなの？ボク、聞いたことあるよ、ニンジャの修行は厳しいって」

「へへへ……そうだよ。兄イちゃんはニンジャみたいなものさ。任せとけ」

アヴドウルの目が、尊敬の色にそまる。

「……じゃあ、分身のジュツとか、使えるの？シユリケン、持つてる？」

「……へへへ」

貞夫が懐にしまっていたクナイを見せると、アヴドウルは歓喜のあまりピョンピョンと跳び跳ねた。

『いいか……『手の内』だ。しつかり刀を握るのだ……』

『はいっ！』

『そのまま、あと『2百回』木刀でその立木をたたけ』

『ハイっ！』

バシツ!!

『手が遅い、腰が入つとらんツ！もっと気合いを入れろツ！』

『ハイっツツ!!』

貞夫は、子供のころを思い出していた。

空条家は、代々続く古武道の宗家であった。戦国時代以前からつづ

く実践主体の武道で、槍、刀と言った刃物の使い方だけではなく、無手での組撃ち術もまた、その流派の教えには入っていた。

貞夫も、幼いころから正式な伝承者となるために、毎朝のけいこ、夕刻のけいこ とけいこ漬の毎日を送らされていた。

稽古をつけてくれたのは、祖父であった。

祖父は厳しかった。道場での挙作、礼、言葉づかいと言ったことにも厳しかったし、それ以上に一つ一つの業について、呼吸のタイミン
グ、目の動かし方、ほんの一寸したことまで、熱心すぎるほどに、叩き込まれていたのだ。

勢い、子供のころに子供らしい遊びをしたことなどない。

自分が古武道の党首に収まらず、彼らが最も嫌いそうな『音楽の世界』に飛び込んだのは、もしかしたら、ただ『家』からの反抗だったのかもしれない。

貞夫が、ティーンエイジャーと呼ばれる年になった時、『音楽』と出会った。

最初は親への反抗心とただの興味本位で始めた『音楽』………だが、貞夫は、いつしかその『音楽』に、すっかり魅了されていた。

貞夫は、全てをなげうって、ただサックスを掴んでニューヨークにわたった。自由の国アメリカ：ニューヨーク。貞夫は、ところ構わず楽器を吹かせてくれる所で吹きまくっていた。ほぼ勘当状態で『音楽の道』に入った貞夫には、頼れる人間などなかった。

だがあるとき、チンピラに絡まれていた美しい女性を助け……あれっ？

……あれっ？段々記憶がおぼつかなくなってきた。

「!?さだおっ。」

サダオは回想から帰った。アヴドウルが、心配そうな顔で、サダオの目を覗き込んでいる。

そうだ、今は思い出などにふけっている暇はないのだ。

サダオは気を取り直した。

二人と一匹は、空気の流れを追って、廊下を進んだ。

「2Fか？」

二階に上がり、また降りる。

「疲れてないかい」

「大丈夫サツ！ボクは元気だよッ」

アヴドウルが目をキラキラさせて答える。

その時、イギーがクンクンと鼻をならした。

不安そうだ。

「どうしたんだい？」

そう尋ねた後で、サダオにもイギーが嗅いだものが何か、わかった。いつの間にか二人と一匹の周囲は、煙に囲まれていた。

この館が、燃えているのだ。



サダオは、詰めていた自分の上着を切り取り、自分の鼻にあてた。アヴドウルにもう一切れを渡し、イギーを懐に入れる。

「アヴドウル、イギー―大丈夫、ボクが守つてあげる。だからガンバルんだッ……姿勢を低くして、なるべく煙を吸い込まないように気を付けてッ」

「わかった。お兄ちゃん」

「ワンッ」

サダオは背後にアヴドウルを従え、煙の切れ間を探して駆け抜けるッ！

階下からは、パチパチと炎がはぜる音が聞こえる。

主階段の踊り場は、すでに炎が充満していた。

サダオ達は、これまで走ってきた廊下を逆走して、廊下の突き当たりにあつた階段を指すッ！

「くっそ……」

だが、その階段に行きつくことさえ出来なかった。すでに、途中の廊下までが火に巻かれていたのだ。

ドガアアッ!!

不意に、燃え盛る横木が、サダオ達に振り墜ちてきた。

「ハッ！」

サダオは、何とか居合抜きを放ち、横木を両断した。

横木はバチバチと炎をあげ、燃えている。照り返しの炎が、サダオの肌を焼いた。

「どうしよう……」

アヴドウルの声が不安げになった。

「ボク……ボクのスタンドじゃあ、こんなにおつきな炎はどうにもできなよ……」

「大丈夫だよ……」

パニックになりかけているアヴドウルを、サダオは必死に慰めた。

だが、煙はどんどん濃くなり、火のはぜる音もそこから聞こえてくる。これでは、アヴドウルの恐怖は増す一方だ……

バチバチバチッ！

その火のはぜる音にまぎれて、かすかに人の声が聞こえてきた。

「…… ……ッ！」

ダ タッ

「……けてッ」

「助けてッ！」

「あれはッ！……イギー——ッ、案内してくれえッ」

サダオは、懐からイギーを出した。

「アオンッ」

イギーはぶるっとしっぽを振ると、煙にもひるむことなく、走り出した。

煙うずまく主階段を上に入り、三階の廊下を走るッ！

「まつ、待ってよッ！サダオ兄いチャンッ」

「急げアヴドウルッ！足を止めるな」

「アウウツ!!」

イギーが二人を連れてきたのは、周囲と比べて頑丈で、巨大な扉の前だ。

「ウエー——ンッ たすけてよおおおおおッ」

扉の奥から、子供の鳴き声が聞こえた。

「今助けるッ少し下がってろッ」

サダオはそう叫び、扉を切り裂くッ

切り裂いた扉を押し分け、部屋の中に入ると、そこには二人の子供がとらえられていた。

才堂 雅春と、ジン・チャンだ。

「大丈夫かッ」

「まじしやんずれっどッ！」

アヴドウルが、二人が縛り付けられていたロープを、焼切った。

「ウエエエ——ンッ」

才堂 雅春が鳴き声を上げた。本来は、死地に赴いても笑いながら突撃できる男だ。そんな豪胆な男が、今は子供のように泣きわめいている。……事実、見かけは6歳ぐらいの子供なのだ。

「サダ、助かったよ」

もう一人、ジン・チャンは子供ながらに落ち着いていた。

「ひどい怪我だなサダオ、手当てをさせてくれよ……」

コオオオオオオオオオオ——

ジン・チャンは、奇妙な呼吸をしながら、サダオの晴れ上がった手首に触れた。

ジン・チャンの手から流れ込む不思議な『気』の力で、サダオの手首の晴れが、少し収まってくる……

だが、ほんのちよつとだ。

「ゴメンよ……体が、子供になっちまったから、『波紋』の威力も子供なみに戻ってしまったみたいだ……」

ジン・チャンはすまなそうに言った。

「いいさ、これでもだいぶ良くなつたよ」

サダオはにこつとした。

「サダ兄イイツ！炎が……」

アヴドウルが叫んだ。先ほど切り裂いた扉の近くまで、炎が迫ってきたのだ。

サダオは、ジン・チャンと共に泣き叫ぶ才堂 雅春をムリヤリ引張って、廊下に戻った。

「みんな、大丈夫だッ！」

サダオは、皆を励ましつつ必死に打開策を探った。

だがすでに、煙はもうもうと舞い上がり、周囲はほとんど見えない。足元さえもおぼつかない状況だ。

アヴドウルが、才堂 雅春が、煙を吸い込んでせき込み始めた。もうだめか……

煙の中に、美しい金髪の女性が笑う姿と、今の自分によく似た外観の男の子が睨みつける姿が、ふっと浮かんだような気がした。

「あきらめてたまるかッ!!」

ジン・チャンが絶叫した。

「俺は、子供のところに帰るんだッ！」

その絶叫に、あきらめかけていたサダオの心に、再び火がともった。

「うええ——ンッ！ アアアア——ンんッ！ゴワイイイ——ッ」

才堂 雅春は、すっかりパニックになって手足をバタバタと暴れさせた。

「ウツ……ヒツ……」

その様子を見て、アヴドウルが涙目になった。

「クッ」

バチイッ

ジン・チャンが再び『波紋』の呼吸を行う。その両手が、時折、パチパチつと音を立てる。その両手が、太陽のエネルギーを湛えつつすらと光る。

そして、ジン・チャンは才堂 雅春の頭にそつと触れた。と、才堂 雅春の頭ががっくりと垂れた。ジン・チャンが流す『波紋』の威力に、意識を失ったのだ。

「サダ、行こうッ」

「ヨシッ」

サダオは、才堂 雅春を肩に担ぎ、廊下から、まだ火にまかれていない客室に移動した。ジン・チャンがせき込むアヴドウルの手を引いて、部屋に入ってくると、ドアを閉めた。すると、煙がほんの少しだ

け、薄くなった。

「うおおおっ！」

サダオは、窓ガラスにはめられていた鉄格子を、必死に蹴り飛ばす。ジン・チャン、アヴドウルも、サダオとタイミングを合わせ、鉄格子を蹴るッ！

二度

三度

何度蹴りつけただろうか、やがて鉄格子はガタビシときしみだし……最後には、ポキリと折れた。

いつの間にか、部屋の周囲はすっかり煙にまかれ、真っ白になっていた。

サダオは、ベッドのマットレスをはぎ取った。

「ヨシッ！このマットレスにくるまって飛び降りるぞッ！アヴドウルッ！ニンジャならこんなの眠って立ってできるぐらい簡単だ。お前もできるなッ！」

「でっ……でも……」

「……大丈夫だ。ボクがついているから」

サダオは、アヴドウルの手を取った。イギーは、いつの間にかサダオの肩に乗っている。

「サダ、才堂 雅春は任せろッ」

ジン・チャンが波紋の呼吸をしながら言った。その体が、ぼんやりと光っているように見える。波紋だ。

「先に行くぜッ」

そういうと、ジン・チャンは意識を失った才堂 雅春をかかえたまま、窓の外に身を投げたッ！

地面に着地した衝撃を、『波紋』で和らげる。

「ヨシっ、オレらも続くぞ、しつかり捕まってるよっ！」

サダオは叫び、マットレスに体を包み、イギー、アヴドウルと共に三階の窓から、地面に向かって飛び降りた。

「ぐわっ！」

マットレス越しとはいえ、アヴドウルとイギーの体重をささえ、背

中から地面にぶつかったサダオに、強烈な衝撃が襲った。その衝撃は、一瞬、完全に意識を失ったほどであった。

「うっ……ウツ……」

意識を取り戻したサダオは、ヨロヨロと立ち上がった。

痛みで全身がガタガタだ。肋骨も、鎖骨も折れているようだ。

右手は、もう酷いありさまだ。晴れ上がった部分は青黒く染まり、血が噴き出ている。ピクリとも動かせない状態だ。全く感覚も無い。

もつとも、痛みも感じないから、好都合と言ったところでもあった。

「良かった、みんな無事か……今、少しだけ治療するよ……」

ジン・チャンが波紋を一行に流す。その力で、少しだけ体力が回復していく。

ジャリ……

誰かが近づいてきた。顔を上げ、誰が近づいてきたのか確認した貞夫の顔が、ゆがむ。

ト　ト　ト　ト　ト　ト　ト　ト　ト　ト

「ハッ……生きてるのかよ……」

その男は立ち止まり、くわえていた煙草をベツと吐き捨てた。

「おかげさまでね……まさかとは思うが……あの火は君が……」

「そうだよ。俺が火をつけた」

ルデイ・バロウズが言った。

懐から、拳銃を取り出し、一行に向ける。

不思議なことに、ルデイの体は元の『大人の体』に戻っていた。

コ　コ　コ　コ　コ　コ　コ　コ　コ　コ

「そうか……お前が、僕たちを罠にかけたのか……」

「へッ……その通りだぜ……」

ルデイは笑い、無造作に引き金を引いた。

パンツ

だがその弾は、突然出現した『砂の壁』に取り込まれ、力なく地面に落ちた。

「アウツ」

イギーが、誇らしげに吠える。

『砂の壁』が、姿を変え犬のような、車のような姿になった。心なしか、その姿は少し力強さを取り戻しているようだ……

「……そうか、お前たち……お前たち全員 クソ スタンド使いだつたよな」

ルデイは再び笑った。

「そうだよな……じゃあ、俺も……」

「なんだとお……」

アウドウルが、いぶかしげな顔になった。

カシャン

周囲から、鋏がしまるような音がした。

カシャンツ

カシャンツ

カシャツ……

「ウワアアンツ……」

イギーが、鳴き声を上げた。

奴らが、そこにいたのだ。

そう、奴らが……

いつの間にかサダオ達の周囲には、『シザーマン』達が鋏を打ち鳴らしながら、立っていた。

4体もだ。4体の『シザーマン』達が、サダオ達を囲んでいる。

「……こつ、コイツだつ、コイツが……僕らを捕まえ、そしてボビイを……」

ジン・チャンが言った。

「ヒヤハハハハッ……」

ルデイが、笑う。

「どうよ、俺のスタンド、『シザースターズ』はよお……館では、楽しんでくれたか？……コイツラの能力は、単純だよ……『一般人にも見える』って能力なんだよオ……だが、シンプルな分、射程距離も、パワーも中々なんだぜエ〜」

「お前、お前……がやったのか？自分の仲間を……」

ジン・チャンが睨みつける。

「よくも、そんな真似が出来たものだ……」

「なかまあ？ 違うねッ！ お前も、アイツらも、ただのカモだあッ」

ルデイがへへへつと笑った。

「死ねよ、わが『ドレス』の事を探るネズミどもメッ！」

ルデイの叫び声とともに、4体の『シザーシスターズ』が襲い掛かった。

これまでとは違い、驚くほどの素早さだッ！

「なっ！」

サダオは、皆を守ろうと刀を片手に飛び出すが、かろうじて一体の足止めが精いっぱいであった。

身をひねり、ヤギツバヤにつきだされる罅を避ける。

「クッ！ 早いぞ……馬鹿な……」

「ブヒヤヒヤヒヤッ！ 奴らが遅いと思っただかあ」

ルデイが嗤う。

「ばかめっ！ 俺のスタンドは距離に応じて、出せるパワーとスピードが比例するのさッ。俺の目の前で操るコイツらは、最高の能力を持つてるぜエッ！」

アヴドウル、イギー、ジン・チャンに向かって、『シザーシスターズ』が迫るッ！

「まじしやんずれつどおッ！」

「バツツ・ブウルルウツ」

アヴドウルとイギーが、スタンドを出現させた。

『シザーシスターズ』は二人のスタンドに掴みかかるッ！

そして……

『シザーシスターズ』の残り一体が、生身のジン・チャンに襲い掛かったッ！

「ゴオオオオオオオオッ」

ジン・チャンはスタンドを持たない。だがすでに波紋を溜め、敵を待ち受けていたッ！

ボゴオッ

「くらえいー！」

ジン・チャンの波紋の一撃が、『シザーシスターズ』の体を砕くツ！
同時に、マジシャンズレッドの炎が、ザ・フールの砂の牙が、そして
貞夫の手刀が、『シザーシスターズ』を倒すツ！

ガシヤリ……と『シザーシスターズ』の持っていた鋏が、地面に落ちた。

「や……やるじゃあねえか」

全てのスタンドを倒されたルデイは、冷や汗を浮かべた。逃げ道を探すように、オロオロとあたりを見回す。

モチロン皆、裏切者をムザムザと逃がすほど、甘くなかった。

「キサマツ……この裏切者メツ！覚悟しろオオオツ！」

アヴドウルが、残されたルデイに向かって、マジシャンズレッドを放つツ！

「ブヒヤヒヤヒヤヒヤアツ」

迫りくるマジシャンズレッドを見て、ルデイが、豚が殺されるような悲鳴を上げた。

だが……

（まてよ……なぜ、スタンドをすべて破られたのに、コイツにはダメー
ジが無いんだ？）

サダオは、ふと湧いた疑問に、思わず足を止めた。周囲を確認し、その顔がこわばった。

「フセロツ！」

目の前に立つアヴドウルとジン・チャンを引き倒すツ！

バビユウウツツ！

ちようど、『アヴドウルとジン・チャンの首があつた高さ』を、宙を飛ぶ鋏が、飛びぬけた」

ガチャンツ

飛びぬけた鋏が、互いにぶつかり……一つになった。

「ウオオオオツ」

サダオは、ブーメランのように弧を描き、自分にめがけて再び飛んできた二つの鋏の交点から、やつこのことでのがれた。

ガチャン！

またしても、飛びぬけた鋏が、一つになった。

融合した二つの鋏が、さらにぶつかり……ついに、4つの鋏が、一つの巨大な鋏となった。

「ケツ、やるじゃあねーか……そのそつ首、ハネてやろうと思ったのによお〜〜」

ルデイが、その巨大な鋏を手にとった。

ジャキンツ

ジャキンツ

鋏を交差させるたびに、その体が……醜く膨れていく。いつの間にか、ルデイの顔に『二つ穴をあけた茶色の紙袋』がかぶせられている。シザーマンだ。

「ウギャギャギャギャツ」

ルデイ⇨シザーマンは、これまでとは打って変わった素早い動きで、飛びかかってきたツ！

「ウオツ！」

不意を突かれた三人と一匹が、不覚を取る。

三人と、一匹の顔面に、これまでとは裏腹の超高速で鋏が飛ぶツ！

「ガツ」

「チツ！」

「クツ」

「ギャウウウツ！」

サダオは、おおきくとんぼ返りをうちながら、鋏をギリギリのタイミングで蹴とばした。蹴り上げた鋏を、シザーマンに向かって、蹴り返す。

鋏は、狙い過たずシザーマンの右手に突き刺さった。

『ブギイいいいっ！』

シザーマンは悲鳴を上げ……サダオに背を向けると、逃げ出したツ！

「糞っ！」

後を追いかけてしようとしたサダオは、すぐに舌打ちをしてあきらめ

た。

シザーマンの逃げ足は、驚くべき速さであった。

一方、サダオの足は、子供の足だ。

追いかけても、結果は見えていた。

「みんな、大丈夫か？」

サダオは振り返り、仲間たちの様子を確認した。

尋ねたその顔が、ゆがむ。

コッ コッ コッ コッ コッ コッ コッ コッ コッ

アブドウル、ジン・チャンの二人の手に、深々と鋏が突き立っていた。

イギーの額も、流血していた。

その横には、鋏が墜ちている。ザ・フルの砂が、その鋏を覆っていた。

恐らくイギーは、ザ・フルの『砂の壁』で、鋏を防御しようとしたのだろう。

だが鋏が、その強烈なパワーで『砂の壁』を突破しかけ……イギーの額に、チョップピリと傷をつけていたのだ。

「大丈夫か、お前たち……」

サダオが声をかける……だが、誰の反応もなかった。

「馬鹿な……」

トッ トッ トッ トッ トッ トッ トッ トッ

二人と一匹の顔が、苦痛に歪んだ表情で固まっている。その肌が、髪の毛か、毛皮が、光沢のある真っ白な色に変わっている……

二人と一匹は、文字通り石化していた。

「くそっ」

サダオは、三人の肌を傷つけた鋏を集め、踏みつけた。

その役目を果たしたからなのか、鋏のビジョンがボヤけ、消えていく。

「……お前たち……」

サダオは、ギリリと歯をくいしばった。

イギーも、アブドウルも凄腕のスタンド使いだ。ジン・チャンも

中々の体術を使う。だから彼らは、子供に戻されていなければ、いくら不意をつかれたからとはいえ、こんな鋏などにやられることは無かったはずだ。

あのとき自分は、一行の一番はじに立っていた。だから、影に触れた時間も一番少なかった。

いま自分だけが助かったのは、完全に偶然のことなのだ。

「ジン・チャン……」

サダオは、沈痛な表情で石と化した旧友の肩に手をやった。すると……

バチツと、まるで何かに弾かれたかのような衝撃が、一瞬サダオを襲った。この感覚には、覚えがある。義父、ジョセフ・ジョースターから、冗談半分、半分本気で腹に突き入れられた拳に、こもっていたエネルギー……『波紋』だ。

『波紋』を受けたサダオの体力が、ほんの少し回復した。手足に力がみなぎっているのが、わかる。

もしや……サダオは、二人と一匹の脈、呼吸、体温などを確認し、ほっとした。大丈夫だ……全員まだ生きていのだ。ただ……『石』のように体が硬くなっているだけだ。

ならば、まだ希望はある。

ゴオオッ！

アブドウルの前方向かって、突然『炎』が噴き出た。

ドロリと、空中で何かが解け、地面に落ちた。

『ブギヤアアアッ！』

サダオの背後から、悔しそうな声上がる。シザーマンⅡルデイだ。

ルデイは、全速力で逃げつつ、無防備なサダオの背中に向かって、『鋏』を投げつけたのだ。

「アブドウル……おまえ、そんな姿になっても、俺を守ってくれたのか……」

石化したものが達か、それでも出来る限りの力を尽くしてくれている。サダオは、立ち上がった。ならば、五体満足な自分が、シザーマ

ンルデイを倒さなくて、どうするのだ。

当然、残り一匹も、いまだに闘っていた。

サラサラサラ……

イギー——の背中に、砂が集まっていく。砂は大きな翼となり、折から吹き付けた風に乗れ、イギーを宙に浮かせた。

身動きのおぼつかないイギーが、スタンドを使ってシザーマンを追いかけてよと言おうのだ。

「お前らッ！」

サダオは走った。全速力でルデイを追う。子供の足だ。いくら走っても、大人のルデイの方が早い。

だが……

人間よりも、風の方が、風に乗った犬の方が、早いッ！

「アギイイイイいっッ！」

空中で、イギーが叫んだ。イギーは、完全に石化したわけではなかったのだ。

かろうじて動く前足、口を動かし、シザーマンに向かって、吠えた。その時、一回りイギーの体が大きくなっていることに、貞夫は気が付いた。

どうやら、『子供化』の能力には、制限時間があつたようだ。いままさに、その制限時間がとけかかっている……と言おう訳だ。

十分に近づいたイギーは、空中から『砂の爪』を出現させ、シザーマンに向かって、爪を振るうッ

『ブギイいッ！』

シザーマンは、まるでスーパーボールのように右に、左に跳ね、その『砂の爪』をよけざま、無数の『鋏』を投げたッ！

「ウオオンッ！」

イギーは、『砂の壁』をつくり、『鋏』を防ごうとした。だが、さつきと同じように、『鋏』の一つが『砂の壁』を通り抜け、イギーを傷つけるッ！

「アウッ！」

瞬時に石化したイギーは、バランスを崩して墜落し、地面にたたき

つけられた。

『あつアッ ツツアアアア——ツ！』

シザーマンは喜び勇んでイギーに飛びかかる。懐から巨大な鋏を出現させ、イギーの首を刈ろうと、鋏を開く。

「させるかッ！」

貞夫が、追いついたッ！

貞夫は、シザーマンに向かって、回し蹴りを放つッ！

『ヴギイイイッ』

まともに貞夫の蹴りを喰らったシザーマンは、まるでゴムまりのように吹っ飛んだ。

「逃がすかよッ！」

貞夫は、間を与えず追撃に移るッ！

だが、シザーマンはその『鋏』を素早く振り回し、貞夫が近づいてくるのを、けん制した。

チツ……

何か、あの鋏を防ぐものが要だ。貞夫は上着を脱ぎ、左手に巻き付けた。

あのイギーの『砂の壁』をぶち抜いた鋏だ。こんな布では、到底防げないのは、わかっていた。だが、ほんの一瞬、全力の拳を突きいれる間だけでも、あの鋏を防ぐことができれば、それでいい。

「行くゾッ!!」

貞夫は、シザーマンに向かって、特攻した。

『ヴギイッ！』

シザーマンが、鋏を放った。

貞夫は、左手をかざして、飛んで来る鋏を布に絡めとり、その速度を受け流した。

シザーマンの懐に飛び込み、必殺の掌底撃ちを放つッ！

スギイーンッ！

シザーマンが、ぶっ飛んだ。

『あ……アギヤッ……』

その顔から紙袋がぶっ飛び、ルデイの顔が、現れた。

「チツ……手間を取らせやがって」

貞夫が、ゆっくりと、ルデイに近づいてくる……

「ひいいいっ！」

ルデイは、恐怖のあまり尻もちをついたまま後ずさった。

「ゆっ……許してくれッ！なっ……お……俺は、何にも知らないッ！脅されて無理やりやったんだッ……なっ……仲間じゃないか」

「……おう……ゴタクは、後でゆっくり聞かせ……お前の顔をぶっ壊した後でなッ」

貞夫は念入りに、入念に、その顔をボコボコに殴り付けた。

ルデイが半死半生になった時、ようやく、貞夫はその手を止めた。すると、不意に、貞夫が腕に巻いた上着から、鋏がこぼれ落ちた。

その上に、ザ・フルの砂がサラサラと降り積もった。

最後の瞬間に、イギーが貞夫の腕をガードしてくれたのだ。……それがなければ、貞夫はシザーマンにやられていたに、違いなかった。

「……イギー……アヴドウル……ありがとう……みんなのおかげで、助かったよ」

貞夫は、煙草を懐から取り出し、くわえながら言った。

その視線の先に、石化から戻り、本来の年齢に戻った仲間たちが、再び立ち上がるのが見えた。

「アギイツ」

イギーが、唸った。

パチンツ

アヴドウルが、指を鳴らした。

すると、完全復活した『マジシャンズレッド』が出現し、幽霊屋敷の炎を消し止めた。

「さあ、探索を開始しようか……」

アヴドウルは淡々とそう言うと、再び幽霊屋敷に戻っていった。

空条貞夫の孤闘 ―1991― その1

1991年某日

その日、東北の海岸線沿いの『最先端医薬研究所』が、爆発事故を起こした……と言う小さな記事が、東北のローカル紙に載った。その記事は、事故の規模にもかかわらず扱いが小さかったこともあって、ほとんどの人の注意を引かず、あつという間に忘れ去られてしまった。

だが皆は知らない、その事故の真実を。爆発が起こったのは、『最先端医薬研究所』などではなく、『軍事技術研究所』であったことを。その爆発が、たった一人の少年、橋沢育朗によって引き起こされたものだったことを。

その少年は、軍事組織：ドレスの実験によって、核兵器にも匹敵すると言う恐ろしい怪物：バオーの移植手術実験を受けていた。そして、実験経緯を観察するため、眠りにつかされていた。

その眠りについていた少年を、同じくドレスに捕らえられていた、スマレと言う予知能力をもつ少女が、目覚めさせたのだ。

二人は手を取り合ってドレスを抜け出し、逃避行を始めた。

『最先端医薬研究所』の爆発は、その逃避行の果てに起こった出来事であった。

これは、二人の逃避行の裏で起きていた、もう一つの話である。

バオーこと橋沢育朗が解放されてから2日後：とある東北の線路上

『いつも通り異常無しだ。サダ』

その声に隠された思いを感じ、空条貞夫は眉をしかめた。

電話越しに、なんとなくジン・チャンに元気が無い様にしたのだ。

我が友、ジン・チャン。ここ十年来の友人も疲れてきているのか。

貞夫は、友への気持ちをこめて……だが

「そうか、いつも悪いな」

とだけ言った。

我ながら、自分の口数の少なさにあきれ果てる。だが、ジン・チャンには伝わっているはずだ。

『フフツ……気にするな。DRESSをぶっ潰す為に俺ができる事はなんだって喜んでやるさ……安心しろよ、サダ。お前の家族の安全は、俺が守ってやる』

「ああ……判っている。必ずDRESSをぶっ潰そうぜ、ジン・チャン」

『まったく楽しみだよ、ヤツラをぶっ潰す日が……なあ貞夫、すべてが終わったら、一度は一緒に故郷の台湾に来てくれないか？俺の家族も紹介するよ……俺の娘、アンジェラはとってもオシャベリだけど、かわいいぞお。びっくりするなよ』

ジン・チャンの声に、少し力が戻った。

「ハハハ……それはいいな、俺も楽しみだ」

DRESSをぶっ飛ばした後で飲む酒は旨いだろうな。貞夫はニヤツと笑った。

『ああ……その日が待ちきれんよ……妻の墓前に奴らの首を据える日がな』

その日の事を思えば、あの日の『痛み』を思い出せば、俺は何でも出来るさ。

ジン・チャンの声は、インフルエンザにかかった病人の様に、だんだんと熱を帯びて来た。

「……協力するよ」

『!?……んんっ?……スマンな、もう電話を切らねばならん。ちよつと気になる音が聞こえたんだ……』

ジン・チャンが言った。電話越しの声が、少し早口になっている。

『いいか、最後に言っておくが、お前、少年たちを追うてことは、DRESSの奴らに近づいていくてことだ。身边には十分注意しろよ』

「ああ、お前もな」

空条貞夫は電話を切った。

ジン・チャンの事を思い、無意識にため息をつきながら、再び歩き

出す。

どうやら、ジン・チャンは長年の追跡に、すっかり疲れているようだ。

心配だった。

だが、ジン・チャンだけではない。疲れているのは貞夫も同じであった。もうDRESSSを追い初めてから15年以上も経つのだ。疲れるのも無理はない。

貞夫は、自分の人生を振り返り、ため息をついた。

隠れ蓑でもあり、本業でもある演奏活動のせいもあり、家族の元にもほとんど帰っていない。

一体いつまでこんな生活が続くのだろうか？続けられるのだろうか？

貞夫は、もう一度ため息をついた。

ふと、ジン・チャンと、そして義父のジョセフ・ジョースターと共に、DRESSSの開発基地を潰したときの事を思い出した。もう10年前の事だが、思えばあの時が一番DRESSSに近づく事が出来ていたのかもしれない。

あの時、もつと手がかりをつかんでいれば、もうDRESSSをつぶせていただろうか。

貞夫は、何度したかわからない後悔に襲われた。

だがあの時、あの状況で、他に何が出来たというのだ。

あの時、ジョセフたちを安全な所に移動させた直後に、開発基地のあった地面の下から、一斉に火柱が立ち上ったのだ。

そして、全ての証拠が炎の中に消えてしまったというわけだ。

しかも、気を失って倒れていたジョセフは、一刻を争う状態であった。

そのため、ジョセフを医者に連れていく事を優先したのだ。脱出の際に証拠を集める余裕など、なかったのだ。

東方朋子。

貞夫は、あの事件に巻き込んでしまった女性の事を思いやった。

彼女もまた、DRESSSによりその生き方が変わった一人だ。

彼女はあの事件でジョセフ・ジョースターと出会い、恋に落ちた。

そして、義父の子供を授かり、それを義父本人にも言わないまま、一人で育てている。

幸いなことに？ 深 仙 脈 疾 走 (ディープスオーバードライブ)を放つてから貞夫に助け出されるまでの間のことを、ジョセフは『覚えていない』。

朋子と二人、崩落した岩の隙間に閉じ込められていたあいだに『起こった』出来事を、ジョセフは『知らない』。

記憶喪失を引き起こすほど、それほど、深 仙 脈 疾 走

(ディープスオーバードライブ)が術者の命を削る技だった……という事なのだろう。

そこまでして自分の命を救ってくれたジョセフに、朋子がある種の思いを抱くことは当たり前だ。

それに義父ジョセフは……あの時のジョセフは、意識も朦朧としていただろう。少なくとも、いつものジョセフ・ジョースターでは無かったはずだ。

だから、あの時、義父と彼女の間に起こった事を、貞夫がどうこう言うツモりはなかった。

そもそも、貞夫が黙っていれば誰にも知られることはないのだ。

大人の対応のようで嫌だが、あれは『起こらなかった』事なのだ。

貞夫は、それが、皆が幸せになる方法だと思っていた。

そして、それは同じく、東方朋子の望みでもあった。

彼女の選んだ道は、辛く厳しいものだと思う。だが、それはまっとうな道にちがいないと貞夫は思っていた。 東方朋子、仗助、あの親子には健やかに暮らして欲しい。

互いの家族を、幸せを守ろうという彼女の覚悟には、それだけの価値がある。

……彼女は立派な人だ。

貞夫は、そう思った。

少なくとも父親として、夫としての仕事をほとんど放棄している最低の自分とは、大違いだ。

シユボツ

そんな物思いにふけりながら、貞夫はタバコをくわえて、火をつけた。

彼は、東北のとある路線に人知れず放置された車両の捜索を、続けていた。行き先も、認識番号もついていない、黒い列車だ。

貞夫が追う敵、ドレスの車両に間違いなかった。

放置された車両の中は綺麗に清掃されていた。だがまだ探せば、何か見つかるかもしれない。事実、S W財団から派遣された調査員が、先ほどほんのわずかの指紋がまだ残っていたのを発見していた。

それは、大きな手掛かりであった。

その指紋は、つい数週間前に山陰地方の孤児院からDRESSSの関係者とみられる東欧系の美女に連れ去られた少女、高野スマレの指紋と一致していたのだ。

年端もいかない少女に降りかかった運命を思いやり、貞夫はいたたまれない気分になった。

何としても少女を救わねば。

「!？」

と、貞夫は線路沿いの砂利の上に、何か黒い、切れ端が落ちているのを見つけた。

貞夫は切れ端を慎重にピンセットでつまみ上げた。それは、ゴムのような、革のような、不思議な素材で出来ている。

その素材には見覚えがあった。

これは、あの敵、プロト・バオーが身に着けていたものと同じ素材だった。つまり、あのバオーの少年が身に着けていた可能性が高い。

貞夫は、懐から取り出したビニールの袋の中に、その切れ端を落とした。

この切れ端に、少年の匂いが残っているかもしれない。

貞夫の胸が高鳴った。

この切れ端を追跡することで、少年に、そしてDRESSSにたどり着けるに違いなかった。



「サダさん、S W財団から解析結果がでたと、連絡がありました」

車両の搜索を続けていると、数少ない公安委員会の協力者の一人が、貞夫の元へ報告にやって来た。

「速いな」

「……たまたま、ケイト教授が来日されていたのだそうです」

公安委員会のものは、S W財団の研究者の名をあげた。

「なるほど……」

貞夫は、調査員から車載の衛星電話の受話器をうけとった。

ケイト教授は、挨拶もそこそこに調査結果をまくし立てた。

『サダオ……最悪だわ。例のあれから、陽性反応が出たわ。この体液のDNAパターンは、あの9年前に採取されたプロト・バオーのものとはほぼ同一よ。しかも、付着した体液の分布状況と染色体分類からみて、この体液の持ち主は人間、おそらく身長170〜180cm後半の若者、男性と推測出来るわッ！』

「つまり……」

『そうよ、カスミノメがやったのよ。現代の人狼が……バオーが完成して、この世にとき放たれてしまったのに、間違いないわ』

ケイト教授の声が、おののく。

「……」

貞夫は黙って話を聞いている。ケイトは早口で話し続けた。興奮し過ぎて、まるで怒鳴っているような口調だ。

『サダッ……判ってるわね。もし戦術核にも匹敵するバオーの武装現象が『発現したら』何が起こるか』

「……」

『それは……地獄よ』

電話越しのケイトの声が、震えた。

『サダ……このあたりでバオーに対抗できる可能性があるのは、アンタだけよ。アンタが止めるのよ。アンタの武道の技と……スタンドでッ……例え相手が少年でもよ。さもなくば……《この世の終わり》よ』

ケイトは自分の言いたいことだけをまくし立てて、ガチャリと受話器を置いた。

「やれやれだ」

貞夫は、緊張した。

戦術核にも等しいと言うバオーは、手加減できる相手ではない。命がけて挑むべき相手だ。

だが、俺にできるのか？

貞夫は自問しながら受話器を置いた。

俺は、自分の息子よりも年若い『少年』と、本当に本気で、戦えるのか？

スタンド：ジギー・スターダストの『封印』を解くべきなのか？

「ソフィーヌ、貴様わかっているな」

「……はい……」

ソフィーヌと呼ばれた女は、その冷たい口調に震え上がった。

よくわかっていた……自分の命が危ないことは。

自分のミスで高野スマレが逃げだした。そして、そのスマレを捕まえようとした際の不手際が、バオーの少年：橋沢育朗を解き放ってしまったのだから。

戦術的価値が核兵器にも等しいと言われる無敵の戦闘生物、バオー。そのバオーが、なんの束縛もないまま無防備にこの世に解き放たれたのだ。

その罪が万死に値することは、自覚していた。

「オマエの超能力で、少年と少女を始末しろッツ。お前にはあと30時間やろう。いいなッ！それが過ぎたら、わかっているなッツ!!」

DRESSの主任研究者であり、バオーを作り上げた『生みの親』でもある霞の目博士が、怒鳴った。

「かならず……」

ソフィーヌは深々と頭をさげた。

「コマが足りないな、霞の目」

霞の目の背後に座っていた男が、口を開いた。

まるで少年と言ってもいい背格好の男だ。だがその男が口を開く

と、霞の目は、電流に打たれたようにピンと背を伸ばした。

頭を下げているソフィーヌには目もくれずに、二人の話は続いていく。

「だから、コマが足りないだろう」

「はっ……しかし小暮様、お言葉ながら、すでに日本支部の精鋭たちを差し向けています。この女の投入は、あくまでバックアッププランです」

霞の目は、得意そうに言った。

「こんなこともあるかと、予知の少女と少年の体には発信器を埋め込んでいました。その措置が功を奏して、彼らの居場所は常に把握できています」

「わかつておる。だがまだ甘いわ。アメリカ支部のウォーケンを呼んでおく」

「なんとツ、彼を呼んで頂けるとは」

「バオーは核弾頭にも匹敵する兵器なのだろうか？ならば、万全をきすのだ」

「もちろんです………」

「俺は『奴』に対応しなければならん……『奴』も性懲りもなく、未だに我らのことをこそこそ探っておるからな。今、奴は、貴様が失敗したガソリンスタンドで痕跡を探っておると言う報告が、入っておる」

「はっ……すみませんッ」

「奴もご苦労なことだ。だがその執念は侮れん。俺が直々に対応するしかないだろう……奴には借りがあるしな。男はニヤツと笑った。「だから霞目、少年の搜索はお前が指揮を執るのだ。核兵器に匹敵するとは言え、その戦力をコントロールしているのは、ただか17才の小僧、貴様でも十分だろう」

「……」

完全に二人に無視されたまま、ソフィーヌは頭を下げ続けていた。屈辱と恐怖に飲み込まれたソフィーヌは、一人決意を新たにしていた。

必ず、バオーと予知の少女を殺る。

そう、必ずだ。

私の超能力（スタンド）：トウルー・カラーで二人を始末してやるのだ。

バオー解放から3日目の夜：

真つ暗闇の先にあるはずの隣の水田から、カエルの音がうるさいほど響いていた。

音を立てないように気を遣いながら、育朗は上着を脱いだ。その上着を、そつと眠っている少女の上にかける。

少女は、ブルツと身を震わせた。そつと触った手が、ひどく冷たい。無理もない。5月とはいえ、この辺りはまだまだ冷えるのだ。

その身に宿されたバオーと言う怪物の影響か、育朗自身は少しも寒さを感じていなかった。

しかし、スマレはまだ9歳の少女だ。体力もそれほどある方ではないだろう。

だから、彼女に代わって育朗が気を付けてあげないといけない。小さな子が、こんな所で風邪をひいてしまったら大事なのだ。

（スマレ……疲れているだろうに。なんとかもう少しまともなところで寝かせてあげられるといいのだけど）

育朗は思った。

初日の寝床は、森の中に捨てられていたバスの中だった。昨日などは、店の裏手に落ちていた段ボールを拾い集めて作った箱の中で寝たのだ。

昨日の夕方は、なかなかいい廃墟を見つけることができた。だが、ドレスの追手が襲ってきた為、その廃墟からは出ていかざるをえなかったのだ。

あの仲むつまじそうだった親子に起こった悲劇……運悪く、ドレスの追っ手に出くわした親子が殺害されていたあの光景を思いだし、育朗はあらためて怒りに震えた。

その怒りは、すぐ自分自身のふがいなさに、向けられた。

育朗は、今夜こそはいい寝床を見つけてやろうと、がんばったのだ。

だが結局、こうやって森の中で拾ったブルーシートの上に落ち葉をかぶせて、なんとか寒さをしのいでいる。

いつまでもこんなことを続けるわけには、いかない。

この先どうすればいいのか。

そして、スマレが見たという……自分に潜む邪悪：バオーとはなんだ？

僕はどうなるの？

何故、自分とスマレがこんな目に合うのか。

自分はこの子を守り切れるのだろうか。

育朗はあれこれと思い悩みながら、また眠りに落ちた。

気が付くと育朗は、深い霧の中に立っていた。

どういう事だ？

自分はいく先ほどまで、スマレの横で野宿をしていたはずだ。

不意に霧が深くなる。すると、視界が完全に真っ白に、覆われた。

自分の手さえも、見えない。

すっかり混乱して立ち尽くしていると、少し、霧が晴れた。

ほっとして足元を見ると、いつの間にかスケート靴を履いていた。

その下には真っ白な氷が見える。霧と同じほどに白い氷の上にいると、まるで宙に浮いているかのようにだ。

これは、夢の中なのか。

「……は？」

育朗は戸惑いつつ、ためしに周囲を滑ってみた。

カ——ツ

硬い氷の上を、スケートが滑っていく音が響いた。硬い、冷たい音だ。

しばらく滑っていると、前方に緑黒い帯のような塊が見えた。

と、今度は身を切るような寒さの突風が吹き、周囲の霧をふきは

らって行く。

前方に浮かび上がった緑黒い帯は、灌木に覆われた岸辺のようだ。どうやらここは、大きな池なのか。

パタパタパタ……

育朗の目の端に、黒い、小さな蝶が飛んでいくのがちらりと見えた。
(蝶が真冬に飛んでいるなんて?)

不思議に思っただけでその蝶を見ていると、心なしか蝶はしきりと育朗をある方向に誘導しようとして動いているように見えた。

だが育朗は、蝶の動きを無視して進んでいた。

バリツ

と、足元の氷が透明に変わった。

あつと思つた次の瞬間、バリツと氷が割れた。

染み出る氷水に足が濡れる。

氷に穴が開き、育朗は耐えきれずに氷の上に腹ばいになった。

バリツ

バリツ

育朗の周りの氷が、パリパリとひび割れていく。

「うわわあああああッ」

育朗が悲鳴を上げた……

そうだ、思い出した。これは子供の頃、氷が張った池に落ちかけたときの記憶だ。

あの恐怖を、夢の中で追体験しているのだ。

と、突然周囲が真っ暗になった。

パン

まるで音が聞こえるほどにパツと、育朗の目の前に、スポットライトが照らされた。

そのスポットライトに照らされ、育朗の目の前を不思議なクリーチャーが、複数踊っていた。

それらのクリーチャーは、絵の具のチューブを大きくし、そこに手足と目、口を付けたような、いびつで、奇妙な外見をしていた。

よく見ると、そのクリーチャー達は黒いチューブ、青いチューブ、赤

いチューブなど、それぞれ異なる色をしていた。全部で7体いるようであった。

『ドウバツ』

『ドウバアツツ、バツ』

チューブ達が踊る。

「なんだ？これは」

育朗は首をかしげ、一心不乱に踊るチューブに恐る恐る手を伸ばした。

その手を見て、チューブたちが笑った。

『ブフアアアアアアツ』

チューブの一体が頭のキャップを外し、黒い絵の具を吐き出した。

「ウワツ」

育朗の手に、黒い絵の具がべったりとついた。

その耳に、『何か』が聞こえてくる……

『あららっ』

『ちよつと、嫌だ。あの子あの池に入ったの』

『濡れちゃうわよ、ねえ……助けてあげたら？』

『いやよツ足が濡れちゃうわツ、大丈夫よ誰か助けてくれるわよ』

（何だ？この声は？）

気が付くと、育朗の体は宙に浮いていた。

足元を見ると、小さな子供が、割れつつある氷の上で必死で暴れているのが見える。

その少年の姿形は、良く知っている……自分だ。

（やはり……あれは、子供の頃のボク？）

と、育朗は笑い声の主が誰か、気が付いた。

（その声は……まさか……いや、そうだ。間違いないツ 声の主は、ボクが子供のころあこがれていた近所のお姉さんだッ！）

だが、お姉さんは今にも濡れそうな郁郎の様子を見てケタケタと笑い……完全に崩壊しそうな氷に向かって……石を投げようとしていた。

『あのコ池に落ちたら、死んじゃうかしら』

全く心配している口調ではない。むしろ面白がっている。

『ちよつと、アノコ、あんたになついてたじやないッ。かつわいそオオ』

はんっ

お姉さんが肩をすくめた。

『止めてよ、気持ち悪いッ』

『うわあああああッ』

嘘だ。

あの優しかったお姉さんが、そんな。

育朗は叫けぼうとした。だが、声が……出ないッ。

と、お姉さんの目の前を、黒い蝶が舞った。

『キヤッ』

お姉さんは足を滑らし、尻餅をついた。

『お姉さん』が投げようとした石は、床にこぼれた。

「……育朗ッ！ねえ、育朗ッ」

スミレの声に起こされ、育朗は目を覚ました。

「!?はっ……スミレッ?」

「アンタどうしたの?うなされていたわよ」

「そっ……そうか、あれは夢か」

「なに?悪い夢でも見たの?」

スミレは育朗の顔をのぞきこんだ。

「私もよ。私も悪い夢を見たわ……何か寒っむいなか、知らない所をずっとうろろしている夢だったわ。あんまりムカツクから、近くにいたイケスカナイ女に嫌がらせをしてやったわ」

スミレが言った。

(寒い?まさか……)

育朗が戸惑っていると、スミレがませた話し方で話しかけてきた。

「まあ昨日も大変だったしね。お互い悪い夢もみるってものよ。育

朗、アンタもちやんと休みなよ。私が見張りをしてあげるからさ」
「ははッ……ありがとう、そうしようかな」

と、育朗は自分の両足がしびれ、感覚がないのに気が付いた。

「うっ、冷たい」

育朗の足は、まるで氷水でも足を突っ込んだかのように、冷たく、ぐっしよりと濡れていた。

だが不思議なことに、濡れているのは育朗の足だけだ。その周り
は、しっかりと乾いているのだ。

(なんだ？これは？)

育朗は不気味に思ったが、それを顔に出すことはなかった。少女を
不必要に不安にさせることはないのだ。

「それで、今日はどうするの？」

スマレが尋ねた。

「人のいない所に行こうとおもうんだ」

「ふうん、それはどこ？」

「ここから少し 行った所さ。そこに山小屋があるんだ。めったに人
が来ないところだから、そこに行けばゆっくりできるよ」

育朗は寢床を始末すると、スマレを背負って走り出した。

『……止めてよ、気持ち悪い……』

お姉さんの言葉が、ふと育朗の脳裏にこだました。

バオー解放から4日後：

『サダ、最近どうもこの辺りがきな臭いぞ』

その朝の電話会議でのことだ。それまでたわいのない会話を楽し
んでいたジン・チャンの口調が急に改まった。

「……何だつて？」

『最近、この辺りに妙に見知らぬ奴らが出歩いている。身元の分から
ないヤツラだ。後を追うと、いつの間にか巧妙にまかれちゃう』

「ジン・チャン、無理するなよ」

『わかってるさ。だがお前の家族は俺が守ってやるって言ってるだ

ろ。今度こそ守りきるサ』

ジン・チャンは、ひどく真剣にそう言うのと、不意に話題を変えた。『ところで、お前の調査のほうはどうなんだ』

「……ああ、進捗してるよ。少しづつ手がかりも増えている。奴らもだんだんと焦って来ていると見えて、痕跡を隠すのがドンドン荒くなっついていやる」

『そうか、ツマリ、チャンスがあるって事だな』

「そうだ。もうすぐ少年に追い付けるはずだ」

貞夫は満足げに言った。

ほぼ同時刻：K岩近辺

「疲れたかい？」

「大丈夫ツ、平気よツ」

育朗は、けなげに力こぶを作って見せるスマイレを、ヒョイツとだっこした。スマイレをかるがると抱えたまま、育朗は山道をぐんぐん登って行く。

途中ですれ違った女子大生っぽい三人組が少し気になる。もしかして、彼女たちの口から自分達の居場所がDRESSにばれたら……そう考えて、育朗は苦笑した。

考え過ぎだ。あまり悩んでも仕方ない。

「どうしたの？ぼーっとして」

スマイレが、疑わしそうに育朗の頬をつねった。

「さっきのお姉さんたち、かわいかったな——ツって思ってたでしょ」

「ははッ……違うよ、スマイレ。ちよっとしっかりつかまってよ。先を急ぐからね」

育朗は、スマイレを抱きかかえたまま、山道を走って行った。



それから半日後、疲れ切った育朗とスマイレは、たまたま近くにあった民家の倉庫に忍び込み、休憩を取っていた。

今晚ここで休むことが出来たら、明日の朝には山小屋に到着するは

ずだ。

山道をずっと揺られて疲れたのか、スミレは育朗の手を握ったままスヤスヤと眠っている。

自分も休もう。

育郎はスミレの手を一度ギュツと握ると、目をつぶった。

目を開けると、納屋の奥からチューブをかたどった人形があちらこちらから現れた。

(これは……またか、また夢の中なのか?)

昨晚の悪夢が、頭をよぎった。

『ヴァルツ?』

まるで犬の吼え声のような吼え声か、育朗の口から飛び出した。

(なんだッ?)

『バル?』

何を話そうとしても、思った言葉が口に出せない。いや………思ったように体を動かすことが全く、出来ないッ!

感覚はある。

これは確かに『自分の体』だ。

だが、コントロール出来ないッ!

ゾワリ

育郎は、首筋・脳髄にそつた体内に『何か』が蠢いているのを感じた。

その『何か』が蠢くたびに、育朗の体が動く。その動きは獣のように機敏で、荒々しかった。

自分の体が『何か』に乗っ取られた………という事か。

夢の中のことは言え、育郎は戦慄した。

育朗の意識に反して、体が勝手に犬のように四つん這いになった。

そして、あちこちをうろろし始めた。

そのとき顔が下を向き、地面についた手足が視界に入った。

育朗の視界に入った両手はいびつに膨れ上がり、まるで紙粘土に錆青色の泥を塗りつけたようであった。

(これが、スマイレの言っていたボク?)

醜い。

自分でも、そう感じた。

『化け物』

青色のチューブの人形が、ケタケタと笑った。

『ばあああけもおおおおのお』

ぎゅい——イインッ

白と黒、灰色のチューブが色を絞りだし、壁に絵を描き始める。

その色が、水墨画のように黒髪の女性の姿を描き出す。

ぎよろり……

絵の女性の瞳が動き、育朗を認めて……にやりと笑った。

『そうよ、化け物……怪物……バオー……それがアンタよ』

絵の中から、女性が言った。

ヌオオオリンッ

絵の中の女が、育朗に向かって手を伸ばす。

まるで高粘度のスライムを引き延ばしたかのように、伸ばした手から壁に向かって、絵の具が糸を引く。

『アンタは化け物なのよ。あんたは真つ黒な邪悪ッ！アンタは人類の悪夢よオオ』

ネタアアアアッ

絵の女は、手足をバタバタさせて『二次元の壁』から、『三次元の世界』に、自分自身を引っ張り出した。

『バルッ』

育朗：バオーは、確かな殺意の臭いを感じ、攻撃姿勢を取った。

だが、その殺意の『臭い』がどこから来るか、方角がわからないッ！

戸惑うバオーに、絵の女『ソフィ——ヌ』が艶めかしく笑いながら近寄って来た。

そして、ペトリ と自分の手でバオーの貌を挟み込む。

育朗の全身の皮膚の下が、まるで水の塊のようにブヨブヨと波うち、崩れていく。

その黒い何かは、育朗の体から次々と巣立ち、近くの物陰に消えていく。

さらに時が加速していく。

日が昇り、沈み、また昇る。その動きがどんどん早くなつていくツツ

すでに育朗は、ピクリとも動けなかった。

だが、育朗から飛び出した『細長く、黒く、濡れている何か』が、この世にどんどん広まっていくのがわかった。

そして、猫が、犬が、リスが、スズメが、鴉が、大人の男が、女が、老人が、少女が、少年が、赤ん坊が……育朗から出て行った『黒い何か』に寄生され、そして育朗と同じように体を食いちぎられていく……

そして、育朗と同じように体を『内側から』喰われ、次々に死んでいく……

そして、『育朗』であつた無残な軀が、ガラツと崩れ落ちた。

『フッフフ』

ソフィーヌが笑うのを止めた。

『我が超能力（スタンド）：トゥルルー・カラーは貴方の夢に入り込み、貴方が最も知りたくない真実をあなたの目の前に突き付ける能力うツ！』

……トゥルルー・カラーが見せる《悪夢のような真実》を見た人間は、

絶望のあまり、

死ぬ……

いい？一番残酷なのは、いつだって本当の真実を突きつけられることなのよ』

「はっ？」

いつの間にか育朗の体は、枯はて崩れた軀から、元の人間の姿に戻っていた。

だが、その顔には悲痛な痛みがあふれていた。

「馬鹿な……」

育朗の膝が、ガクガクと揺れた。
立っていられず、両手、両膝をつけてしゃがみ込む。

「あぁっ……ボクは……ボクの体は……ッ」

育朗の目から、涙が吹き出た。

そんな育朗の周りに、チューブを模したスタンド・トゥルー・カラーズが近づいて行った。

『そおれが真実だ』

『真実よオ』

『し・ん・じ・つ』

『本当だぜ』

『マジだ』

チューブ達がソフィーヌの周りを踊りながら、笑いながら、口々に言った。

「う……う、うわあああ……」

育朗の体が、まるでガラスのように透き通り、ひび割れ始めた。

「あ……あ……あ」

『それが、現実よ。あなたはこのままでは、死ぬ。しかも、死んだあとで害悪を世界中にまき散らすのよ』

最悪の『化け物』よね。いま死んだ方がいいわよ。

『絵の女』：ソフィーヌが言った。

「あ……」

育朗が宙に手を差し出した。その手が見る見るうちに透き通り、パリパリとヒビが入った。

(太陽の光……これが、ボクが最後に見る景色か……フッフ、綺麗だ)

ゴメン、スマイレ。君を助けることはできないみたいだ……

パタパタパタ

と、育朗の視界に、黒い影が見えた。太陽を背にして、黒い蝶がキラキラと輝きながら育朗に近づいていく。

(何だ……これは……でも……『暖かい』)

育朗のその手に、黒い蝶が止まった。

その『蝶』が触れた部分から、無限の暖かさが育朗の体に染み渡ってくる。

透明だった手も、炎がともされたような暖かい色が付いた。

その色が、どんどん育朗の体に広がっていく……

『何ッ？なんなのよ……』

ソフィーヌが、戸惑った声を上げた。

『まさか……無意識のうちに、あの子が邪魔してるってわけッ？こうなったら、私が直接、育朗の魂を砕いてあげるわ』

そう言うと、自らの爪を伸ばし、高く差し上げた。

だが、ソフィーヌが振り上げた手を、力を取り戻した育朗の手が押えた。

『なっ……どうしてえッ』

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

「そうだよ……僕にはまだやることがあるんだ」

力を取り戻した育朗が、再び立ち上がった。

「僕には、まだやるべきことがある」

育朗は、そう言うと、手を伸ばして赤いチューブを捕まえた。

『なっ……なんで？スタンド使いでもないアンタが、我がトゥルー・カラーをさわられるの？はっ！』

育朗の体の輪郭が『黒い光』に縁取られていた。

「……わかりかけてきたよ。これは精神力の勝負なんだ。このビジョンは、お前の精神が作り出したもの……超能力って訳だ。そしてここは、僕の夢の中……」

育朗は捕まえた赤いチューブのフタを回し、フタを取り除いた。奇妙な悲鳴を上げ、力なく手足を。パタパタさせる赤いチューブを、顔の前に差し上げる。

「ならば、僕が精神を集中させれば、お前の精神のビジョンを掴めるはずだって思ったんだ」

育朗は、恐れおののいているソフィーヌの上に、赤いチューブの中心を絞り上げた。

まるで頭から血をかぶったように、ソフィーヌの全身が真っ赤に染

まった。

『いいいいいいやあああああああああああああ!!』

ソフィーヌは絶叫を上げて、倒れ……再び起き上がった。

だが無事ではなかった、ソフィーヌは涎を垂れ流し、フヤフヤフヤと呆けたような笑い声をあげつつづけている。

彼女がどんな真実を目にしたのか……育朗は知りたくもなかった。ソフィーヌは、うつろな顔で、周囲を気にせず、ただ笑っている。彼女が笑うたびに、周囲の景色がぼやけていく……

やがて育朗は、深い海のそこから引つ張り上げられるように、夢から覚めた。

(夢?でも、そうだ。たとえば……僕の運命が決まっていたとしても、ぼくにはまだやる事があるツツ)

目を覚ました育朗は、目の前で身をちぢこませている少女の寝顔を見て、微笑んだ。

少女は、ぶるツと体を震わせた。目をつぶったまま、育朗に身を寄せてくる。

育朗はスマレにかけた上着がずれ、肌がのぞいているのに気が付いた。上着の裾をちよつと引つ張って、スマレがちゃんと暖まれるように上着をかけなおした。

「……スマレ、疲れてないかい?」

プププ

寝ているスマレの前に積み上げられたズタ袋の上で、寝ぼけたノツツオが寝返りを打った。

「……ハッ」

「おはよう、スマレ。少しは休めたかい?」

「もちろんよつ……ここは?」

「山奥にあった民家の納屋だよ……君が寝ちやったからね。少しここで休んでたんだ」

「えっ……じゃあ、すぐに先を急がなきゃねっ……私は、もう十分休めたわ」

「そうかい？でもしばらくは、ここにいないかい……夜になって、この家の人が眠ってから、外に出たほうがいいと思うんだ」

「そうか……それもそうね……」

スマレは、素直にうなずいた。

その時

ガラ——……

「!!」

納屋の扉があいた。

隠れる間もなく、育朗とスマレの二人は、開いたドアの前にその身をさらした。

ドアの向こう側では、驚いた表情の老婆が、腰を抜かしてしゃがみこんだ。

ガタン

「こ……怖がらないで！……怪しいものではありません！」

「ヒッヒイイイ——ツドツドツ…泥棒じゃあ！」

老婆が大声を上げた。

空条貞夫の孤闘 — 1991 — その2

バオー解放から5日後：

空条貞夫は、誰も出なかった電話を下ろした。

胸元に手をやり、首から下げたペンダントを血の出るほど握りしめる。

先日から、ジン・チャンと連絡が取れなくなっている。

心配でたまらなかった。

(どうする……ここで探索をやめ、ジン・チャンと家族の様子を見に行った方がいいのではないか?)

敵は日米両政府のエリートエージェント達なのだから、何が起ころても不思議はない。

DRESSのエージェントを相手に油断すれば、自分の命さえも危うい。いや、自分の命が問題になるだけならいい。もしジン・チャンと家族に危害が及んでいたら……

思い悩む貞夫に、SW財団の研究員が声をかけた。

「サダさん、色々探ってみました……ダメです。顔も潰されており、身元不明です」

その報告に、貞夫は重々しくうなづいた。

「血液を採取しておいてくれ。DNA鑑定にまわしておきたい」
「判りました」

研究員は、ボディバックのチャックを引っ張り上げた。

バックから顔を出していた女の死体——今朝、陸中の海岸で見つかった人物だ——の無残な潰された顔が隠れていく。

彼女は……手掛かりにはならなかった。

だが、悲観することはない。

これまでの捜査で、育朗とスマイレの足取りはだいぶ掴めていた。

二人は、まずはM市近くの無人電車に乗っていた。ここで何が起こったのか、育朗が、スマイレを連れてDRESSの専用車両から脱出したと思われる。

そして、M市郊外のバス停、ガソリンスタンド、T市近くの競馬場、

廃墟にも痕跡があった。

「栗沢家の様子は？」

栗沢家は、最後に育郎とスマレの足取りがつかめた場所だ。

「無事です。音沙汰無い所を見ると、DRESSの奴らは我々が警備に当たっている事に気がついたものと思われます」

「それは良かった」

あの老人達をこれ以上危険な目に合わせたく無い。貞夫は、今朝訪れた六助爺さんの、けんもほろろな様子を思いだした。

きつとあのガンコ爺さんは、少年達を守ろうとしてくれているのだ。貞夫はその事が少し嬉しかった。少なくとも、少年達は孤立無援ではないのだ。ガンコじいさんも、自分たちもいる。

……そうだ、自分にはやらなければならぬことがあるッ

自分のわがままで、すべてを捨てて家族を優先させるわけにはいかないのだ。

貞夫は自分にそう言い聞かせた。だが、自らが発したその言葉が自分の心に響かない……

「サダさんッ！興味深い警察無線を傍受しましたよッ!!……場所はI市ッ。そこで、奇妙な事故が起こった模様ですッ」

「何だつて？」

「目撃者である女子大生から聞き出した話では、若者が一瞬のうちにバイクを持ち上げ、そしてそのバイクが爆発したと……裏を取ってみましたが、バイクが突然爆発したのは、本当のようです」

「I市……そうか……距離的には、確かに彼らがいてもおかしくない……見に行くか」

二人とも無事でいてくれ。貞夫は、刀を掴んで走り出した。

バオー解放から6日後：

やっと見つけたその少年は、ビルの屋上で独り地図を見ながら何やら考えていた。

こうしてみると、年相応なあどけなさを残す、普通の17歳の少年にしか見えない。

(「こんな、普通の少年に……『バオー』が寄生しているのか)

貞夫は、少年の横顔を見つめた。

17歳……息子の承太郎が、義父と共にエジプトで吸血鬼と死闘を繰り広げたのも、同じ17歳の頃だ。

(俺は、この少年を確保しなければならぬ……)

貞夫は、もやもやした気持ちを抱えたまま、少年に声をかけた。

「こんな所にいたのか、探したよ」

「!?誰だッ」

身構えた少年に、貞夫は手を広げてゆっくりと近づいていった。

「橋沢育朗君だね。僕は日本政府の者さ……君を保護しにきた」

「なんだって」

育朗の目がすわった。

「DRESSの追っ手かッ」

「まてっ!!ワタシはDRESSと敵対しているものだ」

「どうしてそれを信じられる?」

DRESSは日本政府が関与してできた組織だと言う話じゃないかッ ボクにはやらなければならないことがあるッ 申し訳ないけど、アとは思えない……騙されないぞ。

育朗の目が、モノ騒がせな光を帯びた。

「ボクにはやらなければならないことがあるッ 申し訳ないけど、アナタを倒してボクは行くッ!」

育朗の皮膚が、徐々に碧く染まっていく……グッ グッ と育朗の体が、まるで自転車のチューブに空気を入れていくかのように、一定のリズムで大きくなっていく。

「待てッ!」

貞夫は両手を上げた。

「信じてくれ、ワタシは君と戦わない。……なんならワタシの体を調べてみるかい?抵抗しないさ」

育朗の動きが止まった。

貞夫は冷や汗をかいていた。

もしバオーと対決することになったら、古武道だけでは相手になら

ない。

おそらく、スタンドを出す必要があるだろう。

だが、もしジギー・スターダストの封印を解き、その能力が『バオー』に働いたらどうなるのか……貞夫には、予想もつかなかった。

なによりも自分が、目の前の17歳の少年と戦う気になれるとは思えない……

だがほっとしたことには、育朗の肌の色が徐々に元に戻っていった。

やがて、育朗は完全に人間体に戻った。

だが、まだ警戒心もあらわに貞夫を睨みつけている。

「警告するツツ！ピクリとでもうごいたら……」

「わかっているさ、だがこの肩にかけた袋は、降ろさせてくれ。これは刀だからな、君に疑われたくはない」

「……だめだ。動かないで……それはボクが調べる」

「もちろんOKだ。気のすむまでやってくれ」

育朗は貞夫に慎重に近づいていき、丁寧に身体検査を始めた。まずゆっくりと貞夫の肩から竹刀袋をはずし、その袋を開ける。

「これは……」

育朗は竹刀袋の中に入っていた刀を見て息をのんだ。その刀は美術品ではない。見るからに『使い込まれた』禍々しい刀であった。

「……ワタシは古武術をやっている。これは、万が一の護身用だ」

貞夫が言った。

「……」

育朗は刀を貞夫から離れたところに置き、搜索を再開した。時計、靴の中敷きの裏等をじっくりと探していく。そして、貞夫のポケットに入っていたパス——公安委員会の特別エージェントとしての身分が書かれている——を見つけ、育朗は少し安心した様子を見せた。

「空条さん、この刀を除けば貴方が丸腰なのはわかりました……政府の役人さんだっただけ、信じます」

「信じてくれてありがとう」

貞夫はほっと一息ついた。

「ワタシは君たちを保護するために来たんだ、だがまずは……」

貞夫は、手早く育郎の体にスキャナーを当てていった。スキャナーは、育郎の右肩に来たところで、派手なビーブ音をたてた。

「なんですか？これは」

「……発信器だ。君の体に埋め込まれていた」

貞夫は注射針を取り出すと、育郎の肌に局部麻酔を施した。そして、その肌にメスを当て、裏に隠されていた小さなチップをとりだした。

すぐさま、そのチップを踏みつぶす。

「僕らの居場所はずっと筒抜けだった……」

育郎は、唾然としていた。

「そうだ……だが、これで君の位置情報はわからなくなった。すぐここを移動して姿をくらまそう。話はそれからだ」

「わかりました……」

育郎は、素直にうなづいた。



それから数時間後、二人は町はずれの林の中で、今後のことを話し合っていた。

「では、スマレはK崎の近くにいてるって事ですね」

育郎は地図の一点を示した。

「そうだ。そこにDRESSの秘密基地がある。先進医療施設と言うふれこみでな。スマレちゃんは、そこに監禁されている可能性が高い」

「DRESSの秘密基地……そんなところにどうやって潜入すれば……」

育郎は頭を抱えた。

「正面突破しかないのか」

「……大丈夫だ、策はある」

貞夫が言った。

「育朗くん、後はワタシに任せなさい。絶対何とかするから。君は安全なところで、待っているといい……」

「いえ……僕が行きます」

育朗は首を振った。

「スマイレは僕のせいでつかまっている。僕のせいで苦しんでいるんです。だから僕が助けます」

育朗は、自分の手をじっとみながら、悲しそうに言った。

「それに、ボクにとって安全な所なんてどこにもありません」

「……」

この少年は自分の運命を理解している。貞夫は、少年にかける言葉が見つからず、ただ黙っていた。

(……こんな時、ホリイだったら彼になんて言っただろう?)

貞夫にはわからなかった。

「……イヤ、育朗くん。DRESSとカタをつけるのは、それはワタシの仕事だよ」

貞夫は、育朗の肩に両手をかけた。

「ワタシはDRESSを潰す為に何年も奴らを追いかけてきた……」

目の前の少年が、ほとんど手をかけてやれなかった自分の息子・承太郎と重なる。

あの時、貞夫に代わって命がけで戦いホリイの命を救ったのは、息子と義父達であった。

貞夫は誓っていた。あの時のように、自分のやるべきことを17歳の少年に任せたりはしないと。命を懸けるべきなのは、子供ではない。大人の自分だ。

だが、貞夫の言葉は、思いは、育朗に届かなかった。

「ボクが行きます」

育朗は、頑固に言った。

「ボクが、スマイレを助けます」

「……育朗君」

貞夫は、それでも何とか育朗を説得しようと言葉をさがした。だがその時、何か近づいてくる気配を貞夫は『察知してしまった』。

(この感覚……)

手振りて育朗に静かにしているように合図すると、そっと気配がした方角を探る。

やはりそうだ。この気配には覚えがある。

貞夫は、思わずニヤリと笑った。

そこには貞夫の『仇敵』がいる。

「DRESSの追手ですか？発信器は取り外したはずなのに……」

育朗が訊ねた。

「いや、あれはワタシを追ってきたものだろう」

貞夫は痛ましい思いで育朗を見やった。この少年を助けたい。

だが、『仇敵』がやって来る。

少年をかばいながら『仇敵』と闘うのは、無理だ。

貞夫は、いぶかしげにこちらを見ている育朗に、懐に入れていたもう一つの地図と、背負っていたナップサックを放った。

「……これは？」

「このあたりの地下水脈の様子を示した地図だ……この近くから、DRESSの基地近くまで一本の地下水脈が走っているのがわかるだろう？それは人が入れる大きさなんだ」

貞夫は、手短にその地下水脈の入り口を育朗に伝えた。

「今からくる敵は、ワタシがけりをつけなければならぬ相手だ……」

君は先に行け、ワタシも後から追いかける」

「わかりました」

「無事で。」

育朗は、貞夫にペコリと頭を下げると、森の中に消えていった。



「空条貞夫、久しぶりだな」

目の前に現れた小男は尊大な口調で言った。

貞夫は、にやりと笑った。

この日を待ちわびていた。こうして、この男と会いまみえる日を。

今、決着をつけるのだ。

「ところでお前、ドンキホーテを読んだ事あるか？」

男が慣れ慣れしく話しかけてきた。

「まさに、今のお前だな……下らん理想を夢見て政府の方針に逆らい、すべてを捨ててわがDRESSに齒向かい……その結果、お前は何を

手に入れた？家族には愛想を尽かされ……音楽で身を立てる夢を失い……あわれな男だ」

男は嘲笑う。

「聞いてるぞう。4年前、奥さんが生死の境をさまよってたらしいじゃあないか。でも、それでも家族の所に帰らなかったのだから？俺を倒すために……」

そこまで思ってもらえて、光栄だよ。

「小暮……」

貞夫は黙って刀を抜いた。この怪物と話をする必要は一切無い。ただ切つて捨てるのみ、だ。

「そして、とうぜん家族からは愛想をつかさね、今また仕事仲間さえも失おうとしてるって訳だ」

小暮大士が指をぱちんとうち鳴らす。

「ほら、キリキリ歩きなさいヨツ」

どこかで聞いた事のある女の声だ。小暮の背後から出てきたその女は、背中がせむしのように曲がり、フードを頭からかぶっている。

その女が、引つ立って来たのは……

「ジン……ジン・チャンッ！」

「サダ……」

ジン・チャンが笑った。その顔は真つ黒に腫れ上がり、一見すると本人には見えないほどだ。

「ドジっちまった。スマン」

プツ

ジン・チャンが、口から、血と歯の交じった唾を吐いた。

「月並みだけど、『お仲間の命を守りたければ』武器を捨てなさいヨ」

女が言った。女はフードを脱ぎ、その銀髪と真つ白な肌、ロシア系のはつきりした顔立ちをさらした。

「……オーテップ……貴様、まだ生きていたのか」

あらご挨拶ね。

オーテップが笑い……そのカギ指を ジン・チャンの左胸に潜り込ませた。

「ぐっ！ううおおっ!!」

ジン・チャンが苦悶の声を上げた。

「待てッ！わかったッ」

武器を捨てるよ。貞夫が手にしていた日本刀を投げ捨てようとしたとき……

「サダッ！よセツツ……コイツラのいう事を聞いたって無駄だッ」

ジン・チャンが叫んだ。

「サダ、良くわかつてるだろう？コイツ等の事を」

「俺は、お前を見捨てん……」

へッ……ジン・チャンは苦笑して

「後は頼んだぞ」と言った。

そして……

コオオオオオツツ

ジン・チャンは、苦しそうに顔をゆがめながら、不思議なりズムの呼吸を始めた。

心なしか、そのジン・チャンの外見が少し、『光った』ように見えた。それは、『波紋』の光だ。

「おい……オイッ、よせ」

もしや……覚悟を決めたジン・チャンの表情を見て、貞夫は動揺した。

「頼んだぞ、一族を……娘を……」

ジン・チャンは、もう一度貞夫に笑いかけた。

「俺に後悔はない。お前とも出会えた。いい人生だったよ……だが俺はここまでだ。妻と息子と、天から見守っているぜ」

そしてジン・チャンは……自分の胸に手を当て、

自ら心臓を停止させた。

「ジン・チャンッツ」

貞夫の顔が怒りで歪んだ。あまりの怒りにぼやけていく景色。

ぼやけた景色の中、気のせいであろうか……崩れ逝くジン・チャンの体から、もう一つのジン・チャンが顔を出したように感じた

(これは……ジン・チャンの霊?)

フフフとジン・チャンの霊が笑った。

(サダ……妻と両親に愛していると伝えてくれ……それから、娘に……アンジェラに幸せになるんだと、俺はお前のことを見守つていと、伝えてくれ)

ジン・チャンは貞夫に親指を立てて見せ、そして昇つて逝つた。

「チツ」

オーテップがジン・チャンの遺体を蹴り飛ばした。

「人質は死んじやったけど、まあ良いわ」

わたしがアンタをぶつ殺せば良いだけですものね。

オーテップは拳銃を貞夫に向けた。

バシユツ

放たれた銃弾は、貞夫に到達する前に弾き飛ばされた。一瞬、貞夫の背後に現れたビジョンが、弾丸を弾き飛ばしたのだ。

「大サービスだ、貴様らに我がスタンドの名と姿を教えてやるッ 出ろッ」

涙を流しながら、貞夫が叫ぶ。

「ジギイー・スターダストッ」

貞夫の傍らにスタンド：ジギー・スターダストが現れ、吠えた。

それは、パワーに満ち溢れた『荒神』であった。その身を古式の大鎧で覆い、甲冑の隙間からのぞくその肌は、赤茶けた剛毛を生やしていた。兜の下にあるのは、牙をガチガチとかみしめる獣だ。

金色と、赤色の派手な色遣いの、そのスタンド：ジギー・スターダストは涎をまき散らし……貞夫に殴りかかったッ！

ボゴッ！

「うおおおおッ」

貞夫は、自分のスタンドの拳をかううじて刀で受け止めた。だが、その強烈なパワーに吹っ飛ばされるッ！

「!?ハッハハハ」

貴様、自分のスタンドが制御できないのかッ

小暮が笑った。

「物凄いパワーのスタンドの様だが、それでは宝の持ち腐れって奴だ

な」

『ギョルルルッ』

ジギー・スターダストは貞夫を吹っ飛ばすと、物凄い速度でオーテップに駆け寄る。

『G z y u a a a a a a a a a a !』

小暮のパワー・スレイブがジギー・スターダストに殴りかかる。

暴走したスタンドは、オーテップに背を向け、パワー・スレイブを吹き飛ばすッ

「ぐおおおッ」

辛うじてガードしたパワー・スレイブがぐらりと揺れ、小暮は膝をついた。

「恐ろしいパワーだ……だが、ただ暴れるだけだ。やりようはあるッ」

パワー・スレイブは地面を殴りつけたッ

ボゴオオントッ!

土煙が舞い上がる。そして、周囲の視界を覆い隠したパワー・スレイブは、ジギー・スターダストの背後に回り込み、渾身の一撃をたたきこんだ。

『ギャルウッ』

「うおおおッ」

パワー・スレイブの拳を喰らったジギー・スターダストと貞夫が吹き飛ばす

二人は、森林の奥に吹っ飛び、小暮達が移動に使っていた車の側壁に、激突した。

「頑丈だな……」

致命傷を与えられないのか……小暮が悔しそうな顔をした。

「とどめよッ」

オーテップは、倒れた貞夫に向かって銃を向けた。

だがその時……

ブオロロロッ!!

突然、エンジンが大音量を奏で、車が走り出した。乗り手のいない車が、オーテップに向かって突っ込んでくる。

「なっ」

慌てて突っ込んでくる車をよけたオーテップは、突っ込んできた貞夫に、拳銃を押しえつけられた。

『ギャルルルッ』

辺り構わず暴れようとしたジギー・スターダストが、その拳銃に触れる……すると……

バシユツバババババアアアアッ!!!!

拳銃が、まるでマシンガンのように!弾丸を周囲にまき散らしたッ

「キヤアアアッ」

「ウオッ」

「ぬうううッ」

オーテップ、小暮、そして貞夫までもが、銃弾をその身に喰らうッ
「貞夫ッッそのスタンドッ!」

小暮が怒鳴った。

「答えろッ! 貴様のスタンドの能力をッ……」

パワースレイブが、ジギー・スターダストに組み付いた。

巨大なスタンド:パワースレイブ……

だが、自分より一回りは大きいスタンドを、ジギー・スターダストはちよつと身を震わせ、弾き飛ばした。

そして、ジギー・スターダストは、ラッシュを……足元の地面に向けて、放つッ!

ボガアッ!

スタンドのパワーで地面が割れ、土砂が散乱した。

その隙に、貞夫は立ち上がった。

「……」

立ち上がった貞夫は、小暮に向かって、ゆつくりと歩きだした。その足元からは、拳銃の銃創から流れ落ちる血が、点々と続く。

ジギー・スターダストが貞夫を見つけ……襲い掛かったッ!

「クッ……」

貞夫は、自らのスタンド:ジギー・スターダストの拳をからめ捕り、足払いをかけた。

思わず転びかけるジギー・スターダスト。

その隙に、貞夫は暴れ続けているジギー・スターダストを、押さえつけた。

「頼むッ！元に戻ってくれッ」

「貴様のスタンド、そうか……『暴走させること』それが貴様のスタンド能力だな」

小暮が言った。

「貴様のスタンドが出来るのは、『能力』も『行動』も暴走するだけか……」

クダラナイ。小暮は嘲笑った。

貞夫は、無言で刀を振り上げた。

バシユッ

ジギー・スターダストが貞夫の刀と、それから貞夫の背中を殴ったッ

「グッ！」

だが、貞夫は自分のスタンドから受けた攻撃を耐えた。そして、刀を小暮に向けるッ

バシユ！

刀がその長さを増し、小暮の肩を貫くッ！

貞夫のスタンド能力で、刀の性能が飛躍的に向上したからだ。

ボムッ

だが次の瞬間、貞夫の刀が柄から爆発した。刀の強度を超える『強化』をした報いだ。

「グッ……消えてろ、ジギー」

貞夫は刀をとり落とし、自分のスタンドを消した。

「フッフ……なあんだ。『暴走させる能力』ね、私には見えないけど、確かに使えない能力だわね」

あんた、自分自身でさえ制御できないんじゃない。

そういうと、オーテップは首に巻いたスカーフを取った。

そのスカーフの下には、まるでせむしのような瘤が二つ、蠢いてい

るッ！

「?!」

「…………ワタシ醜いでしょ」

オーテップは鋭い目を貞夫に向けた。

「…………私はね…………親に『売られた』子供だったのよ。実験動物としてね」

「お前は優秀な被験者だ。オーテップ」

小暮の言葉に、ありがとうございます と、オーテップは優雅に頭を下げた。

「私はね…イクロウとは違うの。自分がどんな人間だかよくわかってるのよ。」

私は道具。私は人類が先に進むための人柱よ。この体を差出し、改造し続けていただくことだけに私の価値があるのよ」

フッフ

オーテップが笑った。

「私には親なんていない、要らないワ…………そうね、もしかしたらアンタの息子も私と同じことを思ってるかもね」

「…………」

「フッフ…………でも私はね、後悔してないの。この体を差し出したおかげで、素晴らしい力を手に入れたのよ。貞夫、私は能力が制御できないアンタやイクロウとは違う…………私は小暮様のおかげで、バオーを制御できるようになったのッ！この疑似脳のおかげでねエッッ」

オーテップが懐から二本の注射器を取り出した。その注射針を瘤に打ち込むッ！

「あううううっ！」

オーテップが大きくのぞけり、白目をむき、絶叫した。

振り返った体が青白くそまり、ボコボコと膨れていく。

銀髪が逆立ち、同じく絵の具を吸ったかのように根元からすつと青白く染まり、固まっていく。

「!?何だかわからんが、今のうちだ」

オーテップが絶叫している隙に、貞夫は懐から二本目の刀をとりだ

し、オーテツプの懐へ突っ込んでいった

だが、まさに居合をはなとうと踏み込んだ貞夫の前に、小暮のスタンド：パワースレイブが襲いかかった。

「くっ！」

貞夫は刀を閃かせ、かろうじてパワースレイブの拳を受け止めた。だが、その圧倒的なパワーに貞夫の体は後方に持つていかれ、危うく吹っ飛ばされそうになる。

その直後ツツ！

「ヴァルツヴァルヴァルヴァルツツ」

背後から吼え声が聞こえた。

貞夫はとっさに地面を転がって、回避行動をとった。

バゴツ

なんと、パワースレイブが飛び込んできたレディ・バオー（オーテツプが『変身』したもの）を受け止め、貞夫に投げつけたのだッ！

「クツ」

レディ・バオーが空中で、両腕と頭から湾曲した刀状の武器を出現させた。

それは、オリジナル・バオーとは異なる、禍々しい、まるで鋸のような刺々しい刀であった。

キュウワワワツツ

鋸の小さな歯がキュウキュウと互いに擦れ、気味の悪い不協和音を奏でるツ

再びスタンドを出現させる余裕さえ無いツ

何とか身を立て直した貞夫とレディ・バオーとが、正面から切り結ぶツ！

貞夫とレディ・バオーがつばぜり合いの形になるツ！

同時に、二人の側面からパワースレイブが突撃してきた。

『Gyisaaaaaa!』

パワースレイブの拳が貞夫めがけてうなりを上げるツ

「!?チツ」

間一髪、貞夫はつばぜり合いの刃を外した。

身をひるがえしざま、一瞬だけジギー・スターダストの拳だけを出現させ、レデイ・バオーを押し返した。

そして身をまるめ、パワースレイブの拳を避けるッ！

だが、貞夫の姿が消えても、パワースレイブの拳は止められないッ
「何だとオオ」

小暮が驚愕の叫びを漏らす。

ドゴオオオツ

貞夫に代わって……パワースレイブの拳がレデイ・バオーに突き刺さった。

「ヴオオオオオンンツ」

ベリツベリツツ

レデイ・バオーの体が杉の立ち木をへし折りながらぶつ飛んでいく。

「終りだ、ウオオオオオオオツ」

地面に寝そべっていた貞夫は、起き上がりざまにパワースレイブの胴を薙ぐッ

だが

パキン……

パワースレイブの胴体に食い込みかけた刀が、折れた。

貞夫は、パワースレイブの蹴りをまともに喰らい、吹っ飛んだ。

「ガツ……クソツ」

「ほう？とつきに急所を外したのか？やるな、思ったより粘るものだ……感心したよ。だが、刀が折れてはもう手はあるまい。そんなちっぽけなスタンドなど、どんな能力だろうと俺の敵になれるとは思えないしな。それから……」

小暮が笑った。地面に伏しているジン・チャンの頭を踏みこむ。

「このジン・チャンは、お前の家族を警護していたのだろうか？そりゃあ、まずいンンじゃあないかああ？」

「何が言いたい？」

「わかるだろう？家族を警護しているものが誰もいないってことの意味を？」

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

「わかるな、貞夫。『家族の命を守りたくば』自殺しろ」

ヒヤハハハハハハツツ

小暮が笑った。

「……腐りきった野郎だ……」

リリリリ

と、ちようどその時、小暮のポケットトベルが鳴った。

「……フン」

小暮はポケットトベルの表示を確認すると、懐からトランシーバーを取り出し、貞夫に放った。

「貴様の家に送っておいた部下からだ……出てみる」

「……」

貞夫は言われるがままにトランシーバーの通話ボタンを押した。

「……親父か……」

電話口から聞こえたのは、息子の声であった。

その声を聴いた途端、それまで保っていた貞夫のポーカーフフェイスが崩壊した。

「承太郎……ッ けがはないのか？母さんは無事かッ」

トランシーバーにかみつきかねない勢いで、貞夫が叫ぶッ

「？……ああ、無事だぜ」

「……スマンツツ！絶対お前たちを守り切るはずだった。決してお前たちを……」

「おうツ……だが、アンタが今まで何をやっていたのか……おかげで理解できたよ」

「スマン！許してくれッ」

ヤレヤレだぜ。と承太郎が笑った。

「おい……何を誤解してやがる？俺たちは無事だといったろう」
「えっ？」

「フン、襲ってきた馬鹿どもはすべて俺がぶっ飛ばしてやったぜ……今、ジジイが襲ってきた奴らを締め上げて、アンタの話を聞いたところだ」

「えっ？なんだって……」

と、承太郎の声が途切れ、無線機の先で話している人物が交代した。「サダ君、聞いたよ」ホリイの声だった。「……ゴメンね、サダ君が一生懸命私たちを守ろうとして事、知っちゃった。それから、サダ君のお友達の事も聞いたわ。私たち、彼に一人で戦わせてしまっていたのね……」

「ホリイ……君は……」

貞夫は、ふつ　と無線機の手からホリイがほほ笑んだ気配を感じた。

「サダ君、でもね……アナタが重いものを抱えて一人で戦ってたのはずっと感じてたよ」

わかるのよ……子供の時からお父さんのことをずっと見てたからね。

バリバリバリ……無線機から、何か、透明なツルの様なものが生えた。そのツルは、今にも消えそうな様子で、頼りなく瞬いている。

「これは、もしかして義父さんの……」

これは、ジョセフのハーミット・パープルのビジョンのようであった。しかし、いかにハーミット・パープルとは言え、電波越しの発現では微かなビジョンしか出せないようであった。

「サダよ、ホリイと承太郎が貴様を許すといっておるからのオ、ワシも手伝ってやろう……いいか、ハーミット・パープルに流れる波紋を貴様の『気』で、廻せ」

電話越しに、ジョセフの声が聞こえた。

言われたままに、ツタを流れる『波紋』の『気』をつかみ、体内で練りなおしてふたび『ツタ』に戻す。

貞夫は『波紋』を使うことはできない。だが、古武道の『気』の応用ととらえて、すでにある『波紋』を体内で収束させたり、逆に発散させることができるのだ。

『波紋』を収束させ、再びハーミット・パープルに戻す。

すると、消えかかっていた『ツタ』がノロノロと貞夫の腕を登り……赤石に触れた。

ブオオオオンン！

ハーミット・パールが赤石に触れると、赤石が震えだした。その震えが、貞夫の体とハーミットパールに伝達していく。

(これは……波紋ッ?)

赤石の震えが伝わるたびに、ハーミット・パールのビジョンがくつきりと見え、力を増していく。

同時に、貞夫の体に波紋のエネルギーが流れ込んでいく。

波紋は、貞夫の体に染み渡り……体に溜った疲労を追い出していく

……

「!?これは……まさかッ」

そのハーミット・パールの蔦に絡まって、もう一本、まるでイチゴの茎のようなスタンドの『植物』が現れた。その『植物』はあつという間にその数を増し、やがて束なり、小さなリスの姿になった。

そのスタンドが伝える魂の形は、色は、その香りは、貞夫が良く知っているものであった。

間違いない、それはホリイの魂の力であった。

「これは……」

『これはね、私のスタンドよ……ツリートップって名付けたの』

お父さんの能力に乗せて、君に送るわ。無線機越しに、ホリイが言った。

「ばかな……君にもスタンドが……一体いつから?」

『……4年前からかな』

「そうか、あの時か……」

貞夫は唇をかんだ。

4年前、ホリイはディオと言うジョースター家にあだなす吸血鬼の影響で生死の境をさまよった。

だが……そんな一大事にも関わらず、そのとき貞夫はDRESSの南米支部をつぶすために奮闘していた。ホリイの横にいてやることさえしなかったのだ。

それは、後で思い返しても、貞夫にとっては悔いても悔いきれない『痛み』であった。

「あの時、俺は……」

うまく言葉が出ず、立ちすくむ貞夫にリスⅡホリイがクスツと笑った。

『わかってるわよ。サダ君、もうあの事を悔いるのはやめて……私のキモチを、今伝えるわ……』

ツリートップの『リス』が、その手に持っていたスタンドの『イチゴ』を貞夫の唇に押し付けた。

「これは……」

その『イチゴ』を通して、ホリイの魂と精神の力が貞夫のスタンドに流れ込む。

貞夫の精神が、悔いが、浄化されていく……

「ああ……」貞夫は涙を流した。

「伝わるよ……わかるよ……ホリイ」

『……サダ君、応援してるよ。がんばってツツ……』

薄れゆくホリイのスタンドが、最後に貞夫にそつとささやく……

チクリと、ジョセフのスタンドの刺が貞夫をつつき……消えた。



「？何だ、今のスタンドは……」

小暮は、展開が変わったことに気が付いた。

こんなはずではなかった。貞夫が鳴きながら自殺するのを楽しみにしていたのに……その上で、しあげに奴の家族をバラバラにしてやる予定だったのに……

だが、先ほど無線機から飛び出した光の植物のようなスタンドが貞夫に力を与えているのか、貞夫から恐ろしいほどの『凄味』が発せられているッ！

「……ジギー・スターダスト」

貞夫が自分のスタンドを再び出現させた。

その姿は、だが先ほどとは異なっていた。

貞夫の傍らには、5歳児程度の大きさのビジョンが、3体現れていた。そのどれもが甲冑を着込んだ、荒神の様な外観をしていた。姿はこれまでとほぼ同じ外見、だが三体の小柄なスタンドに分裂している

のだ。

そのジギー・スターダストのビジョンが、貞夫の体にしがみついた。一体が貞夫の右肩に、もう一体が左肩に、そして残った一体は心臓の上に、それぞれ顔だけを出して体内に潜り込むッ

「ヴァルツヴァルツヴァアアアルウウウツツ」

レディ・バオーが再び飛び込んでくる。

今度は、何百本ものビースス・シュティンガーを放ちながらだッ

だが、貞夫は手にした折れた刀を両手で掴むと、その両肩のスタン
ドが吼え声をあげ……

キュイ————ンンンンツツ

その刀を『強化』した。

間髪入れず、貞夫は『強化』された刀を目まぐるしく振り回したッ
!

折れた刀は、貞夫めがけて放たれた無数のシューティングビースス・シュティンガーをあつという間に叩き落とした。

さらに貞夫は、手裏剣を懐から取り出して、突進してくるレディ・バオーに投げつけるッ

レディ・バオーはその手裏剣を掴みとろうと両手の平を突き出した。だが……

ブシユユツ

突き出した両手を突き破り、手裏剣がレディ・バオーに突き刺さるッ

「ヴァアツルンツツ」

レディ・バオーがバランスを崩した。

『オラアアアッ!』

貞夫と、貞夫の体に顔を出したジギー・スターダストが叫ぶッ

貞夫は折れた刀を振り回し……レディ・バオーの心臓を、突き通した。

「何だとオオオオツ」

小暮は、恐慌にかられた顔でパワースレイブを構えた。

「貴様、スタンドをコントロールできるようになったのかッ」

「パワースレイブ……強力かつ超高速の破壊力を持つスタンド、しかも殴った対象を破壊するか、精神を屈服させ従えるか、選択できる能力を持つ」

組織を作るのには最適のスタンドだよな。

貞夫は折れた刀を放り投げ、落ちていた木の枝を二本、拾った。先ほど使っていた『折れた刀』は、レディ・バオーの体を貫いた際に、ついに砕けてしまったのだ。

「その力で政府内にDressのシンパを集めていたという訳か……だが、それももう終わりだ」

「ふざけるなあああああああああああ」

パワースレイブの渾身のラッシュッ！

だが、すでに貞夫は手にした二本の枝に、ホリイによって精神力を強化されたジギー・スターダストのパワーを送り込み、その枝の破壊力を最大限に高めていた。

パワースレイブのパワーを、二本の棒はしっかりと正面から受け止めた。だが、折れないッ

二本の普通の枝が、白く、激しく、熱く輝くッ

『オラアッ！』

貞夫はその枝を、パワースレイブに叩きつけるッ

そして、パワースレイブのラッシュと真正面からぶつかり

ヴエツリイイインンッ！！

貞夫は、そのスタンドを真正面から打ち砕いた。

「ばっばかなッ日本の闇を牛耳るこの俺がッ！！」

小暮は両手をついた。その手が、まるでカサカサに乾いた土くれのようにパラパラと崩れていく。

「……もう退場すべき時が来たってわけだ。小暮大士」

貞夫は崩れゆく小暮にそう言い捨てた。

「そうだ、お前……『赤石』がほしいって言ってたな……じゃあ選別にくれてやるよ『赤石』のパワーを」

貞夫は、古武道の呼吸法で気を『練った』。

その気が右手に集まっていく。

その右手には『赤石』が輝いていた。『赤石』は太陽の光／『波紋』の力を増幅させることが出来るのだ。

もちろん、武道の気は『波紋』のエネルギーとしては似て非なるものである。『波紋』の代わりにはならない。だが、ジョセフから授かった『波紋』は、まだ貞夫の中に微かに残っていた。その『波紋』を『気』が絡みとっていき、『気』の流れにからみとられた『波紋』のエネルギーが『赤石』に集まっていく。

「ジギー・スターダストツ！」

貞夫のスタンドが三体とも『赤石』に触れた。

バシユツ!!

『太陽のエネルギー』が、能力が強化された『赤石』よりほとぼしり……

小暮の眉間を打ち抜いた。

(終わったッ)

貞夫は、傍らに倒れているジン・チャン・チャンの体をそつと抱きかかえた。

(ジン・チャン……『終わった』よ。ありがとう……)

貞夫の目から涙があふれた。

(俺、この件が落ち着いたらすぐに台湾に行くよ。行って、お前の一族に会ってくるよ……)

8日後：

ウツ…ウツ……

海岸線で泣いている少女を見つけ、貞夫はゆつくりと近づいて行った。

その海岸線の向こうには、炎に包まれたDRESSの基地が見えた。つい先ほど、貞夫が潜入したところだ。

貞夫が潜入したところには、DRESSの基地は完全に壊滅していた。

数人の生き残りを尋問したところ、バオーこと橋沢育朗と凄腕のスタンド使いであるウォーケン、それからバオーの開発者の霞ノ目博士

の三体が地下水脈に落ちたことを知った。

その後起こった激しい爆発と水蒸気から、三人とも落盤に巻き込まれて死亡したものと考えられていた。

つまり、貞夫はまた『間に合わなかった』のだ。

「……スマレさんだね?」

「……アンタ…誰?」

泣いていた少女が、警戒心もあらわに貞夫を睨みつけた。なかなか気の強そうな少女だ。この少女が、橋沢育朗と共にDRESSから逃走中であつた高野スマレに違いなかつた。

「ワタシは……空条貞夫だ。日本政府のエージェントみたいなものさ」

「日本政府のツ!?アタシをどうしようって言うのよツ」

「君を助けに来たんだ」……それから、君に謝りたかつたんだ。

「間に合わなくて、悪かつた」

貞夫は目の前の少女に土下座した。

「ワタシは育朗クンの力になろうと思つたのに……彼の……橋沢育朗君の手助けに間に合わなかつた」

「なっ……なによ、そんな事を言われても……私にどうしろって言うのよオオオツ」

ウツウツ……

スマレが目を真っ赤にしながら貞夫に殴りかかつた。

「育朗はどこツ!彼が死ぬわけないわツ!彼を助けてよおお——
——ツツ!!」

貞夫は、スマレの拳を避ける事も、防御する事もしなかつた。ただスマレに殴られるに任せていた。

「あの火が消えたら……もう一度彼を探すよ」

貞夫は対岸に燃え広がる炎を見ながら言った。

おそらく、手遅れだろう。あの火にまかれたのであれば、橋沢育朗君がまだ無事でいられるとは到底思えなかつた。

「育朗クンを救い出すのが間に合わなくて、悪かつた」

貞夫はスマレに殴られながら、青い、青い空を見上げる。

(ジン・チャン……育朗くん……俺の力がもつと強かったら君たちを助けられた……スマンそして、ありがとう。終わったよ)

自分たちは大きなものを失った。だがたしかに、DRESSをつぶしたのだ。

生き残った者は、彼らの思いを引き継ぎ、前に進まねばならない。

やがて貞夫は、泣きつかれたスマイルをそっとおぶり、再び歩き始めた。

空条貞夫の孤闘 — 2000 — その1

「オヤジ……久しぶりだな。元気かい」

「ああ……」

貞夫はそう答えた後、少し黙って相手の反応を待った。だが、電話口からは沈黙の時間が流れるだけであった。

そうだった。貞夫は苦笑した。承太郎も自分と同じ無口な人間であった。

ここは父親である自分から話を続けなければ。貞夫は、少し無理をして自分から言葉をつないでいった。

「最近演奏活動も少しセーブしている……数より質を大事にしようと思つてね。それで今は、長い間もてなかつた妻との時間を満喫しているところさ……近々オマエのところにも、顔を出そうと思つているんだ。ジョリーンと奥さんは元気かい？」

貞夫は努めてニコヤカに話しかけた。

「……ああ、こっちはボチボチだぜ」

承太郎は、少し歯切れ悪く答えた。

そして、おもむろに話題を変えて、本題を口にした。実に息子らしい。今やるべき事に集中している——少々集中しすぎている——態度だ。

「実は、少々マズイ案件が出てきたのだが……ヤボ用があつて、俺が対応する時間がないんだ……アンタに代わりに調査を頼めないだろうか」

電話越しの息子の声は、いつも通り憎たらしいほどに落ち着いた口調に戻っていた。

「もちろん構わない。詳しい話を聞かせてくれないかね？」

「助かる……調査してほしいのは、1999年に杜王町から100Kmほど離れた場所に隕石が落ちた件だ」

貞夫が思っていたよりも、承太郎の電話越しの口調はホツとした空気を帯びていた。どうやら思つたより息子は困っていたようだ。

久しぶりに息子の力になってやれる。

貞夫は少し嬉しい気持ちになった。

「ああ……DRESSの被害にあつた若者がついに助け出された件だな……承太郎と、お義父さんの一族が総出で対応してくれた件だろう？」

お義父さんもまだまだお若かかったな。貞夫はクスツと笑った。

「育朗くんは元気かね」

「ああ、あの件では、裏で色々と便宜を計つてくれて助かったよ」

「なに、ちよつと昔のコネを使つただけさ。それに……新生DRESSの話は父さんにとつても衝撃だったからね」

奴らが相手なら、いつでも『現役』に戻るつもりさ。もともと私が取りこぼした種だからね。その『覚悟』は口に出さなかつた。

だが口に出さずとも息子には何か伝わつたのだろう。承太郎の声が一段穏やかになった。

「だが、オレが出会つた新生DRESSは、それはもう昔のDRESSでは無かつた……と思うぜ。そりやそうだろう、真のDRESSはとつくにアンタが潰してくれたんだからな。日本拠点は8年前に、海外の拠点は5年前に、すべてヨ……とはいえ、新生DRESSの奴らは因縁的にJosterと空条の手で始末すべき敵だとは思つてるぜ……だから、ヤツラの始末は俺が引き継ぐ……イヤ、引き継いだぜ。アンタはオフクロについていてくれればいい」

「そうか……そうだな」

電話越しに貞夫はうなずいた。

DRESSは自分が完全に倒すべき敵だった。だが、いつの間にか時代は変わったのだ。今は承太郎が自分の代わりに闘つてくれる。

それでいいのだ。『自分がすべてを立つべき時期は終わった』と、そう考えるべきなのだ。

先ほどの嬉しい気持ちが薄れ、貞夫は少しさびしく思った。

自分が始末しきれなかつた敵を、いまは承太郎が代わりに引き受けている。

危険はすべて自分で引き受け、家族を決して危険な目に合わせる気はなかった。そのつもりで戦っていたのだ。

だが、自分の後を追ってくれるものがある。もちろんそれは悪い気分ではなかった。

それで、満足すべきなのだ。

それは、わかっていた。

「ああ………だが、今回の件だけは頼めないか。先ほど話したが、俺もこっちで立て込んでいる案件があつてな……手が離せないんだ」

「フム……話をそらさせてすまなかった。もちろん手伝おう。それで、隕石の件がどうしたのかい？」

「実は、隕石は杜王町に落下する前に複数に分裂していたことがわかった。もちろん大半は海の中に落ちたのだが……」

「陸に落ちた物もあったという訳かい？」

「そうだ。実は、隕石のかけらが一つ、山陰地方の山の中に落ちたと聞いている……しかも、間の悪いことに今そこには育朗とスミレ、それからホル・ホースの野郎が偶然向かっている……」

だが、育朗クンとも、ホル・ホースのヤロウと連絡が取れねえ。電話越しに承太郎の舌打ちが聞こえた。

「わかった、対応するよ……だが、もう少し教えてくれ。まず知りたいのは、その隕石が落ちた正確な場所と、最後にホル・ホース君と連絡がとれた場所だ」

ああ、今から細かなことを伝える……と、息子が説明する声を聴きながら、（オマエの望みなら何でもするよ）と、貞夫は心の中でつぶやいた。

サックスを置いて、再び刀を手に取る時がきたのだ。

『……もうすぐ着くよ』

『この木、覚えている物よりだいぶ小さく見えるわ』

『そう言うモノだよ。君はあの時まで9才だったんだから』

『そつか……そうだよね』

『おい？あれか……アルファベットでTAKANO と書いてある看板があるぜえ』

『——そうよ、高野養護園……私が育ったところよ……みんな、まだいるかな……』

相棒とその連れ合いはなにやら色々と話しながらしばらくその建物の前をうろうろとしていた。だがようやく、意を決したらしい。

相棒の連れ合いが、ゆつくりと建物に向かって歩いて行く。すかさず相棒もその横に並び、黙って連れ添いながら歩いていく。

『ゲンペーッ、ここで待っててね』

少し歩いたところで、相棒の連れ合いがくるつと振り向いてゲンペーに手を振った。

そして、二人連れだつてその建物の中に姿を消した。



ゲンペーはしばらくその場で相棒の帰りを待っていた。だが、二人はすぐにはもどつてこなかった。

二人につきまといているもう一人のニンゲン、その男は一度ヒヒヒツと笑ったきり、ただ建物の外壁に寄りかかり、黙って身じろぎもせずにいる。

男は、あの嫌なにおいのする『タバコ』と言う物に火をつけて、ただ待っていた。

時折キョロキョロと目を動かし、近くを歩くメスを探しているあの様子では、当面そこを動かずにいるつもりなのだろう。

このニンゲンは。時にボールを投げたりしてゲンペーと遊んでくれるいい奴だ。だが、今はそんな気分では無いようであった。

ニンゲン達からほっておかれたゲンペーは、はじめの頃こそおとなしくしていたが、だんだん、ただ待つことに飽き始めていた。

漂ってくる相棒の匂いから判断すると、相棒は特に危険な目にあっているわけではないようだ。きつとつまらない、ニンゲンのゴタゴタで時間がかかっているのだろう。

ゲンペーはすっかり退屈して、その建物の裏手にある山の様子でも

見に行こうかと考え始めていた。

何やら面白そうな、好奇心をくすぐる『ニオイ』が、山から漂ってきていたのだ。

もういい、山を見に行こう。相棒はまだまだ戻ってこないはずだし、戻ってくればすぐわかるはずだ。

「イ——ダー」

インピンが、山に向かうゲンペーを目ざとく見つけて背中に飛び乗ってきた。建物の中にいるニンゲンの子供たちの臭いに気が付いたのだろう。小さなインピンにとって、ニンゲンの子供たちは『天敵』なのだ。

「がうつ」

ゲンペーは、寛大にもインピンを背中に乗せたまま、山へ向かっていった。

建物の裏山の中は緑豊かで、色々な『ニオイ』に満ち溢れていた。ゲンペーはすっかりうれしくなって辺りをいろいろ嗅ぎまわりながら、木々を飛び回った。

いろいろ嗅ぎまわっていて、思いつきり走りたい衝動にかられたゲンペーは、少し全力で走ってみることにした。

ゲンペーは、まるで空を飛ぶように走った。通常の犬と比較にならないスピードで、あつという間に峰を一つ、二つ越え、谷を渡り、周囲に全く人の気配が無い所まで走って行く。

寄生虫（モデュレイテッド）バオー：宿主に非常に高い戦闘能力を与える、そのバトル・クリーチャーをゲンペーは三匹も身に宿していた。そのゲンペーの運動能力は、もはや普通の生物の持つそれをはるかに超えているのだ。

そんなゲンペーが本気で走り出せば、あつという間に普通の犬の足では行きつけないような森の中に入ることが出来る。

ゲンペーは、あつという間に尾根を越え、人里からだいぶ離れた土地にやってきた。そこまで遠く離れたところに行くと、周囲によって人の気配がなくなつた。そのかわりに、いい匂いのする花や木の実、木の皮、虫の存在をたつぷりと感じる事が出来た。

溪流の匂い、シカや狸の匂い。

ゲンペーは大いに満足して周囲のニオイをかいで回った。すると、そんな匂いに交じって、ゲンペーの鼻にホンの微かに、あの匂いが漂ってきた。

それは、ゲンペーとほぼ同年代の子犬、それもたくさんの子犬の匂いであった。

(?なんだ、何でこんな山奥で子犬達の匂いだけがするんだ?)

気になったゲンペーは、何とかその匂いをたどろうと色々かぎまわった。

だが、先日に降った雨のせいか、匂いはあまりに微かであった。ついにゲンペーはその匂いを追跡することをあきらめようとした。

その時……

ガサツ

風下の山から、枯葉が擦れる音がゲンペーの耳に響いた。しかも、音がしたのと同じ方向から、先ほどかいだものと同じ犬のニオイがする。

(しまったッ風下から回り込まれていた?)

うかつだった。

ゲンペーは瞬時に反転した。

すると目の前には、生後10ヶ月位の、つまりゲンペーとほぼ同い年の子犬が立っていた。

その子犬は黒い虎毛を持つ甲斐犬で、黒光りする毛皮がキラキラと美しく光っている。だが、ゲンペーに向けられるその目は、敵意に満ち溢れていた。

(何だコイツ? ガンつけやがって、ピカピカした毛皮のキザツたらしい奴だな……だが、なぜほとんど匂いがしないんだ?)

ゲンペーは首を傾げた。

例えばどんなに立派な成犬だろうが、熊だろうが、普通の生き物が『バオー』たるゲンペーをおびやかせるわけがない。まして目の前にいるのはまだ成長途中の子犬だ。ゲンペーは目の前の犬には何の脅威も

感じていなかった。

だがそれでも、この犬からほとんど匂いがしないのは不思議であった。

「動くなッ！お前は囲まれているッ」

子犬はゲンペーに警告を発した。

「ちよつとでも動いたら、仲間たちが寄ってたかってお前を引き裂くぞ」

「なあ……お前なんでそんなにけんか腰なんだよ、気楽にいこうぜ？」

余計な戦いはメンドーなだけだ。ゲンペーはヘラツと笑って見せた。

「何言ってる？ここは俺たちの縄張りだぞ……お前みたいなよそ者を追い払うのは当たり前だ。誰だ？お前ッ」

その子犬は胡散臭げにゲンペーを睨み付けた。

「なあ、お前達の仲間って……なんで子犬の臭いしかないんだ？成犬は何処にいる？」

「質問しているのは俺だッ！ふざけるなッ」

「おお……悪い悪い、怒るなよ……俺はお前たちの敵じゃねえーんだからよオ」

「じゃあ……さっさと出て行けよッ」

「オイオイッ」

子犬は、ゲンペーめがけていきなり飛びかかってきたのだ。だがその子犬の首筋をゲンペーはヒョイツとくわえ、かんたんに放り投げた。

「こいつ、やる気かよッ！」

放り投げられながら子犬が叫んだ。驚いた事に、子犬は空中で器用に身をひるがえし、余裕を持って両足で着地した。なかなかの運動神経だ。

「やるってんなら、容赦しねえ、玉とつたらあッ！」

「よせつての」

ゲンペーはげんなりした気分で、つつかかってくる子犬の首を押さ

えつけた。

「俺はただ散歩をしていたただけだぜ。お前と戦いたくなんかねーよ」

「くっそオオオツ！こっつ……殺せツ！きつさと殺しやがれツ！」

「……なんだよコイツ」

子犬の剣幕にすっかり閉口したゲンペーは、肩をすくめた。

「勝手に盛り上がってんなあ……バカバカしい。付き合ってられねーぜ」

もう、出て行くか。少々げんなりしたゲンペーは、前足の力を緩めて子犬を解放しようとした。

その時

「チ……チヨコを離せツ」

またしても背後から、震え声が聞こえた。

振り返ると、そこにはさらに3匹の幼犬たち——生後半年位か——

——がいた。三匹とも、真っ白な毛皮の紀州犬だ。

——やはり、こんなに近くに来るまで、ゲンペーは幼犬達のニオイをほとんど嗅ぎ分けることが出来なかった。

「なんだ、お前らあ??？」

「スー、ユイ、モア……」

どうやらゲンペーが組み敷いている子犬はチヨコと呼ばれているようであった。

そのチヨコが、ゲンペーに押さえつけられたままうなり声をあげた。

「!？」

不意にチヨコが激しく身を震わせ、ゲンペーはうっかりチヨコから前足を放してしまった。チヨコはさつとゲンペーの手の届く場所から離れた。

と、そのとき何故か強烈な臭気がどこからか漂ってきて、ゲンペーは顔をしかめた。

「ガッ……」

チヨコがゲンペーから逃れると、すかさずその周りをスー、ユイ、そ

してモアが取り囲んだ。三匹は心配そうにゲンペーの様子をうかがい、チョコにまとわりついていた。

「チョコオツ、大丈夫？」

「……もちろん大丈夫よ」

チョコは三匹に向かって微笑み、チョコは近寄ってきた幼犬たちの鼻をペロンと舐めた。そして再びゲンペーの方を向く、真剣な表情だ

「お前……強いな……オ、俺のことはいい。だがこいつらは見逃してくれ」

先ほどとは打って変わった神妙な口調であった。

（コイツ……自分の身を捨てて、仲間を守ろうとするなんて。やるじゃないか）

ゲンペーは少しだけチョコのことを見直した。だが……感心する以上に、もっと大事な『ツボ』にゲンペーは引っかかってしまった。

「お前ツツ、『チョコ』だつてえ？女の子かよ。ダッセエ??」

ヒヤツヒヤツひやひやツツ

先ほどの勇ましい口調と名前とのギャップに、ゲンペーはどうしても大笑いの発作を止めることができない……

「てつてメエ……」

チョコの口調が再び怒りに燃え上がり、どんどん低い声になっていく。

「いツイヤ、悪いなツ。ちよつと予想外だったもんでよ……ぷっ」

とうとう我慢できず、ゲンペーは吹きだした。一旦笑い始めると、どうしても笑いを止めることが出来ない。結局、ゲンペーは息が続かなくなるほど、大笑いをして転げまわった。

ヒヤツ、ヒヤヒヤヒヤツツ、ハ——、ヒイイ——……クツクルシイイ——ハツ、ハツ……

ゴゴゴゴゴゴゴゴ

「お前たち……後ろに下がってろ」

酷く、冷静な、平坦な口調でチョコがスー、ユイ、モアに言った。

「ちよつチョコね……」

谷底を見下ろし、ゲンペーはブルツと体を震わせた。襲ってきた敵を調べるため、ピヨンと谷底に飛び降りる。

谷底に倒れていた生き物は、ゲンペーがじっくり見ても、においをかいでも、まったくその正体がわからない不思議な生き物であった。

ゲンペー達は知らなかったが、彼らが遭遇したのはユーラシアクズリ（貂熊）であった。

イタチ科クズリ属、本来の生息地は中国北部、モンゴル、ロシア。体長一メートル、体重20キログラムの『恐怖心がない動物』である。

怖いもの知らずで名高く、一説にはホツキョクグマやオオカミの群れでさえ追いつく事があるほど、気性が荒いと言われている。

なぜ、そんな危険な動物がここ、日本の山陰地方にいるのか、それは謎であった。

謎の敵：ユーラシアクズリの死体を調べ、ゲンペーは谷底から上がった。すると、崖の上ではチョココがグツタリと倒れていた。

「アイツは倒したぜ……おいチョココツ？大丈夫か？」

「お……お前、奴をやったの……か？」

倒れていたチョココが、首をもたげ、あえいだ。

「やる……じゃねえか。見なおし……たぜ……」

「大丈夫かよ、お前」

ゲンペーは心配そうにチョココの様子を確認した。

「かッ……かすり傷だけ、こ、んな……もの」

だがチョココはそれだけ言うと、気絶した。

「チッ」

チョココの傷を見たゲンペーは、舌打ちをした。その傷は無残にめくれあがっていた。

実際はゲンペー自身の怪我の方がかなりひどかった。だが、ゲンペーに潜む三匹の寄生虫バオーの力により、その怪我はみるみるふさがって行く。より軽傷ではあったが、深刻なのはチョココの方であった。

「……チツ」ゲンペーは、チョコの傷口をなめた。あらかじめ自分の舌を噛んで血をだしておき、自分の体を流れるモデュレイテッド・バオーの分泌物をチョコの傷口に塗り込んでいく。

「いっ……痛ってえッ。お前の舌、どうなってるんだよ」

ネコみてえにザラザラなのか？この、ネコ野郎ッツ。

あまりの痛みからか、それともバオーの力によるものか、すぐにチョコが気絶から回復し、毒づき始めた。

「……だめだ、傷が深すぎて応急措置にしかならね——、こうなったら、相棒に直してもらうしかねえな。おい、暴れるなよ」

ひよいツとチョコを抱え上げたゲンペーは、そこで何事かに気が付いて顔色を変えた。

いつの間にか、スー、ユイ、モアと呼ばれていた三匹の子犬、それからインピンの姿が消えていたのだ。

何の気配も、匂いすらなかった。



いなくなつた4匹の事は気になるが、まずはひどい怪我を負つたチョコの手当が最優先だ。ゲンペーは、はやる心を抑えてチョコを背中にオブリ、いったん相棒の元へ戻つた。

『こりゃあ、ずいぶん鋭い爪にやられたな。熊か？』

一番初めにゲンペーとチョコを見つけたのは、ヒヒヒツと笑うニンゲンであった。その男が、チョコの体に手早く包帯を巻いていく。

『この子、かわいいそうに……』

スマレ（相棒のツレアイだ）がチョコの頭をそつとなぜた。

「あぎッ」

そのときゲンペーは、スマレの膝の上に抱かれていた。

その背中を、そつとスマレが撫でた。

優しく首筋を撫でられ、ゲンペーは目を細めてうっとりとその感触を楽しんでいた。スマレの匂いも気持ちがいい。インピンが行方不明になり、自分をかばつたチョコが苦しんでいる横で完璧にリラックスしている自分に、少しだけ罪悪感も覚えた。

『大丈夫だよ、スマレ、ゲンペー。この子は助かるよ……ブル・ドーズ・

ブルースツ！」

相棒はにつこり笑い、相棒の前足の『爪』をチョコに向けて飛ばした。

バシユツ！

相棒の『爪』がチョコの首筋に撃ち込まれた。しばらくして、その爪に仕込まれていた薬が全身に回ったころ、チョコはパチツと目を開いた。

「よう」

ゲンペーはスマレの手の中から抜け出した。そして、パシツと前足の肉球の部分でチョコの頭を叩いた。

「生意気にも、俺をかばおうとしやがって……だがおかげで助かったぜ」

「……ここは？なんでニンゲンがいるんだ？お前、まさか……」

睨むチョコに、ゲンペーが苦笑いした。

「大丈夫だ。こりゃあ、俺の群れの仲間だよ」

「お前の群れ……」

チョコは、胡散臭げに周囲のニンゲンを眺めた。

「お前、飼い犬なのかよ……ところで、スー達は何処だ」

「ああ……」ゲンペーが頭を下げた。「悪い、俺が奴と戦っているすきに、別の犬共にさらわれちゃったよ」

「なんだってエ」

チョコは目をいからせた。よろよろとした体に鞭打って、すくつと立ち上がる。

「……Deathの連中だな。すぐ取り返してやるツ」

チョコは、すぐさま山に向って走って行った。

『あの子、もう少し休んでいった方がいいのに』

『……人間とは馴れ合わんってことだろ。俺はご立派だと思っせ、お嬢ちゃん。むしろ、奴らの立場じゃ人間に下手になれあうとまずいだろ』

『それはわかるけどツ、怪我してるんだからさあツ……それに、さつきからインピンの姿も見えないの……どうしたんだろう……』

『大丈夫だよ、ゲンペーはすごく強いんだ。知ってるだろう？彼がいて、敵なんか問題になるわけないさ……それに、インピンはあんなに賢くて素早いんだから、困ったことになるわけないよ。万が一インピンが困ったことになっていたら、ゲンペーがあんなに落ち着いているわけないしね……君のWitDも危険なビジョンや警告を見せているわけじゃないんだろ』

『でもッ』

『わかっている。用事を済ませたら、僕も《ブラック・ナイト》で探しに行くよ』

『がうっ』

ゲンペーはうなづいた。

チョコを追わなくては。

群れの仲間たちが話しているのをしり目に、ゲンペーはそつとチョコを追いかけて山に戻るべく立ち上がった。

そのゲンペーを目ざとく見つけ、背後から相棒が声をかけた。

『ゲンペーッ』

『バウンツ?』

『あの子の傷は尋常じゃなかった。頼んだよ』僕もすぐ後を追うよ

相棒は朗らかに言った。

『がうっ』

任せとけと、ゲンペーは相棒にうなづいて見せた。だが相棒の手を煩わせるつもりはなかった。



「……オイ……なにしに来やがった?」

一人山道を登っていたチョコは、追いついてきたゲンペーをうつとおしそうに見やった。

「……借りを返しに来たぜ。あの三匹のカタキうちだろ。手伝ってやる」

ゲンペーは肩を軽くチョコにぶつけた。

「お前の助けなんて、イラネ——よ」

チョコが肩をすくめた。

「それに、アイツラは生きてる。カタキ撃ちじゃねえ——ッ。助けに行くんだ」

チョコは少し口ごもり、付け加えた。

「アイツラはよオ、一週間前に目の前で親を……だから、お……オレが親代わりになってやるって、決めたんだよ」

「……………」

ゲンペーは黙りこんだ。その心に思い起こされたのは、自分を『怪物』からかばって犠牲になった両親の後ろ姿だ。

「……………お前の親は？」

「……とつくに死んぢまったよ。だけど、アイツラの親はいい親だったんだ。仲良くてヨ」

ゲンペーは、ただ『そうか』と相づちをうち、話題を変えた。

「へえ……ところで、あのさつき戦った変な生き物、あの狸と狼がまざったみてえな奴。ありやあ、あの一匹だけか？」

「……あと、二匹いる」

チョコはポツリと答えた。

「俺が倒したアイツ、犬じゃね——ぜ。ありやあ？きつと、オオイノシシより、つええ。下手な熊より強いかも知れね——ぜ」

そんなの二体も相手したら、お前……死ぬぜ。

「アイツが狸と狼の血が入った奴なら、ア……オレだって狼と犬のハイブリッドよ」

チョコが言った。

「オレの親父は甲斐犬だけど、母さんは肥後狼犬だった……二人とも、俺の兄貴共々奴らにやられちまったけどよ」

「じゃあ、その狼の血が入っていたって言うお前の母さんも、お前の兄さんも……ヤラレちまったんなら、まだ子犬のお前が勝てるわけないじゃないか」

チツ。

イライラとチョコが足を止めた。

「ああ??そうかもな、勝ち目なんてないのかもなあ??だがそれが、どうだっていうんだッ……それともお前なら、勝てるってのかよッ」

チョコがにらみつけた。

「さあな……でもお前と俺が協力すりゃあ、もしかしてあの三匹を助けるぐらいは、出来るかもな」

「……」

「まあ……お前が止めても、俺は勝手にいくけどな……どうやら俺の連れも、つかまっちゃまったみたいなんだよ。うるさい奴だが、助けてやらねーと」

「へっ……」チョコが下を向いた。

「それを早く言えよ。勝手にしろッ」

『Bzyuuuaa!』

「伏せて下さいッ！運転手さんッ」

「ハッ……ハイハイッ——！！」

貞夫が突然襲撃を受けたのは、人がほとんどいない山道を進んでいるときであった。

何て事だ。

貞夫は、目指す隕石の落下地点を目指してバスに乗っていた。不意にそのバスの窓ガラスを破って襲い掛かってきた黒い影を、貞夫はかろうじてかわした。

『Giiiyaxtu!』

『Kwaaaaa!』

その黒い小さな影は、貞夫の周りをまるでスーパーボールのようにアチコチを跳ねまわった。

それは……猿だ。だが、普通のサルよりも圧倒的に素早い！

「なっ……なんですかッこれはア？」

また、ワンマンバスの運転手が大声を上げた。

バスの中にはほかに乗客はいない。貞夫と、運転手だけだ。

『Fgyuuu!』

猿が、大声を上げた運転手に襲い掛かる

「うあッ」

運転手が悲鳴を上げる

「まずい、ジギー——！猿を倒せッ！」

『オラッ！』

貞夫はジギー・スターダストを飛ばし、かろうじて猿を捕獲する
だが……

バリント

バスの正面ガラスが蹴破られ、新たな猿がバスの中に飛び移ってきた。

猿は……貞夫が捕まえる間もなく運転手に飛び掛かる。

「ウツギヤアアアッ」

顔面と首筋を噛み千切られたバスの運転手が、崩れ落ちた。

ギユワワワッ！

運転者を失ったバスは、コントロールを失ってスピンを始めた。

「まずいッ！ジギー、戻ってこい。」

貞夫は自分のスタンド、ジギー・スターダストを呼び戻し運転席に
飛び込んだ。

スピンをしたバスが、崖に向かって疾走していく……

「ウオオオオオオッ」

貞夫は運転手をかみ殺した猿を片手で放り投げ、思いっきりブレー
キを踏むッ！

車体がキシんだ。だが、タイヤがロツクされたバスは、完全にコン
トロールを失って崖に向かって滑っていく……

「ジギー——ッ！タイヤの摩擦力を強化しろッ」

貞夫が叫んだ。

キイイイイ——ッ

貞夫は崖ギリギリのところ、なんとかバスを無事に『停車』させ
た。

「ふう——まさに危機一髪、ヤレヤレだったな」

貞夫は大きく息を吐いた。

空条貞夫の孤闘 ― 2000 ― その2

バスを降りると、先ほどの無茶な運転が元でバスの車軸が折れ、タイヤがパンクしていたことがわかった。

つまり、ここからあの山まで歩いて行かなくてはならないという事だ。

貞夫はため息をついてバスから荷物を引っ張り出した。

こんなこともあろうかと思ひ携帯していた輪行袋から、貞夫はあらかじめばらしておいたマウンテンバイクの部品を引っ張り出した。レンチを片手に、マウンテンバイクを組み立てていく。

自転車でも、徒歩よりはましなはずだ。

と、

『Kuwaaaaa!』

またしても猿の声が鳴り響いた。

すぐさま、山の方から猿の黒い姿が現れた。

『Kuwaaaa!』

『Buyaaa!』

猿たちが、一斉に貞夫へ襲い掛かってきた。

「クツ」

貞夫はあわててバスの中に戻った。刀を抜いて周囲の座席を切断し、組み直して即席のバリケードを作る。

そうやって猿の侵入を防ぐと、貞夫はまたマウンテンバイクの組み立てにもどった。

バリケードの反対側に猿たちが突っ込み、喚きながらバンバンとバリケードを叩いている。

ガシャツ

時折、バリケードが反対から崩される音が聞こえる。

もう、この簡易バリケードもそう長くは持たないだろう。

急がなければ。

まずはストラップを外して部品を広げ、保護用の部品を外し、フレームとホイールを組みなおしていく。

このマウンテンバイク（MTB）は元々、ホリイと二人で富士山からのダウンヒルでも楽しもうかと、昨年買っておいたものだ。その時はたまたま演奏旅行が入ってしまったため、その計画は白紙となっていた。まさか、こんな（昔のような）荒事の場合がこのMTBのお披露目になるなんて……

貞夫は苦笑した。だが『後ろめたい』ことに、この修羅場を『楽しんでる』自分を、貞夫は確かに自覚していた。

「よし、行くぞッ」

組み立てを終えると、貞夫はバスの中でMTBにまたがった。思いつきりペダルを踏み、バリケードに突進していく。

バシユッ！

貞夫はバリケードを刀で切り開き、襲い掛かってくる猿を跳ね飛ばしながら、バス正面のガラスを突き破って外に飛び出した。

「オオラアアツツッ！」

貞夫のスタンド・ジギー・スターダストの二体がMTBのタイヤを、残った一体がMTBのギアの能力を高めていく。

「ヨシッ、行くぞオ!!」

バスの正面ガラスを蹴破って、貞夫は林道に飛び出した。華麗に着地を決め、一気に林道をMTBで駆け昇って行く。

その後ろをキーキー言いながら猿たちが追いかけてきた。だが、ジギー・スターダストの能力で強化したMTBの速度には追いつけないッ！

しばらく必死にペダルをこいだ後で、貞夫はちらつと肩越しに後方を振り返った。見る見る遠ざかっていく猿たちの姿を見て、貞夫は満足の笑みを浮かべた。

ところが、……

猿の襲撃から逃れてしばらく走ったところで、貞夫はふと周囲が妙に薄暗くなったことに気が付いた。

それも、貞夫の周りだけだ。貞夫の周りだけが、まるで小さな雲に囲まれたように妙に薄暗いのだ。

「ハッ！まさか……」

林道に入るとカラスの襲撃は弱まった。だが、MTBをこぐ速度は落ちる。バスを襲撃した猿たちが、再び追いついてきていた。

「ヴァンツッ！」

木の根っこにひっかかり、MTBが跳ね、宙を飛んだ。

貞夫は空中で身をひねり、MTBを操作して空中から飛びかかってきた猿の一匹を蹴り飛ばすッ

そして、立ち木を蹴って体勢を立て直すと、MTBに乗ったまま今度は反対側の立ち木へ飛ぶッ

「ウオオオオオオッ」

貞夫は全身の力を振り絞り、MTBを加速させていく……限界までスピードを増したMTBは山道のカーブへ勢いよく全速力で侵入し、そして……谷に向かって貞夫の体を宙に躍らせた。

ゴウッ

宙を舞う貞夫の眼下20M ほど下に、細い谷川が流れているのが見えた。

目の前には切り立った崖がそびえている。その崖がグングンと近づいてくるッ！

貞夫は空中でMTBを蹴ッた！

居合の要領で背中から刀を引き抜き、360度、上下左右、前後方から襲ってくるカラスを一気に切り伏せる。

そして再び納刀すると、今度は迫りくる崖に向かってスタンドと自分の両手を伸ばした。

「!?」

高速で流れていく壁に触れた手は、上方にはじかれるッ！

貞夫はスタンドの両手を突き出させ、壁に衝突する衝撃を受け止めようとした。

スタンドの両手が弾かれた反動で体が壁から離れそうになる。だがあわや墜落と言うところを、かろうじて貞夫は壁から突き出た岩角を掴んで、落下を食い止めることに成功した。

だが、掴んだ岩角はすぐ手から離れ、貞夫の体はまたしてもがけ下に向かって落ちていく……

岩棚に酷く体を打ち付ける。

その衝撃はギリギリのところまで、ジギー・スターダストの一体が支えた。

残る二体のジギー・スターダストが、崖の中腹から張り出す木にしがみつく。

—— だが木が折れる ——

「ゴブツ！ オラア！」

貞夫は刀を引き抜くと壁に突き立てた。ジギー・スターダストの能力で硬度を高めた刀は、まるでバターを斬るようにやすやと崖の岩肌を食い込み……ギリギリのところまで落下を食い止めた。

「さて……いくか」

どうやらこの空中戦によって、すべてのカラスを倒したようであった。

次の敵がやってくる前に目的地に行かねば……苦勞して崖をよじ登りきった貞夫は、ほとんど休むことなく、山頂を目指して再び歩き始めた。

山の中腹、隣の山との尾根沿いに、その『大木』がはえていた。

その木は大きくうねり、黒々とした太い根を数多く大地に突き立てていた。まるで、南方のマングローブの根に似た、小さな林のように互いに絡み合った根だ。その根元にはまるで熊が冬眠するためのねぐらのようにポツカリとうろ（穴）が開いていた。

その大木の根元近くに二匹のクズリが寝そべっていた。さらにその周りには、30匹近くの野犬がいた。皆クズリを遠巻きにしてうなっている。

のそり

クズリの一頭が立ち上がった。周囲の野犬たちがビクツと身を固くし、皆一斉に尻尾を足の間に挟んだ。クズリが動いたたびに、野犬がビクツと震え、後ずさっていく。

『さて……デザートの時間だな……お前ら……わかってるなあ？』

クズリの一頭が犬たちを怒鳴りつけた。

「ハッはい……」

野犬の一頭が卑屈そうに笑い、暴れる三頭の子犬を連れてきた。それは、スー、ユイ、モアだ。

「よしてよッ」

スーがわめいた。スーはずっと暴れていたらしく、ところどころ血がにじんでいる。

「アンタら……チョコが絶対私たちの仇を取ってくれるから。その時になつて後悔しても遅いんだからね」

ユイが、低い声で言った。

「……裏切り者」

モアは、一言ぼそつとつぶやいた。

『オウツ、肉が柔らかかそうな、うまそうな子犬どもだ』

寝そべっていたもう一頭のクズリも、立ち上がった。そのクズリは小型のクマほどもある巨体だ……

『フッフ、やわらかそうな肉だな』

ペロン

巨大クズリは下品に舌で自分の鼻を舐めた。

「何よッ……この馬鹿野郎オオ」

スーがわめいた。

「地獄に落ちろ、この醜い化け物ッ」

『この無礼者ッ、スカーストラック様に対して、何て口のききようだ！』

最初に立ち上がった小柄な方のクズリが、三匹をなじった。

『良いわステイン。餌が何を言おうと、ただ喰うだけよ』

巨大クズリ：スカーストラックは目を細め……大口を開けた。

「止めろッッ！」

そのとき、大木のうろから、制止の声が響いた。

「そんな小さな女の子たちを……恥を知れッお前たちッ。お前たちにプライドは残ってないのかよ！」

木のうろから顔をのぞかせたのは、ボロボロに痛めつけられた老犬

であった。

「ふうーだア!!」

その老犬の背中には、インピンがまたがっているッ

インピンは、老犬の体からみつけれられていた最後のツタを噛み切り、老犬を完全に解放させた。

自由を取り戻した老犬は、よろよろと木のうろから這い出て、野犬たちの前に立った。

ザワツ

インピンと老犬に叱られ、クズリを取り巻く野犬たちは、老犬に睨まれると皆バツが悪そうに下を向いた。

「こんな幼い子たちを差し出して、それで拾った命に何の価値があるのだッこの馬鹿者どもッ」

老犬は、下を向く野犬たちを叱咤しつづけた。

『クツクツクツ』

ステインが笑った。

『なんだ、ずいぶん青臭いことをぬかすヤツがいると思つたら、負け犬共のリーダーであられるコバ様か……なんならお前から食つてやつてもいいんだぞっ?』

「ゴッ……この悪魔め」

コバはステインをにらみつけた。

「この、卑怯者め!恥を知れイ」

「ブア——ツバツ」

インピンも叫んだ。

『フン……これまでは『あえて』生かしておいたが、もういいか』
貴様達には何の興味もなくなったよ。

スカーストラックがつまらなそうに言った。

『我らが来るまで、この《切り株》の《管理者》であつた貴様の《能力》を知るまでは生かしておこうと思つていたんだが……もういい——
—死ねッ』

「……ワシが簡単にやられると思うなよ」

コバがにらみつけた。

「ワシの『能力』が知りたいのか、ならば教えてやるッ！出る アカツキツッ！」

コバの体から、まるで小型のマンモスのようなビジョンが出現した。

だがそれは、周りの犬たちには見えない。これは、スタンドッ！

一方、クズリたちはそのスタンドビジョンを見て、へっと嘲った。

『なんだ、そのボロボロのスタンドは』スカーストラックが笑った。

『あまりになまつちよろい。相手をする気も失せるわ』

『フッフ……スカーストラック様、少し面白い趣向を考えました』ステインが言った。

『ほう……やってみろ』

ボスの許可を得たステインが、首を回し、下を向いている野犬たちを睨み付ける。

『お前たち、その小うるさいリーダー様を牢から出して差し上げろ。そして……お前たちで殺せ。その肉を喰らえ』

キサマラにご馳走だ。久々に肉を喰わせてやる。

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

「!?なんだと、貴様」

コバは目を向いた。

『コバよ、貴様のお仲間、そのご自慢の《能力》を使えるのなら、使って見せろッ』

ワツハハハハハ

スカーストラックが笑った。

そして、無造作に近くにいた野犬の一匹を踏み潰した。悲鳴を上げ続けるその犬の頭を持ち上げ……まだ生きている犬の頭を口に放り込む。

そして、その頭骨を無慈悲にかみ砕いた。

『ほら貴様ら、あんなふうになされたくなかったら、サツサと行けよ』

ステインが野犬たちをけしかけた。

「なっ……」

「ウツ……うつつうつつ」

「くつ悪魔め、性根がねじまがつてオルツ」

コバは、涙を流しながら自分に襲いかかる犬の後ろでニヤニヤしているクズリ達を睨み付けた。

だが、スタンドは出現させないツツ

「長ツ！コバさまあツツ！すみませんツ！！！！」

一匹の野犬が、絶叫を上げて長の閉じ込められている牢の扉を引きちぎった。そして、コバの首根っこを掴んで投げ飛ばした。

「皆の為に、死んでくださあああいいいい！」

ヒツツク

うつつわあああああつ！！

野犬たちは泣きながらコバの体にかみつくツ！

その時……

「馬鹿野郎が！」

何処にいたのか、チョコとゲンペーが野犬の輪の中に飛び込み、まさに長を牙にかけようとした野犬を吹き飛ばした。

「お前たち、それでもキ ○ 玉ついてるのかよツこのオカマヤロウツ」

チョコが野犬に向かってどなりつけた。

「チョコ……いや、俺は……俺は……」

一番初めにコバに牙をむいた犬が、チョコに話しかけようとして……黙ってうつむいた。

「よりによつて、長にまで……へドバンツ！てつめー、この大馬鹿野郎ツ」

チョコは、へドバンと呼んだその野犬を引き倒した。

「オマエ、……オヤジイイイツ！！……この、馬鹿野郎ツ」

「ウツ……スマン……ごめんよオ」

「うるせえツ！お前……お前たちツ！しっかりしろよオオ」

チョコは泣きながらへドバンを叩きつづけた。

一方、チョコが『元仲間たち』を怒鳴りつけている間に、ゲンペーは、ユイ・スー・モアの三匹を確保することに成功していた。

「ふう……もう大丈夫だぜ」

「……」

「へッ……信用してくれねーか。だが、無理もねーよな」

だが、ユイも、スーも、モアも、助けに来たゲンペーをうさん臭そうに眺め、なかなかゲンペーが促すように逃げようとはしてくれなかった。

ゲンペーが三匹の誘導にてこづつていると、その周りを再び犬達が取り囲もうとしてきた。

「へえホンキで邪魔すんのかい？……消えろッ今なら見逃してやる」

ゲンペーは近寄ってくる犬達をけん制した。

その迫力に、犬達の足が止まった。

「こんなダサ坊にビビりやがって。なりこそ小せえが、この三匹のアマッこよりも、チョコよりも、お前たちダセえな」

「……なっ何だとオ」

余所者が何を言う。犬達の目が敵意に燃えた。

「ぶ、ぶ部外者が……俺たちの事で知ったことを言うな」

「なんだとオ？仲間には牙をむけるようなクズが偉そうに言うな」

「クツ……貴様に、あの方々の恐ろしさがわかってたまるか……」

へッ

ゲンペーがあざけりの声を上げた。

「ばっあああかあ——ッ！お前たちが『恐れている』ヤツラなんて、俺に比べりゃ雑魚だぜ。さつきも一匹殺ってやったばかりさ……」

「なんだと」

「ハツタリだ」

「あんな、大ぼら吹きの方は無視しろ」

「……だが、確かにメイデン様がいらっしやらないぞ？」

「もしかして……」

ブシヤッ！

その疑問を呈そうとした犬は、自分の推測をすべて口にする前に吹っ飛ばされた。

その犬を吹っ飛ばしたのは、先ほどの巨大クズリだった。

『小僧ツ……貴様が、キサマが　メイデンをツ……許さんぞ、貴様は俺が喰らってやるわッ』

巨大クズリ：スカーストラックがゲンペーにいきり立った。

「チッ」

ゲンペーはスカーストラックをにらみつけつつ、チラッとゲンペーの背後で震えている三匹に目をやった。

「……ユイ、スー、モア、お前たちは逃げろ。コイツは、おれがひきつけといてやるぜッ！」

一撃でやってやる……

ゲンペーは、スカーストラックに牙をつきたてようとした。

「ハッ！」

スカーストラックの目が嘲笑にそまった。その直後、突然ゲンペーの足元の地面が爆裂した。宙を舞うゲンペーの体。

「なんだあ？今ののは？」

宙を舞ったゲンペーは、身をねじって頭上の枝にうまく着地した。そして、すぐさま枝から枝へと飛び移り続ける。

その飛び移った直後の枝が、まるで透明な『拳』で殴られたかのようになり折れていく。

その隙に、ユイ、スー、モアは大木の陰に身を隠した。

『やはり、貴様……視えてないか』

スカーストラックは満足げに言った。

『ではもうどうでもいい……さっさと死ね』

「うおおおおっ」

ゲンペーはフェイントを入れつつ、上下左右に細かく動きながら、スカーストラックをチョコ達から引き離した。

（くっそおッ……こんなやつ、とつととぶった押して、チョコを助けにいいかなきやならねーのによオ——）

そのころ、チョコとコバの迫力に気圧されている犬達を見かぎったステインが、自ら立ち上がった。

「ハッ……役立たずどもが。もぅいい……俺が直接殺ってやる！」

ステインは、野犬たちを吹き飛ばしながらコバに向かって駆け寄った。

「貴様は俺が殺ってやるわッッ」

クズリはコバに襲い掛かるッ！

「ワシが簡単にやれると思うなよ」

コバが叫んだ。

だがそのコバの目の前に、一匹の子犬が立ちふさがった。またしてもチョコだ。

「ウッ！オサを殺らせるかッ負けるかあああああッ」

コバを背中にかばい、チョコが叫ぶッ

「よせっ、チョコオ」

コバがヨロヨロと立ち上がる。

コバのスタンド：アカツキが鼻を振り上げ、チョコを持ち上げた。

「!?なっ……体が宙に浮くゾオッ」

スタンドのヴィジョンが見えないチョコは、自分の体が突然宙を浮いたことに狼狽し、驚きの声を上げた。

次の瞬間、アカツキは鼻を振り下ろし、チョコを後方に放り投げる

！

「クッ！」

チョコは空中で身をよじって、両足から着地した。

「コイツ！」コバが叫んだ。「アカツキ、やつを倒せッ」

『フンッようやくスタンドを出したか』

ステインが嗤う。

『では、貴様は大サービスだ。俺のスタンドで殺してやろうッ』

と、ステインの体が突然『丸く』なった。いや、体中の毛が逆立ったのだ。

『くらえッ我がスタンド：ヴェリー・ピーストッ』

バシユシユシユッ！

ステインの体から無数の『毛鉤』が周囲にまきちらされた。まるで、雨のように降り注ぐ『毛鉤』が周囲の犬たちを無差別に襲うッ！

「たっ……助けてッ」

「止めて下さいッ」

長に襲い掛かろうとしていた犬達の体に、『毛鉤』が何発も命中するッ

犬達に命中した『毛鉤』は、まるで釣り餌のゴカイのように身をくねらせ、犬達の体に潜り込んでいく。

犬たちはもだえ苦しみ……もだえ狂い……そして、目が真紅に染まり、涎をまき散らし、小刻みに体を震わせ始めた。

「お……おい……」

チヨコは、身を震わせて突き立った小さな針を弾き飛ばした。

不思議なことに、チヨコにつき刺さった『毛鉤』は、するりと抜け落ちた。

チヨコの後ろに駆け寄ってきた、ユイ・スー・モアも、コバも、同じように身を震わせ、『毛鉤』を払いおとした。

5匹に残ったのは、ノミに身体中を食われたような、むず痒い不快感だけだ。

「これは……どういう事？」

スーがくびをかしげた。

「アイツラ……まるでヒルにたかられたみたいに『毛鉤』に喰われていく。でも、私達は何ともない」

お姉ちゃん。と、ユイとモアがスーにすり寄った。

だが、それ以外の犬たちは皆小刻みに身を震わせ続け……

「gYUAAAXTU!!」

意味不明の叫び声をあげ、無事だった5匹に襲い掛かるッ！

「なんじゃとおッッ」

コバがうめいた。

「お前達ッ、どうした？正気に戻るんじゃ」

「長ツツ！無駄だよツツ」

チヨコはスー達を背後にかばいつつ、コバに向かって叫んだ。

「長、逃げてエ——ツ」

「gYAXTUUUU！」

「KLYIAAA」

「BOVC！BOC！VOC！」

《獣犬》と化したかつての仲間たちが襲い掛かってくるツ
ガブツ

コバの手足に、首に、何匹もの《獣犬》が噛みつくツ

「うぞおおおおお」

『ははははッ 我がヴェリー・ビーストの能力は心の底から屈服させた相手を、我が命令だけを聞く『獣』に変えることよ』

ステインが嗤う。

『《獣犬》ども、あの五匹を喰いちぎれエツ！』

『Vzyuaaaaaa！』

『Vwaooooohoo！！』

『Vhoozyaaaa！！』

《獣犬》はステインの命令にこたえ、コバに向かってうなり声を上げ
……襲い掛かったッ！

「いやっ」

「長ツ」

とつさに逃げ出そうとするユイ、スー、モアにさえ、《獣犬》が襲い
掛かる。

「うわっ」

スーは前足を振り上げた《獣犬》の一撃をかわして、体当たりをぶ
つけた。

「Gzyuuaa！」

スーの体当たりを受けた《獣犬》は、ワズカに体勢を崩した。だが、
生後すぐの子犬の一撃では、《獣犬》にダメージを与えることができな
いッ！

体勢を立て直した《獣犬》が、再びスーに牙をむくツ

「お前たちツッ！逃げろツ」

横からチョココが飛び込むツ！

バシユツ！

「チョココ姉エ」

スーに代わって牙を受けたチョココが、吹き飛ばされた。

木の幹に叩き付けられたチョココに止めをさすために《獣犬》が一匹、背後から襲いかかろうとしていた。

だが、そのチョココに向かって飛びかかろうとしていたその一匹の動きが、急に止まった。

「!?おツ……俺は………」

その《獣犬》の目から赤色が抜けていき、やがて元の犬に戻っていく。

「お……おれはまたしても……」

「はっ！」

「みんなツツ」

チョココに襲いかかった犬だけではない。周りの《獣犬》達の何匹かも、徐々に元の犬に戻っていく。

「長ツツ！スミマセンツツ」

「お、俺達は一体なにを……」

「あああ……スー、ユイ、モア、許して……こんなことをするつもりはなかったのよ」

《獣犬》に墜された犬達は、我にかえり自分たちの身になにが起こったかをさとり、動揺し、右往左往としはじめた。

「……チョココツ！」

無事か……

コバとユイ・スー・モアが、切り株に体をうちつけられたチョココの元に駆け寄った。

「小汚ない野良犬ども、その切り株から離れろ」

ステインが唸った。

「その場所は、貴様ら抵能には理解できん『価値』がある。大人しくその切り株から離れれば、優しく殺してやる」

「なんじやと」

コバが目をむいた。

「私たちをバカにするなツツ！お前みたいなヤツにアヤマルなんて、絶対にしないぞツ」

叫んだのは、まだ幼犬のスーだ。

「そうよツ私たちは負けないッ！」

モアも、ユイも震え声で叫んだ。

「お前達ツ……」

チョコは三匹の首を優しく舐めた。

「よく言った！……お前達、聞いたかよ。こいつら幼犬のほうが、お前達なんぞよりよっほど誇り高いぜ」

「……くっ……」

「だっ……だが」

犬達はそれでもなお、自分たちを正当化しようとし……失敗して黙り込んだ。

『この馬鹿どもッ！』

犬達の態度にイラついたステインは、近くにいた一匹の頭を、無造作に踏み潰した。

『バカが。切り株をたてにとれば、我がスタンドを止められるとおもったのか？だが無駄よ。単純にワレが直接貴様らを叩き潰せばいいだけよッ！』

ステインはチョコ目掛けて前肢を降り下ろそうとし……急にとまどった様に周囲を見回した。

『なっ？何処だ……何処に行った？』

ステインの目の前から、急にチョコの姿が掻き消えたのだッ！

周囲を見回したステインは、次の瞬間に目の前にいたユイが、そしてまた次の一瞬にモアが、スーが、そして最後にコバの姿が消えた。

『なっ？なんだ、これはッ』

ステインはすっかり動揺して、周囲をグルグルと見回した。

『お前たちツ奴らを見なかったかッ？』

やむを得ず、ステインは取り巻きの犬達を詰問した。

「ス……ステイン様、本当にわからないのですか？」

一匹がおずおずと尋ねた。

『貴様……貴様には奴らがどこにいるのかわかっているのかッ？』

「本当に見えないのですか？」

『くッ』

犬達の目に侮蔑の浮かんでいる事に気づいたステインは激昂した。

『ヴェリー・ビーストッ！』

目の前にいた四頭に毛鉤を撃ち込む。

『切り株を守るためにお前たちを解放してやっていたが、もう構わんッ。貴様ら、奴らを殺せッ』

「うわあああああッ」

犬達は身を震わせ……三匹が口からあぶくを出してうなりだした。

そして、一匹は文字通り尻尾を丸め……その三匹に襲い掛かった。

「お前らッ正気に返れッ！」

その一匹がさげんだ。ヘドバンだ。

『貴様ッ！』

ステインが、正気のヘドバンを噛み殺そう大口を開けた。

そのステインの背中に、突然赤い筋が走った。

『!?!』

ステインは慌てて立ち止まり、周囲を見回した。

振り返ると、チョココが睨み付けていた。その口からは血が滴り落ち

ている。ステインの毛皮を切り裂いた時に吹き出た血だッ！

「ヘドバン……お前よく乗り越えたな」

チョココが笑った。

「さすが、親父だ」

「チョコッ……チョコッ！俺は……」

いいよ、わかってる。チョココはヘドバンに方目をつむって見せると、振り返って険しい顔をステインに向けた。

「お前ッ……お前はコイツらをもとに戻せッ！」

『はっ……』

姿が見えればこんな子犬など眼中に無いわ。

落ち着きを取り戻したステインは、今度はチョコを噛み殺そうと大口をあけ、ジリジリとにじりよった。

『おどおど隠れていられなくなっただか？だが、自分から出てきたのは感心なことだ。褒美に一口で喰ってやろう』

「待ってツツ！」

頭上から、コバの声が聞こえた。

ステインが慌てて上を見ると、頭上の木の上に、二匹の犬が今にも飛びかかってこようとしていた。

『コバか……』

ステインはにやりと笑った。先ほどは見逃してしまったが、こうしてまた自分から姿を見せてくれるとは好都合だ。まさにこちらの思うつぼだ。

『どうやって我の目をくらませた？貴様のスタンド能力か？』

「……そうだ……わがスタンドの能力は、対象の存在を一瞬完全に忘れさせること……」

コバが静かに言った。

コバの横に現れたスタンド、アカツキがその象のような長い鼻をコバの傍に近づけ、何かを吸い込むようにした。

すると、一瞬ステインの意識からコバの存在が消えた。そして次にスーの存在を忘れ……

次に気が付いた時には、まずコバが目の前に、そしてそのすぐ後ろにスーが宙を舞い、ステインに向かって飛び込んできているッ！

『侮るなッ！』

ステインが吠えた。

『老犬と子犬が、我の毛皮を超えてダメージを与えられるものかッ』

返り討ちよ

ステインが後足で立ち上がった。

その時、不敵な声が出た。ステインの足元からだ。

「そうだな、お前の毛皮はバカ厚いぜ……だが俺の牙ならどうよ……」

喰らえッ！」

あわててステインが声の聞こえた足元をのぞくと、そこには、ゲンペーがいた。

空条貞夫の孤闘 ― 2000 ― その3

『なっ、なんだとオツ』

「遅いぜツ」

ゲンペーは、驚いてぼう立ちになったステインの首筋めがけて駆けのぼり、その首を一撃で切断した。

バシユツ！

「へっ」

血沫を上げて崩れ落ちたステインを尻目に、ゲンペーは華麗に着地を決めた。

自慢げにあごを上げるゲンペーの元に、チョココやコバ、スー達が駆け寄ってきた。

「ほっ、若いの……さすがじゃな」コバが笑った。「我がスタンドでお前をここに隠した作戦勝ちじゃの」

「ちよつと、コバさん、アンタ無謀だよ。アンタが奴らの注意をひく必要なんてないんだ」ゲンペーが言った。

「はっはっは」

コバは満足げに笑った。

「だが、うまくいったじゃろ？」

「いや……オツサンにはまいったな」

ゲンペーは自分の首筋を搔いた。

「爺さん、あとは任せてくれよ」

ゲンペーはそういうと、残る一匹、スカーストラックに向きなおつた。

ワツハハハハハ

ピクリとも動かないステインの体を見て、スカーストラックは笑っていた。だが、その目はまったく楽しそうに見えなかった。

『ステインまでも……チビ、貴様、死にたいのだな？』

「うるせーおめー、お前こそさっさと消えやがれツ」

問答無用と、ゲンペーが必殺の回転切りを放つッ！

マトモに当たれば、間違いなく巨大なスカーストラックをも絶命さ

せうるゲンペーの一撃ッ

分厚い毛皮を持つクズリと云えど、その牙爪の鋭さには抗う術は無いッッ

だがその攻撃は

『空中』で

何かの障害物にぶち当たった。

バゴオオッ

次の瞬間、ゲンペーのどてっばらに風穴があくッ

「ゴッ……ゴブッ」

ゲンペーは腹と口から血を吹き出し、まるでぼろ雑巾のように捨てられた。

「おいッ、お前ッ」

「キヤアああああッ」

スカーストラックが悲鳴を上げるスー、ユイ、モアをジロリと見た。

『ハッ……食前の運動にもならなかったな……だが、デザートはいつだって別腹だからな』

ペロリ

スカーストラックは、まさに舌なめずりした。

「こやッ……恐ろしく強力なスタンドを持つておるッ！」

コバが呻く。

『コバよ……我がスタンド、オーバーキルのパワーを体感したか？』

スカーストラックがクスクスと笑った。

『ごっそそ隠れるだけの、貴様の貧弱なスタンドとの能力差に絶望したか？』

「バルッ」

うなり声が背後から聞こえる。

「てっ……てめえ——」

チョココがブルブル震えながらも、スー、ユイ、モアの前に立ちはだかる。

コバが自らのスタンド、アカツキを出現させるッ。

『ハハハ、お前は喰わんぞ、シヨンベン臭くてまずそうだからな。そう
だ、お前は我が親愛なる友コバの食事にしてやろう』

スカーストラックがペロリと自分の鼻先をなめた。

「バル……バル」

「何だとオオコノヤロー」

チョコは真っ赤な顔になり……やられる前に飛び掛かろうと、まるで猫のように姿勢を低くした。

「バルバルバルバルツ」

その時、背後から再びスカーストラックに襲い掛かる影があつた。

「バルツバルバルバルツ」

それは……それは、バオーだツ

ゲンペーの中に潜む三匹の寄生虫バオー、それがゲンペーの生命の危機に反応しゲンペーの体を戦闘生物に変えたのだ。

ガズンツ

バオーが飛び込むツ

その突撃はまたしても、見えない衝撃（スタンドによる防御）に阻まれた。

グラリ とスカーストラックが揺れた。

『小僧、貴様……どてつぱらに穴をあけてやったというのに、本当に何者だ？生身で我がスタンド、オーバーキルを揺らすパワーとはな』

スカーストラックは首をかしげ……笑った。

『だが貴様、実はスタンドが視えてないのだから？ならば私の敵ではないわ』

バゴツ！

またしても見えない拳の攻撃！

今度はバオーの超強力なプロテクターがオーバーキルの拳を止めた。だが、そのパワーをまともに受けたバオーは、柔らかい地面に踏ん張り切れず、吹っ飛んだ。

不幸にも、吹き飛ばされたバオーが飛んでいった先には……チョコがいた。

「きゃあッ」

バオーはチョコを巻き込み、さらに後方に吹っ飛ばされるッ！

グオオオオオッ

その先にはクズリ二頭が寝そべっていた大木が……

「ウッあんなのにぶつかつたら……マズイッ！」

チョコが狼狽した声を上げた。

「バルバルバルッ」

とつさにバオーは、チョコをかばって背中から大木に激突したッ

「ぐおぶっ」

大木を背にしたバオーにぶつかつたチョコは、腹からすつかり空気を吐き出してしまい、せき込んだ。

ベキッ

ボゴオオオオオッ

そんな二人の上に大木が倒れるッ！

「ボケツとすんなよ……このだき坊ッ」

チョコは、バオーを崩れ落ちる木の下から弾き飛ばし……

ベシユッ

チョコは、『崩れ落ちた木』の下敷きとなった。さらにその上に、何本もの枝が落ちていく。

「えっ……」

目の前で実際に起こったことが信じられず、ユイ・スー・モアの三犬は呆然としていた。

「何？どうしたの……」

ユイが戸惑ったように言った。

「ちよつと、ふざけてるんでしょ。早く出てきてよ。面白くないよッ」

モアが言った。

「馬鹿な」

コバが首を振った。

「老犬を置いて……お前みたいな先行き明るい犬が……どうしてだ」

「……いやッ」

ようやく状況を理解したスーが叫んだ。

「いやああアアアア——ッ」

泣き叫ぶスーの声につられたのか、ユイとモアも大声で泣き始める。

その横で、すんでのところで大木の下から弾き飛ばされたバオーも、哭いていた。

「スウォ——ムウ！」

『ハハハハッ、お前たち全員、すぐお友達の所に行かせてやるワッ』

スカーストラックが『愉快でたまらない』と言った風に、笑う。

ベリイッ

その時、バオーのこめかみから白い触角が二つ、現れた。

すでに額に現れていたバオーの触角と合わせ、都合3つの触角がゲンペーの額にざわめく。

同時に、バオーの背中からはまるでゴジラのような背びれが盛り上がり、尻尾が長大に伸び、その先端が複数に分かれた。

頭部、首、腹、背中、手足にはそれぞれカツチウのような装甲が現れ、全身からごてごてとがった角や、刀状の突起等が現れる。

それはッ！それはッ、まさに野獣ッッ！

現れた……『バオー・ビースト』は、スカーストラックに向けて低くうなり声を上げた。

『なんだ？この化け物は……』

スカーストラックは一瞬たじろぎ、だがすぐに平然とした表情に戻った。

『ワッハハハハッ貴様がどんな化け物だろうが、このオーバーキルの敵ではないワッ』

スカーストラックは再びスタンドを出現させた。それは、いびつなほど巨大な頭部を持つクマの様なスタンドだ。そのスタンド：オーバーキルはその巨体からは想像もつかないほどのスピードでバオー

に襲い掛かるッ

『全力だッ貴様がどんなに固くとも、食いちぎってやるわッ』

オーバーキルは前足をバオーに向かって振り下ろした。

だが……

バシユッ！

スタンドが見えないはずのバオー・ビーストが飛び、スタンドの攻撃を避けた。

もちろんバオー・ビーストには『スタンド』は見えない。だが、元々バオーに視覚は必要ないのだ。バオー・ビーストはクズリのスカーストラックと、スタンド：オーバーキルの『殺意のニオイ』に反応する事ができたのだ！

バオー・ビーストは空中で身をよじり、右に、左にオーバーキルのスタンドドラツシュを避ける。

そして……

「バルバルバルッ」

バオー・ビーストの全身から飛び出した刀が、オーバーキルを切り裂いた。

『ば……ばかな』

スカーストラックは目を丸くしたまま、倒れた。

「ヴァルンッ」

戦いを終えたバオー・ビーストは、危機に瀕した生命の発する臭いを感じた。

そして、バオー・ビーストはチョココが下敷きになった大木におもむろに近づき、その大木を『破壊』した。

その下には、チョココと、そしてインピンが奇妙にぐにやりとした姿で倒れていた。

「イヤッ」

「チョコ姉さんッ」

「どうして……」

泣き叫ぶスー、ユイ、モア。そしてコバもがっくりと頭を落とした。

と、ピクリともしないチョコとインピンの近くへ、バオー・ビーストがゆっくと近寄って行った。

「ヴァルツ……」

バオー・ビーストは、警戒している三匹にはまるで注意を払わず、チョコの前にかがみこむ。

「アンタ……何なの？何でそんな格好になっちゃったワケ？どうしてなにも言わないの？」

バオー・ビーストの異様な姿を見て、ユイが震え声で尋ねた。
「ブルツ」

バオー・ビーストの三ヶ所の触毛がザワザワ揺れ、初めにインピンの体を、次にチョコの体を探っていく。

バオー・ビーストは二匹の中にまだ命の匂いを感じていたのだッ。その体が熱を発し、燃えていることを確かに感じていた。

だが、その命の匂いは、今にも消えそうなほどかすかであった。

バオー・ビーストは思った。この匂いを止めさせない！と。

「バル……」

バオー・ビーストが、チョコの口元に鼻を近付ける。

「止めてッ」

スーがバオー・ビーストに噛みつく。だが、どんなに強く噛んでも、硬化化したバオーの肌に牙を突き通す事は出来なかった。

バオー・ビーストは、噛みついてるスーに気がついてもないように、ただチョコを見つめていた。

そして、バオー・ビーストは自分の舌を噛み切り、その血を二匹に振りかけた。

まずはチョコを自分の血で真っ赤に染め、次にインピンにも同じようにする。

「なっ、アンタ……」

バオー・ビーストに噛みつくのを思わず止めて、スーがおぞまじげに身を震わせた。

「……チョコ姉さんの体をこれ以上汚すな」

モアがバオー・ビーストを蹴飛ばした。

「バルツ……」

バオー・ビーストは無表情のまま振り返った。そしてまるで赤ん坊にするように、モアの首根つこをひよいつとくわえ、放り投げた。

なにすんのよッ

モンクを言おうとしたスーとユイは、バオー・ビーストの無表情な瞳を見て、思わず湧き上がる恐怖に、言葉を飲み込んだ。

その時……

「ぶっぶっ！」

「ぶうっ！」

息絶えたかに思われたチョココが、インピンが、力強く咳き込み始めた。

「うえっ。なんだこりや？」

チョココは、自分の身に降りかかった血を振り払った。

「こつこりやあ……や、ヤローのカエリ血か？やったのか？」

「チョココ姐ッ」

ユイがチョココに抱きついた。

「アンタ……ユイか？良かった。アンタが無事でなによりさ」

「グスッ、お姉さまッ」

モアはチョココの足をペロツと舐めた。

「ちよッ……止めろッ、くすぐりたい」

チョココが身もだえた。

戦いを終えたバオーは、そんな4人の様子を見つつ、急速に元のゲンペーの姿に戻っていく。

だが三体の寄生虫バオーからの高濃度の体液から解放されたゲンペーは、気持ちが悪くなりしやがみこんだ。

体中の力が抜けて、立ち上がることが出来ない……

いつの間にか、インピンがゲンペーの背中にしがみついていた。そして、インピンの首には、まるでシルバーの首輪の様な『モノ』が巻かれていた。それは、時に現れ、時に消え、チカチカと瞬いている。

と、その首輪がパチンコ玉の大きさに分裂した。

その分裂した玉が、複数の小さなリスの姿になり、四方に飛んで行った。

チョコが、そんなゲンペーの様子に気がつき、心配そうに眉をしかめた。

「?こりやあ、どうしたんだ?」

「チョコ……オメ——ヨオ」

「なっ……なんだよ」

と……笑いあう5匹の背後で悲鳴が上がった。

スー、ユイ、モアの三匹の目には、ステインと呼ばれていた小柄なクズリの体が、まるで透明な肉食獣にバリバリとむさぼり喰われていくように見えた。

「なにになによ、あれ……」

ステインの体はどんどんと削れて行き、やがて無くなった。すると、そのそばにいたそばにいた野犬の一匹の頭が悲鳴と血しぶきと共になくなり、そして同じように体が削れていった。

「!?何?あの化け物はッ」

チョコは、傷ついているわが身も顧みず、走り出した。

嫌、チョコは一匹ではない。

一匹ではない。

ゲンペーの目に、チョコの体からもう一匹、白銀色の毛皮を持つキツネがグンツと姿を現したのが見えた様な『気がした』。チョコとキツネは足並みをそろえ、生きながら削られている野犬の下へ走っていく……様に感じる。

なぜかゲンペーにも、その野犬の死体に覆いかぶさるようにしている『何か』が感じられるような気がした。

チラチラと出たり消えたりするそれは、巨大な牙をもつゴリラの様な姿であった。

「何だあ?あれ?」

ゲンペーは気が付いていなかった。ゲンペーの額、三か所から触毛が出現しているのを。

三体のモデュレイテッド寄生虫バオー、その三体のバオーのパワーの相乗効果か、触毛がゲンペーにスタンドのニオイ——正確にはスタンド本体の殺気——を感知させていたのだ。

一方、チヨコの体から飛び出た白銀色のキツネは、チヨコを追い越して、そのゴリラに飛び掛かるッ

思いのほか素早いキツネの攻撃ッ

だが、ゴリラのスピードはキツネよりもさらに素早かった。

超スピードで振り向いたゴリラが、宙を舞うキツネに向かって拳を放つッ

だが、ゴリラの拳は宙を切った。

キツネの姿は消え、そこには宙を舞うフクロウがいた。フクロウはゴリラの頭を突つつくッ

ゴリラはうるさそうに頭をかきむしった。

避けそこなったフクロウがゴリラにつかまるッ

だが、またしてもフクロウの姿が消え、代わってそこには蛇が姿を現れしていた。

シユルルルッ

蛇はつるりとゴリラの手をすり抜け、チヨコの足元に戻っていくと、またキツネの姿に戻った。

「なんてことよ……」

チヨコがうめいた。

ト ト ト ト ト ト ト ト ト ト

チヨコの目の前では、スカーストラックが再び立ち上がった。

真つ二つに斬られたハズのスカーストラックの上半身から、ウネウネと肌色の肉が増殖している。

その肌色の肉は急速に量を増していき、恐ろしいほどの速さでスカーストラックの体を再生していく……

『ガブッ』ゴリラが足元に横たわっていた野犬の死体に喰いつく。すると、ゴリラが肉を喰らうたびに、スカーストラックの体がグングンと再生していく……

「貴様、スタンド使いになった……という事か。だが、そんなパワーとスピードでは我がスタンド、オーバーキルの敵ではないな」

復活したスカーストラックがチョコを睨みつけ、言った。

「いや、貴様だけではないのか？」

スカーストラックはゲンペーの方も振り向いた。

「キキキ——ッ」

インピンがうなる。

ふと気が付くと、銀色の小さなリスが、インピン、チョコとスカーストラックの近くに潜んでいた。よく見ればゲンペーの肩にも、同じリスがちよこつと止まっているように『感じる』。

ゲンペーはクズリの言葉がわかるのは、何故かわからないがそのリスのおかげだと感じていた。

「ゲンペー、キをつけてッ！」

リスが……いや、インピンがしゃべった。

「お前？インピンか？何だそりや、何してるんだ？」

ゲンペーはすっかり困惑しながら、インピンと同じ『魂』の二オイがするその『リス』に話しかけた。

「このリス(The Carrier)はボクのチカラ・スタンドさ。スマレヤイクロウとおんなじチカラが、ボクにもあつたんだ」

インピンは、得意そうに答えた。

「何だってえ？」

スタンドってなんだ。

混乱するゲンペーの背中に、インピンが飛び降りた。

「ボクのは、ザ・コールは ダレとでもハナシをできるチカラを持つてみたいだ……タタカウためのチカラじゃない——でもこのチカラを貸すよッ、きつと何かの役にたてるよ。たぶん、ゲンペーの中の『イソウロウ』タチとも話せると思う」

『イソウロウッ？』

ゲンペーは一瞬首をかしげた。だがそれよりももっと聞きなれない言葉があつた。

「それより、おまえスタンドって言ったか？なんだそりや？」

『……そうか、見えないんだね。見せてあげるよ』

リスはそう言うと、そつとゲンペーの額をさわった。すると、ゲンペーの視界の中に、見慣れないキツネに似た不思議な動物が見えた。その動物は、チョコの横を寄り添う様にして走っている。良く見ると、そのキツネは時々チョコの体の上に『覆いかぶさった』り、チョコの体に『潜り込んで』首だけを外に出している様にも見える。

「なんだ？あれが その チョコの 《スタンド》 って奴なのか？」

「そうだよ。あのキツネが傷つけばチョコちゃんも傷つく……あのコを守ってあげなよ」

『面白いッ』

スカーストラックが吠えた。

『貴様の貧弱なスタンドを喰らい尽くしてやるわッ』

チョコが危ない……

そう思った瞬間、ゲンペーの中の寄生虫モデュレイテッド・バオーが再び活動を開始した。

寄生虫バオーは、ゲンペーの体を強化するための体液を放出し始める。同時に麻酔液を抽出し、ゲンペーの意識を失わせた……

寄生虫バオーの施した麻酔によって意識が闇に堕ちた直後、インピンが出した『リス』が、ゲンペーの意識に飛び込んできた。『リス』は意識不明の海に沈んでいたゲンペーの『意識』を拾い上げ、浮かび上げさせ、そして、ゲンペーの目から闇を払った。

突然ゲンペーの身の回りの景色が、晴れて行く。そしてゲンペーは、意識が無いときに自分の身に何が起こっているのかを明確に認識し、驚愕した。

(こっ……これはッ……)

ゲンペーの体は自律的に動き、ものすごい速度とパワーで敵に向かっていった。

『これは、君の本当の力だよ』

ゲンペーの意識の目から闇を払っているリスが、そういった。それが、意識の目から闇を払う事、そして相手との完璧な意思疎通能力。

それが、インピンの心の力だった。

(なんだってえ?)

『わかってる。ゲンペーには、この《本当の姿》をジブンの考えで動かすことはできないんだよネ……でも、ゲンペーが《彼ら》に君の意思を伝えられれば……彼らは君に協力してくれるはずだよ』

(ちよつとまで、インピン、お前の言ってる事はさっぱりわからねえーゾ)

『そんなことないさ……もう感じてるだろ? 君の体にすむ三匹の《イソウロウ》を……』

ゲンペーは黙り混んだ。

そう、知っていた。

しかも、そのイソウロウ達が懐かしい、心あたたまるにおいを持っていることも知っていた。その匂いのひとつは自分が生まれたときから傍らにいた匂い。残る二つは……それは父と母の匂いだった。

その匂いは温かくゲンペーを包み……そして彼らの存在を意識するたび、ゲンペーの心を寂しさがチクリと刺した。だから、思い出さない様にしていたのに……

(そうだ……コイツラは父さんと母さんの形見でもあるんだ……)

ずっと、父さんと母さんにまた会いたいと思っていた。

一度だけ、施設から外に出て父さんと一緒に森を探検した事があった。一人でいるとき、相棒と散歩しているとき、その記憶を何度思い返した事か。

誰にも知られるわけにいかない秘密だが、実は毎晩、空想の母親に話しかけて母の隣で寝ているツモリで寝ることにしていた。実は、そうしないと眠れないのだ。

『D u v u a a a !』

オーバーキルの叫び声が、ゲンペーを物思いから引き戻した。そのスタンドは、凄まじいスピードでゲンペーに襲い掛かるツ。

だがッ、

だがッ、

だがツツ、

バオーの速度は、そのオーバーキルのスピードをはるかに上回っていた。

バオーは軽々とオーバーキルの拳を避け……背後にいたスカートのラックを『溶かし』始めた。

『ギヤアアアアッ』

本体が攻撃を受けたために悲鳴を上げるオーバーキルの喉笛を、チヨコのスタンド：メギツネが噛み千切った。

だが、まだオーバーキルの能力『他者の血肉を喰らって本体を継続的に回復させる能力』は、まだ生きていた。

「おっ、俺は不死身だツツ！」

溶かされたスカーストラックの体が、また回復し始める。

「だ……誰にも俺を殺す事はできねー」

再び姿を表したスカーストラックが、バオーとチヨコを睨み付けた。

「貴様らも、かならず喰らってやるぞ」

「くっ……」

再び死体を喰らって、甦ろうとしたスタンドの動きが、止まった。

「遅いぜ、相棒……」

伝わらないとは思っていたが、ゲンペーは思わず相棒・橋沢育郎に話しかけた。

スカーストラックのスタンドに、相棒が手をかけ、その動きを封じていたのだ。

『ゲンペー、少し手伝うよ』

何時ものと同じように、相棒は落ち着いた口調で言った。相棒、自分と同じような新たなゲンペーの家族……

相棒がオーバーキルを押しさえ込んでいるうちに、ゲンペーはピースシユティンガーを放ち、スカーストラックを燃やし尽くした。

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

「まだ、生きていたのか」

崖を登り切り、山頂を目指すべく山に入り込んだ空条貞夫は衝撃をうけていた。

山道などまったくくない人気の無い山。そんな山中であった目の前にいる女に、確かに見覚えがあった……

そこには、中年の白人女・オーテップが、目をいからせて立っていた。

「ハッ！アンタに組織をつぶされてから、アタイが味わった苦難を思い知るがいいッ！」

DRESSを貞夫がつぶしてからもう10年がたっていた。

この10年の、これまでの苦勞がいかなるものだったのか、女はがりがり痩せこけ、シワだらけになっていた。かつての美しかった見た目も、すっかり荒れ果てている。

だがそれでも、眼だけはギラギラと光っていた。

「もうあきらめろ……DRESSは無くなつたんだ。……話してもらおうか。DRESSの残党がここで何をしていたのか、お前のクダラナイたくらみを」

「うっ……うるせえッ！アタイをあざけるんじやねエ——」

叫んだオーテップが、スタンドを出現させた。

「あの時アンタたちになわなかつたのは、スタンドが見えなかつたからさッ！だが今は違うよッ!!この、悪魔の切株の力で、アタシにもスタンドが身についたのよッ！くらえッ ブッチャーズ・フック!!」

現れたのは、ぶくぶく肥った巨漢のスタンドッ！

そのスタンドの髪から、指から、体中から無数の血に塗られたフックが出現し、貞夫を襲った。

銃弾と同等の速度で雨のように降り注ぐ無数のフック。

そのフックの一つが、近くの立ち木に引っかかった。すると、瞬時にフックが引っ張られ、その立ち木が根こそぎ引き抜かれて空中に放り投げられた。

恐ろしい威力だ。

だが、空条貞夫は剣の鯉口を切り……

襲い掛かるフックをすべて切り落とした。

「ハッ！引つかかったねッ」

オーテップが笑い……ブッチャーズ・フックがロープを引いた。

引いたロープの先は、貞夫の周囲の立ち木に、岩にかかっている。

グウオオオンッ！

無数の立ち木が、岩が、宙を舞った。そして、同時に高速で貞夫に叩きつけられるッ

「ヒヤッヒヤッッ 油断したな、このポケットッ この質量ッ 叩き斬っても無駄よッ 切断されたすべてのピースがアンタを襲い続けるッ！」

オーテップが狂ったような笑い声を上げた。

「アタイの10年の思い、しっかり受け止めな」

ドガッ

ドガッ

ドドドドガッ！

貞夫の上に、立ち木と岩が次から次へと降りかかり、山積みになった。まるでピラミッドだ。

ヒヤヒヤヒヤッッ

オーテップの笑い声は、しかし唐突に止まった。

貞夫の刀が、ピラミッドを切り裂いて現れたのだ。

貞夫は冷静に降り落ちる立ち木や岩を切り裂き、自分一人が何とか隠れることが出来るだけの隙間をピラミッドの中に作っていたのだ。

「本当にヤレヤレだ……でも、これで終わりにしよう」

貞夫は右手で柄を、左手で鞘を持ち、自分の目の前にかざした。そして、ゆっくりと女に向かって近づいていく。

「ひゃっひゃっひゃっ」

老いぼれッ！お前には追い付けないッ

このままではかなわない、そう判断した女の行動は素早かった。ブツチャーズ・フックを木々にひっかけ、そのフックを伝って女が宙に飛び上がった。

「バルバルバルツバルツ」

同時に、オーテップは自らの瘤に注射針を突き立て、レディ・バオーに変化させるツ

そして空中から、レディ・バオーが貞夫に襲い掛かるツ！

同時に、その背中からブツチャーズ・フックが姿を現す。そのフックは周囲の石を次々にひっかけ、4方から貞夫に向かって投げつけた。

さらに同時に、レディ・バオーのビースス・シユティンガーが発射されるツツ!!

「オオオオオおおおッオラオラアツツ!!」

貞夫が叫び、めまぐるしく刀と鞘を回転させ、石と、ビースス・シユティンガーとを叩き落としていった。

「ヴァルツ！」

鞘にビースス・シユティンガーが突き刺さる。

たちまちその髪の毛は炎上し、鞘に燃え移る。

「クツ」

貞夫は鞘を放り投げ、両手で刀を振り上げざま、目の前のレディ・バオーに振り下ろすツ！

『ヴァルツ』

レディ・バオーはリスキニハーデン・セイバー・フェノメノンを振り上げるツ！

バシユシユツツ！

ぶつかり合った二つの刃は、一瞬せめぎあい……リスキニハーデン・セイバーが折れた。

そして、貞夫の刀がレディ・バオーの右手を切り落とす。

『ヴォアオオオムンツ』

レディ・バオーは自分の右手を掴むと、再びスタンドを出現させた。

ブツチャーズ・フックを遠くの木にひっかけ、そのフックを引き寄せる事で、素早く移動する。

「ブン」

貞夫はすかさずフックの方向へ走った。

どれだけ早くとも、その移動はフックをかけた場所に向かう直線的なものだ。読むのはたやすい。その移動方向を読んでしまえば、斬るのもんたやすい。

「オラアツ」

だが、貞夫がレディ・バオーを斬りすてようとしたまさにその時、レディ・バオーが不意に移動方向を変えた。

気が付くと、ブツチャーズ・フックは周囲のあちこちにかけてまわられていた。これでは移動方向を読んで先まわりすることが出来ない……

「ヤレヤレだね」

貞夫はため息をつくとき、懐からパチンコを取り出して引き絞った。

「ジギー・スターダストツ！」

貞夫の背後に、神話の英雄の様な姿の、小さなスタンドが現れた。

そのスタンドがパチンコに手を触れる……

バシユツ

パチンコから放たれた小石は、まるでマグナムから打ち出された銃弾のようにレディ・バオーの肩を砕き、貫いた。

貞夫は、撃ち落としたレディ・バオーめがけて走った。貞夫は走りながら懐に手をやり、小さな脇差を取り出した。

ザツツシユウウウウツツ！

貞夫が引き抜いた脇差が光るツ

貞夫が振るう脇差は、地に墜ちたレディ・バオーを肩口から袈裟懸けに斬りおろすツ!!

ガツ……

レディ・バオーが変身を解き、元の中年女に戻っていった。

「なっ……」

オーテップが薄れる意識の中、貞夫を睨みつけた。その両肩の瘤が、きれいに切断されていたのだ。にやりよおおオン

切り落とされた瘤の断面から、人の手のひら大のゴカイの様な、ヒルの様な生き物が這い出てきた。

これが、オーテップに移植されていた寄生虫……モヂユレイテツド・バオーであった。

「ジギー・スターダストツ」

貞夫はその瘤と寄生虫に石油をかけた。そしてスタンドの力で持っていたライターの炎を強化し……石油に火をつける。

ボオオオオ——ツ

爆炎を上げて燃えていく寄生虫を、貞夫は奇妙な思いで見ている。

これが、このちっぽけな虫が、DRESSの切り札だったのだ。そのちっぽけな虫が、貞夫を何年にもわたる戦いの日々連れ込んだのだ。

やがて、寄生虫が燃え尽き、チリになった。貞夫は、大量の出血を起こして死にかけているオーテップに目をやった。

この女をどうすべきか……家族に再会もできず、無残にも殺されたジン・チェンの事も頭をヨギル……

だが考えるまでもない。貞夫は大きく一つ、うなづいた。

「……ジギー・スターダストツツツ」

貞夫はフトコロから止血パッチを取り出した。その止血パッチをスタンド能力で『強化』し、オーテップの背中に貼りつける。

傷から流れる血がその止血パッチで止まった。心なしか、オーテップの様子も少し楽になったようだ。

「お前も……犠牲者なのだ。やり直せ」

止血をしたオーテップを、貞夫は担ぎ上げた。

「……今更……」

オーテップがポツリとつぶやいた。

「今からだ。《今更》じゃあない。まだやり直す時間はあるさ」

貞夫が言った。自分でも驚くほど、優しい声であった。

「いつからだってやり直せる」

「……」

貞夫の背におぶわれながら、オーテップは一言も言葉を発しなかった。

オーテップをかついで下山していた貞夫は、ふと気配を感じ、足を止めた。

どこからか、貞夫に話しかけてくる声が聞こえたのだ。

『なぜ殺さないんだい?』

この女は、君を殺そうとしたんだよ?

その声の主は、貞夫のすぐそばにいた。

「君は?」

貞夫は首をかしげた。

貞夫の足元に、銀色のリスが立っていたのだ。しゃべりかけたのは、そのリスであった。

「あなたはッ」

橋沢育朗は、ゲンペーとともに山から下りてきた初老の男をみて目を丸くした。

この男は空条貞夫。空条承太郎の父で、死亡扱いされていた育朗の戸籍を復活させてくれた男であった。

そして8年前、スマレを助けるためにDRESSの基地への侵入口を教えてくれた『恩人』でもあった。

「久しぶりだね、育朗くん……スマレちゃん」

貞夫は顔をほころばせた。

貞夫はふと、泣きながら自分に殴りかかってきた昔のスマレを思い浮かべた。あれからもう8年がたったのか……

あの時は『間に合わなかった』と思った。

だが、こうしてみると、結局は自分は『間に合った』のかもしれない

い。

「サダさんツ お久しぶりですツ」

スマイレが、貞夫を見て満面の笑みを浮かべた。

スマイレの戸籍を改ざんし、DRESSの残党に怪しまれること無しに六助爺さんと暮らせるように便宜を図ったのも、貞夫であった。その後も、なにくれなく生活のサポートをしていたため、スマイレは貞夫の事をよく知っていたのだ。

元氣そうだね？ 貞夫はにこやかに笑った。息子の承太郎とは違う、穏やかな話し方であった。

だが、ホル・ホースは冷や汗を浮かべ、貞夫から可能な限りの距離を取っている。

貞夫とホル・ホースは一瞬だけ互いに視線を交え、短く目礼をした。だが互いにほとんど口は利かない。

「どうしたんですか？ 突然」

「いや、別件で来たんだけどね……ちよつとした調査をする必要があつてね」

元氣か？ 貞夫は、ゲンペーののどをくすぐった。

「その調査場所に行ったら、何故か彼らにあつてね。ついでだから、一緒に君たちのところに顔を出すことにしたのさ」

貞夫が笑った。

「それで、これからの君たちの事だけど……」

腹は決まったかい？

「ええ……杜王町に戻らせてください」育朗が答えた。「新しい場所で、あの時から、高校生からまたやりなおそうと思うんです」

「わかったよ、喜んで手配しよう」

貞夫は微笑んだ。

一方、ニンゲン達の話し合いの陰で、動物同士でも話し合いがもたれていた。

「じゃあ、黒幕はニンゲンだったってワケ？」

インピンから事の顛末を聞かされたチョコは、怒りに体を震わせた。

「そうみたい。あいつら……スカーストラックたちは、DRESSの残党によつてこの地にかり集められていたらしいよ」

インピンが気取つて言った。その後ろには、彼のスタンド、ザ・コールが作り出した小さなリストたちが、同じように気取つたポーズでついていく。

「オイラが聞き出したところによると、ヤツラ、かり集めたイヌや、サル、カラスなんかを自分の部下になるように『作り変える』つもりだったらしいよ。それで、自分の兵隊を作ろうとしてたんだって」

「……なんてこと」

あの、不思議な切株もヤツラの計画の一部だったのかしら？

チョコは傍らに自分のスタンド：メギツネを出現させた。

このスタンドは、あの切株にチョコが『埋もれた』時の衝撃で、チョコのスタンドとして出現したものだ。

「そうみたいだね……あの切り株があつたから、DRESSの残党がここに來たらしいよ」

「ふうん。でも、これでなんとか一件落着だ」チョコが言った。

「幸い、長は無事だった。あの裏切り者共もみんな反省してるし……俺達は奴らを許すことにしたよ」

「そっか、良かったな」

「そうさ、それで……ポツポツとだけど、逃げていたほかの仲間たちも戻つてきてるんだ」

クスリ共がいなければ、ここはスゴク暮らしやすいところなんだから。チョコは胸を張った。

「全部、お前が頑張つてくれたおかげだぜ」

「イヤ、俺はただ暴れたかつただけだ……頑張つたのはお前達だろ」

ゲンペーの言葉に、ヘツとチョコが笑った。

「なあ……オマエ、ここに残れよ」チョコが言った。「オ……オマエの様な男なら、みんな歓迎するぜッ 長もお前を認めるといつてくれたし……」

チョコは、ちよつともじもじしていた。

「俺……アタシもそうしてくれたら、う……嬉しいぜえ」

ゲンペーは、顔を真っ赤にした。

隣で黙って聞いているインピンがピュツと冷やかしの声を出した。

「イヤ……嬉しいけどよ……でも、俺はまだ『俺が属してる群れ』を離れられねえーんだよ」

アイツら、まだほつとけねえーんだ。

ゲンペーは、チョコが泣きそうな顔になったのを見て、あわてて付け加えた。

「だけど……いつか、またここに戻ってくるぜ」

ホントか？

ゲンペーの返事を聞き、パーッと花が開いたようにチョコが微笑んだ。

「おっ……おう……よろしくな」

「ウン。こつちもね」

「はあく？あ」

微笑むチョコと、少し後悔したような？こわばった笑みを浮かべるゲンペー。

そんな二人を見て、インピンは『見てられないよ』と首を振った。